

花咲く世界のクロニクルセブン —じじいと孫のCode:VFD—

白鷺 葵

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

親友を見送ったら、新たなる戦いの舞台へ誘われた嘗ての英雄（外見年齢全盛期）。

嘗ての英雄に憧れ、自身の夢に向かって切磋琢磨し合う13班の後継者。

そんな彼／彼女たちを取り巻く東京、アトランティス、エデンの人々。

Code:VFDの名の元に集った“狩る者たち”による、時空を越えた戦いが始まる。

彼／彼女らが駆け抜けたセカイには、どんな花が咲くのだろうか――？

## 【諸注意】

・祖父Ⅱ2020シリーズサムライ♂（デフォルトカラー）、孫娘ⅡⅢサムライ♀A（デフォルトカラー）のダブル主人公。

・ユウマ×孫娘中心に、NPCと新旧13班員、旧13班同士の恋愛要素有。

・旧13班員の中に、「百合・薔薇・ノーマル・アブノーマルなR―18禁系のモノを好むケダモノ」という設定のイロモノキャラが色々やらかす話題やシーンが出てくる。あくまでも「そういうキャラ」という位置づけであり、それに対するアンチ・ヘイトの意図はない。

・新13班員の中に、「あるキャラクターに対して並々ならぬ愛情を

注ぐケダモノ」という設定のイロモノキャラが色々やらかす話題やシーンが出てくる。あくまでも「そういうキャラ」という位置づけであり、それに対するアンチ・ヘイトの意図はない。

・設定上、ISDF勢が大変残念なことになるため注意（例・ストレスマツハなナグモ博士とヨリトモ、進化の極北に至ったレベルにゲスイアクツ、恋愛関連で割とやりたい放題なユウマ）。

上記が大丈夫な方は、彼らが辿る軌跡をお楽しみください。

この作品は、別な名前でPixivに投稿した『花咲く場所 — 彼らのCode:VFD—』(<http://www.pixiv.net/series.php?id=622498>)を下地にしつつ、設定の手直しや加筆修正を加え、連載用に再構成し直したものです。そのため、登場人物や一部の設定およびシーンに共通点があります。物語の構成上、あちらに掲載していたシーンを丸々持ってくることはありませんのでご了承ください。

2016 4/12：改訂版連載開始。

## 目次

### 人物紹介

〔旧ムラクモ13班〕 | 1

〔ノーデンス13班〕 | 8

Chapter X フラグメント／正義の味方《オレンジのバラ：誰かがどこかで》

老老介護の果てに | 15

断ち切られた想い、紡がれた未来 | 37

愛の重さに辟易（辞退不能） | 61

気苦労は億千万 | 84

Chapter 0 トウキョウ・シークエンス《プリムラ・マラコイデス：運命を開く》

エンカウンター | 104

U・E・77年のクセモノども | 123

想いの芽吹き | 146

そして、運命は開かれる | 169

Chapter 1 人と竜の物語《黄色いゼラニウム：予期せぬ出会い》

天と地、あるいは空と海の間 | 189

終わりの国の《異邦人《アリス》》 | 209

嚮後の空より《異邦人《浦島太郎》》 | 230

求望：収拾のつけ方 | 252

地雷原でタップダンスを踊った結果 | 273

悪意の花、闇の底にて | 294

Chapter 1. 5 フラグメント／13の系譜《白いオダマキ：

あの方が気がかり》

ヒーローと桐の時計

揺れる心のモノグラム

Chapter 2 深層／硝子色の欠片を集めて 《ヒガンバナ・あきらめ、情熱》

始まる前から踊り狂う

指針を定めて

託宣を聞く者、希望を示す者

陸のルシエと海のルシエ

新たなる仲間と共に

灯火の火種

決意と夕焼け

Chapter 2. 5 フラグメント／明日待ちの宵 《パンジー・物思い、私を思つて》

想いの花が咲く頃に

軋む四肢、あるいは痛みを抱いても

死を呼ぶ黒

黒を喰らう

574

553

534

512

物

488

464

442

422

402

382

360

337

314

## 人物紹介

### 【旧ムラクモ13班】

#### 【渡来ミカゲ】

本名：渡来 神影 性別：男性 年齢（2020↓2021⇒Ⅲ）：  
21歳↓22歳⇒5000歳以上

外見：サムライ♂／カラー1 CV：杉田智和 職業：サムライ中  
心に全職業

能力適性：マルチタスク・オール全能力Sランク／特に身体能力が優れていた模様

誕生日：3月20日 誕生花：スイートピー（花言葉：門出、別離、  
優しい思い出）

趣味・特技：多芸多才。強いて挙げるなら、スイーツ作り

性格：普段は無精者だが、決めるときはきっちり決めるタイプ。物事に無関心なように見えて、人のことをしっかりと見ている。実は泣き虫で負けず嫌いな寂しがり屋。言動とは裏腹な世話焼き気質だが、大人げない一面も持っている。

#### <特記事項>

・「病院のベッドから身動きができない」状況を嫌う。医者、看護師等の医療従事者に対して、並々ならぬ苦手意識を抱いているようだ。

・一部の政治家や高官に対して、並々ならぬ苦手意識と反感を持っている。彼らの身勝手なふるまいに振り回された実体験のためだろう。

・対竜戦における基準が全部人類戦士になってしまう。老老介護の弊害。

#### <13班員の人間関係>

・渡来ユイ（旧姓：近衛ユイ）／伴侶にして天敵。嫁が尊すぎて辛いが、怒らせると怖い。

・桐野ヒイナ（旧姓：東雲ヒイナ）／天敵。奴の暴走を食い止める砦として精神をすり減らす。

・東雲マサハル／頼りにならない兄貴分。ヒイナの暴走を止める砦

という意味ではシンパシーを感じる。

・ ■■■リヨウスケ／大事な後輩。技術者としての才能を認めており、能力を信頼している。

・ 那雲ヨツミ／年上の友人。生物兵器の行く末を憂う者同士、よく議論を交わしている。

・ 那雲シラユキ／友人の妻で妹分。末永く幸せになってほしいなど思っている。

＜後継者たちとの人間関係＞

・ 渡来イノリ／ミカゲとユイの孫。ミカゲの希望。

・ 東雲リヒト／マサハルの孫。ミカゲの希望。

・ 風間ソウセイ／リヨウスケの孫。ミカゲの希望。

・ 那雲シキ／ヨツミとシラユキの孫。ミカゲの希望。

＜関係者との人間関係＞

【西暦2020年代】

・ 日傘ナツメ／異母姉弟。ナツメが正妻、ミカゲが妾の子。ナツメのコンプレックスが暴発した際、その責任を感じていた。後に人竜ミツチにとどめを刺す。

・ タケハヤ／腐れ縁の親友であり、正義の味方。後に老老介護につき合い、最期を見送る。

・ エメル／恩人。ヒュプノス由来の技術によって命を繋がれる。

・ アイテル／親友の彼女。親友から彼女のことを頼まれたので、気にかけている。

・ 桐野礼文／頼りにならない兄貴分にして、親愛なる総長様。彼の人柄と作戦能力を信頼している。

・ ミロク&ミイナ／ムラクモが誇る最高のナビゲーター。大切な戦友。

【U・E・77年】

・ 那雲三喜夫<sup>ナグモミキオ</sup>／顔見知りであり、ヨツミの甥。

・ アクツ／彼の動きを危惧していた。

・ 頼友東吾<sup>ヨリトモトウゴ</sup>／教え子。戦闘学校に入る以前から、彼に剣術を教えて

いた。ISDFに所属している。

・如月ユウマ／教え子の部下で、孫と1番仲がいい異性。// 色々な意味”で彼のことを気にしている。

・那雲ミオ／彼女とミロク&ミイナ、彼女とヨリトモの関係を知っており、その延長戦で気にかける。

・アリー・ノーデンス、チカ&リツカ／どこかで会ったことがあるような気がするが、思い出せない。ただ、心を許してはいない様子。

#### 【渡来ユイ】

旧姓：近衛 結依 性別：女性 年齢（2020↓2021⇒Ⅲ）：  
18歳↓19歳⇒5000歳以上

外見：サムライ♀／カラー1 CV・堀江由衣 職業：サイキック  
（2020）⇒アイドル（2021）

能力適性：超感覚・カリスマ性Sランク／2021年の竜戦役以降はカリスマ性Sランクが開花し、そちらをメインにした模様

誕生日：6月3日 誕生花：スイカズラ（花言葉：愛の絆、献身的な愛）

趣味・特技：家事全般、子どもとのふれあい

性格：明るく真面目な優等生気質。面倒見の良いお姉さんであるが、怒らせると怖い。説教は淡々と事実を述べていくタイプ。どんなことがあってもへこたれない芯の強さと、相手を包み込む包容力の持ち主でもある。

#### <特記事項>

・6人兄弟の長女。両親はドラゴンの襲撃で亡くなった。

・看護師を志しており、2021年では看護実習生として医務室に通っていた。竜戦役後に暁学園ができたときは、医療関係の教員として招かれている。

・ミカゲと結婚。孫に渡来<sup>インリ</sup>祈がいる。

#### 【桐野ヒイナ】



旧姓・東雲 緋衣那 性別・女性 年齢(2020↓2021⇒Ⅲ)：  
19歳↓20歳⇒5000歳以上

外見：デストロイヤー♀／カラー1 CV. 佐藤利奈 職業：ト  
リックスター(銃型)

能力適性：俊敏性Sランク／特に拳銃の扱いに長けていた模様

誕生日：9月2日 誕生花：チューベローズ(花言葉：危険な快樂)

趣味・特技：同人活動、同人活動に伴う諜報活動

性格：活発で元気なムード&トラブルメーカー。自身の欲望および感情、価値観には忠実で、それに沿った行動をしている。目的成就のためならば、策謀を張り巡らせることも法律のグレーゾーンに浸かることも厭わない。

<特記事項>

・東雲財閥のご令嬢でマサハルとは異母兄妹。マサハルが前妻、ヒイナが後妻の子。

・古菅チエロンとは旧知の間柄であり、彼女の協力者。世界救済会の役員を務めた。

・竜戦役後、戦闘訓練と対竜災害に関連する専門学校・暁学園を設立。初代校長兼経営者になる。

・キリノと結婚。旦那の気苦労が億千万。

【東雲マサハル】

本名：東雲 雅春 性別：男性 年齢(2020↓2021⇒Ⅲ)：

32歳↓33歳⇒5000歳以上

外見：トリックスター♂／カラー1 CV. 三木眞一郎 職業：デ

ストロイヤー／ハッカー(2020)⇒デストロイヤー(2021)

能力適性：情報処理・運動能力Sランク／2021年の竜戦役後は運動能力をメインにした模様

誕生日：11月3日 誕生花：カモミール(花言葉：逆境に耐える、逆境で生まれる力)

趣味・特技：盤上遊戯、物事に対する考察

性格：軟派な言動よりも苦勞人としての一面が強い。根が世話好き

なお人よしのため、よく貧乏くじを引く。何事も清濁併せて飲み干すタイプだが、夢物語を現実にしようと努力を厭わない一面もある。

<特記事項>

・東雲財閥の次期社長（西暦2020、2021年）で、ヒイナとは異母兄妹。マサハルが前妻、ヒイナが後妻の子。

・古菅チエロンとは旧知の間柄であり、彼女の協力者。世界救済会の役員も務めた。

- ・一般女性と結婚。孫に東雲俐仁リヒトがいる。
- ・ヒイナの夫／キリノのことを心配していた様子。

<2021竜戦役から参戦>

【■■リヨウスケ】

本名：■■ 良介 性別：男 年齢（2021⇒Ⅲ）：17歳⇒5000歳以上

外見：アイドル♂／カラー1 CV・木村良平 職業：ハッカー

能力適性：情報処理能力Sランク

誕生日：2月6日 誕生花：ナノハナ（花言葉：快活、明るさ）

趣味・特技：技術開発、道具開発、モノづくり

性格：明るく元気な子犬系ムードメイカー。年齢に合わず子どもっぽいが、正義感が強く、何事にも真剣に取り組む姿勢を持つ。自分の仕事や役割に誇りを持っており、それを妥協せず全うしようとする職人気質を持つ。褒められると伸びるタイプ。

<特記事項>

・元技術班所属で、ワジの孫。苗字はワジと同じもの。

・2020年度はワジたちと一緒に13班をサポートし、2021年で情報処理能力を見出されて13班入りした。元いた面々を先輩と慕っている。

- ・竜戦役後は次の戦いを想定し、対竜兵装の開発に着手した。
- ・期間限定だが、暁学園で講師を務めたことがある。

・マリナと結婚。孫に風間創生ソウセイがいる。

### 【那雲ヨツミ】

本名：那雲 四海 性別：男 年齢（2021⇒Ⅲ）：26歳⇒50歳以上

外見：サイキック♂／カラー3 CV. 中村悠一 職業：トリックスター（短剣型）

能力適性：俊敏性・情報処理能力Sランク／俊敏性をメインにしており、特に短剣の扱いに長けていた模様

誕生日：11月12日 誕生花：レモン（花言葉：誠実な愛、思慮分別／実：熱情）

趣味・特技：ダーツ、投擲、薬品調合

性格：冷静で理知的な立ち振る舞いをする紳士。だが、根が正義感が強い激情／直情型人間のため、一度火がつくと大爆発する。自分が「爆発すると手が付けられない、面倒な男」であると自覚した上で行動しているので尚更性質が悪い。

### <特記事項>

・元々はムラクモ機関で生命科学に携わる研究者だった。2021年にルシエクローンを再誕させるプロジェクトに関わる。

・上司がシラユキに対して不当な扱いをしていたのを目撃し激怒。シラユキを連れて施設から脱走し、サバイバルをしていたことでS級能力を開花させる。

・期間限定だが、暁学園で講師を務めたことがある。

・シラユキと結婚。孫に那雲四季シキがいる。

・甥兼教え子に那雲三喜夫ナツモミキオ、甥の教え子として渡真利十郎太トマリジユウロウタがおり、交流を重ねていた。

・甥の教え子の1人だったアクツの動向を気にしていた。

### 【那雲シラユキ】

本名：ルシエクロン N.O. 123 / 那雲 白雪 性別：女 年齢  
(2021⇒III)：数か月 / 外見年齢：17歳相当⇒5000歳以上  
外見：ルシエ♀ / カラー1 CV・花澤香菜 職業：サイキック  
能力適性：カリスマ性・超感覚Sランク / 超感覚をメインにした模  
様

誕生日：1月16日 誕生花：ヒヤシンス (花言葉：悲しみを超え  
た愛 / 黄色：あなたとなら幸せ、勝負)

趣味・特技：家事全般、創作活動 (絵、文章)、歌を歌うこと

性格：少々ぼやんとしていて不思議な雰囲気を漂わせている。ふ  
わふわしているように見えるが、意志の強さは人一倍。控えめで大人  
しい気質であるが、言いたいことは素直に、容赦なくズバズバ言うタ  
イプ。良くも悪くも裏表がない。

<特記事項>

・2021年に再誕したルシエクロン。ATLコードおよび竜殺  
剣の担い手として調整された個体だったが、成果は今一つだった様  
子。それが原因で不当な扱いを受けていた。

・シラユキの扱いに怒ったヨツミに連れられるような形で施設から  
脱走した。竜殺剣の担い手にはなれなかったが、戦闘能力は充分高  
い。

・ヨツミと結婚。孫に那雲四季シキがいる。

## 【ノーデンス13班】

### 【渡来イノリ】

本名：渡来 祈 性別：女性 年齢：18歳

外見：サムライA♀／カラー1 CV・早見沙織 職業：サムライ  
(双刀)

誕生日：8月18日 誕生花：エーデルワイス（花言葉：勇気、大切な思い出）

趣味・特技：家事全般、人と話すこと

性格：明るく真面目な優等生。融通が利かないと思われがちだが、大胆な行動力や底抜けの勇敢さ、人のために心を痛める優しさや包容力を併せ持つ。周りをよく見ており、有事の判断力に優れている。実は怒ると怖いタイプ。

### <特筆事項>

・渡来ミカゲとユイの孫娘。才能は祖父、性格は祖母の系譜を引き継いだ模様。

・祖父の葬儀で出会った少年に励まされて立ち直った。彼には深く感謝しており、そのお礼としてエーデルワイスの花を手渡している。  
<新13班員との人間関係>

### 【東京組】

・東雲リヒト／マサハルの孫で、幼馴染。家族ぐるみの付き合いだったので、とても仲がいい。

・風間ソウセイ／リヨウスケの孫で、幼馴染。家族ぐるみの付き合いだったので、とても仲がいい。

・那雲シキ／ヨツミとシラユキの孫で、幼馴染。家族ぐるみの付き合いだったので、とても仲がいい。

・真瀬ブレイチ／ノーデンス13班に所属する仲間であり、イノリたちの先輩。謎の多さと自由奔放さにたじろぎ気味。

### 【アトランティス組】

・ウィータ・クリユティエ／アトランティスからの協力者。仲のいい女友達で、恋バナ等の話題で盛り上がる。

・モルス・クリユテイエ／アトランティスからの協力者。恋愛関連の話でシンパシーを抱く。

【???】

Coming soon…

<旧13班員の人間関係>

・渡来ミカゲ／自慢の祖父。尊敬する相手／師であり、親代わりでもあった。但し、仲の良い異性の家へ討ち入りしようとするレベルの孫バカっぷりには辟易している模様。

・渡来ユイ（旧姓：近衛ユイ）／自慢の祖母。尊敬する相手であり、親代わりでもあった。怒らせると怖いと思っている。

・桐野ヒイナ（旧姓：東雲ヒイナ）／祖父の戦友であり、尊敬すべき英雄。但し、趣味関連の暴走にはついていけない。

・東雲マサハル／祖父の戦友であり、尊敬すべき英雄。

・■リヨウスケ／祖父の戦友であり、尊敬すべき英雄。

・那雲ヨツミ／祖父の戦友であり、尊敬すべき英雄。

・那雲シラユキ／祖父の戦友であり、尊敬すべき英雄。

<関係者との人間関係>

【西暦2020年代】

・日傘ナツメ／人類の裏切り者にして、祖父の異母姉。祖父が複雑な感情を抱いていることを知っている。

・タケハヤ／2020年代の“知られざる英雄”にして祖父の親友。祖父が複雑な感情を抱いていることを知っている。

【U・E・77年】

・如月ユウマ／自分を助けてくれた命の恩人。戦いを通し、互いの存在に惹かれあうようになる。

・那雲ミオ／セブンスエンカウンドで出会った友人。後に戦友になる。

・ナガミミ／直属の上司。口は悪いが、頼れる相手だと思っている。

・頼友東吾ヨリトモトウゴ／ユウマの上司で祖父の教え子に当たる人物。信頼できる相手だと思っている。

【東雲リヒト】

本名：東雲 俐仁 性別：男 年齢：18歳

外見：サムライA♂／カラー1 CV・島崎信長 職業：デュエリスト

誕生日：6月23日 誕生花：タチアオイ（花言葉：大望、豊かな実り、気高く威厳に満ちた美）

趣味・特技：盤上遊戯、戦略ゲーム、ゲテモノ系食材の調理研究

性格：物腰穏やかで思慮深い青年。理知的な視点から物事を考えるタイプだが、自分や仲間に対外的な相手に対しては、気性の激しい一面を見せることも。感情が振り切れたときも似たような言動になるようだ。腹の中に何か飼っている系男子。

<特記事項>

・東雲マサハルの孫で、東雲財閥の末っ子御曹司。末っ子だが、受け継ぐ資産／有している資産はかなりもの。

・未知の食材に対して並々ならぬ好奇心を持っており、食材を入手すると見境なく料理に使用する。マモノの肉とか普通に使う。料理の腕が高いのが唯一の救い。

・ソウセイの才能を認めており、彼の作ったアクセサリーをネット販売する際に協力している。彼の素晴らしさを知ってほしいと思っているようだ。

【風間ソウセイ】

本名：風間 創生 性別：男 年齢：18歳

外見：サムライB♂／カラー2 CV・宮野真守 職業：エンジニア  
ント

誕生日：7月29日 誕生花：サボテン（花言葉：燃える心、温か

い心、枯れない愛)

趣味・特技：武器の手入れ、手芸（装飾品作成）、ハツキング

性格：冷静沈着で不愛想だが、根は熱さと優しさを兼ね備えた熱血漢。モノづくりに対する情熱は並々ならぬものがある。基本は行動で示す派で、本人もそれをモットーとしているが、意外とよく喋る方で、言葉を惜しまない。

<特記事項>

・ ■■■リヨウスケとマリナの孫で、ルシエの血を引くクォーター。マリナの系譜が入っているため、ATLコードの特性も受け継いでいる。

・ 手先が器用。ネット通販でアクセサリーや小物を販売している。その際、リヒトに協力してもらった。他にも仕事を斡旋してくれるため、その恩を返したいと思っているようだ。

### 【那雲シキ】

本名：那雲 四季 性別：女 年齢：18歳

外見：ルシエ♀／カラー3（金髪） CV・寿美菜子 職業：ゴッドハンド

誕生日：12月14日 誕生花：シラネリア（花言葉：いつも快活、喜び）

趣味・特技：人助け、戦闘訓練

性格：明朗快活で竹を割ったようにさばさばした気質の持ち主。本人は至って強気な物言いをするが、実は謙虚な努力家である。求道者としての側面が強く、日夜自己研鑽に励んでいるようだ。学力はあるが、最終的には物理的手段に出ることが多い。

<特記事項>

・ 那雲ヨツミとシラユキの孫。父親が人間とルシエのハーフ、母親がルシエのため、ルシエの血が濃い。

・ 両親が世界救済会の役員をしており、精力的に活動を行う。常に



世界中を飛び回っているため、実質的な1人暮らし状態。

【真瀬ブンイチ】

本名：真瀬 文一 性別：男 外見年齢：15歳／実年齢：76歳  
外見：デュエリストB♂／カラー2 CV：逢坂良太 職業：サム  
ライ（一刀）

誕生日：3月3日 誕生花：桃（花言葉：私はあなたのとりこ、天下無敵）

趣味・特技：ナガミミへのアプローチ、人助け

性格：陽気でお調子者なやんちゃ坊主。考えるより動くタイプで、自分の感情や欲望には忠実に行動する。そのため、近場に居る人々を巻き込むトラブルメーカー気質の持ち主。実は寂しがり屋で優柔不断。たまに年の甲が顔を出すためか、ひどく理知的で大人びた一面がある。

<特記事項>

・ブラスタールレイブンの相棒だが、他にも繋がりがある模様。その繋がりから、彼のことを「**■**さん」と呼ぶ。レイブンの気苦労が絶えない。

・黒呪病患者。U・E・16年に発症して以降、肉体と精神的な老いが止まっている。だが、ノーデンスのパートタイム社員になった途端、症状が飛躍的に回復しつつある。

・ナガミミに対して並々ならぬ愛情を注ぐ。何かある度にプロポーズしている模様。ナガミミの気苦労が絶えない。

・ナガミミへの愛を語り、面接官だったジュリエッタを精神崩壊一歩手前まで追いつめたことがある。アリー曰く、「もしジュリエッタが精神崩壊していたら、Code：VFDは暗礁に乗り上げていたかもしれない」らしい。

【ウィータ・クリュティエ】

性別：女 年齢：23歳

外見：フオーチユナー♀TYPEA | color | CV. 豊崎愛生  
職業：フオーチユナー

誕生日：1月27日 (U. E. 77年基準) 誕生花：ヘリオトロー

プ (花言葉：献身的な愛、夢中、熱望)

趣味・特技：予知および占い、読書、恋バナ

性格：おしとやかで大人びた気質の女性。一見儂げな風貌であるが芯が強く、情熱的な内面を持っている。普段は理知的で落ち着いているものの、一度心に火がつくと、外見からは想像のつかない行動に打って出ることも。

＜特記事項＞

・元々はアトランティカの出身。代々宮廷仕えをしてきた家柄の生まれである。類稀ない占星術の才能を見出され、占星術師として王宮仕えをしていた。

・ウラニアやエーグルとは、叔父を通じて仲良くなった。叔父は執政官をしている。

【モルス・クリュティエ】

性別：男 年齢：20歳

外見：ルーンナイト♂TYPEB | color | CV. 寺島拓篤  
職業：ルーンナイト

誕生日：7月29日 (U. E. 77年基準) 誕生花：ブーゲンビリ

ア (花言葉：情熱、あなたは魅力に満ちている、あなたしか見えない)

趣味・特技：武器の手入れ、道具作り (主に装飾品・金属加工特化)

性格：朗らかでひょうきんな青年。年齢に見合わぬ軽薄な言動が目立ち、ふとしたことですぐ有頂天になってしまうのが玉にキズだが、根は実直且つ一途。強固な意志と熱い心を持っている。職人気質で

あると同時に、芸術家気質もあるようだ。

<特記事項>

・元々はアトランティカの出身。代々宮廷仕えをしてきた家柄の生まれである。騎士としてのポテンシャルは高いのだが、鍛冶師に憧れてクラディオオンに転がり込んだ。

・ニアラ襲撃以前までは、親衛隊の騎士として仕事をしつつ、エーグルの父親に師事し、鍛冶師としての腕を磨いていた。

・ウラニアやエーグルとは、叔父を通じて仲良くなった。叔父は執政官をしている。

【???

Coming soon...

Chapter—X フラグメント／正義の味方《オ  
レンジのバラ：誰かがどこかで》  
老老介護の果てに

「なあ、俺もう嫌なんだけど」

人類戦士タケハヤは、げっそりした顔でそんなことを言った。いきなり唐突なことを言い出した人類戦士の様子に、嘗てムラクモ13班と呼ばれた面々が目を見開く。ゆゆしき事態だった。

タケハヤは、愛する女を救うために自ら人竜になることを志願した男だ。正義の味方に憧れ、実際に正義の味方になってみせた男が、そんな弱音を吐くとは思わなかった。何があつたのだろう。

頭に疑問符を浮かべた面々に対し、タケハヤは物凄く渋い顔をした。トパーズを思わせる瞳は、不平不満で満ちている。

「俺はあと何回、対空音波攻撃<sup>シヤッフル</sup>を連発されて死ななきゃいけないんだよ」

「お前が安らかに眠れる日まで」

「やだよ！　なんだよ、『死因：鼓膜破れた』って！　もうちよつとマシな殺し方はないのか!?!」

銀髪に紫の瞳の青年——渡来神影<sup>ミカゲ</sup>の答えに対し、タケハヤは噛みつくような勢いで怒鳴った。アイドルによる対空音波攻撃<sup>シヤッフル</sup>連射攻撃は、正義の味方の死因として相応しくないものらしい。正義の味方という言葉が大好きなタケハヤは、真正面から殴り合いするのがお好みのようだった。

ここに足を踏み入れた頃は、真正面から殴り合いに応じたものである。そのおかげで何度も生と死の狭間を彷徨ったものだ。最初の頃は生身だったため、一歩間違うとぼっくり逝ってしまいかねない。人間の柔らかさと脆さを舐めないでほしい。

死んでから精神体になった後も、人間の柔らかさと脆さは健在であった。それゆえ、タケハヤの介護を繰り返すうちに、もつと楽に——もとい、効率よく、存在を賭けるといいうリスクを減らす方法がないものかと思案した結果がこれである。

介護される側もする側も、自分の年齢なんて完全にわからなくなっ  
てしまっている。この世界は、本来の世界に流れる時間から切り離さ  
れているためだ。

「うっかり外に出たら東京が崩壊していた」ことや、「自分たちの死  
後から5000年近い時間が経過していた」ことを知ったショックを  
何と語ればいいのかだろう。

ついでに、ドラゴンが再来襲していたこともだ。勿論、この時代の  
人類たちも負けっぱなしでいるつもりはない。破竹の勢いで巻き返  
しを図っている。閑話休題。

「じゃあ、俺含んだトリスタ3人組による奥義・秘奥義バステ祭りか？  
ドラゴン幼体なら余るほどあるぞ。何なら、取り残した分を回収し  
て来る」

「でかい花火なら任せてよ！」

「ふむ。私は毒ハメが得意なんだが」

「……………アイテル。俺、希望を託す相手を間違ったかもしれない  
……………!!」

赤い髪を束ねた少女——桐野緋衣那（旧姓：東雲ヒイナ）がバズー  
カを構え、黄色いフードを被った青年——那雲四海が短剣をいじる。  
どこからどう見ても、人々が語り継ぐ「正義の味方」とは程遠い言  
動であった。どちらかというと、悪の組織みたいな思考回路だ。

正義の味方という言葉が大好きなタケハヤにしてみれば、これ程ま  
でに酷い状況は無いだろう。タケハヤは頭を抱えて崩れ落ちた。

彼はミカゲたちのことをなじるけれど、こつちにだって言い分はあ  
る。ミカゲは眉間に皺を寄せて、タケハヤに向き直った。

「この際だから、はつきりと言わせてもらおうけどさ」

「な、なんだよ」

「俺たちが何回、真正面から全体確率麻痺プレス喰らったり、千切り潰し刻み斬られたと思ってるんだよ。『さつきと止めないか』って言いながらエグゾースト発動させてSKYぶっぱなしてきやがったり、D細胞活性化させてがんがん回復してきやがって。お前死にたいんじゃないの？ 殺してほしいんじゃないの？ 介護士を致死寸前まで追いつめという偉そうに文句言うんじゃないよ。さつきから我儘言いやがって。こちらら命がけなんだよ。一歩間違えればこっちがぼっくり逝っちゃうんだよ。人間様の柔らかさと脆さを舐めるんじゃないよ。おめーはモンペか、モンスターペイシエントか」

「約5000年にも及ぶ老老介護のストレスを舐めるな」と、ミカゲは締めくくった。問答無用の一撃必殺、半壊必須のプレス全体攻撃、ジリ貧のこちらを嘲笑うかのような回復量……思い出すだけで頭が痛い。

介護の現場はブラック企業も真つ青だと聞いたことがあるけれど、ここまで過酷な職場はそうそう無いだろう。患者の我儘に振り回される職員の悲哀を、是非ともご理解いただきたい。患者は一歩引いて、裏返った声を出しただけだった。

「み、ミカゲの坊も荒んでるな……」

「気持ちとは分からなくもないけど……」

立派な顎髭を蓄え、眼鏡をかけスーツを身に纏った青年——東雲雅春<sup>マサル</sup>は遠い目をした。雪のように真つ白な髪と狐のような耳が特徴的なルシエの少女——那雲白雪<sup>シラユキ</sup>も同調する。おろおろしているシラユキに、ヨツミは生温かく微笑んでいた。

それと同じような眼差しを察知し、ミカゲは振り返る。黒髪にセーラー服を着た少女——渡来結依<sup>ユイ</sup>（旧姓：近衛ユイ）が柔らかに微笑んだ。昔から、ミカゲは彼女の笑顔に弱い。ユイが微笑ましそうにして

いるのを見ると、何とも言えなくなる。

嘗て13班を率いたユイの包容力や聡さは伊達ではない。彼女のおかげで何度も命拾いしてきたし、彼女が居なければミカゲは瓦解していたであろう。そうして渡来ユイは、ミカゲにとって一番の理解者でもある。——大切な、伴侶だ。

「ミカゲくんは、律儀で優しいからね。……だから、タケハヤの言う通り、早く終わらせる方法」を考えてたんでしよう？」

「……………まあ、そうですね」

「実際、センパイが見つけたアイドル熱唱シャツフルVが丁度良さげな感じだしね」

金髪で派手な服に身を包んだ少年——リョウスケ■良介が、何もない空間に大量のウィンドウを表示して、データを見比べながら頷いた。流石は元技術班屈指の技術者、データ収集能力は伊達じゃない。キリノが見込んだ通りだったというわけだ。

「アイドル熱唱シャツフルVが一番いい」というお墨付きを聞いたタケハヤは、更にげんなりした表情を浮かべた。そんな情報なんて知りたくなかったと、彼の瞳は訴えている。現実は無情なのだ。仕方がない。

ミカゲは埃を払って立ち上がり、手慣れた様子でタケハヤを柱へと括りつける。これで、暫くは暴れなくて済むだろう。その「暫く」がどれ程の時間なのかは分からないが。

「……………ありがとな」

「どういたしまして」

タケハヤがかつと笑ったので、ミカゲもにやりと笑い返す。2020年の頃から何も変わらないやり取りだ。あのときは、それが「ミカゲが死ぬまで」繰り返されるものだとばかり、信じて疑わなかったのに。

「世の中、本当に、何が起るかわからんな」

「〃人生は誤算だらけ〃 ってか？ お前の座右の銘だよな」  
「ついでに俺の人生で学んだ真理でもある」

己が歩んできた数奇な運命を思い返して、ミカゲは苦笑した。自分が存在するために支払われた犠牲も、自分が手にした奇跡も、自分が取りこぼしてしまった命も、自分が守り抜いた希望も、はつきりと魂に刻みつけられている。到底、忘れられるものではない。

自分が生きている間に切り開いた道があり、自分が死してこそ切り開けた道がある。後者は見ることは叶わなかったけれど、その道が、ミカゲの希望たちの笑顔に繋がっていて欲しいと祈るのだ。随分と身勝手な呪いかもしれないが、死んだ人間にできることはそれくらいだ。

タケハヤにやられて憤ったミカゲもまた、タケハヤと同じようなことをやらかした。人はそうやって、想いと願いを託すのだ。その循環は途切れることなく続き、今に至っている。そうしてこれからも、続いていくのであろう。星の系譜、あるいは命の系譜として。

「なあ」

ミカゲはタケハヤを見上げて問いかける。

「お前はさあ、それでよかったと思ってるの？」  
「当たり前だ」

い。  
タケハヤは迷うことなくそう答える。彼の瞳は、一点の曇りもな

「俺の幸せは俺が決める。お前に決められるモンじゃねえ」  
「……………」



「お前の尺度から見れば、間違いなく俺は不幸に見えるだろう。お前は俺の人生を、不幸だと嘆くだろう。でもな」

「——知ってる。その先の言葉は、耳にタコができるくらい聞かされた」

それ以上の言葉を聞くのは、正直苦痛だった。

だから、ミカゲはタケハヤの言葉を遮る。

「だったら」

「だからだ」

ミカゲは逸らすことなく、タケハヤの瞳を睨みつけた。

「だから俺は、お前に生きてほしかった。人竜なんて、ならないでほしかった」

何度訴えようとも、タケハヤは歩みを止めることはない。それでも、ミカゲは訴えずにはいられなかった。置き去りにされると分かっているが、分かっているから尚、手を伸ばさずにはいられなかった。

「かけがえのない人たちが居て、愛した奴が居て、愛してくれる奴が居て、一緒に笑っていられる時間があって、他に何が要るんだよ」

「ミカゲ」

「お前さあ、絶対何も考えてなかっただろ。竜になった後、自分がどんなことを人に強いるか、人に背負わせるかなんて、考えたことなかっただろ。お前はそういう奴だもんな」

「ミカゲ」

「死ぬ前も死んだ後もお前の老老介護につき合わされて、お前を殺し続ける羽目になった俺たちがどんな気持ちになるのか。すべてが終わってお前が死んだ後、この惑星すべての命に向けるべき愛を、お前だけに一点集中させてお前の恋人がどうなるのか。……お前、全然

考えてないだろ」

「……そうだな」

「あいつ、とんでもないヤンデレだよ？ お前が居なくなったら、確実に拗らせるよ？ 現時点でも相当アレなのに、それ以上アレなことになつたら、流石の俺でもどうしようもねーよ？ 正直、面倒見きれねーぞ？」

「……そうだな」

タケハヤは悪びれる様子がない。

奴は開き直ったように笑っていた。

「——でも、お前ならやってくれるって信じてるぜ？」

「……」

「当然だな。俺が信じた『正義の味方』なんだから」

「……勝手だな。それこそ傲慢じゃないのか」

「お前が、お前の尺度で俺の幸せを語るのと同じような原理だろう」

タケハヤの笑顔は、見ていて腹立たしくなる。真正面から思いつきりぶん殴ってやりたいくらい憎たらしい。

しかし、それ以上に、見ていて好ましいとさえ思うのだ。腹立たしい程に、彼の在り方はミカゲを惹きつけてやまない。

尊敬と憎しみ。苛立ちと敬愛。腹立たしさと好ましき。大嫌いなのに大好きな、見ていたくないのに目を離せない、憎む／愛すべき英雄。

「ああいえば」

「こう言う」

「つうと言えば」

「かあ」

「……俺、お前のそんなところ嫌いだぞ」

「奇遇だな。俺もだ」

「でも俺、お前のそういうところ、好きだわ」

「……奇遇だな、俺もだ。じゃなきや、こういうこと頼めねーよ」

当たり前のように返ってきた返事に、2人して嘖き出した。

\*\*\*

老老介護の終わりは、近づいてきている。

エメルの開発した千人砲は、ニアラを倒すことはできなかった。千人の命を弾丸にして打ち出すとは、竜憎しでとんでもない所へ行きついてしまった感が否めない。勿論、彼女のやり方が人類に受け入れられるはずもなく、彼女は幽閉されてしまっていた。

人間とヒュプノスの違いに苦しみ続けたエメルの姿を覚えている。けれど、あれから5000年経過した地球の大地に立ち、ドラゴン殲滅のために指揮を執っていた彼女の姿は、2021年で戦っていたエメルとは程遠いもののように思えた。詳しいことは知らないが、実際そうらしい。

それでも共通している点はある。竜を殲滅したいという意志、それを成し遂げるための協力を惜しまないという姿勢だ。彼女のおかげで、2021年の人類は救われたと言っている。ただ、今回の場合は、彼女の熱意が恐ろしい方向に空回ってしまった結果であろう。

幾度も繰り返されてきた『人と竜の物語』／ニアラとの戦いは、もうすぐ佳境を迎える。ロストテクノロジーを紐解いた楽園のハントマンたちは、嘗ての竜戦役の地・禁地トウキオン——つまり、このことである——に足を踏み入れた。タケハヤの居る場所にたどり着くのも時間の問題であった。

「俺はもうすぐ、狩る者に討たれて消えるだろう」

自分が死ぬと分かっているのに、タケハヤは穏やかに微笑んでいた。取り乱す様子も命乞いする様子もない。

悲しいがな、奴の佇まいは完全に英雄と呼ぶに相応しいものであった。正義の味方そのものであった。

鎖に繋がれた人類戦士は、ミカゲを見返して、言った。

「俺が居なくなつた後……約束通り、アイテルを頼む。あいつ、泣き虫だからさ」

「清々しい程にいい笑顔だなあ、オイコラ。それと、こんなときに惚気ないでもらえますかー?」

「惚気てるのはお前等も一緒だろ。ヒイナとキリノとか、ヨツミとシラユキとか、お前とユイとか。どうして俺ばかり非難されなきゃいけないんだよ」

「今俺惚気てませんよ」

「今惚気てるのはあっち」

タケハヤは眉間に皺を寄せた。手を動かすことができない代わりに、奴は顎で方向を指図する。

「お前、自分の旦那でなんつーモンを描いてやがる!？」

「旦那への愛が止まらなかつた。反省も後悔もしてない」

「やめろアヤフミが可哀想だろ!!」

「ちよ、マサ兄やめてよ! 私の旦那さんちぎれちゃう! 縁起悪い!」

マサハルとヒイナが取っ組み合いしている。2人の手の中には、有明で人気のヒーロー・ブラスタレーイブンがとんでもない絵面（要するにR-18。しかもかなりどぎつい部類に入る）になっている漫画用原稿用紙があつた。気のせいでなければ、紙の端が表面張力限界まで引き延ばされてめりめり言っている。

ミカゲの脳裏に浮かんだのは、遠い昔の桐野夫婦の会話だ。サイボーグ化した旦那をカツコイイと褒めたところまでは良かったというのに、『義体でも、どエロイこと是可以るもん』と言って、ヒイナが

ケダモノと化した現場に遭遇した場面がフラッシュバックした。因みに、旦那は絹を裂くような悲鳴を上げていた。多分生身なら泣いたと思う。

思い返せば、桐野ヒイナ（旧姓・東雲ヒイナ）は恐ろしい女だった。男女がくみずほぐれつする図／ネタを求めて、風呂や更衣室、果てにはスカイラウンジのVIPルームの天井にハイディングで潜んでいたり、カメラや盗聴器を仕掛けていたりする。男風呂を覗きに行ったり、同性にいかがわしいスキンシップをしようとしたりとやりたい放題だった。

「あれは惚気と言えるのか？」

ミカゲは冷静に考えながらタケハヤに問うた。奴は小さく肩をすくめる。

「惚気の種類だろ。キリノも反論してなかったし」

「反論できなかつたんだよ。そういうところも含んで伴侶にしたんだから。いやー、愛って凄いなあ」

「これ以上ないくらいに棒読みだな」

「棒読みにもなるさ。ヒイナの趣味には辟易してんだから。教え子の何名かが被害にあってるわけだし」

深々とため息をついたミカゲは思い出す。復興と今後の竜災害対策のために出来上がった、戦闘訓練および対竜関連知識を学ぶための専門学校で教鞭を執った日々のこと。

ヒイナが教室の天井に張り付いて生徒たちの様子を観察していた。勿論、邪な欲望を抱えて。そんな彼女との攻防戦を繰り返していたことを思い出し、ミカゲは気が滅入ってきた。

そういえば、天井に潜んでいたヒイナをミカゲが撃退した際、彼女の落とし物（どぎついR―18本）が鞆の中に入ってしまった、数分後に行った持ち物検査で人生が終了しかけた教え子が居たか。彼のこ

とはどうにかフォローできたが、教え子をあんな目にあわせてしまった自分はまだまだだと痛感したものだ。

件の彼は、専門学校入学前から交流があった。虐められっ子だった彼に、サムライとしての剣術、および心構えを説いたのはミカゲである。卒業後はISDFに入隊し、結婚して娘ができたと便りが来たか。しかし、娘が生まれて2年後に妻を亡くしたと手紙が来た。以後の手紙は「仕事に邁進している」という話以外何も書かれていなかった。それが彼との最後のやり取りになるとは思わなかった。

彼のことは、間接的に関わり合いがあったヨツミも気にかけていた。特に、彼の妻はN a v. シリーズの人工生命体だし、彼の娘はN a v. シリーズの系譜を継ぐ唯一の生き残りになった女の子だ。甥っ子の孫だから、ヨツミにとつても孫のような存在であろう——そこまで思い出して、ミカゲは重大なことに気づく。

(……名前、なんていったかな)

長らく老老介護に明け暮れていたためか、記憶が曖昧になっているのだ。霞がかかったように思い出せない。記憶力には自信があったのに。

思い返せば、最後に食べ物を食べたのも、最後に睡眠を取ったのも、遠い昔のように思える。いや、実際遠い昔のことであった。

この世界は時間と切り離されていたし、精神体となった自分たちは昼夜飲まず食わずでも生きていける。ついでに、介護は昼夜を問わず5000年間ぶっ続けた。

(もしかして、孫の名前忘れてないよね? どこぞのポケモン博士みたいなことになってないよね? ……まさかとは思うけど、『ワシに孫いたっけ?』って選択肢ないよね!?)

考えるだけで寒気がする事案が発生した。ミカゲは慌てて孫を思い出そうと試みる。性別は女の子、名前は祈イシ——渡来イノリだ。孫

の名前も孫の顔も、寸分狂わず思い出せた。ああよかった。その弊害として、自分が最期に見た孫の泣き顔まで思い出してしまったが。

(あの子からしてみれば、恐ろしい光景だったろうなあ。「自分を庇つたせいでお爺ちゃんが死んだ」って。……我ながら酷いトラウマを植え付けてしまったモンだ)

孫には健やかに育ってほしいと願いながら、自分がやった取り返しのつかない過ちを思い返す。自分の命か孫の命か——取捨選択を迫られたミカゲは、迷うことなく孫の命を選んだ。孫の命を選んだことなど、後悔なんてしていない。その結果、「孫の目の前でマモノと一緒に投身自殺」的な光景が広がってしまった。

タケハヤを咎めた自分もまた、タケハヤと似たような道を辿った。人のことを言う資格はないが、ミカゲが言わなければ、誰もタケハヤに異を唱える人間は居なくなるだろう。完璧な正義の味方になってしまった彼に、そんな暴言を吐けるのは自分——渡来ミカゲだけなのだから。

「お前、話聞いている?」

「ああ、聞いている。アイテルのことだろう?」

眉間に皺を寄せたタケハヤに、ミカゲはさりと返答した。半ば当てずっぽうだったのだが正解だったようで、タケハヤは満足そうに頷く。ミカゲはしかめっ面を浮かべた。

「前にも言ったけど、正直な話、面倒見きれねーぞ。あいつ、とんでもないヤンデレだし」

「おい。そこは嘘でも笑顔で頷くところだろ」

「馬鹿野郎、結論を早まるんじゃないよ。話は最後まできちんと聞こうな」

息巻くタケハヤを制し、ミカゲは笑った。

「色々愚痴とか不平不満はあるけどな。——俺は、お前が信じた『正義の味方』だ。それくらいのプライドはあるぞ」

「！」

「俺は、期待には応えたいと思う性分だな。万事任せろとは言わないが、やれる限りのことはするさ」

「老老介護の次は、『彼氏以外はもうでもいい』を地で行くお姉さんの面倒を見るのか」と、ミカゲは苦笑した。アイテルのことをうっかりお婆さんと言った瞬間、ミカゲの首が（物理的な意味で）飛ぶだろう。

他の面々もミカゲと同じ考えだったようで、満面の笑みを浮かべてタケハヤを見返している。タケハヤも超弩級の馬鹿だけれど、彼の願いを叶えるために死後もつき合い、それをやり遂げたムラクモ13班もまた超弩級の馬鹿だ。

馬鹿と馬鹿が結託した結果がこれである。馬鹿みたいなことを受け継いで、馬鹿みたいなことをやり遂げて、その果てに何が待っているかなんて分からない。それでも、自分たちは正義の味方だ。カッコいいヒーローには、N.O.という言葉は赦されない。

……たとえそれが、無駄・無駄・無謀の三拍子揃った事案であっても、だ。

「ああ、安心した」

タケハヤは笑った。心の底から安堵したような笑みだった。

「ああ、タケハヤ！ 私の愛しい人!!」

丁度そのタイミングで、扉が開かれた。真っ先に飛び出してきたのはアイテルである。彼女はムラクモ13班を弾き飛ばさん勢いでタ



ケハヤの元へと駆け寄った。霊体じゃなければ確実に吹き飛ばされていただろう。

彼女に続いてやって来たのは、死亡したカザン共和国の大統領——ドリス・アゴートと、彼が見出したハントマン「セブンスヘヴン」に所属する面々だ。彼／彼女たちは、タケハヤの持つドラゴンクロニクルを求めてここに来た。

ドラゴンクロニクルの所在を訊ねられ、タケハヤはにやりと笑った。「ドラゴンクロニクルを手にしたければ、俺を斃せ」——その言葉と共に、間髪入れずタケハヤは鎖を引きちぎる。槍を振りかざし、彼は文字通り「襲い掛かった」。

「楽園の狩る者よ！ その力を、俺に示して見せろ!!」

ハントマンたちはいきなりの襲撃に狼狽したものの、即座に己の得物を構える。迎撃態勢は万全だ。

ルシエ族のプリンセスが歌で仲間をサポートし、援護を受けたファイターの青年とルシエ族の騎士が飛び出していく。サムライの少女が刀を抜き、盗賊の格好をした青年が短剣片手に駆け出した。帽子をかぶった青年が即座に詠唱を始め、呪文を打ち放つ。眼鏡をかけた青年は、仲間たちが傷つくことを想定して身構える。

力が衰えてきたとはいえ、タケハヤは竜である。ハントマンたちは散々翻弄されていたが、じりじりと巻き返してきた。その戦いぶりには、嘗てのムラクモ13班を想像させる。彼／彼女たちが持つ魂の輝きは、紛れもなく「狩る者」のものであった。因果は巡り、魂の輝きは受け継がれ、それは竜を討つ刃となる——その系譜を見せつけられた。

「私たちの物語は、とつくに終わってたんだね」  
「そうだな」

次世代の狩る者の活躍っぷりに、ユイは眩しそうに目を細めた。ミ

カゲも領く。

むしろ、終わったはずの物語を無駄に引き延ばし、割に合わないことを続けていたのは自分たちである。

始まりには終わりがある——当たり前のことだ。絶対に覆せない、普遍的な真理。それは、戦いにも適応された。

永遠に続くと思われた戦いが終わる。銀に煌めく一閃が、タケハヤを切り裂いた。

力尽きた人類戦士は崩れ落ち、彼を愛した女性は慌てて駆け寄る。

「タケハヤ……!」

「……ドラゴンクロニクルを取り出すためには、こうするしかなかった……」

荒い呼吸を繰り返しながら、タケハヤは後継者たちに語り掛ける。彼が命／ニンゲンとしての人生と引き換えにして、楽園に至る世界まで守り抜いた希望を。

「竜を狩る者よ。この地球を……エデンを頼む」

「わかった」

「わかりました」

「ええ」

「ああ」

楽園の狩る者たちは、タケハヤの想いとドラゴンクロニクルを確かに受け取った。それを確認したタケハヤは、ほっとしたように微笑んだ。

それを確認したかのように、彼の体はぼろぼろと朽ちていく。愛する男が死にゆく姿を目の当たりにしたアイテルは派手に狼狽していた。

壊れた人形みたいに、タケハヤの名前を呼び続ける。その叫び声は文字通り“悲鳴”だった。愛する人が派手に取り乱す現場を見ても、

タケハヤは動じない。

「嫌……嫌。ああ、ああ、タケハヤ……!!」

「アイテル……俺は、幸せだよ。普通の人間じゃあ叶うはずがない程永い時間、俺はお前と一緒に居られた……」

「死なないで、置いて逝かないで……!!」

「……ありがとう。俺の愛した、大切な人」

タケハヤはアイテルの髪を撫でていたが、その力もなくなつたのだろう。ずるりと手が落ちる。光を失った瞳が、誰かを探すように彷徨い——その相手を見つけたのだろう。タケハヤは満足げに微笑んだ。

視線の先にいたのは、ムラクモ13班。エデンのハントマンたちからすれば、誰も居ない場所を見つめたようにしか思わないだろう。ミカゲたちもまた、タケハヤを見返して頷く。何も視えないはずの瞳が細められた。

「頼んだぜ、正義の味方。……俺はずっと、お前たちを信じているからな」

「——引き受けた、ヒーロー」

昔みたいに、拳と拳を撃ち合わせるような真似はできなかつた。けれども、最後に拳を突き合わせたときのようには、確かにミカゲは——ムラクモ13班は、彼の想いを受け取つたのだ。自分たちの声は、きつとタケハヤにしか聞こえていないのだろう。ハントマンたちは首を傾げていた。

ミカゲの言葉に安心したかのように、人類戦士の瞼が落ちた。安心したように大きく息を吐いて、正義の味方は眠りにつく。ようやく己の存在意義を——希望を繋ぐという役目を果たして、だ。彼の体はあつという間に風化する。アイテルの手の中には、何一つすら残らない。

「タケハヤ!!」

アイテルの絶叫が響く。

骨の一つすら残さず土に還った、ヒュプノスの巫女が愛した人。最後まで正義の味方だった男。

人類戦士タケハヤが辿った鮮烈な奇跡を、その生き様を、自分たちは決して忘れることはないだろう。

ミカゲは目を閉じる。あまりにも遠い場所へ逝ってしまった親友の背中が、瞼の裏に浮かびあがった。



もしも、なんて言葉は全くない。それを語る術を、渡来ミカゲは持っていない。

だけど、もし、語ることが許されるなら。

これは、遠い昔の話だ。

\*\*\*

刀が吹き飛んだ。ミカゲの体は地面に叩き付けられる。立ち上がらねばならぬのに、体が全然言うことを聞かない。ああ、自分は負けたのだと、頭の奥が漠然と理解した。

敗者であるミカゲには、勝者であるタケハヤを引き留める資格なんてなかった。彼はぜえぜえと荒い呼吸を繰り返しながら、愛用の得物

——天叢雲剣を支えにして立ち上がる。

タケハヤは笑っていた。これ以上ないくらい、晴れやかに笑っていた。ミカゲとの勝負に勝つことが——ドラゴンクロニクルの担い手になることが、何を意味しているのか知った上で。

「約束だ」

タケハヤが、嬉しそうに告げる。

「俺が生きるはずだった時間を、お前にやる。だからお前は、お前が得るはずだった鍵と力を、俺に寄越せ」

あまりにもふざけた言葉だ。

あまりにも不条理な言葉だ。

あまりにも、あまりにも――。

タケハヤの言っていることは無茶苦茶だ。愛する人を救うために、彼は死のうとしている。人間としての死を迎えてまでも、愛する女を救おうとしている。

それは違うとミカゲは思う。大切な人ができたなら、這いつくばってでも生きるべきだ。相手を幸せにするためには、自分が生きていなければ意味がない。

「……………ふざけるな」

ことあるごとに発作を起こして、のたうち回るように苦しむ青年の後ろ姿を知っている。傍らに寄り添う女性と、幸せそうに笑っている青年の姿を知っている。

タケハヤは、誰かのための犠牲として弄ばれてきたのだ。ミカゲの効果的な調節のため、あるいはナツメがミヅチへ至るために、命の火種をこっそりと持っていかれた。文字通りの風前の灯火だ。自身の命が長くないことは、タケハヤ本人がよく知っているはずなのに。

最期のときくらいは、愛する人や大切な仲間たちと穏やかに過ごすべきだと思う。いいや、過ごしてほしいと思うのだ。タケハヤは散々頑張ってきたんだから、もう休んでいいはずだろう。幸せになっていいはずだろう。なのに、どうして。どうしてこうなるのか。

「…………ふざけるなよ…………！」

幸せじゃ、ないのか。仲間がいて、愛する人がいて、彼らと心穏やかに過ごすことができる日常が残されている。それは、幸せなことではないのか。

ミカゲが欲しながらも、望めないものだ。ドラゴンクロニクルの担い手になるために生かされ、人類の裏切り者の唯一の肉親である自分が、望んではいけないものだ。

自分は責任を果たさなくてはならない。日傘ナツメの実弟として、そう在れと望まれた命として。それから逃げることは、ミカゲ自身が許せなかった。

敗北しても尚、無様に喚くミカゲを見たタケハヤは眉間に皺を寄せ  
る。

面倒くさい、と、奴の眼差しは訴えていた。

「男に二言は無え。違うか？」

「それでもだ」

ミカゲは吼える。負け犬でしかない己にできることは、それくらい  
だった。

「それでも。…………こんなの、おかしいだろ」

「ミカゲ」

「だって、おかしいだろ!!」

「ミカゲ」

「どうしてお前は、幸せになろうとしないんだよ!？」

畜生、と、ミカゲは吐き捨てた。

ああ、どうして。自分のことでは一切泣いたことのないのに。何故、今、ミカゲはタケハヤなんかのために泣いているのだろう。幸せを投げ捨てて死に行こうとする馬鹿野郎なんて、大嫌いなのに。憎

たらしいのに。

タケハヤは、無様に泣き叫ぶミカゲを見下ろしていた。琥珀色の瞳は、子どもの扱いに慣れていない若者みたいに途方に暮れている。鍵の行方を見届け人だったユイとアイテルも、どうしたらいいのか分からない様子だった。

人生で初めて、大泣きした。

後にも先にも、タケハヤのために泣いたのは、これきりだった。

\*\*\*

「俺は、力が欲しくて竜になるんじゃないやねえ。愛する女を守ってやりてえ、解放してやりてえと思ってる。そのために、竜になるんだ。そのために、人類を救うんだ。……それだけは、知ってほしい」  
「わかってるよ。……わかってるから」

ミカゲはそう言って、タケハヤの方を振り返った。

本当は、タケハヤに背を向けたままにいるつもりだった。彼の方を向いて何かを言う資格なんて、ミカゲにはない。

でも、彼の方を向かないままにいるのは、卑怯者のように思ったのだ。逃げているように思ったのだ。

ミカゲは決心して、今度こそ紫苑の双瞼を黄玉の瞳へと向けた。途中で逸らす事無く、まっすぐに。

言わなくてはならない。

それが、ミカゲの責任だ。

己がこれから紡ぐ言葉の残酷さを重々噛みしめて——告げる。

「……死んでくれ、タケハヤ。人類の為に、俺の身代わりになって、死んでくれ」

それを聞いたタケハヤは、まるで大根役者の芝居を観た監督のよう

な苦笑を浮かべた。

「——なんだ、言えるんじゃないか」

その笑い方は、とても優しい。

遠い昔、研究所で笑いあったときと変わらなかった。

「当然じゃねーか馬鹿野郎が」「んだと、お前だってバカだろうが」——きつとそれは、この2人が交わせる最後の会話。

“人間”であるタケハヤと、“兵器予定”だったミカゲの、最後の会話となる。ひとしきり悪態をつき合って、自分たちは笑っていた。永遠の別れに等しいにも関わらず、まるで通学路の途中で家路につくため別れる親友同士のように、自分たちは笑っていた。笑い合っていた。

——そして、終わりの時は訪れる。

「じゃあキリノ、始めてくれ」

「ああ、わかった」

タケハヤが笑う。これから死にいくような状況だと言うのに、その表情には一切の曇りもない。後悔も悲しみも嘆きも無く、ただ希望だけがそこにあった。何の気負いもない、屈託のない笑顔だった。

ミカゲとタケハヤはいつだって、互いに背を向けて歩いてきた。本人たちも納得してだ。けれど、そうやって別の道に進んでも、どこかで必ず会い見えると知っていたのだろう。それは確信であり信頼であり腐れ縁であり——言葉には言い表せない“絆”で結ばれていた。もう二度と、その道は重なる事も無い。互いに背を向けて進んだが最後となる。ミカゲはそれ以上何も言わず、タケハヤに背を向けていた。けれど部屋を立ち去る真似はしない。それが、ミカゲのプライドだ。ミカゲが絶対に譲れないことだ。

覚えていよう。愛する人のために、命すら投げ出した馬鹿野郎を。親愛なる友のことを。正義の味方になるのだと笑った男の姿を、決



して忘れない。

## 断ち切られた想い、紡がれた未来

「人類戦士と人竜に関する資料？」

「ああ。誰かが旧ムラクモの資料を拝借したようだ。……勝手に、な」

ヨツミは眉間に皺を寄せ、深々と息を吐く。生命科学を扱う彼は、  
“2021年で発生した竜戦役においてルシエクローンを現在に復活させた”研究者の1人だ。人工生命体研究の先駆けとなった那雲博士の息子（双子の弟）であり、その研究の後継者でもある彼からしてみれば、放置できない事案であろう。

自分が生み出したルシエ族の人権保護に駆け回る傍ら、ヨツミは兄である三彦と生命科学研究を進めてきた。特に、N a v . シリーズと銘打たれた子たちは、ヨツミにとつても孫みたいな存在である。そういえば、最近はN a v . 3 . 8 6——那雲ミハルとミカゲの教え子が結婚したことに喜んでいたか。閑話休題。

U . E . 5 5 年、ムラクモ機関に関する記録はI S D F に吸収された。ムラクモ機関の関係者が高齢化したというのが理由である。その際、ムラクモの各研究資料も徴収された。

だが、一部のバカどもが暴走し、“ムラクモ機関から接收したデータを悪用した挙句、まともな尻拭いをしないままその案件を握り潰す”という事案が発生した。

事案は公にされていないが、その案件は未だに決着がついていない。事態を重く見た元ムラクモ関係者は、ムラクモの研究データを悪用されぬよう厳重保存する部署を設立した。

その部署に、たった1人で所属しているのがヨツミであった。ムラクモ関連情報の番人とは、彼のことを指す。

「年を取っているからごまかせると踏んだのだろう。舐められたものだよ」

そうやって口元を尖らせたヨツミの外見年齢は、どこからどう見て

も20代後半〜30代後半にしか見えない。70年近く前に世界を救った英雄だと言われても、誰も信じないだろう。

いいや、ヨツミだけではない。嘗てムラクモ13班に所属し、ニアラとフオーマルハウトを撃破した面々は、外見年齢が当時のままで固定されてしまっている。勿論、ミカゲもだ。

対竜研究をしているミカゲとヨツミの教え子が「真竜の瘴気を真正面から浴びた副作用」だの「真竜の瘴気に適合した証」だのと語っていたけれど、真相は定かではない。

「……しかし、持っていかれた情報を考えると、穏やかじゃないな」「嘗て人竜や人類戦士と名のつくものと縁があったキミにしてみれば、黙っていられる問題ではあるまい?」

「ルシエクローンや人工生命体に関わっていたお前にとっても、だろ?」

「そうだな。生物兵器を作るという観点で見れば、人工生命に関する研究とも無関係とは言えん」

ミカゲとヨツミは顔を見合わせ、ため息をついた。

「知的好奇心は諸刃の剣だ。向けるべき矛先を間違えれば、多くの命が不幸になる。……もう、そんな悲しみや不幸を背負わせるようなことは、あってはならん」

「違いない。現に、それが原因で悲劇的な方向へ逸れた連中を、俺たちは見てきたからな」

「ミカゲ……」

ミカゲの言葉に、ヨツミは合点がいったのだろう。気遣うようにこちらを見返し——ヨツミの方がミカゲに気遣われていることを察すると、何とも言えなさそうに視線を逸らした。

ヨツミの脳裏に浮かんでいるのは、妻でありルシエクローンであるシラユキのことだろう。シラユキは元々、ATLコードと竜殺剣を扱

うことを想定した殺竜兵器として生み出された個体だ。ヨツミはそんな彼女の世話役に任命されており、訓練関係やメディカルチェックも行っていたという。

しかし、シラユキはATLコードに適應することができず、竜殺剣を扱うことも不可能だった。所詮は失敗作なのだから、と、ヨツミの上司はシラユキに対して不当な暴力を行っていたらしい。肉体的な暴力、精神的な暴力、性的な暴力の3つが揃っていたそうだ。現代の法律でもスリーアウトチェンジものだ。

更に腹立たしいことに、そいつはシラユキを脅し、ヨツミに訴えられないようにしていたらしい。陰湿極まりないやり口に気づけなかった自分自身のことを、ヨツミは未だに許せないでいるようだ。……最も、この話はヨツミからまた聞きし、関連情報を見たもののため、ミカゲは詳細を知らないのだが。

「……シラユキ、大変だったらしいもんな」

「ああ。……私の場合は、運が良かったんだ。手遅れに等しかったが、シラユキが抱えてきた闇に気づいてやれた。彼女の手を引いて研究所を飛び出し、降りかかる火の粉を払うための力を開花させることができた。……それだけじゃない。シラユキは、伴侶として私を選んでくれたんだ」

「こんなに幸せなことはないよ」と、ヨツミは笑う。

拭えぬ痛みと悲しみを抱えた、影のある笑みだ。

しかし悔ることなかれ。この男は、「愛する人を守りたい」という一心で俊敏性Sランクを開花させたムラクモ13班員である。その一狙ってきたSECT11の連中をナイフで磔刑に処した男である。結果、「毒ハメは紳士的である」という謎の結論にたどり着いた、クセモノどもの1人であった。

「キミも、だろうか？ ……ナツメ総長と、タケハヤのこと」

「まあな。どっちも、俺の手の届かない所へ逝っちゃったよ」

対して、ヨツミがミカゲを心配したのは、異母姉ナツメ／人竜ミツチと親友のタケハヤのことだ。この兩名は、片や私利私欲で、片や愛する女を守るために竜へ至った人間たちだった。帝竜たちの検体から抽出したドラゴンクロニクルは、神に等しい存在へ至る鍵であり、竜を殺す力を有している。

すべてが御伽噺になりつつあるものの、世界の危機は去ったわけではない。最近流行り始めた謎の病——巷では竜班病と呼ばれている——を筆頭に、世界各地では緩やかに異変が起こっている。竜災害が再発する可能性は9割9分。しかし、歯がゆいことに、それがいつかは分かっていない。

「どうしてみんな、生物兵器の方に走るんだろ。ドラゴンクロニクルと言えば竜殺剣だったのに」

「生物兵器の方が現実的なのだろう。帝竜の心臓3つで、1回限り使用可能な竜殺剣だからな。コストパフォーマンスが限りなく悪い」

2021年に発生した竜戦役で使用された竜殺剣のことを思い出したのでろう。ヨツミは眉間に皺を寄せた。ミカゲも納得する。竜殺剣を用いてフォーマルハウトにとどめを刺したのは、他ならぬミカゲだ。竜殺剣の材料に、帝竜の心臓が最低でも3つ必要だということを知っている。その説明を、キリノから直々に聞かされたためだ。

ここ最近になってから、各地で帝竜が姿を現している。一般人には情報統制によって伏せられているが、各国のISDFが活躍し、被害を防いでいた。昔は帝竜相手にヒイコラ言っていたのに、時代は変わるものらしい。

技術の進歩によって対竜兵装が充実および発展してきたこともあって、『帝竜相手に総力戦』という時代は終わった。対竜武装の研究開発に取り組んでいたリョウスケの努力が実を結んだ賜物だろう。その担い手の育成に、ミカゲも全力を注いでいる。

「ついでに、竜殺剣という単語を鼻で笑う世代が増えてきた弊害かもしれない。……特に、甥っ子の教え子がな」

「ああ、アクツとか言ったっけ？ そいつも『竜殺剣なんて御伽噺など信じない』派閥か」

「時間の流れとは残酷だな。こうして悲劇の教訓が薄れ、過ちは繰り返される……センチメンタルな気分になってしまおうよ」

良くも悪くも、時代は動くものらしい。ヨツミの眼差しは、遠い所へ向けられていた。

瞳には強い憂いが滲んでいる。その気持ちは、ミカゲも理解できなかった。

これでは、若い世代に未来を託して隠居生活なんてできやしない。ヨツミは苦笑した。

「死ぬ前に、まだ一仕事ありそうだな。隠居は遠いという訳か」

「その意見には同意だ。後輩の育成と一緒に、人間兵器開発なんてモンを止めないと」

「……ミカゲ、キミは変わったな。嘗てのキミもまた、人類戦士の正統な候補者だったろうに」

ヨツミは懐かしそうに目を細める。ミカゲは肩をすくめた。

「今でもずっと、思ってるよ。『俺がきちんと人類戦士になって、きちんと死んでいればよかったんじゃないか』って」

「その言葉、間違ってもキミの伴侶に聞かせてはいけないぞ」「分かってるよ。ユイ怖いし」

眉間に皺を寄せたヨツミに、ミカゲはへらりと苦笑する。

渡来家はカカア天下だ。息子が嫁を迎えて／婿に嫁いでも、娘が婿を迎えて／嫁として嫁いでも、結局女性が主導権を握る。

その系譜の始まりは、十中八九ミカゲとユイの関係性だろう。喜ぶべきことか、悲しむべきことかは分からない。

「丸く収まつているから幸福なんじゃないか」という見解で落ち着いている」という現状だ。ミカゲは苦笑した。

「それに、今こうして生きてなかったら、こんな風に思えないだろ」

嘗ての人間兵器候補が、自分と同じ道に進むであろう命を否定する——次世代に生まれ落ちるであろう人間兵器候補たちは、確実にミカゲに対して反感を抱くだろう。本日の「お前が言うな」はここである。ここではあるのだが、言わせてほしい。

ミカゲは最初から、すべてを諦めてきた。家族も、恋人も、友人も、作ってはいけないと思っていた。どうせ自分は兵器として死ぬことが確定しているわけだし、自分と友達／恋人／家族になった相手を悲しませてはいけない。むしろ悲しませたくない。だから、人間関係では表面上無関心を装ってきたのだ。

幼少期から、異母姉のナツメに『お前なんか生まれてこなければよかった』や『お前さえ居なければ、自分は幸せになれたのに』と言われてきた。今の自分であれば、それを精神的暴力と言えるだろう。だけど、当時の自分は、ただただ申し訳ない気持ちでいっぱいだった。「生まれてきてごめんさい」と、常に考えていた。

都庁で行われた選抜試験で出会った面々を13班に加え、一緒に戦ううちに、自分に与えられた役目を忘れられた時間があつた。最初はうっかりだったけど、都庁の集団失踪直前頃からは本気で忘れていたと思う。これからも仲間と一緒に居たいと、死にたくないと思うことが増えた。一緒に居られるのだと、本気で信じてしまっていた。

姉の暴走で責任を取ろうとし、仲間たちに無断で死に行こうとしたことがある。1回目は串刺しにされて返り討ちにあつたが皮一枚で繋がり、2回目は同じことを考えていたタケハヤにバレて鍵の争奪戦——一騎打ちをした果てに敗北し、阻止された。

その際に派手に狼狽して取り乱して叫び散らした結果、鬼の形相に

なった未来の妻（当時の時点では恋人ですらなかった）から詰問されたときの修羅場は忘れられない。勿論、洗いざらい全部話す羽目になり、何とも恥ずかしい思いをすることになったが。

（俺みたいなバカを見捨てず、傍に居てくれた人たちがいた。俺みたいなバカのために泣いて、笑ってくれた人たちがいた。終いには、そんなバカを愛して、「生まれてくれてありがとう。生きてくれてありがとう」と言ってくれた人がいた。——そうして、大切なものが沢山できた）

ミカゲは、自分が手にした奇跡／誤算の数を数える。13班の戦友、愛する伴侶、自分を慕う後輩たち、未来を担っていくであろう教え子／孫たち——何もなかった己の手の中には、溢れんばかりの希望で満ちている。なんて幸せなことだろう。

たとえ兵器として生まれ落ちても、意志と心がある限り、感情からは逃れられない。誰かを想い、誰かに想われる悲しみや苦しみ、そうして、喜びから逃れることはできないのだ。ヒトである限り、心を断ち切ることでできやしない。

痛いものは痛いし、苦しいものは苦しいし、悲しいものは悲しいのだ。兵器だから傷つかないわけじゃないし、兵器だから傷ついていけないわけでもない。常に平気でいなければならぬ訳でもない。想いを無視されることがどれ程苦痛なのか、ミカゲは嫌と言う程知っている。

ミカゲの想いを理解したのか、ヨツミは目を伏せた。琥珀色の瞳は、憂いが溢れてしまいそうだ。

「……敢えて言おう、ミカゲ。私は殺<sup>い</sup>兵器<sup>の</sup>と言う存在<sup>ち</sup>が生まれ落ちることを否定したいのではない。生まれ落ちた命が、『生まれてこなければよかった』、『生まれてきてごめんなさい』等と絶望してしまう、運命そのものを否定したいんだ」

「ヨツミン……」



「最も、この言い分は、『生み出す側』の詭弁だ。……そして、人類戦士関連の資料を盗んだ相手にとっては、生ぬるい理想論でしかないだろう」

ヨツミは大きく息を吐いた。彼の願いは、ミカゲの過去とシラユキの過去が根底にある。特に、後者の影響が強いのだろう。

生まれてきた命が幸せになってはいけないなんて理由はない。むしろ、生まれたのだから、幸せになっていいはずである。

「夢物語を語る人間が居なきや、未来なんて作れない。理想がなければ、ヒトは生きられないし生かせない。それを形にしたいと願うから、世界が動くんじゃないか」

「ミカゲ……」

「そういう奴こそ、次世代の人類を背負って立つ存在になるんだよ。ヨツミンの周りにも、そういう奴が居るんだろ？」

「——ああ、そうだな。甥の三喜夫<sup>ミキオ</sup>くんや、その教え子の渡真利<sup>トマリ</sup>くんのような若者たち……彼らのような理想と優しさを兼ね備えた人々が居る限り、人類が絶望の花に沈むことはない。彼らのような人々の想いが、絶望を打ち壊し、希望を紡いでいくんだ」

嘗ての軌跡を思い返す。土壇場で才能を發揮し、道を切り開く発明を生み出してきた2代目総長キリノと技術班の人々。13班を全力でバックアップしてくれた自衛隊やSKY、SECT11や政治家、そして都庁／議事堂の避難民たち。彼らが居てくれたから、ムラクモ13班は戦ってこれたのだ。

星が生み出した守護者、狩る者。凄まじい力を持っていると言われるけれど、本当に褒め称えられるべきなのは、13班をサポートしてくれた人々なのだ。良くも悪くも、彼らが運命を動かしてきた。13班は、彼らが動かした運命に乗って、絶望を断ち切ってきただけでしかない。

武器の担い手、作り手、理想の語り手——それらが密接に関わり合

い、結ばれあつたからこそ、人類は勝利を勝ち得たのだ。ミカゲたち13班はそう信じている。だから、13班員たちは各々の道に進みながらも、後継者の育成という点では密接に連携を取っていた。

『マルチタスク・オール全能力S級であるキミに、ぎりぎり俊敏性Sランクの私が一矢報いる方法はこれだけなんだ。——せめて私は、紳士として散ろう』  
『おいやめろー！ エクゾーストサクリファイスはやめろ!!』

不意に、〃那雲ミハルとミカゲの教え子が結婚するという話が出たとき、悲壮感を全開にしたヨツミがエクゾーストサクリファイスをぶちかまそうとしてきた〃 際のでんやわんやが脳裏に浮かんだ。どこで何が繋がるか、分かったものではない。

ミカゲたちが斃れた後にも、道ができる。その道がどこでどう交差するのかなんて分からない。

良いことだけではないのだろう。繋がってほしくなかった場所に行きつくこともあるのだろう。

(それでも、信じたい)

最後にたどり着く場所で、皆が笑いあえる未来があるのだと。

数多の絶望を踏み越えて、希望を手にした人々の想いを。

自分たちが見出した後継者たちが、光に満ち溢れた世界を創っていくのだと。

「ヨツミ博士ー！ いらっしやいましたら返事してください、ヨツミ博士ー!!」

「この声はトマリくんだな」

廊下から、若い青年の声が聞こえた。声色からして、かなり切羽詰っているらしい。名前を呼ばれたヨツミはゆるりと笑い、ミカゲに背を向けた。

「じゃあ、俺も戻るわ」

「ああ、達者でな」

「お互いに」

ひらりと手を挙げて会釈し、ヨツミは廊下の向こう側へと消えていく。

その背中を見送ったのち、ミカゲも彼とは反対方向へと歩き出した。



「——誰にも、私の邪魔はさせない」

腹部に衝撃を感じたのは、その言葉が放たれたのと同時だった。一歩遅れて激しい痛みが体を蝕む。——ここでようやく、那雲ヨツミは、〃自分がその人物に刺されたのだ〃ということに気がついた。

嘗てのムラクモ13班とはいえ、ヨツミは竜戦役終了後にさっさと元の研究畑に戻ったタイプだ。戦闘能力は健在であるものの、マモノに対する自衛手段と、定期的に行われるタケハヤの老老介護で使うくらいだ。

それに、目の前の人間は、ヨツミにとって（甥を通じた）旧知の間柄であった。嘗ての友人、日傘ナツメと同じ気配を持っているが故に、心配していた人物でもある。彼もまた、ヨツミと同じく研究畑の人間だ。

いくら英雄とはいえ、所詮、ヨツミはただの人間だ。S級能力者といえども、死からは逃れられない。無敵ではないのだ。

ヨツミは呻きながらも、必死になって踏みとどまろうとする。だが、身体に力が入らなかった。そのまま、地面に膝をつく。

「キミ、は……どうして……!」

「貴方が悪いんですよ、那雲ヨツミ博士。私の生命進化研究を否定し、邪魔しようとするからです」

「貴方はここで死ぬんですよ——甥の教え子は、どこまでも冷ややかな眼差しでヨツミを見下していた。

手に持たれたナイフが鈍く光を放つ。

附着していたヨツミの血が赤黒く照らされた。

「……は。それは、悪い冗談、だな……」

性質の悪い悪夢のような光景に、ヨツミは思わず笑ってしまった。笑えない状況だからこそ、笑ってしまった。

「妻が……シラユキが、私の帰りを、待っているんだ……!」

だから死ぬるわけがない。死んでいる暇はない。半ばのたうち回るようになりながらも、ヨツミは立ち上がる。

ドラゴンやマモノ、SECT11相手にナイフ1本でサバイバルしてきたときと状況が似ていた。あのときも、相当切羽詰っていたか。

妻の元へ帰る——それは、ヨツミを奮い立たせる絶対的な理由だった。ヨツミを突き動かす意志そのもの。

それを見た甥の教え子は、地べたを這う虫けらを見るような眼差しを向けた。まるで、帝竜フォーマルハウトが人類のあがきを馬鹿にしているかのような視線である。ぞくりと肩が震えた。フォーマルハウトのときは一切億さなかったのに、だ。

絶対的な終焉——それは、絶望を伴って近づいてくる。ヨツミは縫い付けられたかのように動くことができない。人竜になったナツメ／ミツチに、成す術もなく串刺しにされた友人のことが頭によぎった。彼も、もしかしたら、今のヨツミと同じ気持ちだったのかもしれない。

『人類こそが、この宇宙で優秀な生命体である』……私はその持論を証明するため、確固たる意志を持って、生命進化研究を進めてきた」

夜の空気を切り裂くように、甥の教え子の声は朗々と響き渡る。彼を突き崩す力を、今のヨツミは持ち合わせていない。

「貴様のような老人が語るバカらしい理想も、夢物語も、御伽噺も、もう必要ない。ニセン世代はもうすぐ終焉を迎え、新たな時代が幕を開ける」

彼がこちらに歩み寄ってくる。

ローファアの靴底が石畳を打つ、軽やかな音がやけに響いてきた。

「貴方には、新たな夜明のための礎として、犠牲になってもらう」

鈍い光を放つのは、彼が持つナイフだったのか。

それとも、怨敵<sup>ヨツミ</sup>を屠らんとする彼の瞳だったのか。

——もう、ヨツミには分からない。

「だから、貴方は、夫人の元へ帰ることはできないんです」

刃の切っ先は、ヨツミの心臓に向けられる。

「——さようなら、前時代の英雄」

彼が降り下ろした刃は、ヨツミが抱いていた『シラユキの元へ帰る』という意志／願いを、木端微塵に打ち砕いた。



那雲ヨツミが（表向き）不幸な事件で亡くなってから、ISDFは

不穏な空気を漂わせるようになったと思う。ミカゲの予感の間違っていたいなかったようで、彼亡き後、ムラクモの研究資料は本当の意味でISDFが独占徴収してしまった。

相変わらず以前の件は握り潰して放置したままだし、最近は何に怪しい計画が進んでいるようだ。『ヨツミが目をかけていた若い研究者がトラブルを起こしてISDFを辞めた』という噂や、『ヨツミの甥が殺竜兵器の研究に携わっている』という噂もある。

「ISDFも一枚岩じゃないってことか。……絶対権力は、腐敗すると碌なことにならないからな」

ミカゲの脳裏に浮かぶのは、国の権威を取り戻そうと躍起になっていたアメリカ大統領、デイビッドだ。殺竜兵器をめぐるいざこざを思い出し、頭が痛くなった。負けたら殺竜兵器／マリナから手を引くと言いながら、負けた後無様に喚き散らした姿が脳裏に浮かぶ。

その後、彼は本国でフォーマルハウト襲撃時の無能っぷりをなじられて肩身の狭い思いをしながらも、最後まで狸を貫いていたか。ルシエ脅威論といい、ISDF結成時のゴタゴタといい、最後の最後まで嫌な奴だった。政治家があまり好きになれない理由の1つである。

政治家という生き物は、どうして内ゲバばかりしているのだろうか。ムラクモの味方になってくれる人たちも沢山いたけど、敵に回った連中のしつこきの方が印象に残りすぎている。特に、オケアヌスの酸の雨で議事堂が大変なことになっていたのに、予算問題だなんだで証人尋問してきた派閥とか。

「おじいちゃん、どうしたの?」

「ん? —— ああ、イノリか。おかえり」

鬱々としたミカゲの思考を断ち切ったのは、孫の渡来祈<sup>イノリ</sup>だった。学校から帰ってきたらしい。彼女はミカゲの末孫であり、今年で10歳になる。

彼女の両親／娘夫婦は、物心つく前に事故に巻き込まれて亡くなっていた。ミカゲはイノリの親代わりとなつて、一緒に住んで生活している。去年見送った妻・ユイの面影を強く残したイノりは、芯が強く優しい子に育った。

……正直、ミカゲの孫というより、ユイの孫と言った方が正しいような気がする。立ち振る舞いも、佇まいも、笑い方も、包容力や器の大きさも、ミカゲとは大違いだからだ。自分に似てダメな奴にならなくて本当に良かった。

「こんにちわ、お邪魔します」

「……こんにちわ」

「こんにちわ！」

「お。俐仁リヒトに創生ソウセイ。それに、四季シキも来たのか」

イノリの後を追いかけるようにして続々やって来たのは、赤茶色の髪に赤い淵の眼鏡をかけた少年——東雲リヒト、顔半分を黒いマスクで覆った少年——風間ソウセイ、眩しい金髪が印象的なルシェ族の少女——那雲シキの幼馴染たちだ。この3人はイノリと同じ歳であり、とても仲がいい。

リヒトは現東雲財閥社長の末っ子だし、ソウセイはリヨウスケの、シキはヨツミとシラユキの孫である。13班員が次々とこの世を去って行く中で、残されたのはミカゲ1人だけだ。今は、自分が見出した教え子や孫たちの行く末を見守ることが、生きる理由となっている。

この4人は、旧政府の分類で言う“S級能力者”たちだ。本人はまったく自覚していないし、ミカゲも、今はまだそれを話すつもりはない。ISDFのデータバンク辺りには「要人」として登録されているだろうが、教え子や関係者たちが目を光らせているため迂闊には動けないだろう。

「おじいちゃん、稽古つけて！」

「僕もお願いしますが、ミカゲさん」

「……お願いします」

「私もー」

ミカゲの心配など知る由もなく、後継者と孫たちは遠慮なく群がってきた。ミカゲは思わず苦笑する。

「稽古の前に、まずは宿題をやろうな」

「えー!!」

ミカゲの提案に対し、4人はブーイングで合唱した。「宿題をしない子には稽古をつけない」と言えば、4人は渋々鞆から宿題を出してテーブルの上に広げる。座布団の上に思い思いの体勢で腰かけ、後継者たちは宿題を始めた。

始めるまではぶつくさ文句を言っていたけれど、始めた途端、4人は恐ろしい程の集中力を発揮する。鋭い眼差しを見てみると、戦場で共に戦った仲間たちの姿を連想するから不思議なものだ。ミカゲは目を細めつつ、4人の邪魔にならないように部屋から出た。

そのまま別の部屋へ移動し、テレビを点ける。丁度、ワイドショーをやっていたらしい。

『この度、研究所長に就任したアクツ氏にインタビューを……』

テレビに映し出されていたのは、渡来邸の近辺にあるISDF関連の研究所だ。情報処理能力Sランクの力を駆使して調べてみたが、どうやら生命進化研究に関する施設らしい。そして、研究所の所長になったアクツは、那雲<sup>ナグモ</sup>ミキオの教え子だった。アクツは政治家であると同時に学者でもある。彼は対竜研究を推し進めようとしていた。

アクツについては、何やらキナ臭い話題が多い。火のないところに煙は立たないわけだから、裏では法律の抜け穴を使い、好き放題やっているのだろう。彼に反対意見を述べていた政敵や研究者たちは、軒



並み職を失っている。場合によっては命を落とした者、死んだも同然な状態になった者もいた。——丁度、彼の計画に反対した那雲ヨツミのように。

証拠はすべて揃っている。予備のバックアップやその他諸々は、親愛なる総長さまに預けておいた。彼ならば、ISDF／アクツからマークされないだろう。ただ、彼がミカゲの集めた証拠資料を公表してくれるかと言われると、素直に頷くことはできない。彼は可能性という言葉が大好きで、その言葉が絡むと黙認してしまうという残念な短所があるからだ。

でも、そこが総長さまのいいところだ。彼ならば、ミカゲがいなくなった後、人類戦士計画で生まれ落ちた命を慮った判断を下してくれる。

勿論ミカゲも全力を尽くす。生まれ落ちた命が絶望することのないように、だ。決意を込めて、ミカゲは手を握り締める。

そのタイミングを待っていたかのように、宿題を終えたイノリたちが部屋に雪崩れ込んできた。

\*\*\*

報復が来ることは予想していた。そのやり口は本当に悪質である。

『丁度、研究所からマモノの検体が脱走したんですよ。色々とてんやわんやで、討伐隊はこちらに回せないそうです』

『——そういえば、貴方の大事な後継者たちは、裏山へ遊びに行くと言っていたそうですね』

ミカゲ本人を狙うならまだしも、ミカゲの孫や13班の系譜を継ぐ者たちを狙うとは。奴のやり口は“本人に害を与える”パターンが多かったため、そちらに注意を向けていたのが仇になった。ミカゲは舌打ちしながら、得物を片手に駆ける。

「イノリ！ リヒト！ ソウセイ！ シキ！」

後継者たちの名前を叫ぶ。返事はない。嫌な予感が頭をよぎる。散々命を取りこぼしてきたミカゲだけれど、失いたくないものがあつた。

これからの未来を切り開いていく、可能性を秘めた希望たち。

孫たちの姿はすぐに見つかった。みんな血まみれの傷だらけで、びくりとも動かない。おそらく気絶しているだけだろうが、このまま放置すれば死に直結する。

早く治療を施したいのだが、ミカゲの目の前には異質なマモノが佇んでいる。見た目はどこにでもいるラビであるが、体格はミカゲと同じくらいで、爪と牙が異常に発達していた。

（——っ!!?）

悪寒が背中を駆け抜ける。狩る者としての本能が、派手に警笛を上げた。

（ただのマモノじゃない……！ こいつ、竜因子が組み込まれてる!!）

真っ先に浮かんだのは、都庁で発生した集団失踪。住民を誘拐するために用いたのが、ロアⅡアⅡルナの因子を組み込んだマモノである。見た目はブンブクやムジナとよく似ているが、奴の能力はブンブクやムジナ如きではかれるようなモノではなかった。METALポーンポコというふざけた名前に反して、奴は腹立たしい程厄介な相手だった。睡眠攻撃と2回行動——思い出すだけで頭が痛い。

今、ミカゲの目の前にいるラビは、複数の帝竜検体だけでなく、雑魚ドラゴンの因子も組み込まれているのだろう。S級能力者でも、イノリたちのような未熟な者たちでは太刀打ちできない。ミカゲですら難しいだろう。

人類戦士計画がどのようなものか理解していたミカゲであるが、そ

の前段階でここまで悍ましいマモノを生み出し、報復のために使うとは思わなかった。嗚呼、技術の進歩とは素晴らしい。おかげで今、物凄く泣きたい気分である。

「――取捨、選択……」

ミカゲの口から、自然とそんな言葉が出た。

何を守り、何を犠牲にするか。頭の中で天秤が傾く。

守るべきものは決まっている。犠牲にすべきものも、だ。

『マルチタスク・オール全能力S級であるキミに、ぎりぎり俊敏性Sランクの私が一矢報いる方法はこれだけなんだ。――せめて私は、紳士として散ろう』

『おいやめろ！ エクゾーストサクリファイスはやめろ!!』

昔、ヨツミと繰り広げたやり取りが脳裏をよぎった。あのときは馬鹿らしいと思っていたが、今、自分が行える最良はこれしかない。

その前にやるべきことはある。ミカゲは躊躇うことなく、己の力を解き放った。周囲にマナが収束する。自身のマナを代償に、奇跡をここに具現させる。

「――っ、おおおおおおおおおおおおお!!!!」

ありったけのマナを解き放つ。美しい羽根が広がり、温かな光が舞った。サイキックの秘奥義――キセキの代行者である。ありとあらゆる傷を治し、息絶えたものを呼び戻す禁術だ。

弾けた光は、倒れ伏したイノリたちの傷をあつという間に癒している。苦しそうな呼吸は、穏やかな寝息に変わった。その事実にあ堵する。ミカゲがイノリたちに意識を向けていたとき、マモノが襲い掛かってきた。即座に刀で受け止めるが、刀は真つ二つに折れた。

舌打ちしつつ、ミカゲは即座に新たな得物――二丁拳銃で応戦する。エイミングショットの必中効果で着実にダメージを重ねていく

が、手数は相手の方が上だ。ハイディングで身を隠そうにも、奴の狙いは即座に孫に変わるため、できない。おまけに視界を奪うこともできなかつた。

そのとき、視界の端でイノリが身じろぎした。まだ夢心地なのか、彼女はぼんやりとミカゲの方を見つめている。「……おじいちゃん？」——その声に反応したのか、マモノはミカゲからイノリへと狙いを変えた。ミカゲは迷うことなくイノリを庇う。マモノの牙が、ミカゲの肩に深々と食い込んだ。

「ぐ……！」

「おじいちゃん！」

「——来るな！」

ミカゲが傷ついたのを目の当たりにしたイノリが、慌てて双剣を構えようとした。ミカゲはそれを一喝し、止める。

イノリはびくりと肩をすくませた。マモノも一瞬身を竦ませると、怯えるように後退りする。ミカゲがエクゾーストを発生させたためだろう。

迸る力が、この場にいる者たちを釘付けにする。エクゾーストの殺気に影響されたのか、リヒトたちも目を覚まし、現状に息を飲んでいった。

「——大丈夫」

ミカゲは、イノリたちに視線を向けて、微笑んでみせた。

「おじいちゃんが、守ってやるから」

それは、揺らぐことのない意志だ。ミカゲと13班の後継者にして、これからの未来を切り開いていく希望たち。それを、絶対に守り抜く。



と。彼がどれ程素晴らしかったのか、どれ程敵に回したくなかったのか。中には、その彼が庇った少年少女たちの価値を疑問視する声もあった。近代神話の英雄を惜しむ声が止まない。

「みんな言うの。『お前じゃなくて、おじいちゃんが生きていたらよかったのに』って。……そんなの、私が一番分かってるよ……!!」

少女はそう言って、ぼろぼろ涙をこぼしていた。

自分の価値を探すその姿を、どうしてか、少年は放っておくことができなかった。

普段は他人のことなんて気にしないのに、彼女から目を離すことができなかった。

「だったら、キミが証明すればいい」

少年は、当たり前前のことを言った。

「彼が命を賭けて救う価値が自分にはあったのだと、証明すればいい」

少年の言葉を聞いた少女が、ぴたりと動きを止めた。

「……証明、する?」

「そう。そのためには、キミはもつと強くならなくちゃいけない。こんなところで泣いているような暇なんてないんだ」

少年はそう言って、ハンカチを差し出す。少女はおずおずとそれを受け取った後、ハンカチで涙を拭いた。すん、と、最後に小さく鼻を鳴らして、彼女はまっすぐ前を向く。

涙にぬれて途方に暮れていた空色の瞳は、揺らぐことのない意志で満たされていた。少年は一瞬、呆けてその瞳に釘付けになる。目を離すことは、できなかった。

「――ありがとう」

少女はにつこりと微笑む。ハンカチを洗って返すという彼女に、返さなくていいと返答した理由は分からなかった。

丁度そのタイミングで、少年を呼ぶ声が聞こえた。少年は声の主の元へ行こうとし、寸前、少女に手を引かれる。

意味が分からず、少年は一応その場に留まった。少女は庭先に出ると、花壇に咲いていた花に手を伸ばした。

小さくて可憐な花。薄く雪を被ったかのような白い花だ。

少女はそれを一輪摘むと、少年へと差し出す。

ますます意味が分からない。少年が首を傾げると、少女ははにかんだ。

「これ、あげる」

「……うん。ありがとう」

少年は彼女を直視できなくて、ふいつと視線を逸らした。そのタイミングで、少年を呼ぶ大人の声が鋭く響く。少年は無感動のまま、大人に連れられて家を後にした。

車に乗り込んだ後も、少年はじっと、白い花を眺めていた。この花の名前は確か、エーデルワイスと言っただろうか。スイスの国花であり、今の季節が見ごろの花。

少女はどうしてこの花を差し出したのだろう。庭に生えていたからか。自分の問いに自分で答えながら、少年は白い花を見つめていた。

――以来、少年は、彼女に会っていない。

\*\*\*

「ん……」

懐かしい夢を見たような心地に、思わず微睡んでしまいそうになる。けれど、そんな誘惑に浸る暇も、意味も、価値もありはしない。青年は迷うことなく夢心地を振り払うと、勢いよく体を起こした。

カーテンを開ける。朝日はまだ出ていないため、外の様子はまだ薄暗い。青年は時計を確認する。只今の時刻は午前5:00。毎朝起きる時間には変動がない。いつもと変わらぬルーチンワークが今日も始まるのだ。

青年は手早く身なりを整えた。ISDF特務部隊の制服を身に纏い、鏡で自分の様子を確認する。顔色は悪くないし、体調に異常はない。体調管理もまた己の重要な任務だ。

朝食前の早朝訓練に向かおうとして、一冊の本に目を留める。正確に言えば、本に挟まっている葉にだ。必要最低限のものしか置かれていない青年の持ち物の中では、あまりにも異質なモノ。

青年は引き寄せられるように、本のページを開いて葉を手にとった。エーデルワイスを押し花にし、ラミネート加工した手作りの葉。上部には穴があげられ、空色のリボンが結ばれている。

奇妙な懐かしさと親近感。惹きつけられてしまったかのように、葉から目が離せない。脳裏をよぎったのは、泣いていた女の子の横顔だ。その子がこちらを見て目を瞬かせ、柔らかに笑ったときの表情。

(……なんだ、これ)

胸の奥底に明かりが灯ったような心地になる。それが何なのか理解できなくて、青年は思わず首を傾げた。

これが感傷というモノならば、浸っている暇も余裕も意味も価値もない。青年は葉を本に戻す。しかし、その手つきは、貴重品を扱うかのように慎重、且つ、丁寧なものだった。

もう少し葉を眺めていたかった——不思議な名残惜しさに後ろ髪を引かれるような心地になったが、任務なのだから仕方がない。青年



は名残惜しさを断ち切るようにかぶりを振る。

青年は部屋を出る。通いなれた廊下を過ぎて、早朝訓練を行う訓練場へと足を踏み入れた。人の姿は、青年の上官以外見当たらない。それもそうか、早朝訓練の開始までもう少しだけ余裕がある。

「おはようございます、ヨリトモ提督」

「ああ、おはようユウマ」

上官——ヨリトモトウゴ頼友東吾に、青年——ユウマ如月優真は一礼した。

## 愛の重さに辟易（辞退不能）

楽園と名を変えた地球が救われたのは、タケハヤの老老介護が終わってから3か月後のことだった。

竜という強大な敵を倒したという祝賀ムードは、それから半年が経過した今でも冷めやらない。

その興奮と熱を復興へのエネルギーに転換して、人類と地球は再び立ち直ろうとしていた。

どの国も希望で満ち溢れていて、思わず目を細めてしまう。嘗ての東京復興と似ているから、というのも理由だろう。

既に滅んだはずの禁地トウキオンにも、ちらほらと人が出入りし始めている。旧世界のロストテクノロジーを求めてきたプレロマの学者だ。嘗て世界を救ったハントマン——“セブンスヘヴン”に所属していたメイジとヒーラーの青年たちだった。

今後の復興と対竜研究の参考にするためであり、禁地を根城にしているエメルやアイテルからの許可も得ているらしい。2人も黙認しているようで、メイジとヒーラーが機械を片手に唸っている姿を見かける。その横で、リヨウスケがはらはらしている姿もだ。

元技術者としては、メイジとヒーラーが機械を壊してしまわないか心配なのだろう。対竜研究の内容を応用して、対人兵器にしてしまう等の懸念もある。生まれ落ちた技術が、生み出した人間の意図に反して使われることは世の中の常だった。

「13班！ ムラクモ13班はいるか!？」

ミカゲの思考回路を阻むかのように、幼い少女の刺々しい怒鳴り声が聞こえてきた。間髪入れず、扉が蹴破られる。

金髪の髪をお団子に束ね、白い法衣に身を包んだ少女——ヒュプノスの巫女でアイテルの姉・エメルが、眉間に皺を寄せていた。

普段から苛立たしそうにしているのだが、今日は輪をかけて酷い。まるで、先の大戦でニアラを打ち損じたときのようだ。

「なにになに？　どうかしたの？」

「俺たちに何か用か？」

つい先程まで、ブラスタレーイブンの同人誌（どぎついR―18禁モノ）をめぐつて取っ組み合いをしていた東雲兄妹がぴたりと動きを止めた。2人は即座に依頼人／エメルに向き直る。一瞬のうちに、依頼人の話を聞く態度になっていた。

東雲兄妹は古菅チエロンと親しくしていた。その縁から、都庁／議事堂のクエストカウンター設立、および依頼の斡旋仲介に携わってきた。その際――13班側の窓口として――の対応スキルは健在である。

クエストカウンターでヒイナ、マサハル、チエロンが楽しそうに談笑している姿は2020年の頃から目にはしている。最初の頃は、ヒイナとマサハルが東雲財閥の令嬢と次期社長だなんて思ってもみなかった。

依頼を引き受ける気満々の態度がお気に召したのか、エメルの表情が若干和らいだ気がする。物々しい態度は変わらないが。

「妹を探してほしい。数日前から、アイテルの行方が掴めなくなった」  
「え？　アイテル、ドラゴン対策用の軍資金を稼ぐためにヨロズ屋を始めたんじゃないの？」

「尋ねてみたら店が潰れていた」

「潰れた!？」

「開店から3ヶ月しか経過してないぞ!？」

エメルから齎された情報に、経営に関わってきた東雲兄妹が目を見詰めた。

開店3カ月で店を潰してしまうとは、アイテルは一体何をしたのだろうか。

「そりゃあ、『接客態度最悪だなあ』とか『相場に合わない値段だなあ』とか思ってたよ！ リンゴを異常に嫌って、梨に異様な執着を見せてるのも懸念材料だったよ！」

「遊びに行ったら、大量のリンゴを押し付けられたっけ。『形が嫌いだから』って」

マサハルが頭を抱えて唸る。ヒイナはどこか達観したような笑みを浮かべて頷いた。以前ヒイナが大量のリンゴを抱えて帰ってきたことがあったが、そういう事情があったらしい。

因みに、そのリンゴはムラクモ13班が美味しく頂いた。調理当番はミカゲ、ユイ、シラクキ、リヨウスケである。東雲兄妹とヨツミに当番を頼むと碌なことにならないためだ。

東雲兄妹は料理が壊滅的だった。兄も妹も火力に物言わせるタイプで、どんな食材も例外なく炭にしてしまう。ヨツミの場合は、何故か電化製品が反逆するのだ。

ヨツミが「こねる……！　そして混ぜる……！　しからばツ!!」と気合を入れた刹那、使ってもいない電子レンジが突如爆発する／傍にあった冷蔵庫が火を噴く／使ってもいない炊飯器が爆発する等の現場に直面したミカゲの気持ちは、きつと誰にも分かるまい。未だに原因は不明のままだ。

「軍資金って、この前カザンでオークションやったんじゃないの？　『とんでもないもの出品された。アレを買う客も、おかしい奴しかいなかった』って、カザンの新大統領が途方に暮れてたの見ただけ」  
「兵器開発に投じようとしたら、復興に全部持っていかれた。竜対策がどれ程重要なのか、どいつもこいつもまるで分っていない!!」

「……ぶれないなあ、エメル総長代理。いや、今は元学士長だっけ？」

竜を狩りつくすことに重点を置くエメルは、竜抹殺のためならその他諸々は度外視しがちである。帝竜オケアノス討伐作戦における硫酸デスマーチ、対ニアラへの千人砲の使用と「この星の命すべてを弾

丸にしても竜を殺す」発言の過激さが顕著であった。

ギリギリ歯ぎしりするエメルの様子に、リヨウスケは苦笑して肩をすくめた。良くも悪くも、彼女が持つ純粋な意志——竜を許さないといい憎しみが、人類の未来を切り開く重要な要因になったのは事実だ。命への愛担当についてはノーコメントにさせていただくが。

タケハヤというストッパー亡き後のアイテルは、割と好き放題しているように思う。エメルと同じく、自重という箍が吹っ飛んだかのようだ。

このままいけば、エメル以上の暴挙に出る可能性も浮上してくる。姉の暴走だけでも手一杯だと言うのに、妹までそんなことになったら流石の13班も困ってしまう。

正義の味方から託されたときから予想していた問題ではあるものの、幾ら考えても有効的な手段を思いつくことができない。

自分たちができることは、彼女たちが暴走した際に引き留めてやることか、引導を渡してやることくらいだ。

(……引導を渡すなんてこと、起きなきやいいんだけど。命の恩人にそういう真似をする羽目になるのは、な)

薄暗い影が近づいてきたような感覚に、ミカゲは思わず目を伏せた。

嘗てのミカゲは、自分が有する全能力Sランクの力に肉体が耐えられず、長くは生きられないだろうと言われていた。竜を殺す力を求めていたエメルは、そんなミカゲを見出し、ヒュプノスの持つ技術を駆使して延命治療を施してくれたのだ。

「いざとなったらドラゴンクロニクルの担い手になる」という約束の元に施された治療だった。しかし、タケハヤにその役目を搔つ攫われたため、当初の意図に反してミカゲは生き延びて余生を終え、現在は霊体となってトゥキオンを根城にしている。世の中何が起きるか分かったものではない。

ミカゲの延命治療には異母姉であるナツメも関わっていたし、腐れ

縁の親友であるタケハヤたちへの人体実験はミカゲの調整も兼ねていた。自身が関わってきた人間たちのうち、ミカゲは異母姉<sup>ナツメ</sup>と腐れ縁<sup>タケハヤ</sup>の親友<sup>ヤ</sup>を手にかけて。どちらも、最終的には竜へ至った当人たちに引導を渡した形となる。

「エメルの依頼は、〃行方不明になったアイテルを探してほしい〃ってこと？」

「いいや、他にもう一つある」

ユイの問いかけに、エメルは皺を更に深くして首を振った。

かつと開かれた紅蓮の瞳は、竜に対する憎しみを語るときの眼差しを彷彿とさせる。

竜はもうこの星に居ないというのに、怨敵の気配を感じ取って殺気立っているかのようだ。

「エデンに〃影の世界〃が出現した。その奥地から、忌まわしき真竜の気配を感じる」

「真竜の気配……!?!」

「アイテルの行方が掴めなくなったのも、〃影の世界〃誕生と真竜の気配を感じ取ったのと同時期だ。真竜の存在が、アイテルの失踪と深く関わっている可能性がある」

エメルから齎された情報に、ユイが険しい表情になる。〃影の世界〃は外界の影響——主に時の流れ——を受けない世界だ。どんな仕組みかは分からないが、〃影の世界〃にはドラゴンしか出現しない。むしろ、ドラゴン以外の生命体が存在しないのだ。そして、迷宮の奥地には帝竜の幻影が待ち受けている。

嘗て、タケハヤの介護および老老介護は〃影の世界〃で行われていた。ヒュプノス姉妹からまともな説明もなく放り込まれたミカゲたちは、ヒイヒイ言いながら最奥までたどり着いたものだ。最奥でタケハヤと再会した挙句、ヒイヒイ言っていた以上に大変な目に合う——

タケハヤを鎮めるため、命がけて戦う羽目になるとは思わなかった。そのため、ミカゲたちは「影の世界」を『タケハヤが正しく死ぬ瞬間まで封じ込める牢獄』だとばかり思っていた。彼亡き後は、「影の世界」は消滅し、二度と出てくることはないと考えていた。しかし、自分たちが認識していたものとは全く違かったようだ。エメルの様子からして、「影の世界」は真竜と何らかの関わりがあるらしい。物々しい表情のエメルを見ると、ミカゲは奇妙な引っかかりを感じる。

それはユイも同じだったようで、彼女は素直にその疑問をエメルへぶつけた。

「『セブンスヘヴン』の面々には頼めないの？」

ムラクモ13班の物語は終わり、新たな世代の物語が綴られたというのに――。

ユイの疑問は最もである。ミカゲたち嘗ての狩る者たちは過去の遺物であり、今ではただの亡霊でしかない。タケハヤの老老介護という役目を終えてからは、専ら、「次世代の人々の姿を見守る」だけの霊体になっていた。

未来を切り開く役目は、次の世代たちの仕事である。「影の世界」攻略も、本来なら自分たちではなく次世代の担い手たちの面々が成すべきことではないのか。ミカゲたちの疑問を聞いたエメルは、深々と息を吐いた。

「奴らは復興事業で大忙しだ。文字通り世界中を股にかけているため、なかなか居所が掴めん。それに――」

「それに？」

「『影の世界』に足を踏み入れることができるのは、おそらく貴様らだけだ。……奥地に潜む真竜の気配が、他ならぬお前たちを求めている」

そう言ったエメルの紅蓮の瞳は、怒りと憎しみで燃えていた。自分が「影の世界」に乗り込めたなら、怨敵を殺してやるのと言わんばかりに。

まるで、「実際に「影の世界」に足を踏み入れようとしたら、立ち入ることができなかった」という鬱憤を吐き出したかのようだ。

ムラクモ13班は、思わず顔を見合わせた。真竜直々に自分たちが指名されるだなんて、誰が予想できただろう。驚くのも当然のことだった。

幾何かの沈黙の後、頷き合う。

それができるのが自分たちだけだと言うなら、断る道理はない。

(俺も、相当なお人よしになったもんだな)

即座に「任せて!」と返答したユイの背中を見つめながら、ミカゲはひっそりと苦笑した。

\*\*\*

「もおやだあ、帰ろうよお。疲れたよお、面倒だよおー!!」

リヨウスケは半べそになりながら、周囲に居たドラゴン十数匹を一気にハッキングした。即座にマッドストライフを発動させる。真正面から馬鹿正直に殴り合うことが面倒らしい。

実際、ハッカーは殴り合いに向かない職業だ。仲間の援護と防御系列に特化した守りの要である。ハッキングが決まれば攻勢に回ることもができるものの、そこに至るまでが大変だ。

トリックスターであるヒイナやヨツミの攻撃のおかげで、周囲のドラゴンたちはハッキングの弱体がかかっていた。結果、この場にいたドラゴンの大半にハッキングがかかった。

リヨウスケの意のままに動かされ、ドラゴンたちは攻撃を仕掛け合う。その間に、ムラクモ13班は立て直しに入った。



「お手伝い、お願い！」

「怪我を治すね！」

「サンキュー！——今度はこっちの番だ。喰らつとけ、遠慮なくなあー！」

ユイがCURE☆フォームで陣形を整え、シラユキがキュアで仲間たちの傷を癒していく。CURE☆フォームの恩恵を受けた癒しの光は、あつという間に仲間たちの傷をふさいだ。

ドラゴンの攻撃を一手に引き受けてカウンター迎撃に集中していたマサハルが、即座に攻撃に転じる。脳天にドリルクロウラーを叩きこまれた雑魚竜は、悲鳴を上げる間もなく倒れこんだ。

「哀れだな」

「全弾、ぶちかますわよっ!!」

端の方に居たヨツミは、毒を喰らって弱っていたドラゴンの毒を更に重症化させる。戦闘開始直後からベノムアンプリフを何発も叩きこまれたドラゴンは、そのまま力尽きた。

倒れたドラゴンを蹴倒す勢いでヒイナが飛び出し、別のドラゴンに二丁拳銃を向けた。文字通り、8発の弾丸が竜の体をぶち抜く。断末魔の悲鳴にも臆さず、ヒイナは不敵に笑う。

「遠慮はいらないよ、ミカゲくん！」

「先輩、派手にやっちゃって！」

「私が背負うよ」

「——任せとけ！」

ユイが合図するようにミカゲに視線を向けて微笑んだ。彼女は即座にATK☆フォームを展開する。リヨウスケはアタックゲインを発動し、シラユキはマナフローターでサポートしてくれた。

不動居で力を貯めていたミカゲは、3人の援護を確認して領き返す。エグゾーストを発動し、刀を鞘に納めた。凄まじいマナが迸る。異様な力の増大に気づいたドラゴンたちが動きを止めた。

奴らが動きを止めたのは、ほんの一瞬。けれど、その一瞬さえあれば充分だ。ミカゲはニヤリと笑う。遠くから「うっわ、悪い笑みね」と苦笑したヒイナの声が聞こえたような気がした。

鞘から刀を引き抜き、一閃。

そうしてミカゲは刀を鞘に戻す。

鏢が鳴つたのと同時に、空気ごとドラゴンの群れを切り裂いた。サムライの秘奥義、天地絶ちである。その一閃は断末魔をも飲み込み、竜の群れはあつという間に花卉へ還る。それを確認した13班の面々は、得物を収めた。

「どいつもこいつも暇だなあ。なんで次々と沸いてくるかねえ」

崩れ落ちるように座り込み、ミカゲは深々とため息をついた。ドラゴンばかりがわんさか出現する「影の世界」であるが、エデンに出現したこの世界は特に凄かった。

1つのフロアに足を踏み入れれば、十数匹のドラゴンの群れがうじゃうじゃやって来る。獲物に狙いを定めた捕食者そのものだ。奴らは魂ごと命を喰らう生き物だったか。

「構造的に、もうすぐ最奥地だと思うよ。ここまで本当に長かった……」

「一瞬たりとも気は抜けないね。何が出てくるかわからないから、慎重に行こう。……そのためにも、身体の調子を万全にしておかなくちゃ」

ウインドウ画面を展開しながらマップを確認したりヨウスケは、疲れ切ったようにため息をつく。

ユイも真剣な面持ちのまま頷いた。そしてすぐ、柔らかに微笑む。

彼女の言葉を聞いた面々も頷いた。

この近場には泉が湧いていた。休憩するには丁度いいだろう。泉の周辺に腰を下ろした。

足元には、フロワロの花が咲いている。ミカゲたちが見慣れた赤／黒い花ではなく、淡い桃色の葬送花だ。この世界に咲き乱れるフロワロは、すべて桃色の花であった。

奥地へ行けば行くほど、葬送花はその数を増やしていく。最奥地はきっと、この桃色の花で覆い尽くされているだろう。容易にそれを予測できた。

体をすっかり休めたムラクモ13班たちは、ついに最奥へと踏み込んだ。予想通り、最奥地は桃色のフロワロによる花畑が広がっていた。

「――ようこそ、愛しきワラワが子たち。5000年前に朋友ニアラを退け、朋友フォーマルハウトを屠った、嘗ての魂」

上空から声が響いた。ミカゲたちは思わずそちらへ視線を向ける。

そこにいたのは、真竜というよりは大きな鳥と言えるような外見だった。ニアラのようなゴテゴテした毒々しさとも、フォーマルハウトのような不気味な神々しさとも違う。

一言で言い現すとするなら、美麗。淡い桃色の体躯に、バラの花を付けた尾がゆらゆらと揺れる。羽ばたく度に、大地を覆う葬送花の花弁が舞った。幻想的な光景である。

紫苑の瞳に浮かぶのは母性だ。幼子の成長を見守り、喜んでいように見える。だが、その母性の奥底には、家畜の末路を想像しているかのような残酷さが滲み出していた。

「ここは影世界。無限にトウトウと積み重なる、別の紡ぎにある世界。朋友ニアラを退け、朋友フォーマルハウトを屠った戦い……見ておったぞ」

強いて言うなら、奴は生産者。そして、奴が愛しい子と呼ぶニンゲンたちは、彼女の家畜にすぎない。

好意的な気配に騙されてはいけない。奴もまた、ニアラやフォーマルハウトの同類なのだ。

「つまり、おたくも奴らと同レベルってこと？」

「——はえ？」

ミカゲの突っ込みに、真竜はぴたりと言葉を止めた。こてんと首を傾げる姿は、母親というより幼子みtaiである。それをチャンスと見たミカゲは、即座に畳みかけた。

「根っこがDQNのくせに洒落た真似をしようとしてオードブルとかメインディッシュとか横文字言っちゃったり、腐りかけの食べ物を見ると徹底的に腐らせようと手を出したくなっちゃうタイプと友達なのか。……うわー、ないわー」

「前者なんて、散々家畜家畜言って何回も襲来して撃退された挙句、間違いか何も学ばないでやられただけの可哀想な奴だよなあ。オツムが足りないって言うかさ」

「後者なんて、自分が美味しいものを食べたいという誘惑に負けたせいで死んじゃったし。自分で自分の首締めちゃったら世話ないよねー」

「あれと朋友ということとは、思考回路も似たようなものなのかな？　だとしたらキミも、非常に残念なのだろう。……ああ、説明してもわからないのかな。ニアラとフォーマルハウトの朋友なものな。類は友を呼ぶと言うし……」

ミカゲの言葉を皮切りに、マサハル、ヒイナ、ヨツミが真竜を煽る。気のせいか、真竜のこめかみ周辺がひくついているように見えた。

真竜という生き物——ニアラやヘイズ系の性格をしている個体——は、煽りに弱い傾向がある。この真竜も似たようなものだろうか。

彼女は思案するように俯いた。どうやらこの真竜は、煽りに耐性があるらしい。怒るのではなく思案するあたり、天然気質に近いのかもしれないが。

幾何かの沈黙の後、彼女はゆっくり顔を上げた。

紫苑の瞳は目を瞬かせる。ミカゲは改めて、真竜に問うた。

「ねえ、おたくはニアラとフォーマルハウトの友達なの？」

「……前言撤回じゃ。あやつらはどちらかといえば、ペットみたいなものだ。正直、特にニアラは嫌いな部類に入る」

彼女はふんすと鼻を鳴らす。この真竜は、ニアラやヘイズ、フォーマルハウトと同レベル扱いされるのが嫌だったらしい。真竜同士が仲良しかと問われると、答えは一概に「是」ではないようだ。

「愛しきワラワの子が神はふりの力を有するのかわかっていたときから、ワラワはずっと見守ってきた。そうして、ワラワの子が真の意味で神はふりの力を得たとき……なんて喜ばしいのかと心が弾んだものだ。その成長に、ワラワは心を奪われたのじゃ。言うならば、これがワラワの愛……！」

でろっでろに甘い声。どこか恍惚とした口調で紡がれた真竜の言葉は、纏わりつくような響きを宿している。ミカゲの脳裏にヤンデレという言葉が浮かんだ。

どうやら他の面々も同じ気持ちだったようで、特にヒイナは堪えられなかったのだろう。ついぼろりと「超弩級のヤンデレだあ……天然記念物……」と呟いていた。

真竜はヤンデレの言葉を理解しているのかいないのか、はたまた興味がないのか、リアクションは一切なかった。熱の入った演説を続ける。

「死しても尚、その魂は衰えることがない。むしろ、より鋭く研ぎ澄ま

されている……成長は止まることはない。ああ、スバラシー！　なんたる愉悦!!」

「……で？　目的は？」

ミカゲは躊躇うことなく得物——天叢雲剣に手をかけた。他の面々も、いつでも戦いを始められるようにと身構える。得物に手をかけながら、真竜を見上げた。

奴の物言いからして、長々と演説を聞かせるためにミカゲたちを招いたのではないだろう。ミカゲの予想は的中したようで、真竜はミカゲに狙いを定めながら翼をはばたかせた。ぶわりと風が舞い上がり、殺気が膨れ上がった。

フロワロの花弁が散り、何もいない場所に人影が現れる。褐色の肌の少女を模したマモノと、白い肌の少女を模したマモノだ。褐色の肌の少女は青い剣を構え、白い肌の少女は赤い剣を構える。

桃色の麗しき竜——残酷なる慈母は、戦いの始まりを告げた。

「さあ、たわむれじゃ。この母御に、そなたらの力を見せておくれ……!!」

「——本気で行く、サクヒメ」

「——チルヒメ、最重要案件」

残酷なる慈母の言葉と共に、少女のマモノ2体が飛び出してきた。どうやらこの真竜は取り巻きもいるようだ。

褐色の肌の少女を模したマモノはサクヒメ、白い肌の少女を模したマモノはチルヒメというらしい。

少女たちは互いに顔を見合わせると、息の合った連携で怒涛の連続攻撃を叩きこんできた。刃が派手に乱れ飛ぶ。

「怯えちゃダメー！」

勿論、ムラクモ13班員は即座に防御態勢を整えた。間髪入れず、

ユイがDEF☆フォームの号令をかける。仲間たちはそれに従い、防御態勢を取った。

舞うように振るわれた刃が体中を切り刻む。しかし、大した痛手ではない。それは、ユイが与えた守りの恩恵だけではなかった。

「ちよーつとビビっちゃったじゃーん、もー」

「勘弁してくれよ。……ま、避けるまでもないがな」

リヨウスケとマサハルが、サクヒメとチルヒメの攻撃を予測していたためである。前者はデフェンスゲイン、後者はパリングシールドで守りを固めてくれた。

その脇で、ヒイナがハイディングで姿を消した。ヨツミはアサシンアイズを使い、チルヒメとサクヒメの急所を見極める。シラユキはデコイミラーを張った。

仕込みをしていたのはミカゲも同じで、刃下のリアクトを発動させて反撃の機会を伺う。チルヒメとサクヒメもまた、更なる追撃のため動き出した。

チルヒメの斬撃をミカゲが、サクヒメの斬撃をマサハルが受け止める。ミカゲはチルヒメの攻撃をいなしながら、その勢いで刀を鞘に納めた。収刀の紡ぎである。

対して、マサハルは即座にカウンターを放った。彼の一撃はサクヒメのみぞおちに叩きこまれ、サクヒメが苦しそうに呻く。シラユキはコンセントレイトでマナを貯め始めた。

「割り込み失礼！」

次の瞬間、ハイディングで潜んでいたヒイナが、チルヒメとサクヒメに奇襲を仕掛けた。ブッシュトラップを使ったらしい。不意打ちを喰らったサクヒメとチルヒメが体勢を崩す。

「攻めて叩いて一気に倒す！」

「自由って素敵！」

リヨウスケがアタックゲインで攻撃力を上げる。その援護を受けたユイが、メガホンを片手に熱唱した。

発生した音波が取り巻きごと残酷なる慈母へ襲い掛かる。その脇を駆け抜けたのはヨツミだった。

「詰めるぞ。——私の血肉となれ！」

ヨツミのフルムーンヴァンプがチルヒメに叩きこまれた。彼女の傷とヨツミの得物から滴り落ちた血をマナへと変換し、仲間たちの傷を癒す。

勿論、これらの攻撃は奴らを揺るがせるには至らなかった。サクヒメとチルヒメは武器を構え直す。ミカゲも不動居を取り、攻撃の機会を伺う。

彼女たちはまだやる気だ。戦意は折れていない。——しかし。

(……何やってるんだ？ あの実竜……)

戦う気満々の取り巻きたちに対し、ミカゲたちに喧嘩を売ってきたはずの実竜は、一切動きがない。

それどころか、ぼけっと呆けているように見える。取り巻きたちにすべてを任せ、奴は一切何もしなかった。

たわむれようと言ってきた本人が何もしない——こんなバカみたいなことが許されるものか。

……正直なところ、腹立たしい。だって、健気に戦う取り巻きが可哀想すぎるではないか。

ぼけっと呆ける残酷親なる慈母分を守るために、チルヒメとサクヒメは必死に戦っている。

そんな彼女たちを、残酷なる慈母は興味なさげに眺めているのだ。苛立ちが膨れ上がるのは当然のことだろう。



「さあ、もつと！ もつと、そなたらの力を見せておくれ……!!」

さあ来いと言わんばかりに胸を張った残酷なる慈母は、相変わらずミカゲを見つめながらチルヒメとサクヒメを最前列へ押しやっている。自身は最後尾で、のんびんだらりと戦場を観察していた。サクヒメがチルヒメの傷を癒しつつ、相方のことを気にしているような素振りを見せる。チルヒメもまた、サクヒメのことを慮るように頷き返した。

「……………」

油断を崩さぬまま、ミカゲはちらりと仲間たちへ視線を向けた。この時点でもう、全員が「残酷なる慈母が異常である」ことに気づいている。残酷なる慈母に対しての苛立ちを募らせている。怒りが許容量を突破した。

ぱちん、と、何か爆ぜるような音が聞こえた。この場一帯に、恐ろしいまでものマナが渦巻く。ミカゲ以外の全員がエグゾーストを発現したためだ。チルヒメとサクヒメがびくりと身を竦ませる。対して、残酷なる慈母は嬉しそうに目を細めた。

ミカゲも鞆からドラゴン幼体を引っ張り出し、それを得物で叩き割る。ミカゲの奥底からも、何か爆ぜるような感覚が湧き上がった。その衝動に従い、ミカゲもまたエグゾーストを発現させる。ガタガタ震えはじめた取り巻き、恍惚そうに羽ばたく真竜の対比が眩しい。

どうやら、奴の性癖はどSでドMらしい。いたぶるのもいたぶられるのも大好きという、とんでもない変態だった。

しかも、ものぐさだから更に苛立ちが募るといふか、救いがないといふか……正直、印象はもう散々である。

だから。

「いい加減にしろよな！！」

「あんな、それでも上司イ!？」

嘗て経営者であった東雲兄妹の奥義発動を皮切りに。

ムラクモ13班の攻撃が、残酷なる慈母へと叩きこまれた。

\*\*\*

「はああ……これ程までとは……! 愛しくて愛しくて、滅茶苦茶に引き裂いてしまいたい!!」

麗しき体軀を悦びに振るわせて、残酷なる慈母は恍惚とした声を上げた。ミカゲたちの予測通り、彼女はとんでもないヤンデレだったらしい。取り巻きであるチルヒメとサクヒメは「私は面倒見きれません」と言わんばかりに視線を逸らす。気持ちは分からなくはない。

“人の話を聞かない系のヤンデレ”には、既に2名ほど知り合いがいたためだ。最も、その双璧を成す片方——アイテルの行方を探して、ムラクモ13班たちは“影の世界”に足を踏み入れたのであるが。思えば、アイテルに関する手がかりは見つからなかったように思う。

それにこの真竜、何かがおかしい。嘗てニアラやフォーマルハウトと戦ったときのような、明確な手ごたえというものを感じないのだ。同時に、第1形態のフォーマルハウトのように、手加減している節も見受けられる。取り巻きを戦わせている時点で、ミカゲたちを侮っているのは見え見えだった。

「ああ、やはりそなたは、ワラワが見出した愛しい子じゃ!」

真竜のねっとりとした眼差しは、ぶれることなくミカゲを射抜いている。

彼女にとっての賛辞でも、ミカゲにとっては迷惑極まりない。

「目覚めを迎え、羽ばたくべき箱舟の資格を有する者……母として、これ程悦ばしいことがあるのか!!」

「えー、嫌<sup>イヤ</sup>だよ。オレ、こんな母さん嫌<sup>イヤ</sup>なんだけど」

残酷なる慈母のご高説を遮るように、リヨウスケが顔をしかめた。ミカゲもうんうん頷き同意する。

「だな。俺も、高飛車で高慢ちきな怠惰系ニートババアはお断りだ。こんな重すぎるモン、愛とは言えないね」

「ミカゲくんの言う通り。私たちは、貴女のそれを愛とは認められないよ。受け取り手が愛と実感し、認識できなければ、それはただの毒でしかないもの」

ミカゲとユイの言葉を引き金にしたのだろう。

13班の面々も頷き合い、次々とヤジを飛ばす。

「どうせならさあ、ボンキュッボンで脱がしがいがあって、危険な香り漂う、知的なおねえさま系の方が好みかなー。あ、眼鏡もイイね。丁度こんな感じの」

「おい馬鹿ヒイナ、その女社長モノR―18同人誌をしまえ。……つてかさ。人類の母親名乗るなら、せめて人間と認識できるような外見になって出直して来いよ」

「部下に労働を強いて自分だけ楽をしようとする態度は感心しないな。部下を守るために体を張るのが、上官としての役目ではないのかね? ましてやキミは母を自称しているのだから、子どものために体を張るものだと思うのだが……ああ、真竜だからそんなことないのか」

「こんな口調のお母さんは嫌だな……。もうちよつと、親しみやすい方が……」

ヒイナがR―18同人誌を残酷なる慈母に指し示し、妹の暴挙に

突っ込みを入れつつマサハルが至極当然のことを指摘する。ヨツミがぶつぶつ考察を述べ、シラユキは彼の背後に引っ込みながら、真竜へ残念そうな眼差しを向けていた。

しかしながら、不平不満を爆発させた子どもたちの言葉に対し、残酷なる慈母は一切反応しなかった。その代わりに、取り巻きのチルヒメとサクヒメが何か言いたそうに真竜を見上げる。ハラハラしているように見えたのは気のせいだろうか。

家畜どもの主張なんて、気にする価値もないのだろう。桃色の葬送花の中に身を沈めていた体を起こし、羽をはばたかせた。風にあおられて桃色の花卉が舞う。何とも幻想的な光景だ。主が動いたのを察し、チルヒメとサクヒメは真竜の元へ侍る。

そうして、麗しき真竜／残酷なる慈母は、威風堂々と言葉を紡いだ。

「……………いずれ、ワラワも真軀でこの星を訪れようぞ。……………そのときを、心待ちにしておれ……………」

(……………あれ？　なんか、微妙に声が震えてる——？)

ミカゲが違和感を感じて問いかける前に、慈母とその取り巻きたちの姿が風花に飲まれて消えてしまった。桃色の葬送花が生い茂る丘だけが延々と広がっている。

自分たちの予想した通り、あの真竜は本気ではなかった。真軀という言葉聞く限り、「影の世界」に現れた残酷なる慈母は、実体ではなかったのだろう。

しかも、奴は「本気の手を引つ提げて、この地球へ来襲する」と予告までしてきた。それがいつになるのか、ミカゲたちが掴む手段はない。

残酷なる慈母はミカゲたちをご所望らしいが、既に終わってしまった魂にできることなど殆ど無に等しかった。当たり前前のことが、酷く歯がゆい。

『13班……………私たちが見出し、タケハヤが守り抜いた人類の希望……………』

どうしたものかと思案するムラクモ13班の目の前で、青い光が瞬く。

ぼんやりとしていた燐光が、徐々に人の輪郭を取った。そして——青い髪の女性が姿を現す。

「アイテル！ 無事だったんだね!？」

「今までどこに行ってたんだよ。心配したんだぞ？」

ユイとミカゲの問いに、アイテルは答えることはない。

「貴方たちの役目は、まだ終わっていないわ。ミカゲ」

ぼんやりと揺らぐ緋色の瞳が、ミカゲの姿を映し出す。

「超えよ、時空。断てよ、宿命」

アイテルの言葉に呼応するかのようになり、桃色の葬送花が舞い上がる。気のせいかな、フロワロの花弁が青い光を帯びているように見えた。

天を覆う宇宙が瞬きはじめた。星が弧を描き、ゆっくりと回り始める。世界の巡りを示すように、新たな物語の始まりを祝うように。

世界を揺るがすほどの異変に、ミカゲは思わずアイテルを見た。彼女の気配はゆらゆらと揺蕩い、希薄になっていく。姿が薄らぼんやりとしか見えない。

同時に、自分たちが立っていた大地も希薄になり始める。

足元がおぼつかなくなっただけだと思つた刹那、浮遊感が纏わりついた。

それも一瞬のこと。浮遊感の次には、重力に従うかのように体が落下していく!!

「でえええええええええええっ!？」

「う、うわああああああああああ!!」

「なんとオオオオオオ!!」

「嘘でしょおおお!!」

「ええええええええええええええええー!!」

「きやあああああああああつ!!」

マサハルが、リヨウスケが、ヨツミが、ヒイナが、シラユキが、ユイが悲鳴を上げる。

「おい待てアイテル! おいってば!!」

アイテルの気配をつかもうとして、ミカゲは慌てて手を伸ばす。その手はアイテルに触れることはなく、彼女はぼんやりとこちらを見下ろすだけだった。

背中を駆け抜けた悪寒を何と言えればいいのだろう。アイテルをあのままにしてはいけない——言葉にならぬ確証があつた。タケハヤとの約束が脳裏を駆ける。

落ちていくだけでなく、世界がぐるぐる回るような感覚に見舞われる。視界は黒洞々とした闇が広がり、耳元を風が掠める音だけが響いていた。

いつの間にか、仲間たちの悲鳴が聞こえない。ミカゲは慌てて仲間たちの名前を呼んだが、自分の声すら聞こえない有様だった。

一体全体、何が起こっているというのだろう。視界の端に青い光が瞬く。希薄な気配からして、アイテルのものだ。

「——新たなる『狩る者』たちと共に、すべての竜を狩り尽くせ」

次の瞬間、暗いトンネルを抜け出したかのように視界が開けた。

深い闇とは打って変わって、目が覚めるくらいに眩しい空が視界を埋め尽くす。

眼前には雲海が広がり、その近辺にはドラゴンの群れが悠々と飛ん

でいた。

「なんだコレ……!?!」

いや、それ以前にここはどこだ。状況を確認しようとするよりも先に、「狩る者」の本能が訴える。「奴らを狩り尽くさねばならない」と。

視界の端を悠々と横切ったのは、翼を持つ竜だ。一際目を惹くのは、白い体躯に、天使を思わせるような神聖さを帯びた個体。エデンにいたとき、エメルがまとめたドラゴン関連のデータベースを見たことがある。あれにはドラゴアンゼラと記されていたか。

だが、あちらで見たことがあるドラゴアンゼラと違って、体の大きさが倍近い差がある。あの体長は帝竜クラスだ。翼の数も2枚ではなく、3倍の6枚である。雰囲気もへったくれもない意見だが、奴の体から発せられる後光がうっとおしくて仕方がない。

2枚羽が下級天使を指しているなら、6枚羽を有するあの帝竜は、さしずめ天使階級上級第一位階——熾<sup>セラフ</sup>天使と言えよう。熾天使は神の愛を現すと言われるが、あのドラゴンが与える愛は碌でもないことなど明らかだ。

『ミカゲくん!』

「ッ、ユイ!?!」

背後から聞こえてきた声に振り返れば、半透明に透けたユイがこちらへ手を振りながら落下している。いや、ユイだけではない。ヒイナ、マサハル、リヨウスケ、ヨツミ、シラユキも、姿が半透明だ。

13班の中で唯一、はつきりと存在を保っているのはミカゲだけらしい。先程出会ったアイテル同様、6人の存在は希薄である。しかし、仲間たちは倒すべき竜を見据えていた。戦闘態勢は万全だ。

『研究班のセオリーで奴に名を与えるとすれば、熾天使のヘブライ

語から拝借して“トリスアギオン”だな』

『うわ、なんか物々しい名前だなー。……まあ、どんな奴が出てこようと、夢も希望も繋いでみせるけどね!』

顎に手を当てて頷くヨツミに、リヨウスケが表情を歪める。しかしそれも一瞬のことで、リヨウスケはにかつと満面の笑みを浮かべた。リヨウスケの言葉通り、相手がいかに物々しい名を背負っているように、負けるつもりなど微塵もない。

落下しながら武器を構えた人間を視認したのか、帝竜トリスアギオンがゆったりと首を動かす。6枚の羽をはばたかせ、高らかに嘶いた。教会のパイプオルガンが鳴り響くような雄たけびだ。そんなところまで神々しくならなくていいだろう。

『しつつかし、落ちながら戦う羽目になるたあ思わなかったぜ』

『エデンのハントマンにできたんだから、あたしたちにもできる!』

『出来るかできないかの問題じゃない。戦って勝つ以外、助からないと思う……!』

マサハル、ヒイナ、シラユキが、軽口を叩きながらもトリスアギオンとの距離を詰める。ヨツミとミカゲも攻撃態勢に入った。背後でユイとリヨウスケが援護態勢に入る。

人間たちのあがきを眺めるかのような佇まいで、トリスアギオンはミカゲたちを見下ろしていた。審判を下す神のようだ。勿論、奴の下す審判を受け入れるつもりはない。

タケハヤから譲り受けたミカゲの得物——天叢雲剣が、トリスアギオンの後光を弾くように煌めく。神に抗う反逆者の如く、嘗ての英雄たちは得物を振るった。



## 気苦労は億千万

少年は恋をした。人生で初めて恋をした。人生で初めて、恋愛的な意味で誰かを好きになったのだ。

思い立ったら即行動。〃本能、欲望、己の価値観には素直に従え〃

——尊敬し敬愛する人の教えに従って、少年は全力で駆けだした。

件の相手はセブンスエンカウント入り口に居る。周囲の人間を跳ね飛ばす勢いで、少年はその相手の前に立った。

「お客様、チケットはお持ち——」

相手は何かを言い終える前に、少年はその人物の手を掴む。

こちらを見上げた瞳が驚きに揺れたように見えたのは、きつと気のせいではない。

「お客様？」と、件の人物は固い声色で小首を傾げる。ああ、可愛い。魅力的だ。

込み上げてくる感情そのままに、少年は愛を叫んだ。

「ナガミミ様、俺と結婚してください!!」

この出来事を相棒に報告したら、乾いた笑いを浮かべて天を仰がれた。

その理由を、少年は一切理解できないでいる。

\*\*\*

「ナガミミ様、俺と結婚してください」

「ナガミミは仕事中心ミミ。帰ってくださいミミ」

今日も、少年の想い人は愛おしい。可愛い顔して冷淡な態度という

ギャップは最高である。相棒にそのことを語って聞かせたら、どうしてかその場に崩れ落ちて咽び泣かれた。喜んでくれたのかと思っただが、その割には悲壮感に溢れていたように思う。

まあ、そんなことはどうでもいい。今日も今日とて、ナガミミを口説くので忙しいのだ。相棒からの頼まれごとがあつたけれど、ナガミミを口説くことの方が優先順位が高い。可愛いウサギ型マスコットに、少年はアプローチを繰り返す。

「素っ気ないナガミミ様も好きです。結婚してください」

「ありがとうございます。でも、ナガミミは生涯独身なので帰ってください  
ミミ」

「業務用の笑顔も、蔑むような絶対零度の目つきも最高です。結婚してください」

「気持ち悪いミミ。帰れくださいミミ」

「あなたのすべてが愛おしくて仕方ないです。結婚してください」

「……いい加減にしろよコンチクショウ。頼むから帰れ。帰れっつてんだろ。冷やかしなら要らねえよ」

ついに堪忍袋の緒が切れたのか、ナガミミはドスの効いた声で囁いた。気のせいかな、黒いオーラが滲んでいるようにも見える。

しかし、少年にとってそれは威嚇にすらなりはしない。ただのご褒美である。少年を悦ばせるもの以外になり得なかった。

気分が高揚しすぎて、自分が今どんな表情を浮かべているのか見当がつかない。多分、恍惚としていることは確かだ。

「その罵倒、ゾクゾクします。もっと罵倒してください」

「ひッ!？」

「——そして、俺と結婚してください」

ナガミミの手を取り、少年は真剣な眼差しでマスコットを見つめる。

この想いには嘘偽りもなければ、伊達や酔狂で言っているものでもない。

本気である。本気であることを伝えたくて、少年はセブンスエンカウントに通い詰めているのだ。

通い始めて1ヶ月。ナガミミは相変わらず冷たい態度である。でもそれがいい。これから色々な顔を見れると考えれば、だ。

「……ねえ、ナガミミ様。どうしたら、俺が本気だって分かってくれるの？」

先程のお礼も兼ねて、少年は声のトーンを落とした。ナガミミの耳元で、密やかに囁く。やや掠れた自分の声に、ナガミミがびくりと身を竦ませた。

片方の手を離して、艶めかしい手つきでウサギの耳を撫でた。肌触りはとてもふかふかしていて、柔らかい。その光沢はまるでビロードのようだ。

「正直、今すぐ独り占めしたいくらいなんだ。もう、限界だよ……」  
「——あ」

少年はナガミミを抱きこむ。大切に、大切に、溢れんばかりの愛を持って。ウサギのぬいぐるみは、抵抗する間もなく少年の腕に収まった。

ナガミミが抵抗する間を許さず、少年は大きく息を吸い込む。マスコットからは、森林を思わせるような爽やかな香りが漂った。

暫し硬直していたナガミミだが、抱きこまれていると理解すると、慌ててジタバタし始めた。可愛いものである。

気のせいか、金髪ツインテールの美少女が、顔を真っ赤にして涙目になって抵抗しているように見えてきた。少年はつい、にへらと笑う。

本当はこのままトンスラしたい。しかし、これ以上コトに及ぼうと

すれば、即座に社員の双子が得物片手に襲い掛かってくるだろう。——いや、来た。

少年は悪戯つぽく微笑み、ナガミミを開放した。その勢いを崩さず、自分が持つてきていた得物——刀(刀身は鞘に納めたまま)で、乱れ飛んで来た一撃を受け止める。

「主任からの重要案件！ 不審者撃退だよ、チカ！」  
「また、貴方ですか……！」

木刀片手に飛び出してきたのは、ノーデンスの社員をしている双子の少女——チカとリツカだ。特にチカの声には、怨嗟の色が滲み出ている。

「……貴方のせいで、チカは、もう4日も眠っていないのです……。チカの安眠のため、得物の錆になって欲しいのです……！」  
「うっわ、それは怖いなあ……！」

少年はチカの気迫に引き気味になりながらも、双子の攻撃をいなす。木刀とはいえ、その一撃はずっしりと重い。

下手すれば、剣を教えにくれた師匠や銃を教えにくれた師匠、知り合いや相棒の「全力の一撃」より上かも知れない。

分の悪さを知っているから、今日はこれで撤退するしかないだろう。本当はもう少しナガミミと話していたかった。名残惜しいが、命あつての物種である。

「危ない危ない。逃げるが勝ちってね！ ——じゃ、また来るよナガミミ様！ 次はもつとお話しようねっ!!」  
「……も、もう来ないでくださいミミイイイ!!」

少年は即座に離脱する。ナガミミの照れ隠しをBGMに、少年は駆け出した。双子は少年の後を追うことより、ナガミミの安全確認に重

点を置いたようだ。ぐったりしたウサギのマスコットを介抱する少女たちの絵面は一部のマニアたちから好評のようで、何名かが写真を取ろうとしていた。

勿論、双子たちの無許可撮影はNGである。撮影されていることに気づいたチカとリツカは即座に制圧行動に出た。マニアたちの阿鼻叫喚を尻目にしつつ、少年はノーデンスの広場を後にする。次はどんな話をしようかと思案しながら、少年は微笑んだ。明日もまた、ナガミミと話ができればいい。

マスコットが喜ぶような食べ物は何だろうと、少年は割と真面目に思案していた。

少年がセブンスエンカウント出禁を喰らったのは、その翌日のことである。

勿論、その程度で諦める程度の愛ではない。

何度迎撃されようが、少年はセブンスエンカウントに通い続けた。

\*\*\*

少年は、合法的且つ日常的に想い人と一緒に居られる方法の算段を確認していた。「頼んでいた例の件を何とかしてくれ」と相棒から頭を下げられたという理由もある。

後者も重要案件だったが、ナガミミを口説くのが忙しすぎて保留にしていた。流石に保留期間が長すぎたか、と、少年は反省した。勿論、アテがないわけではない。

少年の手の中には一枚のチラシが握られていた。ノーデンス・エンタープライゼスの契約社員募集である。業務内容はセブンスエンカウントのメンテナンスおよびデバッカーだ。

主な仕事はバグチェックであり、マモノ退治と同じ方式でバグを駆逐していくらしい。機械の知識だけではなく、戦闘技能も求められる。

希望者は多いものの、書類審査・面接・実技試験を突破出来る人間

は殆どいないと言われていた。

実技審査はセブンスエンカウントのスコア結果が関わってくる、とも。

「セブンスエンカウントのハイスコアラーが、ノーデンス社員としてスカウトされる」っていう噂も、この募集広告が理由の1つなんだよなあ」

少年はおにぎりを頬張りつつ、チラシを眺める。

少年は一度もセブンスエンカウントをプレイしたことはない。だが、己の実力を充分熟知している。旧日本政府における才能分類、S級能力者——その中でも、少年は3つの能力適性を有していた。……どれもS級の最低値だが。

そりゃあ、80年前に活躍したムラクモ13班より劣るし、何よりマルチタスク・オール全能力S級能力者の渡来ミカゲには遠く及ばない。けれど、彼ら亡き今、自分がそれを成させばならぬのだという誇りはある。

「下準備をすっかりやってよかった。偽造戸籍のおかげで身分確認もスムーズにいったって書類審査は合格したし、面接ではナガミミ様への愛を3時間ぶっ続けて語ったら社長さんが乱入して来て、直々に『面接合格』と言い渡してくれたし。あとは今日の実技審査さえ突破すれば、相棒の案件もスムーズに進むし、大手を振ってナガミミ様と一緒に過ごすことができる！　なんだ、これはただのパラダイスか!!」

想像したら、頭の中がお花畑になってきた。今すぐ全力疾走したい衝動に駆られたが、食べた直後の運動は胃の消化に悪い。

そして何より、実技試験に挑む前に体力を消費するのは愚策と言えよう。実技試験は長丁場になると聞いたためだ。

おにぎりを飲み込み、ペットボトルの麦茶でそれを流し込む。半ば無理矢理だったため、喉元の奥につっかかるような感覚に見舞われた。

しかし、それも一瞬のことだ。喉元奥のつかえはあつという間になくなる。少年は時計を確認した。

実技試験開始まで、あと15分。愛しのナガミミと話をする時間はないそうだ。

社長から直々に手渡された『特別入場許可証』を片手に、少年は意気揚々とセブンスエンカウントへ踏み込んだ。

「お客様は出禁になってますミミ。今すぐこの場からお引き取りくださいミミ。でないと社員を呼びますミミ」

勿論、少年の姿を確認したナガミミは即座に警戒態勢に入った。心なしか、黒いオーラが吹きだしているように見える。そんなウサギのマスコットも愛おしい。

何も知らないナガミミは、助けを求めように入り口に視線を向ける。社長から実技試験監督に任命された社員——件の双子・チカとリツカだ。

主任から助けを求められた双子は、何とも言えなさそうな顔で互いの顔を見合わせる。ひそひそ何かを話していたが、2人はナガミミへ向き直って首を振った。悲壮感溢れる表情なのは何故だろう。少年には分からない。とりあえず、『特別入場許可証』と募集チラシを示す。

「俺、今から実技審査受けるんだ。合格すれば、いつだってナガミミ様と会えるよ！」

「えっ? ……えっ」

少年が提示したものを、ナガミミは呆けたように見つめた。幾何か遅れて、その許可証が何を意味しているのかを理解する。途端に顔色が青くなった。

許可証を確認しては、「え」だの「あ」だの「嘘だろ」だのとブツブツと呟き続ける。そんな主任を見た双子の社員は、更に悲壮な顔をし

て天を仰いだ。

少年はニコニコ笑いながら、ナガミミをぎゅつと抱きしめる。相変わらずふかふかしていて、ピロイドみたいな肌触りだ。森林のような爽やかな香りも健在である。

ナガミミが悲鳴を上げて暴れるよりも先に、少年は抱擁を解いた。そうして、満面の笑みを浮かべて手を振った。

「じゃ、行ってくるよナガミミ様！ 期待して待つててね！」

少年はセブンスエンカウントへと踏み込む。施設内は遊びに来た人々やデバツカーの募集の実技試験を受ける人々でごった返していた。自分のスコアや他人のスコアに一喜一憂する声がひっきりなしに響いている。

時間ぴったりやって来た双子が、デバツカー試験の開始を告げた。番号が呼ばれ、試験に挑む人々が次々とログインしていく。

そうして最後に、少年の番号が呼ばれた。少年は笑みを浮かべつつ、得物片手にセブンスエンカウントへログインする。

「——さて、負けないよ」

試験開始の合図と共に、少年は戦場へと躍り出た。



「何、この数値……！」

少年の叩きだした数値を目の当たりにしたジュリエッタが、モニター画面に釘付けになっている。アリーも一緒になって、食い入るように画面を見つめていた。

件の少年が出した数値は、旧日本政府の分類で『S級』と称される人々が出した数値のラインだ。勿論、これはスコアにも反映される。



デバツカー試験を受けている人々の中で、彼だけが圧倒的数値で独走していた。「嘘でしょう？」と、ジュリエッタは戦慄する。

「あのコ、面接でナガミミへの愛を3時間語り続けた狂信者よ？ 目から光を無くす勢いで語り続けた程よ？ 危うくアタシも洗脳されそうになったわ」

「そうだねー。白目剥いて、カタコトで『ナガミミサマバンザイ』って延々と唱えてたのを見たときは、ジュリエッタが正気に戻るかどうか心配だったしー」

「あのときはマジで危なかった。……そんなコが、まさか……」

「でも、データはしっかり示してる。……彼は、アリーたちが探していた『狩る者』だよ」

少し方向性は違うかもしれないけど、と付け加えて、アリーは画面を見つめる。少年は何の苦もなくマモノたちを撃破していった。

終いには、「セブンスエンカウントも大したことないかも」と、やや大きい声で呟く。まるで、誰かが『見ている』ことを想定しているかのような。

そんなことを言われれば、黙っていられないのがジュリエッタである。彼は挑戦的に笑いながら、セーフティモードを解除した。

少年は何か気づいたように周囲を見回したが、不敵な笑みは崩れなかった。

リミッターが解除されて出てきた特別性のマモノを、少年はあつという間に撃破していく。幼い風貌とは裏腹に、彼は歴戦を駆け抜けた『戦いのプロ』だ。

彼の太刀筋や佇まいから、アリーは懐かしい面影を見出した。自分が見守ってきたいとし子たちの系譜を、件の少年は受け継いでいる。

「Sランク最低値でこの程度なら、3つめのキイの『核』になり得るコは、どれ程の数字を叩きだすのかしら……」

「セーフティモードだと測定不能になると思うよ☆ S級能力者訓練

モードなら計測できるレベルになるかな？」

「考えただけで気が遠くなるわね……」

あまりの数値に、ジュリエッタはため息のような吐息をこぼした。アリーは満面の笑みで断言する。

その数値が、いつか現実の結果として示される日が来たら——アリーは思わず口元を緩ませた。

考えるだけでゾクゾクする。アリーにとって、成長とは愉悦だからだ。

「ボス……？」

「んー？ どうしたの、ジュリエッタ」

「……驚いたのよ。アンタが開眼するの、珍しいから。特に、今回の件では開眼しっぱなしじゃない」

「面接のときとか」と言うジュリエッタの指摘に、アリーは思わず目を細めた。「そうだねー☆」なんて間延びしながら、画面を食い入るよう見つめる。

予期していない形ではあったが、自分たちが探していた「狩る者」を1人手に入れたのだ。嬉しい収穫である。……やはり、ここに来てよかった。

嘗て竜を屠った叢雲の生まれた地。人類の中で、唯一制竜権を有した大地——いとし子の系譜が存在するであろう、この島国／日本に。

エネミーがはじけ飛ぶ音が響いた。少年に差し向けた敵はリトルドラグ。彼は何の苦もなくリトルドラグを倒し、得物を鞘に納めていた。

スコアは文句なしのS級。勿論、文句なしの採用だ。ジュリエッタにその旨を告げれば、何とも言い難そうな表情を浮かべた。

「ジュリエッター？ まず1人目を見つけたんだから、計画の段階が進んだってコトだよー？ 喜ばないのー？」

「……そうね。ある一点にさえ目を瞑れば、順調な滑り出しだと言えるわね……」

「ナガミミ……可哀想に……」と呟いたジュリエツタは両手で顔を覆った。ぐず、と、鼻が鳴るような音がする。表情は見得ないが、悲痛な感情が漂っていた。

アリーはゆるりと微笑みながら、少年の姿を見つめる。ナガミミという尊い犠牲を払えば計画が進むのだから、随分と安いものだろう。計画を頓挫させるわけにはいかない。

何が何でも、Code：VFDは成功させなくてはならないのだ。それが、アリーがいとし子たちに与える福音。……そうして、いとし子たちがそれを乗り越えた暁には――。

アリーは胸の中央に手を当てた。丁度、心臓の位置。

命の鼓動は刻まれている。規則正しく、途切れることなく。

いつか、母が子に支払うべきものだ。子のために差し出すもの。

『私たちは、貴女のそれを愛とは認められないよ。受け取り手が愛と実感し、認識できなければ、それはただの毒でしかないもの』

『部下に労働を強いて自分だけ楽をしようとする態度は感心しないな。部下を守るために体を張るのが、上官としての役目ではないのかね？ ましてやキミは母を自称しているのだから、子どものために体を張るものだと思うのだが……ああ、真竜だからそんなことないか』

遠い紡ぎの世界で、いとし子に言われた言葉が脳裏を駆けた。

彼らが今、アリーが成そうとしていることを知ったら、何と言うだろう。

『えー、嫌だよ。オレ、こんな母さん嫌なんだけど』

『俺も、高飛車で高慢ちきな怠惰系ニートババアはお断りだ。こんな重すぎるモン、愛とは言えないね』

『どうせならさあ、ボンキュッボンで脱がしがいがあって、危険な香り漂う、知的なおねえさま系の方が好みかなー。あ、眼鏡もイイね。丁度こんな感じの』

『おい馬鹿、その女社長モノR-18同人誌をしまえ。……ってかき。人類の母親名乗るなら、せめて人間と認識できるような外見になつて出直して来いよ』

『こんな口調のお母さんは嫌だな……。もうちよつと、親しみやすい方が……』

今のアリーの姿を見たら、どう思うだろう。あの子の自分とは大きく変わったのだ。きつと、驚くに違いない。

彼らが——あるいは、“核”となり得るべき存在の“狩る者”がアリーを見たら、アリーのことを知ったら、どんな反応をするのだろうか。

「それは愛ではない」と、冷たく鋭い眼差しでこちらを見上げるのだろうか。それとも、強い意志を宿しながらも、粛々と運命を受け入れるのだろうか。

いとし子たちがそれを認めなくても、それはアリーの愛であり、福音であり、献身である。それを成し遂げるためなら、アリーはすべてを投げうつつもりだ。

(たとえば、子どもから『愛ではない』と断じられ、憎まれ、否定されても……親は、全身全霊を懸けて愛を注ぐんだよ。——だって、子どもは親にとって“すべて”だから)

胸の奥底に湧き上がった痛みには見ないふりをして、アリーは微笑む。

子が親に愛されたいと願うことが当然ならば——ああ、そんなことを考えるなんてどうかしている。

「——さあ、“狩る者”を迎えに行かなくちゃ☆」

椅子から立ち上がった部屋の外へ向かったアリーに続いて、ジュリエツタが慌ただしく立ち上がる。彼はナガミミに「少年がS級能力者であり、探していた『狩る者』の1人である」ことを伝えた。ナガミミは呆氣にとられたようだ。返答がない。

少年をスカウトする旨の話をした途端、通信機から切羽詰った悲鳴が響く。『おい正気か!? あんな変態を本当にスカウトすんのか!? やめろ! アレだけは、あのケダモノだけは勘弁してくれえええ!!』と、ナガミミの声が聞こえる。

それらを、アリーは一切無視した。Code:VFD成就に必要な犠牲である。

意気揚々とアリーがセブンスエンカウントに乗り込んだのと、少年がログアウトしてきたのは同時だった。

彼は満面の笑みを浮かべてナガミミの元へ駆け寄ろうとし、アリーの存在に気づいて足を止める。

懐かしいとし子の面影を噛みしめながら、アリーは人懐っこい笑みを浮かべて、少年に声をかけた。

「ドモドモ☆ ノーデンス社の社長、アリーだよー☆ ……ねえキミ、ウチで働かない?」

\*\*\*

「なんでコイツを雇った!? 言え、言うんだ! 答えろア  
リイイイイ!!」

「わーい! ナガミミ様、今日からヨロシク! ——ということで、今  
すぐ俺のものになつてよ」

「う、うわあああああああああああ!?! やめろケダモ  
ノオオオオオオ! 帰れ、帰ってくれエエエエエエエ!!」

「……その血の宿命<sup>さだめ</sup>、か。受け継がれたのは、資質だけじゃあないんだ

ね……………」

「じゃ、社長が……………」

「開眼している……………」

「ボスが…………ボスが完全にドン引きしてる……………！ あのコは相当危ないわ……………!!」

ノーデンス社が賑やかになったことは、言うまでもない。



ブラスタージェイブンという有明のヒーローをご存知だろうか。元々は30年前、東雲財閥の関連企業が作ったゲーム『スーパースト』の主人公だった。体に搭載された様々な武装を駆使して戦う。正義の味方”。嘗てのムラクモ13班を思わせるような存在である。

後に、『スーパースト』はOVAおよび書籍化された。ゲーム版『スーパースト』とは違い、OVAおよび書籍版『スーパースト』にはブラスタージェイブンの相棒としてブラスターキッズ——<sup>マセブンイチ</sup>真瀬文一” という少年が登場し、主人公のレイブンをサポートした。ゲームとOVAおよび書籍版。どちらが人気だったかと言うと、ブレイチ少年とブラスタージェイブンの凸凹コンビが華麗(?)に事件を解決し、人命救助やマモノ／竜退治を行うOVAおよび書籍版の方だ。発売当時はどのコンテンツも微妙であったが、最近子どもたちやコアなマニアから押されて人気が出てきている。

(…………いや、それだけじゃない。人々の噂で、ブラスタージェイブンとその相棒のことが話題になっているからだ)

青いヒーロースーツ——厳密にはヒーロースーツじゃないけれど、こう言い張らせていただこう——を身に纏った男は、端末を見つめて眉間に皺を寄せた。

画面には、「ブラスタージェイブンと真瀬ブンイチに助けられた」と語

る人々の書き込みが至る所に残されている。称賛の言葉が連ねられていて、何ともむずがゆい。

『ブラスタージェイブンと真瀬ブレイチの目撃スレ』、結構伸びてきたみたいだね」

「ここら、ブラスターキッズ。食べながら喋るのは行儀が悪い。食べ物や飲み物から出るガスが書物を傷ませる原因になると、いつも言ってるだろう」

『ブラスタージェイブンこそ。誰のおかげでノーデンス社内に執務室を作ることができたと思ってるのさ』

青いヒーロースーツを身に纏った男——ブラスタージェイブンにたしなめられた少年は、不満そうに口を尖らせた。

翡翠を思わせるように澄み渡った緑の髪。前髪の数房には、紫のメッシュが入っている。快活そうな顔立ちを見る度、遠い昔に見送った女性の姿が脳裏をかすめた。

少年はそれきり口をつぐんだが、紫水晶を思わせる瞳はレイブんに強く訴えていた。「いつまで自分たちは、こんなやり取りを続けるのだろうか」と。

「……ごめん、ブレイチ」

「分かってる。……俺こそ、ごめん」

居たたまれなくなり、レイブンは目を伏せた。それに対して、少年——真瀬ブレイチは罰が悪そうに視線を逸らす。

以前から、相棒には迷惑ばかりかけてきた。自分の我儘にも付き合わせてしまったし、そのために沢山我慢ばかりさせてきたように思う。

……その償いも、終わらせなくてはならない。すべてが終わったら、彼には彼の人生を歩んでほしい。それが、レイブンの願いだ。

2人だけの狭い執務室。嘗ての自分の立場を思い返すと、随分と寂

しくなったように思う。

クセモノどもに手を引かれながら、なんとか組織の長をやつてきた。時には激励され、時には愛する女性に襲われ、時には愛する女性に同人誌のネタにされ、時には愛する女性に男としての矜持をぶち壊されながらも、彼女と一緒に歩んできた。ブラスタールレイブンになった男の人生は、確かに幸せであった。

嘗ての仲間たちは、もういない。最後の1人——根が優しい無精者はISDFに渦巻く闇を正そうとして、それに飲み込まれた。丁度8年前の話である。それよりも前には、13班員であり、生命科学を専攻していた研究者仲間も。彼らを喰らって生まれ落ちた可能性の芽を、レイブンは摘み取れないでいる。

（曲がりなりにも、僕は、世界を守つてきたという自負がある。そうして、〃この判断を下せる人間は、僕しかない〃とも）

レイブンは深々とため息をついて、嘗ての仲間から託されたデータと、自分が集めたデータを眺めた。ISDFの対竜兵器に関する研究データであり、その兵器は〃極東支部の最高傑作〃とされている。

人類の努力と英知の結晶——レイブンにとつて、棘を持つ響きだ。悲しい思いをする命を生み出さたくないという願い、生まれ落ちた命を否定したくないという想い。その狭間の中で、レイブンは揺れ動いていた。

例えば、〃可能性に対する執着〃がすべての引き金になったように思うのだ。レイブンが尻拭いしようとしている敵も、仲間がレイブんに託したこの資料に関しても、元は「可能性を見出した」ために保留してきたものである。

己の願いを叶えるためには、絶対に揺らいではいけない。元凶を絶つという選択こそが絶対解であった。でも、己の願いがそれに待ったをかける。生まれ落ちた命に罪はないし、命を絶つということとは可能性を絶つことと同義だ。



「……『レイブンは、優しすぎるんだ』」

ブナイチは、誰かの言葉を諳んじる。

そのこの場の主を、レイブンは知っていた。

『どうしようもないくらい優しいから、優柔不断になってしまっただ。でも俺は、そんなレイブンが総長でよかったと思ってる』」

「……ははは。何かある度、彼がよく言っていたなあ。結局、彼は真面目な話をするとき以外、僕のことを本名で呼んでくれなかったっけ」  
「——俺も、そう思うよ」

そう言つてレイブンを見つめるブナイチの瞳は、どこまでも真剣だった。

「俺は、貴方が俺の “相棒” でよかった。貴方の “相棒” でよかった。このことは、何よりももの誇りだと思ってる」

「…… “文” ……」

「あはは。その名前で呼ばれるの、久しぶりだなあ。 “さん”」

自分たちが “ブラスターレイブンと真瀬ブナイチ” になつてから、元の呼び名で呼び合うことは殆どなくなった。

本来なら呼び合っていたであろう名前を、ブナイチは噛みしめるように呟く。その名に見合うことを、レイブンは何一つなし得ていないのに。

ブナイチは、優しい眼差しでレイブンを見つめる。その笑い方も眼差しも、嘗て自分が愛した女性とよく似ていた。——よく、似すぎていた。

こういうとき、顔が隠れていることと、自分の体質は便利だと思うから。それらがなければ、レイブンは無様な泣き顔を晒していたと思うから。

「〃さん〃、全然誤魔化せてないよ」

「……〃文一〃。こういうときは、苦笑しながらも黙殺するのがお約束なんだよ?」

「〃さん〃が格好良く決まったことなんて一度もないでしょ?」

「ははは。耳が痛いなあ。手厳しい」

「でも、そんな〃さん〃だから、みんなが〃さん〃を支えようと頑張ったんだよ。『無様でも、足がガクガク震えていても、音頭が決まらなくても、諦めずに武器開発して、作戦立案する〃さん〃の姿が格好いいんだ』って、みんなが言ってたし」

〃文一〃の言葉に、レイブンは苦笑した。あれから必死に頑張ってきたけれど、本質はあの頃と何も変わっていないようだ。戦闘員の後ろに引っ込んで、無様に怯えていたころの自分の姿が浮かんでは消えていく。この世界は本当にままならない。

最近には本当に絶不調だ。雑魚ドラゴンとの戦いでも、帝竜クラスの戦いでも、大事なときに吹き飛ばされて意識を失ってしまう。

目的を果たすまでは死ねないと思うのだが、自分に残された時間がわずかであることには察しがついている。そして、目的を果たしたら立ち去る覚悟も。

〃文一〃には何も言っていないが、彼は聡い子だ。レイブんに残された時間も、〃文一〃自身の時間も長くないことを知っているだろう。

〃文一〃のことだから、レイブンの後を追いかけてやろうとするのかもしれない。彼が尊敬していた身内は、己の持つ価値観や感情に忠実だからだ。

己の心そのままに行動してきたから、〃文一〃はブンイチとなって、ブラスタレーブンの相棒になったのだから。

（〃文一〃には、幸せになってほしかったなあ。僕や彼女たちみたいな〃使命〃とは無縁の、穏やかな人生を送ってほしかった……）

……そうして、できることなら——誰かを好きになって、誰かと寄り添って、家族を築いて、床の上で大往生するような、普通の人生を。

(……それが、どうして“ああ”なっちゃったのかなあ)

レイブンは相棒の机へ視線を向けた。ブレイチに「ノーデンス社の一角を執務室に改造するため、社内に潜入してほしい」と頼んだことが、すべての始まりだったのかもしれない。何を間違ってしまったのかは分からないけれど、最終的には、レイブンの判断が引き金になったと言えるだろう。

ブレイチ用のテーブルの上には、ノーデンスのマスコットキャラクターであるウサギのぬいぐるみ——ナガミミぬいぐるみをはじめとしたグッズが並んでいる。机の上に置き切れなくなったためか、レイブンのスペースまでもを侵略／浸食していた。フロワロ汚染並みに酷い。

自分の好きなものを大量に積み上げるのは、レイブンが愛した女性と瓜二つであった。彼女の場合は同人誌(どぎついR—18本ばかり)だったように思う。自分の机が同人誌(ブラスタレーイブン関連のR—18作品)で埋め尽くされていた現場を見たときは、そのまま卒倒してしまったこともあったか。遠い日々を思い出し、レイブンは苦笑した。

まさか、“文一”が人外趣味に目覚めるとは思わなんだ。

しかも、相手はこの会社のマスコットキャラクターである。

何度も熱烈なアタックを繰り返し、出禁になっても熱烈なアタックを繰り返し、拳句の果てには(最初からノーデンスに潜り込む予定だったとはいえ)同じ部署の契約社員になってしまった程だ。レイブンの友人が生きていたら、マスコット同様「オイ、正気か!？」とドン引きしただろうか。それとも、レイブン同様「あいつの血筋だもんな」と遠い目をしただろうか。もしくは、「お前のせいじゃないのか?」と突っ込んでくるだろうか。もうわからない。

「じゃあ、俺、〃表〃の業務に戻るよ。ナガミミ様を愛でなくちやいけないから！」

「そ、そう……。それじゃあ、頼むよ」

「任せといて!!」

身支度を整えたブレイチが、意気揚々と執務室を飛び出していく。その背中を見送った後、レイブンはPCに向き直った。

レイブンが果たすべき〃使命〃に関連する探し物は、この近辺に潜んでいる。詳しい反応までは探れなかった。

『『それなりに融通利く』って言った割には、趣味ナガミミ様関連で時間の大半を潰しているように思うんだよなあ……』

レイブンは深々とため息をついて、執務室の天井を仰ぐ。

拝啓、ブラスターレイブンが見送った愛する人へ。

〃文一〃は、貴女の血筋を忠実に受け継いだようです——。

乾いた笑いは、今しばらく止まりそうになかった。

Chapter 0 トウキョウ・シークエンス 《プリムラ・マラコイデス：運命を開く》  
エンカウンター

よく晴れ渡った蒼穹が、窓の外に広がっている。空からの日差しは燦々と降り注ぎ、蟬の鳴き声が遠くから響いていた。外からは運動部員の掛け声が聞こえてくる。校庭からも、少し離れたプールサイドからも、活気あふれる声は絶えることはない。

70年以上昔に造られた暁学園は、戦闘技能および対竜関係に対する知識を学ぶための専門学校だ。竜戦役後に誕生した、世界初の「戦闘および対竜研究の担い手を育てるための学校」である。初代学長は嘗てのムラクモ13班——桐野ヒイナ氏だ。

嘗ての英雄である渡来夫婦や、限られた特別期間内では■リヨウスケや那雲ヨツミが教鞭を取った学校としても有名だ。彼らの教え子たちは各部門で活躍している。いずれは自分たちも、羽ばたいていきたいものだ。

新聞部の部室は、学校の情報管理室である。運動部員の喧騒から少し離れた、冷暖房完備の部屋。そこに、4人の少年少女が集っていた。

「セブンスエンカウンター？」

「はい。今度、アメリカから上陸するアトラクションの名前です」

赤毛に赤い眼鏡をかけた青年——東雲俐仁リヒトから手渡されたチケツトを、黒髪ショートボブに花を象った髪飾りを付けた少女——渡来イブリ祈はおuzzと受け取った。

件のチケツトには、80年前に咲いていたとされる赤い葬送花——フロワロと、竜をデフォルメしたようなイラストと、2021年の竜戦役の最終決戦場であるスカイタワーが描かれている。

「ネットでも話題だったな。転売厨がバカみたいな値段で売りさばい

ているのを見たぞ」

黒いマスクをつけた青年——風間創生ソウセイはチケットを眺めながら、この場にキーボードを展開して画面を指示した。

画面に浮かびあがったのは、セブンスエンカウントのチケットを取り扱っているネットオークションだ。値段を確認すると、一般の中流家庭では手が届かない値段を叩きだしている。0の数が1つ、もしくは2つ程多い。

一般中流家庭の出であるイノリ、ソウセイ、金髪のルシエの少女——那雲四季シキは思わず顔をしかめる。ただ1人だけリアクションが薄いのは、4人にチケットを手渡した張本人であるリヒトだった。

東雲リヒトは、東京に本拠地を構える大財閥・東雲財閥の末っ子御曹司だ。まだ未成年で末っ子とはいえ、将来彼が受け継ぐであろう資産／現時点で彼が所有する資産は、一般の中流家庭とは比べ物にならない。

最も、東雲財閥の人間たちは、〃金持ちだからと言って、金でモノを言わせるような人間〃ではない。金銭感覚は、下手すれば一般人よりもシビアな感性を持っている。

リヒトにとって「金を使う」ということは「投資することと同義だ。生半可なものにはビタ一文払わないし、価値を認めたもの／可能性を見出したものに対しては出資を惜しまない。

「1枚入手するだけでも膨大な金が飛んでいくのに、それを4枚も……。リヒトが出資するってことは、相当なことね」

「そうですね。内訳としては、興味と期待半分、疑惑半分ってところでしようか」

ソウセイが具現化したウィンドウに表示される値段の羅列に、シキは表情を引きつらせる。

伺うようにリヒトを見たシキに対し、リヒトは顎に手を当てた。その眼差しは、普段より鋭い。

「疑惑……とは、穏やかじゃないな。何か、そう感じるようなことがあったのか？」

「リヒトくんの語り口からして、なんだか物々しきを感じるなあ」

物々しい響きを宿す単語に、ソウセイは表情を曇らせた。イノリも同意する。リヒトは2つ返事で頷き、言葉を続けた。

「ええ。ノーデンス・エンタープライゼスは、十数年前からいきなり台頭してきた企業です。元々は弱小のゲーム企業でしたが、買収されて社名を変更し、CEOが現在の人物になって以降、急速に成長してきました」

「確か、アリー・ノーデンスって人だったっけ？」

イノリの言葉に、リヒトは小さく頷いた。自分たちの会話をしっかりと聞いていたのだろう。ソウセイはキーボードを軽やかに叩いた。具現化されたウィンドウにノーデンス関係の情報が表示される。いくつもの写真やグラフが表示された後、1人の女性が映し出された。

鮮やかなローズピンクの髪に、シャープな楕円淵眼鏡をかけた麗しきキャリアウーマン——CEOのアリー・ノーデンスだ。独特の口調と人懐っこい性格が特徴の人物であり、相手の地位や年齢、性別で態度を変えることがない大らかな女性である。

「自由奔放な性格に振り回される」とは、社内ナンバー2の技術主任——ジュリエッタの談だ。だが、アリー・ノーデンスはその言動とは裏腹に、鋭い観察眼を持っている。ノーデンス・エンタープライゼスが発展してきたのも、経営の才能があったからこそだろう。

社長のプロデュース能力があったからこそ、ジュリエッタが生み出してきた企画がヒットした。

今回話題になっているセブンスエンカウントも、社長と技術主任のコンビがあったためだろう。

「そういえば、ノードンスが裏求人募集している」という話を耳にしたことがあるな」

「裏求人って、物々しい言い方ね。そこはスカウトと言うべきでしょうに。……」セブンスエンカウントのハイスコアラーがスカウトさ  
れてる”らしいって噂話でしょ」

「む。……少々オーバーだったか？ すまない」

シキの指摘を受けたソウセイは、目を瞬かせた後視線を逸らした。それを見たりヒトは苦笑して肩をすくめた後、「話を戻します」と言葉  
を続けた。

「セブンスエンカウントは、80年前に起きた竜戦役を再現した”  
という触れ込みで有名なバーチャルリアリティーゲームです。その  
技術力は以前から気になっていました。ついでに、ノードンスが行っ  
ているスカウトについても」

「……」セブンスエンカウントが、何かの測定機である”という噂の  
こと？」

「そうですね。セブンスエンカウントでハイスコアを出すということ  
は、その人物が卓越した戦闘技能の持ち主であるということと同義で  
す。もし噂が本当だとしたら、ノードンスは『戦力となる人物を欲し  
ている』ということになります。……ただのゲーム会社が、何故戦力  
を欲するんでしょうか？」

イノリの問いかけに、リヒトは頷いた。彼の疑問は最もである。ソ  
ウセイが提示した情報を見る限り、ノードンス・エンタープライゼス  
はただの一般企業だ。マモノや竜災害に備えて戦力が必要なISD  
Fとは違い、マモノや竜と戦う必要はないだろう。話を聞く限り、な  
んともきな臭い気配が漂う。

きな臭いと言えば、最近の東京情勢もだ。イノリの周囲には、風邪  
気味の人が増えている。街中ではISDFの制服を着ている軍人が  
絶えず巡回しているし、空を見上げれば翼竜の影らしきものがちらつ



く。ニュースを見れば、極東支部の役人たちが慌ただしく記者会見に臨んでいた。

その裏側にある不穏を、断片的ではあるが、イノリたちは知っている。生前、祖父の渡来ミカゲが懸念していた『竜災害の再来』が近づいているのだ。ドラゴンの目撃例やISDFの巡回強化、風邪気味の人々——実際は、致死率100%の病／竜班病患者——の増加も、その影響だと言えるだろう。

80年前に起こった近代神話、竜戦役。祖父たちが駆け抜けた時代は、遠い昔の御伽噺になりつつある。誰もが当時の痛みを忘れ、復興と安寧の中で生きていた。

勿論、イノリたちも例外ではない。祖父たちが体感した生きるか死ぬかの絶望的な状況を、自分たちも肌で感じたことはないためだ。

「父や兄、姉たちは考えすぎだと笑うんですけど」と、リヒトは苦笑しながら言葉を続ける。

「ウチの財閥に、件の会社が接近しつつあるんですよ」

「ノーデンス・エンタープライゼスがか？」

「ええ。ウチ主催のパーティーにアリー社長が顔を出しましてね。ゲーム業界に進出している兄や兄の関連会社役員に、セブンスエンカウントへの出資等の話を持ちかけていたんです」

ソウセイの相槌にリヒトは頷き、「だから気になって」と締めくくった。顔は苦笑そのものだが、彼の瞳はどこまでも鋭い。

ノーデンスという会社が、東雲財閥にとって有益か否か／東雲財閥の理念に沿った企業かを見定めるかのようなのだ。

「……まあ、そうやって深く考えるのは僕だけですから。みなさんは気にせず、アトラクションを楽しむことに集中してください。僕自身、このゲームシステムを体験してみたいというのは本心ですし」  
「だろうと思った」

警戒を解いて悪戯っぽく笑ったりリヒトに、ソウセイはふつと笑って肩をすくめた。東雲財閥御曹司とはいえ、リヒトも普通の青年である。新しいものに興味を示すのは当然だ。

「学生最後の夏休みは楽しいことになりそうだね！」

「人気アトラクションのチケットだもの。思い出作りにはぴったりにじゃない」

つられてイノリとシキも笑う。イノリたちは今年で最高学年だ。

進路に関する状況も明らかになってきている。進路が決まった者、まだまだ考えあぐねている者、様々だ。

イノリはISDFの隊員育成に関わる訓練所に所属することが決まっているし、シキは世界救済会の医師団に就職するため医学関連の学校へ進学するという。イノリは既に試験を終えて合格しており、シキの場合は夏休み開始前に結果が出るそうだ。それによっては、夏休みの予定が変わるといふ。

リヒトはやりたいことが沢山あって、どうするか考えているという。どの道を選ぶか自体を楽しんでいるように見えた。ソウセイも似たようなものらしい。祖父・リョウスケと同じ「戦う技術者」を目指す彼は、世界救済会のような民間団体か軍関連の道に進むか悩んでいるという。

ISDF以外にも、民間団体が対マモノ災害関連の人命救助活動のため、戦う力を有している団体もある。ただ、それを結成するためには、ISDFからの特別許可を得なければならぬらしい。他にも様々な制約が課せられるため、民間はなかなか厳しいという。

ISDF側が「嘗てのムラクモ13班と自衛隊——民間団体が国家権力／軍隊よりも上に立つ」ような関係性になることを恐れているとも言われているが、真相は定かではない。

「それじゃあ、いつ遊びに行くかの予定を立てなくちゃ」

「ですね」

「ええ」

「だな」

イノリの音頭に、リヒト、シキ、ソウセイは頷き、学生手帳を取り出した。校則や校内見取り図だけでなく、スケジュール帳としての機能を有した優れものだ。

互いの予定を語らいながら、各々の都合のいい日時をピックアップしていく。

4人は学生最後の夏休みに思いを馳せていた。最高の思い出ができると、信じて疑わなかった。



「ねえお嬢ちゃん。俺と一緒に遊ばない？」

「え……」

「連れはいないんでしょ？ 遊ぼうよ」

リヒトの目を惹いたのは、若い男が少女をナンパしている光景だった。若芽色わかめいろの髪をリボンで結んだ少女は、チケツト片手に、困ったように視線を彷徨彷徨らせている。どこからどう見ても、少女は男の誘いに否定的である。

だが、男は彼女の様子などお構いなしに手を掴んだ。大人しそうな印象の少女だったから、押せばどうとでもなると思っただろう。抵抗しようとする少女を半ば引つ張り込むような形で、セブンスエンカウトへ向かおうとした。

勿論、そんな光景を黙って見ていられる訳がない。

「何しているんですか。彼女、嫌がっているでしょう」

2人の間に割り込むようにして、リヒトは男の手を振り払った。その勢いで、件の少女を後ろ手に庇う。少女が息を飲む声が聞こえ

た。

「なんだお前!？」

「嫌がる女性を無理矢理連れていこうなんて、紳士としてあるまじき行為ですよ」

「んだと……!?! 邪魔をするなよ!」

東雲リヒト 突然の乱入者に対し、男が眦を吊り上げる。彼は即座に暴力に打って出た。突き出された拳を、リヒトは受け止める。

体術の成績はぎりぎり並であるが、対応できないわけではない。相手の男の勢いを利用して、そのまま地面に叩きつけた。男の間の抜けた悲鳴が響く。

そんな男を尻目に、リヒトは少女を守るようにして立ちはだかる。男は尚もリヒトに対して敵意をむき出しにしていた。

乱闘騒ぎを目の当たりにしたためか、野次馬たちが集まり始めた。セブンスエンカウント前にいた受付のマスコットや、受付のマスコットを口説き倒していた少年も、リヒトに視線を向けてきた。

これ以上騒ぎになると、色々と面倒なことになる。

リヒトは深々とため息をついた。

「これ以上の騒ぎは無益です。僕にとっても、貴方にとっても」

「この野郎……!」

「——ですので、これで手を打ってくれませんか?」

リヒトは懐からチケットを取り出した。セブンスエンカウントをプレイするために必要なチケットである。一般券とはいえ、プレミア価値が高い。競争率も凄まじかった。

人気アトラクションのチケットを目の当たりにした男は目の色を変えた。表情も目に見えて明るくなったように思う。男は媚びるように、あるいは卑しい笑みを浮かべた。

男はリヒトの手からチケットをふんだくる。下卑た笑みを浮かべ

た男は、意気揚々とセブンスエンカウントへと向かった。乱闘が解決したため、野次馬たちも去って行く。

「ふう……。あ、大丈夫ですか？」

「！ あ、はい。ありがとう……」

男の背中を見送ったのち、リヒトは少女の方に向き直った。少女は一瞬びくりと身を振るわせると、慌てた様子で頭を下げる。

彼女には目立った外傷はない。あの男に何かされたような形跡もなかった。リヒトはほつと息を吐く。ああ、本当に良かった。

「怪我がなくて何よりです」と微笑めば、少女は虚を突かれたように目を見開き、息を飲んだ。そのまま、少女は頬を赤らめて微笑む。

可憐な花が咲いたかのような微笑み。——ああ、なんて、綺麗なんだ。

今度はリヒトが息を飲む番だった。じわじわと胸を満たすような照れくささを、何と言おう。

堪えきれず、リヒトは視線を彷徨わせた。それは少女も同じようで、2人して照れ照れとしたまま動けない。こういうときはどうしたらいいんだろうか。

「……そうだ。イノリたちと、セブンスエンカウントで待ち合わせをしてたんだった」

友人たちとの約束を思い出して、リヒトはポンと手を叩いた。同時に、施設に入るために必要なチケットを、男に譲り渡していた。

これでは施設内に入ることもできない。あそこはチケットを持っていないと、問答無用で追い出される／施設内に入場できないからだ。

「仕方がないですね。僕も遊べなくなつたと連絡を入れないと……」  
「あのー……」

リヒトが端末を取り出してイノリたちへ連絡しようとしたとき、少女がおずおずと懐から何かを差し出した。セブンスエンカウントのチケットである。

ただし、このチケットは特別なものだ。イラストの脇に、金のインクで『S級特別招待券』と印字されている。プレミアア中のプレミアアだ。これが1枚あれば、チケットの持ち主を含んで3人までなら入場することが可能である。そんなチケットを、彼女は持っていた。

もしかして、彼女がナンパされていたのは、このチケットを持っていたからか。リヒトがそう思い至ったのと、少女が控えめに提案してきたのは同じだった。

「これ……」

「実は、こういう所に来るの、初めてで……もしよかったらなんですか、一緒に入ってもらえたら嬉しいなって……!」

「助けてもらったお礼も兼ねて。……ダメかな？」と首を傾げた少女に、リヒトは思わず目を瞬かせた。

「いいんですか？」と問えば、少女は満面の笑みを浮かべて頷く。リヒトを先導しようとした少女は、何かに気づいたように足を止めた。

「そういうえば、自己紹介がまだだったね。わたし、那雲<sup>ミオ</sup>藩」

「那雲……? わあ、僕の友達の苗字と同じですね」

「そうなの? 偶然だね」

リヒトの脳裏に浮かんだのは、今回来れなくなってしまった友人――那雲シキのことだ。

急遽、どうしても外せない用事が入ってしまった仲間である。那雲という苗字は非常に珍しい。

シキ以外の那雲姓を名乗る人物と、セブンスエンカウント前で相見えるとは思わなかった。

「貴方は？」

「リヒトです。東雲リヒト、暁学園の3年生です。よろしくお願いますね、ミオさん」

「うん。よろしくね！」

自己紹介をして、リヒトは少女——那雲ミオに頭を下げる。

そうして、自分たちは2人で並んで、セブンスエンカウントへ向かったのだった。



ノーデンス・エンタープライゼスの人気アトラクション——セブンスエンカウントが有明に上陸したのは、今より少し前のことである。それと同時に、ノーデンス社も日本に引っ越してきた。

施設内はセブンスエンカウント目当ての客でごった返している。噂には聞いていたが、本当にすごいところだ。イノリはきよるきよると周囲を見回した。気を抜くと、隣にいるはずのソウセイとはぐれてしまいそうだ。

「すごい人だね」

「だな。目が回りそうだ……」

派手な電飾と人の海に酔ったのか、ソウセイの顔色は悪そうだ。元々、ソウセイはこういう場所を好むタイプではない。

だが、セブンスエンカウントの技術には、技術者としての興味をくすぐられたようだ。リヒトと似たような動機である。

イノリとソウセイは、施設の入り口付近でリヒトと待ち合わせをしていた。夏休み前の約束通り、仲間たちと遊ぶためだ。

「しかし、シキも大変だな。合格したと思った途端、講習会に参加しな

くてはならないんだから」

「そうだね。一緒に遊べないのは残念かな」

ソウセイの言葉に、イノリは苦笑した。シキは無事に合格したが、学校側から講習会の参加を義務付けられた。その日が丁度、遊ぶ予定だった日付と被っていたのである。

「あと1日早く終われば、みんなと遊べたのに！」とシキが悔しそうに連絡してきたことを思い出す。最後の夏休みの思い出は、ちよつとだけ寂しいことになりそうだ。

不意に、外の方がざわめいたように思う。人だかりができているのは施設の外だ。入り口に居た受付のマスコットと、マスコットを口説いていた少年もそちらへ視線を向ける。

しかしそれも数分のこと。人だかりはあつという間になくなった。それから幾何の間もなく、待ち人が受付を終えて施設内に入ってくる。——女の子を連れて、だ。

リヒトに声をかけようとして、イノリは思わず目を瞬かせた。驚いたのはイノリだけではなく、ソウセイも同じ気持ちだったらしい。「え」と間の抜けた声を漏らした。

「り、リヒトくん。その子は？」

「あ、初めまして。わたし、那雲ミオっていいいます」

イノリの問いに答えたのは、件の少女——那雲ミオだった。彼女はぺこりとお辞儀する。

「那雲……シキちゃんと同じ苗字だね」

「ほう。珍しいこともあるものだな」

「それについては私もびっくりだよ。私知ってる。同じ苗字の親戚

“は、『世界救済会に所属してて、世界中を飛び回ってるらしい』って話を聞くくらいで、一度も会ったことがないから……」



「那雲という苗字自体珍しいが、まさかシキと同じ苗字の人と相見えるだなんて。」

世の中、どこで何が繋がっているのか分からないものだ。

「そういえば、シキちゃんの両親も世界救済会の役員だよ。ルシエの人権保護に力を入れると同時に、医者として世界中を飛び回っているって」

「そうなの!? そこまで一緒ってことは、まさか……まさか、そんなことないよね。あはは」

シキの両親のことを思い出したイノリの言葉に、ミオはさらに驚いていた。そこまで一緒というのもまた、天文学的な一致ではないだろうか。

イノリはそう思ったのだが、ミオは偶然ということにしたらしい。本人がそう言うなら、あえて蒸し返す必要もないだろう。

この話題はここで区切ることにして、イノリとソウセイも自己紹介を済ませた。よろしく、と、互いに挨拶を交わす。

「待ち人合流ってことで、早速セブンスエンカウントにログインだね！」

「じゃあ、わたしはナビモードでバックアップするから、みんなはオフセンス……で、どうかな？」

「面白そうだね！」

「では、よろしくお願いします」

「それはいい。お手並み拝見と行こう」

ミオがおずおずと手を挙げる。勿論、イノリたちに断る道理はない。2つ返事で領けば、ミオはあつと表情を輝かせて領いた。

4人は受付を済ませて、セブンスエンカウントにログインするためのカプセルの中へ身を横たえた。

スリーカウントの音が鳴り響いたのち、世界が暗転する。データが

構成され、世界が目の前に広がった。

『ここは今から80年前の東京——西暦2021年、東京スカイタワー。突如、宇宙から飛来した第5真竜フォーマルハウトと人類の激戦は佳境を迎えていた——』

自分たち4人の前に、システムメッセージが表示される。物々しい煽り文句と共に、ミッションが表示される。『迫りくるマモノを倒し、スカイタワーを開放しよう』。

2021年のスカイタワー。80年前の竜戦役で、第5真竜フォーマルハウトとの決戦の地。祖父を含んだムラクモ13班の活躍を思い浮かべながら、4人は世界に降り立った。

ゲームの中とは思えない程、見事な再現度だ。現実のスカイタワーは真竜の瘴気汚染が酷く、残念ながら立ち入り禁止となっている。

「うわあ、これゲームなんだよね!? まるで、本物のスカイタワーにいらみたいだよ!」

「この禍々しさ……祖父の資料を見せてもらったことがあります、当てもこんな感じだったのでしようか……」

「ノーデンス・エンタープライゼス……か。フ、ますます興味が湧いてきたな」

ミオがはしやぎ、リヒトが顎に手を当てて考え込み、ソウセイが愉快そうに目を細める。イノリも、改めて周囲を見回してみた。

黒いフロワロの影響を受けて、紫を帯びた毒々しい大地。「竜殺剣がなければ、この場所に踏み込むことも叶わなかった」——祖父の言葉が脳裏をよぎる。嘗ての英雄たちと同じ場所に立っているという実感に、湧き上がるような喜びを感じた。

同時に、施設内部からはマモノの気配が漂う。異質な殺気を感じ取ったのか、リヒトとソウセイもはしやぐのをやめて、スカイタワー入り口を見据えた。学生ではあるが、戦う者の本能なのだろう。みんな

な、己の得物に手をかける。イノリも、己の得物である双剣の柄に手をかけていた。

「じゃあ、ここからのナビゲーターは私に任せて！ マニュアルは一通り読んだから大丈夫！ マモノとエンカウトしたらバトル開始だから、気を付けてね！」

「わかったよ！」

「分かりました！」

「了解した」

「それじゃ、出発！」

ミオのアドバイスに頷いて、イノリたちはスカイタワー内へと足を踏み入れる。

こうして、イノリたちを筆頭とした4人による、セブンスエンカウト攻略が始まった。

\*\*\*

「落とす！」

イノリはヘルクラウドに対し、飛天斬りを叩きこむ。対空攻撃である飛天斬りは、空を飛んでいるマモノに効果的な技である。堪らずヘルクラウドが悲鳴を上げた。

「集中……——獄冷のマモノよ！」

リヒトが氷属性のカードをかざし、マモノを召喚する。ローパーを模した氷のマモノは、ヘルクラウドに殴りかかった。

炎をまき散らすヘルクラウドにとって、氷属性のマモノは天敵だったようだ。動きが一気に鈍くなる。

その隙をつくような形で、ソウセイはハッキングでヘルクラウドの

動きを封じる。彼はキーボードを軽やかに叩いた。

「命を捧げろ」

彼がエンターキーを叩いた途端、ヘルクラウドのManaが弾けた。命を構成する光を失ったマモノが消滅し、マモノから奪い取ったManaがイノリたちに降り注ぐ。

空っぽ寸前だったManaがあっという間に回復した。これなら余裕で戦えそうである。ソウセイに感謝の言葉を述べれば、彼は満足そうに目を細めた。

「これで、ボス戦はお終いだよ！ お疲れさま！」

イノリたちをナビゲートし、勝利へ導いてくれた立役者——ミオが、安堵の表情を浮かべて自分たちを迎えてくれた。

流れに任せ、イノリはミオにハイタッチする。続いてリヒトが満面の笑みを浮かべ、ソウセイが控えめに目を細めながらハイタッチした。

興奮冷めやらぬと盛り上がっていた4人であるが、ふと、得体の知れない違和感を感じた。特に、技術者志望のソウセイが眉間に皺を寄せる。

「どうしたの、ソウセイくん」

「——雰囲気が変わった。まるで、抑えていた何かを開放したかのようだ」

ソウセイは注意深く周囲を見回す。顎に手を当てて何かを考えていた彼は、何を思い至ったのか、キーボードを具現化させた。ウインドウと睨めっこしながら、パタパタとキーボードを叩く。

どこかの情報をハッキングしているようで、彼は難しそうに唸る。暫し格闘していた彼だが、物々しいため息をついて、イノリたちの前

に画面を指示した。画面には、『セーフティモード解除』の文字が浮かぶ。

「すまない。俺の力では、この情報を引き出すので関の山だった」「これだけ分かっただけでも凄いですよ。……これで、ノーデンスにまつわる噂話は現実味を帯びてきました」

ソウセイは申し訳なきように目を伏せる。ちよつとだけ悔しそうにも見えた。

そんな仲間を労いつつ、リヒトは鋭い眼差しでウィンドウを見ている。その視線を天井へ向ける。こちらを見ているであろう誰かに、「お前が見ていることに気づいているぞ」と言わんばかりの眼差しであった。

イノリもそれにつられるようにして天井を見る。思えば、セブンスエンカウントを攻略している最中、ずっと誰かに見られている――否、品定めされているかのような気配を感じていた。

奇妙な違和感と共に、殺気も増大したらしい。あちこちからマモノのうめき声が聞こえてくる。今まで遭遇したマモノとは桁違いである。セーフティモード解除という物々しい言葉を思い返し、イノリは大きく息を吐いた。

ナビモードでバックアップを担当していたミオも異変に気づいたようだ。

急に跳ね上がったマモノの強さに、不安そうな表情を浮かべる。

「みんな、気を付けて！」

「わかった。ミオはこのままサポートお願い！ 行くよ、みんな！」

「分かりました！」

「了解した！」

イノリの号令に従い、面々はスカイタワーを駆け上っていく。襲い来るマモノたちを次々と打ち倒しながら、屋上目指して歩みを進め

た。

奥へ行けば行く程、敵の強さも増してくる。だが、打ち倒せば打ち倒すほど、敵の動きや攻撃パターンの解析が進み、撃破するのも苦ではなくなった。

ミオの的確なサポートもあって、イノリたちのチームは破竹の勢いでスカイタワーを攻略していく。あと少しで頂上へたどり着くと思ったときだった。

自分たちの進軍を阻むかのようには、“それ”は姿を現した。

あれはマモノではなく、ドラゴンだ。祖父が見せてくれた資料の中に、このドラゴンと同じ外見の種類が何体か掲載されていたことを思い出す。

種族名はリトルドラグ。耐久力はさほど高くないが、手数と素早さを駆使したかみつきやひっかきによる連続攻撃が脅威となる個体だ。

『……リトルドラグ……ミクロドラグ……2回行動単体連続攻撃……2回行動ランダム複数回全体攻撃……喧しいくらい的大量乱入……来た、ドラゴンだ!——うん。死ぬ程痛いぞ』

虚ろな顔をして天を仰ぐ祖父・ミカゲの姿が脳裏をよぎった。今はそんなことを考えている場合ではない。

「あのマモノ、マニュアルに載ってない……」

「違う、あれはマモノじゃない。80年前に東京を襲った、ドラゴンの1種だよ」

「ええっ!?!」

イノリの指摘に、ミオは驚いたように目を白黒させた。

それを引き継ぐようにして、リヒトとソウセイが言葉を続ける。

「リトルドラグですか。こんなモノまで再現してしまうなんて、悪趣味レベルで凝ってますねえ……!」

「嘗て、じいさんたちが倒してきた敵、か。……再現とはいえ、相手に不足はないな」

「じいさんたちが、倒した……？　——と、とにかく、強敵なのは確かだよ！　ホントに気を付けて!!」

闘志を燃やす2人の様子に気圧されながらも、ミオはイノリたちに注意を促した。仲間たちは得物を構えて、嘗ての英雄が倒した怨敵——ドラゴンと対峙する。

(あれは、ダメ)

イノリは本能的に直感する。

何がダメなのか、さっぱり分からない。

分からない、が。

(何としても、〃狩らなくちやいけない〃——!!)

〃すべての竜を狩り尽せ〃。

その言葉が、イノリの中に鮮明な響きをもたらす。それに突き動かされるかのように、イノリは駆け出していた。

イノリだけではない。リヒトも、ソウセイも、明確な意志を持って、リトルドラグを迎撃する。

予期せぬ場所での、初めての対竜戦闘。——その火蓋が、切って落とされた。

## U・E・77年のクセモノども

「この敵、複数回連続攻撃を行ってくるみたい！ あの牙は驚異だから、気を付けて！」

「了解！」

ミオの分析により、リトルドラグの攻撃パターンが告げられる。やはり、祖父が虚ろな表情で呟いていた通りだ。

ここにシキがいればカウンター戦法で応戦したのだが、ここにいない人物に頼ることは不可能であった。

今この場にいる人選——双刀サムライ、デュエリスト、エーエージェントで何とかするしかない。

「相手が手数で攻めてくるなら、こちらも罠を仕掛けます！」

リヒトは手札から氷と炎のカードを引き、目の前に罠を展開する。罠はこれだけでは終わらなかったようで、次は氷と雷のカードを引いて、更に罠を追加した。

デュエリストがトラップを仕込むとき、2種類の属性カードを組み合わせることで罠を具現化させる。トラップを設置した本人が、敵の攻撃を受けることで発動する仕組みだ。

「なら、俺も仕込んでおくか」

ソウセイは鋭い眼差しをそのままに、一瞬で気配を消した。エーエージェントの真骨頂、ハイディングである。

ハイディングには『姿をくまますことによつて、敵から狙われにくくなる』効果があった。他にも、敵の不意を突いて攻撃を急所に当てることもできるという。

イノリも自身のマナを研ぎ澄ませ、呼吸を整える。自身の攻撃力を強化する技、赤火の呼気。時間が経てば経つほど攻撃力が増幅する、



長期戦向きの技だ。

リトルドラグは怯むことなく、リヒトの元へと突っ込んだ。鋭利な牙がリヒトの腕に食い込む。

後衛職のデュエリストは、後衛職のセオリー通り防御に難がある。リヒトは堪らず呻いた。

「ぐ………！」

「リヒト!？」

「……ッ、ふふ。かかりましたね………！——トランプ発動！」

ミオが金切り声をあげた。だが、リヒトは呻きながらも不敵に微笑んだ。即座に罠の発動を宣言する。次の瞬間、リトルドラグの足元から鉄条網が具現化した。鋭利な金属が体に食い込み、身体から血が噴き出す。

次に呻いたのはリトルドラグの方だ。間髪入れず、リヒトが仕掛けていたもう1つの罠が発動した。リトルドラグの足元に、巨大な落とし穴が出現する。落とし穴にはまったリトルドラグは身動きを封じられた。

「よくもやってくれたな………!!」

その隙を逃さんと言わんばかりに、どこかに潜んでいたソウセイが即座に反撃を加える。撃ち放たれた銃弾はリトルドラグの体に傷をつけた。

ソウセイの攻撃に続くような形で、リヒトが雷属性のカードを掲げる。蝶を模したマモノが現れ、大量の鱗粉をまき散らした。ばちばちと雷が爆ぜる。

途端にリトルドラグの動きが鈍くなった。小刻みに震えているあたり、麻痺効果が入ったのかもしれない。そこへ、リヒトが銃口を向けた。

絶対に外さない——その意志を込めた紫の瞳が、容赦なくリトルド

ラグを射抜いた。

引き金が引かれる。銃弾はリトルドラグの急所に当たったが、その命を絶つには至らない。

自身の攻撃が致命傷でなかったことが悔しいのか、ソウセイは苦々しく舌打ちした。言動は物々しくぶつきらぼうであるが、根は仲間思いの熱い男だ。怒りは治まらないらしい。

「イノリ！」

「任せて！」

鋭い声で、ソウセイはイノリの名を呼んでこちらを見返した。とどめを刺せと言わんばかりの眼差しに、イノリは頷いて駆け出した。

双刀が鮮やかな炎を纏う。リトルドラグはイノリに気づいて反撃しようとしたが、落とし穴の効果が発動したため身動きできないでいる。

無防備になったドラゴンに、イノリは容赦なく炎の太刀を浴びせた。

「——決まれば！」

炎属性攻撃であり、自分の攻撃に炎属性を付加する双刀の技——裂きモミジ。

この一撃が致命傷となったのだろう。リトルドラグは断末魔の悲鳴を残し、弾けて消えた。

強敵を撃破したイノリたちは、己の得物をしまった。この結果に驚いたのはナビゲーター役をしていたミオである。彼女はぱあつと表情を輝かせ、3人の元に駆け寄ってきた。

「すごいすごいー！ あのスペックのドラゴンを倒すなんて!!」

ミオははしゃいでいたけれど、彼女はすぐに表情を曇らせた。原因

は、リヒトの怪我だ。白い制服が赤く染まっている。

心配そうにリヒトを見つめるミオに、リヒトは柔らかに笑いかけた。「大丈夫ですよ」と言っ、傷を自分で手当てする。

伊達に、暁学園で戦闘訓練を専攻している訳ではないのだ。金持ちのボンボンだからと言っ、甘い目で見ると痛い目に合う。

イノリたちはそのまま軽くハイタッチした。リヒトは勢いのまま、ミオの方を向いて手を挙げる。ハイタッチをしようという証だ。

ミオは一瞬目を瞬かせたが、嬉しそうにはにかんで手を叩いた。余韻冷めやらぬと言わんばかりに、自分たちは輪になって談笑する。

『チームXX、強制ログアウトを開始します』

「えっ!？」

「何!？」

「何ですか!？」

「何事だ!？」

いきなり響いたアナウンス。何が起きたのかと身構えるイノリたちに対し、世界が一気に断線する。

瞼をこじ開けるかのように光が突き刺さってきた。出所は派手な照明だろう。次の瞬間、カプセルの蓋が開く。半ば放り出されるようにして、イノリたちは現実世界へと帰還した。

いつの間にか、自分たちの周辺には沢山の人が集まっている。誰も彼もが、イノリたちを注視していた。表示されていた画面には、歴代のスコアが表示されている。

歴代プレイヤーの中で、イノリたちのチームの得点が堂々の1位／S級になっている。2位とのスコア差は数万点程あり、絶対に覆せない点数だった。セブンスエンカウント始まっ、の最高得点である。

自分たちが異様な注目を浴びていることに、ミオはおろおろしているようだった。自分たちが何か間違っ、たことをしたのだろうかとか不安そうだ。そんな彼女に、リヒトはゲーム画面を指し示した。

「僕らが最高得点ですよ!」と語るリヒトの声は、普段よりも熱っぽ

い。そんな友人の姿を、ソウセイは柔らかな眼差しで見守っていた。仲間たちの様子が微笑ましくて、イノリも頬を緩ませる。

「お客様……お客様！ ミミ〜！」

「あー、待ってよナガミミ様ー!!」

入り口にいたマスコットが、慌ただしくイノリたちの元へと駆け寄ってきた。そのマスコットの後を追いかけて、マスコットを口説いていた緑色の髪の少年も駆け寄ってくる。

少年はイノリたちに視線を向けたのち、スコア画面を見て凍り付いた。そのまま、イノリたちとスコア画面を見比べる。目は丸く、大きく見開かれていた。

「……嘘。マジで?」

「え、何が?」

呆氣にとられた少年は、ぼろりと零すように呟いた。その意味が分からなくて、イノリも首を傾げる。自分たちの問いに答えるかの如く、ウサギのマスコット——ナガミミが声を張り上げた。

「おめでとうございます! お客様は選ばれたミミ! ——……ブンイチ、今は仕事中ミミ。ぼうつとしちやダメミミ!」

「あ、ごめんねナガミミ様。えつと、……うん。キミたちをノーデンス本社に案内するよ! 因みに俺は眞瀬ブンイチ。セブンスエンカウントのデバッカーをしている、ノーデンスのパートタイム社員だよ!」

ナガミミの言葉に、少年——眞瀬ブンイチが満面の笑みを浮かべて説明を引き継いだ。2人の発言を聞いた観客たちがざわめき始める。

まことしやかに囁かれていた都市伝説——『セブンスエンカウントで高スコアを出すと、本社から声がかかる』が本物だったと知ったた

めだろう。

さて、どうしよう。イノリたちは顔を見合わせた。ノーダンスの謎っぷりは予てから知っている。リヒトはそれに興味を持ったから、ここに来たのだ。

「……僕は行きます。色々、訊いてみたいことがありますから。イノリとソウセイはどうしますか?」

「俺もだ。イノリはどうする?」

「とりあえず、行くだけ行ってみようかな。話を聞いてから、どうするか考えるよ」

理由はどうあれ、イノリたち3人組はノーダンス本社へ向かうことを選択した。残るはミオである。

「ミオはどうします?」

「あ、私は……」

「どうしたミミ? はやくこっちについて来るミミ?」

リヒトの問いかけに、ミオはしどろもどろの返事をした。ついて行くべきか否か、まだ考えあぐねているらしい。だが、ナガミミやブンイチは待つ気はなさそうだ。

マスコットとマスコットを口説き倒していた少年は、足早に施設の外へ向かう。置いて行かれると迷子になってしまう。イノリは慌てて2人の背を追いかけた。

一歩遅れるような形でソウセイとリヒト続き、躊躇っていたミオが慌てた様子でリヒトの後について行った。自分の意志というより、殆ど反射的な行動だったのだろう。

ナガミミとブンイチに先導されるような形で、イノリたちはセブンスエンカウントを後にした。

\*\*\*

施設の外に出て、本社へ向かう。

その道中——一般人が来にくい場所に差し掛かったときだった。

「……つたく、こんな連中が手駒になるのかねエ」

先程まで可愛らしい声と口調で喋っていたはずのナガミミが、急に声のトーンを下げた。

ぶつきらぼうでふてぶてしい口調である。下手したら、ソウセイより口が悪いかもしれない。

「あの、ウサギ……さん？」

「ウサギさん……？ ……ウサギさん、だと……!？」

「ひっ!？」

「ッ!!」

一瞬でキャラクターが変わったマスコットに対し、ミオがおずおずと声をかける。次の瞬間、朗らかに笑っていた少年が絶対零度の眼差しを向けた。慌ててリヒトがミオを庇うが、リヒトもどことなく怯み気味であった。

「違うよ。このお方はナガミミ様だよ。この荒んだ世界に降臨した、唯一無二のマジエステイックエンジェル様なんだ。ちゃんと覚えようね？ お嬢ちゃん」

「やめろバカ野郎。威嚇すんな。そして変な話を盛るな。疑問符がつく上に現状じゃ鍵括弧の予定が付くが、こいつらは手駒なんだ。お前の後輩になるかもしれないんだぞ。こつちが緊急で戦力を要してる事情は分かってんだろ？ テメエのせいで断られたらどう責任を取るつもりだ、ええ?」

「ナガミミ様がそう言うなら！ ごめんねお嬢ちゃん」

ミオを射殺さんばかりに腰の得物に手をかけたブナイチを、ナガミミは即座に引き留める。マスコットから懇々と説教されたブナイチは敬礼ポーズを取り、即座にミオに謝罪した。

このマスコット、口は悪いが性根は良識人らしい。ついでに苦労人の気もあるようだ。深々とため息をついて天を仰ぐマスコットの背中からは哀愁が漂っている。

「どうしてこんな奴が自分の部下なんだ」と言いたげな気配が滲んでいた。ナガミミは、ブナイチの手綱を「完全に」握っている訳ではないらしい。

周囲（ナガミミ含む）の精神をがりがり削るような漫才を繰り広げた後、ナガミミはイノリたちに向き直った。

「今、お前等『口が悪い』とか思っただろ」

「えーと、その……」

否定できないため、イノリは思わず言いよどむ。

リヒトとソウセイも同じようで、何とも言い難そうに視線を逸らした。

「オレの口調はこつちが素なんだよ。営業モードは疲れるんでな」

「そんなナガミミ様も素敵です。俺と結婚してください」

「黙れドアホウ。こんなときにナチュラルにプロポーズしてくんな。

オレ様は今、重要な話の真っ最中なんだよ」

「なんだかんだ言いつつも、職務に忠実なあなたが好きです。結婚してください」

「いい加減にしろよこのケダモノ野郎が。S級能力者じゃなけりやあ、テメエなんて異常性癖とその他諸々でクビだ、クビ！」

「でも、ナガミミ様には人事権ないんでしょう？」

「通販番組の合の手みたいなのりで言うんじゃねーよ。認めたくない事実を突きつけるんじゃねーよ。人事権持ってるやつが……アリーが認めてくれないんだよ……」

終わったはずの漫才が始まった。テンポよく繰り広げられるナガミミとブナイチの会話に、イノリたちは呆気にとられることしかできない。

次の瞬間、誰かの端末着信音が流れ始めた。レトロな雰囲気漂う曲調だ。端末の持ち主はブナイチだった。

彼は電話の主／着信の名前を確認すると、凛々しい顔つきに変わった。紫苑の瞳はどこまでも真剣である。

幾何かの会話の後、彼は話を終えて端末をしまう。そうして、申し訳なさそうに苦笑した。

「ごめん、ナガミミ様！ 急に本業に回らなきゃいけなくなっちゃった！ 社長に『急遽早退します』って伝えて！」

「はあ!？」

「あと、ついでに休暇の申請もお願いしまーす！」

「おい待て！ ふっざけんなコラアアアア!!」

「待ちやがれえええええ！」と叫ぶナガミミの声をBGMに、ブナイチの背中はあるという間に消えてしまう。

彼の背中を成す術もなく見送るしかなかったウサギのマスコットは、ぜえぜえと荒い呼吸を繰り返した後、がっくりとうなだれた。

「あんな奴を、こんな条件付けてまで雇う価値があるってのか……!? 無いだろ、絶対に無いだろ！ 今回のコイツ等も似たような奴らだったら、オレ、面倒見きれねえよ……」

ナガミミはさめざめと嘆きを叫ぶ。その背中に、凄まじい悲哀を滲ませながら。

「え、えっと……その……苦勞してるんだね」

「ええと……大丈夫だよナガミミ様。そ、そのうちいいことあるよ



「……？」

「……お前等……!!」

何を言えばいいのかわからないが、ナガミミを放っておけなかった。イノリとミオがおずおずと声をかける。途端に、ナガミミが身を震わせた。

「上手くいけばお前等がオレ直属の部下になるのか……嬉しくて涙が出そうだ……！」と、ナガミミはぐずぐずと涙声で言葉を紡ぐ。

このマスコットが人間だったら、思いつめたような顔をしていたに違いない——イノリには、そんな予感がしてならなかった。

\*\*\*

ノーデンス・エンタープライゼスの会議フロアは、3階にある。ナガミミに案内された会議室には、2人の人物が待ち構えていた。

鮮やかなローズピンクの髪に、シャープな楕円淵眼鏡をかけた麗しきキャリアウーマン——CEOのアリー・ノーデンスと、おしゃれなブランド服を身に纏い、無精髭を生やした男性——技術主任のジュリエッタだ。

前者のアリーは天を仰ぎながら、目を半開きになっている。紫の瞳はどこか遠い場所を見つめているかのようだ。後者のジュリエッタはぐったりしていて、酷く疲れ切った様子だった。精根尽き果てたという言葉が似合う。

しかし、2人はイノリたちの姿を確認するや否や、人当たりの良い態度で4人を迎え入れた。

「初めまして、アタシはジュリエッタよ」

「ノーデンス・エンタープライゼスの技術主任さんで、会社のナンバー2ですよね？」

「あら。貴方、アタシのことを知ってるの？　嬉しいわ」

イノリが彼の肩書を諳んじれば、ジュリエッタは嬉しそうに目を細めた。そして、ゆっくりとソウセイに視線を向ける。藤色の瞳には、明らかな警戒の色が見えた。

何かを察したソウセイが、納得したように「ほう」と零した。それきり、2人は無言のまま火花を散らし合う。この2人に因縁らしき因縁はないはずだ。

……あるとするなら、セブンスエンカウトでソウセイがハツキングをしたくらいだ。あのとときソウセイは何かと攻防を繰り返していたが、もしかしたらその相手は――。

「あんたの実力は、しかと見せてもらったよ。流石はノーデンスの頭脳だ」

「……それは、どうも」

イノリの予想を肯定するかのようには、ソウセイは言葉を紡いだ。どこか楽しそうな口調に、ゆるりと細められた紫苑の瞳。その眼差しには、純粋な尊敬が湛えられている。

それを見たジュリエッタは、鳩が豆鉄砲を喰らったように目を瞬かせる。その様子からして、てつきり喧嘩を売られると思っていたのだろう。彼は何とも言い難そうに礼を述べた。

「ちなみに、本名は渡真利十郎太だよ☆」  
トマリジュウロウタ

「ンギヤアアアアアアアッ！ ダメ！ その名前は忘れて頂戴!!」

ジュリエッタが頭を抱えてアリーを怒鳴る。彼は自分の本名に、何か嫌な思い出があるようだ。

対して、「良い名前なのに」とアリーはぶすくれた。彼女はジュリエッタの本名を気に言っているらしい。

話を続けようとするアリーを遮るようにして、ジュリエッタはアリーを紹介する。

「こっちがアリー・ノーデンス。こんな成りだけど、一応我が社の社長なのよ」

「ご無沙汰しています、ミス・アリー。東雲財閥主催のパーティーで、兄や兄の役員たちと話しているのをお見掛けしました。僕のこと、覚えていますか?」

「勿論! 東雲財閥の末息子、東雲リヒトでしょー? まさか、キミがS級能力者だとは思わなかったよー☆」

「ええええええええええええええええ!」

会話の流れで、リヒトはさらっと自己紹介する。東雲財閥の末息子——御曹司であることを知ったジュリエッタとミオが絶叫した。

前者は業務提携を結びたいと思う会社の経営者一族、後者にとっては雲の上のような存在だ。驚くのも当然のことだろう。

——そして、「東雲財閥の経営者一族である」という事実には、もう一つの意味がある。

「つてことは、リヒトは……」

「はい。第13代目社長にしてムラクモ13班に所属していた東雲雅春氏は、僕の祖父です」

「なんてこと……」

ミオの問いに、リヒトは穏やかに微笑んだ。

その横で、ジュリエッタがへなへなと崩れ落ちる。

折角なので、イノリたちも自己紹介することにした。

「私は渡来イノリと言います。暁学園3年生で、来年からISDFの訓練所に行くことが決まっています。因みに私の祖父母は、ムラクモ13班に所属していた渡来神影と渡来結依です。祖母の旧姓は近衛です」

「俺は風間ソウセイだ。暁学園3年生で、じいさん同様『戦う技術者』を目指している。俺のじいさんもムラクモ13班に所属していた。」

元は4班、通称技術班に所属していたらしい。名前は■リヨウスケ■良介という

「ほ、ホントに……!?!」

「……オイ、嘘だろ……? コイツ等が、嘗ての英雄の後継者だ……!?!」

「え、英雄たちの系譜を継ぐ、ガチモンのサラブレッドじゃない……!!」

ミオとナガミミが呆けたような声を上げ、ジュリエッタは天を仰ぐ。彼は「とんでもない相手をスカウトしてしまったわ」と、消え入りそうな声で呟いた。

会議室ないが騒然とする中で、ニコニコ笑っている強者はアリーだけだ。「まるで運命みたいだねー☆ ロマンチックなのも大好きだよ☆」と、愉快そうに目を細める。

そこで、ジュリエッタは何か気づいたように目を瞬かせた。この場にいるべき人間の姿を探しているかのように、周囲を見回す。

「……あら、ナガミミ。ブンイチは?」

「あのダブルワーカー・パートタイマー社員なら、『メインの仕事が入った』って早退して行きやがったぜ」

疲れ切ったナガミミの言葉を聞いた途端、ジュリエッタの顔が般若 became になった。

「はあ!?! これから本格的に忙しくなるってときに、あいつ何考えてやがる!!?!」

「ジュリエッタ、口調がオッサンに戻ってるぞー」

「あ、あらやだ。ごめんなさい」

アリーから指摘を受けたジュリエッタは、取り繕うように咳ばらいした。本来は男らしい口調のようだが、本人はそれを表に出すことを

是としないようだ。

「まったく……アリー。どうしてアンタ、ブンイチみたいな扱いは  
い事故物件をスカウトしたの？」

「いや、彼だつてS級能力者だからね。……そりゃあ、ジュリエッタの  
精神崩壊でCode：VFDが頓挫するかと焦つたけど」

アリーは遠い目をしながらため息をついた。後半はぼそりと呟く  
程度のため、よく聞きとれなかつたが。

そんな会社のTOPとNo. 2の様子を一見したナガミミは、別の  
仕事を片付けるために会議室を去つて行つた。

「とりあえず、説明して頂けませんか？ 貴方方がS級能力者を集め  
る理由を」

「ここはただのゲーム会社ではないんだろう？ 何が目的なんだ」

リヒトとソウセイが、会社の権力者たちに問いかけた。前者の場  
合、顔は笑っているのに目が笑っていない。後者は鋭い眼差しを向け  
ている。

先程、ナガミミから説明はされていた——実際は、説明よりもブン  
イチに対する愚痴の方が多かつた——けれど、イノリたちにしてみれ  
ば理解できないことが多すぎる。

唯一分かつていることは『ノーデンス社は戦う力を求めて  
セブンスエンカウンター  
能力測定器を作り、適性値を叩きだしたイノリたちをスカウトしよう  
としている』ことだけだ。

「あら、ナガミミから説明は受けてないの？」

「一応聞いたけど、話の大半がブンイチつて子の愚痴ばかりで……」

「……ナガミミ……可哀想に……」

イノリの言葉を聞いた途端、ジュリエッタは目頭を押さえて天を仰

いだ。連鎖反応するかのごとく、アリーがそつと視線を逸らす。彼女から後ろめたさそうな気配を感じたのは何故だろう。

ナガミミの気苦労に関する話題を打ち切るかのように、ジュリエツタは服の袖で目元をこすった。本題に入ると言わんばかりに、彼はぱんぱんと手を叩く。アリーもこちらに向き直った。

「とりあえず、テキトーに座って頂戴。アナタたちとビジネスの話をしたいの」

\*\*\*

「イノリたちなら、2020年とその翌年に発生した竜戦役のことは知ってるよね？」

「おじいちゃんから聞いたことがあります」

「はい。祖父や大叔母様が、いつも語って聞かせてくれました」

「勿論だ。じいさんから聞かされている」

「その様子だと、当事者たちがすっかり話を聞かせてくれたみたいだねー。じゃあ、竜の脅威については、この時代に生きている人間の中でも『よく知っている』と言えるわけだ」

イノリたちはアリーの質問に即答した。自分たちの眼差しを見て満足したのか、アリーは嬉しそうに微笑んで頷く。

「じゃあ、ミオは？」

「よく分かりません。『80年前に起こった災害で、ムラクモ13班と呼ばれる異能力者集団が活躍したらしい』ってくらいしか……」

「オケオケ。じゃあ、ミオに分かるように説明するねー☆」

対して、完全に一般人であったミオは、申し訳なきように肩をすくめた。アリーは笑みを崩さぬまま、朗々と80年前の近代神話を語り始める。

西暦2020年に、宇宙から第3真竜ニアラが来訪した。世界は美しき葬送花・フロワロに飲み込まれ、人類は滅びると思われた。しかし、人類は屈しない。各国の異能力集団に所属するS級能力者たちが中心となり、反撃の狼煙を上げた。中でも、唯一制竜権を有したのが、東京に本部を置く特務機関「ムラクモ機関」であり、ムラクモ13班である。

国家権力である自衛隊や対立組織であるSKYとの軋轢と和解、組織の長である日傘棗<sup>ナツメ</sup>——後の人竜ミツチの裏切りという問題を超えて、渡来ミカゲ、近衛ユイ、東雲マサハル、東雲ヒイナたち13班はニアラを撃退することに成功した。

しかし、竜災害は翌年にも発生する。次に来訪したのは第5真竜フォーマルハウト。前回の竜戦役の後遺症で力を発揮できなかった13班は、フォーマルハウトの紋章に倒されてしまう。東京は強力な毒性を持つ黒いフロワロに覆われる。

2代目総長桐野礼文<sup>キリノアヤフミ</sup>が瘴気の影響で片腕を失い戦線離脱、アメリカの異能力集団・SECT11との軋轢と和解、人類の拠点である国会議事堂をフォーマルハウトに襲撃されて多数の死者を出す等の難題を乗り越え、新戦力である■<sup>リ</sup>ヨウスケ、那雲四海<sup>ヨツミ</sup>、那雲白雪<sup>シラユキ</sup>らを加えて反撃に出る。

後に、エメル総長代理が現代に復活させたルシエクロン・マリナの力を使って、最強の対竜兵装——所謂竜殺剣を生み出した。最強兵装の担い手となった渡来ミカゲがフォーマルハウトにとどめを刺し、その真竜を完全消滅させるに至る。——そうして、その戦いから、今年で丁度80年の時間が経過したというわけだ。

「竜災害は、真竜と呼ばれる竜の襲来。そして、それに伴う美しき葬送の毒花、フロワロの繁茂が始まるの。フロワロに包まれた星は真竜に喰われ、すべての生命と文明を失い、無機と化す……」

「おじいちゃんが言っていました。『実際に、真竜の襲来によって星を喰われ、流浪の民となった種族がいる』って」

「えっ!? そうなの!? 実例があるなんて話、初めて聞いたわ……」

「あと、その人はおじいちゃんの子の親友の恋人さんだったそうです」

イノリの補足に、ジュリエッタは目を見張った。その人物についての特記事項を付け加えると、彼は遠い目をする。

英雄のサラブレッドが知る事実は、彼のキャパシティを軽く超えてしまったらしい。隣にいたミオはますます置いてけぼりだ。

「話を戻すわよ。この宇宙には、そんな真竜と呼ばれる種族が7体いるらしいの。嘗てこの星は2度の襲撃を受けて、世界中がフロワロに沈みかけたわ」

「それを2回とも撃破したのは、さつき説明したムラクモ13班だったんだ☆ 旧政府で言うS級能力者であり、竜を狩る者」

「——じゃあ、本題に入るわ」

アリーの言葉を引き継ぎ、ジュリエッタは話を切り出した。真剣な双眼がイノリたちに向けられる。

「その竜災害で得られた真竜検体からは、竜の構造や生態……それはもう膨大なデータを解析できたの。アタシたちはその解析データの集合体を——」

「『ドラゴンクロニクル』だよ。日傘ナツメや、エメル総長代理が解析したもの」

ジュリエッタの説明を、イノリが引き継ぐ。それに同調し、リヒトとソウセイも頷いた。

「前者が人竜に至るため、後者が竜殺剣を生み出すために必要としたものですね」

「因みに、後者は俺のばあさんが帝竜検体で作りに出したものだ」

「ワァー、サスガエイユウノサラブレッド。エイユウタンノシヨウサイヲ、ノゾンデモイナイノニオシエテクダサル」



「ジュリエッタ、しつかり！」

ジュリエッタが白目を剥いた。アリーが鬼気迫るような表情で彼をゆする。程なくして、ジュリエッタの意識が現実に戻った。

彼は己が取り乱していたことを思い出すと、取り繕うように咳ばらいた。アリーは安心したように息を吐く。ジュリエッタは説明を続けた。

「アタシたちノーデンスの真の目的は、『より多くの真竜検体を集めてドラゴンクロニクルを完全解明する』ことなのよ」

「でも、何のためにそんなことを？」

「——7番目の真竜、VFDを倒すためだよ」

ミオの問いにアリーが答える。物々しい空気に影響されたのか、弧を描いていた彼女の唇はゆっくりと引き結ばれていく。それでも、彼女の表情は、ぎりぎり「笑っている」と言える程度で崩れなかった。

「第7真竜、VFD……？」

「そう。平和に見えるこの東京に、7番目——最後の真竜が目覚めようとしているんだ。——……そして、その真竜が出現するとき、この星は終わりを迎える」

アリー曰く、それは創造と帰滅を司る真竜のことらしい。ノーデンス上層部はその真竜のことをVFDと呼んでいるそうだ。

何故、ゲーム会社の社長と技術主任が、そんなことを知っているのだろうか。イノリの脳裏に、そんな疑問が浮かんだ。

疑問に思ったのはイノリだけではない。リヒトも、ソウセイも、ミオも、訝し気に眉をひそめる。瞳には、明確な困惑の色。

待ってましたと言わんばかりに、ジュリエッタはくすりと笑った。そうして、説明を続ける。

「知ってる人は知ってるのよ。ISDF……国際自衛軍や政府のお偉いさんのことだけど」

「ああ、成程。情報統制か。ハッキングすれば大体どうとでもなるが」「そうだね。最近やたらとISDFの制服着た人が巡回していたり、竜班病という致死率100%の奇病が発生してその患者が爆発的に増えたり、異常気象やプレート<sup>プレート</sup>の消滅が発生しているという噂<sup>うわさ</sup>がまことしやかに囁かれてるのって、やっぱり竜災害の予兆だったんだ」「社交界で会う軍人や役人たちがひそひそ話してるのを耳にしました。報道を見る度、正直、『よくまあこれで誤魔化せるもんだ』と思いましたよ」

「……あなたたちが優秀すぎて、なんだか空恐ろしくなってきたわ……」

ソウセイ、イノリ、リヒトの言葉を聞いたジュリエッタは、説明を先回りされてしまうことに不安を感じ始めたのだろう。いや、どちらかという脅威だろうか。

因みに、リヒトやシキの場合は社交界で話題を拾い上げてくる。前者は財閥の息子、後者は世界救済会の役員の娘として、交流の場に顔を出すためだ。

その通りだとジュリエッタは頷く。補足として、アリーが竜班病患者の初期症状を語った。風邪と同じ症状のため、なかなか分かりにくい病なのだ。

「まあ、帝竜の瘴気が原因の病は、竜班病だけじゃないんだけどね。英雄の系譜を受け継ぐ貴女たちなら分かるでしょう?」

ジュリエッタの問いに、イノリたちは迷うことなく頷いた。——そしてそれは、いずれイノリたちも発症する可能性が高い病であることも。イノリは言葉を紡いだ。

「黒呪病……第5真竜フォーマルハウトとの戦いの場にいたムラクモ

13班全員が発症した、謎の奇病だね」

「原因は、第5真竜フォーマルハウトがまき散らした瘴気。症状としては、『身体的および精神的な老化現象が発生しなくなるが、一定時期が経過すると、体の機能が著しく下がって衰弱死する』というのがセオリーらしいな」

「そして、その因子は母子感染と遺伝で発生します。『ムラクモ13班の系譜を引き継ぐ人間は、確実に発症する』とも。勿論、僕らも例外ではない」

「隔離遺伝や母子感染の場合は、発症した時点で外見年齢はストップする。けど、いつ発症するかも、発症した後にセカンドステージ——急激な衰弱死に移行するまでにかかる時間も不明だって言われてるね。大半の13班員やその子孫は、セカンドステージに移行したことが原因で命を落としてるみたい」

イノリの説明をソウセイとリヒトが引き継ぐ。そして、最後にイノリが黒呪病の説明を締めくくった。リヒトはうんうん言いながら、ちらりとミオに視線を向ける。彼女は小さく咳き込みながら、何とも言い難そうに視線を彷徨わせていた。

現在、4人——イノリ、リヒト、ソウセイ、シキの中では、黒呪病は『まだ』発症していない。同時に、いつ発生するかも不明である。そのため、竜病患者の存在は他人事とは思えないのだ。症状が違って、真竜の瘴気が原因なのだから。

黒呪病の説明を聞いたジュリエッタは頷く。

その表情が、ほんの一瞬曇った。

——まるで、消えぬ痛みを抱え込むかのように。

「……そうね。病気を抱えていたとしても、天寿を全うできるというのは幸せよね……。『あの人』のように、志半ばで理不尽に命を奪われるよりは、ずっと……」

「ジュリエッタさん？」

「ああ、ごめんなさい。昔、お世話になった人のことを思い出してね。

その人も黒呪病を患っていたのだけれど、セカンドステージに移行する前に不慮の災難で亡くなっちゃったのよ。……「表向きは」、ね」  
「湿っぽい話はここまで。話題を元に戻そうねー」

この話はお終いとばかりに、ジュリエッタとミオの間にアリーが割り込んだ。

アリー曰く、もうすぐ政府の情報統制が意味を成さない事態になるという。世界中にフロワロが咲き乱れ、竜が闊歩し、星の死の果てに——第7真竜VFDが姿を現すらしい。

地球の終焉を回避する方法はただ1つ。真竜検体を手に入れて、ドラゴンクロニクルを完全解明するしかない。出現する全段階から凶悪な予兆を発生させる最後の真竜だ。

実際に7番目の真竜が現れば、この星は成す術もなく滅ぶという。真竜情報と膨大なエネルギーの集積であるドラゴンクロニクルこそ、未来を繋ぐ希望なのだ。

「ドラゴンクロニクルを解明できれば、竜班病や黒呪病を撲滅することだってできるんだよ☆ ……過去と未来の狭間に居るキミたちには、それができる」

話題の重さに反比例するかのようには、アリーは柔らかかに微笑んだ。

「ドラゴンクロニクルを解明するためには、キミたちのようなS級能力者——狩る者の力が必要不可欠なんだ。だから、アリーたちの計画——Code:VFDに、是非とも協力してほしいのよ〜!!」

彼女の眼差しは、イノリを射抜く。——いいや、イノリだけではない。リヒトやソウセイも含まれていた。

突拍子もないことを告げられ、困惑しないわけがなかった。3人は思わず顔を見合わせる。

「真竜検体を手に入れると言われてもな……」

「第5真竜に関しては、ムラクモ機関吸収後はISDFが管理して  
るって話を聞いたことがありますけど……」

「他の真竜の居場所なんて分からないよ。それに、いつ地球に襲来す  
るかの予測だつてできないし……」

「——その話は、アリーたちの計画に協力してくれるって前提なの？」

「うん」

「はい」

「ああ」

身内で井戸端会議を始めかけたイノリたちに、アリーは首を傾げ  
る。イノリたちは、彼女を見返してしつかりと頷き返した。

ノーデンスという企業のことを全面的に信用したわけではない。  
だが、世界の裏で蠢く竜の気配を知りながら、野放しにしておくこと  
もできなかつた。下手をしたら、自分たちの思い描く未来や志を無に  
帰される可能性だつてある。

滅びを受け入れることなど許容できない。ましてや、真竜による脅  
威は近づいてきているのだ。いつか必ず、VFDは目覚め、この星の  
命と文明を喰い尽くす。そのいつかは、自分たちの目前に迫っている  
のだ。

確かに、嘗ての祖父母——ミカゲやユイと同じように、竜災害に挑  
むということに対する高揚感はある。同時に、それがどんなに無茶苦  
茶なことかも。

……いや、竜戦役での地獄を体感したことのない自分が、覚悟を語  
るのはおこがましい。自分が未熟であることは、自分自身が1番知っ  
ている。

でも、だからこそ、イノリは思うのだ。嘗てのムラクモ13班員が  
願ったように、「未来を守りたい」、「今、自分ができることを精一杯し  
たい」——と。

(そうして、おじいちゃんの想いに応えるために)

イノリは目を閉じる。浮かぶのは、イノリを守るために命を差し出した祖父・ミカゲの背中だった。

イノリたちのことを「俺の希望」と語り、自分自身を引き換えにして守り抜いた彼の最期を、瞼の奥に描く。

『お前が居てくれるなら、お前たちが居てくれるなら、きっと大丈夫だ』

遠い昔、英雄譚を語り終えた後。

柔らかに笑った祖父の笑みに応えるかのように、イノリはまっすぐアリーを見返す。

自分たちの返答を確認したアリーは、嬉しそうに破顔した。

## 想いの芽吹き

「すみません。……あの、やっぱりわたし、帰ります。自信、ないし……」

「自分は体が弱いから、ナビをすることはできない。足手まといになつてしまう」——ミオはそう言つて、ノーデンスへの協力／C o d e : V F D の参加を辞退した。彼女はみんなに一礼すると、背中を向けて去つて行く。リヒトはミオの背に手を伸ばしかけたが、悲しそうに俯いた。

戦うことを選ぶ人間が居る傍ら、それを選択しない人間だつている。

当たり前のことだと、イノリの頭の中では分かっていた。

『おじいちゃんのお姉さんはな、生まれながらの秀才全能力A級能力者だつたんだ』

『お姉さんは、S級能力者が如何に特別な存在なのかを叩きこまれながら生きてきた。それは、『秀才全能力A級秀才でしかない自分が、自分よりも優秀なS級能力者を率いる』というコンプレックスを肥大化させる原因になつた。……それを拗らせた結果、過激な能力主義者になつてしまつたんだ』

『おじいちゃんは、そんなお姉さんを止めてやれなかった。生まれながらの天才S級能力者のくせに、彼女に何もしてやれなかった。力を持つ者を有無を言わず戦場に放り込んだり、S級能力者じゃない人を捨て駒にする作戦を執行したり……最後には、力を欲した拳句、沢山の人を喰らつて人竜になつてしまつた』

寂しそうに、哀しそうに、あるいは懺悔するかのように。己が手にかけた怨敵——日傘ナツメ／人竜ミツチのことを語る祖父の姿を、今でもはつきりと思ひ出せる。

『……あの人はただ、誰かから認めてほしかつただけなのにな』

『努力しても報われないんだって事実が辛くて、苦しくて、絶望して、『何をやっても無駄ならば、全部壊せばいい。誰も自分を認めてくれないなら、みんないなくなればいい』という結論に行きついてしまった』

『確かに、あの人がしたことは到底許されることじゃない。……でも、おじいちゃんは思うんだよ。あの人の絶望を打ち砕くことができたから、あんな悲劇は起きなかったんだって』

祖父から見た日傘ナツメは、厳しくも優しい指導者であり、並々ならぬ努力家で、漫才と厚焼き玉子が大好きな女性だった。都庁奪還時の祝賀会では、当時はまだナツメの補佐官だったキリノと一緒に漫才を披露していたという。

そう語る祖父から当時の映像を見せてもらったが、はたしてそこには、祖父の言葉通りの女性がいた。柔らかな微笑みながらキレのあるボケをかまし、相方のキリノからびしりと突っ込まれて笑う、日傘ナツメの姿があった。周囲から響く笑い声からして、2人の漫才が好評であることも伺えた。

もし、普通の人々がこの映像を見たら、誰もこの女性を日傘ナツメ——人竜ミツチと結び付けることはできなかつただろう。人類の裏切り者という存在からは、漫才で見事なボケ役に徹したナツメの姿なんて想像つかない。閑話休題。

『あなたには戦う力、ひいては世界を救うための力があるわ。戦場に出て戦うことは、力ある者の義務であり、責務なのよ。そこには、一切の疑問の余地はない……分かるわね?』

2020年の竜戦役で、祖母のユイたちはなし崩し的にムラクモ13班に所属することになったそう。戦うことを選んだのは本人たちの意志だったそうだが、当時のムラクモ総長だったナツメは、既に13班に所属していたミカゲ以外の面々をこう説得したらしい。

最初は乗り気でなかった祖母も、力ある者の責務とあればと納得し



て戦いに参戦したという。当時は致し方のないことだが、冷静に考えてみると、一種の脅迫である。ナツメは暗に「力があるくせに逃げるのか？ そんなの許されない。戦え、問答無用だ」と言っても同義なのだ。

切羽詰っていた2020年代とは違い、ひたひたと近づいてくる脅威を感じる程度のU・E<sup>現</sup>・77年<sup>代</sup>には若干の余裕がある。そのため、よっぽどのがなければ、『本人が嫌がっているにもかかわらず、強制的に徴兵される』という事態は起こりにくい。それは、ノーデンスという企業にも言えることだった。

「残念ね。でも、戦う意志のないコを戦場に引きずり出すことはできないわ」

ジュリエッタは深々とため息をつく。そうして、彼は静かに目を閉じて、呟くような声色で言った。

『力に固執すると、自身が道を踏み外してしまったり、それに巻き込むような形で他人の人生を狂わせてしまうことに繋がる』もの」

「ジュリエッタの尊敬するセンセイの格言だね☆」

「厳密に言えば違うわよ。この言葉をアタシに贈ってくれたのは、恩師の叔父さんにあたる研究者。アタシにとっては雲の上のような人よ。……その人も、『友人からの受け譲りだよ』って笑っていたわ。だからこれは、又聞き之又聞きってワケ」

ジュリエッタはどこか懐かしむように遠くを見つめた。すかさずアリーが補足を入れる。それは不完全だったようで、ジュリエッタ本人から修正が入った。

ジュリエッタの言葉を聞いた3人は、思わず目を点にした。学園で行われたOB・OGの講演会で、似たような格言を引用して話をしてきた人物がいたことを思い出したからだ。

自分たちの記憶が正しければ、その格言を引用していた人々は、渡

来ミカゲの授業を受けた”という共通点があった。そして、キリノに次いで彼と懇意にしていた研究者の筆頭は――。

「もしかして、その人――」

イノリたちがその人物の名前を挙げようとしたとき、突然爆発音が響いた。大地を揺るがすかのような振動に、思わずイノリたちは身を伏せた。戦闘訓練の賜物である。

爆発音に紛れ、重低音の唸り声が耳障りだった。ぞわり、と、得体の知れぬ感覚が背中を撫でる。怨敵が降り立ったことを伝える、本能的な警笛だ。

「何!? 今の音……」

「オイ、ヤバイことになった!!」

「ぬおおおおお!!? ナガミミツ!? お前、どこから!」

突然姿を現したナガミミに驚いたジュリエッタが、野太い悲鳴を上げてのけぞった。オネエになる以前の彼のことが気になる態度であるが、今はどうでもいい。

「ジュリエッタ、まーた顔と声がオッサンに戻ってるゾ☆」

「あ、あらいけない。……というか、あんたはこんなときでも平常運転なのね……」

アリーの指摘を受けたジュリエッタは、取り繕うように顎に手を当てた。爆発と振動にも笑顔を崩さない社長の様子に、技術主任はげんなりとした様子で肩をすくめた。

あの爆発音の正体を知っているのはナガミミだった。切羽詰った声で、マスコットは何があったかを報告する。ノーデンス社のエントランスにドラゴンが出現したらしい。

しかも、単騎ではない。群れだ。奴らは傍若無人にこの地を踏み荒

らしているという。その話を聞いた途端、イノリの中から何かが沸々と湧き立ってきた。

狩らなければならぬ。竜を狩らねばならぬ。

「すべての竜を狩り尽せ」——この衝動を、何と言おう。

「こんなの、予測よりずっと早いじゃない！　ねえ、アリー!!」

ジュリエッタは悲鳴に近い声を上げた。藤色の瞳は、縋りつくかのようにアリーに向けられている。それを真正面から受け止めたアリーは、考え込むように顎に手を当てて思案した。

真面目な顔になったのはほんの一瞬。

次の瞬間、彼女は緩く笑いながら状況を確認する。

「ナガミミ、ISDFは？　こんなときのための国際自衛軍でしょ？」  
「こつちに向かっているみたいだが、到着するにはまだ時間がかかるだろうな」

「オケ。すぐ入り口を封鎖して。対処はISDFの到着を待とう」

「待って！」

「待ってください！」

「ちよつと待て！」

2人の会話に割って入るように、イノリたちは声を張り上げた。まさか3人一緒に同じような行動をするとは思わなくて、イノリたちははたと顔を見合わせる。

金色の瞳も、紫苑の瞳も、イノリと同じ想いを滲ませている。2人もまた、イノリの想いを受け取ったのだろう。満足げに頷き、アリーたちへと向き直った。

「ISDFの到着を待っていたら手遅れになるよ！　セブンスエンカウントに遊びに来ていた一般人はどうなるの!？」

「ドラゴン襲撃に対しての措置が避難誘導だけでは不十分です。奴ら

を食い止めないと……!」

「犠牲者を減らすためにも、このまま手を拱こまぬいて見ていることは得策ではないだろう」

「何言ってるのよ!? 中途半端な戦力じゃあ二次被害の恐れがあるわ。それに、ノーデンスに雇われた人間が武器を持って外に出ようものなら、即座に逮捕されちゃう。ISDFの規定を知らないわけじゃないわよね?」

詰め寄るように、イノリたちは言葉の機関銃を唸らせる。その勢いに気圧されながらも、ジュリエッタは屹然と言い返した。

ISDF以外に武力を有する民間組織は幾つかあるが、数はそんなに多くない。民間組織が武力を有するためには、ISDFに許可を申請しなくてはならない。厳しい審査基準を超えて特別許可を勝ち取ったとしても、次に待っているのはISDFからの監視である。

活動内容の報告と購入・開発した武器の内訳を逐一書類に記入して提出しなければならぬし、定期的にISDFの臨時検査が入る。「最近は何もなしの抜き打ちで行うため、常に気を張っていないければならない」と頭を抱えていた、世界救済会の役員の姿を思い出した。

個人が自衛手段として武器を有するのは良いが、ISDFの許可を得ない民間団体に所属する人間が武力を有しているのは、あまりよろしくない事態だ。場合によっては、その民間団体が厳しく罰せられたり、その民間団体が開発した技術が軍に徴集されることもある。

アリーやジュリエッタが「ISDFの到着を待つ」と頑なになるのは、ISDFにノーデンスの計画——ドラゴンクロニクルの完全解明／Code:VFDを勘付かれたくないのだろう。人類を救うための希望を、軍事利用されることを恐れているのかもしれない。

「アンタたちはCode:VFDの要なんだから、自分の価値を考えた行動をして頂戴!」

藤色の双瞼が、空色、金色、紫苑の瞳と派手に火花を散らす。

誰一人として、己の意見を譲ろうとしない。

『——大丈夫』

『おじいちゃんが、守ってやるから』

イノリの脳裏に浮かんだのは、眩しいものを見るかのように笑った祖父の姿だった。

紫苑の瞳に宿るのは、揺るがない意志と覚悟。——そうして彼は、死んでいった。イノリたちを守るために。

先の大戦で亡くなった命を痛んでいた祖父の背中を、失われてしまった命を想う祖父の言葉を、イノリは誰よりも近い場所で見えた。

命の優先順位に従って、ムラクモ13班を守るために死地へ赴いた人々の話を、何度も聞かされた。自分は英雄ではないのだと、皮肉気に笑う姿を見てきた。

13班が人類の希望であるために、誰かの命を踏み台にした。だから、歩みを止めることは絶対にできない。それは、彼らに対する裏切りと冒涇になる。

“キミは力があるから、キミは希望だから”——そんな理由で、目の前で築かれていく屍の山を許容しなければならぬのか。

犠牲を『仕方がないこと』だと割り切らなければならないのか。諦めなくてはならないのか。……そんなの、嫌に決まっている。

「——『みんな、居なくなるんだ』」

「え?」

『“ムラクモ13班は人類の希望だから”って、みんなみんな、俺たちのために死んでいくんだ。俺たちには、そんな大層な価値なんてないのに』』

祖父の言葉を諳んじる。

「……おじいちゃんは、いつもそう言ってた。いつも、そのことで悩んでた。……最も、そう言ってた張本人は、その人たちと同じように、<sup>私たち</sup>希望を守って死んじゃったけど」

イノリの言葉を聞いたジュリエッタは、はっとしたように目を見開いた。

「あなたは」と、酷く震えた声で言葉を紡ぐ。イノリは口元を歪ませた。

「もう、あんなことは嫌なんだ。〃力があるから、希望だから〃——そんな理由で、目の前で築かれていく屍の山を、手を拱いて見ているしかないのは」

「——ええ、そうですね」

「——ああ、そうだな」

血反吐を吐くような心地で紡いだイノリの言葉に、リヒトとソウセイは頷いた。自分たちの決意が伝わったのか、ジュリエッタの藤色が揺らぐ。

次の瞬間、会議室のモニターに、ノーデンスの入り口広場が映し出された。白い翼竜の群れが、我が物顔でエントランスを蹂躪していた。

パニックに陥った人々が我先にと逃げ出す中、見覚えのある若芽色の髪の少女——ミオの姿が映し出される。彼女は頭を抱え、身を震わせながら蹲っていた。

つい先程別れたばかりなのだ。ドラゴンの襲撃に巻き込まれている可能性も視野に入れるべきだった。

リヒトが大きく目を見開く。普段は落ち着いていて穏やかな青年の顔は、焦燥に染め上げられた。

「っ、ミオ！」

「ああ、リヒトくん！」

彼はイノリの制止を振り切るようにして駆け出した。

「ちよつとだけ、待ってくれるー?」

それに続こうとするイノリを、アリーが引き留める。

振り返ったイノリとソウセイを見たアリーは、満足げに微笑んだ。

「——うん、イイよ。その意志に従って、やってごらん」

「ボス!」

「キミたちが本物の『狩る者』であるなら、誰もキミたちの意志を止められないよ」

まるで、母親が子どもを慈しむかのような眼差しが向けられる。初めて顔を合わせたときの天衣無縫な空気は成りを潜め、気高く美麗な慈母が佇んでいた。

一瞬、ここにいるアリーは先程のアリーと同一人物なのかと疑いなくなった。驚いたのはイノリとソウセイだけではない。

この場に居合わせたジュリエッタやナガミも同じ気持ちだったようで、2人は惚けたように上司を見上げていた。

幾何かの間を置いて、ジュリエッタはやれやれと言わんばかりにため息をつく。それは一瞬のことで、彼はすぐに力強く笑ってみせた。

「……成程。お手並み拝見、つてコトね。まっかせなさい! ——それなら、腹括つてサポートするわよー!」

「わかったよ。なら、コレを持ってけ」

ナガミはぶつきらぼうに何かを放り投げてきた。時計を模した端末であり、ホログラムにはナガミやジュリエッタ、アリーの3人が浮かび上がっている。

「こいつは、オレ様たちと会話できる夢の通信機器だ。便利なんだからダセエとか言うなよ?」

これはノーデンスが開発した特別な通信機器——ノーデンスウオッチだ。この端末を介して、3人はイノリたちのバックアップを行うという。

他にもあると言って、ナガミミは薬品類を並べた。暁学園の戦闘訓練実習で配られる薬品類——メデイカやマナ水である。

悪態をつきながらも、ナビゲーターに立候補したのはナガミミだ。やはり、口は悪いが悪人ではないらしい。むしろいい人の部類だった。

イノリとソウセイは顔を見合わせた後で、3人に礼を述べた。

そうして、先に駆け出してしまったリヒトを追いかけて、会議室を飛び出した。

\*\*\*

『いいか? ここから先はゲームじゃねえ。切れば血が出る、刺せば死ぬ。リアルで楽しい、現実世界だ』

ホログラムで表示されたナガミミが、2人に語り掛ける。

『ようやく見つけた狩る者に、こんな所で死なれちゃ困るんでね。助けるつてのがオマエらの意志なら、せいぜいうまくやるんだな。あのメガネにもしっかり伝えとけ。フヒヒヒ……』

ナガミミが不気味に笑ったのと、イノリとソウセイがノーデンスのエントランスから飛び出したのはほぼ同時だった。広場では、白い翼竜たちが縦横無尽に闊歩し、人々に襲い掛かっている。赤い毒花——フロワロの花が至る所に咲き乱れていた。

その中に、探し人であるミオとリヒトを見つけた。リヒトはミオを



後ろ手に庇いながら、カードをかざす。氷属性であることを示す青い光が弾け、ローパーを横した氷のマモノが現れた。

氷のマモノは怯むことなく翼竜に殴りかかる。その一撃を喰らっても尚、白い翼竜はリヒトに襲い掛かった。ミオを庇うリヒトは、翼竜の攻撃を受け止めるしかない。それを加味した上で、彼は罨を仕掛けていたようだ。

「トラップ発動！」

鉄条網と落とし穴——やはり、複数のトラップを重ねかけていたらしい。翼竜の体を鉄条網が切り裂き、大きな落とし穴が翼竜の下半身を飲み込む。

しかし、トラップの追加効果——所謂状態異常は発生しなかった。白い翼竜は忌々しそうに嘶き、傷だらけのリヒトを睨みつける。

手札を使い果たしてしまったようで、リヒトは苦い表情を浮かべた。行くも地獄、引くことも叶わない。彼の状況は、完全なジリ貧状態のようだった。

「リヒトくん！」

「リヒト！」

イノリは双刀を鞘から引き抜き、白い翼竜に斬りかかった。炎を纏った太刀——裂きモミジを浴びせる。

ソウセイは銃を構え、翼竜に狙いを定めて引き金を引いた。銃弾は翼竜の片目を貫き、奴の視界をふさぐ。

2人はリヒトを庇うように躍り出る。それを見たりヒトは掠れた声でイノリたちの名前を呼んだ後、満面の笑みを浮かべた。

「遅いじゃないですか！ 何やってたんです？」

「ナガミミから便利アイテムを貰ってたんだ。ちよつと待ってろ」

ソウセイはそう言うなり、くつりと笑った。諜報員の得意分野には、既存の道具の効果を向上させることも含まれている。所謂、トリックハンドという便利技だ。

便利技の恩恵は充分だったようで、メデイス1つでリヒトの傷はあっという間に癒え、マナ水1つですつからかんになりかけていたマナも充分すぎるくらいに回復した。

「ありがとうございます。それじゃあ、反撃開始と行きましょう！」

——ドローフェイズ！」

普段の調子を取り戻したりリヒトは不敵な笑みを浮かべ、山札から数枚のカードを引き出した。いいのが引けたようで、リヒトは表情を綻ばせた。

イノリは赤火の呼気を使って呼吸を整える。それだけでは心もとないので、黒鋼の吸気も重ね掛けしておく。前者が攻撃を上げる長期戦向けの強化術なら、後者は防御を上げる長期戦向けの強化術だ。

視界の端でソウセイがハイディングを使い、身を潜めた。ブツシュトラップによる奇襲戦法で攻めるつもりなのだろう。翼竜は自分の目を潰したソウセイを狙い、炎を吐き出した。だが、視界の悪さと身を潜んでいたことが相まって攻撃が外れる。

勿論、ソウセイが反撃しないはずがない。彼はどこから狙撃した。翼竜の羽に風穴が空く。堪らず、翼竜が悲鳴を上げた。そこへ向かってイノリは駆け寄り、飛天斬りを叩きこんだ。片翼をぎつくりと斬られた翼竜がよろめく。

そのタイミングを待ち構えていたかのように、リヒトがカードを掲げた。

先程と同じ氷属性のカードだが、描かれていたのはローパーではない。シカだ。

「集中……！」 —— 獄冷のマモノよ！」

マナが弾け、シカを模した氷のマジユウが姿を現す。マジユウは高らかに嘶くと、自慢の脚に冷気を纏わせる。

マジユウは一足飛びに翼竜の眼前に躍り出ると、白い翼竜に蹴りを叩きこんだ。冷気が爆ぜ、翼竜は悲鳴を上げながら崩れ落ちた。

途端に、竜が立っていた場所から赤い花弁が舞い上がる。翼竜の命を絶った証拠だ。3人は慌ててミオに向き直る。

ミオは啞然とした表情のまま、倒れた翼竜とリヒトの顔を見比べていた。

「嘘……あんなに大きなドラゴンを、倒したの……?」

「ミオ、怪我はありませんか?」

「う、うん。わたしは大丈夫……」

リヒトは即座にミオの容体を確認する。逃げている最中に転んだのか、手足や膝に擦り傷があった。リヒトに庇われている間も攻撃の余波を受けたようで、服や顔の所々が煤を被っている。しかし、命に関わるような怪我はしていないようだ。それを確認したりヒトは、「ああ、良かった」と微笑んだ。

次の瞬間、別方向から青年の悲鳴が響いた。多くの観光客が戦き、慌てふためく気配を察知する。イノリの背中に悪寒が走った。狩る者としての本能が、脅威を感じて警笛を鳴らしたのだ。白い翼竜たちは天を仰ぐと、広場の端へと移動し首を垂れる。——さながら、皇帝の眼前で跪く臣下たちのように。

奴らを働きを劳うかのように、新たなフロワロの花が開花している。赤い花弁が不気味に舞う中、翼竜たちを束ねる親玉が飛来した。

白い翼竜より二回りほど大きな赤い軀に、虹色の光彩を持つ翼を有したドラゴンだ。先程、この場を荒らしまわっていた白い翼竜たちとは比べ物にならない殺気が漂う。

赤竜は己の降臨を餌どもに告げるかの如く、高らかに吼えた。大地をひっくり返してしまうかのような雄たけびである。ミオは恐怖で身じろぎした。

何者にも揺らがぬ威風堂々とした佇まい——文字通り“皇帝”の名が相応しかろう。あれが、世界中で暴れまわる群れの王者／指揮官、帝竜なのか。本物を見たのは初めてだ。

『オイ、イノリ！ リヒト、ソウセイ！ 聞こえるか？』

ノーデンスウオツチに、ナガミミのホログラムが表示される。毒舌マスコットの声は、どことなく切羽詰った響きを宿していた。

『いま来たヤツは帝竜クラスだ！ ヤツの強さは、さっきの竜の比じゃねえ。今のお前らじゃ瞬殺されるぞ！ コムスメ連れて、さっきと戻ってこい！』

何やら重要なことを言われているような気がするのに、どうしてか、ナガミミの声が遠く感じる。周りの喧騒から切り離されたように、イノリの周辺は不鮮明だった。

まるで、蜃気楼が視界いっぱい広がっているみたいだった。その中で、仲間たちの気配と、視界の中央に鎮座する赤い帝竜だけが鮮明に見える。

イノリは吸い寄せられるように一歩踏み出した。自分の中で、何か鮮明に叫んでいる。

それはやがて明確な意志となり、自分自身を突き動かす。一歩、また一歩、歩を進めた。

どうやら、帝竜の元へ歩み出したのはイノリだけではない。リヒトとソウセイも歩み出す。

「嘘……そんな、信じられない」

ミオが、酷く震えた声で呟いた。不鮮明に揺蕩う世界の中で、彼女の言葉は妙にはつきりと響く。

「あんなのと……戦うつもりなの……？　ダメだよ、そんなことしたら！　絶対死んじゃうよ!!」

足を止めて振り返った。こちらを見つめるミオの瞳は、恐怖と不安で揺れている。若草色の瞳は涙で滲んでいた。程なくして、彼女の涙腺は決壊した。ぽろぽろと雫が溢れだす。

そんなミオをみて、堪らなくなったのだろう。リヒトは彼女の元へと歩み寄り、ポケットからハンカチを取り出して彼女の涙を拭いた。帝竜への恐怖で縮こまるミオに笑いかける。

「大丈夫ですよ。全員助けてみせます」

ね？　と、リヒトはイノリとソウセイに視線を向けた。ああ、と、ソウセイが即座に返答して目を細める。

「そうだね。……行きましょう、みんなを守りに！」

「はい！」

「ああ！」

イノリも頷いた。そして、帝竜の咆哮に対抗するが如く音頭を取る。2人は力強く微笑んで頷き、帝竜へと向き直った。

相変わらず、世界は蜃気楼に包まれたまま。鮮明に見えるのは、自分たちを敵と見定めた帝竜だけだ。

ミオが震える声で紡いだ言葉も、ナガミミが切羽詰ったような声で紡いだ言葉も、どこか遠い出来事のように思う。

啞然と腰を抜かす観光客の間を歩く。気づけば、観光客も帝竜の取り巻きたちと同じように、広場の端やセブンスエンカウントの施設内へと身を潜めたり、道を開けるように後退りしたりして、道を開けた。幾何の間もなく、イノリたちは帝竜の眼前に立った。帝竜はじろりとこちらを見返す。

奴は何の感慨もなさそうにイノリたちを眺めていたが、喰らう対象

に認定したのだろう。

赤い帝竜は高らかに咆哮すると、イノリたちを極刑に処すために身構えた。イノリたちも得物を構えて帝竜と対峙する。

（「狩る者よ、すべての竜を狩り尽せ」——！）

イノリの奥底から溢れた思いが、意志となって体を突き動かす。帝竜との戦いの火蓋は切って落とされた。

「よし、長期戦に備えるよ！」

「了解です！ セオリー通り、罠で迎え撃ちましょう！」

「分かった！ 道具に関する援護は任せておけ！」

イノリの言葉に従うように、リヒトが罠を設置し、ソウセイがトリックハンドを使って道具の効力を引き上げた。イノリも2つの呼気を使って身体能力を強化する。

帝竜はじつとこちらを見つめていた。ニンゲンどもの価値を値踏みしているかのように、帝竜はみくだこちらを見下している。そのまま、イノリたちは攻めに転じた。

ソウセイが銃を構えて引き金を引いた。弾は帝竜の眉間を掠める。そこへリヒトが雷のマモノを召喚し、帝竜にけしかけた。紫電の爆ぜる鱗粉に、帝竜はうっとおしそうに唸った。

彼らの攻撃を合図に、イノリは双刀を構えて走る。勢いそのまま、イノリは裂きモミジを撃ち放った。焰を纏った太刀筋が、帝竜の眉間を傷つける。

怒りに火がついたのか、帝竜が苛立たし気にイノリたちを睨む。奴はゆったりとした動作で——けれども、容赦なくリヒトに向かって爪を振り下ろした。

彼は間一髪のところ回避したが、彼が数秒前まで立っていた場所は瓦礫の山ができています。爪の一撃の余波だけでリヒトはかなりの傷を負ったようだ。

(もしあれが直撃だったら——)

本当に、ぞつとする光景だ。リヒトは転んでもただでは起きないよ  
うで、即座にトラップを発動させた。鉄条網と落とし穴が、帝竜に牙  
を向く。

巨体は落とし穴で傾き、鉄条網が帝竜の皮膚を切り裂く。だが、帝  
竜は罠に怯むことなく——むしろ罠ごとぶち壊すかのように爪を振  
るった。

帝竜が次の得物として狙いを定めたのはソウセイである。ソウセ  
イも寸でのところで攻撃を回避したが、やはり受けるダメージは大き  
かった。

「まったく、笑えないな……」

ソウセイは舌打ちしながらアイテムを放り投げてきた。トリツク  
ハンドのおかげで、治療薬は帝竜から受けた傷を癒すのに充分効果を  
発揮してくれた。

「風のようにー!」

怒り任せに動こうとした帝竜に割り込むが如く、イノリは双刀を振  
るった。

帝竜の体がぐらりと揺らぐ。相手の動きを一時的に妨害すること  
ができる技、影無しだ。

「油断が命取りだぞ」

「集中……! ——炎熱のマモノよ!」

体勢が崩れた帝竜へ、ソウセイとリヒトが攻撃を仕掛ける。前者が  
至近距離からの射撃——ニーブレイクで、後者がワームを横した炎の

マジユウを召喚して攻める。ほんの一瞬、帝竜の体がぐらついた。帝竜は重低音の唸り声を上げながら、こちらを睨みつけてきた。奴の視線を例えるならば、邪魔な羽虫をうつとおしがる人間の眼差しと大差ない。帝竜は空に向かって高々と咆哮すると、力をため込むように身構えた。

「何か来るー！」

「く……！」

「ちい……！」

イノリたちは慌てて防御の姿勢を取り——次の瞬間、暴風のように吹き荒れた一撃によって派手に吹き飛ばされた。受け身を取る間もなく、イノリは地面に叩き付けられる。

体中が軋むように痛んだ。呻きながらも体を起こせば、帝竜が尻尾を地面に叩き付けているのが伺える。イノリを弾き飛ばした攻撃の正体は、帝竜の尻尾による薙ぎ払いだった。

見れば、ソウセイとリヒトもあの攻撃によって弾き飛ばされたようだ。2人とも地面に叩き付けられたらしく、地面に倒れ伏している。2人の呻き声が耳を掠めた。

帝竜は相変わらず、涼しそうな顔をしてイノリたちを見下みくだしていた。イノリたちが与えた傷も、奴にとっては大したことがないようだ。この場に君臨する王の如く、帝竜は吼えた。——さながら、身の程知らずの愚か者に極刑を与えんと言わんばかりに。

だから何だ。イノリはよろめきながらも、半ば無理矢理体を起こす。

だからどうした。体の痛みを無視して、イノリは得物を構えて帝竜を睨む。

（「すべての竜を狩り尽せ」——！）

イノリの奥底から溢れた思いが、意志となって体を突き動かす。



「……まだ、折れちゃいない……!」

自分たちは知っている。何度無様に叩きのめされても、沢山の人を守るために立ちあがった人たちのことを。

自分たちは知っている。何度も躓いて転んでも、沢山の人たちに支えられて戦い抜いた人の背中を。

自分たちは知っている。——最期の最期まで諦めることなく、逃げることなく、大切な人を守るために戦い続けた英雄の背中を。

体を起こしたのはイノリだけではない。地べたに這いつくばっていたリヒトとソウセイも、よろよろと立ち上がる。イノリの後に続くかのように、2人も武器を構え直した。

ノーデンスウォッチから雑音が聞こえる。ナガミミのホログラムがしきりに何かを訴えているけれど、今はそれよりも重要なことがあった。目の前の帝竜である。

「みんなを、守るんだ……!」

「……そのためにも……僕らは、アレを倒さなければ……!」

「まだだ……まだ、戦えるぞ……!」

壊れかけた四肢を引きずって、頼りなさげによるめきながら、それでも大事なものを守りたくて、ここに立つ。己の意志で、帝竜を討つことを選んだ。

『チツ……死ぬまでやるつもりかよ!!』

苛立たし気な舌打ちが、どこか遠くから響いてきた。それをかき消すかのように、帝竜が吼える。

イノリたちも身構え、応戦しようとし——次の瞬間、何かが帝竜の真横に叩きこまれた。

「え——」

一体何が起こったのだろう。イノリたちは思わず、攻撃が飛来した方向へ視線を向けた。そこには、ISDFの制服を着た軍人たちが武器を構えている。中でも目を惹くのは、ISDFの中でも地位のある人間が身に纏う制服を着た、壮年の男性と爽やかな青年である。

前者も後者も、場馴れしているという貫禄が伺えた。歴戦を乗り越えてきた男たちである。到底、イノリたちのようなひよつこが及ぶ相手ではない。啞然と見ているうちに、壮年の男が部下たちに的確な指示を出した。上司が上司なら部下も優秀なようで、軍人たちは即座に己の役割を果たしに駆ける。

「お前たちが食い止めたのか」

「あ……」

鮮やかな指示を出した男が、厳かな眼差しを向けてきた。怒っているのか、褒めているのか、面白がっているのか、呆れているのか、ぱつと見て判断がつかない。

何と答えればいいのか／＼どう反応すればいいのか分からなくて、イノリは思わず視線を彷徨わせる。リヒトやソウセイも同じようで、何とも言い難そうな表情を浮かべた。

しかし、彼らがイノリたちに興味を示していたのはごく短時間だった。ISDFの高官軍人は、威風堂々と君臨する帝竜へと視線を向け直す。彼らの瞳に迷いはない。

「随分手負いですね、ヨリトモ提督。こいつは俺が引き受けますよ」  
「任せたぞ、ユウマ」

上司——ヨリトモから許可を得た部下——ユウマは、微笑を浮かべて歩き出す。帝竜の睨みを真正面から受けても、彼は一切揺らがない。

それはまるで、己の命と引き換えにイノリたちを守り抜いた祖父の背中みたいだ。問答無用に非の打ちどころのない、天下無敵の「英雄」——その言葉が似合う。

他にどんな例え文句があるのか、今のイノリには思いつかない。ユウマは帝竜との距離を大股で詰めていく。足を止めた彼は、そのまま帝竜と向き直った。

「さあ、掛かってこい。そして身を以て知れ。服従すべきは、どちらなのかを——！」

どこからともなく風が舞う。ユウマの外套がはためき、この周辺に膨大なマナが集まり始めた。異様な気配を察知したのか、帝竜もユウマに狙いを定めた。

ユウマは力をため込むかのように身を屈め、頭を抑えた。何かの痛みに耐えるかのような、苦悶の声が聞こえたように思ったのは何故だろう。

爆発するように湧き上がったマナに、帝竜は怒りをあらわにした。何かの仇を取ろうとするかの如く、帝竜は高らかに咆哮する。

(——っ!!?)

黒を帯びた、どす黒い紫——神々しくも毒々しいマナの輝きに、イノリは釘付けになった。リヒトとソウセイが戦くような吐息を漏らす姿が他人事のように思える。

イノリは、自分の中にある何かがざわめいていることに気づいていた。けれどそれ以上に、ユウマの背中から目を離すことができなかった。

帝竜が容赦なく手を振りかぶる。奴の一撃が叩きこまれるよりも先に、ユウマが右手に収束させたマナを解き放つ方が早かった。

断末魔の悲鳴を上げて、帝竜がその場に崩れ落ちた。帝竜は己に待ち構える死の運命に抗おうとするかのように体を痙攣させていたが、

間もなく沈黙した。

呆気ない。イノリたちが壊滅寸前に追い込まれた相手を、ああも一撃で。リヒトとソウセイの、呆気にとられたような横顔が視界の端にちらつく。

その間にも、ISDFの軍人たちは手早く事後処理に動いていた。上官は部下を労い、部下は涼しい顔をして頷いた。即座に上司は他の部下たちに指示を出した。

「なんですか、あの人……!? 一撃で帝竜を殴り殺すとか、明らかに禍々しいマナとか、突っ込みどころ満載じゃないですか……」

「ISDFの特務部隊に所属しているエースの話は知っていたが、間近で拝む羽目になるとは思わなかった……。大迫力じゃないか」

リヒトとソウセイの会話が、耳に入ってはすぐに抜けていく。首を固定されてしまったかのように、イノリはユウマから視線を逸らせなかった。——いや、逸らさなかった。

他の面々が動き出すの眺めていたユウマが、何かに引き寄せられたかのようにイノリを見た。彼は爽やかな笑みを湛えてイノリの方へ歩み寄ってくる。

「キミたちのおかげで楽をさせてもらいました。どうもありがとうございます」

帝竜を一撃で屠る力の持ち主でありながらも、ユウマという軍人は、謙虚で礼儀正しい好青年だった。非の打ちどころがなさ過ぎて、逆に不安になるレベルである。

しかし、ISDFの現役軍人——しかも、その風貌／若さからして、異例の大出世を遂げた人物であることは明らかである——に褒めてもらえるなんて思わなかった。

何とも言えない照れくささを感じて、イノリははにかんだ。自分のような未熟者には、賛辞の言葉など不釣り合いだ。本来その称賛を浴びるべき相手は、目の前にはいないか。

「私なんて、大したことはないです。貴方の方こそ、凄いですよ。格好良いです」

本当はもつと相応しい言葉があつたはずなのに、出てきたのは陳腐でありきたりなものばかりだ。言葉にできない感謝が伝わればいいのに。それが少し、もどかしい。

ユウマは一瞬驚いたように目を瞬かせた。鳩が豆鉄砲を食ったような眼差しは、すぐに静かで曇りのないものへ戻る。ユウマはゆるりと目を細め、静かに微笑んだ。

「俺は当然のことをしただけです。——それが、俺の使命ですから」

揺るがぬ意志を持った響き。

それは、帝竜を屠る前に語ったときと何ら変わらない。けれど。

イノリには、先程聞いた彼の声よりも、幾分か優しく柔らかい響きのように思える。

心なしか、目の前にいるユウマの表情もまた、温かな感情を湛えているように見えた気がした。

そして、運命は開かれる

ISDFの軍人たちが、事後処理のために駆け回る。彼らは帝竜検体を回収して帰投する班と、怪我人の治療を行う班に分かれているようだった。

「それじゃあ、俺はこれで。キミたちは一般人なんですから、今後は二度と、こんな無茶をしないでくださいね？」

「あ、あはは……以後気を付けます。本当にありがとうございます」

感謝の言葉の次は、やんわりとした忠告が向けられた。戦場を駆け抜けてきた軍人からしてみれば、イノリたちのようなひよつこが帝竜に挑みかかる姿は無謀以外の何物でもない。

自分の未熟さを突きつけられたような心地になって、イノリは苦笑し身を竦めた。ユウマは命の恩人である。彼の言葉を素直に受け止め、イノリは深々と頭を下げた。

ユウマの顔は見えないが、彼が笑ったような気配が漂う。はたしてそこには、イノリの予想した通り——イノリの予想した以上に——柔らかな笑みを浮かべたユウマがいた。

彼は軽く会釈をすると、己の役目を果たすために踵を返した。ユウマの後ろ姿は、あつという間に軍人たちの中に消えていく。イノリはその背中を見送った。

事後処理に奔走する軍人たちを眺めていたイノリたちだが、リヒトが弾かれたようにこの場を見回し始めた。

探し人はすぐ見つかったようで、彼はその相手の元へと駆け寄る。

「ミオ、大丈夫ですか!？」

「え!?! あ、うん。わたしは大丈夫だけど……」

「良かった。帝竜が暴れた際の余波もなさそうですし、安心しました」

傷だらけで、額から血が滲んでいるにもかかわらず、リヒトはミオ

の心配をしていた。ホワイトドラゴン襲撃時以上の外傷が見当たらないことに安堵するリヒトの様子に、ミオはほんのりと顔を赤らめる。

けれど、彼女はすぐに我に返った。ミオもリヒトのことを心配しながら、自分の鞆の中を漁った。取り出したのは大判のハンカチーフで、ミオは拙い手つきながらも額の傷を止血しようとする。彼女の瞳は、感謝と憂いに揺れていた。

思慮深く慎重な性格のリヒトにしては、珍しいこともあるものだ。半日という短い時間で、彼は那雲ミオという少女に打ち解けている。英雄の系譜を継ぐ仲間たち以外では、かなり短い時間であると言えるだろう。

それに、見ていると何とも微笑ましい。イノリがのんびりとそんなことを考えていたとき、どこかから物々しい視線が突き刺さってきた。

出所はISDFの軍人たちに指示を出していたヨリトモである。眉間の皺はより一層深くなり、眉の端が引きつっているように見えた。

(……なんだろう。私がリヒトくんやソウセイくんと仲良くしてるのを目の当たりにしたおじいちゃんみたい)

今は亡き祖父の姿が脳裏をよぎった。リヒトやソウセイを筆頭とした男友達の話をしたり、彼らと一緒に遊んでいる現場を見た祖父が、ヨリトモと似たような表情を浮かべていたように思う。困惑と驚愕、怒りと葛藤——ぐちゃぐちゃに混ざった感情が揺れていた。

そういえば、祖父から「彼氏ができたのか？」と執拗に訊ねられたことがあった。得物片手に、相手の保護者の元へ乗り込まんと息巻く眼差しが印象的だった。

勿論、イノリは滾々と「彼氏はいない」という事実を懇切丁寧に説明した。結果、祖父は居心地悪そうに視線を彷徨わせ、壊れた人形のように謝罪し続けていたか。

祖父のミカゲ曰く、イノリは祖母であるユイに似ているらしい。特に、ミカゲを説教するときの様子はユイと瓜二つなのだという。祖母も大変だったようだ。閑話休題。

リヒトはヨリトモの視線を察したのか、ごく自然な動作で彼に背を向けた。勿論、それとなくミオを庇っている。

ヨリトモがミオを見ていることに気づいていたのだろう。リヒトは彼の眼差しを「ミオに対する不埒なもの」と認識したようだった。

「……………」

「……………」

ヨリトモとリヒトが視線の応酬を開始した。互いが互いに対する不信感をむき出しにして、激しく睨み合っている。

しかし、ヨリトモはリヒトから逃げるように視線を逸らす。何かを振り切るかの如く、ヨリトモは部下たちへ指示を出した。

イノリは軍人たちへと視線を戻す。いずれ、自分も彼らと同じ組織に属し、彼らと同じように人を守るのだ。いずれ来るであろう未来に思いを馳せながら、彼らの背中を見つめていた。

\*\*\*

ISDFがノーデンス社の入り口から撤収したのは、日が傾き、そろそろ太陽が沈む時間帯だった。帝竜や翼竜の襲撃によって荒れ果てた大地が広がっている。

だが、イノリたちの無茶が功を制したのか、被害は大したことがなかったようだ。「怪我人はいるが、死者は1人も出なかった」という報告を聞いたアリーは満足げに笑った。

「しかし、どうする？　ありやあ完璧にマークされたぞ」

「予定より早いけど、仕方ないわね。いつかはバレることだもの」



ナガミミは面倒くさそうに肩をすくませた。ジュリエッタも額に手を当てて息を吐く。しかし、彼は切り替えるように頷いた。

「ノーデンスが真竜検体を収集している」という事実は、現段階では伏せておくつもりだったようだ。

計画を見直すように、彼は顎に手を当てて思索する。頭の回転の速さが、ノーデンスのNo. 2/ブレーションとしての才能なのだろう。

アリーは楽しそうに笑いながら、イノリたちの方に向き直る。

「初めての实战はどうだった？」

「うーん……戦い終えた直後は何とか生きてるなあって思っていましたけど、今は勝てなかったことが悔しいかな」

「そうですね。僕らはまだまだ未熟者なんだと痛感しました」

「克服しなければならぬ点が沢山ある。改善の余地も見つかった。次は負けない」

実践のことを思い出しながら、イノリは苦笑した。

リヒトとソウセイも苦笑したのち、真剣な面持ちで頷く。

嘗てのムラクモ13班も、敗北を喫してから巻き返すように強くなった。自分たちではどうしようもない壁にぶち当たりながらも、仲間たちの援護を得て、竜を倒してきたのだ。

イノリたちは彼らと同じものにはなれないが、彼らと同じように強くなりたい。

その決意を固めた自分たちの姿に、ジュリエッタは感嘆の息を吐いた。

「けど、初戦であそこまでやれたら充分よ？ 普通のコならとつくに死んでるもの」

「まったく、マジで生きてるのは奇跡だぞ。長生きしたきゃ少しはオレ様の言うことも聞けつつの。……むしろ長生きしてくれよ。オレ様の精神安定的な意味で」

ナガミミは面倒くさそうに悪態をつく。ナビゲーター役を買って出たナガミミには、本当に迷惑をかけてしまった。引けと言ったマスコットのアドバイスを無視し、帝竜に挑みかかったのはイノリたちである。

言うことを聞かない問題物件——真瀬ブレイクの暴走という爆弾を抱えているためか、ナガミミの言葉は非常に重たい響きを宿している。イノリたちの無謀な行動が、ナガミミの災難をフラッシュバックさせたのだろう。なんだか申し訳ない気持ちになった。

「だけど、これで決まりだね！ 初めての対竜戦でここまで戦えるなんて。——ゼツタイ、この街にいると思ったんだ。竜を狩る者が！」  
「ちよつとアリー。嬉しいのは分かるけど、年甲斐もなく跳ねるんじゃないの」

アリーは嬉しそうにぴよんぴよん跳ねる。ジュリエツタはそんな上司の姿に苦笑した。彼がそんな表情を浮かべるのは、それだけが原因ではない。

ジュリエツタはイノリたちを見つめながら肩をすくめた。傍から見れば、イノリたちは普通の学生にしか見えない。

外見だけでは、戦う力を有しているようには見えないのだろう。いくら特別な力を持っていたとしても、S級能力者は“ニンゲン”なのだから。

そんな話題で盛り上がったとき、ミオがこちらへ駆け寄ってくるのが見えた。もう既に家へ帰っていると思っていたため、イノリたちは目を瞬かせる。彼女はイノリたちに礼を述べ、ぺこりと頭を下げた。

「あの、助けてくれてありがとう」

「いえいえ、当然のことをしただけですよ」

「そうだね。私たちはみんなを助けたくてやったんだから」

リヒトとイノリは満面の笑みを浮かべて頷き返した。ソウセイは何かを言う代わりに、目を細めて頷く。

ミオは目を瞬かせたけれど、首を振った。イノリたちが成そうとしたことは、並大抵のことではないのだと。

「当たり前のことじゃないよ。普通の人だったら、怖くて動けなくなるのが当たり前だもん。……自分の命を懸けて誰かを守るなんて、誰にでもできることじゃないんだよ？」

自分は怖くて震えているだけだった、と、ミオは悲しそうに俯いた。その姿が、嘗てのイノリと重なる。

「分かるなあ、それ。私も、命懸けで守ってもらった人間だったから」「え？」

「私のおじいちゃんは、私たちを守るために、私たちの目の前で死んじゃったんだ」

祖父の死の現場に居合わせていたりヒトとソウセイは、当時のことを思い出したのだろう。痛みを堪えるように俯いた。彼らの表情には影が滲む。

イノリたちはミカゲによって生かされた人間だ。彼の最期の背中、イノリの瞼の奥に焼き付いて離れない。文句の付けどころのない、完璧な正義の味方。

どうして自分は何もできなかったのかと悩んだことがある。どうして自分が生き残ったのだろうと悩んだことがある。あの頃の自分は、ずっと泣いてばかりだった。

『だったら、キミが証明すればいい』

『彼が命を賭けて救う価値が自分にはあったのだと、証明すればいい』  
『そのためには、キミはもっと強くならなくちゃいけない。こんなところで泣いているような暇なんてないんだ』

祖父の葬儀で出会った少年の言葉を、イノリは今でも覚えている。彼の言葉に、目が覚めたような心地になった。

ミカゲに守られた命として、ミカゲが信じた希望として、恥じない生き方をしたい。

彼が命懸けで切り開いてくれた未来を受け取った人間として、自分にできることを成し得たい。

「いつか私も、大事なものを命懸けで守れるような——誰かの未来を切り開き、希望を繋げるような人間になりたい。おじいちゃんがそうやって、私たちを守り抜いたみたいに」

その想いが、イノリを突き動かす意志となるのだ。胸の奥底に咲いた小さな白い花を抱えるように、イノリは胸の前で手を組んだ。

イノリの誕生花、エーデルワイスだ。花言葉は勇気、大切な思い出。イノリにとってこの花は、花言葉通りの意味を持つ。

少年がくれた言葉を心の中で何度も思い返しながら、イノリはゆるりと目を細めた。胸の奥から温かいものが溢れてきた。

そんなイノリを見ていたりヒトとソウセイは顔を見合わせ、小さく肩をすくめた。

「格好良いこと言ってますけど、やはり僕らはまだ未熟者なんですよね」

「そう易々とはいかないのが世の理というものだ。技術開発も人生も似たようなものだろう」

「……やっぱり、3人はすごいなあ」

ミオは、眩しいものを見るようにイノリたちを見上げた。

若草色の瞳には、羨望の色が滲んでいる。

「どうしてわたしは、何もできないんだろう……」

「ミオ……」

「——っ、ごめんね！ 変な空気にしちゃって……。とにかく、さつきはホントのホントにありがとう！」

泣き出してしまいそうなくらい、掠れた声だった。ミオの様子に心を痛めたりヒトが表情を曇らせ、それを目の当たりにしたミオは慌てて笑って見せる。どう見ても空元気であることは明らかだった。

「このお礼はいつか必ずする」と言い残し、ミオは踵を返した。ドラゴン襲撃時の傷や汚れをそのままにして、彼女は立ち去ろうとする。その背中を、ジュリエッタが慌てて、アリーがゆったりとした調子で呼び止めた。

「ちよ、ちよつと待ちなさい！ アンタ、まさかそんなボロボロのまま帰るつもり!?!」

「キミたちは、ノーデンス社自慢の医療チームがバツチり手当てですよ☆」

「え、でも、私は……」

「んもう、細かいことは気にしないの！ アタシだってヒトの子よ？ ボロボロになった可愛いコちゃんを放置したままにいるなんてできないわ！」

頑ななミオに対し、ジュリエッタはぐいぐいと言い募った。大人しいミオが、積極的にぶつかってくる相手を無視できるはずがない。

ミオは躊躇うように視線を彷徨わせていたが、結局は押し切られるような形で同意する。ジュリエッタは満足げに頷いた。

彼は藤色の瞳をアリーへ向ける。文句は言わせないと訴えるかのような眼差しだ。アリーは朗らかに笑いながら頷き返す。交渉成立のようだ。

「さ、みんなで行きましょう！ 医療セクションの連中、手ぐすね引いて待っているわよ」

「手ぐすねって、私たちは敵じゃないんだけど……」  
「例えの一種よ。だから、細かいコトは気にしないの！」

イノリの突っ込みを流し、ジュリエッタが手招きした。彼はナガミミとアリーと共に、ノーデンスへと歩き出す。イノリたちとミオも、3人の後に続いて歩きだした。



進学先の義務講習を終えて宿泊施設に戻る道中で、シキがISDFの制服を着た軍人たちを見かけたのは偶然だった。

慌ただしい様子の彼らに興味を持ったのも、Keep Outと書かれた黄色いテープの元まで近づいたのも偶然だった。

「また、『多発的な帝竜の出現』かよ。最近多いんだよなあ」

防具に身を包んだ男が、面倒くさそうにため息をつく。出勤が度重なっているためか、他の煩雑な仕事に振り回されている疲れと鬱憤が溜まつてるためか、あくびをかみ殺しきれない響きがあった。

シキは耳を傍立てる。情報収集は大切だと、両親が常々話していたことを聞いていたためだ。

直接話を聞くのも、間接的に噂話を集めるのも、重要度は同じくらいである。

……最も、後者の場合は、慎重且つ念入りに裏を取る必要がある／手間がかかるが。

自分たちの会話に耳を傾けられているとは思っていないようで、ISDFの人々——その中でも噂やお喋り好きな性格なのだろう——は密やかに会話を繰り広げている。

どんな組織にも、口が軽かったり、喋りたくてウズウズしている人間はいるものだ。面倒くさそうな男に、いかにも明るそうな男が声を

かけてくる。

「有明のノーデンス・エンタープライゼス前に帝竜が出現したんだけど、一般人が帝竜に挑みかかってたんだって」

「それ本当か？」

「本当に本当さ。ヨリトモ提督の率いる部隊に、俺の友人がいるんだ。そいつからの情報なんだから間違いない」

「おいおい……。その一般人、正気かよ。下手すれば、そいつらのせいで余計に被害が拡大してたかもしれないな」

「逆だよ。その一般人たちが帝竜の注意を引いてくれたから、被害は最小限に留まったらしい。怪我人はいたけど、死者は出てないって話だ」

「お手柄、ってヤツか。……そいつら、もしかしたら、旧政府でいう“S級能力者”なのかも。上層部が知ったら、あの手この手でISDF<sup>ウチ</sup>に引き入れようとするだろう」

2人の男性は暫し話し込んだ後、上官に呼ばれたためにその場を離れて行った。期せずして手に入ったとんでもない情報に、シキは目を見張る。

ノーデンス・エンタープライゼスといえば、イノリたちがセブンスエンカウントで遊ぶために訪れている施設である。——そこに、帝竜が出現した？

不安に駆られたシキは、慌ててイノリたちに連絡を取ってみる。イノリは出ない。リヒトも出ない。ソウセイも出ない。誰とも繋がらないのだ。

英雄の系譜を継ぐ、特別な幼馴染。互いが互いの理解者であり、信頼できる相手であり、無二の友人であった。

もし、イノリたちに何かあったら——考えるだけで恐ろしい。だが、やみくもに動くのも得策ではないだろう。今から有明へ行ったとしても、到着時間は夜になる。

宿泊施設は軒並み閉まっているだろうし、あの近辺の施設はセブン

スエンカウント目当ての客で賑わっている。到着したとして、泊まる場所が見つかるかどうか。

「……明日の始発から電車に乗れば、お昼過ぎまでには有明に到着する。その間に連絡が取れなかったら、ノーデンスに乗り込めば……」

はやる気持ちを抑え込むようにして、シキは明日以降の予定を立てる。一緒に遊べなかった腹いせに、明日の午前中は観光旅行にでも洒落こもうと思っていたが、観光なんてしていられなかった。

お土産を楽しみにしている面々には悪いが、宿泊施設にある売店の品物で済ませよう。

そうと決まれば、ここでゆっくりしているわけにはいかない。

野次馬たちの海をかき分け大通りへ出ると、シキはタクシー乗り場へと急いだ。



有明の海に太陽が沈む。寄せては返す波の音、空の向こうを悠々と横切る翼竜の影、遠くに輝きはじめた一番星——それらを、眞瀬ブナイチはぼんやりと眺めていた。ブナイチの隣には、相棒であるブラスタレーイブンがぐったりと座り込んでいる。

つい数時間ほど前まで、自分たちは東京に出現した帝竜たちを相手に大立ち回りを演じていた。勿論、周辺住民の避難誘導もばっちりである。帝竜退治もハードだったが、ISDFが来る前に撤収する方が大変だったように思う。

「元から持久力が無い方だったけど、最近はもつと酷いことになってるような気がするなあ。調整はしっかりやってるはずなんだけど……限界が近いのかも」



レイブンは掠れた吐息のような声で呟いた。目元が覆われているせいで表情がよく分からないけど、マスクの下には途方に暮れた深緑が揺れているのだろう。

相棒同様、ブナイチも同じことを考えていた。鬱々とした気持ちのまま、己の手を見る。傷だらけの手は、遠い昔の自分のものと何ら変わりない。

傍から見れば、眞瀬ブナイチは普通の子どもに見えるだろう。外見から推測すれば、大体中学生〜高校1年生程度の年齢と認識される可能性が高かった。

実は、眞瀬ブナイチは病を患っている。真竜の瘴気が原因となる病であり、現代社会に蔓延っている竜班病とは、ルーツ違いの類似”であると言えるだろう。

「……タイムリミット、か」

ブナイチは、自分の手の中にある書類に視線を向ける。自分が患う病が、『治療不能で死を待っただけ』という段階に入ったことが記載されていた。

その書類のページをめくる。2枚目の書類は、前のページとは反対のことが記載されていた。『症状が飛躍的に改善しつつある』という内容である。

(ノーデンスのパートタイマー社員になってからだ。俺の病気が劇的に改善されたのは)

2枚の書類を見比べつつ、ブナイチは眉間に皺を寄せた。

本来、自分が患う病にはステージが2までであり、セカンドステージに移行すると身体機能が著しく衰弱して死に至る。ブナイチはセカンドステージに入った直後であり、症状を和らげる治療薬を大量摂取することで、帝竜と戦える状態だった。相棒の言う調整やエネルギー充填と似たり寄ったりである。

パート社員の面接を受けたときも、履歴書や偽造戸籍に『U. E. 16年に病を発症した』と記載していた。セカンドステージに関することは一切記載していなかったが、社長直々且つ強制的に医療フロアに放り込まれたことで発覚した。クビにされるかと戦々恐々したものの、アリーは気にせずブレイチを雇い入れた。

因みに、ナガミミにはセカンドステージ云々に関する話はしていない。話したら嬉々としてクビにしようとする可能性が高いからだ。惚れた相手に会えないとなったら、ブレイチの寿命は一瞬で尽きるだろう。まったくもって笑いごとではないし、そんなことになってしまっただけは避けたい。

「そう考えると、最近のブラスターキッズは絶好調だな！ ……俺が居なくなっても、キミが居るなら大丈夫だ」

「——『さん』」

『正義の味方・ブラスターレイブン』の調子を崩さずに不謹慎なことを言つてのけた相棒に、ブレイチは咎める代わりに彼の名前を呼んだ。

自分でも申し訳ないと思うくらい、不平不満を込めた恨めしい響き。どうしようもないと分かっているのに諦められない、未練がましい声色だった。

レイブンはブレイチが何を言いたいのか、何を考えているのか、はつきりと察知してしまったようだ。恋愛関係のことにはてんで疎かったらしい男であるが、人の心——特に苦しみや悲しみ等を察知することには聡い。

「……ごめんね、『文一』。でも、これは『どうしようもないこと』なんだ」

彼は困ったような、哀しそうな視線を向けてきた。当たり前前の願いに答えてやれない、自分の不甲斐なさを詫びるかのよう。

相棒にそんな顔をさせてしまったブナイチは自己嫌悪した。彼に、そんな顔をさせたいわけではなかったのに。

幾何かの沈黙の後で、ブナイチは絞り出すようにして謝罪の言葉を口にした。「俺の方こそ、ごめん」——何とも情けない。

「分かってる。ちゃんと分かってるよ。■さん”だって、いつまでも、天下無敵のブラスタレーイブンでいられるわけじゃない。何事にも終わりがやってくるんだから、俺もいつかは“真瀬ブナイチ”を辞めなくちゃいけなくなる」

「“文一”」

「この調子で黒呪病が治った後、ISDFが放置したままのアイツを倒した後、■さん”がいなくなった後……考えなきやいけないことは沢山あるってことも分かってるよ。想定しなきやいけないことが沢山あるってことも分かってるんだよ。……だけどさあ……!!」

今までの自分を構成する要素の大半が、そのまま今の自分を構成し、突き動かす要素そのものだ。同時に、その要素も、物事の解決によって意味を成さなくなる。

ブナイチにとって“要素がなくなる”ということは、これからを生きていくために必要な道標を失うことと同義だ。未来という荒野に、地図もなく放り出されることを意味する。

1つのことを全うするために、“文一”は全身全霊を賭けた。それを全うするために何をすべきかを思索してきたけれど、終わった後のことは考えてなかった。明確な終わりが近づいてきているという事実が、今まで考えてこなかったツケとなって、“文一”の前に突きつけられている。

自分の歩んできた軌跡を、自分が抱えてきた痛みを、自分が背負ってきた悲しみを、共有できる相手なんてどこにもいない。相談できる相手もない。

そんな相手を見つけるには、“文一”の人生は遅すぎるし、重すぎた。——まあ、“想い人ができた”という点は充分遅くないことだっ

たが。

「……『文一』。僕はね、お前に幸せになってほしいんだ。幸せになってほしかったんだよ」

レイブンは柔らかな声で言葉を紡ぐ。まるで幼子に語り聞かせるかのような口調で。

「僕や彼女たちみたいなの『使命』とは無縁の、穏やかな人生を送ってほしかった。気の合う仲間や仲間や友人たちに囲まれて、誰かを好きになって、誰かと寄り添って、家庭を築いて、床の上で大往生するよな、普通の人生を」

「『■さん』」

「今のお前になら、それができる。そんな未来が、目の前に広がっているんだ。——僕だったら、こんなチャンス、絶対に逃さない。死に物狂いで掴もうとするし、そういうチャンスが目の前にある人を見たら、その人に絶対掴んでほしいって思うよ」

レイブンは柔らかに微笑む。そこにあっただのは、後継者の幸せを一心に願う眼差しであった。目元がマスクで覆われているはずなのに、優しく細められた深緑が容易に想像できる。

幼い頃から『文一』を見つめていた眼差しだ。そんな風に笑う『レイブンになった男』の表情が大好きだった。沢山苦労してきたのだから、これからは沢山笑ってほしかった。

彼と一緒にやりたかったことがある。一緒に街に繰り出して、買い物なんかもしてみたかった。色んなところに旅行をしたかった。一緒にアルコールを飲んでみたかった。

でも、それが叶わないことは、『文一』と『レイブンになった男』自身が一番知っている。

幸せになりなさいと相棒は言うけれど。

『文一』の手の中は、幸せへの切符が握られていたけれど。

——真瀬ブナイチ／＼文一には、どこへ行けばいいのか／＼このまま幸せになっていいのか、分からなかった。



「随分と機嫌が良さそうだな、ユウマ」  
「え？」

先程から頬を緩ませていた部下——如月ユウマに、頼友東吾ヨリトモトウゴは声をかけた。

ユウマは目を丸くして瞬きした後、「分かりますか？」と苦笑する。

「実は、先程からずっと、口角が上がったまま下がらないんです」  
「ほう」

作り物めいた笑み——関係者以外が見ると＼人当たりの良い爽やかな笑み＼に見えるらしい——を浮かべていることが多いユウマには、珍しい変化である。よくよく見れば、彼の笑い方は普通の人間が浮かべるものと大差なかった。

本人は自分の変化に驚いているようで、どうしたものかと持て余している様子だった。

出自が出自なだけに、ユウマは情緒や一般の人間が経験するような物事に疎い。

周りの環境もあってか、彼の佇まいはどこか危うく脆いように思える。

「何か、いいことでもあったか？」

「取り立てて言うような特記事項は、何も。……ああ、そういえば、先程帝竜に挑んでいた一般人の少女から感謝されましたね」

ユウマの言葉に、ヨリトモは先程のこと——ノーデンス・エンタープライゼスに出現した帝竜スペクタスに関する出来事を思い返した。ISDFが現場に駆け付けたときにはもう、既に、一般人たちが帝竜を相手に奮戦していた。圧倒的な力に叩き伏せられても尚、3人の少年少女は戦おうとしていた。

彼女／彼らの眼差しを目の当たりにしたとき、ヨリトモが真っ先に思い浮かべたのは恩師の渡来ミカゲである。恩師もまた、瞳に揺るがぬ意志を宿していたためだ。

帝竜相手に奮戦していた3人は、今は亡き恩師の“想い”を継ぐ人間なのだ——ミカゲに師事していたヨリトモには、それがすぐに分かった。

あの人は無茶苦茶なことばかりしていた。その無茶苦茶さを、あの若者たちは忠実に受け継いでしまったらしい。

湧き上がった感情を、何と言えはいいのだろう。自身の後輩にあたる人間との出会いに、言葉にし難い感情が湧き上がったのは事実だ。

(想いはこうやって、受け継がれていくんだな……)

暫しの間懐かしさに浸ったのち、ヨリトモは閑話休題とばかりに咳ばらいした。そうして、ノーデンスで起きた出来事をもう一度回想する。

帝竜は普段通りユウマが片付けた。帝竜襲撃の事後処理を部下たちに指示していたとき、ユウマは無茶をやらかした一般人の元へ歩み寄って行ったか。

彼はそのとき、一般人の少女と会話していたように思う。黒髪のショートボブに、花を模した銀の髪飾りを付けていた少女だった。

年恰好は10代半ばから後半、制服の形状からして、彼女は暁学園の生徒だ。出身校までヨリトモと同じである。

恩師の孫も、今なら丁度あの少女くらいの年頃だろう。葬儀で泣いていた女の子は今、どうしているだろうか。

「不思議なんですよ。あのとき、俺は彼女から目を離すことができなかつた。……帝竜と戦うなんて無茶をした一般人は、他にも2人いたのに」

「ユウマ……」

「——また、会えるかな」

他人のことに関心を示さないユウマが、思いもよらないことを口にした。ヨリトモは思わず目を瞬かせる。

驚いたのはヨリトモだけではない。そのことを口走つたユウマ自身も、はつと息を飲んだ。

自分自身の発言に困惑し、ユウマはしきりに首を傾げる。暫し顎に手を当てていた青年は、助けを求めるようにヨリトモを見上げた。

ヨリトモはふつと微笑む。

「きつと会えるさ。可能性が0ではない限り、な」

「……だと、いいですけど」

天文学的な数値だろう——翡翠色の双瞼は、ヨリトモの言葉を希望的観測と取つたようだ。しかしユウマは、可能性は限りなく低いと知りながらも、0ではないという事実に拠り所を見出そうとしている。彼の瞳には、そうあってほしいという願望で揺れていた。

ユウマはまだ、自身の感情を把握しきれていない。自分の言動が、彼の心の奥底にある想いに由来しているものと気づいていないのだ。無意識に口元を綻ばすユウマの横顔を眺めながら、ヨリトモはひっそりと目を細める。ユウマには、若者らしい幸せを手にしてもらいたいものだ。

(……あの、娘……)

そんなことを考えたとき、不意に、脳裏に少女の姿が浮かんだ。愛する人の面影を忠実に受け継いだ、若芽色の髪を束ねた少女。

泣き虫で怖がりな寂しがり屋で、でも、思った以上に頑固で、とても優しい女の子。向き合うことを恐れて、背を向けた相手だ。

ヨリトモが彼女に顔を合わせる資格はない。顔を合わせ、*“そう”* 振る舞う資格もないのだ。逃げ出した自分には、おこがましい。

だが、件の少女には、いつの間にか、やけに仲がいい男がいた。

目撃者たちの話を総合すると、その男が少女を守るようにしてドラゴンと対峙していたという。

関係者からそんな話を耳にしたことが一度もなかった。故に、寝耳に水どころか、自分の目前でテロが行われた並みの衝撃である。

(俺にはもう、それについて文句を言う資格などない。……だが、だが……!!)

ヨリトモの握り拳が小刻みに震える。自分の胸中は、焦土の中で大混乱になっている人々と大差ない。

今ならば、恩師が娘婿の家に得物片手で乗り込もうとしたときの気持ちがよく分かる。

妻の関係者が、ヨリトモに対して最大威力の自爆特攻<sup>エグゾーストサクリファイブ</sup>を仕掛けようとした悲壮感もよく分かる。

分かりたくないのに、手に取るように理解できるのだ。自分もそんな年齢になったらしい。

「提督？ そんなに難しい顔して、どうかしたんですか？」

「いや、なんでもない」

ユウマや他の部下たちが聞いたら確実にしよっぱい顔をしそうな思考回路などおくびにも出さず、ヨリトモは肅々と返答した。

余計なことを考えるのはやめる。ISDFの職務は帝竜退治だけではないのだ。今日1日の務めは、まだ果たされていないのだから。



その日、ヨリトモは夢を見た。夢の内容はおぼろげで思い出せない。

ただ、その夢が悪夢だったこと、自分が得物片手に誰かに襲い掛かろうとしたこと、恩師が魔王のような笑みを浮かべて誰かに襲い掛かろうとしていたのを止めようとしていたことだけは覚えている。

目覚めたとき、ヨリトモの体は冷や汗でびっしょりだった。こんな恐怖を感じたのは、“学生時代、自分の鞆の中にとんでもない本が紛れていたこと”と、“恩師との実戦訓練”以来であったことを記載しておこう。

## Chapter 1 人と竜の物語《黄色いゼラニウム

ム：予期せぬ出会い》

天と地、あるいは空と海の間

その咆哮を例えるなら、パイプオルガンで奏でられる讚美歌だ。雲海を割るようにして急降下する白い体躯は、神々しさを引き立てる。

次の瞬間、この場一帯を取り巻くような業火が発生した。爆ぜた焰がミカゲの肌を舐める。正直言っとうつとおしい。

『うわああ！ 痛い、熱いつ！ 何これ!? ファイアブレイクしてるのにこの威力!? こんな絶対おかしって!!』

『攻撃がなかなか通らない上に、すぐマナがジリ貧状態だ……。おまけに、こつちが受けるダメージは倍かよ……!』

リヨウスケとマサハルが情けない悲鳴を上げる。

ミカゲ以外のムラクモ13班員は、全員弱体化していた。理由は一切わからないが、彼らの存在が希薄であることが関係しているのかもしれない。

唯一まともに戦えそうなのはミカゲだけだ。先程から戦い続けていたが、トリスアギオンにダメージを与えられるのはミカゲだけである。

ムラクモ13班が歴戦の勇者／竜を狩る者とはいえど、単身帝竜と戦うというのは至難の業である。ただでさえ自分たちは、帝竜相手に命懸けで戦っていた人間だ。仲間たちと協力して、何とか勝利を勝ち取ってきた。

いくら全能力S級能力者のミカゲでも、<sup>マルチタスク・オール</sup>単身で人類戦士タケハヤを斃せ<sup>ソ</sup>と言われたら、確実に発狂する自信がある。命令した人間の胸倉に掴みかかり、老老介護の嘆きを懇切丁寧に説明するレベルだ。

勿論、トリスアギオンとタケハヤを比べれば、後者の方が強いのは当然のことである。奴が吐き出す業火も、冷気も、マナの光も、タケ

ハヤが繰り出してきたエグゾーストS K Yやサンダーブレスよりも大したことはなかった。

『ミカゲくん、動きが変だよ！』

『マナが蠢いてる……！ 気を付けて！』

ユイとシラユキが異変を感じ取り、仲間たちに注意を促す。

次の瞬間、神々しい光がきらきらと舞いあがった。

恵みを与える煌めきは、この場にいる生き物たちのマナを爆発的に引き上げる。トリスアギオンにも、ミカゲたちにも、分け隔てなく降り注いだ。

トリスアギオンは己のマナだけでなく、自分に楯突く者たちのマナまでもを強化する。「神は誰に対しても試練と恩恵を与えるのだ」と言わんばかりに。

ミカゲから言わせてもらおうとするならば、トリスアギオンはサドっ気がやや強めなだけで、SにもMにもなれるド変態でしかない。情緒も減ったくれもなかった。

(まるで、 “あいつ” みたいだ——……?)

奴の特徴から “何か” の言動を連想したのだが、連想したはずの相手が “何” だったのか出てこない。頭の中に浮かぶ光景は、焼き切れたフィルムのように黒ずんでいた。

“影の世界” に咲いていた葬送花の色は？ あの奥地で荘厳に佇んでいた、美しい真竜はどんな姿だった？ 奴の取り巻きは、どんな姿をしていた？

思考を別な場所に巡らせたミカゲを引きもどすかのように、荘厳なパイプオルガンの音色が響き渡った。トリスアギオンは案外見栄っ張りらしい。

「っ!？」

奴の瞳は、ミカゲに思案することを許さなかった。自分を見ろと言わんばかりに、奴は鋭い眼光を向けてくる。次の瞬間、ミカゲの体に急激な倦怠感が襲い掛かった。

倦怠感を覚えたのは他の面々も同じらしい。マサハルとヒイナが苦しそうに呻いた。ヨツミは忌々しそうにトリスアギオンを睨みつける。

物理攻撃を主体とする面々にとって、この倦怠感は致命的な弱体だ。やはりこの天使かぶれは、ニンゲン家畜に殴られるよりニンゲン家畜を殴る方が好きらしい。

『殴られるのも殴るのも好きか。——は、とんだ変態だな……!』

『ヒイナとどっこいどっこいじゃねーか』

『マサ兄酷い! 私、あそこまで酷くないよ!!』

ヨツミの発言に触発されたマサハルが悪態をつく。トリスアギオンと同格扱いされたことが不満だったのか、ヒイナがぶうたれた。

どうやら相手方も、ヒイナのような変態（ニンゲン代表）と同格扱いされることはご不満のようで、荘厳な讚美歌を奏でた。今度は雷が飛んで来る。

「このまま、やられっぱなしでいる訳にはいかないんでな……!」

ミカゲは練気手当で傷を癒しつつ、刀を鞘に納める。不動居で力をためることで、次の攻撃に備えた。

シラユキがマナフローターを使い、他の面々がマナを使うことをサポートした。ヨツミはフルムーンヴァンプで相手から命の光をかすめ取り、ヒイナは二丁拳銃を連射する。マサハルはトリスアギオンに何発も蹴りを喰らわせた。

リヨウスケはキーボードを具現化して援護する。効果を失ってしまったBデーターレイザーを再びかけ直していた。ユイは癒しのバ

ラードを歌い、仲間たちの傷を癒す。ここが戦場でなければ聞き惚れていたのに。

「いっせーのーで！——頑張るなって!!」

居合の型で放つ技、払い崩した。ほんの一瞬、奴の動きが傾く。

その隙を狙うような形で、ヨツミとシラユキが悪い笑みを浮かべて駆け出した。

2人はありつたけのmanaを込め、奴に攻撃を叩きこむ。

『キミに贈ろう！ ついでにサービスだ、持っていけ!』

『炎氷、大爆破!』

ヨツミのベノムフェティッシュが叩きこまれる。自身の体が汚染された気配を感じ、トリスアギオンが悲鳴を上げた。その隙をつくような形で、ヨツミはベノムアンプリフで毒を重症化させる。

追撃と言わんばかりに攻撃を仕掛けたのはシラユキだ。炎と氷のmanaを爆発させることで相手を攻撃する無属性魔法、フロストバーン。翼を凍らされ/焼かれた天使が嘆きを叫ぶ。讚美歌に不協和音が混じった。

払い崩しの恩恵によって、那雲夫婦の捌め手が決まる。毒、火傷、凍傷、麻痺が、無敵だと思われた天使を揺るがせたのだ。

那雲夫婦に続き、ヒイナとマサハルも攻める。銃と拳が派手に唸り、トリスアギオンの体に一撃喰らわせた。

リヨウスケのハッキングが成功し、ユイのシャツフルVが高らかに響き渡る。空属性の技は、トリスアギオンに効果的だった。

『差し入れありがとうっ!』

ハッキングリアクトを発動させたりリヨウスケが、即座にスケイプゴートを発動した。相手からmanaを奪い取り、それを仲間たちのmana

へ転換する。ハッキングはまだ切れていないようだ。リヨウスケは  
楽しそうにキーボードを叩いた。

『それじゃ、もういつちよ！ にぎゅいひいひいひいひいひいっ！ —  
—今日、イケてないね〜』

次に使ったのはロストパワーだ。ハッキング状態の敵を著しく弱  
体化させる技である。

自身の体が異変によつて蝕まれている——それは、更にトリスアギ  
オンを追いつめたようだ。

このまま攻め込めれば充分勝機はある。ミカゲたちがそれを確信  
したときだった。

雲海が晴れ、眼前に景色が広がった。青く光る灯りが幻想的な、見  
知らぬ街。水の都ともいふべき風景は、異国情緒で満たされている。  
タケハヤの老老介護を終えた後にエデン観光をしたことがあつた  
が、そのときはこんな街など存在しなかった。

縦長の階層で構成されたそこには、赤い葬送花が至る所で生い茂つ  
ている。その一番下に広がるのは、荒れ狂った海だ。

『……ねえ。これ、まずくない？』

ヒイナは顔面蒼白になった。

『このまま戦い続けたら、あたしたち、海に叩き付けられて死んじゃう  
よね……？』

エデンのハントマンも、時間制限の中で帝竜と戦っていたんだから  
。

ヒイナの言葉が、なんだか異国の言葉のように聞こえた。一步遅れ  
て、彼女の言葉を理解する。視界の端に、神殿造りの荘厳な建物がち  
らついたような気がした。

彼女の予想は大当たりだ。このまま持久戦を行い続けられれば、最後は海面に叩き付けられるだろう。高高度から叩きつけられれば、海面だろうと地面だろうと即死間違いなしだ。

ミカゲはトリスアギオンに意識を向ける。奴はハツキングの影響か、呆けたように天を仰いでいた。しかし、我に返ったのだろう。人間たちの方を向くと、高らかな咆哮を上げた。

次の瞬間、この場に重圧が発生する。気のせいではなければ、眼下に見えていた水の都の建造物がどんどん近づいてきているように思う。落下速度が上がったのだ。

まだ距離があつたはずなのに、もう、巨大な神殿のある区画に差し掛かった。建物の周囲には、ルシエ族たちの影がちらつく。誰も彼も、不安そうに天を仰いでいる姿が伺えた。

「おい、あれ!」

「帝竜だ……! 逃げろ!!」

「ウラニア様、こちらへ!」

「待つてください、タリエリ! 誰かが、誰かがあの帝竜と戦っています! ……あの服装は、先程の——」

ルシエ族の人々は、急降下するトリスアギオンの姿を目の当たりにした途端、我先にと建物の中へ転がり込んだ。国が違えど、ドラゴンが恐怖に結び付くという事実はどこも一緒らしい。中には逃げずに帝竜を見ている者もいた。しかし、彼らの姿はあつという間に遠のいていく。

巨大な神殿のある区画を急降下した自分たちの前に広がったのは、入り組んだ天空廊だ。複数の区画が層を作っている。青く輝く浮島を繋ぐのは、美しい装飾が施された長い廊下。

足場になりそうな場所やものが多く広がっている。早めに決着をつけて着地したいムラクモ13班にとって、足場があるということは本当にありがたい。

「リヨウスケ、マサハル、ヨツミン」

ミカゲに名指しされた面々——情報処理能力S級能力保持者は、ミカゲが何を言いたいのか分からなさそうに首を傾げる。ミカゲは悪い笑みを浮かべながら、トリスアギオンに視線を向けた。

「——乗り物の運転するみたいなのに、帝竜の操縦ってできる？」



帝竜襲撃の翌日。ノーデンス・エンタープライゼスは、元通りの平和な朝を取り戻したようだ。

しかし、広場の周辺には、昨日の爪跡が痛々しく刻み込まれている。竜の存在は身近にあると言わんばかりに。

アリーとジュリエッタは、「気持ちが悪かったら3階の会議室に来てくれ」と言い残して去って行く。昨日の時点で既に協力すると言っていたのだが、実際に帝竜と戦った自分たちのことを気遣ってくれたようだ。実践を経て、心変わりした可能性を視野に入れているのだろう。

2人が去った後、会議室へ向かおうとしたイノリだが、ふと足を止めて振り返った。ソウセイも一緒になって振り返る。

最後に立ちあがったりリヒトが、医務室の外ではなく隣のベッド——ミオが治療を受けていた場所——に足を向けたためだ。

彼はやや躊躇いがちに、白い布の囲いからひよっこりと顔をのぞかせる。突然のことに、ミオはひっくり返った声を上げた。

「リヒト、だいじょうぶ？」

「ええ、平気です。この通り、ピンピンしてますよ」

心配そうに声をかけてきたミオに対し、リヒトはにつこりと笑ってみせた。彼の言葉通り、イノリたちの傷はすっかり癒えている。ノー



デンスの医療スタッフ——医師のホリイ含んだ全員が、イノリたちの回復力に驚いていた。これもまた、狩る者の特徴らしい。

「そっか、よかった」

それを見たミオは、安堵の表情を浮かべた。花が咲いたみたいなの、可憐な笑みだ。

大人しく控えめな女の子が表情を綻ばせている。彼女もまた、リヒトに心を寄せているように見えた。

2人は周囲に花卉を散らすような雰囲気で見つめ合っていたが、ややあつて、ミオが切り出す。

「ねえ。リヒトは、あの計画に協力するの？」

「協力しようと思います。……正直、戦ってたときは死ぬかと思いましたが、今後もああいいう目にあうと考えると、ちよつと怖いですけど」  
「そっか。なんだ、怖いのはわたしだけじゃないんだ……ちよつと安心したよ」

リヒトが苦笑した様子を見て、ミオはほつと息を吐く。

「英雄の子孫でも、怖いものはあるんだね」

「人間ですから、恐怖を抱くのは当たり前のことですよ。戦う勇氣も必要ですが、時には退く勇氣だって必要なんです。特に、退くことは戦うこと以上に覚悟が必要ですから」

戦わないことを選んだ人間だって、非難される謂れは無いのだとリヒトは笑った。逃げることは恥ではない——彼の言葉は、ミオの心に届いたようだ。

だが、その言葉はあまりにも真つ直ぐ過ぎたらしい。その言葉を鵜呑みにして頷ける程、ミオが自己弁護するタイプではなかったのも理由なのだろう。

ミオは悲しそうに微笑んだ。戦うということを選んだリヒトに対

して、申し訳がないと思ったのだらう。若草色の瞳は昏く淀んでい  
る。

次の瞬間、若草の中に揺蕩う闇が溢れだした。昏い眼差しが、リヒ  
トの金色の双瞼を捉える。

「……ねえ。どうしてリヒトは、そんなに頑張れるの?」

「えっ?」

「逃げ出したい……とは、思わないの?」

彼女の問いに、リヒトは目を瞬かせた。

暫く目を瞬かせたのち、リヒトはしつかりと頷き返す。

「思いません。そんなことをしたら、僕のために命を懸けてくれたミ  
カゲさんに対する裏切りになってしまう。僕らを信じ、未来を手渡し  
てくれた彼の想いに応えたい——それが、今の僕を突き動かす、大切  
なものですから」

リヒトの言葉に、ミオは先日話を思い出したのだらう。イノリの  
祖父——渡来ミカゲが、イノリやりヒトたちを守って命を落としたと  
いう話を、彼女は聞いている。

祖父はイノリたちのことを「俺の希望」と呼んで、優しい眼差しで  
見守っていた。来るべき竜災害の再来に備えて、そうしてこれからの  
未来のために、尽力を惜しまなかった。

勿論、自身の教え子たちのことも大切にしていたし、期待を懸けて  
いたのだと思う。彼らの意志と想いが、よりよい未来を切り開いてい  
くのだと信じていた。

この大地には、祖父の教え子たちが沢山いる。イノリやりヒトたち  
もその1人だ。今はまだ未熟で何も成せないけれど、いつかは祖父と  
同じように、未来を切り開く一端を担えるようになりたい。

呆けたようにリヒトを見上げていたミオは、我に返ったように目を  
瞬かせた。

昏い笑顔は、今にも泣き出してしまいそうな表情へと変わる。

「!! つ、ごめんなさい! わ、わたし……何もわからないくせに、酷いこと……」

ミオはおろおろしたように視線を彷徨わせ、消え入りそうな声で言葉紡いだ。

「……そうだよ。そうやって、リヒトやイノリたちが助けてくれたから、わたしは生きているんだよね……。こんな言い方、無責任だ……」

「ミオ」

「……私、もう帰るね。さよなら、リヒト。——無茶だけはしないでね」

ミオは悲しそうに笑い、リヒトに背を向けた。リヒトの言葉を遮るかのように、彼女は医務室を飛び出す。

暗い影を纏って俯いたその背中へ、リヒトは手を伸ばす。——けれど、彼の手は宙ぶらりんになったままだった。

「リヒトくん」

「……分かってます。確か、会議室ですよね?」

ミオが立ち去った後を名残惜しく見つめていたリヒトは、イノリを見て苦笑した。今の彼は、誰がどう見ても「喧嘩別れした恋人の片割れ」にしか見えない。

医師のホリイと看護師のマイマイなんて、昼ドラの現場を目の当たりにしたような顔をしている。どちらも、今後の行方が気になって仕方なさそうだった。

ここに留まっていると、リヒトが見世物になってしまいそう。イノリはリヒトを促し、周りの視線から逃れるようにして医務室を後に

した。

\*\*\*

「ISDFから通達よ。本日中に臨検を寄越すつて」

会議室内には、物々しい気配が漂っている。イノリたちは思わず手を止めた。半開きになった扉から、ジュリエッタとアリーの会話が聞こえる。

「あらー☆」

「まあ、こちらにも交渉材料はあるわ。アレを引き換えにすれば——あらー！」

そのとき、ジュリエッタが扉の方を向いた。様子を伺うように覗き見ていたイノリたちに気づき、彼は笑顔を浮かべる。

「そんな所で立ち聞きしてないで、遠慮なく入っていらつしゃい！」と、ジュリエッタは手招きする。イノリたちはそれに従った。

アリーに至っては「わーい、来てくれたー！」と諸手を上げて大喜びしている。まるで子どもみたいだ。なんだか微笑ましい。

「この間の返事、受けてくれるんだねー？」

「ちよーつと待った！ その前に、例のモノを見てもらいましょう」

協力するか否かの返事についての最終確認をしようとしたアリーを引き留め、ジュリエッタは何かを指示した。アリーの机の上に置いてあるのはカプセルである。そのカプセルは、翡翠色の燐光を放っていた。光を放っているのはカプセルの中に入っている物体である。

アリーとジュリエッタが言うには、このカプセルの中には第1真竜アイオトの検体が補管されているらしい。今より40億年近く前に出現した第1真竜は、この地球に命の種を蒔いた。アイオトが蒔いた

その1粒が、現在の人類——すべての有機体の誕生に繋がっているという。

人と竜の因縁は、第1真竜が命を生み出した瞬間から始まっている。ジュリエッタたちは、本気で6体の真竜検体を集めようとしている。「7番目の真竜を討ち倒すには、すべての真竜検体入手し、ドラゴンクロニクルを解明しなくてはならない」と語り、ジュリエッタは真剣な面持ちになった。

「我がノーデンスには、第1真竜アイオトの検体がある」

「そして、国際自衛軍ISDFは、2021年に襲来した第5真竜フォーマルハウトの検体を所持しているんですね」

「その通り！ リヒトが言っていたことは噂じゃなくて、ガチだったんだ☆ 証拠もすっかり握ったから、交渉材料に使うつもりだよー」  
「やはりか。ISDFはムラクモやSECT11、および『各国の対竜機関』を徴収するような形で誕生したからな」

アリーの話を聞いたリヒトが言葉を引き継ぎ、ソウセイが頷く。ISDF誕生の裏側には派手な修羅場があったと祖父が零していたが、その中には真竜検体の行方もあったのだろうか。

この話から分かるのは、『U・E・77年の時点で人類が有している真竜検体は2つ』ということだ。検体が6つ必要なのだから、あと4つ足りない。

「ということ、残り4つの検体を集めてきてもらう」のがキミたちに頼みたいミッションだよ☆」

「検体を集めるということとは、昨日戦った帝竜よりもはるかに強い真竜を倒すということ……。ハードなんてレベルじゃない、ヘルモードクラスのミッションになるわ」

その点も含めて答えてほしい、と、ジュリエッタは目で訴えてきた。答えなど、以前から決まっている。

「答えは前と同じだよ。——弊社のCode・VFDに、協力させていただけますー!」

「すべてを信頼したわけではありませんが、あなたの方の方針には納得し、共感しました。僕も全力を尽くします」

「ドラゴンクロニクルの解明は、人類の勝利に繋がった。……じいさんたちが成し得たことと同じことを語るあんたたちを、俺は信じる」

自分たちの答えを聞いた2人は、ぱつと表情を輝かせる。

アリーは諸手を上げて喜び、ジュリエッタはゆるりと目を細めた。

一緒に戦ってくれるという答えを聞けたことが嬉しいようだ。

「そうと決まれば、アンタのチーム名が必要よね。どうする?」

「あ、でも、その前に——」

「13班がいいよー!」

興奮冷めやらぬと言わんばかりに話を発展させるジュリエッタは、何故かチームの名前を考え始めた。その前に質問したいことがあったのだが、イノリの言葉をかき消すようにしてアリーがチーム名を提案する。

13班——その名前は、イノリたちにとって親しみがあるものだった。2020年代に発生した竜戦役で戦い抜き、人類を勝利に導いた英雄たちの総称。祖父が背負い、戦い抜いたチームの名前だ。人類の、希望の名前。

「英雄の系譜を受け継ぐイノリたちには、ぴったりな名前だと思うなー」

「おじいちゃんたちと同じ、チーム名……」

ニコニコ笑うアリーに対して、イノリたちは思わず顔を見合わせる。13班のネームバリューがどれ程のものか、イノリたちは知って

いるためだ。

嘗ての英雄たちと同じ名を背負う——何と甘美な響きを宿しているのだろう。しかし、それ以上に重い重圧がのしかかっていることも気づいている。

瞼の裏に、揺るがなかった背中が浮かんだ。凜と佇む祖父の背中。最期に見たその姿に、その信頼に、その在り方に、イノリは応えたい。リヒトもソウセイも同じ気持ちのようで、力強く微笑んで頷いた。金色の双瞼も、紫苑の双瞼も、揺らぐことなくイノリを見つめている。

「分かりました。チーム名は13班でお願いします」

「わーい、決まりだね☆」

「……ただ、1つ質問があるんだけど、いいかな？」

「構わないわよ？」

イノリの問いに頷いたのはジュリエッタだった。

続けてくれと促され、イノリは言葉を紡いだ。

「ジュリエッタたちには『第7真竜が目覚める前に、『残り4体の真竜がどこにいるのかを察知し、その襲来に居合わせる方法』』にアテがあるの？」

真竜検体を集めるというのは、その手段があるから言えるのではないか——イノリの眼差しを真正面から受けたジュリエッタは、驚いたように目を丸くした。

真竜が地球に降り立つ周期は分かっていない。おそらく、「真竜の気まぐれ」が答えだ。ニアラは1万年以上昔に来襲した後は2020年まで来なかつたし、フォーマルハウトに至っては、「ニアラが地球を狙って失敗したから」悔い残しを味わうためにやって来た。

他の真竜に関しての目撃情報はゼロである。真竜検体を入手するためには、「該当する真竜が地球に来襲している」必要があつた。しかし、現時点ではその情報は一切ない。あつたとしても、真竜の気分

次第では、VFDが目覚めるほうが早い”なんてことになりかねない。

イノリの疑問点を聞いたジュリエッタは目を瞬かせる。彼は顎に手を当てて、不敵に微笑んだ。その質問を待っていたと言わんばかりに、「ふっふっふ……」とわざとらしい笑い声をこぼす。

勿体ぶるジュリエッタに対し、ソウセイが冷徹な眼差しを向けた。言いたことがあるなら言えと訴えている。終いには、アリーからも「モツタイぶらないで話しなよ」と笑顔で注意されていた。

まさか、ノリのいいアリーにまで「さっさと本題に入れ（意識）」と言われるとは予測していなかったのだろう。ジュリエッタはムツとしたように眉間に皺を寄せたが、すぐに自慢げな笑みを浮かべた。

「——勿論。そのための秘密兵器は、既に用意されてるわ」

\*\*\*

「その秘密兵器がタイムマシンとは、恐れ入った」

まさか、過去の時代に行つて真竜を狩るとは——ソウセイは感心しながら、周囲を見渡した。

目の前に広がる景観を言い表すとしたら、『水の都』という言葉が相応しい。見上げれば、浮島となった回廊が層になり、幾重にも積み重なっているのが伺える。

上部からは美しい水が降り注ぎ、屋根を伝つて落ちていく。水飛沫が舞い、周囲に漂っている青い燐光に照らされ、キラキラと輝いていた。何とも幻想的な光景だった。

しかし、美しい街並みには、所々竜災害の爪跡が刻まれている。回廊が寸断されていたり、瓦礫の山が積み上げられていたり等、戦闘の形跡が色濃く残っていた。

それだけではない。この街には、至る所に赤い葬送花——フロワロが咲き乱れている。美しき水の都が、ドラゴンの根城になっていると



いう事実を証明していた。

1万2000年前に、太平洋の真ん中に海を割いて築かれたとされる海洋帝国アトランティス。その首都・アトランティカは、竜災害による滅びを待つだけの状態になっている。

「真竜が現代に居なければ、居る時代に飛ばばいいじゃない」……ですか。いやはや、嘗てない理論ですね」

「本当に、私たち、過去の時代に居るんだね」

苦笑するリヒトに続いて、イノリも噛みしめるように呟く。そのとき、空気を震わすような調べが響き渡った。

例えるならそれは、パイプオルガンの音色。例えるならそれは、讚美歌のメロディ。かすかな音だったが、やけに耳に残る。

「何の音だろう……？」

「分からない。だが、注意するに越したことはない」

「だね。さつきも凄い振動があったし」

ソウセイの言葉に頷き、イノリたちは探索を続ける。ここにいるルシエたちの瞳はみな、絶望と怯えに満ちていた。

史実では、アトランティス帝国はニアラに対して玉碎作戦を展開しており、国と住民の命を道連れにしてニアラを退けている。

街の状況や人々の様子からして、その玉碎作戦は、行われる秒読み段階に入っているのだろう。

公園のような広場を抜け、先の回廊へ進もうとしていたときだった。

「その者、止まれい！ その風貌、我らの同胞ではないな！」

「よそ者が、この閉ざされた地に何の用がある？」

イノリたちを呼び止めたのは、アトランティスの男たちだ。甲冑に

身を包み、槍を片手に持っている。

おそらく、ここを守っている衛兵なのだろう。彼らはイノリたちに対して好意的ではない。彼らの態度が雄弁にそれを伝えてきた。

諍いを起こすつもりはないので、13班の面々は立ち止まった。何の用かと尋ねられたので、素直に己の目的を答える。

「ニアラを狩りに来ました。私たちは、貴方たちと敵対するつもりはありません。道を開けてください」

「ニアラを狩るだど？ —— はっはっは、理解不能だな！」

兵士たちは何がおかしいのか、鼻で笑った。イノリたちの発言を冗談だと思っっているのだろう。

ぱつと出てきたよそ者が、「自国を脅かす脅威を倒す」と宣言すれば、あしらわれるのは当然かもしれない。

彼らは既に、玉碎作戦を行う覚悟を固めている様子だった。ルシエ族は誇りを重んじる傾向がある、と、聞いたことがある。

兵士たちからこれ以上の情報は手に入らないだろう。

道をふさぐ兵士を迂回して先へ進もうと、視線を巡らせたときだった。

「その不遜な態度は看破できん。貴様らまとめて、フカのエサにしてくれる！」

兵士たちはそう言うなり、槍を構えてイノリたちに襲い掛かってきた。彼らの攻撃をひらりとかわし、イノリは腰から双剣を引き抜いた。視界の端で、ソウセイが拳銃を構える。

「風のように！」

「油断が命取りだぞ」

イノリの影無しとソウセイのニーブレイクを喰らい、兵士たちが怯

む。

その隙を逃さず、リヒトが大地を蹴った。彼の手には、雷が描かれたカード。

「雷注意ですよ！」

彼がそのカードを兵士たちに投げつけた途端、雷のフィールドが展開した。紫電が兵士たちに降り注ぐ。雷を喰らった兵士たちは、悲鳴を上げてその場に崩れ落ちた。そちら側から襲い掛かってきた割には、随分と呆気ない幕切れである。

半ば拍子抜けしながら、イノリは得物を鞘に収めた。兵士たちが呻きながらこちらを見上げる。イノリは仲間たちと顔を見合わせたのち、深々とため息をついた。鞆から道具類を取り出し、兵士たちの治療に当たる。

まさか手当てされるとは思っていなかったのだろう。彼らは啞然とした様子でイノリたちを見ていた。瞳には驚愕と困惑の色が揺れている。治療の終わりを告げれば、2人の兵士たちはバツが悪そうに視線を逸らした。

一応、イノリたちが諍いを起こすつもりはないということには信じてもらえたようだ。彼らはそそくさと道を開け、逃げるように持ち場に戻った。

いつの間にか、この騒ぎを目にして近寄ってきた野次馬が居たらしい。人々からは畏怖の眼差しが突き刺さってくる。あまり居心地よくない。

『フヒヒヒヒ……テメエはこじやあ異端者だ。行動には気を付けろよ。』

「そうみたいだね。王に仕える兵士がこの調子じゃあ、まともな戦力も、戦おうとする人々も、もう……」

『だな。オマエの言うとおり、骨のある奴らは残っちゃいねえ。ビビる必要は皆無だ。ナビを続けるぞ』

ナガミミはからかうような声色でナビを続ける。それに従い、イノリたちは滅びを待つ首都の街中を突き進んだ。

長い階段を上っては下り、下っては上りを繰り返し、先へ進む。奥へ行けば行くほど、散乱する瓦礫や破壊された街並みが目につくようになってきた。

破壊が目立たなかった区画がどれ程神秘的な街並みだったかを知っているため、元の美しさはどうだったのかと考え、心が痛む。

辺りからはマモノの気配が漂う。次の瞬間、見たこともないマモノたちが飛び出してきた。奴らはイノリたちを敵と認定したようで、襲い掛かってくる。

『アトランティスに生息するマモノだな。ヘルムキャンサーにブロッサムか』

「……ナガミミ。ちょっと質問なんですけど」

マモノの姿を凝視しながら、リヒトは真面目な顔で問いかけた。

「あのマモノ、食べれそうな部位はありますか？」

『……は？』

「珍味になりそうな部位があるなら、是非とも食べてみたいんですが」

『……………ハア!?!』

「これが終わったらじっくり調べればいいだろう。来るぞ！」

ソウセイから指摘されたリヒトは頷き、即座に戦闘態勢を整える。リヒトの癖と趣味趣向を思い出し、イノリは思わず苦笑した。

東雲リヒトは珍味が好きである。マモノの肉や卵、拳句の果てには花粉まで、「食べられるならば」自分の手で調理法を研究して食べようとするレベルだ。珍味集めにつき合わされ、東京中のマモノを狩りに行った今年の春休みは記憶に新しい。

課題でレイジーベアーを倒すことになった際、終始「熊狩り

だああああ！」とテンションが高かった。レイジーベアーの肉は上等で、熊肉と同じ調理法で料理すると美味しいらしい。実際、リヒトがレイジーベアーの肉で作ったワイン煮込みは絶品だった。

時空を超えらるということは、東京には生息しないマモノと対峙することを意味する。珍味を食べたい一心で東京中のマモノを知りつくしたりリヒトが、その時代にしか生息していないマモノを見つけたら、食べたいと思うのは当然であろう。

勿論、食欲に物を言わせたリヒトがマモノを一網打尽にし、鼻歌を歌いながら漁り始める。結果、リヒトのお眼鏡に叶った食材が見つかった。

甘い芳香を漂わせるブロッサムの蜜——桃色の花蜜だ。彼はそれを鞆にしまう。後で調理法を研究するつもりなのだ。

「調理法を見つけたら、ナガミミにもおすそ分けしますよ」

『いや、いらねえよ!!』

『ケダモノの次はゲテモノ喰らいか!』と嘆きを叫ぶナガミミの声をBGMに、イノリとリヒトは顔を見合わせ苦笑した。

リヒトの眼中になかったヘルムキャンサーの中腸腺を回収し、先を急ぐ。

——気のせいか、先程よりも鮮明に、天空から讚美歌が響いてきたような気がした。

## 終わりの国の『異邦人《アリス》』

「この階段、キツくありませんか？」

アトランティカの居住区を進む中で、リヒトがそんなことを呟いた。心なしか、彼の額にはうっすらと汗が滲んでおり、呼吸もやや浅いように思える。イノリたちの中で、リヒトが一番体力がなかったことを思い出した。

リヒトの言葉は間違っていない。アトランティカには急こう配の階段が多く設置されていた。東京ではなかなかお目にかかれない角度と段数である。歩行に難がある人にとっては優しくない。

「そうだな。だが、この街の構造的に、移動手段が階段だけだとは思えん。……現代技術では計り知れないものが使われているのだろう」

そう語るソウセイの声色は、どこか楽しそうである。彼は技術関連には目がない。アトランティス帝国の技術に興味津々のようだ。

リヒトのゲテモノ調理研究に苦言を呈するソウセイだが、彼もまた、ちやつかりと、先程の兵士が使っていた武器に関する見解をメモしていた。

他にも、この街の構造に関して思案を巡らせるあたり、ソウセイもアトランティス帝国の文明を楽しんでいる様子だった。

ソウセイは楽しそうに思案していたが、ふと足を止めた。その表情には、どこか驚きで満ちている。

「どうしたの？ ソウセイくん」

「……いや、誰かに呼ばれたような気がしたんだが……気のせいかな？」

イノリの問いに、ソウセイはしきりに首を傾げながら答えた。確証をつかめていないようで、彼の瞳はゆらゆらと揺れている。

しかし、それについてはおいおい考えることにしたようだ。前を向

いて、彼は周囲の警戒に務める。イノリもそれに倣った。

「こ、こないで！ あ、あっちいけーっ!!」

「何だ!？」

「今の声は……」

「みんな、行こう!」

突如、少女の悲鳴がこの場に響き渡った。イノリたちは慌てて、声が響いた場所へと走る。そこには、今にも襲い掛からんとするマモノと、身を丸めたルシエ族の少女がいた。

『オイオイ、まさか助けるつもりか？ あんなの放っておけよ』

「それはできない。私自身が、助けられた人間だもの!」

『ツ!? ——あ、コラ！ オマエら……っ、だーもう!』

ナガミミの言葉を遮るようにして、イノリは駆け出した。ソウセイとリヒトも、イノリに続く。ナガミミは躊躇うように唸ったが、最終的には黙認してくれたらしい。

少女を守るものは何もない。彼女自身も丸腰だ。非戦闘員がマモノに襲われればひとたまりもない。イノリは迷うことなく躍り出て、マモノを一刀で切り伏せた。

ソウセイはマモノを銃撃し、リヒトが炎のマモノを召喚して敵を焼き払う。マモノはあつという間に斃れた。マモノから素材を集めるのは後回しにし、振り返る。

ルシエ族の少女は、命に係わる怪我はしていないようだ。膝をすりむいている程度である。イノリは鞆から治療薬を取り出し、少女を手当てした。

少女は怯えるように身を縮ませていたが、危害を加えられたのではなく治療されたのだということを理解し、嬉しそうに表情を輝かせた。

「ありがとう！ おねえちゃんたち、強いんだね！ 格好良かったよっ！」

「どういたしまして」

惜しみない賛辞を贈られるというのは、ちよつと気恥ずかしいけれど、嬉しいものだ。リヒトもソウセイも、照れたようにはにかむ。

どうやらこの少女は、好奇心旺盛な性格らしい。イノリたちの身体的特徴がルシエと違うと見るや、イノリの顔や耳をぺたぺたと触り始めた。特に、ヒトとルシエの耳の違い、リヒトの眼鏡、ソウセイのマスクに興味があるようだ。

眼鏡を奪われたリヒトが苦笑し、マスクを奪われる危険性を察知したソウセイが目を剥いた。マスクに興味を示す少女に対し、ソウセイは「取られるのは困る」と滾々と説明する。少女は難しい話は好きじゃないようで、むうと唸った。

「ミルラ！ ミルラっ！」

「あつ、おばあちゃんだ！ おばあちゃん!!」

切羽詰った老母の声が響いたのと、少女——ミルラがリヒトに眼鏡を返したのは同時だった。彼女は無邪気に笑いながら、駆け寄ってきた老婆を迎える。老婆はミルラを抱きしめ、孫の無事を確認した。ミルラは満面の笑みを浮かべて、イノリたちに助けられたのだと説明する。

老婆は驚いた後、恐る恐るこちらへ視線を寄越した。異邦人に対する怯えの色が見て取れる。アトランティカの住人たちはイノリたちに対して排他的であった。ミルラの祖母も同じ気持ちを抱きながらも、孫を助けてくれた恩人という事実には、ほんの少し態度が和らいだようだ。

「アトランティカの兵士たちでも手を焼くマモノを倒すなんて……」と、ミルラの祖母は呟く。一般人がマモノに襲われるとひとたまりもないことは、東京でも同じだった。マモノに太刀打ちできるの



は、A級以上の能力者だけである。対竜兵装を駆使することで、B級能力者もどうにか戦える程度だ。

『今ここに残っている兵士たちは、良くてB級だろうなア』と、ナガミミが囁くようにして補足を入れた。

A級やS級能力者の大半はみな、ニアラとの戦いに赴いて破れ、帰ってこなかったのだろう。

もしかしたら、ミルラの関係者もその中にいたのだろうか。無邪気に微笑む少女の笑顔からは伺えない。

「あなたがたは、どうしてこの国に？」

「真竜ニアラについて調べています。私たちは、奴を討つためにここに来ました」

「ニアラを、討つ……!?!」

「本当!?! おねえちゃん、ニアラをやっつけてくれるの!?!」

ニアラという名前を聞いた途端、ミルラの祖母は目の色を変えた。代わりに目を輝かせたのはミルラである。

彼女は水を得た魚のように、たどたどしくも朗々と話し始める。この国が崩壊する原因となった侵略者の話を。

「ニアラはねー、数か月前に突然やって来たのー。あいつのせいで、アトランティスは殆ど沈んじやったんだー。王様も、兵士も、みんなやられちゃって——」

「——ミルラ。危ないから、家に戻っていなさい」

ミルラの祖母は、ミルラの言葉を遮った。彼女の言葉はどこか刺々しく、物々しい。祖母が何を考えているかは分からずとも、有無を言わさぬ気配はミルラに伝わったようだ。ミルラは気圧されるようにして頷くと、ぱたぱたと走っていく。

ミルラの祖母は大きくため息をついた後、イノリたちの方に向き直った。

彼女はミルラを助けてくれたことに礼を言い、「恩義に報いるために」と重々しく口を開いた。

「数か月前に襲来したニアラにより、降盛を誇りしアトランティスの12の海洋宮は、ここ——王都以外のすべてが海に沈みました。先王ユトレロと我が軍の精鋭がニアラに挑みましたが……」

「敗北、したんですね」

「ええ。誰一人として、戻ってきた者はいません。……やがて、大地に咲いた毒花の瘴気で兵士以外の国民も死に絶えました。この国の滅亡は、間近に迫っています」

「……だから、玉碎作戦か」

険しい顔をしたソウセイの言葉に、ミルラの祖母は頷いた。

「執政官のタリエリ様が、作戦を決行なされる。邪を払う王都の聖なる守護石——星晶石を破壊し、国土諸共憎きニアラを海に沈める作戦を……！」

「っ、待ってくれ！ アンタたちは、本当にそれで納得しているのか!?」

「この王都の臣民はみな、心静かに最期の刻ときを待っています。どうかこれ以上、神聖なアトランティスを乱しますな」

珍しく、ソウセイが語気を荒げる。驚くイノリたちを尻目に、彼はミルラの祖母に問いかけた。

しかし、ミルラの祖母は首を振った。自分たちは既に覚悟を固めたのだと言いきる。

老婆の瞳には一切の迷いが無い。だが、瞳には光がなく、深淵の底を思わせるような闇で満ちていた。

彼女の覚悟は分かったが、では、ミルラはどのようなだろう。イノリは、無邪気で明るい少女の姿を思い浮かべた。ニアラを倒すと言うイノリたちに、目を輝かせていた女の子。

「それじゃあ、あの子はどうなるの？ ミルラは死ぬ覚悟を固めてい  
るようには見えなかったけど……」

イノリの言葉に、老婆はびくりと肩をすくませた。ミルラのこと  
はアキレス健だったのだろう。目に見えて、佇まいが揺らいだ。

「……大丈夫。あの子も……ミルラも、分かってくれるはずです」

ややあって、彼女は震える声で言葉を紡ぐ。それはイノリたちには  
はなく、己自身に言い聞かせるかのようだった。

話は終わったと言わんばかりに、老婆は立ち去る。その背中を見送  
り、イノリたちは顔を見合わせた。老婆の会話を聞いていたナガミミ  
が意地悪く笑う。

『玉碎作戦とは考えたモンだぜ。確かに、コイツらの現有戦力でニア  
ラを倒そうとすれば、ソレが最良の戦術プランだろうよ』

「そんな……玉碎なんてダメだよ。ルシエたちを助けよう！」

『何言ってるんだよ。この国が亡びることは確定してる。それに、お  
前たちの目的はアトランティスを救うことじゃなく、ドラゴンクロニ  
クルだろ？ 人助けならU・E・77年でやれ』

食い下がったイノリに対し、ナガミミがため息をついた。ホログラ  
ム越しに浮かぶマスコットは面倒くさそうに頭を搔く。

『滅びゆく国の民を救うことに何の意義がある？ 奴らが国ごと亡び  
ることは決定事項だ。ムダなんだよ、ムダ！』

ナガミミはこれでもかといわんばかりに声を張り上げる。その様  
は、聞き分けの悪い生徒を怒鳴りつける教師のようだ。このナビゲー  
ターには、職務——Code：VFDの成就以外眼中にないらしい。

意義がない、滅びは決定事項、ムダ——その三拍子が、イノリの奥底にある想いを抉った。脳裏に浮かぶのは、イノリたちを守るために命を散らした祖父の背中だ。意義も、価値も、打算さえも度外視して、ミカゲはイノリたちを守り抜いた。

『あの人が、命を懸けてまで守る価値があったの？』

『はつきり言って、無駄死にだったなあ』

喪服に身を包んだ客が、イノリたちに聞こえる声色で囁いていた言葉がリフレインする。祖父の在り方と自分の存在を否定されたように、とても苦しかった。

“祖父は間違っていた”のだと証明したくて、今まで頑張ってきた。夢や目標を実現し、自分にできることを成し遂げることが、それに繋がっていると信じていた。

——そしていずれば、自分も祖父のように希望を紡ぎ、未来を切り開くのだと。そんな存在になりたくて、その背中に追いつきたくて、今まで歩んできたのだ。

絶望に暮れる瞳は、隣にいたりヒトやソウセイと同じだ。あの頃の自分と同じだ。

それを見捨てることは、あの日の祖父、および自分たちを否定することと同義になる。

「……ナガミミの言ってることは」

『あ？』

「私たちに、『死ね』って言うのと同じなんだよ」

イノリは、ホログラムとして浮かび上がるナガミミを睨みつけた。リヒトとソウセイも、沈黙を守っているが、噛みつくような眼差しを向けている。

部下からそんなことを言われ、睨みつけられるとは思わなかったのだろう。ナガミミがたじろぐ。呆気にとられたのは一瞬のことで、す

ぐ反論してきた。

『な、なんでそうなるんだよ!』

「だってそうでしょう! 価値がなければ、意義がなければ、意味がなければムダだって言うなら、それらを度外視して助けられた私たちはどうなるの!?! それらを度外視して私たちを救ってくれたおじいちゃんはどうなるの!! ナガミミは、『意義も価値も意味もないから、お前は死ぬ』って言われたら、何の疑いも反論もなく、納得して、言われた通りに死ぬるの!?!」

『お、オマエ……』

「できないでしょう!?! それと同じだよ! ……無意味だなんて言わせない。無価値だなんて言わせない。意義がないだなんて、ムダだなんて、絶対絶対言わせない!! 私たちはともかくとして、私たちを信じて未来を託してくれたおじいちゃんを踏みにじるようなことは、絶対絶対言わせない!!」

荒い呼吸を繰り返しながら、イノリはハッキリと言いきった。当時の気持ちに戻ってしまったためか、じわりと視界が滲む。

ナガミミが息を飲む音が聞こえた。イノリは袖で涙を拭う。ふうう、と、唸るような息が耳に響いた。そうして、息を吐くように呟く。

「消えゆく命を助けたいと願うことは、死んでほしくないと願うことは、生きてほしいと願うことは、そんなにもおかしいことかな。『死にたくない』っていう命の叫びに、『生きたい』という命の叫びに、耳を傾けて手を伸ばしたいと思うことは、そんなにもおかしいことかな」

『……………』

イノリの言葉に、ナガミミは沈黙したままだ。普段の小馬鹿にした態度は鳴りをひそめている。シルクハットを深く被って、マスコットは俯いた。

『後輩たちの言うとおりだよ、ナガミミ様』

ナガミミのホログラムの後ろに、別の人物のホログラムが現れる。イノリたちの先輩パート社員、真瀬ブレイチだった。

「ブレイチと連絡がつかない」とジユリエッタが怒鳴り散らしていたが、今まで彼はどこで何をしていたのだろう。

『オマエ、何してたんだよ!?!』

『ごめんね。本業が忙しくてさー。まだまだ合流できそうにないから、休暇延長の手続きしに戻ってきたんだ。怒ってるナガミミ様も可愛いけどね』

行方知れずだったブレイチの姿を確認するや否や、ナガミミは怒鳴った。しかし、彼は柔らかに微笑みながら、憤怒のマスコットの言葉を遮る。

その笑い方は、子どもとは思えぬ程成熟していた。イノリたちより年下なはずなのに、どこか達観した老人のように思えたのは何故だろう。

ブレイチは、呆気にとられるナガミミの頭を優しく撫でる。ふかふかだ、と、幸せそうに目を細めながら、彼はゆっくりと言葉を紡いだ。

『人っていうのはさあ、価値とか意味とか意義とか打算とか好き嫌いとかだけがすべてじゃないんだよね。誰かを助けたいと思う気持ちさえあれば、それだけで立派な理由になるんだよ』

「ブレイチくん……」

『そうやって、生きたいと叫ぶ命の声を拾い上げようと戦っていた人を、俺は知ってる。価値も意味も意義も打算も好き嫌いも超越して、人命救助に駆け回っていた人の背中を、俺は知ってる。……そうして、その系譜は、次世代にも確かに引き継がれた』

ブナイチは嬉しそうに笑って、イノリたちを見つめた。まるで、見知った誰かの面影を見出したかのように。

『「13班」という名前を背負うってことは、人を助けたい、生きたいと叫ぶ命の声に応えたい、人の命を守りたいという意志を抱いて戦うことだと俺は思う。その意志を力に変えて、竜やマモノを討ち続けてきたのがムラクモ13班だった』

「おじいちゃんたちが……」

『そう。だから、キミたちは間違っていない。本当にキミたちは、13班の名前を背負うのに相応しいよ。俺だってそうするもん。——特に、ナガミミ様にはね』

ブナイチはそう言うなり、ナガミミをぎゅっと抱きしめた。むぎゅ、と、マスコットが呻く。

普段のやり取りからして、ナガミミはブナイチに抵抗しそうなものだ。だが、今回は大人しくしている。

『ナガミミ様が俺のことを望まなくても、俺は、ナガミミ様が『助けてほしい』って思ったら、這いつくばってでも助けに行く。ナガミミ様が生きたいと望むなら、たとえ俺の肉体が減んで魂だけになっても、絶対にナガミミ様の元に駆けつける。そうして、ナガミミ様の願いを叶えてみせるよ』

堂々と宣言したブナイチの若紫には、揺るがない意志が宿っている。彼は本気で語っているのだ。ナガミミが願えば／ナガミミが望まなくても、ブナイチはそれを叶えるだろう。マスコットを撫でる手つきは、酷く優しくかった。

『……死に……い、……消えた……、……生きたい……』

幾何かの沈黙の後、囁くような声がした。くぐもってよく聞こえない

かったが、『生きたい』という言葉だけは鮮明に聞き取れた。

ナガミミの口調は、自分が歩んできた軌跡を思い返しているようだった。そうして、深々と息を吐く。

『やれやれ』と言ったその声色は、先程よりも幾分か柔らかな響きを宿していた。

『人命救助はジュリエッタから禁止されてる。助けようとすれば、文字通りッキリがない』からな。ムラクモ13班のように『目につく命はすべて救え』的な救助活動が容認されていた時代背景とはワケが違う』

「……………そう」

『……………しかし、マア、応急処置や一時的な避難ぐらいなら、なんとか誤魔化せるかもしれん』

ナガミミの言葉に、イノリたちは思わず顔を上げた。

ブナイチに抱えられたナガミミのホログラムが映し出されている。

マスコットのウサギはバツが悪そうにシルクハットをずらす。自分の顔を見られたくないのだろう。外見がぬいぐるみのため顔色など分からないのだが、本人にとっては重要なことらしい。

「本当!」

『何も、仏心や慈善事業で言ってるわけじゃねえぞ。脂の乗った、美味そうなヤツが居るかもしれんからな。フヒヒヒヒ……………』

「……………」

「……………」

「……………」

『……………本気にすんなよ。傷つくぞ』

ブナイチに抱えられていたナガミミの耳がぺたんとな下がった。頭を垂れ、昏い影を滲ませているあたり、結構落ち込んでいるようだ。そんな想い人(人?)の様子も魅力的なのだろう。『そんなナガミミ



様も好きです、結婚してください』『やめる工作中だ』と、普段通りのやり取りが広がる。

直属上司と先輩社員の微笑ましいやり取りを見守りつつ、イノリたちはアトランティカの探索へと戻る。天高くから、讚美歌の音色が聞こえた気がした。

\*\*\*

今回アトランティカに時空跳躍した目的は、ノーデンス13班の肩慣らしと資材集め——普通のドラゴンを狩るためだ。

しかし、リヒトの珍味集めとアトランティカの人々の人命救助を優先して行っているため、ナガミミのため息が絶えず聞こえてくる。

なんやかんや言いながらも、イノリたちの行動を止めないあたり、柔軟で融通の利く上司と言えよう。

「見てください！ スパイラルキャノンとスクリューシャークが、新しい食材を落としましたよ！」

「……おい。何だこの毒々しい色の肉とエキスは」

「このフカヒレ、すっごくすり減ってる……食べる部位あるのかなあ」

嬉々として拾った食材——スパイラルミート、スパイラルエキス、すり減ったフカヒレを鞆にしまうリヒトの瞳は、キラキラと輝いているように思う。

無事に任務を終えたら、彼は調理台を占領して開発に勤しむことだろう。材料を後から言うスタイルで、リヒトは阿鼻叫喚図を作り上げるに違いない。

楽しそうなりヒトの様子に苦笑したイノリは、ふと視線を向ける。マモノがうろつく回廊に、ルシエ族の女性が身を潜めているのを発見した。

「みんな、あれ！」

「急ぐぞー！」

「行きましょうー！」

リヒトとソウセイもそれに気づいたようで、即座にマモノに挑みかかった。苦戦することなくマモノを屠り、イノリたちは女性へ手を差し伸べる。

突如現れた異邦人に、女性は目を丸くした。まさか救助が来るとは思わなかったのだろう。昏く淀んだ女性の瞳に、かすかながら希望の光が浮かんだ。

「私、生きられるんですか？ 助かるんですか？」

「はい！ もう大丈夫ですよ！ ここは危険ですから、安全な場所に避難しましょう」

「よかった……！ 申し訳ありません、先王ユトレロ。そしてタリエリ様。裏切りをお許しください。本当は、死にたくななんてなかったのです……！」

女性はそう叫ぶなり、わっと顔を覆った。

玉碎作戦がアトランティス帝国の総意だったとしても、国民全員が1枚岩だとは限らない。この女性と同じように、表面上は玉碎作戦に異を唱えていないけれど、本当は死にたくないと思っている“民”だっているはずだ。

女性を宥めて落ち着かせた後、ホログラムに映るナガミミに声をかける。ウサギのマスコットは頷き、準備ができたことを告げた。「安全な場所に到着したら、ナガミミの指示に従うように」と説明し、イノリは女性に脱出キットを使う。

淡い光が弾けたと思った途端、ナガミミの背後に先程の女性が現れた。女性は見たこともない景色に驚いて腰を抜かす。ナガミミは相変わらずぶっきらぼうな口調で、彼女にできばきと指示を出していた。

さあ、先へ進もう——そう思ったときだった。

目の前は行き止まりになっている。道らしき道はない。

「あれ？ 道がここで途切れてますが……」

『ああ、その先に行きたいんですか？ その床に転送用の術式が刻まれているので、それを起動させれば進めますよ』

リヒトの問いに答えたのは、先程救助された女性だった。ホログラムで映る女性は、イノリたちが映し出されたモニターを見て発言したのだろう。

長い回廊と浮島で形成された首都アトランティカの移動手段は、回廊と転送用の魔法陣である。ナガミミ曰く、『後者はジュリエッタが開発したタイムマシンと似た技術が使われている』という。場所さえ指定すれば寸分狂わずそこに転送されるらしい。

1万2000年前の高度文明に、ソウセイは興味深そうに魔法陣を眺めていた。技術者としての好奇心が疼くのだろう。しかし、今回はその好奇心を満たす余裕はない。ソウセイは名残惜しそうに魔法陣を眺めていたが、振り切るようにして頷いた。

女性のルシエに礼を言えば、彼女は嬉しそうに微笑む。ナガミミの指示に従った彼女は、ホログラムから姿を消した。イノリたちは術式を起動させる。視界が白み、色を取り戻したとき、先程とは別の景色が広がった。

「……声が、近づいてきている……」

「声？ もしかして、『さっきから呼ばれてる』っていう……」

新しい区画に足を踏み入れたソウセイが、耳をそばだてた。

「ああ。先程よりも鮮明に響いてきている。イノリには聞こえないか？」

「ううん、何も」

「リヒトは？」

「僕にも聞こえませんか」

ソウセイの問いに、イノリは首を横に振った。ソウセイは隣にいたリヒトに問いかける。

リヒトも聞こえないようで、リヒトも首を横に振る。その答えを聞いたソウセイは、眉間に皺を寄せた。

彼は顎に手を当てる。「王家の血を継ぐ遙けき者」……？ 何を言ってるんだ……？」と呟いて、彼は天を仰いだ。その眼差しは、一番高い区画へと向けられていた。

気のせいか、彼の視線の先——一番高い場所にある区画から、青い光が発せられているように見えた。ソウセイの横顔は、どこか困惑している。

また、天から讚美歌が響いてきた。この調べも、上層へと向かえば向かう程、鮮明に響いてくる。ソウセイにだけ聞こえる「聲」と関係があるのだろうか。

イノリたちが考えていたとき、今度は別の場所から悲鳴が響いた。逃げ惑っていたのは、ルシエ族の青年たちである。片方は王国の兵士、もう片方——ゆったりとしたローブを羽織っている方は、おそらく文官だ。傷だらけの2人の背後には、空中を泳ぐ巨大魚が猛スピードで迫っている。

『気を付けろ、13班。奴はエンシエンタス。空泳ぐ魚のようなナリだが、アレもドラゴンだ。氷属性の攻撃を行ってくる。炎属性で攻めてやれ！』  
「分かった！」

ナガミミのナビに従い、イノリたちはドラゴンの前に飛び出した。文官と兵士を庇うようにして、3人はエンシエンタスの眼前に躍り出る。庇われた青年2人は、呆氣にとられたようにこちらを見上げた。

獲物を喰らう邪魔をされたエンシエンタスは、矛先をイノリたちへ変更したようだ。太古の巨大魚は咆哮し、こちらへと襲い掛かってく

る。イノリたちはそれぞれ得物を引き抜いて応戦した。

「炎属性なら、これはどうだ？」

ソウセイは不敵に笑いながら、データボックスを展開した。青い光の箱がエンシエンタスに投げつけられる。次の瞬間、炎のマナが渦巻いた。

エージェントのスキル、ファイアTORYだ。リヒトのトラップカードと同じ、罠を仕掛けるものである。しかし、デュエリストの罠スキルとは勝手が違う。

ソウセイが仕掛けた罠は、敵に対して仕掛けるタイプである。特定の属性攻撃に反応する仕組みだ。今回仕掛けた罠は、エンシエンタスにとつての弱点属性——炎属性。

「よし、私もー！」

「それじゃあ、僕も続きますよー！」

ソウセイに続いて、イノリとリヒトが駆け出した。イノリは双剣を振るい、裂きモミジを撃ち放つ。

鮮やかな炎が舞い、エンシエンタスの体を切り裂く。弱点攻撃を喰らった古代魚の悲鳴が響いた。

次の瞬間、エンシエンタスに仕掛けられていた炎のTORYが爆発した。思わぬ追撃を喰らい、エンシエンタスが苦悶の声を上げる。

「流星を召喚ー！」

リヒトが五芒星を描いて、炎属性のカードを宙へと放り投げる。炎属性の特殊全体攻撃魔法、Xバーンだ。

追撃が来ると思っていたエンシエンタスは思わず身を縮ませたが、何も起こらないことを察すると、大口を開けてリヒトに襲い掛かった。直撃は免れたが、肩にじわりと赤が滲む。

痛みに顔をしかめたりヒトだが、彼の闘志は折れていない。エンシエンタスは大きく口を開け、何かを吐き出した。氷の息である。吐き出された冷気が、イノリたちの肌を焼いた。

火傷は皮膚や体が高温に触れたために発生するものだが、冷気による火傷も存在する。正式名称は凍傷だ。火傷も凍傷も、厄介な状態異常の1つである。

後ろにいた兵士と文官が悲鳴を上げた。イノリたちの乱入によって薄れていた「自分が死ぬかもしれない」という恐怖がぶりかえしたためだろう。

次の瞬間、兵士と文官は目を見張る。——それもそうか。不利な状況でも、自分たちは不敵な笑みを崩していない。

「逃げられませんよ!」

リヒトの宣言同様、上空から隕石が降り注いだ。炎属性攻撃を喰らったエンシエンタスは悲鳴を上げる。勿論、ソウセイの設置したTROYももれなく発動した。

弱点攻撃を何発も喰らっても、エンシエンタスはまだ倒れない。家畜など喰らってやると言わんばかりに、奴は派手に咆哮した。

イノリの腕が痛む。エンシエンタスのブレス攻撃で、凍傷を負っていたためだ。

「これくらい……!」

イノリは練気手当を使い、傷と凍傷を治療する。その脇で、ソウセイが敵にニーブレイクを叩きこんだ。空を泳ぐエンシエンタスには、空中戦用の技も効果的らしい。

「熱くしましょう!」

銃撃したソウセイの背後から飛び出したりヒトは、火山が描かれた

カードを放り投げた。次の瞬間、炎のフィールドが出現してエンシエンタスに牙を向く。

リヒトのフィールド魔法は、敵の属性防御を下げる効果を有している。炎属性を弱点とするエンシエンタスにとって、炎属性耐性を下げられるということは不利だ。

炎属性攻撃に反応したTORYが爆発した。エンシエンタスが目に見えて揺らぎ始める。己を鼓舞するように吼えた古代魚は、傷を癒していたイノリへと牙を向いた。

鋭利な牙が肌を掠める。血が滲んだが、深手ではない。

エンシエンタスが空中を泳いで距離を取り直す。

「更に火の力を加えます。逃がしません！」

再び、リヒトのXバーンが効果を発動させた。先程よりも激しく燃える流星が、エンシエンタスを焼き焦がす。

Xバーンは発動が遅いが、一度使うと暫くの間、全自動で発動する。その前に炎属性カードを使えば、威力が増す効果があった。

「この弾で終いだー！」

ソウセイはエンシエンタスに銃口を向け、引き金を引いた。エイミングショットを叩きこまれたエンシエンタスは、断末魔の叫びを残して崩れ落ちた。

フロワロの花弁が弾け、ドラゴンは二度と起き上らない。イノリたちは周囲の安全を確認したのち、兵士と文官に向き直った。

鞆から薬を取り出して彼らを治療する。応急処置だ。2人の青年は呆気にとられたようにイノリたちを見つめていた。

——まるで、イノリたちの存在に心当たりがあるかのように、驚愕の眼差しを外さない。

「これで一安心かな。もう大丈夫です！　ここは危険だから、安全な

場所に避難しましょう」

イノリは躊躇うことなく手を差し伸べた。2人の青年はイノリたちの格好を凝視する。

彼らは顔を見合わせて、ひそひそと何かを話し始めた。そうして、信じられないものを見るようにこちらを見上げた。

「……あんたたちは、一体何者なんだ？」

「真竜ニアラについて調べています。私たちは、奴を討つためにここに来ました」

イノリの返事を聞いた文官と兵士は大きく目を見開いた。しかし、今まで見てきた驚きの反応とは方向性が違う。今まで出会ったルシェたちは、ニアラを倒すと言うイノリたちの言葉を本気にしていない様子だった。荒唐無稽な夢物語を語っていると、まともに取り合う者は殆どいない。

しかし、この2人は「ニアラを倒すと語る異邦人」が、実際に目の前にいる。事実に対して驚いている。「居るはずのないものが目の前に現れた」——兵士と文官の眼差しは、言葉以上に雄弁に語っていた。2人はひそひそと話し始める。信じられないと言わんばかりに、だ。

「その服装に、その物言い……」

「まさか、ウィータ様が仰っていた「ニアラを討つ者」——「遙かなる嚮後からの来訪者」……？」

「じゃあ、彼女の予言は本当だった……？ それじゃあ、アトランテイスは——」

「……いいや、実際そうと決まったわけじゃない」

「だが、あれを見ただろう？ お前や私の同僚を髑り殺しにしたあのドラゴンを、彼女たちは斃した。……もしかしたらとは思わないか？」



「だとしても、ウィータ様はもう、王宮には——」

文官と兵士の物言いを遮るように、今度は別の方角から竜の咆哮が響いた。声の出どころは、少し離れた先にある階段の向こう側——アトランティカの最上部だ。文官と兵士はびくりと肩をすくませたのち、ハッとしたように声を上げた。

「そうだ、星晶石！——ぐうっ!？」

「ニアラ打倒の要だ。あれを失うわけにはいかん！——つて、痛っ!!」

「2人とも、その怪我で無茶しないでください！」

慌てた様子で立ち上がりとうとした兵士と文官は、その場に蹲った。いくら応急処置を施したとはいえ、彼らはもう戦えない。

先程響いた咆哮はドラゴンのものだ。この2人がドラゴンの眼前に立ったところで、文字通り一掃されるのがオチだろう。

次の瞬間、ソウセイが弾かれたように顔を上げて、ドラゴンの咆哮が聞こえた先へと視線を向けた。瞳に浮かぶのは、焦燥。

「行かなくては……!」

「ソウセイくん!？」

「俺を呼んでいる声は、この先に居る!」

「ええっ!？」

「この先にドラゴンがいるなら、急がなければ!——この声の主が、ドラゴンの手にかかる前に!!」

迷うことなく、ソウセイは階段へと駆け出した。彼を呼びかける正体が、この階段の先にいる——しかも、ソウセイの反応からして、かなり切羽詰った状態らしい。

イノリとりヒトは顔を見合わせ頷く。兵士と文官に傷を治すよう懇ろに言い聞かせ、ナガミミの元へと2人を転送する。ナガミミは医

療セクションに連絡していた。

イノリとリヒトは、ソウセイより遅れて階段を駆け上がった。階段の上の方から銃撃音が聞こえてくる。ソウセイは既に戦闘態勢に入っているようだ。

長い階段の中腹にある踊り場——そこが、ソウセイとドラゴンの戦場だった。

普段よりも一層真剣な表情で、彼は黒い翼竜と対峙している。

「風のように！」

イノリは階段を駆け上がり、その勢いのまま影無しを放った。ドラゴンの体勢が崩れる。追撃と言わんばかりに、リヒトがカードを示す。

「電光のマモノよ！」

雷のカードに描かれていたのは、クラゲを模したようなマジユウだった。クラゲは触手を翼竜へと突き刺し、そこから放電する。紫電が爆ぜ、翼竜が呻き声を上げた。

イノリたちが合流したのを察したソウセイは満足げに頷くと、黒い翼竜へ向き直る。イノリたちもそれに続いて、黒い翼竜と対峙した。

嚮後の空より 〃 異邦人 《浦島太郎》 〃

階段の踊り場を占領していた翼竜が、断末魔の悲鳴を残して崩れ落ちる。これで、この先にいるであろう 〃ソウセイを呼ぶ声の主〃の安全は確保された。ドラゴンから手早く資材を回収し、イノリたちは階段を駆け上がった。ソウセイが先陣を切るような形で飛び出す。

階段の先には、大きな祭壇が広がっていた。その中央には、青く輝く巨大な石が浮かび上がっている。石はソウセイの姿を確認するや否や、淡く光を瞬かせた。まるで、来訪者を歓迎し、ここにたどり着くまでの労をねぎらうかのように。

「人は、誰もいませんね……」

「この石、一体なんだろう」

リヒトがきよろきよると周囲を見回す。イノリは、青く輝く石を見上げて首を傾げた。武器関係の素材に詳しいソウセイは、じつと石を見上げたまま微動だにしない。

ややあつて、ソウセイは何かを聞きとろうとするかのように目を閉じた。リヒトとは違う形で、自分に呼びかける 〃聲の主〃を探しているようだ。

祭壇には自分たち以外に誰もいない。ソウセイに呼びかけていた相手は一体誰なのだろう。イノリも周囲を確認したが、やはり人の姿はどこにもなかった。

『この石……まさか、オリハルコンか!?!』

「——間違いない。俺を呼んでいたのは、この石だ」

石の存在に声を上げたのはナガミミだった。それとほぼ同時に、ソウセイがカツと目を見開く。紫苑の瞳は、強い確信で満ちていた。

オリハルコンは竜殺剣の材料となった鉱石である。2021年の竜戦役では、帝竜の心臓3つを使ってオリハルコンを精製した。

そのオリハルコンで作られた竜殺剣は1回限りの使い捨てだ。竜殺剣はフォーマルハウトとの戦いで効果を発揮し、役目を果たしたと同時に消滅している。

現代技術では再現不可能だと言われていた、御伽噺の金属。2021年の竜戦役では、ATLコードに適応したルシエクローン——マリナだけが作り出せるものだ。

マリナはソウセイの祖母でもある。ソウセイにもATLコードの適応が見られるらしく、武器開発や装飾品作成で超人的な才能を有するのもそれが起因しているという。

ATLコードには金属を自在に操るだけでなく、金属の声を聞き分ける力があると耳にしたことはある。だが、実際にその現場を見たのは、今回が初めてだった。

「このオリハルコンが、海洋帝国アトランティスの文明を支える心臓だ。層に重なり連なった国家の構造を支える要であると同時に、邪なるもの——主に、マモノから民を守る防御機構の力も有している」「でも、首都にはマモノが跋扈してるよ? ……まさか、守りが弱くなってるの?..」

「その通りだ。このオリハルコンと同程度の大きさで力を有する石を各区画に設置し、支えとして使うことで、アトランティスは発展し、栄華を極めていた。だが、ニアラの襲撃によりオリハルコンは次々と破壊され、今ではここを始めた数か所しか残されていない。……つい先程も、別の場所にあるオリハルコンが砕け散り、浮島が沈んだぞうだ」

自分たちが街に足を踏み入れた際に起こった地震は、オリハルコンが破壊されたことが原因で発生した崩落を由来としたものだ——ソウセイが苦しそうな表情をしながら締めくくった。

イノリは眼前で光を放つ鉱石に視線を向けた。気のせいかな、オリハルコンの輝きが弱々しいものになったような気がする。己や、己が守ってきた命が辿る滅びの結末を嘆くかのように。

「そうか……お前は——」

「——無礼者！」

ソウセイがオリハルコンに手を伸ばしたとき、背後から鋭い声が響いた。いきなり怒鳴られ、13班の面々は弾かれたように振り返った。階段を上ってきたのは、豪華な法衣を身に纏った文官風の男だ。先程イノリたちが救助した文官よりも上の地位にいるのだろう。

「よそ者にとってはただのオリハルコンでも、我らにとっては尊きア  
トランティスの魂。触れれば、命は無きものと思え」

「——そのあんた自身が、〃生きたいと願う命を守りたい〃と叫ぶ魂  
の声を無視し、踏みにじろうとしているのか？」

厳かな調子を崩さぬ文官に対し、ソウセイはぎろりと彼を睨みつけた。  
た。

敵意に敵意をぶつければ、敵意が跳ね帰ってくるのは当然の結果である。

文官の眉間に皺が寄る。ソウセイと文官が派手に睨み合った。

「貴様、自分が何を言っているのか分かっていないのか？」

「ああ知っていると。オリハルコンが教えてくれた。〃ニアラに  
対する玉碎作戦に自分が使われる〃、〃自分はこんなことのために使わ  
れなくなかった〃、〃生きたいと願う命を守りたかった〃と」

「馬鹿な……！ 王族でもない、野蛮な陸の民である貴様が、星晶石の  
声を聞けるはずがない！ でたらめを言うな！！」

「おやめなさい、タリエリ。この者は、嘘偽りを述べてはいません」

この場に、凜とした女性の声が響く。文官の後に続いて現れたのは、ルシエ族の女性だった。シンプルであるが上品で煌びやかな衣装を身に纏った彼女は、一般人とは雰囲気全然違う。

雰囲気は誰に近いかと問われれば、恐らくリヒトであろう。彼は東雲財閥の御曹司としての教育を受けているためだ。女性からは、高貴な人間としての立ち振る舞いが端々に滲み出ている。

「ウラニア様……」

「星晶石の嘆きと無念に応えられず、運命を受け入れることを選んだのは私たちです。そうして、星晶石に私たち以上の痛みと覚悟を背負わせている……この者の言葉に、返せる言葉などありません」

女性——ウラニアの一喝を受けた文官——タリエリは、彼女に恭しく頭を垂れる。どうやら、ウラニアの方がタリエリよりも身分が上らしい。

「——ばあさん……!?!」

彼女の姿を視界に入れた途端、ソウセイはぎよつと目を見開いた。彼は感情のままに口走る。ソウセイは目の前の女性から祖母・マリナの面影を見出したらしい。

言われてみれば——雰囲気は全く別物だが——顔立ちがよく似ていた。マリナはATLコードに適応した際、<sup>〃</sup>アトランティス最後の女王<sup>〃</sup>としての記憶と能力を有したと聞く。

イノリたちの予想を肯定するかのようには、ウラニアとタリエリが自己紹介した。前者がアトランティスの女王、後者がアトランティスの執政官だという。

平時だったら、イノリたちの風貌やソウセイの物言いは詮議／裁判モノらしい。タリエリは地上の民に興味がないようで、早々に立ち去れと言って背中を向けた。

彼の関心は専ら星晶石の安否に注がれているようだ。この区画の星晶石は、どこかにある大星晶石と連結して、玉砕作戦に使うつもりらしい。

そんな執政の後ろ姿を、女王ウラニアはじつと見つめていた。何か

言いたいことがあるしそんな表情である。

「よそ者よ、ここを立ち去れ。海は我らルシエの領土だ」

「それはできない」

タリエリは剣呑な表情を崩さないまま、鋭い声で言い放った。

彼の言葉に対し、ソウセイはかぶりを振った。そうして、告げる。

「俺たちはニアラを倒しに来た。この国の滅びを見過ごせない。だから、共にニアラを討とう」

「——!!」

「!? ……なんと愚かな……。お前も、〃あいつら〃と同じことを言うのか……」

その言葉に、ウラニアが目を見開いた。

タリエリはソウセイを苦々しい眼差しで見下ろす。まるで、見知った誰かの面影を見出したかのようなのだ。

彼にとつて、その人物は複雑な存在らしい。懐かしさ、怒り、憐れみ、羨望——ごちゃ混ぜの感情が揺れている。

「まさか、ウィータが言っていたのは……いいや、そんなことはあるまい。確かに地上の民ではあるが、こいつ等はただの愚か者だ……」

タリエリはぶつぶつと何かを呟く。イノリは、ウィータという名前に聞き覚えがあった。

先程救助した文官と兵士が、その名前を口走っていたように思う。その人物を聞こうとするより先に、タリエリが動く方が早かった。

「請うて命を捨てる者にかける情けは無いぞ。衛兵——」

「待つて、タリエリ！」

兵士に目配せしたタリエリを引き留めたのは、ウラニアだった。思わずイノリたちは目を丸くする。彼女は、異邦人であるイノリたちと話がしたいと言い出した。

最後のワガママだと請うその姿は、物言いは控えめだけど、少女が父親に何かを強請る姿とよく似ている。立場は違えど、この2人は親子のような関係らしい。

タリエリは一瞬たじろいだ後、深々と息を吐いて苦笑する。先王の話題——ウラニアのワガママに弱かったという話題が出るあたり、イノリの祖父親馬鹿とよく似た人物気質だったようだ。

ウラニアはソウセイの元へと歩み寄った。そこにいたのはアトランティス最後の女王ではない。異国の旅人に興味津々な、どこにでもいる女の子だ。

おそらく、こちらが彼女の“地”なのだろう。先程までの凜とした振る舞いは、女王としての責務を果たそうと努力していたのだ。

「ふふ、不思議な衣装ですね。外界では、獣の皮を鞣して服にすると書物で読みましたが……想像していたものとは違うようです」

「あ、ああ……。ま、まあ、世界は広いからな」

ウラニアは興味深そうにソウセイの服装を眺める。ソウセイは視線を右往左往させていた。地上の民代表として、どう反応すればいいのか分からないらしい。受け答えがしどろもどろになっていた。

しかし、“衣装”という単語に彼は目を見張る。とっかかりになりそうな話題の糸口を見つけられたらしい。

そうとなれば、ソウセイは水を得た魚のようにすらすらと言葉を紡ぎ始めた。

「他にも色々な服がある。国や風土によって、服のデザインや使用される素材が大きく変わるんだ」

ソウセイはウィンドウとキーボードを展開し、画像を指し示す。



エージェントの力を目の当たりにしたウラニアやタリエリたちは驚いたようだが、前者が好奇心、後者が猜疑心で迎え撃った。

その差は大きいようで、ウラニアは興味津々に表示された画像を見つめる。タリエリは顔をしかめたままだ。後者を完全に無視し、ソウセイは大量の画像——衣服に関するものを1つ1つ提示しながら、服の素材や構造について語り始めた。

煌びやかな異国の服にウラニアは目を輝かせた。女王といっても、彼女も年頃の娘である。そんなウラニアの笑みを見たタリエリは、微笑ましそうな——けれどどこか申し訳なさそうな、寂しい笑みを浮かべた。

父親代わりとしてのタリエリは、とても親馬鹿な性格らしい。執政官という仮面が剥がれた先からは、娘を憂える父親の顔があった。

「外の世界は、こんなにも興味深いもので溢れているのですね。……私は、アトランティスしか知りませんから……」

暫し洋服のことを語り合った後で、ウラニアは悲しそうに苦笑する。

彼女はアトランティス最後の女王として、この地で命を終える覚悟を固めていた。勿論、外に広がる世界を知らず、外の世界に存在する命の営みと異なる文化に触れ合う機会すらなく。

そんな矢先に、ウラニアは異邦人——イノリやソウセイたち13班と出逢ったのだ。何も知らぬまま人生の幕を閉じようとしていた彼女にとって、これ程までに皮肉な仕打ちは無いだろう。

「それはお互い様だね。私も、東京しか知らないし」

「外国に行ったことがあるのは、僕とシキさんくらいでしょうから」

「トウキョウ？ ガイコク？」

「そのような集落の名前など、聞いたこともありませんな」

イノリとリヒトの言葉に、ウラニアはこてんと首を傾げた。タリエリも、「ソウセイによる洋服の話」で異国に興味を持ち始めたらしい。

眉間に皺を寄せながらも会話に加わる。背後に居た兵士がざわめいた。

そんなギャラリーの様子など気にもせず、ソウセイはウラニアをまっすぐに見つめて問いかけた。

「ウラニア女王。貴女はこの国が好きか？」

「当然です。私はアトランティスを愛しています。この国と、この国に生きる民を」

「……そうか。俺も、自分の故郷が好きだ。貴女に、是非とも俺の故郷を見てもらいたかった」

「私も、あなたたちに見せたかった……。壮大で豊かなアトランティスの、本当の姿を」

「……ああ。是非とも、この目で見てみたかった。——ばあさんにも、見せてやりたかった」

女王の言葉を聞いたソウセイは、静かに目を細めて呟く。後半の言葉は、ウラニアには聞こえなかったようだ。

ウラニアは悲しそうに微笑みながら言葉を続ける。アトランティスの民たちが辿ってきた、その生き様を。

海に生まれ、海に生き、最期は海へと還る——そうやって紡がれてきた美しい海洋帝国は、もうじき滅びを迎えようとしている。それでも尚、ウラニアは——アトランティスの民は、この地こそが楽園だと信じていた。

アトランティス最後の女王は、自分たちが辿る運命を甘んじて受け入れている。その瞳には、破壊へ向かって突き進む覚悟を固めていた。翡翠の瞳には光はなく、黒い影が揺らめいているように見えた。

「アトランティカの騎士にも劣らぬ、不思議な輝きを持つ旅人よ。こ

の国が滅んだ後の世界は、あなたのような者が導くのでしょうか……」  
「諦めるにはまだ早いよ！ ニアラを倒すために、まだできることが——」  
「——残された時間は、僅かです。今を逃せば、ニアラはこの国を滅ぼし、外界へと向かうでしょう」

言い募ろうとしたイノリに対し、ウラニアはハッキリと言いきつた。

「誇り高きアトランティスの民として、それだけは阻止せねばなりません。海の泡として消えた幾万もの同胞のためにも、何としてでもニアラを討つ——それが、残された者が果たすべき責任であり、世界の長たる者としての義務です」

外界に思いを馳せる少女であるウラニアは、もういない。イノリたちの目の前にいるのは、アトランティス最後の女王として立つ、凜とした女性だ。

タリエリに「そろそろ時間だ」と促され、ウラニアは頷く。これではお終いだと言わんばかりに、今度はタリエリが口を開いた。

「ニアラの襲撃からたったの数か月で、ルシエ族の王国は、この麗しき首都アトランティカただひとつとなった。そしてニアラは、今もこの地の最深部で、我らの最も神聖な場所を根城にして、沈みゆく国を嘲笑っているのだ……!!」

理知的な装いが崩れる。彼の瞳は、怨敵ニアラに対する怒りで燃えていた。タリエリは命と引き換えにしてもニアラを倒すと息巻く。名君であった先王ユトレロと、彼が率いた精鋭部隊が敗れたことが、ウラニアたちやアトランティスが終焉に向かう決定打になったらしい。

生まれ育った故郷、戦いで散った人々——「彼らを見捨て、自分

たちが生き延びることはできない」と、ウラニアは締めくくる。

——皮肉にも、ウラニアたちが出した結論は、イノリたちと正反対のものだった。

自分たちのために戦って散った祖父が間違っていないなかったことを証明したくて、祖父が向けた信頼に応えたくて、生きることを選んだイノリたち。

自分たちのために戦って散った同胞に報いるため、世界の長としての誇りと責務に殉ずるために、生きることを選んだウラニアたち。

(もしかしたら、私たちも、生きることが諦めていたのかもしれない……)

昏い瞳を目の当たりにして、イノリは何とも言えぬ気持ちになった。脳裏に浮かぶのは、祖父の葬儀で出会った少年。彼の言葉があったから、イノリは生きることを選んだのだ。

イノリに『祖父の正しさを証明するためには、泣いている暇などない』と言って励ましてくれた少年は、今、どこで何をしているのだろう——どうしてか、酷く気になった。

死者が願うのは生者の幸せではないのか——その言葉は、喉の奥に痞えたまま出てこない。ウラニアたちが背を向け、祭壇へと向かったためだ。

その際、こちらに振り返って別れの言葉を述べた女王ウラニアは、有無を言わさぬ威厳を纏っていた。イノリたちはさすがと祭壇から立ち去る。

長い階段を下る。上るときとは違い、足取り軽やかには行かない。足取り重くすべての階段を下り終えたイノリは、深々と息を吐いた。

『オイ13班!』

ナガミミが通信回路を開いてイノリたちに呼びかける。3人の気

配が昏いものを纏っているのを目の当たりにしたマスコットが、ぎよつとしたように声を上げた。

『……ど、どうしたんだよ。葬式みたいなツラしやがって……』  
「だって……」

『……あのなあ、余計なことは考えるなよ。どっちみち、この国は亡ぶんだ。情をかけたとしてもむ——……いや、もう、どうしようもない』

ナガミミは無意味／無駄と言いたかつたのだろうが、その言葉がイノリの地雷だと思い出し、慌てて言葉を変えた。

口は悪いくせに、部下に対する配慮はきちんとしている。このマスコットは意外と気遣いができるようだ。

『ここが1万2000年以上前の地球だとは説明したよな？』  
「うん」

『1万2000年前の地球に、ルシエ族——男は尖った耳、女は狐のような耳がついてたニンゲンがいたって、テメエらが使ってる教科書に書いてあったか？』

その言葉に、イノリはハツとしてノーデンスウオッチのホログラムを見返した。ルシエ族に関する記述は2021年の竜戦役からである。1万2000年前に存在したが、その時期に発生した竜戦役で国ごと滅んだとされていた。

『それに、当人たちが『生きることを諦めました』って言うんだから、テメエらがどれだけ『助きたい』と願ったところで、手を握り返してくれるとは思わねえよ。だったら、助けを求める他の連中に手を伸ばす方がいい』

「……でも、ルシエ族の面々も1枚岩じゃなさそうだったよね」

イノリはタリエリの言葉を思い返しながら、顎に手を当てて考え

る。彼はソウセイから「一緒にニアラと戦おう」と持ち掛けられたとき、誰かを思い返すような仕草をしていた。

彼の物言いや、兵士や文官が零していた「ウィータ」という人物の名前からして、アトランティス側にも「ニアラと戦おう」としている一派が居るらしい。

しかし、首都アトランティカを散策してみたが、それらしき人物とは会うことができなかった。ここにいないということは、別の場所に潜伏しているのだろうか。

『ま、オマエが望むような展開が欲しいんだったら、そういう骨のあるヤツらに持ちかけた方が現実的だろうなア。……少なくとも、この王都にはいないみてえだが』

それも当然かと、ナガミミは嗤った。王都の人々——その大半は、裕福そうな格好をしていた——は中流層から上流貴族が中心となっている。勿論、執政官のタリエリや女王ウラニアも含んでだ。

首都アトランティカは女王の判断に従う者が大半である。その中には、表面上従う者も含まれた。声を上げて反対する者の存在を許さない風潮からして、そうした人々は追い出されたのであろう。

ナガミミは『ニアラを狩ることを忘れるな』とイノリたちに釘を刺し、ナビゲートを続行した。『小手調べと戦闘訓練がてら、この周辺に徘徊するドラゴンを狩る』——これが今日の任務である。

マップに、ドラゴンの反応を示すマークが点灯した。先程は見かけなかったのに、いつの間にか、エンシエンタスが悠々と空中を泳ぎまわっている。

ニアラが「墮ちなかつた星晶石」の存在に気づいて、尖兵を放ったのだろうか？ それを確認する術はない。

今自分たちができる／すべきことは、我が物顔で泳ぎまわるエンシエンタスを狩り尽すことくらいだ。イノリは得物に手をかけて、エンシエンタスの元へと駆け出した。

\*\*\*

『よし、よくやった』

イノリたちが集めた資材とドラゴン反応が消えたマップを確認し、ナガミミが満足そうに頷いた。ナビゲーターの様子に、イノリたちも息をつく。

この調子でいけば、帝竜を倒せるようになるのも近いかもしれない。帝竜を倒せるようになったら、次はいよいよ真竜クラス——ニアラ討伐だ。

全盛期のニアラがどれ程のものか、想像すると気が重くなる。祖父が活躍した2020年に来襲したニアラは、片翼を失った手負いであつた。アトランティス帝国との戦いで、竜殺剣の一撃を受けたためだ。

2020年では手負いのニアラと死闘を繰り広げ、取り逃がしている。後に、祖父たちは全盛期のフォーマルハウトを撃破したけれど、ニアラ戦での怪我が祟つて、フォーマルハウト襲撃当初は本来の力を発揮できなかったという。

この事実から、真竜ニアラの強さが伺えるだろう。手負いの状態でも充分人類を追いつめたのだ。全盛期の状態となると、苦戦は必須。イノリは怨敵に思いを馳せながら、得物の柄を強く握りしめた。

『……ん？ なんだこの反応——ゲエツ!?!』

「ナガミミ？ どうかしましたか？」

カエルが潰れたんじゃないかと思うような声を上げたナガミミに、リヒトが問いかける。しかし、彼の問いに答えたのはナガミミではなかった。

「——もう、すっかり回復したようですね。見事な戦いぶりでしたよ」

背後から聞こえてきたのは、以前耳にしたことのある声だ。先日起こった帝竜騒ぎで、イノリたちを助けてくれた青年のものである。イノリは弾かれたように振り返った。はたして、そこにいたのは件の青年——ユウマと、彼の上官であるヨリトモだ。

「やあ。また会えましたね」

ユウマはそう言って、柔らかに微笑んだ。彼の様子からして、イノリとの再会を純粋に喜んでいるように見える。

彼との再会は想定外だったが、再会でできてうれしいという気持ちはイノリも同じだ。イノリも微笑み、頷き返す。

「また会えてうれしいです」と素直に言えば、ユウマはすつと目を細めた。口元が綻び、翡翠の瞳は静かに瞬く。

この世界に自分たちしかないんじゃないか——そんな錯覚に駆られかけたイノリを引きもどしたのは、ユウマの隣にいたヨリトモの咳ばらいだった。

なんだかバツが悪くなったような心地に駆られ、イノリはそつと目を逸らす。どうやらユウマも同じようで、彼は口元に手を当てて苦笑した。

「ええと……」

「ああ、自己紹介がまだでしたね。俺はISDF極東本部特殊戦術部隊所属、如月優真ユウマです」

「真に優しいと書いて、ユウマさん……ですか。素敵なお名前ですね！ ユウマさん、ユウマさんか……」

恩人の名前を確かめるようにして、イノリはユウマの名を紡いだ。なんだか特別な名前のように思えて、イノリは何度か彼の名前を紡いでみる。そんな反応が返ってくると思わなかったのか、ユウマは何とも言えなさそうに視線を彷徨させた後で、照れくさそうに苦笑した。



「何だろう。そんな風に名前を褒められたことも、そんな風に名前を呼ばれたこともないんで、どう反応すればいいのか……」

「あ、ごめんなさい。……迷惑でしたか？」

「いいえ、そんなことは……！」

「……あー……お前たち、もういいか？」

「ごめんなさい」

「すみません」

イノリとユウマのやり取りに水を差したのは、何とも言い難そうに渋い顔をしたヨリトモだった。げんなりした眼差しに気圧されるような形で、イノリとユウマは頭を下げる。

ヨリトモはますます渋い顔をした。彼の反応を見たソウセイとりヒトは「あー……」と、要領を得て納得したように頷く。それを見たヨリトモは、深々とため息をついた。

「特殊戦術部隊隊長、ヨリトモトウゴ頼友東吾だ」

そっちは、と、鋭い眼差しが問いかける。ヨリトモの瞳は、リヒトを怨敵として狙い定めたような気配を滲ませていた。勿論リヒトも鋭い眼差しで返す。笑っているのは顔だけだ。

「僕は東雲リヒトといいます。父は東雲財閥の会長でしてね。僕は末息子なんですよ」

東雲財閥という名前を聞いた2人の軍人——特に上官の顔色が、目に見えて変わった。東雲財閥の現会長は、80年前の竜戦役で活躍した東雲マサハル氏の息子である。

現社長の息子ということは、必然的に、リヒトの祖父はマサハルである、リヒトの祖父はムラクモ13班に所属していた英雄である、ということの意味していた。

ユウマの方は興味深そうに目を細め、ヨリトモの眉間には深いしわ

が刻まれた。どこの馬の骨かと藪をつついたら帝竜が出てきたと言わんばかりに顔がこわばっている。

変な空気に飲まれかけたのを打破するようにして、ソウセイも自己紹介をした。イノリも彼の後に続くことにする。

「俺は風間ソウセイだ。じいさんのような『戦う技術者』を目指して、日夜勉強に励んでいる」

「私は渡来イノリといいます。来春から、ISDFそちらの訓練所でお世話になる予定になっています」

「渡来……!?!」

イノリの名字を聞いた途端、ヨリトモの表情に明らかな動揺が浮かんだ。

彼のような反応をする人間の大半が、決まって『嘗ての祖父の教え子』である。

因みに、祖母の教え子の場合、相手側はぱつと表情を輝かせる。まれに祖父の教え子と同じ反応をする人もいたが、そういう人の場合、『祖父に説教する祖母の現場に居合わせた』ことが原因であった。閑話休題。

「……もしかして、ヨリトモさんは、おじいちゃんの教え子だった方ですか？ 私の祖父は渡来ミカゲですが」

「！——やはりそうか。お前は、先生の……」

イノリの補足に、ヨリトモは懐かしそうに目を細める。「あの人が亡くなって、もう8年になるのか」と、ヨリトモは噛みしめるように呟いた。

時間の流れは早い。あの頃はまだ10歳だったイノリも、今年でもう18である。ヨリトモは祖父の葬儀に参列していたらしいが、当時の記憶は曖昧だ。

戦列に残っていることはただ2つ。イノリに発破をかけて立ち直

らせてくれた少年と、彼に手渡したエーデルワイスの花ぐらいたった。

「え……!? キミが、あの……」

「英雄の孫とは言っても、大したことはしていませんよ。所謂七光りってヤツですから」

酷く驚いた様子のユウマを制して、イノリは苦笑した。英雄の孫というだけで、イノリ自信はまだ何も成し得ていない。だから、丁寧に扱われるようなことは何もないのだ。

イノリの反応を見たユウマは何か言いたげにしていたけれど、イノリの意図をくみ取ってくれたらしい。「分かりました」と、先程と同じ柔らかな笑みを浮かべて頷いた。

「ところで、ユウマさんたちはどうしてここに？ そういえば、さっき、ISDFがノーデンスの臨検に来ると聞きましたが、それと関係があるんですか？」

「はい。これはその延長線です。キミたちのボス、アリーさんに頼んで見学させてもらっていたんですよ」

彼はイノリの問いに答えた後、興味深そうに周囲を見回した。アトランティスの文明に触れて、浪漫を抱いているのだろう。

ユウマの関心事は、アトランティス文明への感動から時空転移装置を開発したジュリエッタとノーデンスの称賛へと移行した。

ISDFの2人は視察をそこそこに、アトランティカの探索へ向かうつもりようだ。この場所にはまだ複数の竜反応があるらしい。

『……ん？』

「どうかしたの？ ナガミミ」

久しく沈黙していたナガミミが、こてんと首を傾げた。

次の瞬間、荘厳な讚美歌が響き渡る。その調べは衝撃波となつて、この場を震撼させた。

イノリたちは思わずしゃがんで衝撃波をやり過ぎす。振動が収まった後、体を起こした。

ユウマとヨリトモは衝撃波にもひるむことなく、戦闘態勢を整えている。流石は対竜専門の戦闘部隊だ。涼しげな横顔は、踏み越えてきた場数を裏打ちしている。

やや遅れて、ナガミミの悲鳴。『上空に帝竜反応だ?!』——切羽詰った声色は、この状況がどれだけ不利かを鮮明に示していた。

「帝竜……!?!」

『イノリ！ 迎え撃とうなんて馬鹿なことは考えるな！ 今のオマエらじゃ勝ち目がない!!』

「俺も、キミのナビゲーターと同意見です。下がってください」

本能的に得物へと手を伸ばしたイノリを制し、ユウマが前へと躍り出る。刹那、上空に大きな影が見えた。

白い体軀は天使を思わせるような神聖さを帯び、6枚羽を有した竜。威風堂々とした佇まいは、さしずめ天使階級上級第一位階——熾天使と呼ぶに相応しい。

だが、大天使の讚美歌には、明確な不協和音が混じっていた。よく見ると、あの帝竜は手負いである。イノリたちがスペクタスに与えたような傷よりも、遥かに深かった。

奴はかなりの勢いで降下していく。イノリたちが居る天空廊より高い位置に浮かぶ浮島の群れへ向かって、だ。まるで、帝竜がそこへ降り立とう”としているかのように。

しかし、帝竜は激しく首を振り乱して咆哮した。己の意志ではないのだと叫ぶかのように、不協和音を響かせる。

だが、次の瞬間、帝竜の体がびくんと震えた。青い燐光が迸る。ほんの一瞬の間だったが、電子情報らしき文字の羅列が浮かび上がった。

「ハッキングだと……!?!」

『ちよつと待て! この反応……誰かが、落下しながら帝竜と戦ってやがるぞ!!』

自身の得意分野故に、ソウセイはいち早くそれに気づいたようだ。同時に、ナガミミがとんでもないことを口にした。

『落下しながら帝竜と戦う』——何て無茶をしているのだろう。スペクタスに挑みかかったイノリたちより無謀ではないか。

帝竜の巨体が浮島の真上に差し掛かったとき、淡い燐光を放つ人影が飛び降りた。頼りない光を纏う6つの人影は、転がるようにして浮島へ着地する。帝竜が咆哮した直後、奴にかかっていたハッキングが切れた。

自由になった帝竜はその場に制止し、もがくようにして羽ばたいた。何かを振り落とそうとしているのだろう。よく見れば、そこにははつきりとした人影が見えた。

帝竜は、自分に掴っている人影を振り払いたい様子だった。次の瞬間、膨大なマナが湧き上がる。帝竜の上に居る『誰か』がエグゾーストを発動させたのだろう。

「——そんじゃーまあ、つとオー!」

聞き覚えのある声が、イノリの耳を打った。

二度と聞くことが叶わないはずの声だった。

イノリは弾かれたように、声の主へと視線を向ける。

誰かが帝竜に一閃を叩きこんだのは、イノリが誰かへ視線を向けたのとはほぼ同時。間髪入れず、誰かはその一閃を皮切りに、次々と斬撃を叩きこんでいく。

「適当サイズにぶった切る!」

浮島を足場にして飛び回り、何回も、何回も、白い大天使の体軀を切り裂いていく。血の代わりとでもいうかのように、桜の花弁が美しく舞い散った。

常人では認識できぬ速さで、誰か——銀髪の青年は斬撃を叩きこんだ。——そうして、浮島の大地を蹴って飛びあがる。青年の背後に、美しい満月が見えた気がした。

空中で一回転した青年は刀を持ち帰る。彼はそのまま、帝竜の頭目がけて落下した。帝竜が逃れる間もなく、青年の刃は寸分狂わず帝竜の頭に突き立てられる。帝竜の悲鳴がこの場一帯に響き渡った。

力を失ったのか、ぐらりと帝竜の体が傾く。断末魔の叫びと共に、文字通り、大天使は地上へ向かって墜ちていった。

用は済んだと言わんばかりに、青年はドラゴンの頭から得物を引き抜き、天使の体軀を蹴って跳躍する。

青年が飛んだ先は——丁度、イノリたちが身構えていた浮島にある回廊だった。

「あとは煮るなり、喰らうなり——」

青年はそう言い残し、転がるようにして地面に着地する。イノリたちは慌てて、彼の元へと駆け出した。

「だ、大丈夫!？」

「……こんな労働、二度と御免だぞ！　ただでさえ、人類戦士の老老介護でヒイコラ言っただつてのに……!!」

青年は天を仰ぎながら不満を叫んだ。誰に向けた叫びかは分からないが、彼の言葉は理不尽への怒りを含んでいるように思う。

彼はそのまま、柱に背を預け、ずるずると崩れ落ちる。よく見ると、体中が傷だらけで、頭からは血を流していた。荒い呼吸が響く。

刃を思わせるような銀色の髪、揺らぐことのない紫水晶の双瞼、ふてぶてしく弧を描いた口元——その姿には、見覚えがあった。あの頃

と寸分変わらぬその姿に、イノリはひゅつと息を飲む。

リヒトも、ソウセイも、そうしてヨリトモも、驚愕の表情を浮かべている。この4人に共通している人間が——8年前に亡くなったはずの人間が、亡くなる前の姿で、自分たちの目の前<sup>こ</sup>に居るのだから。

後から駆けつけたユウマが目を見張り、彼の肩書を口にすする。ナガミミが、過去のデータにある生体反応と青年の生体反応を照合させていた。ややあつて、『ウソだろ……こんなのウソだろ……!?!』と戦慄く。

「…………おじいちゃん?」

イノリは震える声で青年——渡来ミカゲを呼ぶ。盛大に愚痴をこぼしていた男はぴたりと言葉を止めて、ゆっくりと首を動かした。

紫水晶の瞳にイノリの姿が映し出される。ミカゲは誰かの面影を探すようにして、じつとイノリを見つめていた。

彼はぼんやりと目を瞬かせる。幾何かの間の後で、ミカゲは大きく目を見開いた。ゆっくり、口元が動く。

「…………イノリ——…………?」

目の前に立つ少女と、彼の記憶の中にいた幼子の姿が重なったのだろう。ミカゲはへにやりと笑い——そのまま瞳を閉じてしまった。

「お、おじいちゃん!? おじいちゃん!」

イノリは思わず祖父の肩を掴んで揺らした。

8年前、彼が死ぬのを見ていることしかできなかったことが、余計に恐怖を湧き立てた。

また、イノリは大切な家族を失ってしまうのか——

「いだだだだだだ！ 痛い、痛いから！ やめろ、傷に障る！」

派手に揺られながら、ミカゲが悲鳴を上げた。彼の瞳には、爛々と生気の光が宿っている。到底、死にそんな人間には見えない。

「へ……!?!」

「……あーもう、こちとらか弱いんだつてエ……! 正義の味方の老老介護、ニートと奴の可哀想な部下たちと戯れ、トリスアギオンと紐なしバンジー……度重なる重労働……! 流石の俺も、もう……ムリ……」

それだけ言い残し、ミカゲは深々と息を吐いて目を閉じた。今度こそ完全に沈黙する。

イノリは恐る恐る彼に耳を傾ける。はつきりと呼吸音が響いた。  
——眠っているだけらしい。

変な沈黙が広がる中、最初に現実へ帰還したのはナガミミだった。マスクットはげんなりした様子で、けれども的確な指示を出した。

『……13班、帰投しろ。ソイツを——80年前の英雄を、ノー<sup>ウ</sup>デ<sup>チ</sup>ンスの医務室へ運び込め』



## 求望：收拾のつけ方

「所詮はA級能力者<sup>秀才</sup>。絶対的な天才には敵うはずもないか」

父の言葉に、異母姉の女性は歯を食いしばって耐える。少年は何かを言おうとして——けれど、姉から向けられた憎悪の眼差しに押し黙った。

「しかし、惜しいものだ。誓約がなければ、この子が日傘の跡取りになっただろうに」

星が望んだ天才——それが、少年の持つ能力の真髄だ。世界を守るために与えられたこの力が、少年の寿命を著しく縮めているというのも皮肉なものである。……最も、その懸念は、日傘一族が代々協力している人物から齎された技術によって、劇的に改善されたが。

勿論、その協力者は無償<sup>タダ</sup>で技術を提供したわけではない。有事の際、その協力者が持ちうる特別兵装の担い手となることが義務付けられている。勿論、特別兵装を起動する瞬間まで絶対に死んではならないし、その兵器を起動する担い手は高確率で死ぬという。

何がどうなって死に至るのかは分からないが、「兵器の起動が己の死に直結している」と少年は解釈している。少年は、「自分に与えられた役割」によって生かされていることを理解していた。然るべき刻<sup>とき</sup>のために生き、然るべき刻<sup>とき</sup>に死ぬ——生き物の摂理だ。

父は深々とため息をつく。少年の頭を撫でる手つきは優しいが、姉に向ける言葉は鋭かった。

父が振りかざすそれは、鋭利な刃物となって姉を傷つける。それは、少年の望むことではない。

「俺は、日傘の跡取りになる気はないよ。一族を率いるリーダーなんて俺の性に合わないし、そういう才能の方は姉さんの方が上だ」

少年は滾々と事実を並べる。

姉が主導となつて行い、成功してきた研究は沢山あつた。寝食の暇すら研究に捧げてきた背中を、指導者としての振る舞い方に悩み続けた背中を、成功のために必死に努力し続ける背中を、少年はずっと見つめてきた。

その言葉を聞いた父親は少年の頭を撫でながら、姉に視線を向ける。その瞳に宿るのは力ある者の驕りだ。秀才でしかない姉を見下す父は、姉を嘲つた。「一族の長なら、それくらいできて当然のことなんだ。できない方がどうかしている」と。

遠くの方で、誰かが父を呼ぶ声があった。父は人のいい笑顔を浮かべて返事をする、姉の方へと向き直る。

無言の合図を受け取つた姉は、小さく頷いた。姉は少年の方に向き直つて、告げた。

「来なさい。調整を始めるわ」

\*\*\*

醜悪に笑つた姉が、少年の首を締める。——少年は、一切抵抗しない。

このまま首を締められ続ければ、自分は確実に死に至るだろう。

あと少しで意識が途切れるかと思つたとき、不意に手を離された。体は酸素を求め、荒い呼吸を繰り返す。

「どうしてよ」

姉は泣いていた。自分が苦しんでいるのだと言わんばかりに、ぼろぼろと涙をこぼしていた。

それは揺るがぬ事実だ。姉は、咳き込み続ける自分以上に、沢山苦しい思いをしている。

「あんたさえいなければ！ あんたさえ、あんたさえ……!!」

殺したいくらいに憎む相手。でも、その相手を殺すことは許されな  
い。積もり積もった憎しみは、法律云々程度の壁で止まるはずもな  
い。

それでも姉が少年に手を下さないのは、少年が「有事の際、人類を  
救う切り札になる」からだ。

「今が然るべき刻ではない」から。「然るべき刻にしか、少年は死  
なない」から。

「然るべき刻」は、まだ訪れる気配がない。だから、姉はイラつい  
ている。

「チカラが欲しい……！ チカラさえ、チカラさえあれば……きつと、

私は——」

(姉さん)

少年の視界がじわりと滲んだ。生理的な涙と、感情的な涙。2つが  
混じっているのだと、少年は漠然と分析する。

姉の隣には誰もいない。姉を守ってくれる人の姿はない。だから  
自分がそうなりたかったけれど、姉は少年など望んでいないことは明  
白だった。

姉が少年に望むことは1つだけである。しかしながら——残念な  
ことに、少年は姉の望みを叶えてやることができない。それが、酷く  
哀しかった。

\*\*\*

「坊主。オマエ、何か「なりたいもの」ってあるか？」

紫のバンダナを巻いた偉丈夫は、唐突にそんなことを問いかけてき  
た。青年は目を瞬かせる。

この話題に至るまで、自分たちはどんな会話をしていたのだろう。それら一切を忘れてしまいうくらい、偉丈夫の問いは鮮烈なものであった。

「路肩の石」

青年は、迷うことなく答える。途端に、偉丈夫はぎよつとしたように目を剥いた。

「はあ!? ……じ、冗談だろ?」

「割と本気」

若者らしくないと、偉丈夫は渋い顔をした。そもそも、青年が挙げた対象は人間ですらないし、生きてすらいない。小学生でも絶対に挙げないだろう。

それでも、青年は路肩の石になりたかった。文字通り、なんでもいいならば、そんなものになりたかった。そんな風になりたかった。

「だって、路肩の石ならば、誰かを傷つけなくて済む」

「……………」

「誰かを困らせることも、苦しませることも、悲しませることもない。そこに在<sup>あ</sup>っても、罪には問われないんだ」

青年は屈んで、転がっていた手ごろな石を拾い上げる。角の1つもない、つるつるした石だ。

「蹴飛ばされても、投げられても、石は文句を言わない。ただ粛々とそこにある。そこに在<sup>あ</sup>り続ける。——その事実を、人間は否定することはできない」

姉を傷つけることなく、姉を困らせることもなく、姉を悲しませる

こともなく、そこに在<sup>あ</sup>つても姉を追いつめることもなく。

姉に首を締められても、姉に暴言を吐かれても、ほんの少しでも「苦しい」という素振りを見せることなく、否定されることもない。

青年は、石を地面に置いた。足元に転がっていた石をもう一つ拾い上げて、先程の石の隣に並べる。大きさも形も全然違うけれど、並べると、まるで家族のようだった。

遠くから聞こえてきた声に顔を上げれば、仲の良いきようだが楽しそうに談笑している。青年はじつと、その光景を見つめた。青年がどんなに望んでも手に入らないもの。

つられてその光景を見ていた偉丈夫が、気遣うようにして青年を見た。年長者として、年下である青年のことを心配してくれているのだろう。青年はへらりと笑った。

「俺、ワガママ言ったつもりはないんだけどなあ。……いや、俺が自覚していないだけ、かな」

平凡を望む人間には異質を、異質を望む人間には平凡を——そうやって、世界はバランスを取っている。

姉も、自分も、バランスに振り回されるだけのちっぽけな存在ではないのだ。

青年には、そう思えてならなかった。

\*\*\*

腹を貫かれた青年は、顔を上げる。眼前には、異形と化した姉の姿があった。

間髪入れず力が抜けた。体を蝕む痛みには耐えきれず、青年は崩れ落ちる。

背中に巨大な触手を背負った人竜は、憐れみを込めた眼差しで青年を見下していた。

「さようなら、ミカゲ」

その背中は、遠い。闇の中へと消えていく。  
青年——ミカゲは地面を這いながら、必死に手を伸ばした。

「……姉、さん……」

伸ばした手は届かない。倒れ伏した体は動かない。

楽しそうに笑う姉の声が響く。それも、どんどん遠くなってきた。  
地面を染める血だまりが視界の端に映る。……この調子だと、死因は  
出血性ショックだろうか。

暗くなつていく視界と対照的に、明らんできた空がちらついた。意  
識が朦朧としてきたため自信はないが、足音が近づいてくる。誰かが  
気づいたのだろうか。

誰かが何かを言っている。ミカゲくん、という呼称から、誰かはミ  
カゲのことを呼んでいるらしい。暗い視界の中、ぼんやりと浮かんだ  
のは、姉の背中だった。

「……行かないで……!!」

彼女は振り返らない。もうニンゲンに未練はないと言わんばかり  
に、闇の奥底へと駆け出した。



瞼の奥から光を感じ取る。早く起きろと言わんばかりに、燦々とし  
た光だ。

ミカゲはゆっくりと目を開けた。薬品の香りが漂う白い部屋——  
この単語だけで、ここが医務室であると察して体を起こす。傷は完治  
しており、動くには問題なさそうだ。

ただ、調子は良いとは言えない。簡潔に言い表すならば、2021

年のフォーマルハウト襲撃直前と同じような状態だろう。またリハビリから始めなくてはならないらしい。

患者が起き上がったことに気づいた医師が、慌てて駆け寄ってきた。医療従事者たちはてきぱきとミカゲの怪我を確認する。

医師のホリイは暫し唸った後、堂々と太鼓判を押した。医療関係者は基本、不用意に「治りました」とは言わないものだ。

万が一、医者がゴーサインを出して患者に何かが起こった場合、責任の所在／矛先が医者本人に向かう危険性があるためだ。

「おじいちゃん！」

そのタイミングを待ってましたと言わんばかりに、ミカゲが居る区画に人が雪崩込んでくる。あのときは幼い子どもだった。ミカゲの希望——イノリ、リヒト、ソウセイだ。3人は瞳に涙を浮かべながらミカゲを取り囲む。

特にイノリは、ミカゲに思いっきり抱き付いてきた。失ったものが手の中に戻ってきたのだと確認するかのようになり、強く、強く。ミカゲの視点からではイノリのうなじしか見えないが、耳元からくぐもった嗚咽が聞こえた。

彼女たちを守るためとはいえ、幼い子どもの目の前で身を投げたのだ。トラウマになってもおかしくない。

当時のことを思い出し、その感情が溢れているためだろう。イノリが泣き止む気配はないし、リヒトはぼろぼろ涙をこぼしている。

ソウセイは鼻を鳴らしながら、目を腕で覆っていた。この場にシキはいないようだが、もし居たら同じように泣いてたであろう。

3人の様子に影響されたためか、心なしか、ミカゲの視界も滲んできた。口元は自然と緩む。ミカゲはイノリの背に手を回した。

「おじいちゃん、おじいちゃん……っ！ わ、私、私……っ!!」

「言うな。……何も言わなくていい。——大きくなったな」

「うん……うん……っ！」

イノリが小さい頃してやったように、彼女の背中をぽんぽん叩く。背中に回された手に力が込められた。

「生きてくれてよかった。お前が無事で、元気にしててくれて、本当に良かった」

「……………!!」

ミカゲの言葉を聞いたイノリは、ぼろぼろと涙をあふれさせる。ミカゲが居なくなっただけ、イノリに対して心無い言葉が向けられたことは明白だ。

彼女は、自分に向けられる悪意の言葉に、必死になって立ち向かってきたのだろう。ミカゲに肯定されたことで、ようやく安心することができたのだ。

リヒトとソウセイにも同じ言葉を告げれば、2人とも泣き笑いに近い表情を浮かべた。ミカゲの後継者たちは、総じて泣き虫になる気質があるらしい。

『ほら、泣かないで。大丈夫だから』

希薄だった気配がより鮮明になる。ミカゲに比べれば気配は薄いままだったが、この場にユイの姿が浮かびあがった。彼女は慈しむような手つきでイノリの頭を撫でる。

新たな人物の出現にイノリは驚いた様子だったが、すぐに「おばあちゃん」と情けない声を上げて泣きだした。ミカゲを死なせてしまったことを謝る孫に、ユイは優しく微笑む。

リヨウスケはソウセイに抱き付いて、派手に泣いていた。祖父が思いつき泣くものだから、ソウセイが宥める側に回っている。どちらが孫なのか分からなくなりそうだ。

那雲夫婦は優しい眼差しで、祖父母と孫のやり取りを見守っていた。この場にシキがいたら、シラユキやヨツミも同じ反応をしたのだ。



と思う。

……しかし、いつもなら男泣きしていそうなマサハルの姿が見当たらない。彼はどこへ行ってしまったのだろう。ミカゲは首を傾げ――

『そのの麗しきロマンスグレーのドクター！ あたしとお医者さんごっこをしよう！ さあ、診察の時間ですよ。お洋服脱ぎましようね』

「え、ちよ、やめて！ 僕、これでも既婚者――」

『よいではないか、よいではないか』

「た、助けて！ 誰かああああ！ 誰かあああああつ!!」

『やめろ馬鹿ヒイナ!!』

見つけた。

マサハルはヒイナを羽交い絞めになっている。ヒイナはミカゲを治療したホリイに襲い掛かろうとしていた真つ最中だ。ヒイナは「お医者さんごっこ」と言っているが、彼女の言う「お医者さんごっこ」は医療行為ではない。年齢規制がついてくる、所謂ダメなやつだ。

ミカゲは躊躇うことなく、近くに置いてあった消毒用アルコールの瓶を掴んで投擲した。投げつけた瓶は見事にヒイナにヒットする。情けない悲鳴を上げた彼女の隙をつくようにして、マサハルはヒイナを無力化した。半ば引きずるような形で、ミカゲのいる区画へと帰還する。

『ナイス援護』

「おう」

互いの健闘を讃えあい、マサハルとミカゲは拳をつき合わせた。マサハルの腕で拘束されたヒイナは不満そうにぶすくれる。

とりあえず、医務室の平和は守られた。呆気にとられる孫たちに対し、ミカゲは曖昧に微笑む。――察してくれたようだ。

ふと見れば、扉の方にいかつい壮年の男と優男風の青年が立っている。後者には全然覚えがないが、前者には見覚えがあった。

「……トウゴ?」

「!!」

「お前、トウゴだな?!」  
頼友東吾ヨリトモトウゴ!

遠い日の面影を頼りにして教え子の名前を呼べば、ヨリトモは目に見えて狼狽した。視線を右往左往させたのち、観念したように苦笑して頷く。見ないうちに、ヨリトモも立派になったようだ。髪の毛は死滅し、代わりに顎髭が立派になってるようだが（勿論口には出さない）。

隣にいる優男はヨリトモの部下なのだろう。彼は目を瞬かせた。提督と紡がれた呼称から、ヨリトモが風格だけでなく、それなりの地位も得たことを悟る。名実外見共に立派になった——教え子の佇まいに、込み上げてくるものを感じる。

自分が守り抜いた希望たち、戦う者としての心構えと技術を叩きこんだ教え子。彼女や彼が成長した姿をこの目に拝むことができると思わなかった。アイテルによって飛ばされたときは最悪だと思っただが、今は飛ばされてよかったとすら思えた。

ヨリトモは不器用で寡黙な男だけれど、眼差しは雄弁に物を語る。イノリたちと同じ、喜びと驚きが滲んでいた。

ミカゲは彼が幼い頃から付き合いがあったが、虐められっ子だった少年の姿からは結び付かなかった。

「そうか。提督、か。——……しっかし、お前も出世したもんだなあ」  
「……いえ、先生には及びませんよ。今だって、貴方と手合わせしても勝てる気がしません」

「謙遜するなよ。お前等からすれば、俺なんて旧世代のポンコツだぞ? 帝竜相手に辛勝するのがやっとだった人間に、帝竜相手に勝ち星を挙げてる部隊長がそんなんでどうするんだよ」

苦笑する教え子の様子は、あの頃と何も変わらない。それが微笑ましくて、懐かしくて、ミカゲは口元を吊り上げた。気を抜くとこっちが泣いてしまいそうになる。師匠／先生という肩書を背負う人間として、矜持はあるのだ。

『ウホッ、イイ男！ きつとイイ体しているに違いない！』  
「やめろ」

『げへへ、おっと涎が』と言って口元を拭うヒイナに、ミカゲは即座に消毒用アルコールの瓶を投擲する。先程投げたものとは別のものだ。

それは寸分の狂いもなくヒイナの頭に当たった。即座にマサハルが羽交い絞めにして戦線から引きずり戻す。ナイスプレーだ。

眉間に深い皺を刻んだヨリトモは、今にも泣きそうな気配を漂わせている。本当に申し訳ない。ミカゲも苦笑して頭を下げた。

人の教え子に手出しするなど言語道断。ミカゲはヒイナを睨む。ヒイナはミカゲを睨み返し、忌々しそうに舌打ちした。しかし、彼女はすぐに不敵な笑みを浮かべて宣言する。

『私は諦めない！ この欲望がある限り、何度でも甦るさ！』

ヒイナの手は、ごく自然な動作で、いつの間にかヨリトモの制服に手をかけていた。ヨリトモを引ん？く準備は万端である。

「悪霊退散」

『キイエアアアアアアアアアアアア!!』

ミカゲは冷却スプレーをヒイナの顔面に噴射した。催涙スプレーではないので、違法武器の所持には当たらない。道具の用途外としてお叱りを受ける可能性はあるが、『私は諦めない！』と言った時点で、

奴はヨリトモに襲い掛かろうとしていた。教え子を守るための防衛行為である。

顔を抑えて七転八倒するヒイナの姿に、ヨリトモは一步遅れで身の危機を察知したようだ。「馬鹿な……接近に気づけなかっただど……!?!」と彼は戦く。トリックスターは優れた暗殺能力の持ち主であるが、ヒイナはその使い方を果てしなく間違っていた。良い子のS級は決して真似してはいけない。

「――彼が、渡来ミカゲ。嘗ての英雄にして、“人類最強”……」

当たり前のことを確認するかのように紡がれた言葉には、一切悪意の響きは無い。だが、聞き手であるミカゲにとっては、好ましくないものだった。

視線を向ければ、優男が静かな面持ちでミカゲを見つめていた。青年は一瞬目を瞬かせると、バツが悪そうに視線を彷徨わせる。

『ミカゲくん。睨まないの』

「そうか？ 俺はそんなつもりじゃなかったんだが……」

『眉間の皺。凄いことになってるよ』

「あ、ホントだ」

ユイに指摘され、ミカゲは自分が酷い顔をしていたことを自覚する。ガラスに映った自分の顔も、渋い表情を浮かべていた。

優男が居心地悪そうにしたのはこれが原因らしい。委縮気味になった青年は、途方に暮れた子どもを思わせる。

彼の姿から幼い頃の自分を連想したのは何故だろう。ミカゲは内心首を傾げながらも、青年に対して謝罪した。

「悪いな」

「いえ……」

なんだこのぎこちない空気。

変な沈黙が広がる。なんだか物凄く居心地が悪い。タケハヤとの言い争いで完敗したときのような、病室から大脱走した後に連れもどされて看護師／ユイから滾々と説教を受けたときのような、そんな類の気まずさがあった。

「……そういえば、名前は？」

「ああ、自己紹介がまだでしたね。俺はISDF極東本部特殊戦術部隊所属、如月優真<sup>ユウマ</sup>で、ヨリトモ提督の直属の部下です」

「へえ。真に優しいって書いて、ユウマか。いい名前だな」

その言葉を聞いて、ユウマは目を丸くした。鳩が豆鉄砲を食ったようだ。

どうしたのだろう。ミカゲが訊ねると、ユウマは顎に手を当てて考え込む。

次の瞬間、ユウマはふつと表情を緩めた。何がおかしいのか、楽しそうに笑う。

「何？ 俺、何か変なこと言った？」

「いいえ。……やはり、貴方はイノリの祖父なんだなと思ひまして「は？」」

「イノリも、同じように、俺の名前を褒めてくれたんです」

彼の笑みが、何か違うように思えたのは何故だろう。

人当たりのいい笑みではなく、血が通った柔らかな笑み。

——いいや、その前に。ユウマの言葉がひっかかる。

奴は今、何を言った？ イノリも同じように名前を褒めてくれたと言わなかったか？

ミカゲはユウマに視線を向ける。ユウマはこてんと首を傾げた。外見と似合わない幼さが滲む。

その疑問を問いかける前に、医療室の扉が開いた。入ってきたの

は、シルクハットを被ったウサギのマスコットと、小洒落た格好で顎髭を生やした長髪の男と、眼鏡をかけた女性である。

『トマリくん！ トマリくんじゃないか！』

「うわあああああ!? よ、ヨツミ博士エエ!?」

小洒落た格好の男を視界にとらえたとき、ヨツミが弾丸の如く飛び出した。トマリと呼ばれた男性は悲鳴を上げてのけぞる。

そういえば、彼の甥の教え子に渡真利<sup>トマリ</sup>という名の研究者が居たような気がした。顔を合わせたことは一度もなかった。

大パニックに陥ったトマリに対し、ヨツミは次々と質問を投げつけた。トマリのレスポンスなど待っていない。

『キミ、その恰好からしてISDFは辞めたのか?』

「へっ!? あ、はい」

『そうか……。ドラゴンクロニクルに関する研究から、キミは手を引いたのか……。』

「いや、研究自体は続けてて……」

『なんと！ ……そうだな。ISDFから離れようとも、研究そのものはどこだろうと続けられるな。私としたことが、大事なことを忘れていたよ。長らく戦場に身を置いていたせいか、研究者として鈍らになってしまったらしい』

「博士。アタシは、その」

『やはりキミは素晴らしい研究者だよ、トマリくん。私の目に狂いはなかった！ キミは希望だ。技術者の希望だよ!!』

「あ、ありがとうございます……?」

ノリにノったヨツミは今日も通常運転である。対して、トマリは完全に挙動不審になっていた。目が泳いでいる。

彼は何かを言いたげに口を開くのだが、ヨツミの機関銃トークに圧倒されてしまい、何も言えなくなっていた。

シルクハットを被ったウサギは一方的なやり取りを眺めている。表情に変化がないため、どんな状態なのかわからない。

「いやー、ビックリだよー。80年前の英雄が、時を超えてアリーたちの目の前にいるんだもん☆ 運命だねっ!!」

ミカゲの目を惹いたのは、眼鏡をかけた女性だった。鮮やかなローズピンクの髪に、ゆったりとしたニットセーターを着て、フリルがついたマーメイドラインのスカートを穿いている。細目ではあるが、人懐っこさそうな笑みを浮かべていた。

頭の奥でノイズが走る。脳裏に浮かんだのは焼き切れた記憶だ。楽園に出現した「影の世界」に咲いていた葬送花の色は？ あの奥地で荘厳に佇んでいた、美しい真竜はどんな姿だった？ 奴の取り巻きは、どんな姿をしていた？ ——それに突き動かされ、ミカゲはい口走る。

「なあ」

「んー?」

「アンタ、どこかで俺たちと会ったことない?」

ミカゲの問いに対して、女性はにっかりと微笑む。

「——アリーは〃キミと会ったの、初めてだよ!」

「……………そりゃあそうさな」

女性——アリー・ノーデンスは、当たり前前の答えを返す。

ミカゲはどうしてか、煙に巻かれたような気持ちになった。

\*\*\*

「しっかし、こんな奴らが80年前の英雄とはなア。生体反応が一致

してなきや、あまりのそっくりさん具合にしよつ引かれてもおかしくないレベルだぞ」

ウサギのマスコット——ナガミミがミカゲの方を向いた。胡散臭そうな眼差しを向けられている気配を感じる。ミカゲには、ナガミミの方が充分胡散臭い。このウサギ、ノーダンスでの肩書は主任だという。

ヨリトモとユウマは、ナガミミが「何者」かで議論していたが、ナガミミ本人から一喝されて追及を諦めたらしい。「エンタメ企業だから何でもあり」という最終判断は、やや無理があつたのではないだろうか。

「しよつ引いて何するの。教え子による本人確認？ ……ネタはあるけど、人がこんなにいる状態では、ちよつとなあ……」

ミカゲはそつとヨリトモに視線を向けた。ヨリトモはぎくりと身を竦ませる。ミカゲが持つているヨリトモ関連のネタは、人に聞かせるには恥ずかしい話ばかりだ。

その1位に堂々ランクインするのは、「ヨリトモが学生だった頃、持ち物検査で、彼の鞆からどエライ本が出てきた」話である。ヨリトモの名誉のために主張させてもらうが、彼の鞆の中から出てきたブツは、彼の持ち物ではない。他人の本が紛れ込んだのだ。

何が紛れ込んだのか。答えは、ヒイナ秘蔵のどエロイ本である。口にするのも憚られるレベルの年齢指定鬼畜本で、表紙が出た時点で進路指導室行きだ。ミカゲの記憶力は、エロ本の表題と、人生が終わったような顔をしたヨリトモが涙ぐむ姿を鮮明に思い出す。

だめだ。それは絶対に言っちゃあいけない。提督と呼ばれる程の地位に上り詰めたヨリトモの名誉は、一瞬で瓦解するだろう。彼はコネ云々で出世したタイプではない。ミカゲたちと同じ、叩き上げの間だ。ヨリトモの努力を壊すような真似はしたくなかった。

含みを持った視線の応酬に気づいたのか、ユウマがヨリトモを見上



げる。

翡翠の瞳には、純粋な興味が浮かんでいた。悪意のない目は、時に悪意以上の凶器となる。

「提督。ミカゲさんの言う本人確認のネタとは、一体何を指しているんですか？」

「……………極秘事項だ。以後、決して追求しないように」

「え？　ですが——」

「極秘事項だ、ユウマ」

ぶわ、と、ヨリトモのこめかみから汗が噴き出した。言い訳に使う言葉が、無駄に重々しい。

別に軍の機密でも何でもないのだが、ヨリトモにとっては機密事項であることは確かだ。

部下のユウマは目を点にした後、「了解」と返事をして敬礼した。できた部下である。

だが。

『——ねえ。それって、ウチの学園でやった持ち物検査の件？　あたしがまだ学長やってた頃で、大体今から30数年前のヤツ』

冷却スプレーを顔面に喰らって七転八倒していたヒイナががばりと顔を上げた。ミカゲとヨリトモはびくりと肩をすくませる。

その反応を見たヒイナは、改めてヨリトモの顔をまじまじと確認する。幾何かの間を置いて、彼女はぱんと手を叩いた。

『ああそうか！　キミ、ヨリトモくんっていったけど、ウチの学園——暁学園の卒業生でしょ？　思い出したよ！　ミカゲが目をかけてた生徒だった!!』

『こんなにイイ体つきになっちゃったのねー』と言いながら、ヒイナ

は自然な動作でヨリトモの服に手をかけた。ミカゲは躊躇いなく冷却スプレーを構える。間髪入れず、奴はエスケイプスタンスで離脱した。才能の無駄遣いである。

またしても己の危機に気づけなかったヨリトモが愕然としていた。後ろの方ではユウマが表情をこわばらせている。どうやら、部下も上司の危機に気づくのが遅れたらしい。気のせいかな、ユウマの瞳には、何やら強い焦りの色が見えたような気がした。

ユウマは自分を落ち着けるように手を握り締めた後で、ヒイナに問いかける。

「ヒイナさんは、そのネタについてご存知なんですか？」

『知ってるよ。あたしもその件の関係者だし』

「何が入っていたんです？」

『あたし秘蔵のエ——』

ヒイナが言葉を紡ぐ前に、ミカゲはメガホンを具現化してスピーカーをいじった。この場一帯に耳障りな音が響き渡る。それはうまい具合にヒイナの発言を打ち消した。

尚も発言しようとするヒイナに対し、ミカゲはメガホンのスピーカーから不快な高周波を発生させる。数回ほど攻防戦を繰り広げた末に、ようやくヒイナは諦めたようだ。

その代わりにユウマが納得いかない顔をしたが、ヨリトモの鬼気迫る表情を見て押し黙ってくれた。ヨリトモは本当にいい部下を持ったようだ。

イノリたちは何もわからないようで、こてんと首を傾げている。流石にこんなこと、知られてはいけけない。教え子の名誉のためにもだ。

ミカゲはちらりと視線を向ける。ヨリトモも視線で頷き返した。彼が暁学園に入学する以前からの付き合いは伊達ではない。

『そういえば、一時期ミカゲが愚痴ってたことがあったわ。』ヨリトモ

の憧れの女性がユイなんだ』って』

『ええっ!?!』

『しかも、ユイが『ヨリトモくんの初恋の人』らしいわよー。ミカゲだったら、そんなことをネチネチ気にしててねー。男の嫉妬って見苦しいわー』

ヒイナは観念していなかった。今度は別件の爆弾を落とす。しかも、ユイの目の前でだ。

ミカゲとヨリトモは盛大に嘔き出す。ささやかな黒歴史を暴露されるとは思わなかった。

『……トウゴくん、そうなの?』

「あ、いや、その……」

『……ミカゲくん。嫉妬したって、何? どういうこと?』

「……えー、いや、あの……」

なんだこれ。

いや、本当になんだこれ。

非常に居たたまれなくなってきた。

「初恋……提督の、ですか?」

「おばあちゃんが、ヨリトモさんの憧れの女性……?」

悲劇は1つでは終わらないようだ。連鎖反応として、ユウマとイノリが目を瞬かせる。

空色も、翡翠色も、真ん丸になって自分たちを見つめていた。眼差しが痛い。

そうして、当たり前のように、ユウマとイノリが並んでいるのが――  
――なんだか納得いかないのだ。

「……ところでユウマくん」

「何でしょうか？」

「なんかさ、近くないか？」

「何がですか？」

「距離」

「何のですか？」

「イノリとの距離！」

ミカゲはびしりと指を刺す。指を刺されたユウマが、こてんと首傾ける。

何も知らない子どもみたいな顔をしているのが、余計に腹立たしさを助長した。

「恋人でも彼氏でもなんでもなくせに、その距離はおかしいと思います！ もうちよつと離れなさい！！」

ミカゲの指摘を受けたユウマは、目に見えて狼狽した。予想外の事態にパニックに陥った子どももみたいだ。親の言葉に従わなければいけないが、己の感情はそれを絶対に否定したいと考えているときのような、揺れる瞳。

「えっ……!!? そ、そうなんですか……!!?」

「何だその反応。お前何なの？ イノリの何なの？ 恋人でも彼氏でも友達ですらもないんだろ？ 赤の他人なんだろ？」

「あ……っ」

狼狽度合いが一層酷くなった。反論する術を失い、導すらも失くし、崖っぷちぎりぎりまで追い込まれてしまったかのように、ユウマは口元を戦慄させる。

赤の他人、と、彼は呟いた。その言葉はがらんどうに響く。翡翠の瞳は怯えるように彷徨っている。その反応が異常なことにミカゲが気づいたとき――

「おじいちゃん、ユウマさんを虐めないで」

『ミカゲくん、意見の押し付けはダメでしょ？ 距離感なんて、当人が納得すればそれでいいんだから』

「アッハイ」

絶対零度の眼差しを向けた嫁と孫が、容赦なくミカゲを射抜く。

堪らず、ミカゲは視線を逸らして押し黙った。

悲しいがな、渡来家の男は（婿入り・直系問わず）女性に勝てない宿命にあるのだ。

## 地雷原でタップダンスを踊った結果

「ここが、ノーデンス・エンタープライゼス……」

那雲シキがノーデンス・エンタープライゼスに到着したのは、帝竜襲撃の翌日。燦々と照り付ける太陽が眩しい昼下がりのことであった。

何度連絡しても、イノリたちが電話に出る様子はなかった。そのため、シキは当初の予定通り、ノーデンス本社に向かったのである。

周辺での聞き込みの結果、イノリたちはセブンスエンカウトで高スコアを叩きだし、ノーデンス本社へとスカウトされたという。他にも「帝竜が襲撃してきたとき、彼女たちらしき一般人が戦った」という話も耳にした。

その噂を肯定するかのようには、ノーデンス周辺にはISDFの人々がうろついている。

(ノーデンスにスカウトされたなら、そこに行けば何か情報が掴めるかもしれない。上手くいけば、安否確認できるかも……)

彼らの姿を横目に見ながら、シキはノーデンスの入り口をくぐった。1階エントランスは一般にも開放されており、小洒落たカフェテリアがある。一般人だけでなく、本社に務める人々の憩いの場になっているらしい。

早速受付へ向かおうと思ったとき、何やら騒がしい声が聞こえてきた。若芽色の髪の少女が、受付嬢と何やら問答を繰り返している。近付いてみると、聞き覚えのある名前が耳に入った。

「13班のみんなに——イノリ、リヒト、ソウセイたちに会わせてほしいんです」と頼み込む少女に対し、受付嬢は困ったように視線を彷徨わせる。居てもたっても居られなくなり、シキは受付へと飛び込んだ。

「ここに、イノリたちが居るんですね!？」

「えっ!? あ、貴女は一体……!？」

いきなり飛び出してきたシキに、受付嬢と少女が驚いたように目を瞬かせる。

「イノリたちの友人です! 暁学園の3年生で、那雲シキです!」

シキは手早く自己紹介をした後、本題に入る。『仲の良い友達と連絡が取れなくなった』、『ここにスカウトされたという情報が入った』、『ここに帝竜が襲撃したという話を聞いて、3人の安否が気になった』ことを懇切丁寧に説明すれば、受付嬢は事情を理解してくれたらしい。

しかし、帰ってきた答えは「3人は現在取り込み中で、会うことはできない」というものだった。仕事が終わる時間は分からないという。それなら、3人の仕事が終わるまで待てばいいだけだ。シキが持久戦の算段を立てていたときだった。

「那雲……わたしと同じ苗字……」

聞こえてきた声に振り返れば、「イノリたちに会いたい」と言っていた少女がシキを見上げていた。

互いが、互いの姿を、呆けたように見つめ合う。どうしてだか、目を離すことができなかった。なんだか懐かしい気配を感じるのは何故だろう。

シキが首を傾げたとき、少女はハツとしたように目を瞬かせた。彼女は「ジロジロ見てごめんなさい」と言い残し、そそくさこの場を離れようとする。

「待って!」

「え……?」

シキは少女を引き留める。思わず引き留めたのはいいが、言葉が何も出てこない。必死に話題を引っ張り出そうとするが、それらはすべて喉につかえてしまった。

少女は委縮したように引き腰になる。彼女を困らせるつもりはなかった。シキは素直に謝罪する。少女はおずおずと言ったように「だいたいしょうぶです」と答えた。

往来の激しい場所故、この場に留まり続けることはよろしくない。シキは少女を促して、近くのカフェテラスに腰かけた。

少女はこういう場所に来るのが初めてのようで、きよろきよるとスペースを見回している。

「急にゴメンね。私、那雲シキっていうの。貴女は？」

「わたし、那雲ミオっていいいます」

とりあえず、まずは自己紹介である。シキの名乗りを聞いた少女――那雲ミオは、ペこりと頭を下げた。礼儀正しい女の子である。

ミオの申告通り、彼女もシキと同じ那雲姓だ。那雲という苗字はとても珍しいもので、那雲姓の有名人は3人挙げられた。

1人目と2人目は、80年前の竜戦役で活躍したムラクモ13班に所属していた那雲ヨツミと那雲シラユキ夫婦。シキの祖父母である。前者がルシエクロンを現代に復活させた生命科学研究者で、後者は前者の手によって現代に復活したルシエクロンの1人だ。

3人目は、<sup>ナグモミキオ</sup>那雲三喜夫。現代における生命科学の権威で、嘗てISDFに勤めていた人間だ。ヨツミも、甥であり後継者であるナグモ博士に目をかけていたという。現在はISDFを辞め、町医者をやっているという話を耳にしている。

以前はシキたちとナグモ博士は交流を重ねていたが、祖父が亡くなって以後、交流はぱったりと途切れていた。祖父が通り魔事件に巻き込まれ亡くなった後から、シキの両親はナグモ博士に関する話を聞くと思々しそうな顔をするようになった。



「私の祖父母はムラクモ13班に所属していたの。両親は世界救済会の役員をしていて、世界中を飛び回ってる。親戚がいるらしいんだけど、祖父が亡くなって以来、付き合いがぱったり途切れちゃって。……ミオは？」

「わたし、物心つく前にお母さんが病気で亡くなっちゃったの。お父さんは家を出たまま戻って来なくて、おじいちゃんと一緒に暮らしてる。親戚の人がいるみたいなんだけど、ある時期から一方的に付き合いを断られたって言ってた」

互いのことを説明した後で、シキとミオは顔を見合わせた。暫し黙った後で、お互いに口を揃えて切り出す。

「私の祖父母の名前、那雲ヨツミと那雲シラクキなの」

「わたしのおじいちゃん、那雲<sup>ナグモ</sup>三喜<sup>ミキ</sup>夫<sup>オ</sup>っていう名前なんだ」

沈黙が再び落ちてきた。自分たちの間にあるものが、綺麗に繋がってしまったためである。

\*\*\*

シキはメニューからカレーとダーズリンティーを注文した。ミオにも何かを注文するよう促すと、彼女はオレンジジュースだけを注文する。

程なくして頼んだメニューがやって来る。「お昼は既に食べてきたのだ」と語ったミオは、オレンジジュースを舐めるように飲み進めた。そんな彼女を見つめながら、シキはカレーを食べつつ紅茶を飲む。企業内のカフェテリアだが、悪くない味である。

「シキは、イノリやりヒトたちの友達なんだよね？」

「ええ。そういえば貴女、イノリたちのことを知ってるの？」

「うん。リヒトが——3人が、わたしを助けてくれたんだ」

ミオは柔らかに笑って、昨日の出来事を話し始めた。

訳有って有明へと訪れたミオは、セブンスエンカウントのプレミアムチケットを持っていたことが原因で、悪質なナンパにあつたという。そこへ颯爽と現れたのが、東雲リヒトであつた。彼は自分の持っていたチケットを相手に譲り渡すことで、穏便且つ迅速に事態を打破したそうだ。

しかし、自分のチケットを相手に譲り渡すということは、セブンスエンカウント内に入ることができないことを意味していた。次に困つたのは、施設内で友人と待ち合わせているリヒトである。恩を返すが如く名乗りを上げたのはミオだつた。彼女は自分が所持していたプレミアチケットで、リヒトを助けたのである。

「それだけじゃない。ここにドラゴンが来襲したときも、3人は私を助けてくれた。他のみんなを守ろうとしてた。……帝竜なんて相手したら、死んじゃうかもしれないのに」

「ふふっ。実にみんならしいわ」

「え?」

「理不尽に対して、黙ってそれを受け入れることができない性質なんだ。私も、イノリたちも」

シキはくすくす微笑んだ。そのまま、残つた紅茶を飲み干す。カレーは既に空になつていたが、まだ食べ足りない。

喫茶店は軽食系のメニューが中心だから、仕方がないのだろう。シキは再びメニューと睨めっこし、追加を頼む。

「すみませーん。パンケーキプレートと、フルーツサンドイッチと、日替わりケーキと、ダージリンティー追加お願いします」

「ええええ!? そ、そんなに食べるの!?!」

「当たり前。イノリたちが戻ってくるのが何時になるか分からないん

だから、今のうちにしっかりと食べて、持久戦に備えないと」  
「……………」

呆氣にとられるミオを尻目に、シキは店員に注文を追加する。店員は営業スマイルを張りつけたまま会釈した。程なくして、テーブルの上はシキの追加した料理で埋め尽くされた。

フルーツサンドイッチを咀嚼しつつ、シキは現在時刻を確認した。13時30分を過ぎたばかりである。これから何時間待つことになるのか——シキは気合を入れるように、二口目をかぶりついた。



話し合いの会場は、医務室から会議室へと移動した。全員椅子に腰かける。

イノリの隣にはユウマが座った。互いに軽く会釈をする。それを目にしたミカゲが剣呑な表情を浮かべ、ヨリトモが何とも言い難そうに眉間に皺を寄せた。

しかし、祖父の不満そうな眼差しは、祖母の静かな眼差しによって遮られた。ユイに咎められ、ミカゲが視線を逸らす。死後の力関係も変わらないらしい。

「ふふっ」

「ユウマさん？」

突然笑い出したユウマに、イノリは思わず問いかける。

「ああ、すみません。……80年前の英雄が現れたとき、内心、『どんな豪傑なんだろう』と身構えていたんです」

「予想外でしたか？」

「ええ、とても」

ユウマは楽しそうに笑った。年齢に見合わぬ、無邪気な笑顔。それにつられるようにして、イノリも口元を緩ませる。

自分たちの間に和やかな空気が漂いかけたとき、ユウマは何かに気づいたように、ハッと目を見開いた。

何かを躊躇うように視線を彷徨わせ、ユウマは俯く。先程までの柔らかな笑顔はなりを潜め、暗い影が滲んでいた。

「ユウマさん？」と彼に呼びかけると、ユウマは不安そうにイノリを見つめる。

どことなく困ったような、申し訳なさそうな眼差しが揺れていた。

「あの……俺、近いですか？」

「へ？」

「馴れ馴れしい、ですよ。……迷惑、でしたよね。すみません」

そう言って苦笑したユウマだが、今にも泣き出しそうに見えたのは気のせいではない。彼は、医務室で祖父につけられたいちやもんを、真正面から受け止めていたようだ。

「……キミと俺は、ノーデンスの前で顔を合わせただけの、赤の他人なのに……」

「そんなことないです！」

イノリは思わず手を握り締めて声を荒げた。いきなりのに、ユウマは目を丸くする。

ユウマはイノリの恩人である。その恩人を悪く言うのは、誰であろうと許すことはできない。

「ユウマさんは、私を助けてくれたじゃないですか」

そう言って、イノリはユウマの手を取る。イノリの手よりも二回り程大きく、温かな掌。——この手がイノリを救ってくれた。

彼の手を両手で包み込むように握り締めれば、ユウマが惚けたようにイノリを見つめる。イノリはふわりと笑い返した。

「言うならば、私の恩人です。……だから、『赤の他人』だなんて、悲しいことを言わないでください」

「イノリ……」

「これからも、こんな風にお話ししましょう。……ユウマさんは、私と話すの、嫌ですか？」

「いいえ！……良かった。キミのおじいさんに怒られてしまったから、心配だったんです」

イノリの言葉を聞いたユウマが、安心したように微笑んだ。元氣になつてくれたようで何よりである。イノリもそれにつられて微笑み返す。

次の瞬間、椅子が倒れる音が響いた。見れば、己の得物を構えて飛び出そうとする祖父と、彼を必死に羽交い絞めにするヨリトモの姿が視界の端に映る。

脳裏によぎったのは、イノリと仲の良い異性の姿を見かけると、保護者の元へ乗り込もうとしたミカゲの背中だった。これ以上面倒事を起こされるのは困る。

イノリは無言のままミカゲを見つめる。口で何かを語るより、眼差いで訴えた方が効果的だ。イノリの非難轟々が届いたようで、ミカゲは得物を鞘に納めて椅子に座り直した。

「イノリに……イノリに野郎が……彼氏が……彼氏が……嫁入り……あああああああ……!!」

彼はそのまま顔を抑えて机の上に突つ伏す。肩が戦慄していた。

ユイは深々とため息をつき、ヨリトモは複雑な表情を浮かべて視線を逸らす。

祖父が再び立ち直るまで、もう少し時間がかかりそうだった。

\*\*\*

幼い頃、祖父が嘗ての仲間たちと一緒に、どこかへ旅行しに行くことがあった。期間は特に定められておらず、突発的に出かけることもあった。

イノリもミカゲたちについて行くと言ったのだが、ミカゲは渋い顔をして首を振った。「おじいちゃんは私のことが嫌いなのか」と泣いて駄々をこねたこともある。

ミカゲの返事が変わったのは、丁度、亡くなる1ヶ月ほど前のことだったように思う。普段はにべもなく断る祖父が、静かに目を細めて、こう答えたのだ。

『お前が強くなったら、一緒に連れて行くよ。そして、あいつに自慢してやるんだ。俺の希望”なんだって。——そのときは、リヒト、ソウセイ、シキも一緒に誘っておけ』

結局、ミカゲの死によって、その一件は完全に有耶無耶になってしまったが。

既に亡くなっていた英雄たちが——何がどうなつてか知らないが——このU・E・77年に再び現れた。あり得るはずのない事態、あり得るはずのない邂逅。誰もが息を飲み、己の目を疑う光景が広がっている。

渡来ミカゲ、渡来ユイ、桐野ヒイナ、東雲マサハル、■リヨウスケ、那雲ヨツミ、那雲シラユキが、誰一人欠けることなくイノリたちの目の前にいた。ミカゲ以外存在が希薄だが、それでも確かに”ここに居る”。

「単刀直入に訊くけど、おじいちゃんは死んだはずだよね？」

「ああ」

「じゃあ、どうして今、”ここに居る”の？」

イノリの問いに、ミカゲは何とも言い難そうに眉間に皺を寄せた。何から説明すべきか思索するように、ミカゲは唸る。

ややあって、祖父は顔を上げた。紫水晶の瞳は、揺らぐことなくイノリたちを——後継者たちを映し出す。まるで磨かれた鏡のようだ。

「お前等、人類戦士タケハヤを知ってるか？」

「2020年の竜戦役に置いて、人竜ミヅチの力によって発生した東京タワーの決壊を破壊する役目を担った人物ですね。この戦いで、彼は生死不明になったと、ISDFで管理されている資料にありました」

ミカゲの問いに答えたのはユウマだ。当たり前のことを当たり前に諳んじた彼は、確認するようにミカゲに視線を向ける。ミカゲはくつりと笑った。

「公式見解としての知識は100点満点だよ。公式見解としては、な」  
「……む。何やら、当事者だけしか知らないことがありそうですね」  
「その通り。それが、俺たちが『ここに居る』ことに密接に繋がっているんだ」

挑発的に笑うミカゲの言葉から違和感を感じ取り、ユウマは眉間に皺を寄せた。

ミカゲは調子を崩さぬまま、輝かしい英雄譚の裏側に埋もれた真実を語り出す。

「人類戦士タケハヤは、2020年の戦いの後、時間の流れから切り離された異世界に封印されていた」

その言葉を皮切りに、ミカゲは訥々と真実を語る。愛する女を救うため、人竜に至った『正義の味方』が辿った顛末を。

2020年の戦いを終えた人類戦士タケハヤは、未来の礎になるために生かされ続けた。いつの日か、彼の体の中に刻まれた竜の情報集合体——ドラゴンクロニクルが必要になるその瞬間まで。

タケハヤは強靱な意志で竜細胞の暴走を抑えていたが、到底、それだけでは抑え込めない。いずれは竜の力とタケハヤの意志が逆転し、破壊衝動のまま殺戮を繰り返すだけのバケモノになってしまう。

それを鎮めるには、“狩る者”の力が必要だった。タケハヤと強くひき合う、規格外の魂を持つ者の力が。——そこで白羽の矢が立ったのは、人類戦士タケハヤが認めた“本物の正義の味方”、ムラクモ13班だったのだ。

「……もしかして、じいさんたちがちよくちよく出かけてたのって……」

『ソウセイの思った通りだよ。アイテル——タケハヤの恋人から『タケハヤが暴走しそうだ』って招集がかかるから、止めるために異界へ行ってたんだ』

ソウセイの疑問に答えたのはリヨウスケだった。『いつ暴走してもおかしくない状態だったから』と呟いたリヨウスケは、どこか遠い所へ視線を向けている。

疲れ切った横顔からして、ドラゴンクロニクルを宿した人類戦士との戦いは苛烈、且つ、過酷なものだったのだろう。嘗ての戦友を殺し続ける——想像するだけで胸が苦しくなる。

「あんの正義の味方め。『真正面からガチ殴り以外は嫌だ』ってワガママばかり言うんだよ。そんなドM縛りプレイなんてやってらんないって。シャツフルV連打で楽をしたいと考える俺たちばかり非難されるんだよ。何なの、何様のつもりなのアイツ。俺たちが何回、真正面から全体確率麻痺ブレス喰らったり、千切り潰し刻み斬られたと思っただよ。『さっさと止めないか』って言いながらエグゾースト発動させてSKYぶっぱなしてきやがったり、D細胞活性化させて



ががん回復してきやがって。お前死にたいんじゃないの？  
殺してほしいんじゃないの？ 介護士を致死寸前まで追いつめ  
という偉そうに文句言うんじゃないよ。こちとら命がけなんだよ。  
一歩間違えればこっちがぼつくり逝っちゃうんだよ。人間様の柔ら  
かさや脆さを舐めるんじゃないよ。5000年間にもわたる老老介  
護のストレスを舐めるな。……畜生、人類戦士なんて大っ嫌いだ  
……」

ミカゲは相当鬱憤が溜まっていたらしい。紫水晶からは光が失せ、  
その眼差しは天を仰ぐ。徹夜明けのサラリーマンみたいだ。

人類戦士という単語を聞いたユウマがびくりと肩を揺らした。な  
んだか居心地悪そうに視線を彷徨わせた後、「別に、貴方に好かれなく  
ても……」と呟く。

ユウマの視線がイノリとかち合う。次の瞬間、ユウマははたと目を見開いた。自分が思ったことに対し、自分自身が一番驚いていると言わんばかりに目を瞬かせていた。

そんな部下を、ヨリトモは優しい眼差しで見守っている。ユウマの変化に希望を見出したのか、彼は目を細めていた。

「……オイ。これ、相当アレじゃねえか？」

「どこのブラック企業戦士なのよ……」

『介護業界は過酷なのだよ、トマリくん。特に、我々の場合は老老介護だったからね』

「そんな命懸けの老老介護なんて前代未聞ですよ、ヨツミ博士」

ナガミミとジュリエッタはドン引きしている。ヨツミも乾いた笑みを浮かべて頷く。ミカゲの言葉は嘘偽りないのだと言わんばかりに、だ。

ジュリエッタは本題に入る前、ヨツミに「今はジュリエッタと名乗っている。そちらで呼んでくれ」と頼み込んでいたのだが、結局は諦めたらしい。

“トマリくん”と連呼されても抵抗——自分の名前を訂正する——しなくなり、普通に応対するあたり、妥協することにした様子だった。

ミカゲの発言を聞いたリヒトが眉をひそめる。

5000年、という単語に引つかかったのだろう。

「待ってください！ 人間が5000年生きることは不可能ですよ？ 実際、みなさんは一度死んでいます。……まさか、魂だけが残っていたと言うんですか!？」

『その通りだ。俺たちは、死んだあとは魂だけになって、タケハヤを鎮める役についてたんだよ。……5000年間、ずっと、な』

リヒトの言葉を肯定したのはマサハルである。彼は眼鏡のブリッジを押し上げながら言葉を続けた。

『俺たちの戦友には、何と言ったらいいのか——物々しく言うなら地球外生命体がいる。彼女たちが協力してくれたおかげで、俺たちは魂になっても存在できたんだ。竜の襲来を予期して地球に降り立ち、竜を倒すための力を授けてくれていた姉妹なんだが……』

「精神種族、ヒュプノスだね。憎しみを司る巫女エメルと、愛を司る巫女アイテル」

『そう、それ！……って、アンタ、よく知ってるな』

「わーい！ 嘗ての英雄に褒められちゃったー☆」

マサハルの説明に補足を入れたのはアリーである。マサハルから賛辞の眼差しを向けられ、彼女はご満悦なのだろう。

椅子に座っていなかったら、この場で飛び跳ねてしまいそうだった。子どもみたいな人である。マサハルは話を続けた。

『彼女たちは、外見は人間とほぼ同じだ。ただし、精神種族ということ、通常の人間にはできないこと——例えば、テレポートによる転移

や多少の時間跳躍ができるし、外見年齢も変化しない。……まあ、相当無茶をした場合は別だが』

『ああ、エメルの合法ロリの件？ 数万年はロリのままだつてヤツ？』  
『お前は どうしてそういう話題に食いつくんだよ』

涎を垂らして食いついてきたヒイナの様子に辟易したのか、マサハルはしかめっ面をした。合法ロリが何たるかを語り出しそうな妹の頭に、兄は軽く手刀を入れて黙らせる。

ヒュプノスの巫女姉妹——エメルとアイテルもまた、竜戦役の功業者だ。前者は各国の対竜研究の指揮を取り、後者は日本の狩る者たちに使命を語って聞かせ、導いたという。

狩る者に竜を倒すための力を授けた彼女たちであったが、2021年の竜戦役でエメルが死亡——実体を保つていられなくなつたらしい——してから、姉妹は姿を見せていない。

その話を聞いて反応した人物がいた。シルクハットを被つたウサギのマスコット、ナガミミである。

ナガミミは唐突に立ち上がり、飛び跳ねるようにしてマサハルの前に躍り出た。どうやら、何かモノ申したいらしい。

「精神種族つてモンは、良くも悪くも不安定だ。無茶をやらかせばその反動で外見が変わったり、実体を保つことが困難になったり、下手すりゃあそのまま消滅なんてことも有り得る」

ナガミミは、精神種族についてすらすらと意見を述べる。その口ぶりは、見知った誰かのことを説明しているかのようにはつきりとしていた。——いや、ほぼ断言していると言っている。

「まあ、ムチャのカタチにも色々あってな。魂の質に合わず長く存在しようとしたり、人に見えない状態——所謂霊体だな。そこから無理矢理実体化しようとしたりするつてもある。どこにどんな反応が出るかは人それぞれだ。記憶の一部が吹き飛んだり、外見年齢が幼く

なったり、痴呆の婆さんよろしく徘徊し回ったり……挙げるとキリがない」

「詳しい説明ありがとう。ナガミミ、よく知ってるね」

「……フン」

イノリの賛辞の言葉に対し、ナガミミはそっぽを向いて鼻を鳴らした。

何を思ったのか、マスコットはくるりと向きを変える。視線の先には、渡来ミカゲ。

「……ところで、80年前の英雄さんよ。オマエら、〃5000年間ずっと生き続けた〃って言ったな？」

「ああ」

「ニンゲンごときが5000年なんて時間を生きるってのは、かなりの無茶をやらかした証拠だ。オマエら、この時点で既に〃記憶が定かじゃなくなる〃症状が出たハズだぞ。ド忘れ程度だから、症状としての自覚は薄かっただろうがなア」

ナガミミの言葉に、ミカゲたちはハッと目を見開いた。自分の類推が正解したことを察し、ナガミミは「フヒヒヒヒ……」と不気味に笑う。

「おまけにその様子からして、魂のまま時間跳躍した挙句、無理に実体化しようとしたんじゃないかねえか？ あるいは、第3者によって無理矢理実体化を促されたか。……まあ、どちらにしても、魂の質に分相応なことをやらかしたんだ。その代償はしっかり持っていかれたハズだぜ？ 一時的か、恒久的かは、オレ様の知ったこつちやあねえがな」

ナガミミはそう言うなり、自分が元いた場所へと戻った。机を蹴って跳躍する様子は、どこからどう見てもウサギにしか見えない。しかし、マスコットが言い放った言葉は重要なことだった。

ミカゲ以外のムラクモ13班たちの存在が希薄なのは、そこに原因があるのだろう。無理な時間跳躍と実体化、長い時間存在し続けたこと——それらが密接に関わった結果、ミカゲたちがここに降り立った際に影響が出たのだ。

“自分たちの存在が霊体と実体の狭間にある”こと以外に覚えがあるようで、嘗ての英雄たちは困惑した様子で顔を見合わせる。

『そういえば……トリスアギオンと戦ってたとき、あたしたちの攻撃は、思った以上にダメージが通らなかつた……』

『マナを異常に消費するようになったのも、敵の攻撃から思った以上にダメージを受けたのも、それが影響しているのかな……？』

『私が死んだとき、私は真正面から犯人の顔を見ていたんだ。その人物が近い間柄の人間だったことは覚えているんだが、顔と名前が出てこなくて……』

「俺も、死ぬ直前、ISDFの対竜兵器について調べてたんだが、殆ど思い出せないんだよなあ。責任者の顔も名前も出てこない。絶対忘れないって自信があつたのに」

シラユキが、ユイが、ヨツミが、ミカゲが、眉間に皺を刻みながら顎に手を当てた。やはり、誰もが何かしら“代償”を持っていかれたらしい。

ヨツミの言葉を聞いたジュリエッタは沈痛な面持ちで目を伏せ、ミカゲの言葉を聞いたヨリトモは何かを察したのか、師と部下を見比べて息を飲んだ。

ミカゲはがしがしと頭を掻く。代償として持っていかれた“記憶”の中に、一番重要なものがあつたと言わんばかりの形相だ。

「あーもう！ よりにもよって、“影の世界”で出会った真竜のことが思い出せないなんて……！」

「真竜!? アナタたち、どこでその真竜と会つたの!？」

「5000年後の地球。但し、本人曰く『本体ではない』上に、取り巻

きを2体も付き従えてたがな。しかも、ご丁寧に襲来予告まで残してたよ」

ミカゲの言葉にジュリエッタが食いつく。ミカゲは深々とため息をついた。

「いつ!? いつ来るって言ったの!?!」

「何も。本体で来るのを心待ちにしてろって」

「なにそれ!? そいつふざけてんじゃないの!?!」

『まあ、ドSでどMだったし……』

ミカゲとジュリエッタが頭を抱えて憤る。ヒイナは覚えている範囲で記憶を引っ張り出し、『超弩級のヤンデレ……』とだけ呟いて遠い目をした。

気のせいか、アリーの表情が一瞬こわばったように見える。お茶くみに来たチカとリツカがハラハラした様子で上司の顔色を伺っていた。

次の瞬間、アリーがゆっくりと薄目を開けた。ぞくり、と、イノリは身を震わせる。何かの片鱗を取り出したように思えたのは何故だろうか。

「『これまでの話』は、これで済んだよね? ——それじゃあ、ここからは『これからの話』をしようか」

その疑問を口に出すよりも先に、アリーは有無を言わず話を進めたのだった。

\*\*\*

真竜検体の引き渡し、ポータルの利用、技術の独占云々。

「——ぎやあぎやあやかましいんだよ。こんなときに内ゲバなんて、お前等どんだけ暇なの？」

ノーデンス側とISDF側の言い争いに一石を投じたのは、嘗てのムラクモ13班——渡来ミカゲだった。

……しかし、よく見ると、紫水晶の双瞼には一切の光がない。遠い昔の方向へ視線を向けている。

「人類の危機だったのに、暢気なもんだなあ。国もクソもない状態だったのに、自分の利権しか見えてないんですか？ その利権を得るために、前線で必死こいて戦う連中を背後から狙い撃ちですか？ 寄ってたかってムラクモ13班リンチですか？ ——やることが一々回りくどい上に面倒くさいんだよコノヤロー」

ぎやあぎやあやかましいというのは事実だ。民間と国家権力の醜い利権および主導権争いで、世界を救うためのプロジェクトが頓挫しそうになっているというのも事実だ。人類同士の内ゲバと言ってしまえばその通りである。

しかし、ミカゲの頭の中は違う時間軸にトリップしている。当時は決して口に出せなかつた感情が、時空を超えて発露していた。彼が口にしたのは、2021年に行われたムラクモ13班への証人尋問のこどだろう。

帝竜オケアノスによる強酸の雨が降り注ぐ中行われた証人尋問。ムラクモ13班が指名され、代表者として矢面に立ったのはミカゲだった。彼は様々な質問をぶつけてくる議員に対し、滾々と反論し論破していった。

13班に回された食料が多すぎると指摘してきた議員には、「前線で戦う人々が1日どれ程のカロリーを消費するか」や「食べる量を減らした際に起きる身体能力の低下と因果関係」等を示し、ついでに、「その議員が資材や素材を不正に着服していた」という揺るがぬ証拠を指し示して、逆に尋問する側へと転じた。

ドラゴンと対話して和平に持ち込めないのかと主張した議員には、  
“2020年に現れたニアラの発言”や“フォーマルハウトの行動  
／言動パターン”から“ドラゴンは人間を家畜とみなしており、対話  
は不可能”と結論付けた。ついでに、“その議員の伴侶が浮気してい  
る”証拠を指し示し、そちらを対話で解決するよう促した。

相手を論破しつつ、痛いところを突き崩すことで議員からの攻撃を  
躲してきたミカゲにも、アキレス腱は存在していた。異母姉ナツメと  
の癒着疑惑を追及してきた議員から、「お前はあの女の暴挙を知って  
いて、わざと黙認したのだろう。だから被害が拡大したんだ」と責め  
られたのだ。苦肉の策としてミカゲは沈黙したが、議員は群がるよう  
に糾弾したという。

『俺があの人を止められなかったから、沢山の人が死んだんだ。――  
そうして、あの人自身も』

罪悪感を滲ませた背中を、イノリはよく覚えている。黄昏の空を眺  
めるその背中が、酷く痛々しかったことも。

仲の良い良識派の議員が答弁を中断させたことで事なきを得たが、  
それ以来、政治権力者に対して強い苦手意識を持つに至ったらしい。

『あつ、大変。ミカゲがフラバ発症した』

『人類同士で内ゲバなんかするから……』

あーあ、言わんこつちやない――ヒイナとマサハル東雲兄妹はそう言いたげな表情を  
浮かべて肩をすくめる。

ミカゲは虚ろな笑みを浮かべながら、当時の心境をつらつらと語り  
出す。余程鬱憤をため込んでいたのだろう。滾々と語り続ける様子  
からして、暫く止まりそうにない。

言い争いをしていたノーデンスの重役たちとISDFの面々がミ  
カゲに視線を向けた。視線の集中砲火を喰らっても尚、ミカゲは語る  
のを止めない。むしろヒートアップした。



「ねえちよつと！ 坊主の読経みたいになっちゃったんだけど!? アレ大丈夫なの!？」

『ダメだな。暫くあのままにしておくしかない』

「ヨツミ博士が、諦めの悪いヨツミ博士が匙を投げた……!!」

乾いた笑みを浮かべたヨツミの姿を見て、ジユリエツタが戦慄した。

彼の記憶の中にいるヨツミは、明朗快活で諦めの悪い熱血紳士だったのだろう。

ヨツミが匙を投げるなんて光景、予想していなかったに違いない。

「提督。……あの人、何とかありませんか？」

「……………」

「提督……………」

「……………すまん。俺には無理だ」

ユウマから話題を振られたヨリトモに至っては、黙って首を振るレベルだ。上司が匙を投げたとなれば——ユウマは、助けを求めるようにしてイノリの方を向いた。

「……………イノリ……………」

「……………とりあえず、『提示された条件を上司に提案してみます』って言って話し合いを終わらせれば、何とかなると思いますよ?」

『ごめんね、トウゴくん。ユウマくんも。ミカゲくんのは、私が責任持って何とかするから』

「……………お願いします、奥様」

イノリとユイはため息をつく。

何とかする方法を提示され、何とかしておくと言われたことに安心したのだろう。ヨリトモはユイの方を向き、深々と頭を下げた。

それは、ヨリトモの部下であるユウマも同じ気持ちだったらしい。彼もまた、イノリの方を向いて頭を下げる。

結局、話し合いの行方は、『ノーデンス側の要求を持ち帰ったISD F極東本部特殊戦術部隊が、上官と相談する』という結論を迎えたのであった。

## 悪意の花、闇の底にて

ミカゲが現実に帰還したとき、話し合いは既に終わっていた。ノーデンスとISDFの話し合いは、『ノーデンス側の要求すべてを持ち帰り、司令部との話し合いで検討し、後日その結果を報告する』という方向性で決着がついたらしい。

「ISDF極東支部の総司令——アクツは、計算高い野心家よ。……それだけじゃない。自分の邪魔になりそうな存在は、どんな手を使っても排除する卑劣な男……!!」

『トマリくん……?』

ジュリエッタは忌々し気に吐き出す。握り締められた拳は小刻みに震えていた。目をかけていた後継者の様子に、ヨツミは思わず彼の名前を呼ぶ。

ヨツミの心配そうな眼差しに気づいたのか、ジュリエッタは慌てた様子で「なんでもない」と取り繕った。彼はこれ以上追及されたくないようだ。

(アクツ……?)

ジュリエッタが名指しした男の名前に、何となく覚えがあるような気がする。途端に、苛立ちと不快感が湧き上がった。

頭の奥で鈍い痛みが走る。ノイズ交じりの記憶が頭の中に浮かんだ。不敵に笑った男と、彼が指し示した対竜兵器の計画書。しかし、それ以上何も思い出せない。

“ミカゲが実体化した際、無茶をやらかした代償を支払った”ことはナガミミの話から聞いていた。代償として記憶を持っていかれたことも自覚している。

代償として持っていたかかれた記憶の中に、ISDF極東支部総司令——アクツに関連する記憶も含まれていたのだろう。その内容がどん

なものだったのかは分からないが。

「奴らが等価交換に応じるとは思わない。もし、連中がフォーマルハウトの検体を差し出すとしたら……」

「そだね。十中八九、ポータルシステムの共有も要求してくるだろうね」

「そういうこと。最悪の場合、好き勝手使われるだけじゃ済まないわ。私たちが使う場合にも、監視がつくかもしれない」

物々しい面持ちのジュリエッタとは対照的に、アリーは飄々とした笑顔を崩さない。まるで、Code:VFD成就のためなら取るに足らない犠牲だと言わんばかりだ。

ジュリエッタの場合は、ポータルシステムがISDFによって徴収、あるいは悪用される。可能性を危惧しているように見える。2人の意識の差に、ミカゲは目を瞬かせた。

「でも、ユウマさんとヨリトモさんと一緒に戦えるというのは、心強いと思う。特にユウマさんは、一撃で帝竜を倒したし」

話題に入ってきたのはイノリだった。ユウマのことを語る彼女は、どこことなく熱っぽいように思う。空色の瞳がきらきらと輝いて見えたのは気のせいではない。

いや、それよりも。ミカゲは思わず目を剥いた。

脳裏に浮かんだのは、穏やかに笑う優男——如月ユウマだ。

(帝竜を一撃で倒す? ……あの優男が?)

帝竜相手にヒイコラ言ってたミカゲにとって、その話にはわかに信じがたい。しかし、目を輝かせてユウマのことを語るイノリの言葉には嘘はなかった。

ミカゲが亡くなる以前、ISDFでは対竜兵器に関する研究が盛ん

に行われていた。以後も続けられていたとしたら、そんな兵器が出来上がっていてもおかしくない。

ISDFを歓迎するような発言に対し、アリーとジュリエッタは乗り気ではないようだ。特にジュリエッタは、ISDFに監視されることに対して嫌悪感を抱いている。

ミカゲは3人の会話に割って入った。

「イノリ。ユウマはどんな手を使って、帝竜を倒したんだ？」

「えっ？ ……ええと、右手に力を貯めたあと、普通に殴ってたよ。ただ、そのとき、変なマナが漂ってた」

「どんなマナだ？」

「うーん……神々しいんだけど、毒々しいって感じかなあ。ゾツとするような……」

イノリは目を瞬かせ、何があったかを答える。

しかし、イノリはもどかしそうに唸った。

「言葉で説明するより、実際に見た方が早いと思うよ」

「しかし、映像関連は全部ISDFに持ってかれちゃったからな。何も残っちゃいねエ。……ま、ISDFと共同作戦ってコトになりやあ、嫌でも見れるだろうさ。フヒヒヒ……」

イノリの言葉に対し、ナガミミは注釈を入れてきた。その現場を見るまでのお楽しみということらしい。自分が亡くなってから8年の間に、ISDFは何やらききな臭い気配を漂わせる組織に変質してしまっただろう。

帝竜を一撃で倒す人間——その言葉に、得体の知れぬ寒さを覚えたのは何故だろう。ミカゲの頭の中で、激しく警笛が鳴り響く。

自分と同じ警笛を聞き取ったのはヨツミだった。彼は剣呑な表情を浮かべ、顎に手を当てる。その瞳には焦りの色が滲んでいた。

そんな自分たちの様子を尻目に、ナガミミはくるりとイノリたちへ

向き直る。ウサギのマスコットは13班への連絡事項をてきぱきと伝えた。ドラゴン資材を投じて行われた改修が完了し、13班専用のレストフロアが完成したという。

「確か、報告では、あそこのテラスからの展望は絶景らしいわね」

「好きな子を誘ってみるのもいいかもよー？　アリーも、あのヒト”を誘ってみようかなあ」

「えっ!?　アリー、アンタいつの間になんな人ができたの!?　……まさか、ずっと前に言ってた”ヤツ”!?!」

「んふふー☆　ノーコメントで」

「ちよ、気になるじゃないの!!　アンタを手ひどく振った”ヤツ”に、リベンジマツチでもするつもり!?!」

テラス1つでコントを始めた上司2人に、ナガミミはやれやれと言いたげに肩をすくめた。

振った相手が云々と叫び散らすジュリエッタと、ノーコメントを貫くアリーを尻目に話を纏める。

今日はもう休むようにと言いかけ、何かを思い出したようにポンと手を叩いた。

「そーいや、13班に客が来てたぞ」

「客?」

「ああ。2人程な。1人は件のコムスメ、もう1人はコムスメと同じ姓のルシエの女だ。3時間前から、エントランスにあるカフェテラスの一角を占領してるらしいぜ?　確か、那雲シキとか言ってたな」

那雲シキ——孫の名前を聞いた瞬間、ヨツミがいきなり駆け出した。一步遅れてシラユキも走るが、俊敏性Sランクのヨツミに追いつけるはずもない。遠く離れた夫の背中を、妻が追いかける形になった。

その後ろに、誰かの名前を口走ったりヒトが続く。聞き間違いでな

ければ「ミオ」と聞こえた。その名前にも、ミカゲは聞き覚えがある。確か、ヨリトモの——そこまで考えて、ミカゲははたと気づく。

自分以外のムラクモ13班員は、実体化が不完全である。半透明の見た目だ。それを目の当たりにした人間は、どんな反応を示すだろう。

『……これ、何も知らない人が見たら、『幽霊だ』って騒ぐんじゃない？』

ジュリエッタを脱がそうとしてヨツミに迎撃され、沈黙していたヒイナが口を開いた。彼女の言葉を聞いた那雲夫婦以外のムラクモ13班員が『あ』と声を上げる。

他の面々も那雲夫婦やリヒトを追って外に出た。ムラクモ13班員は周囲に配慮して姿を消し、ミカゲやイノリたちの後続く。

——はたして、そこには、予想通りの光景が広がっていた。阿鼻叫喚の人々と、孫と甥の孫に抱き付いてスキンシップを取る那雲夫婦の姿である。

祖母・シラユキから『大きくなったね』と褒められて泣きながら喜ぶ孫・シキと、英雄にして祖父の叔父・ヨツミに構い倒されるミオ。後者は嬉しさよりも困惑の方が勝っている様子だった。さりげなくリヒトが割って入るが、ヨツミのマシングントークに押し出され気味だ。

ひとしきり再会を喜んだシキとシラユキは、周囲の様子を見てハツとする。

「幽霊だ！ ムラクモ13班の幽霊がいるぞ!!」

「あ、あわわわわわわわわわ」

「心霊現象キタコレ！」

「俺は幽霊なんて信じないぞ！」

「最近は激務続きだったから、夢を見ているに違いないんだ!!」

カメラ片手に連射する人間もいれば、腰を抜かしている人間もいる。受付嬢は泡を吹いて倒れ、研究者は己の目を疑っていた。中には、目の前の光景を夢にしようとする者もいた。

ノーデンスのエントランスは完全にカオスだ。シラユキは申し訳なさそうに頭を下げ、姿を消す。これで、問題の1つが片付いた。あとはヨツミの方である。

「ヨツミン」

ミカゲはヨツミを呼んだ。

『ミオくんも大きくなつたなあ。その年頃だと、好きな子の1人や2人くらいはいるんじゃないか?』

「えっ!？」

『顔が赤いな。成程、キミも乙女ということか。……で、相手は? ミキオくんは把握してるのかね?』

「把握してたら、泡吹いて倒れちゃいそうな気がする」

『……あー……。それは、確かに否定できない事実だ。事実、ミハルくん——キミのお母さんのときも卒倒したし……』

ヨツミは聞く耳を持たない。ミオを構い倒している。

「ヨツミン」

ミカゲはもう1度ヨツミを呼んだ。

『ミキオくんのデートのときは大変だったなあ。』デートに着ていく私服の選び方が分からない』と泣きつかれたよ。私も研究畑一筋だったから、そういうのには疎くてね。結局シラユキ頼みになってしまった』

「へえ……! おじいちゃんにそんな一面があるなんて知らなかつ



た。おじいちゃん、おばあちゃんとの馴れ初めの話は聞かせてくれなかったもの」

『ちなみに、キミのお母さんからは、私とミキオくん共々戦力外通告を言い渡されてしまつてな……』

「あつ……」

『そう考えると、ミキオくんはキミの服を見繕えるようになったのか。感慨深いものがあるよ』

「違うよ。おじいちゃんに選んでもらうと碌なことにならないから、自分で選んでるんだ。おじいちゃん、未だに自分で自分の服を選べないんだよ」

『なんと……』

ヨツミは聞く耳を持たない。ミオを構い倒している。

「ヨツミン」

ミカゲはヨツミに声をかけ、肩を叩く。ここでようやく、ヨツミはミカゲに気がついた。

気持ちよく会話していたところに割つて入られたため、彼の機嫌が急降下する。

ムツとした様子で振り返つたヨツミに、ミカゲはエントランスの惨状を指し示した。幽霊騒ぎの阿鼻叫喚を目の当たりにしたヨツミは、ゆっくりとミカゲへ視線を戻す。

「積もる話があるのは分かるが、場所を変えよう。な？」

『……その旨を良しとしよう』

潔く帰ってきた返事に、ミカゲは安堵した。

\*\*\*

『成程。ミオくんが想いを寄せているのは、リヒトくんのようなだ』  
『ははっ。世の中、何がどう繋がるか分かったモンじゃないぜ』

まさか自分たちが親戚になるかもしれないなんて——と、ヨツミとマサハルの眼差しは語っている。彼らの視線の先には、リヒトの傷に薬を塗りたくるミオの姿があった。

イノリやソウセイにも治療を施していたミオだったが、リヒトに対しては特に気合を入れたらしい。真剣な表情と、リヒトに対する薬の消費量がすべてを物語っている。

ミオはペタペタ塗ったつもりだろうが、リヒトの手には白い軟膏がべったりと付着している。肌になじむのが遅いのか、手におしろいを塗ったような状態であった。

「うう、塗りすぎちゃったかも……。でも、これで綺麗に治るはずだよー」

「ありがとうございます。これは確かに効きそうですね」

べたべたになった手をすり合わせながら、リヒトはにっこりと微笑んだ。ようやく薬が肌になじんできたらしい。

白い肌は元の色を取り戻す。ミオの言葉通り、リヒトの手の傷は完全に消えていた。傷跡があつたなんて想像できない。

ミオとイノリたちは談笑を始める。「Code：VFDの計画に協力し、痛い思いをしても戦い続けるのか」というミオの問いに、イノリたちは迷うことなく頷いた。

誰かを守りたいと思ったから。協力することを選んだのは自分だから。

3人の答えを聞いたミオは、ハツとしたように目を見張った。

「……そうだよ。わたしも、わたしに出来ることを……わたしだけにしか出来ないことを、頑張らなきゃ」

ミオは決意を固めたように手を握り締める。次の瞬間、彼女は苦しそうに咳込んだ。

「ミオ、大丈夫ですか？」

「コホツ、コホツ……うん。だいじょうぶ」

リヒトは躊躇うことなくミオの背中を撫でる。ミオは暫し咳き込んだのち、落ち着いたのだろう。柔らかに笑い返した。

孫／親戚の様子を目の当たりにしたマサハル／ヨツミは、思わず顔を見合わせた。もう一度リヒトとミオへ視線を戻す。

『あれ、付き合っていないんだよな？』

『そうだな。どこからどう見ても熟年夫婦だな』

「この時点でくつついてないとするなら、くつついた後はどうなるんだろう」

『……………』

『……………』

2人の会話を耳にして、ミカゲはついぼろりと口走っていた。途端にマサハルとヨツミが顔を見合わせて黙り込む。顎に手を当てて、何かを考えている様子だった。

その脇で、ヒイナはメモ帳片手に何かを書き連ねている。『この純愛は汚せないわあ……』と言いながら、彼女は目を爛々と輝かせていた。閑話休題。

「そういえば、シキはどうするの？」

「勿論、Code：VFDに参加するわ。私だけ仲間外れなんて酷いじゃない」

ミオの問いに対し、シキは当然のように答えた。若葉色の瞳には、揺るがぬ闘志が燃えている。彼女の手には、1枚のチケットが握られ

ていた。

「『セブンスエンカウンドで高スコアを出すとスカウトされる』  
と言つて、シキは不敵に微笑んだ。彼女は実力で13班への加入を勝  
ち取るつもりだ。」

『拳で語るが淑女の嗜み』——彼女の格言を思い出し、ミカゲは思  
わず肩を震わせる。ヨツミの血縁者（直系）が語る格言は大体おかし  
い。

始まりはきつと、『毒ハメは紳士的』というヨツミの格言からだろ  
う。とんでもない系譜だ。

後継者たちは楽しそうに雑談に耽っていたが、外から差し込む夕日  
から時間経過を悟ったようだ。

今日はもう遅いということで、ミオは家に戻ることにしたらしい。

「わたし、もう少しだけ考えてみるよ。それじゃ、またね！」

「ええ。また」

ミオはそう言い残し、パタパタと去つて行つた。リヒトやイノリた  
ちは少女の背中を見送る。ミカゲもまた、ミオの背中を見送つた。

『コール、13班！』

『コール、13班！』

（……ミロク、ミイナ）

脳裏に浮かんだのは、ミカゲの大切な戦友／ムラクモ13班のナビ  
ゲーター——ミロクとミイナだ。那雲ミオは、あの双子の系譜を受け  
継ぐ『Nav. シリーズ最後の生き残り』である。

イノリ曰く、ミオはナビゲート能力Sランクらしい。マニュアルを  
丸暗記する記憶力、リトルドラッグの異質性を見抜く着眼点と知識はず  
ば抜けていたという。当然と言えば当然だ。

（こんな形で、お前等の系譜と対峙することになるとは思わなかった

よ)

もしも、あの少女がノーデンスに協力することを選んだら——。  
図らずとも、ミオはミロクやミイナと同じように、13班のナビ  
ゲーター”になるのだろう。

彼や彼女の系譜を継いだミオならば、最後までナビ役として、リヒ  
トやイノリを導き続けるに違いない。

あの双子は頑固だったからなあ——なんて、もう戻らない日々を想  
う。

「なあ、ユイ」

『なあに？ ミカゲくん』

「あの子、注射と苦い薬、どっちが嫌いかな」

傍から聞けば、意味の分からない質問だろう。でも、ユイはこの言  
葉に込められた意味を理解したらしい。大きく目を見開いた後、穏や  
かに笑いながら答える。

『分からないね。本人に会ったら、訊いてみたらいいんじゃない？』

「塗り薬は大丈夫だったのは分かるけどな」

『そりゃあ、苦くも痛くもないもん。あの子たちもそうだったでしょ  
う？』

「……だな。塗り薬だったらいいのにつて、薬出されるたびに不満そ  
うな顔してた」

最後まで、あの2人は13班のナビだった。延命手術を受けて力を  
失つても、ミカゲたちのサポートをしてくれた。文字通り、生涯現役  
を貫いたのだ。

目を閉じる。双子の明るい号令が耳を打った。遠い日の思い出を  
なぞるように、ミカゲはミロクとミイナの声を思い返す。何度も、何  
度も。

「あの子の得意料理、クッキーかな」

『分からないよ。本人に会ったら、訊けばいいと思うなあ』

「食べたら懐かしい味がするのかもしれない。美味しいだろうな」

『懐かしい味がするかどうかは、食べてみなきゃ分からないでしょう。でも、美味しそうなのは確かだね。今度、作ってもらえばいいんじゃない?』

「……機会、ありやあいいなあ」

『うん。……あるよ、きつと』

ミカゲはソファに身を沈めながら、ゆるりと目を細めた。ユイも微笑み、ミカゲの隣に寄り添う。

眼前では、後継者たちが食事当番をめぐって阿鼻叫喚図になっている。理由は、大量のゲテモノ食材を掲げたりヒトが立候補したためだ。

彼が抱える食材は、ミカゲたちと出逢った場所——アトランティスの首都・アトランティカで倒したマモノから手に入れたのだと言う。

本来なら「妻にアトランティスの光景を見せてあげたかった」と言うであろうリヨウスケは、ソウセイに加勢してリヒトを止めようとしていた。とても感傷に浸れる状態ではない。

マサハルも同じようにしてリヒトを止めようとしたが、取っ組み合いの最中に偶然スパイラルエキス（未調理）を飲み込んでしまい、ダウンしている。生食用ではなかったのだろう。

同じようにして戦線離脱したのはヒイナだった。口元を抑えて呻いている。流星のケダモノでも、ゲテモノはまずかったようだ。今度はヨツミが頭から花蜜を被り、悲鳴を上げた。

「第7真竜、VFD……」

この地球に迫る新たな脅威の名を呟きながら、ミカゲは目を閉じる。

なんてことはない、体のいい現実逃避であった。

\*\*\*

アリーとジュリエッタの言っていた通り、テラスの眺望は絶景であった。眼下にはビル群と海が広がっている。風に乗って潮騒の響きが聞こえてきそうだ。

空には星が瞬いている。静かな場所は、密やかな会話をするのに適していた。イノリたちが寝静まったのを確認し、旧ムラクモ13班はここに集ったのである。

「よつこらしよ」

ミカゲはキーボードとウィンドウを展開する。

いや、展開したのはミカゲだけではない。ヨツミ、マサハル、リョウスケも情報処理Sランクの能力を惜しげもなく発揮していた。

防壁をすり抜け、あるいは破壊して（勿論、何事もなかったかのようには復元もして）、様々なサーバーに侵入する。

S級ハッカー4人がかりのハッキングを阻むものは何もない。自分たちが欲する情報は、あつという間に集められていく。

『……以前よりも、組織の闇が深くなっているように思うな。私の死をきっかけに、対竜兵器に関する研究が飛躍的に進んだようだ』

『極東支部総司令にアクツつて奴が就任して以来、キナ臭さが一気に加速してるっぽい。……対竜研究を推し進める政治家みたいだけど、元は研究者だったらしいよ？』

「おまけに、民間団体が武力を有する際の規制がより一層厳しくなった。他にも色々やらかしてるようだが……トウゴくん、大丈夫かねえ」

ISDF関連の情報を集めていたヨツミの眉間に皺が寄った。

リヨウスケも難しそうな顔をして唸る。ミカゲもまた、上司に振り回されそうな弟子を憂いた。

ISDFが恐れているのは、力を付けた民間企業が自分たちを脅かす存在になることだ。民間による新勢力出現は、ISDFによる世界統治が崩れてしまうことに繋がりがかねない。嘗ての自衛隊とムラクモ機関、あるいは日本政府とムラクモ機関の関係性の再来である。

2020年の竜戦役では、政府と自衛隊という公権力よりも、ムラクモ機関という秘密結社の方がアドバンテージを持っていた。もしもムラクモ機関が政治関連に手を出したら、あつという間に秘密結社側が政治を握っていたであろう。竜を退治して人類を守っている張本人たちだからだ。

後に、ムラクモ機関は公権力——自衛隊と協力および戦友関係を築く。共に戦線を駆け抜けた仲間として、強い絆で結ばれた。どれ程かというところ、ムラクモが事を起こせば、自衛隊も一緒に決起する。レベルである。利権を得たい政府役人からすれば、これ程の脅威はない。

他にも、ムラクモ機関の味方となり得る団体や企業は多く存在していた。アメリカのSECTII、渋谷のSKY、世界救済会、親ムラクモ派閥の議員たち——挙げればキリがない。竜戦役後も、協力関係を築いた組織や個人、民間団体は数多くあった。勿論、ISDF発足とムラクモ吸収により、そのコネクションは丸々引き継がれている。

2020年の利権主義者たちが、ムラクモ（超えられない壁）公権力という力関係のせいで、幾度となく煮え湯を飲まされてきたことは周知の事実だ。故に、ISDFの利権主義者どもは同じ轍を踏まぬよう努めた。自分たちの足場を崩しかねない、新たな民間団体（きよ）の出現を恐れたのだ。

（ノーデンス・エンタープライゼスがその標的にされなかったのは、上層部がうまい具合に隠し通してきたからなんだろうな）

ミカゲの脳裏に浮かんだのは、社長のアリー、技術主任のジュリ



エツタ、主任のナガミミによるスリートップだ。特に、ISDFに対する隠蔽が得意そうなのはジュリエツタ——本名：渡真利十郎太である。

彼は嘗てISDFに所属していた。古巣の人間たちがどこに注目しているかを知っているだろうし、規制の抜け穴を把握していてもおかしくはない。むしろ、それを利用してISDFから隠れていたのだろう。

「で、ノーデンス側はどうだった？」

『こつちもこつちでキナ臭いぞ。アイオトの検体入手のために子会社3つも潰してる。いくらドラゴンクロニクルの解析に力を入れてるとはいえ、普通、ここまでするか？』

「その分はセブンスエンカウントで黒字を稼ぎつつ、狩る者を探して待ち続けるってか。この測定システム、ムラクモ機関の能力判別システムがベースとして使われてるな」

『企業体質も、限りなく黒に近いグレーゾーンだ。社員やアルバイト、パートタイマー……次々と人が入れ替わってやがる』

「無事なのは重役クラスだけか。まあ、労働条件がバカらしいことになってるのはどの役職も一緒みたいだが」

ミカゲとマサハルは深々とため息をついた。公権力も民間企業も、大なり小なり薄暗いところを抱えている。

嘗てのムラクモも、同じようにして後ろ暗いものを抱えていた。人竜の研究、都庁避難民行方不明事件、ルシエクローンの復活……挙げればキリがない。

それでもムラクモが支持されたのは、帝竜を着々と退治し、人類の裏切り者を打ち取り、真竜を退け／斃して、文字通り「世界を救った」ためだ。

この実績があつたからこそ、ムラクモ機関は——13班は、英雄として語り継がれたのだ。

……正直な話、13班は英雄というより、ただの「クセモノ」のもの

集まり”でしかなかったのだが。

「そういえば、結局、俺らの身柄ってどうなったの?」

『どっちが身柄を預かるかでモメにモメていたよ。特に、トマリくんが怒鳴り散らしてたな。』ISDFにヨツミ博士を渡すことは絶対にできない。その理由は、アンタたちが一番知っているはずだ!』って啖呵を切った。……自分の古巣を嫌っている様子だったよ』

『結局それもノーデンス側の条件ってことになったけど、司令部に報告するか否かの裁量は、先輩の教え子くんに一任されてたよ。教え子くん、『死人センバイがここに居るって聞いたら、都合が悪い人間に心当たりがある』って耳打ちしてきたから、バカ正直に報告はしないんじゃないかな?』

ヨツミとリョウスケはそのときのことを思い出したのだろう。どちらも何とも言い難そうに苦笑していた。

「はは、トウゴらしいや」

ミカゲは教え子のことを思い出しながら苦笑する。

これからの苦労を考えると、いつか貸しを返さねばなるまい。

頼友東吾ヨリトモトウゴは、不愛想で不器用ではあったが、情に篤い男だった。弱いものの痛みを真摯に受け止め、それに応えようとする男だった。部下を率いて指揮するには、非常に優しすぎた男である。

『——強くなりたい』

『もう、こんな思いをする命がなくていいように。俺自身も、こんな思いをしなくていいように』

『今度こそ、大切な存在ものを守るように、強くなりたい』

傷だらけの虐められっ子が、動かなくなった猫を抱きしめて泣いていた姿が脳裏をよぎる。ヨリトモのルーツは、おそらくこの出来事

だ。

失ったものの痛みを理解できる人間は、上に立つに相応しい。人の痛みに寄り添えるからこそ、その優しさに惹かれて、人が集まってくる。

自他ともに厳しく、けれど、部下たちのことを何よりも慮るヨリトモの在り方は、ミカゲが思った以上に慕われているようだ。

その結果が、提督という地位なのだろう。叩き上げでのし上がってこれたのも、彼と彼の部下の間に築かれた信頼関係が成せる業だ。

互いが互いの信頼に応えようとするからこそ、ヨリトモの部隊は華々しい活躍を挙げてきた。

結果、「極東にはマモノはいない。居るのはヨリトモというドラゴンだけだ」なんて言われるようになったのであろう。なんだか嬉しくなってきた、ミカゲは思わず頬を緩ませた。

『ミカゲくん。そろそろ戻って休んだ方が良さそうだよ』

「そうだな。部屋に戻るか」

時計を見たユイが声をかけてきた。ミカゲは頷き、ハツキングしていた3人に撤収の合図を駆ける。

リヨウスケ、ヨツミが頷いてウィンドウを消した。マサハルもそれに続こうとして――

『あれ？ この子――』

『どうしたヒイナ？ ……って、こいつは……』

ヒイナがマサハルのウィンドウを覗き込む。マサハルが首を傾げ――その目は大きく見開かれた。ミカゲもそれを覗き込む。

映し出されていたのは、パートタイム社員の名前だった。名前と写真を見て、ミカゲは生唾を飲んだ。その少年に、見覚えが合ったためだ。

書類を確認し、彼の“名前の意味”を理解する。ミカゲは思わずヒ

イナに視線を向けた。彼女はじつと情報を凝視していたが、やがて、静かに微笑む。

『……貴方たちは、ここで頑張ってるのね』

普段のようなケダモノの笑みではない。

聖母を思わせるような、慈愛に満ちた柔らかな笑みであった。



「渡来ミカゲ氏の孫娘だと？」

ユウマとヨリトモたちの報告を聞いたアクツ総司令は、酷く切羽詰った様子で振り返った。気のせいではなければ、書類を持つ彼の手が震えているように見える。

アクツの手に握られているのは、真竜の検体集めのために共同戦線を張ることになったノーデンスの13班員たちに関する資料だ。I S D Fのデータベースにあったものを纏めた物。

彼の視線は、ノーデンス13班を率いるリーダー——渡来イノリの資料に向けられている。彼は忌々しいものでも見るかのように眉間に皺を寄せた。

「アクツ総司令……？ 彼女たちのことを知っていますか？」

「……いや。だが、ミカゲ氏や那雲ヨツミ博士には、生前、大変世話になったからな。孫が居るとは聞いていたが、まさかこんな形で関わることになるうとは」

様子がおかしい直属の上司にユウマは問いかけた。アクツは“大変”の部分強調すると、深々とため息をつく。彼の様子からして、いい意味での“世話になった”という表記ではないのだろう。むしろ、強い反感や憎しみが滲んでいるように思う。

これ以上は踏み込ませないと言わんばかりに、アクツは報告を促した。余計な詮索はするなという、言外の命令である。なのに、食い下がろうと口を開きかけたのは何故だろう。ヨリトモが報告を続けなければ、ユウマはアクツを質問攻めにしていたかもしれない。

彼の反応を見る限り、ヨリトモの判断——「渡来ミカゲを筆頭にしたムラクモ13班が現代に復活した」ことは可能な限り伏せておく——は正しいように思えた。もし、バカ正直に報告していたら、アクツが何をするのか分かったものではない。最低でも、社会的制裁はやつてのけるに違いない。

『ISDFにヨツミ博士を渡すことは絶対にできない。その理由は、アンタたちが一番知っているはずだ！』

『死人がここに居ると聞いたら、都合が悪い人間に心当たりがある』

『……俺の予想が正しければ、この件は伏せておくべきだ』

般若のような形相で怒鳴ったドクター・ジュリエッタ、パンドラの箱を開けてしまったかのように鬼気迫った顔のヨリトモの言葉が脳裏によぎる。

自分が所属する組織に対して、ユウマは絶大的な信頼を置いている。勿論、公権力である自分たちが正義であると信じていた。——けれど。

アクツの反応は異常だった。ムラクモ13班の系譜を、彼は敵視している。彼が政敵を潰そうとするときに見せる眼差しが、鋭くぎらついていた。

(イノリ)

ユウマは思わず手を握り締める。手袋がざりりと小さく音を立てた。

アクツの眼差しを見て真っ先に思い浮かんだのは、ユウマに笑いか

けてくれた渡来イノリの姿だった。

上司は、「渡来ミカゲの系譜を受け継いでいる」という理由だけで、彼女に強い敵意を抱いている。

彼が政敵をあの手この手で失脚させたり、再起不能に追い込んでいくという噂は耳にしていた。

もし、アクツの矛先が、イノリに向けられたら——考えただけで、寒気がする。強大な公権力を有するアクツに踏み潰されることは明白だ。それだけは、それだけは——。

「ご苦労だった。もういいぞ」

ユウマの意識を現実に戻したのは、アクツの言葉だった。アクツが自分たちに背を向け、ヨリトモが部屋を出る。普段は躊躇いなく彼の背に続くユウマなのだが、今回はほんの一瞬、反応が遅れた。

彼に遅れて部屋を出る。扉が閉まるか否かのタイミングで、アクツの独り言が零れた。彼の言葉に、ユウマは弾かれたように振り返る。がちやんと、扉が閉まる音がした。扉を開けて飛び込みたい衝動に駆られたユウマだが、ヨリトモの声で引きもどされた。

ユウマはアクツの私室に通じる扉を眺めていたが、ややあって、すぐにヨリトモの背中に続いたのだった。

『——死しても尚、私の計画を阻むというのか……!』

アクツ総司令の独り言が、こびりついたかのように頭から離れない。

纏わりつくような寒気を感じて、ユウマは無意識のうちに身震いしていた。

《白いオダマキ：あの方が気がかり》

ヒーローと桐の時計

「……ええと、これは一体？」

若草色の髪を首付近まで伸ばし、眼鏡をかけた隻腕の学者が、きよとんと首を傾げた。赤い髪を結んだ女性が手にしているブツの意味を、全然理解できていないらしい。

「見れば分かるでしょ？ 時計よ時計。アクセサリ用のペアウォッチ。懐中時計タイプ」

「それは知ってるよ。僕が知りたいのは『どうしてキミが、これを僕に贈るのか』ってこと！」

女性が指し示した時計の片割れをしげしげと眺めたあと、学者は困ったようにこちらを見返す。「腕時計タイプならまだしも」とぼやく学者は、浪漫のろの字も分かつちやいない。

この学者が恋愛に疎いことは知っていた。モノづくりの腕は天才でも、恋愛という観点から「モノがどのような意味を持って使われる／贈られるのか」なんて分野外だろう。

察しろ、と言っても土台無理な話。「ああもう、これだから」と呟いて、女性はこれ見よがしにため息をついた。学者はますます眉間の皺を深くする。

人の心の動きについては人一倍察知するくせに、恋愛となると、どうして突発的な鈍感を発症するのか。

ライトノベル主人公も突発性難聴を併発するが、それと同等であった。そういうキャラじゃないくせに。

「その頭脳は飾り物なの？ もう、総長のくせに不甲斐ない！」

「すつごく不当!!」

苛立ちをそのまま口に出せば、即座に突っ込みが飛んでくる。20年の都庁奪還時に披露した漫才で、突っ込み役をやったときみたいにびしりと決めてきた。

何か言い返そうとする学者を無視し、女性は手早く懐中時計を男の首にかけた。金色のチェーンが室内等に照らされ反射する。蓋には桐の葉と花が刻まれていた。

桐の花は、この男の誕生花だ。ついでに、彼の名前にも『桐』の字が入っている。母の実家に勤めている職人に頼んで作ってもらった特注品だ。

因みに、対になる女性の時計には、女性の誕生花であるチューベローズが刻まれていた。花言葉は“危険な快樂”である。閑話休題。

「時計を贈った意味を学者に気づいてもらいたい」と言うのが女性の願いだ。口に出すより、そっちの方がサプライズになるだろう。

正直なところ、「学者を赤面させて、照れさせてやりたい」というのが本音だ。その欲望を叶えるためにも、学者には自力で答えにたどり着いてもらわねば。

「総長、連想ゲームをしよう。時計といつたら?」

「えっ? ……じ、時間?」

「そうだね、大正解。物を贈ると言うのは、送り手が何らかの意図をもって物を選んでるんだよ。機能性だったり、メッセージ性だったり」

女性はそう言って、補足する。

「今回の贈り物は、強いメッセージ性を持って選びました。連想ゲームで言った、『時計：時間』というのもその一つ」

「メッセージ……」

「私が貴方に時計を贈る”行為を、さっきの連想ゲーム風に言い換



えると?」

「……キミが僕に、時間を贈る?」

「その通り! そこに文学的情緒を加えるとどうなるかな?」

女性はニヤニヤ微笑みながら、学者の答えを待った。学者は唸りながら、その言葉に拙く浪漫を付加していく。

「キミの時間を、僕に」——「——そこまで言っただけで、学者は慌てた様子で女性の方へを向き直った。

女性の思った通り、彼の顔には朱が散っている。半ば狼狽した様子で、学者は女性に声をかけた。

「……ねえ。僕の記憶が正しければ、キミ、以前言っただよ。『チェーンのついたモノは、その人物に対しての独占欲と、その人物を束縛したいという欲求』の現れなんだ』って」

「おお、覚えてたんだ。意外だわー」

「記憶力にはこれでも自信はあるんだよ。……って、そうじゃない! キミが僕に贈った懐中時計は、チェーンがついてて、首にするタイプのもんだ。つまり、つまり、これは——」

学者は顔を真っ赤にして押し黙った。杖を置いていなければ、口元を覆っていたであろう。

可哀想なことに、彼は何とも情けない面を晒していた。それがまた、女性の欲望をそそのめるのだけけれど。

あのね、と、学者は酷く震えた声で呟く。

「キミ。そういうのは、男の甲斐性ってのがあるんだよ」

「貴方に甲斐性なんてあるの?」

「あったの! キミに先を越されたけど!!」

「今は無いの?」

「あるよ! ——もう、ついて来て!」

顔を真つ赤にした学者は怒鳴るようにして吐き捨てると、おぼつかない足取りで歩きだす。女性は彼の隣に並んだ。追い越すことは可能だが、そんな真似をする程墮ちちやいない。

移動中の間、学者はぶつぶつと不平不満を零している。「もつと相応しい形で言いたかった」と主張する学者だが、機会がなければ永遠に言わなかったであろうことは明らかだ。

程なくして学者の私室にたどり着く。扉を開けて室内に入れば、彼は半ば倒れるようにして自分の椅子へと座った。机の引き出しを開けて、小さな箱を取り出す。

学者の顔は真つ赤だ。口元は弧を描いていたが、緩んでいるのか戦慄しているのかの判別がつかない。

緊張しすぎて自分がどんな顔をしているのか分かっていないのだろう。彼らしいと言ったら彼らしかった。

「……本当に、こんなのがきっかけなのは、あれなんだけどき——」

学者はそう言つて、箱を差し出す。女性は箱を開けてみた。

箱の中からお目見えしたのは、装飾も何もないシンプルなプラチナリング。

どんなものを選べばいいのか分からなくて、ここに着地した感じが漂っている。そんな彼が好きだ。

「受け取って、くれるかな」

——世界で一番無様な／一番愛おしいプロポーズを、女性は一生忘れない。

\*\*\*

『ねえ、その時計、どうしたの?』

「誰かが落としていったみたいなのよ」

「落とし主が分からないのよね」と言いながら、ジュリエッタはその時計を弄ぶ。蓋に桐の葉と花が刻まれた懐中時計だ。チェーンが千切れてしまったらしい。

ジュリエッタはその時計をまじまじと観察する。細部まで作りこまれたデザインに、彼は感嘆の息を吐いた。作り手の腕前に感服しているようだ。

「でも、誰かが身に着けているのを見たことがある……そんな気がするのよねえ」

『……ジュリエッタ』

「何？」

『その時計貸して。落とし主に心当たりがあるんだ』

ヒイナの申し出に、ジュリエッタは目を丸くした。



「オレの右手が炎を上げる！——ブラスタレーイブン、参上！」

ノーデンスの入り口から、高らかな名乗りが響いてきた。それにつられるような形で、イノリはエントランスから外の様子を伺う。広場の一部に人だかりができていた。

「ああ、そういえば。ヒーローショーは今日だったわね。あのヒーローがノーデンス内をうろろしてたワケだわ」

「んふふー☆ チビッコたちに大盛況だね」

丁度そこへ通りかかったのはジュリエッタとアリーだ。前者は大量の書類を抱え、後者は封筒と鞆を抱えている。2人の様子からして、仕事が忙しいのだろう。

特に後者は、これからどこかへ出向しなければならぬらしい。詳しい内容は分からないが、アリー曰く「とても大事なおシゴトなんだよー」だとか。

天真爛漫で天衣無縫なアリーが社長らしい姿を見せたのは、これが初めてのことでないだろうか。目を瞬かせるイノリに対し、アリーは楽しそうに微笑んだ。

「ブレイチをスカウトしたとき、『ブラスタレイブンのヒーローショーの場所提供』と、『ブラスタレイブンの出入り許可』を条件として出されたんだ」

「その要求を二つ返事で了承しちゃったアンタも大概よ？　アリー……」

裏話を暴露したアリーに対し、ジュリエッタはげんなりとした様子でため息をつく。彼の様子からして、アリーの決定による余波を受けたことは明らかだ。

ノーデンスはドラゴンクロニクルの解析に力を注いでおり、その継続を最優先に動いている。ISDFとの交渉でも、『ドラゴンクロニクル解析を進められる環境を保証してほしい』と訴えていた。セブンスエンカウトによる戦力確保もその一環である。

何の見返りもなく領いてくれば最高であるが、世の中そんなに甘くない。S級能力者たちが条件を突きつけてきた場合、「目的成就のために必要な経費」として支払うのであろう。ブレイチはそれを要求し、アリーは二つ返事で答えた。

実はイノリたちも、Code:VFDに協力する代わりに、いくつか条件を付けている。主な条件は『長期休みが終わった後は、学業を優先する』、『作戦遂行が優先される状態になった場合、学校側への手配を行う』だ。

勿論、アリーとジュリエッタは二つ返事で領いてくれた。特にジュリエッタは「学生だもの。学業が優先なのは当たり前よね」と苦笑していた。中でも、進路が決まっているイノリに対する配慮は大変だった。

たと零していたか。

それでも条件をきっちり守ってくれるあたり、イノリたちを重要な戦力だと認め、期待してくれているようだ。それに応えたいと思うのは人の性であろう。イノリはひっそりそんなことを考えた。閑話休題。

「徹夜明けで死にそうになってるときに、ヒーロースーツに身を包んだ男が『やあキッズ！ ヒーローショーの許可を貰いに来たよ!!』なんて言いながら、執務室に入ってきたときのアタシの心境なんて誰も分からないでしょうね」

「うわあ。それ、申し込む側にとって、すっごく気まずいんじゃないか……」

「……あのヒーローも居たたまれない気分になったのかも。アタシのメデイカルチェックをして、生活改善のアドバイスや体調改善に役立つ料理のレシピを教えてくれたわ。栄養剤までくれたのよ」

「“中の人”は博学なのねえ。アクターの前は何してたのかしら」と、ジュリエッタはしみじみと呟いた。そうして、時計を見て目を見張る。

ジュリエッタは慌ただしく奥へ走り出した。アリーも現在時刻を把握すると、鞆と封筒を抱えて颯爽と出かけて行く。その背中をイノリは見送った。

「2人とも多忙だなあ……」

「当たり前だろ。Code：VFDが円滑に進むよう、方々へ駆けまわってんだから」

イノリの零した言葉に答えたのはナガミミである。 “愛くるしい主任” オーラを崩さぬまま、マスコットはひっそりと耳打ちした。

「それから、喜べよ。13班に新しい戦力が投入されることが正式に

決まった」

「つてことは、シキちゃんが合格したつてこと？」

「ああ。それだけじゃねえ。リハビリがてらセブンスエンカウントをプレイさせたオマエの爺さん、セーフティモードで測定不能を叩きだしたぞ。アレのどこがポンコツなのやら」

『大丈夫、タケハヤよりはマシ』を連呼してたな」と、ナガミミは深々と息を吐く。ミカゲの尺度が人類戦士基準なのは今始まったことではない。生前からである。

そのことを素直に教えれば、マスコツトは遠い目をした。生前からタケハヤを斃し、彼が正しく死ぬための守り人として刃を交えてきたのだから、当然と言えよう。

ミカゲにとつてのタケハヤは、「良くも悪くも印象的な相手」らしい。イノリはミカゲの話の聞いたただけだが、語り口や表情からして、特別な思い入れがあることは明白だった。

祖父が親友に向ける感情は、尊敬であり、畏怖であり、憎しみであり、苛立ちであり、憤怒であり、親愛である。

清濁併せ持ったミカゲの眼差しに、明確な色を見出すことは不可能であった。

イノリがそんなことを考えていたとき、エレベーターの扉が開く。慌ただしく飛び出してきたのは、つい先程「セブンスエンカウントに挑戦する」と言つて出陣していった那雲シキであった。彼女はサイン色紙を抱えている。

「シキちゃん、どうしたの？」

「頼まれごと。ブラスタレーブンつていうヒーローのサインが欲しいんだつて」

シキはそう言つて、サイン色紙を指し示した。

研究室に缶詰になつていいる研究者がいて、彼は息子から「ブラスタレーブンのサインが欲しい」と頼まれたという。

しかし、その研究者は多忙すぎて、サインを貰いに行く暇がないそうだ。彼に代わり、シキがサインを貰ってくることになったらしい。

「丁度いいわ。ヒーローショーもやってるみたいだし。終わったら、サインを頼みましょう」

人だかりの向こうにブラスタレイブンの姿を見つけ、シキは色紙片手に飛び出した。観客の盛り上がり様からして、ショーは終盤のようだ。

青いヒーロースーツを身に纏ったアクターと、イノリたちにとって見覚えのある少年が、派手な殺陣を披露していた。イノリとナガミミは間の抜けた声を漏らす。

ブラスタレイブンと肩を並べて戦っているのは、イノリたちよりも早い段階でノーデンスにスカウトされていたパートタイマー社員——真瀬ブンイチだ。

イノリとナガミミが呆気に取られている間に、ヒーローショーは終わったようだ。レイブンとブンイチがぺこりと頭を下げる。子どもたちは「楽しかった」と笑いながら、広場から去って行った。

ヒーローアクターから離れていく波にをかき分け、シキが2人の元へと向かう。

イノリとナガミミも、慌ててシキの背中を追いかけた。

「ブンイチくん！」

「ブンイチ！」

イノリとナガミミが名前を呼べば、ブンイチはこっちに振り返った。しかし、彼はイノリなど眼中にない。ブンイチの視線は、ナガミミにのみ注がれている。

「オマエの本業、ヒーローショーのアクターだったのかよ!？」

「そうだよ。ブラスタレイブンの相棒、ブラスタキッズ・真瀬ブン

イチは俺のことさ！」

ナガミミの問いに、ブンイチは満面の笑みを浮かべて頷いた。親指の先を自分に向けて胸を張る様子からして、彼は自分の本業に誇りを持っている様子だった。

ノリノリで前口上を述べるブンイチに、ナガミミは呆れたようにため息をつく。漫才宜しく戯れ始めた2人を横目に、ブラスターレイブンがイノリたちの方を向いた。

「おや。その色紙……もしかして、このレイブンのサインをご所望かい？」

「ええ。貴方のサインを欲しがっている男の子のお父さんから頼まれたの。お願いできる？」

「ラジャー！ キッズ、少々待ちたまえっ！」

シキの問いに対し、レイブンは二つ返事で頷いた。意気揚々とサインペンを探していたレイブンだが、見る見るうちに顔色が悪くなる。

「あれ。な、ない……ペンが、*僕*のサインペンが……！」

(……*僕*？ もしかして、*中の人*の地ってこっちなのかな？)

自信満々だった笑顔があつという間に崩れ、頼りないオーラが漂い始めた。そこには、ヒーローショーの主役としての貫禄は一切ない。

あまりの狼狽っぷりに、イノリとシキは啞然とレイブンを見返す。有明のヒーローは、ロボットダンス宜しく挙動不審になっていた。

サインを書くための道具を失い、軽くパニックになっている。相棒の様子を見ていられなくなったのか、ブンイチはナガミミとの漫才を止めた。

彼は腰のポシェットから小さな筆記用具入れを取り出し、その中からペンを差し出す。目が覚めるような若葉色は、ブンイチの髪の色を連想させた。



「はい、レイブン。サ——ブラスターパーン」

「貸してくれるのか!？」

「当たり前でしょ？ 俺の役目はレイブンのサポートだもん」

「予備はきちんと準備しておけって言ってるじゃん」と、ブナイチは眉間に皺を寄せた。用意周到な相棒に、レイブンは口元を緩ませる。

マスクに覆われているため表情はよく分からないが、レイブンは苦笑しているであろう。レイブンはブナイチに礼を言い、さらさらとサインを書いた。

子どもに人気の正義の味方は、サインの仕方も慣れたものらしい。インクが尽きるまで書くと言ったレイブンであったが、ブナイチにジト目で睨まれて閉口した。

「ありがとう！ これで、コータくんも喜ぶわ」

ブラスターパーンのサインを抱えたシキは拳を握り締め、小さくガッツポーズを取った。これで依頼は完了である。あとは、依頼者の元へサインを持っていくだけだ。

そんなシキの姿を眺めていたナガミミは、ヤレヤレと言わんばかりに肩をすくめた。「次の奴は超弩級のお人よしかよ」と小さく毒づく。でも、その響きが優しいように思えたのは気のせいではないのだろう。マスコットは後ろを振り返る。そこには、レイブンの女房役として振る舞うブナイチの姿があった。

「レイブン、さっき困ってた女の子にサ——ブラスターパーンを貸してたでしょ。後で俺が回収しておくから」

「ありがとう、キッズ。キミは本当に優秀だな」

「当然。俺はブラスターパーンの相棒だからね」

あくまでも役柄を崩すことなく、ブナイチは不敵に笑った。

しかし、ブナイチはふとレイブンの胸元に視線を向ける。彼は違和感を察知していたかのように目を瞬かせた。

女房役の様子が変わったことに気づいたレイブンが首を傾げた。ブナイチは眉間に皺を寄せながら、相棒に問う。

「……そういえばレイブン。時計は？ 眞瀬時計店の特注ペアアクセサリウオッチ、懐中時計タイプ、男性用」

「い、いきなり何を言い出すんだ、ブラスターキッズ。とけ——ブラスターウオッチなら、ここに——……え？ 嘘？」

役柄をぶち壊しにされかねないこと——身に着けている貴重品の正式名を言われ、レイブンは一瞬口元を引きつらせた。当たり前のことを確認するように、彼は自分の胸元を見る。次の瞬間、レイブンの纏う空気が変わった。

彼の胸元には、時計らしきものは何もついていない。ブラスターレイブンのロゴマークがあるだけだ。時計がないという事実を理解した途端、レイブンは『ブラスターレイブン』の役柄を放棄してしまったようだ。派手に取り乱す。

「ど、どどど、どうしよう！ あの時計は、“彼女”が“僕”にくれた、大事な贈り物だったのにつ!!」

大事な贈り物、というのがどのような意味を持つかは分からない。分からないが、レイブンの“中の人”にとって、強い思い入れがある品なのだろう。

眞瀬時計店と言えば、古くから続く老舗の中小企業だ。現在は時計だけでなく、アクセサリや眼鏡、補聴器等の品物も扱っている、東雲財閥の関連企業の1つだ。

旧ムラクモ13班に所属した東雲ヒイナの母親は眞瀬時計店経営者の娘である。それが縁になったようで、リヒトの眼鏡も眞瀬時計店の高級品を使っているようだ。

大パニックになるレイブンの姿を見ていられなくなったイノリとシキは顔を見合わせて頷き合う。

「大丈夫！ 13班に任せて！」

「じゅ、13班だって!?!」

シキの言葉を聞いたレイブンが目を剥いた。先程からずっと取り乱しっぱなしである。しかし、今はこの話をしている場合ではない。

どこで落としたのかを訊ねる。レイブンは自分の記憶を辿るようにして、自分の顎に手を当てて唸った。そうして、ポンと手を叩く。

ヒーローショーが始まる前に、ノーデンスの技術主任とぶつかったらしい。ヒーローショーが始まる前までは首にあったのだから、もしかしたら――。

「分かった。探してみる！」

「俺も探してみる。あのとけ――ブラスタワーウォッチは、とても大事なものだから！」

「あ、ブナイチくん!?!」

ブナイチはそう言うなり、ノーデンス社へと駆け出した。鬼気迫る横顔を目の当たりにして、ナガミミは呆けたようにブナイチの背中を見つめていた。

イノリも慌てて先輩の後を追いかける。後ろからシキがついてくる気配を感じながら、イノリもブナイチの背中を追いかけたのだった。

\*\*\*

ジュリエッタは技術主任室にいた。彼の机の上には関係資料が山積みになっている。

「ねえ、ジュリエッタ。懐中時計を見かけなかった？」  
「懐中時計？」

イノリの問いに、ジュリエッタは目を瞬かせた。最初は合点がいかなくて首を傾けていたが、すぐにポンと手を叩く。

「それなら、ヒイナが『持ち主に心当たりがあるから預けてほしい』って言ってたけど」

「ヒイナ？ ヒイナって……」

ブンイチが首を傾げた。そういえば、彼は「旧ムラクモ13班が復活した」ことを知らない。そのとき、ブンイチは席を外していたためだ。

知っていて当然という態度で話していたジュリエッタも、あの場にブンイチが居なかったことを思い出したのだろうか。

「ああ、あの場になかったアンタは知らないでしょうけど、色々あって、旧ムラクモ班が現代に復活したのよ。今、アタシたちノーデンスが身柄を預かってるわ」

「!!」

ジュリエッタの言葉を聞いたブンイチが大きく目を見開く。口元が戦慄いたように見えたのは気のせいだろうか。

ブンイチが取り乱したのは一瞬のことで、次の瞬間には普通の表情に戻っていた。何かを思案しているのか、顎に手を当てる。

ナガミミと漫才をしているときの彼からは、想像できない程真剣な面持ちだ。正直、彼もそんな表情を浮かべるのかと思ってしまう。

ジュリエッタもイノリと同じ気持ちだったようで、目を丸くしている。

「それで、……ヒイナさんはどこに？」

『ソウセイとリヨウスケを捕まえに行く』って言ってた。ソウセイの方は、ついさつきまで、会議フロアの依頼カウンターでチカと話してたのを見かけたけど……』

「ソウセイくんにチェーンを修理して貰うつもりだったのかな。……となると、13班専用のレストフロアにいるのかも」

「それだ！　ありがとう技術主任！」

イノリの言葉を聞いたブレイチは、我先にと会議室を飛び出す。イノリとシキも彼の背中が続いた。エレベーターに乗り込み、4階のポタンを押す。程なくして、エレベーターは目的地へ到着した。

丁度そのタイミングで、部屋から誰かが出てくる。探し人——風間ソウセイと■■■リヨウスケだ。2人は一仕事終えたように満足げな表情を浮かべていた。ソウセイの手には、新品同然の輝きを持った懐中時計が握りしめられている。

どうやら、チェーンの修理だけでなく、時計本体のメンテナンス（内外共々）もしたらしい。流石は職人である。イノリがそんなことを考えていたら、ブレイチがリヨウスケの姿を見て固まっていた。「あと、間抜けな声が響く。

次の瞬間、リヨウスケとブレイチの目が合った。

『あれ？　キミ、フミ——』

「人違いです」

『そんなことないよ！　キミ、フミ——』

「人違いです」

『え、でもフミ——』

「俺は、〃真瀬ブレイチ〃です。それ以外の誰でもありません」

誰かの名前を口走りかけるリヨウスケを遮るように、ブレイチは己の名を口にした。紫苑の瞳に悲壮感が滲んでいたように見えたのは何故だろう。

ブレイチの表情——痛々しいまでもの決意に気圧されたのか、リヨ

ウスケはそれ以上誰かの名前を口にするとはなかった。

何とも言えぬ空気を打破するように、イノリはこれまでのことをソウセイたちに説明した。リョウスケは時計の落とし主に心当たりがあるのか、遠い目をする。

「千切れたチェーンはきちんと直しておいたぞ。時計のメンテナンスもしたし、傷や汚れも綺麗にしておいた」

『それじゃあ、持ち主に宜しく言っておいて。元々は裏方勤務なんだから、無茶したら承知しない』って。……『開発部所属の■■』って言えば伝わるはずだから』

「分かった。ブラスタレーイブンに伝えておく」

イノリの言葉を聞いたリョウスケが、そつと視線を逸らして口元を抑えた。その眼差しは、遠い昔を思い出しているかのように優しかった。

ソウセイから時計を受け取ったブンイチは、即座に走り出す。イノリとシキも彼の背に続いた。エレベーターに乗り込み、エントランスを出る。

広場に戻れば、ブラスタレーイブンの背中が目に入る。どうやら誰かと話をしていたようだ。いの一歩に駆け出したブンイチが歩みを止める。彼の視線の先には、桐野ヒイナ。

紫苑の瞳はこれ以上ないくらい見開かれた。少年の口が小さく動く。ヒイナもブンイチに気づいたようで、静かに目を細めた。ブンイチは何か言いたそうに表情を歪ませる。けれど、彼は何も言わないことを選択したようで、口を真一文字に結んだ。

ヒイナは優しい眼差しでブンイチを見つめていた。何も言わないけれど、ヒイナとブンイチは通じ合っている。暫しの沈黙の後、ヒイナは小さく頷いた。ブンイチも頷き返す。その瞳には迷いはない。レイブンも、どこか悲しそうな笑みを浮かべていた。

3人の間に漂う沈黙に、どうしたらいいのかわからなくなる。イノリとシキは途方に暮れたような気分で顔を見合わせた。幾何かの後、

ヒイナは実体を解いて姿を消す。それを確認したレイブンが振り返った。ブンイチが駆け寄り、懐中時計を差し出す。

「13班の仲間が拾って、修理してくれたんだよ」

「そうか。ありがとう、キッズ」

時計を受け取ったレイブンは、イノリたちの方を向いて頭を下げた。彼は微笑み、愛おし気に懐中時計を撫でる。

「これはとても大切なものでね。……この時計をくれた人は、『僕』

——オレにとつて、世界一大切な女性だった」

「それじゃあ、この時計はその女性からの贈り物なのね？」

シキの問いに、レイブンは静かに頷いた。

彼は時計を首にかけた後、重ね重ね頭を下げる。

レイブンとブンイチの様子からして、今日はこの後も仕事があるらしい。

「西にドラゴンあらば行って討伐し、東に困った人あらば駆けつけて救出する！」

「銀河を股にかけるスーパーヒーロー、それが地球戦隊ブラスタールレイブんだツ!!」

音頭を取って、助手とヒーローはポーズを決めた。満足げな様子からして、うまく決まったのだろう。

去ろうとする2人の背中をイノリは引き留めた。リヨウスケからの伝言を、レイブんにきちんと伝えなくては。

「レイブンさん！」

「なんだい、キッズ？」

「『開発部所属の■■』さんから伝言です。『元々は裏方勤務なん

だから、無茶したら承知しない』『って」  
「!!!」

イノリからの伝言を耳にして、レイブンははっと息を飲む。その面持ちは、失ったものが自分の目の前に戻ってきたかのようだ。

しかし、それもすぐに消え去る。何かを察したのか、レイブンは力強く微笑んで頷いた。そのまま、ヒーローとその助手は駆け出ししていく。

彼らの背中が見えなくなった後で、深々とため息をつく音が聞こえてきた。見れば、ナガミミが不満そうに部下が去って行った先を見つめている。ウサギのマスコットらしからぬ哀愁が漂っているように見えたのは気のせいだろうか。

「どうしたの、ナガミミ?」

「……ブナイチの奴、『ISDFとの顔合わせには顔を出すが、本業が大変だから合流はお預け』だよ。ったく……」

「休暇申請の手続き」と呟くナガミミは、くるりと踵を返した。マスコットの横顔はどこか暗い。

おそらく、その話を聞いたジュリエッタが「オネエを捨てて怒鳴り散らす」様を想像しているのだろう。

いや、自分に降りかかる業務の山を思い浮かべているのかもしれない。真実は本人のみぞ知る、だ。

「これで一件落着いてことかな?」

「それじゃあ、私はジョーさんにサインを届けてくるわ!」

シキはサイン色紙を抱え、ぱたぱたと駆け出していく。彼女の背中を見送ったイノリは、大きく背伸びしベンチに腰かける。

空は雲一つない快晴。遠くの方には、翼竜と思しき影がちらついている。翼竜の群れは有明の空を悠々と横切って行った。



東京周辺はISDFが見回りを行っている。あの竜はどこへ向かうのだろうか。いずれにしても、人類だれかを狩り、人類だれかによって狩られることは確かだ。

(……ユウマさんたちも、出動してるのかなあ)

イノリの脳裏に浮かんだのは、特殊部隊に所属している如月ユウマの姿だった。ISDF対竜部隊のエースである彼は、竜関係の任務で引っぱりだこだろう。

帝竜を一撃で屠る力を有しているのだ。ドラゴンとの戦いに、彼の存在は欠かせない。ノーデンスとISDFの駆け引きは難攻しているようだ。交渉の結果次第で、ユウマやヨリトモたちと一緒に戦うことになりそうである。

ジュリエツタたちは「ISDFに監視される」ことを危惧しているが、イノリは彼らとの共闘を『悪いものである』とは思えなかった。現場じぶんたちと官僚じょうそうぶの思惑には差異があるから、仕方がないのかもしれない。

人類同士で化かし合いを始めれば、即座に祖父のトラウマスイッチが入って、愚痴を延々と聞かされることになる。2021年の反ムラクモ派議員がどれ程陰湿だったかを基準にすれば、今回はまだマシの部類だろうか？

そんなことを考えていたとき、セブンスエンカウントからミカゲが出てきた。ノーデンスの敷地内に居る人々からの視線が突き刺さる。彼らはこぞつてひそひそ話を始めた。

祖父は居心地悪そうに肩をすくめた後、イノリの元へと近づいてくる。イノリは手を振って合図し、ベンチの右側に移動した。ミカゲは左側に腰かける。

「おじいちゃん、お疲れさま」

「おう」

イノリは満面の笑みを浮かべて、祖父にねぎらいの言葉を駆けたのだった。



80年前は異界だった東京にも、建設中のビルが増えたように思う。漸く、世界は真竜襲来以前の生活レベルに立ち返ろうとしていた。

セブンスエンカウントの閉館時間は過ぎている。昼間はごった返した人影もまばらで、その多くが近隣住民かノーデンスの社員だ。

だが、その中で、“自分”は“彼”を見つけた。80年前の竜戦役が現実として横たわっていた頃、人類の希望として戦い抜いたヒーローの姿を。

「――ブラスター “アヤフミ”」

“彼”もまた、“自分”を見つけて微笑んだ。迷うことなくこちらへ歩み寄ってくる。

『ブラスター “アヤフミ”』という言葉に込められた意味を、“自分”はしっかりと理解している。

『僕のごときは好きに呼んでくれて構わないよ。 “キリノ”でも、“アヤフミ”でも、“レイブン”でも！ キミが呼びやすい愛称で呼んでくれ』

『じゃあ、“レイブン”で』

好きに呼んでいいと言ったのは“自分”だった。呼び名の候補にそれを挙げたのも“自分”だった。

ただ、状況問わずそんな風に呼ばれることになるとは、思ってもみなかっただけで。

当時の幼い少年が、永遠の青年になって90代で亡くなるまで、愛

称と苗字呼びしかしないだなんて、予想していなかった。

『礼文』<sup>レイブン</sup>

総長、と呼ばれることが多くなった後も。

“彼”は、“自分”の名前を呼んでくれなかった。もう1つの読み方で、“自分”を呼び続けていた。

竜戦役から長い時間が経過したけれど、結局、“彼”は一度も本名を呼んでくれなかった。

『礼文』<sup>レイブン</sup>

親愛なる総長さま、と、柔らかな笑みを浮かべてその名を紡ぐ青年。

“彼”は、『裏方で頑張っている人こそヒーローだ』と言っていただけど、“自分”はそうとは思わない。

“彼”はいつも、誰かを守るために矢面に立っていた。仲間たちと共に、大事な人を守るために戦っていた。人々の希望となるために、東京の大地を駆け抜けた。

“自分”はただ、彼らの背に隠れて怯えていただけだった。彼らの道を切り開くための道具を作り、手渡すのだけで手一杯だった。

彼らはそれでいいと言ってくれたけれど、納得なんてしていない。紆余曲折あって戦う力を得たときは、怒られた後、盛大に張り倒された。

それでも仲間たちに頼み込んで戦闘訓練につき合ってもらったか。最終評は『元が元だからあまり期待／過信してはいけない。ヒットアンドアウェイを忘れるな』である。……多分、褒められてはいない。

『裏方業務を得意とするオレへの悪口ですか？ 殴り合いだけが戦場じゃないのに』とぶうたれた “開発部所属の■■■” が、眉間に皺を寄せていたことは印象的であった。勿論、彼を否定するつもりはない。

「アヤフミ」

長々とした思考を一刀両断するかのごとく、柔らかな声が響いた。一番最初に耳にした、無機質でがらんどうだった少年の声の面影はなく。

ときには気だるげな、ときには鋭い刃のように、ときには誰かを想う優しい響きをもって言葉を紡いだ。

この声の主を、*自分*は鮮烈に覚えている。決して忘れられるはずがない、正義のヒーロー。

ISDFに渦巻く闇に挑み、その闇によって飲み込まれ、亡き者にされたはずの友人が。

死体すらまともに残らなかったと言われた男が、今、五体満足で*自分*の目の前にいる。

「……相変わらず、*僕*の名前も、*オレ*の名前も、きちんと呼んでくれないんだね」

「あ、分かった？」

「分かるよ。何年一緒に戦ってきたと思ってるんだい？」

「今じゃあブランクの方が長いがな。抜き打ち訓練でもしてみるか？」

「遠慮しとくよ。再起不能にされたら困るからね」

ひとしきり軽口を叩き合い、互いの顔を見つめ合う。懐かしさに口元が緩んだ。

*彼*は何も変わらない。あの頃からずっと、正義の味方のままだった。

「何がどうしてこうなったかは訊かない。でも、1つだけ、言わせてくれ」

嘗ての*親愛なる総長*から、永遠となった*親愛なる正義の味方*

“へ。”

「——おかえり、ミカゲ」

正義のヒーロー・ブラスタレイブン——嘗てのムラクモ最終総長・桐野礼文キリノアヤフミが紡いだ言葉は、少しだけ震えていた。

## 揺れる心のモノグラム

この夏休みは、暫くノーデンスの方で寝泊まりすることになった。自宅からノーデンスに通うには、あまり条件が良くないためだ。リヒト、ソウセイ、シキも同じように、ノーデンスで寝泊まりすることが決まっている。

長期間家を空けることは確定していたため、イノリたちは一度自宅に戻って準備を整えることにした。自宅を懐かしむミカゲも、「手伝いをする」と動向を申し出たし、リヒトのお手伝いさんも一緒に手伝ってくれた。

「とりあえず、こんなものかな」

必要な荷物を纏め終えて、イノリは大きく息を吐いた。ミカゲも頷く。

「あとは、俺の日用品を取り繕えばお終いだな」

「そうだね。おじいちゃんが亡くなった後、全部処分しちゃったから」

自身の私物を確認したミカゲは、その少なさに苦笑する。遺品整理はどうに済ませていたためだ。死んだ人間が再び戻ってくることで想定していない。

丁度それと同じタイミングで、荷造りを終えたメイドがやって来た。白い髪に赤い瞳、紺と黒基調のメイド服を着た女性——小鳥遊ミユは、リヒト専属のメイドである。

リヒト専属の使用人は4人いて、ミユはその1人だ。彼女の他に女性が1人、男性が2人いる。他の使用人たちは、シキやソウセイ、リヒトに同行し、手伝いに駆り出されていた。

「それじゃあ、こちらの荷物はノーデンスに運び込んでおきますね。ハウスキーパーもお任せください！」

「お願いします、ミュさん」

満面の笑みを浮かべたミュに、イノリはぺこりと頭を下げた。ミュはてきぱきとした仕草で荷物を運び出していく。

その背中を見送った後で、イノリとミカゲは顔を見合わせる。2人で買い物をしに行くのは8年ぶりだ。

——いや、3人だ。

背後から漂う優しい気配は、ユイのものだ。祖母は楽しそうに目を細めている。3人で買い物に行くのは、実に9年ぶりであった。

祖父母と孫——この3人で買い物をする機会が再び訪れるだなんて思っていなかったため、イノリは堪らず口元を綻ばせる。

『ふふっ。ミカゲくと街で買い物するの、久しぶりね』

「だな。私服に関するアドバイス頼むわ」

『ミカゲくん、自分で自分の服選べないもんね。トウゴくんの私服には、ばつちりアドバイスできたのに』

ユイが口元に手を当てて微笑んだ。董色の双瞼はどこまでも優しい。ユイの言葉を聞いたミカゲも頷く。心なしか、ミカゲも楽しそうに目を細めたような気がした。

幽霊騒ぎ防止のため姿を消しているとはいえ、一緒に買い物ができるということは嬉しいことだ。3人は意気揚々と家を出て、繁華街へと繰り出した。

\*\*\*

東京の繁華街は人でごった返している。長期休みの最中ということで、学生たちを中心とした若者で賑わっていた。

イノリ、ミカゲの手には、デパートで買い占めた日用品が入った袋が抱えられている。その背後には、イノリたちにもみ視認できるレベルで実体化したユイがついて来ていた。

買い物の大部分を終えた3人は、近場のベンチに腰かけた。街路樹がベンチを覆う傘のように聳え立っており、丁度いい日影が出来上がっている。吹き抜けるそよ風が心地よい。

空を見上げれば、雲一つもない快晴が広がっている。遠くの方には、渋谷に生い茂る大樹が見えた。あそこの奥地はマモノが出現するため、ISDFが戦闘訓練校の関係者以外立ち入り禁止である。

『東京も随分と復興してきたんだね』

「うん。と言っても、まだ異界化したままの区画も多いけど」

『それでも、人が生活できる建物、買い物できる場所、遊べる場所が増えたように思うなあ』

「だな。目の前の屋台群とか、まさしくそれだ」

ユイはゆるりと目を細めた。ミカゲも、目の前に並ぶ出店を眺めながら頷く。ムラクモ13班が駆け抜けた時代は、生き抜くための環境整備が重要視されていた頃だ。彼らが生きていたときよりも、異界化したままの区画は確実に減ってきている。

日本列島の完全復興までには1世紀以上かかると言われているため、イノリたちが生きていく間には見れないだろう。……まあ、だからといって、現代に生まれたことには満足しているのだが。イノリが「ここに生まれ落ちたこと」自体が奇跡みたいなものだし。

人は出自や生まれた環境を選ぶことができない。自分が持ちうる／背負ったものを駆使し、運命を切り開いていかねばならないのだ。自分が生まれ落ちた時代、出自、環境が揃っていないければ、出会えない人々だっている。渡来一家はそれを人一倍理解しているつもりだ。

ミカゲとユイが、2020年に試験監督とムラクモ候補生として出会わなければ、イノリは生まれなかった。

今こうして生きていなければ、リヒト、ソウセイ、シキたちと友人になることもなかった。

セブンスエンカウントでミオやナガミミたちと知り合うこともなかったし、ユウマと出逢うこともなかっただろう。



(ユウマさん……今、どこで何をしてるんだろう)

イノリはそんなことを考えながら、出店に視線を向けた。民間主催の物産展が開かれているため、日本各地の料理が並んでいる。その他にも、祭りの屋台で並びそうな料理もあつた。美味しそうな香りが漂ってくる。

「丁度いい時間帯だし、昼飯でも食おうか」

「そうだね。何食べる？」

ミカゲの提案に乗ったイノリが屋台の方を向いたときだった。丁度、イノリが見ている場所に、ISDFの制服を身に纏った軍人が飛びこんできた。

黒い上着を羽織り、青い制服を身に纏った青年。彼の隣には、上官と思しき厳つい壮年の男性が同伴している。彼らのことを、イノリは知っていた。

イノリが声を上げるよりも先に、青年がイノリたちの方向を向いた。彼はイノリを見つけたのだろう。表情を綻ばせ、こちらに向けて手を振った。

「イノリ！」

「ユウマさん！」

ユウマに応えるように手を振り返せば、彼は小走りでこちらへ駆け寄ってきた。

一步遅れてヨリトモがミカゲを見つける。ミカゲは合図するように手を挙げた。

「こんなところで会うなんて珍しいですね。巡回ですか？」

「ええ。イノリは？」

「おじいちゃんと私の日用品を買ってたんです。暫くはノーデンスで寝泊まりすることになったので」

「そうですか」

不思議だ。ユウマと話していると、気持ちが弾む。楽しくて楽しくて仕方がない。勿論、友人たちと一緒にいるときも楽しいし、気持ちは弾んでいる。

けれども、その中でも一番、ユウマは「特別」だった。うまく説明はできないが、酷く甘い心地がするのだ。もつと一緒に居たいとすら思う程に。

できればいいのだが、ユウマも、イノリと話をしている楽しい“と思ってくれたら嬉しい。その気持ちをひっそりと抱え込みながら、イノリは微笑んだ。

「丁度、昼食を食べようとしていたところなんです。もしよろしければ、一緒に食べませんか？」

「いいですね、それ。……ああ、ちょっと待ってください」

ユウマは二つ返事で答えようとして、何かを思い出したように言葉を切った。彼は振り返る。提督、という呼称を口に仕掛けたユウマだが、彼は止まった。

視線の先には、たい焼きを口に突っ込まれたヨリトモと、今川焼を頬張りながら、右手にアイス、左手にクレープを持ったミカゲの姿があった。

イノリとユウマが話し込んでいる間に何が起きたというのだろうか。自分たちが話し込んでいた時間は、そんなに長くなかったはずなのに。

「先生、いきなり何をするんですか!？」

咳き込んだヨリトモが恨めし気にミカゲを見上げる。教え子の反

応を見たミカゲが目を細めた。

「今川焼よりたい焼き派。特に、オーソドックスなもので、中身の具はつぶあん一択。白たい焼きや、カスタードみたいな小洒落たものは好きじゃない」

「――！」

「グレープやアイスクリームのような洒落たものは、自分が食べるのはあまり好きではない。でも、他の人が食べている凶は悪くないと思う」。――だろ？」

「……覚えていたんですか」

「すまん。実は、今しがた思い出した」

「冗談を」

懐かしさと親しさを込めた紫水晶の瞳は、自分の記憶が間違っていないことを確認したかのようだ。それを聞いたヨリトモが苦笑する。しかし、どこか嬉しそうに見えたのは気のせいではないらしい。

夫と夫の教え子の様子を見守っていたユイも苦笑した。董色の瞳には、惜しみない愛情が滲んでいる。妻と教え子の眼差しを受け止めたミカゲもまた、嬉しそうに目を細めた。活き活きした横顔に、イノリも自然と口元が綻ぶ。

ユウマは物珍しそうにヨリトモたちの様子を眺めていたが、用事を思い出して手を叩く。彼はヨリトモに「イノリと昼食を食べたいが、構わないか」と問いかけた。ヨリトモはポカンとしたようにユウマとイノリを見比べたが、2つ返事で頷いた。

上司から許可を得たことで安心したのだろう。ユウマは表情を綻ばせながらイノリの方へ向き直った。

「許可がもらえました。それじゃあ、何を食べますか？」

「そうですねえ……あそこのパン屋さんとかどうでしょう？ 私が行きつけなんですよ」

ユウマに問われ、イノリは販売用の車を指さす。以前からイノリたちが最前になっていた、美味しいパン店であった。

長蛇の列はなかったが、車の周辺にある食事スペースには沢山の人が賑わっていた。ユウマは物珍しそうに周囲を見回している。

店主は忙しそうにパンを売っていたが、イノリの存在に気づくと笑って手を挙げた。

「いらっしやい、イノリちゃん！ 今日は何にする？」

「いつもの〴〵をお願いします」

「オーケー、いつもの〴〵ね！」

イノリの注文を聞いた店主は2つ返事で頷くと、棚から2つのサンドイッチを取り出した。

1つめは、新鮮な野菜——真っ赤なトマトや歯ごたえのあるレタス、甘い玉ねぎ等をふんだんに使い、ハーブとスパイスで味付けされた鶏肉を挟んだベークルチキンサンドだ。

2つめは、新鮮な果物——マンゴー、バナナ、苺、キウイフルーツに、ホイップクリームと濃厚なカスタード——バニラビーンズが入っている——を使ったフルーツサンドである。

イノリはいつものこの2つのサンドイッチを頼む。前者は食べごたえがあり、十分なボリュームがある。後者は午前中に頑張った自分へのご褒美であり、午後からの活力になるのだ。

店主からベークルチキンサンドとフルーツサンドの包みを受け取り、代金を支払う。ユウマは呆気にとられたようにイノリのサンドイッチを見つめていた。

「隣のお兄ちゃんは何を食べるんだい？」と店主に問われたユウマは、ショーウィンドウに並ぶサンドイッチを一通り眺めているようだった。

「……俺も、彼女と同じものをお願いします」

散々迷った後で、ユウマはぎこちなく注文した。程なくして、店主からベーグルチキンサンドとフルーツサンドを手渡される。

「あ、そうだ。私が払いますよ」

「え？」

「貴方に助けてもらったお礼、何も返してませんから」

精算しようとしたユウマの手を止める。きよとんとこちらを見返した命の恩人は、イノリの言葉を理解しているようには見えなかった。

イノリが代金を払おうとした現場を見て、ようやく合点がいったのだろう。酷く焦った様子で、「待ってください」と引き留められる。

ユウマは割り込むようにして財布から代金を支払った。呆気にとられるイノりを横目に、店主はユウマから代金を受け取った。

「気にしないでください。俺は、当然のことをしただけですから」

ISDFの若きエースは、爽やかな笑みを浮かべて言い切った。何て眩しい笑みなのだろう。どうしてか、謙虚で礼儀正しい好青年の姿が、大きな壁のように思えた。

イノリは暫し代金を握り締めて所在なさげに佇んでいたが、仕方がないので財布にしまう。何とも言えない気分になり、思わず俯いてため息をついた。ユウマは気づいてない。

自販機で飲み物——イノリがミルクティー、ユウマがコーヒー——を購入した後、空いたテーブルへと腰かけた。……向かい合う形で、だ。

「……………」

「どうかしましたか？」

「あ、なんでもないです」

イノリを真正面から見つめて首を傾げたユウマから逃げるようにして、イノリはベーグルチキンサンドの包み紙を外した。そのままの勢いでかぶりつく。

ベーグルのもちもちした食感を堪能する。直後、野菜の甘さとジューシーな鶏肉の油が口の中一杯に広がった。自然と口元が綻ぶ。

「……………」

真正面から視線を感じて、イノリは思わず顔を上げた。視線の主は、イノリを興味深そうに見つめるユウマである。

「どうかしましたか？」

「あ、なんでもありません」

イノリの問いに、ユウマは曖昧にはぐらかした。そのまま、彼もベーグルチキンサンドにかぶりつく。その動作がどこかぎこちないように見えたのは何故だろう。まるで、イノリの食べ方を手本としているみたいだった。

暫くサンドイッチを咀嚼していたユウマだったが、纏う気配が変わった。ぱああ、という擬音がつきそうな勢いで、彼の表情が輝く。どうやら、このサンドイッチは彼のお気に召したらしい。イノリは内心安堵の息を吐いた。

サンドイッチを食べ進めながら、イノリはちらりとユウマの様子を確認する。彼は美味しそうに食べ進めていた。見ていて気持ち良い食べっぷりである。イノリは思わず目を細める。ISDFのエースは、意外と子どもっぽい一面があるらしい。

程なくして、イノリはベーグルチキンサンドを食べ終えた。ミルクティーで口直しをしつつ、次はフルーツサンドの包みを外す。そのまま一口。果汁とクリームの甘さが、じんわりと体に沁み込んでいく。イノリは口元を綻ばせ、ほうと息を吐いた。至福のときである。

イノリより一步遅れて、ユウマはベーグルチキンサンドを食べ終え

た。コーヒード口直しをした後、イノリの真似をするようにしてフルーツサンドへ手を伸ばした。包装を外し、おっかなびっくり気味にかぶりつく。また、彼の表情は一段と明るくなった。

「……美味しい……」

ユウマは噛みしめるようにして呟く。自分の知っている以上のものに出会えた——翡翠の双瞼は、その事実に対する驚きと歓喜で満ちている。つられてイノリも微笑んだ。

「よかった。喜んでもらえて何よりです」

自分たちの間に和やかな空気が漂っている。周りに花の雨が降ってきてそうな雰囲気だ。ああ、本当に楽しい。

飲み物を煽りながら、イノリとユウマはとりとめのない話をする。と言っても、この店のメニューに関する話を中心だったが。

「イノリ」

「? なんですか?」

「先程言っていたお礼の件ですが、 “この店を教えてください” ということで充分ですよ」

ユウマは穏やかに微笑んだ。どうやら、市街地の巡回で外食する機会は多くないらしい。東京中を巡回しているけれど、こういった外食関連の知識は疎いのだとユウマは語る。効率重視のため、携帯食に頼ることが多いそうだ。

「提督の分も購入してきます」と言って、彼は再び車へ向かった。店主と言葉を交わしたユウマは、2種類のサンドイッチを購入した。1つめは、先程食べたベーグルチキンサンドだった。2つめは、砂糖をまぶしたあんドーナッツである。

そういえば、先程ミカゲが「ヨリトモは洋風の甘味をあまり好まな

い」と言っていたか。あんこもつぶあんが好みらしい。確か、あの店のあんドーナッツはつぶあんとしあんのと2種類を取り扱っていた。戦利品を抱えたユウマが戻ってきた。イノリも椅子から立ち上がり、ミカゲとヨリトモらの方へと向かう。ユイを含んだ3人は、先程と同じ休憩スペースに座っていた。

気のせいかな、ミカゲから物々しい気配が漂っているように思う。対して、ヨリトモとユイは脱力したように肩を落とすつつ、困ったように顔を見合わせている。

「提督。イノリが美味しいパン屋を紹介してくれたんです。提督もいかがですか？」

「あ、ああ。貰おう」

いきなり話しかけられたためか、ヨリトモが動揺した。しかし、次の瞬間には普段通りの表情に戻る。先程の表情は、イノリの見間違いだっただろうか。

ヨリトモはユウマからベークルサンドとドーナッツを受け取る。まずは主食——ベークルサンドにかぶりついた。暫し咀嚼していたISDFの提督は、感心したように頷いた。隣にいたミカゲが「お」と声を漏らす。

次の瞬間、ヨリトモはつらつらとベークルサンドの批評を始める。評価基準は栄養価にウェイトを置いているようだ。その様は、坊主の読経と言っても過言ではない。要約して結論を言うと、ベークルチキンサンドは彼のお眼鏡に叶ったらしい。

逆に、評価基準が味に傾いたのがあんドーナッツ(つぶあん)であった。これも要約すると、「甘さ控えめのつぶあんと砂糖の甘さが合わさり、丁度いい」らしい。しかし、大量摂取は体に悪いという結論が出た。逆転ホームランで負けた感じだ。

そんなヨリトモの様子を見たユイとユウマが目丸くする。見られていたことに気づいたヨリトモは、何とも言い難そうな表情を浮かべた。



対して、ミカゲは口元を抑えて嘔き出した。肩が小さく震えているあたり、笑いを堪えている様子だ。

「昔からお前、変わらないのなあ」

結局笑いを堪えられなかったのだろう。ミカゲは楽しそうに呟いた。



「なあ、トウゴくん」

「……何でしょう?」

ミカゲに名前を呼ばれたヨリトモは、たい焼きを飲み込んでから返事を返した。ミカゲの方に向き直る際、ヨリトモはイノリたちから視線を逸らす形となる。ミカゲは教え子が見ていたと思しき場所を一見した。

移動販売車の近辺にある食事スペースで、イノリとユウマは昼食を食べ進めている。幸せそうな表情でベーグルチキンサンドを食べるイノリと、目を輝かせてベーグルチキンサンドを食べ進めるユウマの姿があった。

「旧ムラクモ13班は、様々な方面で、常に矢面に立たされてきたんだ」

いきなり投げつけられた言葉に対し、どう返事をすればいいのか分からないのだろう。ヨリトモは怪訝そうに眉をひそめた。

『ミカゲくん?』

「守るべき人類から『お前等が脅威だ』と難癖をつけられたり、背後から足を引っ張られたり、あらぬ嫌疑をかけられたこともある」

首を傾げたユイを敢えて無視して、ミカゲは言葉を続けた。脳裏に浮かぶのは、2021年の国会議事堂で行われた証人尋問だ。反ムラクモ派の議員たちによって、あわや吊し上げにされそうになったことは今でも覚えている。

竜戦役の後も、相変わらず反ムラクモ派議員は自分たちに攻撃を仕掛けてきた。予算問題から前総長・ナツメに関することまで多岐にわたる。その度、親ムラクモ派議員が助け舟を出してくれた。

その矢面に立っていたフジタ議員とアリアケ議員に何度助けられたことだろう。堂島凜<sup>リン</sup>を筆頭とした自衛隊関係者が証人となってサポートしてくれたり、ブチ切れたキリノが議員を論破したこともあったか。

「だから、俺たちに対する畏怖とか、敵意のこもった眼差しには敏感なわけだよ。他者が他者へ向ける感情も、うっすらとだが察する自信はあるぜ？」

「っ!？」

ミカゲは一気に間合いを詰めた。間合いと言っても物理的な方面ではなく、心理的な方面である。言葉と態度という名の刃を、ヨリトモの心に突きつける。

ヨリトモは一瞬たじろいだが、ギリギリで踏み留まろうとしていた。険しい顔を崩さぬまま、口を真一文字に結ぶ。職務に忠実な模範的軍人だ。

答えないということは、ヨリトモが感じている。『他者への畏怖』は、ISDFの機密事項に関わることなのだろう。

「トウゴ」

鋭く研ぎ澄ませた眼差しを教え子へ向ける。妙な行動をすれば、ミカゲは容赦なく刃を振るう心づもりでいた。と言っても、言葉と精神

的な手段として、だが。

もう一度、彼の名を紡ぐ。自然と声のトーンが下がった。ミカゲの声に込められた感情を理解したのだろう。ヨリトモは苦い表情を浮かべて視線を逸らした。

彼の畏怖が何に起因するかは察しがついていた。直属部下——ユウマ関連であり、畏怖の対象者はミカゲの孫であるイノリだ。眼差しを見ていれば、それくらいは分かる。

元々、頼友東吾ヨリトモトウゴという人間は嘘がつけない性質タチであった。

眼差しで語るタイプの人間であるともいう。同時にそれは、口下手の弊害であるとも言えた。

「……………」

「……………ふーん」

ヨリトモは口を割らない。どうしても言えないのだと、彼の瞳は悲鳴を上げている。成程、この話題を突き詰めることは不可能らしい。ミカゲは話題を変えることにした。

「お前の部下。あの優男さあ」

「ユウマがどうしたんですか?」

「なんかあいつ、アンバランスだよなあ。ヒトとして何かが未熟というか、外見に合わず情緒が未発達というか、歪な感じがする」

「方向性は違うが、“昔の俺”みたいだ」なんて言いながら、ミカゲは探るような眼差しでユウマを見つめる。視界の端で、ヨリトモが弾かれたようにこちらを見た。

蒔いた餌に食いついてくれたらしい。ミカゲは笑みを深くしてヨリトモの方に向き直った。ここでようやく、自分が墓穴を掘ったことに気づいたようだ。

ヨリトモは、嘗てミカゲが“何のために”生きていたかを知っている。だから、ミカゲの言葉が何を意味しているかも分かっているはず

だ。ミカゲはヨリトモへ視線を向ける。

「……ユウマは……あいつは、『特別な出自』なんです」

幾何かの沈黙の後、ヨリトモは重々しく息を吐きだした。

イノリがフルーツサンドを食べ始めたのが視界の端にちらつく。

『『特別な出自』？』

「詳しいことは言えません。機密事項に抵触してしまいますから」

首を傾げたユイに対しても、ヨリトモは口を割らなかつた。恩師や初恋の相手よりも機密事項漏洩を防ぐことを選んだ教え子は、文字通り模範的軍人だと言えた。

……最も、大なり小なり『抵触しない程度の情報』を零すというのは、ミカゲの追及に観念したようなものだが。ヨリトモは険しい面持ちのまま言葉を紡ぐ。

「ただ……あいつが生きてきた年月の中で、あいつに『人間らしさ』を求められたことはありませんでした。むしろ、『人間性は切り捨てるべきもの』だとされてきたんです。『役目』を果たすために」

『そんな！』『人間性が必要ない』って……』

「……成程ねえ。方向性は違えど、本質は『昔の俺』と同じ訳か」

納得したミカゲが零した言葉に、ユイがすべてを察してヨリトモを見返す。董色の瞳は驚愕と悲しみが滲んでいた。

ミカゲの伴侶は、ミカゲの出自を知り、当人以上にそのことを悲しんでくれた人である。『ミカゲの焼き直し』と言えるような存在を目の当たりにして、胸を痛めないわけがない。

ヨリトモがイノリを脅威と認識する理由は、『如月ユウマが『渡来ミカゲの焼き直し』である』ことに起因している。彼が口にできない機密事項が根底にあることは明らかだ。

『英雄の系譜は、揃いも揃って私の邪魔をするのか』

頭の中で誰かの声があった。声色からして壮年の男性。吐き捨てるような響きを伴う声だった。その声に聞き覚えがあるような気がして、ミカゲは思い出そうと思案する。

上等なスーツを身に纏い、ふてぶてしい態度を崩さなかった食わせ者。残忍な眼光は、自分の前に立ちはだかる相手をあの手この手で排除してきたという自信があった。

自分が絶対的な正義なのだと、信じて疑わない眼差し。野心を燃やす男の背中を、ミカゲは知っていたはずだ。——なのに、肝心の顔が思い出せない。

シルクハットを被ったウサギの姿が脳裏をよぎる。無茶に無茶を重ねたミカゲの魂は、変なところで記憶を擦切らしてしまったようだ。しかも、肝心なところで。

苛立たしさを誤魔化すようにして、ミカゲはクレープにかぶりついた。濃厚なマスカルポーネとやや渋めのコーヒーパウダーが絶妙に合わさる。自然と頬が緩んだ。

丁度、イノリとユウマはフルーツサンドを食べ終わったらしい。2人は楽しそうに談笑している。いつの間に、あの優男は孫と仲良くなったのか。イライラしてきた。

「俺は、あいつの方が脅威だと思うね」

「ユウマがですか？」

「俺の孫とあんなに仲良くなって……しかも近い！ イノリを助けてくれたことには感謝するけど、結局は赤の他人だろ。なのに近いんだ、近いんだよ。赤の他人のくせに、赤の他人のくせに!!」

彼氏、結婚、嫁入り……ああ、考えるだけで頭が痛くなってきた。ミカゲの発言を聞いて戦々恐々した様子のヨリトモだったが、続きを聞いた途端、何とも言い難そうな顔をして脱力した。

「なんだ、そつちか……」

『ごめんねトウゴくん』

「いえ、大丈夫です」

2人がそんな会話をしていたのと同じタイミングで、ユウマが戦利品——先程自分が食べていたベーグルチキンサンドと、店主との話し合いの結果購入した揚げパンを抱えてヨリトモの元へとやって来た。別な方向に意識を向けていたためか、ユウマに話しかけられたことで目を白黒させる。動揺を押し殺したヨリトモは、部下からサンドイッチと揚げパン——否、つぶあんのおんどーナッツを受け取った。



「うううう……。やっと、やっとノルマが終わったのです……」

チカがそう言ったとき、壁掛け時計は既に深夜を回っていた。最悪なことに、腹の虫が盛大に鳴き出す。

こんな時間帯だと、営業しているのはコンビニくらいなものだろう。しかし、4徹とオーバーワークによる疲労が振り切れてしまったチカは、最寄りのコンビニに行く力も残されていない。

相方のリツカはバリバリ仕事をこなしている。彼女の場合は今日で8徹めだ。「体を休める時間は5分あれば充分」と言うが、最低でも休息は30分、睡眠時間は6時間必要だと思う。

最も、労働基準法も生理的欲求も、ブラック企業のノルマの前では何の意味もなくなってしまうのだが。

……考えても意味がない。自分の部屋に戻り、何かを胃に入れなければ——チカがそう思ったとき、ぐらりと体が傾いた。

世界がぐるぐる回っているような錯覚に陥る。もう、立っていることすらできそうにない。そのまま床に倒れこむ。

「大丈夫か!？」

チカの体は、床に倒れこむ前に誰かに支えられた。何事かと見上げれば、黒いマスクをした青年の顔があった。雪を思わせるような白銀の髪に、切羽詰ったように揺れる紫苑の瞳。数日前にアリーによつてスカウトされた13班員の1人、風間ソウセイである。

技術セクションや研究セクションに勤める社員や、残業による泊まり込みが確定している社員以外、この時間帯に起きていることは珍しい。Code:VFDが始まったとはいえ、現在はISDFの対応待ちだ。その間、彼らは準備期間が与えられていた。

「あ、ありがとうございます……」

ソウセイに助け起こされたチカは、ペこりと頭を下げた。立ち上がるうと手に力を入れたが、動けない。

普段は「なんとか自室に転がり込む」くらいの力は残されているはずなのだが、今回に限ってはそれすら難しいようだ。

立ち上がることにすらまならないチカの様子に、ソウセイの瞳が不安そうに揺れる。

「顔色が悪いぞ。何かあったのか?」

「大したことじゃないのです。デスマーチで4徹して、睡眠不足なだけなのです……」

「充分大したことじゃないか!」

チカの答えを聞いたソウセイの表情が変わった。彼は「しっかり捕まってる」と言い、勢いよくチカを抱きかかえた。

この体勢は、俗にいう「お姫様抱っこ」である。一般女性の多くが夢見る、御伽話のようなシチュエーションだ。

チカのキャパシティは即刻オーバーである。頭が真っ白になるとはこういうことを言うのか、と、辛うじて動く理性がそう理解した。

ソウセイが駆け出そうとした丁度そのとき、チカの腹の虫が鳴いた。

心なしか、先程よりも音が派手に響いた気がする。結果、ソウセイは反射的に足を止め、チカの方を見た。

「……あと、まともにご飯も食べていなくて……今日は、昼食と夕食を抜いて働いてたのです」

気恥ずかしさと気まずさから、チカはソウセイから視線を逸らした。お姫様抱っこの体勢なので、ソウセイの視線が突き刺さってくるのを感じ取る。

体の温度が急上昇する。間違いなく、チカの顔は真っ赤だろう。穴があつたら入りたい。堪らなくなつて、チカは顔を手で覆つた。

一緒に仕事をするノーデンスの花形——13班のメンバーに、こんな恥ずかしい姿を見られてしまったのだから当然だろう。

沈黙が痛い。ソウセイの眼差しが真正面から注がれるため、辛い。チカの手の平では、それを遮る力はなかった。紙以下の装甲である。

「ふむ」と声がした。チカは恐る恐る手を離し、ソウセイの様子を伺う。彼は何かを思案している様子だったが、決意したように頷いた。

「チカ。俺の部屋に行こう」

「……………えっ」

\*\*\*

チカの頭の中は大パニックである。ソウセイの自室にお姫様抱っこで運ばれ、部屋にあるソファに降ろされる。きちんとした体勢で座らせられた。

「少し待っていてくれ」と言い残し、彼は備え付けのキッチンへ向かった。冷蔵庫から食材を取り出し、調理する。ソウセイの手つきは鮮やかだった。



普段から調理をしているのだろう。冷徹で不愛想な面持ちではあるが、器用で家庭的な一面もあるようだ。ギャップ萌えという単語が脳裏をかすめる。

調理をするソウセイの真剣な面持ちに、チカの視線は釘付けだった。魅せられたかのように、目を離すことができない。鼻をくすぐる、美味しそうな香りが漂ってきた。

チカの腹の虫が鳴き出す。唾液がじわじわ滲んできた。口から垂れ流すわけにはいかないので、何度も何度も飲み下す。その度、ごくんと音が鮮明に響いた。

ソウセイは味見をするため、マスクを取った。チカは思わず目を見張る。彼の左頬に——薄らとだが——焼けただれたような跡が浮かんでいたためだ。

「あ……」

「出汗は極限まで薄く——……ん？」

チカの異変に気づいたのか、味見をしていたソウセイが顔を上げる。彼は暫し目を瞬かせていたのだが、バツが悪そうに視線を逸らした。

「ああ、すまない。気持ち悪いか。……見苦しいかもしれんが、味見が終わるまで我慢してくれ」

「そんなことないのです。マスク、外したままで大丈夫なのです」

どこか傷ついたように笑うソウセイに、チカははつきりと言い返した。確かに驚きはしたけれど、彼の傷跡を気持ち悪いと思ったわけではない。沈黙がこの場を支配する。

一步遅れてチカの言葉を理解したソウセイは、安堵したように口元を綻ばせた。花が咲くような、柔らかな微笑み。左頬の傷など気にならないくらい、魅せられた。

彼はすぐに真剣な面持ちに戻ると、調理を再開した。口元が見える

と、ソウセイの表情はころころ変わるの分かる。 // 冷徹で不愛想な青年” という第一印象が嘘みたいだ。

マスクの下では、こんな風になっているのか——ほう、と、知らず知らずのうちに息が零れる。

程なくして、ソウセイの料理は出来上がったらしい。満足げに微笑んだ青年は、器に料理を盛りつけた。

「済まない。和食しか作れなくてな」

「おお……」

ソウセイが作ったのは、お茶漬けと飲み物である。お茶漬けには鮭の切り身が盛り付けられており、かすかに鰹の香りが漂ってきた。出汁が云々と言っていたのはこのためだろう。飲み物からは、ほのかに糰とシナモンの香りが漂う。どちらも美味しそうだ。

食欲に従い、チカは蓮華でお茶漬けを掬う。そのまま、一口。鮭の塩味と鰹出汁の旨味がチカの口いっぱいに広がった。噛みしめる度に広がる味が——作り手の優しさが、じわじわと体に沁み込んでいく。

ささくれていた心が潤うような感覚。人の優しさをはっきりと感じ取ったのは、チカにとって文字通り”初めて”のことだった。入れ違いで、心の奥底から熱いものが湧き上がってくる。気づいたときには、視界がじわりと滲んでいた。

「お、おい!! 泣く程まじかったか!!」

「ち、違うのです。……お、美味しくて……美味しくて……! こんなに美味しいご飯を食べたの、初めてなのです……!!」

口に出した途端、チカの目から涙が溢れだした。堰を切ったように涙がこぼれる。

「こんなに美味しいご飯を食べれるなんて……そんな機会なんて、」

一生〃無いと思つてたので、嬉しくて……」  
「……大げさだな」

服の袖で涙を拭うチカを見つめていたソウセイは、苦笑しながらもハンカチを差し出してくれた。そのまま、飲み物を勧める。彼に従い、チカは飲み物に口を付けた。

甘酒と豆乳の甘さの中に、シナモンのアクセントが効いている。飲み物のはずなのだが、飲みごたえと言うか、食べごたえがあった。作り手同様、優しい味がする。

チカは無心で料理を食べ進める。拭っても拭っても涙は溢れてきて止まらない。ずっとこの味を噛みしめていたら、どんなにいいだろう。

(ずっと、ずっと、〃このまま〃でいられたら――)

チカの願いは空しく、器もグラスもあつという間に空っぽになった。「ごちそうさま」を言うのが惜しい。でも、感謝の言葉を伝えないわけにはいかなかった。

手を合わせて「ごちそうさま」と挨拶すれば、ソウセイは柔らかかに笑った。「お粗末さま」と紡ぐテノールボイスが心地よい。なんだか眠くなってしまうようだ。

——いや、実際に、眠い。自室に戻る体力も回復したし、これでもう大丈夫だ。

「ありがとうございます。本当に美味しかったです」

「そうか。……時間が空いたら、また明日も何か作るか？」

「え」

ソウセイの申し出に、チカは一瞬凍り付いた。だって、あまりにも、チカにとって都合が良すぎるのだ。驚くのも当然である。

このチャンスを逃してはならないと本能が叫ぶ。新しく紡がれる

“このままの日常”が欲しい。また、あの優しい味を噛みしめたい。チカは暫し躊躇った後、首が千切れるんじゃないかという勢いで頷き返した。それを見たソウセイが表情を綻ばせる。

「期待してくれ。それじゃあ、また明日」

「はい。それじゃあ、また明日」

ソウセイは何の気もなしに言ったのだろう。当たり前の光景が、当たり前に続いていくのだと信じて疑わない眼差しが向けられる。

明日なんて永遠に來なければいいのにと／早く明日が来ればいいのにと願ったのは、チカにとって初めてのことであった。

Chapter 2 深層／硝子色の欠片を集めて《ヒ

ガンバナ：あきらめ、情熱》

始まる前から踊り狂う

——その日は、どしゃ降りの雨が降っていた。

梅雨前線の真ただ中、東京の天気は連日のように雨が降っている。

今日は一段と酷かった。——まるで、空が哭いているみたいで。

「やめろっ……い！ やめろよ！ ミーコに何するんだよ……ツ!!」

傘をさして河原を歩いていたミカゲが足を止めたのは、誰かの声が聞こえたからだ。視界の端に目を惹くものがあつたからだ。

子どもたちがぐるりと何かを取り囲んでいる。何かを叩く音が断続的に響く中、紛れるようにして呻き声があった。

聞き耳を立てる。呻いているのは少年だ。少年の声に混じって、猫のか細い鳴き声が聞こえたような気がする。

「ミーコを……ミーコをいじめるなあっ……!!」

「いじめる？ トウゴくんは人聞きが悪いですねえ」

「俺たち、トウゴくんのオトモダチと遊んでるだけだよー？」

悲痛な少年の叫びを、複数の声が嘲笑う。鈍い音と少年の呻き声。少年はコンクリートに尻餅をつきながらも、何かに向かって必死に手を差し伸べた。だが、同世代の子どもたちに羽交い絞めにされる。少年の手は無情にも空を切った。

子どもたちの輪は少年から猫に中心を移す。子どもたちは楽しそうに笑いながら、猫に手を伸ばした。悲痛な——けれども弱々しい猫の鳴き声が響いた。金切り声をあげる少年とは対照的に、猫の声はどんどん弱々しくなっていく。

そうして、ついに猫の鳴き声が途切れた。反応がなくなった猫を、子どもたちは面白半分で弄る。それを目の当たりにした少年は目を見開いた。「ミーコ！」と叫んだ彼の手は空を切る。

「おい、クソガキども。そこで何やってるんだ!？」

「うわあ！ 逃げろ!!」

ミカゲの姿を視認した子どもたちは、蜘蛛の子を散らすようにして逃げていく。

残されたのは、体中にあぎを作った少年と、ぼろぼろの三毛猫だ。

少年はミカゲなど気にも留めず、猫の元へと駆け寄る。

「ミーコ、ミーコ！」

少年は猫の名前を呼びながら、必死に猫を揺さぶる。猫はぐったりしたまま、ピクリとも動かない。少年の顔がどんどん青ざめていく。この現実を信じたくないと叫ぶかのように。

ミカゲの目から見ても、猫はもう手遅れであった。竜戦役の最中、家族や恋人、友人を失った避難民の背中が、少年のそれと重なる。

暫くして、少年は猫の死を理解してしまったのだろう。彼はボロボロ涙をこぼしながら、猫の亡骸を抱き上げた。大切なものを抱え上げるかのように。

少年は無言のまま、猫の亡骸を抱えたきり動かない。雨の音に紛れて、少年の声なき悲鳴が響き渡る。その姿が、いつかの自分と重なった。

竜戦役を駆け抜ける中で、ミカゲは見知った人々の死を何度も目の当たりにしてきた。自分たちを「希望だ」と言って、死地に赴くその背中を。

泣く資格なんてない。死を悼む暇もない。泣きたければ、死を悼みなければ、何としてでも自分たちが勝たなければならなかった。生き残らなければならなかった。

「……風邪ひくぞ、少年」

ミカゲは少年の元へ歩み寄り、傘を差し出した。  
少年は猫を抱えたまま微動だにしない。

「傷の手当もしなきゃならん。キミが病気になったり、怪我したままだと、その子を弔ってやれる奴が居なくなるだろ」

「！」

「家ウチに来なさい。……大丈夫、俺はキミの味方だから」

ミカゲの言葉を聞いた少年は顔を上げた。瞳一杯に涙を溜めた彼は、驚いたように目を瞬かせる。

幾何かの沈黙の後、少年はおずおずとミカゲの方に歩み寄ってきた。ミカゲの言葉を信じてくれたらしい。

2人は無言で歩き出す。雨脚は激しさを増してきた。まるで、少年の嘆きを現すかのように。

「——強くなりたい」

ミカゲの家へ向かう道すがら、少年はぼつりと呟いた。

「もう、こんな思いをする命がなくていいように。俺自身も、こんな思いをしなくていいように」

俯き加減だった顔が上がる。その横顔は、嘗ての13班員——シラユキを守るために奮戦していたヨツミを連想させた。黒の瞳には、揺らがぬ意志が宿っている。

脳裏に浮かんだのは、2020年の池袋。自衛隊とアオイを守ろうとして命を散らした、頼れる兄貴分／上官だ。ミカゲの手は、自然と胸元のリボンを握り締めていた。

「今度こそ、大切な存在ものを守れるように、強くなりたい」

拭えない過去、消せない後悔。そうして、痛みを知ったゆえの強い決意。少年の奥底で揺れるのは、失われた命を悼む優しい心だ。親愛なる総長の眼差しとよく似ている。

人の上に立つべき人間は、この少年のように「痛みを知っている」人間だとミカゲは思う。その意志の強さに、揺らぐことのないその眼差しに、ミカゲは光を見つけた。

彼のような人間がいるならば、自分が居なくなつた世界でも大丈夫だ。漠然と——けれど絶対的な確証が、ミカゲを突き動かす。気づいたら、口について言葉が出ていた。

「少年」

「？」

「——俺でよければ、教えてやる。『大切な存在もの』の守り方」

ミカゲの言葉を聞いた少年は目を剥いた。ミカゲの申し出が意外だったのか、パチパチと目を瞬かせる。

しかし、それも一瞬のこと。少年はミカゲをまっすぐに見返して、躊躇うことなく頷き返した。

13班の系譜は、世代や血筋など関係なく、次世代の担い手へと受け継がれていく。何と素晴らしいことだろう。

いつか、彼の「何かを守るために強くなりたい」という想いが、数多の困難を打ち砕いていく。いつの日か、未来を切り開くための力になる——そんな予感があった。

「少年。名前は？」

「——東吾トウゴ」

彼の声は、とても小さな声だった。



けれど、豪雨の中でも、はつきりと響く。

「頼友東吾」  
ヨリトモトウゴ

それが、渡来ミカゲと少年——頼友東吾との出会いであった。

\*\*\*

——その日は、鰯雲が広がる秋晴れであった。

庭にはコスモスの花が咲いている。縁側から望む景色は、平穩という言葉を具現化したようなものだった。

「俺、しほうこう 暁学園に合格しました」

少年だった頃の面影を僅かに残しながらも、逞しい青年に成長した教え子——ヨリトモは、照れたようにはにかんだ。その手には、志望校の合格通知が握られている。成績開示も行ったようで、通知と一緒に成績も記載されていた。

どの成績も平均より一回り上だが、中でも突出していたのは実技の近接戦闘だ。特に、ヨリトモの十八番——ミカゲが目をつけた彼の才能——であった剣術は文句無しである。二刀流も一刀流も優れているとコメントされていた。

「おめでとう、トウゴくん」

「ありがとうございます、ユイさん」

ユイに褒められたヨリトモは、嬉しそうに表情を綻ばせる。そんな教え子の様子を見た妻は、「今日はお祝いね」と言いながら台所へと引っ込んでいった。

憧れの女性ひとに賛辞の言葉を貰った——だらしなく緩んだヨリトモの表情に視線を向ければ、彼はミカゲの言わんとしたことを察したら

しい。そつと視線を逸らした。

大人げない嫉妬と言うのは重々理解している。ただ、ミカゲの場合、そういう情緒が出来上がった時期が遅かった。出来上がったと同時に黒呪病が発症し、現在に至る。

今、どうしてか、「男の嫉妬は醜いものだ」と笑っていた天敵／ヒイナの言葉が脳裏をよぎった。趣味で使うメモ帳を片手に、恍惚とした表情を浮かべていたことは記憶に新しい。閑話休題。

「入学祝の方は後で贈る。それとは別に、餞別があるんだ」

「えっ？」

「ちよつと待ってろ」

ミカゲはそう言うなり、胸元に結んでいた紫のリボンを外した。それを真ん中から二つに折り、鋏で切る。切った端を針と糸で縫い、端の方に蜻蛉玉を結び付けた。明るい空色の蜻蛉玉が、陽光を受けて輝く。

それを、予め購入していたお守りに結び付けて完成である。因みに、お守りは近所の神社で購入したもので、無病息災を祈るものだ。こちらの方には何の変哲もない。ヨリトモは不思議そうな面持ちで紫のリボンを見つめていた。

「あの、先生。このリボンは……」

「お守りだよ。仲間や俺たちを守って逝った、俺の上官の形見」

「えっ!？」

お守りに結ばれた布切れの正体を知り、ヨリトモは目に見えたように狼狽する。なんだか微笑ましくなって、ミカゲはくすりと笑った。

(ガトウも、こんな気持ちだったんだろうなあ)

2020年の竜戦役で散った男——ガトウの背中を思い返す。ム

ラクモの戦闘服を着た、厳つい顔の偉丈夫。厳しくも優しい眼差しでミカゲを見守り、気にかけてきた世話好きな男だった。

このリボンは、彼が身に着けていた紫のスカーフを細分化したものだ。彼の死を悼む気持ちと、死して魂だけになっても助けてくれたことに対する恩義であり、彼の生き様を忘れたくないという自分たちの願いだっただ。

ガトウ本人がこの場にいたら、「人のスカーフを細分化しやがって」と文句の1つや2つを投げつけてきただろう。それがミカゲたちの覚悟だと主張すれば、困ったような笑みを浮かべたに違いない。

「そ、そんな……悪いですよ。先生にとって、大事なものなんでしょう？」

「大事なものだからだよ。アイツの生き様にあやかかって、な。——お前が、お前にとっての“大切な存在”を守れるように。軍人として、あるいは人としての使命や生を全うできるように」

ミカゲの言葉を聞いたヨリトモは、おずおずとお守りを受け取る。無病息災のお守りの脇に結ばれた紫のリボンが揺れた。空色の蜻蛉玉が煌めく。

飾りとして空色の蜻蛉玉を使ったのは、ガトウの他にもう1人、あやかりたい相手が居たためだ。最も、彼に関するものは殆ど残っていない。

だから、色で代用した。鮮烈な空色を、覚えている。

天下無敵、絶対的な“正義の味方”。ミカゲが惹かれ、妬み、憎み、敬愛し、親しんだ友の生き様が浮かんで消えていく。

こちらにも本人が生きていたら「うっわ、気持ち悪いな。ストーカーかよ」と軽口の1つや2つが飛んできそうだった。

「頑張れよ、トウゴ」

「は……」

ミカゲはヨリトモの肩を叩く。ヨリトモは真つ直ぐこちらを見返して、頷いた。お守りを大切そうに握り締める。

丁度そのタイミングで、あるかなしかの風が吹き抜けた。紫のリボンと空色の蜻蛉玉が、太陽の光を反射して煌めいていた。



「第5真竜フォーマルハウトの検体、確かに受け取ったわよ」

淡く輝く物体が入れられたカプセルを確認しながら、ジュリエッタは頷いた。

しかし、藤色の瞳は剣呑な色を湛えている。ISDFに対する疑念と敵意が滲んでいた。

「でも、こうあつさりところちの要求を飲むなんて不気味すぎるわ。……何か裏があるんじゃないでしょうね?」

「ふん。来るべき竜災害に備えるなら、選択肢は多い方がいい。貴様らが何を考えているかは知らんが、いざとなったらISDFが叩き伏せるのみ」

「“選択肢は多い方がいい”……ねえ。そう言いながら、選択肢を示した人間ごと”葬り去ったのはどこの組織だったかしら?”」

「……。それに、こちらも相応の技術を提供してもらおうのだ。そう、おかしな話でもなからう」

ノーデンス代表のジュリエッタと、ISDF代表のヨリトモが腹の探り合いを繰り返している。ミカゲはその様子を眺めて、何とも言えない気持ちになっていた。

優しさだけでは何かを変えることはできない。けれど、優しさを忘れてしまえば、何も成すことができなくなる。ヨリトモは今でも、優しさを失ってはいない。

出世すればするほど、舌戦で相手をねじ伏せたり、攻撃を躲したり

する必要が出てくる。提督に昇り詰める間、ヨリトモはそちらの方も磨かざるを得なかったようだ。

睨み合う2人を尻目に、ノーデンス社長のアリーは満面の笑み浮かべている。「あと4つ☆」と言いながら、彼女はフォーマルハウトの検体を抱えた。

「……しかし、『俺の教え子とヨツミンが目をかけてた研究者が、俺たちの目の前でいがみ合っている』のを見ると……こう、悪い方で何とも言えない気持ちになるな」

『そうだな。だが、立场上仕方あるまい。非常に残念なことなのだが……』

ミカゲとヨツミは顔を見合わせてため息をついた。人の縁はどこでどう繋がるか、分かったものではない。自分と所縁ある者同士が手を取り合う場合もあれば、憎しみ合い殺し合うケースだってよくある話である。

しかし、生きている——『生きかえって』と言った方が正しいのかもしれない——間に、自分と所縁ある者同士が敵意満々で睨み合っている光景を目の当たりにするだなんて、誰が予想できただろうか。できれば見ないままで居たかった。

こういふときだけは「死んでいた方が良かったかな」なんて思う。「死は逃避である」とはあながち間違いではない。死ねば、もう何も見なくて済むためだ。都合の悪い現実も、所縁ある者同士の骨肉の争いも。その代わり、二度と何もできなくなってしまうのだが。閑話休題。

「これで、ISDFとノーデンスは事実上の共闘関係を結んだことになる」

『官民一体となった作戦行動になるわけだな。実にいい知らせじゃないか』

「だな。思惑は何であれ、人類同士で足の引っ張り合いされるよりマ

シだろ。前線部隊同士が仲良くなれりやあ、TOPが頼りないオツサンだろうが利権大好き野郎だろうが何とかなるってこった」

『实例は自衛隊とSECT11か。イヌズカ総理とデイビット首相だな』

「作戦の要は、前線部隊同士の絆がモノを言う。中間管理職、あるいは前線部隊のまとめ役に託すでしょうか。できることをしながら、な」

2020年代の国のTOPを思い出して、ミカゲとヨツミは苦笑する。視線の先には、腹の探り合いを続けるジュリエッタとヨリトモ、そんな上司たちを見て困惑するイノリたちとユウマの姿があった。

現代の東京、およびISDF極東支部総司令・アクツと司令部の連中は、デイビット気質の人間のみで固められている。しかも、構成人員はアクツのイエスマンたちだ。

彼に異を唱えた人間は、不慮の事故や不幸な事件に巻き込まれ、軒並み政治生命を絶たれている。職業によっては、仕事を続けられなくなったり、社会的な死を迎えた人間もいた。

上層部は文字通り掃き溜め状態でありながらも、汚職問題よりISDFの活躍がクローズアップされるのは、現場で救助活動や支援活動、治安維持を行う前線部隊のおかげであろう。

官僚たちは戦闘関連部署を動かす権限を持っているが、実際の戦場で部隊を率いるのは、現場に赴いた中間管理職だ。その相手と信頼を築ければ、万が一、協力者側の上層部が暴走してもダメージを減らすことができる。それは、自分の組織のトップが”に置き換えることも可能だ。

実際、2020年代前半の内閣は後世から「ムラクモに頼りっぱなしの内閣」という総評を頂いた。ムラクモ総長・日傘ナツメが暴走したときも、自衛隊やSKYの協力によってどうにか立て直すことができた。SECT11の面々は、上司に命令違反してでも約束——マリナから手を引く——を守ってくれた。

『まあ、ノーデンスにはトマリくんがいるからな。技術力もそうだが、

人類のことを本気で考えている優しい男は、キリノ総長やトマリくんぐらいなものだ』

「ISDFにはトウゴくんがいるからな。隊員から慕われるカリスマ性、任務遂行能力、良識的な視点を兼ね備えた男は、あいつくらいなものさ」

ヨツミとミカゲの言葉が綺麗に重なる。そこで、2人は顔を見合わせた。

無言のまま、暫し互いの言葉の意味を考えた。意味を理解して、ミカゲは眉間に皺を寄せる。ヨツミもだ。

『いや、トマリくんだろ』

「いや、トウゴくんだろ」

言葉が綺麗に重なった。2人は睨み合う。

『いや、トマリくんだった』

「いや、トウゴくんだった」

言葉が綺麗に重なった。2人は睨み合う。

「俺、トウゴくんのいいところ、100個言えるぞ」

『100個程度で凶に乗られても困るな。私はトマリくんのいいところ、200個言えるぞ』

「じゃあ俺300個」

『ならば私は400個だ』

「やめようぜ。個数だけ言われても説得力ないな。ここは実際に挙げ連ねてみようか」

『名案だ。ならば……!!』

勢いに任せ、ミカゲとヨツミは口火を切った。ミカゲはヨリトモ

の、ヨツミはジュリエッタのいいところを次々と挙げ連ねていく。

負けず嫌い同士が議論をすると、際限なくヒートアップするものだ。ミカゲとヨツミの声は次第に大きくなり、荒々しいものとなる。

もう少して取っ組み合いに発展するのではなからうかという状況になったとき。

「すみません、先生。やめてください」

「すみません、博士。やめてください」

『ミカゲくん、ストップ』

『ヨツミ、もうやめて』

「おじいちゃん、ヨリトモさん困ってるよ」

「おじいちゃん、いい加減にして」

「すまん」

『すまん』

耳を真っ赤にして恥ずか死ぬ寸前な教え子と、可哀想なものを見るような目でストップをかけてきた伴侶と孫たちによって、議論は中断に追い込まれた。

\*\*\*

ミカゲとヨツミの褒め殺し合戦がひと段落したのを確認した少年——真瀬ブレイチが、「ところで」と切り出した。彼の眼差しは、IS DF側の代表者／ヨリトモに向けられている。

少年からジト目で見られるという事態に、ヨリトモは眉間の皺を深くした。自分の娘に対しては子煩悩だった教え子だが、一般的な子ども扱いはどうだっただろう。

……いや、そもそも、真瀬ブレイチという少年が“一般的な子ども”にカテゴライズされる／できる存在かどうか。ミカゲはその答えをよく知っていた。閑話休題。



「ナガミミ様から聞いたんだけど、ナガミミ様のことを着ぐるみだのAI搭載ロボットだのと呼んだんだって？　——この無礼者が。ふざけるのも大概にしなよ」

「上司が上司だから部下も部下なの？」と締めくくったブレイチの目に光は無い。ヨリトモの名誉にかけて言うが、ヨリトモは真面目に徹な男であった。

故に、ナガミミに対して着ぐるみ疑惑を持ったのは、真面目に分析した結果である。ユウマも上司に倣って分析したからこそ、AI搭載ロボットと思っただろう。

「ナガミミ様は着ぐるみでもないしロボットでもない。ナガミミ様はナガミミ様なんだ。これ以上変なことを言うんだったら手打ちにしてやる。その立派な髭を筆って、禿げ散らかした頭に植毛してやろうか!？」

「ちよつと待て！　俺は禿げている訳ではない！　この髪型はスキンヘッドと言っただな……」

「でも、頭に髪の毛生えてない」んでしよう?」  
「ぐ……!!」

自分の頭が禿げではないことを懇切丁寧に説明しようとしたヨリトモだが、ブレイチが持ちだしてきた言葉の凶器によって撃沈した。こめかみからだらだらと汗が伝う。

「違います。提督は禿げじゃありません」

見かねたユウマが助け舟を出してきた。

新たな敵を見定めたブレイチの眉間に皺が寄る。

「敢えて丸坊主にしているだけであって、提督の髪の毛は健在です。断じて禿げている訳ではありません」

「健在と言つても、ほんの薄らとでしょ？ しかも、僅かな矜持を守るためにする苦し紛れの表現。そういうのはハッキリ言つてあげた方がいいんだよ。禿げてるって」

「ですから、提督は禿げでは——」

「だから、あの人は禿げで——」

勢いに任せ、ユウマとブナイチは口火を切った。つい先程発生した、ミカゲとヨツミの焼き直しである。議論内容は禿げか否かだが、こちらにも白熱し始めたようだ。

議論がヒートアップしてきたのだろう。声は次第に大きくなり、荒々しいものとなる。禿げという単語が四方八方に飛び回る中、ヨリトモの顔色も悪くなっていく。

居たたまれなくなったジュリエッタが、ヨリトモに何やら声をかけた。険しい顔をしたまま、ヨリトモは俯く。あまりの事態に、ISDFの隊員たちがハラハラし始めた。

「お前等、もうやめてやれ!!」

「いい加減にしろ! 作戦会議が始まらねえじゃねーか!!」

ミカゲとナガミミが強制的に幕引きするまで、ユウマとブナイチの議論は延々と続いたのであった。



ノーデンスの13班と、ISDF特殊戦術部隊が合同で任務——Code:VFDのための真竜検体集め——を行うことが正式に決まった。ISDF側がノーデンス側の要求をすべて飲むような形になったと言う。政府が民間企業の言い分を丸々受け入れるという異例の条件であった。

ミカゲとヨツミによる褒め殺し合戦や、ユウマとブナイチによる「ヨリトモの髪型について」の議論がひと段落し、改めて互いの自己紹

介を交わす。ノーデンスのエースという肩書に恥じないよう、これから努力しなければ。イノリはひっそり、決意を新たにした。

「キミたちとは連携して任務に当たることもあると思います。よろしく、13班」

「こちらこそ、よろしくお願いします。協力して頑張りましょう！」

ユウマの言葉に、イノリは満面の笑みを浮かべて答えた。一瞬、ユウマとヨリトモが目を見張る。

呆けたように息を飲んだ2人だが、ややあつて、ヨリトモが表情を緩ませた。イノリが口にした「協力」という言葉を繰り返す。

彼らの反応からして、てつきり反発されると思っていたのだろう。上層部と現場の意見がイコールであるとは限らないのだ。

ヨリトモより遅れて現実へ戻ったユウマが口元を綻ばせた。ぱああ、と、擬音がつかんばかりの勢いで表情を輝かせる。

「ははっ、こうもすんなり受け入れてもらえるなんて……。獲物を横取りする悪者みたいに扱われたらどうしようかと思っていましたよ」

「……私、悪人を悪者扱にする人間に見えますか？」

「あ、いや、そんなことは……！」

ユウマの言葉を聞いたイノリは、思わず目を伏せた。分相応かつ不謹慎にも、彼と一緒に戦えるということに喜んでしまった罰が当たったのだろうか。

視界の端に、苛立たし気な渋面を浮かべたミカゲがちらついた。殺気をまき散らす祖父をひと睨みで黙らせ、視線を戻す。ユイが肩をすくめたのが見えた。

先程とは一転して、ユウマはおろおろしている。何かを言おうと口を開きかけて、けれど何も言葉が出てこない——そんな葛藤を繰り返した後、ユウマはしゅんと肩を落とした。

「……すみません。俺、キミを傷つけるつもりで言ったんじゃないんです。ただ、その……」

「？」

「民間側との共同任務の場合、大なり小なり軋轢が発生するのが常でした。キミみたいに、俺たちがあつさり受け入れられた例は少ないんですよ」

だから、イノリたちの反応が珍しかったのだと、ユウマは言った。

世界統治機構により結成された国際自衛組織であるISDFであるが、だからといって、彼らが絶対正義であるとは言えない。利権が絡めば、正義は悪に／悪は正義に姿を変えるのが常であった。

ISDFによつて潰された民間団体の数は数知れず。潰されなかつたとしても、事あるごとに煮え湯を飲まされたり、行動範囲等を制限されてしまう例もあつた。それ故、ISDFに対して強い不信感を抱く人々も多い。

おそらく、ユウマやヨリトモたちはISDFの代表者として矢面に立ち、反ISDF派の人間たちの非難に晒された経験があつたのだろう。嘗て、祖父が反ムラクモ派議員の非難に晒されながらも、ムラクモ側の証人として矢面に立つたように。

大丈夫だと示すように、イノリは笑い返した。

それを見たユウマも安心したように微笑む。

「だけど、良かった。キミとは仲良くなれそうです」

「こちらこそ。是非、よろしくお願いします」

ユウマが差し伸べた手を、イノリは両手で取つた。〃目上の人に対しては、敬いの意味を込めて両手で握手する〃という話を聞いたことがある。実際、ユウマはイノリよりも年上だし、実力も立ち振る舞いも尊敬できる相手であつた。

手袋越しに触れた手は、大きくてごつごつしている。近くで見ると、細身な外見とは裏腹に、大樹を思わせるような佇まいだ。イノリ

が思う以上に、ユウマは沢山の戦場を駆け抜けてきたのだろう。容易に想像できた。

「我々の目的はドラゴンの検体だ。目標物さえ入手できれば、妨害までするつもりはない」

「当然よ。13班の邪魔をしたら、アタシがタダじゃ済まさないわ」

「お2人さん。いがみあうなら、今すぐ俺とヨツミンで褒め殺し合戦再開させようか？」

『その旨を良しとする！ 今度こそ決着をつけよう、ミカゲ』

「それだけは勘弁してください」

「それだけは勘弁してください」

刺々しい空気になりかけたジュリエッタとヨリトモを止めたのは、ミカゲとヨツミであった。先程ようやく沈静化した話題を持ちだしてくるあたり、祖父たちはまだ語り足りないらしい。

褒め殺しは流石に嫌なのだろう。殴り合い一歩手前の殺気で満ちていた会議室から、あつという間に殺気が消えた。この場一帯に珍妙な空気が漂い始める。暢気に現状を眺めていたアリーが、作戦会議の音頭を取った。

イノリを筆頭とした13班と、ISDFの代表者であるヨリトモとユウマが椅子に座る。自分の隣にはユウマが座った。早速作戦会議に臨もうとするイノリとユウマだったが、ふと、周囲から変な視線を感じ取った。

しかしそれも一瞬のこと。

面々はすぐに真面目な面持ちになって、作戦会議に臨む。

「さて、共同作戦を開始する前に、状況を整理しておくか」

ナガミミはそう言って、今回の作戦について話し始めた。

今回のターゲットは、アトランティスに出現した第3真竜ニアラ。奴は2020年でも観測されているが、その時点では既に手負いだ。

手負いの検体では意味がないため、全盛期であるアトランティスに飛ばねばならなかった。

ISDFもニアラの検体を欲しているらしい。使用用途は一切不明らしいが、互いの利害が一致したため、今回の合同任務が実現したという。重要なのは検体の回収のため、ニアラが海に沈むという事態は避けねばならない。

更に、アトランティスと言っても、今回赴く場所は首都アトランティカではないという。

ジュリエッタが徹夜でポータルを拡張し、新たな場所へ飛べるようになったそうだ。

その話を聞いたリヨウスケとヨツミが表情を輝かせた。

『すごい！　すごいよジュリエッタ！　一晩で拡張できるなんて、まるでウチの総長みたいだ!!』

『流石はトマリくんだな！　キミのような技術者が居てくれることが、人類にとっての希望だよ』

「い、いや、流石にムラクモ最終総長程じゃあないわよ……。博士も買収しすぎですって」

技術者の英雄と尊敬する研究者から喝采され、ジュリエッタは照れたように視線を逸らした。

嬉しさよりも気恥ずかしさが勝ったのだろう。なんだか微笑ましい。

暫し顔を赤くしていた天才科学者であったが、咳払いをして言葉を続ける。

今回新しく飛べるようになった場所は低層区クラディオオン。ルシエ族繁栄の基盤となった採掘場や鍛冶場の集まる、労働階級者たちが住まう区画らしい。

前回飛んだアトランティカが上流階級たちの根城なら、こちらは中流から下流階級の人々がいるのだろう。前者が玉碎作戦肯定派なら、後者には反対派も居そうだ。

しかしながら、ジュリエッタの見解では「マモノの巣窟になっているため、生存者がいる可能性は低い」とのことだ。彼の言葉を、アリーが引き継ぐ。

「クラディオン探索の目的は、竜殺剣の情報収集だよ。現戦力だけでニアラを倒すのはキビシーからね。竜殺剣は必要不可欠なんだ」

『竜殺剣……！』

「竜殺剣……！」

竜を屠った最強兵装の名を聞いたリヨウスケとユウマが目を見開く。特に、前者にとっては——竜殺剣を生み出す力を有したルシエ・マリナを妻に迎えたリヨウスケにとっては、その名前は因縁深いものだろう。当然、それは、担い手となったミカゲも含まれる。

「……成程。『マリナの起こした奇跡を、過去でもう一度』、ってことか」

「奇跡をもう一度？」

ミカゲが納得したように顎に手を当てた。ユウマが首を傾げる。

その詳細を説明しようとしたイノリより先に、ソウセイが手を叩く方が早かった。

「そうか！ アトランティスの王族の力を借りて、竜殺剣を作るんだな!!」

『アトランティス滅亡間際ってことは、最後の王族は女王様だよね!』

その女王様に協力してもらえば!!』

「そうそう！ さっすが英雄とその子孫、発想がスバラシイのよー☆」

リヨウスケとソウセイの答えを聞いたアリーが嬉しそうに手を握り締めた。話の流れについていけないISDF勢がポカンと口を開ける。

彼らの様子からして、現存する竜殺剣を使うものだと思っていたらしい。「ないなら作ればいいじゃない」を地で行く発想は出てこなかったようだ。

しかし、表情を輝かせていたソウセイは、すぐに厳しそうな顔つきになった。アトランティカに向かった際、そこで出会った女王の姿が脳裏に浮かぶ。

ウラニア・テ・クアンブル。 ■■マリナのATLコードのベースになった、アトランティス最後の女王その人だ。アトランティスと共に沈む決断をした、うら若き乙女。

「……しかし、彼女が協力してくれるだろうか」

『え?』

「アトランティスの女王・ウラニアは、玉砕作戦決行の準備を押し進めている」

ソウセイの言葉を聞いたムラクモ13班員たちが、こぞつて危機迫った表情を浮かべた。

特に、マリナの夫であるリヨウスケの反応が顕著である。愕然としたように表情を引きつらせた。

『だ、ダメだよ！ 玉砕作戦なんてダメだ！ 死ぬなんて、絶対ダメだよ！ その人を助けなきゃ!』

「ちよつと待つて！ 落ち着いて頂戴、リヨウスケ。歴史改変は現代にどんな影響を及ぼすか——」

『竜殺剣を作れるのは、アトランティスの王族だけなんだ！ 女王様が力を貸してくれなきゃダメなんだよ!』

諫めようとしたジュリエッタに対し、リヨウスケは大きな声で主張した。マリナを妻に持つ彼にとっての常識である。その言葉を聞いたジュリエッタが凍り付く。暫し口元を戦慄かせていた彼だが、「なんてこと」と、頼りない声をこぼした。



どうやら、今回の任務では竜殺剣を作るために必要なもの——高純度のオリハルコンと、竜殺剣を作り出せる鍛冶師を見つける予定だったらしい。竜殺剣を作れるルシェが玉碎作戦に同意する人物となると、話が一気に難しいことになる。

しかも王族最後の生き残りだ。玉碎作戦推進のシンボルという側面もある。ウラニアは玉碎作戦を推し進める覚悟を固めている様子だった。それが自分の務めなのだと思なになっている。決意の下に、生きたいという願いを抱きながら。

「……ウラニア王女は、曲がりなりにも、玉碎派の旗印とされている人物ですよ。彼女が僕たちの説得に応じてくれるかどうか……」

『無理だろうな。国のトップだから、個人的な感情だけで動くことはできない。仮に応じたとしても、周りの連中が全力で邪魔してくるだろう』

「頭の固いお方が居ますからね。ワガママだったら頷いてもらえる可能性はありますが、現状でそれを言う余裕があるかと言われますと……微妙です」

リヒトとマサハルが難しそうな顔をして俯いた。上に立つ者としての心理状態を分析した上での発言である。

このままウラニアたちが玉碎作戦を執行すれば、ニアラの検体を手でできなくなる。Code：VFDが暗礁に乗り上げるとは間違いない。

先程まで楽しそうに笑っていたアリーの表情が曇った。気のせいかな、薄らと目が開いているように見える。

「交渉の材料を用意できればいいんだけど……。何かいいものないかなー……」

「歴史改変が……ああでも、Code：VFDが……!!」

ふむ、と、アリーは思案を始める。その隣で、ジュリエッタは己の

方針がCode：VFDを頓挫させかねない事態であることに唸っていた。

「過去を改変することで、現代に変な影響を出したくない」——ジュリエッタの言い分は最もである。『過去改変の影響で東京が消え去る』なんて事態に陥ったら笑えない。

しかし、竜殺剣を作るためには歴史改変に相当すること／現地住民（しかも国のトップである）と接触する必要があるわけで。完全に堂々巡りである。

絶望に瞳を曇らせ、頑なになった女王の横顔を思い出す。無念と悲しみを滲ませた青い瞳が揺れていた。イノリは思わず手を握り締めた。

彼女が竜殺剣作成に協力してくれる可能性を導き出すためには、何をすべきか。真つ先に思い浮かんだのは、『ニアラを倒してアトランティスを救う』ことだった。

諦めてしまったウラニアに、自分たちが希望を指し示す——ウラニアが竜殺剣作成に頷いてくれるには、それしかない。

「あの」

「あの」

イノリが手を挙げれば、声が2つ重なった。声の方向へと振りむけば、ユウマが発言許可を求めるために手を挙げている。

相手に発言を促し合った後、イノリとユウマは互いの顔をまじまじと見つめた。なんとなくだが、通じ合う。

『おそらく、自分たちの意見は一緒である』——それを確認するように頷き合うと、2人は仲間たちの方へ視線を向けた。

## 指針を定めて

「ウラニアに協力してもらうには、ニアラを倒すだけじゃなく、アトランティスのルシェたちを助ければいいと思うんだ」

「俺も、イノリと同意見です。女王を領かせるには、国の危機や民の命を救うのが手っ取り早いかと」

イノリとユウマの意見を聞いたジュリエッタが、2世紀前のお笑いよろしく椅子から転がり落ちた。見事なフォームである。

その様を目の当たりにしたミカゲが口元を抑えて震え、アリーは満面の笑みを浮かべて「それならいいかも」と手を叩いた。

他の13班たち——特にソウセイとリョウスケが人一倍表情を輝かせる。

「ちよつと待て！ それがどういいうことか、お前等分かってるのか!？」

「ジュリエッタ。オツサンに戻ってるぞ☆」

『あ、昔のトマリくんだ。懐かしいなあ』

「あつ、待って。ちよつと待って。今のナシ、ナシでお願い!!」

ついうっかり地を出し、ジュリエッタは男言葉で喋ってしまった。それを、社長と尊敬する相手から指摘され、彼は慌てて取り繕う。

ジュリエッタの男言葉を懐かしんだのだろう。ヨツミはジュリエッタの昔話を始めようとしたが、本人に宥めすかされて断念したようだ。

どうにか調子を取り戻した技術主任は、咳払いの後、イノリたちへと視線を向けた。女言葉で喋るよう気を付けながら、もう一度同じことを問うてきた。

前回の任務のことを思い出しながら、イノリは持論を述べる。

「首都アトランティカで出会った人々の多くは、玉碎作戦推進派の貴族たちだった。推進派の実質的なトップは執政官のタリエリという

ルシエの神官で、彼の進言を受け入れた女王ウラニアが旗印として立っているような状態だね。……でも、タリエリや上層部貴族とは対照的に、ウラニア個人はまだ迷ってるみたい。この時点で、交渉の余地はあると思ったの」

『玉砕推進派の旗印である女王ウラニアと、故郷を愛するウラニア……その狭間で揺れてるってことか』

「国を束ねる者としての誇りと責任、個人の願いや感情……誰であれ、その間で悩むことはある。それがヒトだからな」

イノリの言葉を聞いたマサハルとヨリトモが気難しそうな顔をした。

ウラニアの心理状況は、2人にとっても身につまされるものがあったのだろう。

「ウラニアが玉砕派の旗印として立っているのは、精鋭兵や先王——父親を失ってしまった悲しみや、滅んでいく故郷を見ていることしかできないという絶望が原因なんだと思う。何もできない無力さから諦めてしまった、というのもあるかもしれない。破滅の道だけが鮮明に見えるから、そこしかないと思いきんでしまった」

脳裏によぎったのは、暗い笑みを湛えたウラニアの横顔。青の瞳は、深い諦めの色が滲んでいた。

たくさん絶望してきたのだろう。荒らされ、滅びゆく故郷を見て、心を痛めてきたのだろう。抗おうとして傷ついた人々の姿を、ずっと見続けてきたのかもしれない。

ボロボロになった心は、痛みを拒絶した。これ以上、自分が傷つくのも、故郷や民が傷つく姿を目の当たりにするのも嫌になった。どのみち痛みを伴うのならば、と、破滅へと突き進んでいる。

「……その情報から総合すると、やはり、件の女王は『交渉の余地あり。但し、並大抵のことでは領かない』ということになります。それも、ア

トランティスの滅びを阻止するレベルでないと、首を縦には振らないでしょう」

イノリの言葉を引き継ぐようにして、ユウマが話を続けた。

「“ニアラを倒すためには竜殺剣が必要不可欠”、 “竜殺剣を作れるのは女王ただ1人”、 “女王は玉碎推進派の旗印として振る舞っているが、本当はアトランティスを救いたいと考えている”……。 “アトランティスの国土と民を救う交換条件として、竜殺剣の鍛錬を依頼する”というのは理にかなっています」

「民と国土、ひいては国の未来をも人質に取るってこと？ ……人質なんて、いかにもアンタたちが言いそうなことね」

「……まあ、いざというときには、そうならってもらうかもしれません」

人質、という言葉に、ほんの一瞬だけユウマの表情が曇る。

けれど彼はすぐに笑みを浮かべ、ジュリエッタの言葉を肯定した。

「ですが、ドクター・ジュリエッタ。Code:VFDの成就に拘っている貴方なら、竜殺剣、ひいては竜殺剣を作れる女王の協力は、喉から手が出る程欲しいんじゃないやありませんか？」

「……流石、ISDFねえ。えげつないことを平然と言うんだから」

そんなユウマに対し、ジュリエッタは苦々しい表情を浮かべる。清々しいまでに恐ろしい言葉を使ったユウマに、イノリは思わず視線を向けた。

まるで作り物みたいに完璧な笑み。以前、顔を合わせたときに見せた柔らかな笑みとは違い、薄ら寒さを感じる。何とも言えぬ不安が湧き上がってきた。

ユウマはイノリに視線を向けようとはしない。敢えて避けているように思える。イノリが首を傾げたのと、ジュリエッタが観念したようにため息をついたのは同時だった。

「仮に、仮によ。 アトランティス救済と民の保護をやる」として――」

『本当!? ありがとうジュリエッタ!』

『流石トマリくんだ! 私が見込み、希望を見出した科学者の1人……!』

「待つて! まだやるとは言つてない! 言つてないから! だからそんなキラキラした目でこつちを見ないでエエエエ!!」

飼い主を見つけた子犬みたいに目を輝かせたりヨウスケと、自分が見出した後継者を語るヨツミの様子に居たたまれなくなつたらしい。ジュリエッタは頭を抱え、金切り声をあげた。

途端にリヨウスケとヨツミは悲しそうな顔をした。ジュリエッタは何かをぶつぶつ呟き、振り払うようにかぶりを振る。

二つ返事で領けない理由をジュリエッタは語り始める。ルシエ族を保護した後の事後処理に関する事だつた。

「アトランティス救済と民の保護をやる」として、現実問題が山積みなの。ルシエたちを保護すると言つても、行く当てはあるの?」

「現代の東京、ノーデンズで保護すればいいと思うわ。勿論、世界救済会が全力でサポートする! ルシエの人権保護関連だつたら、私、力になれると思うし」

「僕からも援助資金を出します。足りなければ、東雲財閥にも協力を依頼します。……勿論、見返りはありますよ? ビジネス関連でも、僕が東雲財閥の方に口添えしますが、どうでしょう?」

意地の悪い表情を浮かべたジュリエッタに対抗するかのごとく、声を上げた者がいた。世界救済会役員の娘にして同組織に所属している那雲シキと、天下の東雲財閥末っ子御曹司の東雲リヒトである。

2人が切ったカードは、文字通り民間団体／財閥企業による力技だ。シキは各地で活躍する巨大な慈善団体の人間として、リヒトは

巨大な財閥の経営者一族の一人として、ノーデンスの技術主任に交渉を持ちかけている。

これで、予算という言い訳は使えまい。民間の底力を目の当たりにした公権力勢<sup>ISDF</sup>が、空恐ろしそうに視線を彷徨わせる。ISDF隊員のひそひそ話——「金と組織ブランド力による暴力」云々——があちこちから聞こえてきた。

あくどい笑みを浮かべるリヒトとシキに、ジュリエッタは思わず呻いた。

だが、素直に頷くわけにはいかないのだろう。歴史改変云々に関する問題もある。

「アトランティスを救って、現代に大きな影響が出たらどうするのよ!?」

「アトランティスを救っても、現代に影響を出さない方法」は存在してるぞ」

次に手を挙げたのはミカゲだった。脱力しかかったような面持ち、議論を真面目に聞いていたとは思えない表情であった。だが、祖父の鋭い眼差しは、議論内容を吟味していることを示している。

「……どうということよ?」

「簡単な話、発想の転換だよ」

ミカゲはそう言うなり、びしっと人差し指を立てた。指の先端は、ジュリエッタに向けられた。

「ニアラを倒して滅びを脱したとして、国が復興するためには人員が必要になる。だけど、ルシエの民を現代に避難させた場合、国を復興させる人員がいなくなるんだ。彼らが故郷へ帰還しない限り、アトランティスを復興させるルシエが居ないわけだから、『将来的には』、アトランティスが滅亡する」という運命は変えられない」

「!!」

「国土の復興がどれだけ難しいことかは、俺たちムラクモ13班やISDFの連中はよく知ってるだろ？ それを斜めから見れば、そーゆー解釈に行きつくってワケよ」

ミカゲはくるりと振り返り、ISDFの兵士たちを見回した。身に覚えがあるようで、隊員たちは顔を見合わせる。暗い表情がちらつくあたり、未だに復興が進まない国を目の当たりにした者もいるようだ。

元ISDFのジュリエッタも同じ気持ちのようで、沈痛そうな面持ちになった。しかしそれも一瞬で、次には、ミカゲが提示してきた例のえげつなさに口元を引きつらせる。ユウマが目を真ん丸にしてミカゲを見た。

ミカゲはしたり顔のまま話を続けた。

本格的に復興が始まるためには、国土を取り戻す必要がある。そのためには、竜殺剣を作った後、ニアラを倒さなければならぬ。

倒したとしても、復興するためには膨大な資材や資金、技術、時間が必要となる。最も、それを費やしたからといって、復興するとは限らない。

「故に、アトランティスの民を救ったとしても、歴史改変の影響が出るまでは、膨大なタイムラグがある」——祖父はそう言って言葉を切った。

「……つまるところ、それは、問題の先送りでしょう？ 歴史改変が発生する可能性は否定できないわ」

「そうだな。それは否定しない」

ジュリエッタは噛みつくような声色で言った。ミカゲはしたり顔を浮かべたまま、大仰に頷く。

「それじゃあ1つ訊ねるが」



「？」

「1万2000年前に来襲した全盛期の金ぴかから検体を入手するとして」

「金ぴか、って……ニアラのこと？」

「イエス、金ぴか！」

話を続けようとしたミカゲを遮り、ジュリエッタがしかめっ面で問いかけた。

ミカゲは大仰に頷いた。紫水晶の双瞼には、ニアラに対する憎しみが揺れている。

「あるいは、学習能力のない慢心野郎かなあ。アトランティスに来て、2020年の東京にも来て、5000年後の未来にも来て狩られてるんだ。何回も撃退されてるのに、本当に懲りないヤツでさー」  
「そうなんだよねー。ニアラは他の真竜と違って、何度も地球に来襲しては尻尾巻いて帰って来ちゃったんだー」

ミカゲの言葉を引き継いだのはアリーだ。彼女は呆れたようにため息をつき、肩をすくめる。

彼女の表情から、〃飼っているペットが粗相をしたときの飼い主〃を連想したのは何故だろう。

心なしか、アリーの目が薄く開いたような気がした。微かに覗いた紫苑の瞳には、疲労が滲んでいる。

「5000年後の未来で狩られるまで、ずーっとだよ？ ……だから、ニンゲンから『オードブル食いに来てオードブルにされた慢心金ぴか竜』って言われるのよー……」

「Code：VFDで一番最初に狩るべき真竜もニアラなんだろう？  
文字通りの前菜、文字通りのオードブルってワケだ」

アリーの言葉を聞いたミカゲは、うんうん頷きながら話を逸らして

いく。ニアラに対する愚痴よりも、途中で途切れた話の方が大事だ。イノリがミカゲを呼び止めるよりも先に、ジュリエッタがわざとらしく咳ばらいした。ユイも「ミカゲくん」と祖父の名前を呼ぶ。ミカゲは苦笑したのち、話を戻した。

「1万2000年前に来襲した全盛期の金ぴかから検体を入手する場合、その時間線で奴を仕留めるんだろ？」

「ええ、そうよ」

「つてことは、『1万2000年前に金ぴかは死ぬ』んだよな？」

「ええ、そう——…!!」

ミカゲの言わんとしたことを察したのか、ジュリエッタはハツとした様子で息を飲んだ。イノリたちも、ミカゲが言わんとしたことを理解する。

ニアラは1万2000年前にアトランティスに来襲し、当時の狩る者によって片翼を切り落とされる重傷を負った。その後、2020年に来襲した際にはムラクモ13班によって撃退される。ミカゲの話では、5000年後の未来でもニアラが来襲し、そこで年貢の納め時を迎えるらしい。

Code:VFD成就のためには、全盛期のニアラを狩って検体を入手する必要がある。1万2000年前の時点でニアラが狩られてしまった場合、2020年に来襲した手負いのニアラや、5000年後の未来に来襲して撃破されるであろうニアラは『存在していない』ということになるのだ。

そうなってしまった場合、2020年の竜戦役は発生しないことになる。2020年に竜災害が発生しなければ、この未来は——イノリたちが生きているU・E・77年という世界が存在しているかも怪しい。——つまり、『Code:VFDを進めること自体が、歴史改変が発生する要因になる』。

ぎぎぎ、という軋んだ音を響かせながら、ジュリエッタの首がミカゲの方を向く。ミカゲは肩をすくめた後、ゆっくりと頷いた。

次の瞬間、リヨウスケとソウセイがジュリエッタを見つめる。前者はつぶらな瞳に悲壮感を湛えて、後者は鋭い瞳を血走らせていた。

『……ねえ、ジュリエッタ』

「……なあ、ジュリエッタ」

『どのみち、Code:VFDを推し進めれば、歴史改変が発生するんでしょ？ ……それでも、歴史修正が云々って言い訳するの？』

「どのみち、Code:VFDを推し進めれば、歴史改変が発生するとは明白だ。それなのに、歴史修正が云々と主張するのか？」

「……………それは、その」

堪らず、ジュリエッタは視線を逸らした。彼のこめかみから汗がたらだらと伝い落ちていくのが見えた。

リヨウスケとソウセイは、ジュリエッタの後ろめたさをつつくような視線を向けていた。

そんな空気に割って入ったのは、ナガミミを抱っこするという条件で大人しくしていたブレイチである。心なしか、彼の瞳に光がない。顔は微笑を湛えているのに、目が全然笑っていないのだ。その影響を受けたためか、抱えられたナガミミの顔色が異様に悪い。

「技術主任は、ニアラを倒すことで発生する歴史改変を度外視してでも、Code:VFDを進めたいんですよ？ ……それとも、”ニアラを斃したことで発生する歴史改変”の被害が微々たるものだから”っていう確証があるから、そっちに関してはノータッチだったのかな？」

「……………ノーコメント」

「却下で」

薄暗い笑みを湛えたブレイチは、表情そのままにナガミミの頭や耳を撫でている。対して、マスコットの顔色がより一層悪くなり、小刻

みに震えはじめた。

ナガミミの反応と比例するかのようになり、ジュリエッタの表情も段々と淡くなつていく。沈黙が続く中、周囲の視線が技術主任へと集まつてきた。

沈黙を守り通そうとする技術主任の様子から、ブレイチは質問の矛先をTOPへ向けることにしたらしい。笑顔を崩さぬまま、アリーの方へと視線を向けた。

アリーは朗らかな空気を崩さぬまま、顎に手を当てた。

ジュリエッタはハラハラした様子でアリーを見つめている。

「そこはムズカシイ問題なんだけど、大きなターニングポイントを変えるのは、それ相応のエントロピーが必要」ってコトは掴んでるかなー？ 例えば、真竜が地球へ来襲したことで発生した竜戦役」と、「その被害に関わるコト」とか」

「つまり、過去の世界でニアラを倒しても、2020年代に竜戦役が発生したという事実や、それによって発生した被害云々については、一切影響が出ない」ってこと？」

「その可能性は高いねー。ニアラを倒した程度じゃ、2020年代の竜戦役を帳消しにするエントロピーには程遠いと思うよー」

アリーは二つ返事で頷く。納得したブレイチは、ジュリエッタの方に向き直った。歴史改変云々という大義名分が通用しない可能性が出てきたためだ。

歴史改変の影響が出ないなら、アトランティスの民を助けることに反対される理由はなくなる。しかし、ジュリエッタは首を縦に振ろうとしない。

それを見たブレイチは、1回だけ瞬きをして、表情を消す。能面のような面持ちに、思わずイノリは息を飲んだ。対して、ミカゲが気まぐすように眉間に皺を寄せ、ヒイナがくすりと微笑む。まるで、ブレイチの表情の変化が、何かの前触れであるかのように。

「ねえ、<sup>トマリ</sup>渡真利さん」

普段よりも低い声のトーンに、ジュリエッタがびくりと身を震わせる。しかも、本名で呼ばれた。

いつもならば「本名で呼ばないで」と言うのに、ブナイチの様子に気圧されたためか、何も言えないでいる。

ナガミミなんて、天を仰いだまま微動だにしない。外見がマスコツトである故に、意識があるのか否かもわからなかった。

「貴方はどうして、〃ISDFの研究者・<sup>トマリ</sup>ジュウウタ渡真利十郎太〃を捨てたの？」

「!？」

「軍の思考回路を『えげつない』って言うあたり、『大義のためなら、犠牲者が出ることはやむなし』理論で好き放題する連中を見てきたんでしょ？ そういう闇の深さを知っているから、それが嫌だから、嘗ての肩書を捨てたんじゃないの？ 技術主任はいつも『そういうのが嫌だ』って言ってたんだから」

「アタシの過去の話はどうでもいいでしょう。どうして今、そんな話を——」

「今の貴方の顔、そういう奴らと同じ顔してるよ」

ブナイチの指摘を受けたジュリエッタが凍り付いた。その様子を確認したブナイチは、「そういう奴の顔は見慣れてるし」と、したり顔をして話を続けた。

「それが嫌だから、〃それに加担していた可能性がある〃過去を捨てたんじゃないの？ なのに今、技術主任が嫌ってる奴と同じことしようとしてるんだよ？ ねえ、それでいいの？ 貴方が捨てたはずのISDFの研究者・<sup>トマリ</sup>ジュウウタ渡真利十郎太〃に戻ってしまって、いいの？」

「……アタシは……」

「下手したら、〃ISDFの研究者・<sup>トマリ</sup>ジュウウタ渡真利十郎太〃よりも悪質な奴に

なっっちゃうかもしれないんだよ?。」

それでいいの? と、ブンイチは問う。その眼差しを真正面から受け止めたジュリエッタは、茫然とした面持ちを浮かべていた。

ヨツミが「トマリくん」と、ジュリエッタの本名を口に出す。酷く悲しそうな声だ。暫し沈黙がこの場を包む。

「そんなの嫌でしょ? だって悔しいじゃん。自分が嫌いな奴と同じになっっちゃうの」

ブンイチは一拍おいて、笑みを浮かべた。真夏の太陽を思わせるような、晴れやかで燦々とした、力強い笑み。

「どうせなら、HEROになろうよ。みんなを助けて、人を笑顔にする。『正義の味方』に。技術主任なら、それができる」

確証を持って言い切った少年の笑みに、イノリはふと目を瞬かせる。その笑い方が、誰かによく似ているように思った。誰、だっただろう。

イノリがその人物に思い至るよりも、ジュリエッタが両手を上げるほうが早かった。「降参よ」と彼は苦笑しながらため息をつく。

しかし、それも一瞬のこと。彼は力強く微笑むと、自分の拳を掌に打ち付けた。藤色の瞳はやる気で満ち溢れている。覚悟が固まったらしい。

「そこまで言うなら、やってやろうじゃない……!」

『本当?! ありがとうジュリエッタ!』

『流石トマリくん! 私が見込み、希望を見出した科学者の1人……!』

ジュリエッタの言葉を聞いたリヨウスケが感極まったように表情

を輝かせ、ヨツミが自慢げに目を細めた。

ソウセイが安堵したようにため息をつき、シキトリヒトが小さくガツツポーズをとる。イノリも、ユウマと顔を見合わせて表情を緩めた。

盛り上がる様子を見守っていたブンイチは、満面の笑みを浮かべてナガミミを抱きしめる。ここでようやく、現実へ帰ってきたナガミミが呻き声を上げた。

「やったよナガミミ様！ これで、おおつぴらに人命救助ができるね！」

「あつバカ余計なことを言うな！」

「ちよつと!?! 現地民の救助なんて聞いてないわよ!?!」

「事後承諾すみません。でも、助ける方向性は固まったわけだから問題ないですよねっ！」

「アンタって奴は!!」

ジユリエツタが2人に詰め寄り、ブンイチが開き直る。そんな彼らの様子を見て、アリーは朗らかに笑っていた。

言い合いを始めた3人を目の当たりにしたミカゲは、何とも言えない顔をして視線を彷徨わせた。ヒイナが自慢げに鼻を鳴らす。

何故ヒイナが誇らしげにしているのか、イノリにはさっぱり分らない。いや、それよりも、人命救助を提案したのはイノリたちである。

それを主張しようとしたとき、イノリとブンイチの目が合った。紫苑の瞳は、「何も言うな」と語っている。先輩として、彼は後輩を庇うつもりらしい

ブンイチに抱きかかえられていたナガミミにも、ブンイチの意図が伝わったのだろう。マスコットはやれやれと言わんばかりにため息をついた。



思うところがあつたから、ミカゲは「彼」の背中を追いかけた。探し人の後ろ姿はすぐに見つかった。「彼」は上官と並んで、何か話をしていたらしい。

かすかに見えた上官の眼差しはどこまでも優しかった。対して、「彼」は非常に居心地悪くしている。難しそうな顔をしたまま、照れくさそうに視線を彷徨わせていた。

「おーい、その優男」

ミカゲが声をかければ、優男——如月ユウマが目を点にしてこちらに振り向いた。彼の上官／ミカゲの教え子のヨリトモも目を瞬かせている。どちらも、ミカゲに呼び止められるとは思っていなかったらしい。

作戦会議が終わったため、ISDFの連中は引き上げようとしている真つ最中だ。ヨリトモもユウマも帰投するつもりであることは明白である。

彼らの表情からして、基地への帰投は急を要するものではなさそうだった。勿論、時間と手間を取らせるつもりなど微塵もない。

ユウマは「ミカゲに話しかけられる」理由が分からず、不思議そうに小首を傾げていた。子どものような眼差しが、彼の歪さを際立たせている。

「俺に何か？」

「優しい顔して、お前はおっそろしいことを言うのな」

ミカゲの言葉にユウマは一瞬眉間に皺を寄せ——けれどすぐに、先程の会議でユウマがした発言を指していると理解したのだろう。

彼は笑みを浮かべたが、それには一切感情がなかった。ユウマの笑い方は、対竜兵器としての一生を義務付けられていた頃のミカゲとよく似ている。

ミカゲもまた、笑みを浮かべて彼と対峙した。無言の応酬。「先生」



と、厳しい顔をしたヨリトモの声がどこか遠い。

「泥をかぶるのが軍人の仕事」ってのは分かるが、怯えながらやるなよ」

「え？」

「顔。めちやくちや引きつつてるぞ。目線も変な動きしてたし、表情硬い」

「お前、絶対そういうの向いてないよ」と言えば、ユウマは間拔けな声を漏らして首を傾げる。青年という外見からは想像つかない程、あどけない顔をしていた。

仕事でやむを得ず「嫌われ役」に徹するには、この青年は未熟であると言える。上っ面しか見ない相手なら誤魔化せるだろうが、よく見ている人間には通用しない。

場数を踏み慣れていないのか、嫌われ役に徹するには精神的に幼いのか。その答えは分からない。ユウマの様子からして、「今後に期待」というところだろうか。

……最も、そんなものに慣れない方が幸せなのだろうが。「真瀬ブナイチ」と名乗った少年の後ろ姿を思い返し、ミカゲはひっそり苦笑した。

「彼」が「真瀬ブナイチ」に至るまでの歩みを知っているミカゲにしてみれば、何とも言えない気持ちになる。「彼」を「ああした」のは自分たちなのだから。

「それに、「お前が何を考えて汚れ役になろうとしたか」くらい、あの子どもちゃんと分かっているだろうさ」

「あの子、ですか？」

「——ユウマさん！」

丁度いいタイミングで、イノリの声が響いた。彼女はユウマを見つけると、わき目もふらず相手の元へと駆け寄る。

普段はミカゲの存在に気づくはずなのに、イノリはミカゲを通り過ぎてしまった。孫に無視されるなんて、余程のことがなければあり得ないのに。

ほのぼのすればいいのか、修羅場になればいいのか分からない。そんなミカゲを傍目に、イノリはユウマと話し込んでいる。話は弾んでいるようだ。

「先程はありがとうございます」

「え？」

「作戦会議のとき、私の意見が受け入れられるように、話を誘導してくれたじゃないですか」

ミカゲの予想通り、イノリはユウマの発言の意図を察していた。イノリの提案が通りやすくするために、ユウマがさりげなく助け舟を出してくれていたのだと。

その言葉を聞いたユウマの表情が一際明るくなったように見えたのは気のせいではない。彼が怯えていた理由に、イノリが関わっていることは明白だった。

ユウマの出自が「ミカゲとよく似ている」ならば、彼の様子に覚えがあるのは当然である。兵器になりきろうとしてなり切れなかった、過去のミカゲの姿そのものだった。

（懐かしいなあ。あの頃は、ユイに好意を寄せながらも、自分自身を縛りつけてたっけ）

難儀だった頃の思い出が、走馬灯のように流れては消えていく。人間、何が起ころるか分かったものではない。

「俺はただ、任務を円滑に進めるための方法として、キミの意見を利用しただけですよ。それに、最終的にドクター・ジュリエッタを領かせたのはブレイチでしょう？」

「でも、突破口が見えたことは確かですから。ありがとうございます  
た」

ユウマは表立って言うつもりがなかったのだろう。彼はあくまでも、*「任務を円滑に進めるための発言」* だったと主張する。実際、イノリの案が通ったのは、ミカゲとブレイチの発言によるところが大きい。それでも、イノリはユウマに礼を言った。

感謝の言葉を真正面から受け止める機会が多くないのか、ユウマは何とも言えなさそうな表情を浮かべて視線を右往左往させている。ヨリトモの部隊は前線で戦うことが多い。しかし、それと並行して、人命救助もしていたはずだ。

なのに何故、ヨリトモの部下であるはずのユウマは、感謝されることに慣れていないのか。

(……こいつ、人命救助にはあまり関わってないのかな?)

ミカゲはユウマの反応を見つめながら、思わず首を傾げる。丁度そのタイミングで、ブレイチが飛び出してきた。

慌ただしい様子からして、レイブンと一緒に *「尻拭い」* の続きをしに行くつもりなのだろう。

勿論、イノリはブレイチにも声をかけた。後輩から声をかけられたブレイチは足を止めて振り返った。

「ブレイチくんも、さっきは本当にありがとう！」

「いいっていいって！ 先輩として、正義のヒーローブラスタールレイブンの相棒として、当然のことをしただけだからさー！」

後輩からお礼を言われたブレイチは満面の笑みを浮かべる。何も知らないイノリたちは、*「ブレイチがヒーローアクターである」* と思いきいで話をしているようだが、*「彼ら」* のことを考えるに、あなたが笑い飛ばせるようなものでもない。その話を、誰かに語って聞かせ

るつもりもないが。

「先生」

「ん？」

「……ありがとうございます」

「……どういたしまして」

話し込む3人の様子を横目に、ヨリトモは深々と頭を下げた。どうやら、教え子にはミカゲの意図が通じたのであろう。

表立って主張したわけではないが、伝わらないのは少し物悲しいと思っていたところであった。ちよつと照れくさい。

分かってほしい相手に分かってもらえれば。もしくは、誰か一人で分かってくれる相手が居てくれれば、それでいいのだから。



「……………うわ、マジかよ」

銀の髪を束ね、翡翠色を基調にした騎士装束を身に纏ったルシエ族の青年——モルス・クリュティエは、目の前の光景に絶句していた。

ひととき大きな浮遊岩の上で、*“それ”*は絶命していた。白い体躯に、4枚の翼を有したドラゴン。アトランティスの制空権を握っていた帝竜だ。

占星術師であるモルスの姉曰く、この帝竜はトリスアギオンというらしい。星の聲から託宣を得て名付けたものであった。

帝竜の体には、数え切れないほどの傷跡があつた。一番目立つのは切り傷である。まるで、鋭利な刃物で細かく切り刻んだような——。

「傷口の形状からして、アトランティスの騎士たちが使う武器とは形状が違うな。しかも、帝竜を倒した奴は、その得物を超高速で振るっ

た……」

「となると、そいつは相当の実力者ってことになるな」

「あ、やっぱエーグルもそう思う？」

モルスの隣でトリスアギオンの死体を確認していたルシエ族の青年——エーグルも、モルスと同じ見解らしい。難しい顔をして、死体を眺める。

奴はアトランティス上空を占拠しており、主にベルク海洋神殿や首都アトランティカ周辺に出没していた。空を飛んでいる相手を倒すのは、並大抵のことじゃない。

「でも、一体誰がコイツを倒したんだ？ 上層に住んでる貴族や騎士連中に、帝竜を倒せるほどの実力者がいるとは思えねーし……」

「そもそも、ドラゴンと戦おうっていう気骨のある奴らなんて、もう首都に居ないだろ」

「だよなあ。叔父上の意見に歯向かった連中は、例外なしに首都から追放されたもんな」

国の執政を取り仕切る叔父の背中を思い出しながら、モルスは深々とため息をついた。

叔父の頭の固さには、昔から悩まされてきたのだ。

いい加減、若者の意見に耳を傾けてくれないはずである。

「でも、お前ら姉弟の場合は家出だろ。書置きして飛び出てきたって聞いたけど」

「あー、うん。『頭の固い叔父上なんて大っ嫌いだ』って書置き残して、俺と姉上の荷物を全部運び出した」

「うわ、えげつねえ。お前の叔父さん絶対泣いたぞ」

モルスの話を聞いたエーグルがしかめっ面になった。彼の頭の中では、手紙を呼んだ後に泣き崩れるモルスの叔父の様子が浮かんでい

るのだろうか。

叔父は仕事一筋だったため、伴侶が居ない。しかし、上司の子どもや、兄の子どもでもあるモルスたち姉弟を我が子のように可愛がってくれた。

モルスも姉も、叔父に甘やかされてきたという自覚はある。彼は、上司の子どもやモルスたち姉弟のワガママにはめっぽう弱かった。

モルスが「鍛冶師になりたい」と言ってアトランティカを飛び出したときも、なんやかんやで、叔父は手助けをしてくれた。以前から旧知の仲であったエーグルの父親に、クラディオンで生活するためのサポートを頼んでくれたのだ。

鍛冶師見習いとして修業しつつ、親衛隊長の右腕として奮戦してきた日々を思い返す。竜がここに来る前の、当たり前前の日常。もう二度と戻ってくることはない光景に、寂しさを覚える。懐かしさと悲しみに浸りかけ、モルスはそれを振り払うようにかぶりを振った。

——ニアラを屠る勇者の存在。その片鱗が、目の前にある。

「……やっぱり、姉上の託宣通り、異邦人が来たのかも」

「ニアラを討つ勇者、か」

モルスとエーグルは、天を仰ぐ。浮遊する岩が幾重にも折り重なった先に、ほんのわずかな蒼穹が覗いていた。

差し込む光は頼りない。けれど、モルスには、それが灯火のように見えてならなかった。

## 託宣を聞く者、希望を示す者

ふと気づくと、そこは紫の花が咲く平原だった。心地よい風が吹き抜ける。甘くやわらかな香りが鼻をくすぐった。

自分は今まで何をしていたのだろう。ウィータはそれを思い出そうと首をひねったが、霧がかかったように霞んでしまう。

(ここは一体、どこなんでしょう……?)

ウィータの故郷・アトランティスには、こんな花は咲いていない。見たこともない花だ。けれども、ウィータがよく知る花よりは美しく、可憐で、優しい香りがする。おそらく、陸に咲く花なのだろう。

ニアラが攻めてくる以前は、アトランティスにも綺麗な花が咲いていた。その平原はもうない。星晶石の守りが失われたことが原因で、大地ごと海の藻屑と化した。残されたのは下層区クラディオオン、首都アトランティカ、最後の海洋宮となったベルク海洋神殿のみだ。

一面に広がる紫の花を見ると、心が安らぐ。こんな気持ちになっただのは久しぶりだ。ウィータたちは、アトランティス玉砕を掲げた王族たちの意見に反対し、ドラゴンやマモノたちとゲリラ戦を繰り広げている。

ウィータは屈み、紫の花を摘んだ。甘い芳香に、ゆるりと目を細める。

ざわり、と風が哭いた。星の聲が聞こえてきたような気がして、ウィータは思わず顔を上げる。

紫の海をかき分けるようにして、誰かがこちらに近づいてくる。人影は、若い青年だ。

しかし、彼の耳は尖っていなかった。肌の色も色白で、ウィータ達——ルシエ族とは違う者だ。身に纏う洋服も、ウィータ達——海の民の纏う服ではない。レンズのようなものを目につけ、髪の色は薄い栗色。けれど、こめかみ付近の髪の色は退紅色だ。

そういえば、聞いたことがある。陸の民は、動物の皮を鞣した服を

身に纏っているらしい。ウィータはその現物を見たことがないが、おそらく、今日の前にいる青年がそうなのだろう。ウィータはまじまじと彼を見つめた。彼もまた、ウィータを見つめる。

「——はじめまして」

青年は、ふわりと微笑んだ。先程までは惚けたような表情だったのに、今は柔らかな笑みを浮かべている。

彼はウィータに好意的だった。星占術師としてのウィータの第6感も、この青年が敵ではないと告げている。だから、ウィータはそれを信じることにした。

ウィータも微笑み返し、「はじめまして」と答えた。青年はそんなウィータを見返し、ゆるりと目を細めた。不意に、ウィータの胸の奥がざわめく。

これは、予感だ。星占術師としての能力が、*「運命が回り始める」*のだと告げている。以前、星詠みの力で*「竜殺剣の真の担い手が現れ、ニアラを討つ」*という託宣を受けたときと同じような確信だった。

伊達に、星占術師の卵として王宮勤めをしてきた訳ではないのだ。今は亡きウィータの師匠も、ウィータのことを「絶望と因果を断ち切り、運命を超えて希望を紡ぐ星占術師となるだろう」と言っていた。

「……貴方は、誰ですか？」

「僕はナ・サイラスリヒト・シヴィラティカ。エデンのプレロマで、星学者をやっています」

「え？ ええと……」

「名前が長いんで、サイラスと呼んでください」

青年——サイラスは、にへらと笑った。外見からは想像できない、どこかふわふわした口調だった。

ウィータは一瞬驚いたが、こういう人もいるのだと納得する。外見



と口調が一致していない例は、弟のモルスにも言えたためだ。

『モルスは、黙っていれば麗しい殿方なのですがね』  
『わかる。口を開くと、途端に残念になるよな』

自警団の同僚からよく言われた言葉だ。ウィータもそう思う。一たび口を開けば、弟はお気楽なお調子者だからだ。閑話休題。

サイラスが自己紹介を終えた段階で、強い風が吹いた。星の声が聞こえる。ウィータはハツと目を見開いて、サイラスと名乗った青年を見返した。

託宣だ。彼はいずれウィータと出会い、ウィータ達が竜を討つための力となる。しかし、その託宣以上に、ウィータは別の予感も感じ取っていた。

しかしながら、それを口に出して言うのは憚られる。心臓が荒れ狂うように鼓動を刻む音が鮮明に響いてきた。落ち着かせるように、ウィータは胸の前で手を組む。

サイラスは何も言わず、ウィータの様子を見守っている。

まるで、ウィータの託宣を待っているかのように。

「……」遙けき楽園に待つのは、奇妙な出会いと見知った人々との別れ。希望と絶望の果てに、汝は竜の謎に触れるであろう。……」  
「成程。今のが、古代文明アトランティスの星占師が持つ、星詠みと託宣の力なんですわね。……ふむふむ、興味深いです」

何が面白いのか、サイラスは興味深そうにウィータを見つめた。鳶色の眼差しは、穏やかな海を思わせるが如く澄み渡っている。奥底から溢れるのは、尽きることのない探究心。その眼差しに、ウィータは酷く惹きつけられた。

なんとか落ち着かせたはずなのに、また心臓がざわめき始める。高鳴る鼓動が何を意味しているのか、ウィータは重々理解していた。同時に、それが相手に伝わることはないということも。わかっているの

に、酷くもどかしい。

次の瞬間、世界がぶれるような感覚に見舞われた。紫の花畑にいたはずなのに、咲き誇る花が形を変える。可憐な花は、ウィータがよく知る毒花——フロワロへと姿を変えた。見知った毒々しい赤色とは違う、薄い桃色の花。ウィータはぞっとした。

あの花は、命の選別をする花だ。多くの命をふるいにかけて、価値ある者だけを生かす。

（「揺るぎのない、絶望——!!」）

ウィータがそれを本能的に理解した途端、頭の中に不明瞭な光景が浮かんだ。命の選別を担う花が咲き乱れた大地、倒れ伏して動かない人々。誰が倒れているのか、ウィータには全く分からない。

しかし、その光景は断線し、いつの間にか、紫の花が咲く花畑に戻っていた。得体の知れぬ恐怖に、身体の震えが止まらない。一体何が起きたのか。そのとき、誰かに両肩を掴れ、引き寄せられた。

顔を上げる。そこには、至極真面目な表情のサイラスがいた。彼の双瞼はウィータをしっかりと映し出している。また、心臓がざわめいた。

彼はじつとウィータを見つめていたが、ウィータがサイラスに釘付けになったことを察した途端、へにやりと微笑んだ。不思議な笑い方である。

だが、彼の笑みを見ると、なんだか勇気づけられるような気がするのだ。……それもまた、サイラスという青年の魅力なのだろう。

「大丈夫ですよ。どんな絶望が待ち受けようとも、僕が貴女の力になります。貴女たちの道を切り拓く力になります」

顔はへにやりとした笑みのままなのに、サイラスの眼差しはどこまでも真っ直ぐだった。力強い眼差しに、引きこまれそうになる。魅せられて、目が離せなくなるのだ。

次の瞬間、サイラスは至極真面目な表情になった。ウイータは思わず息を飲む。そうして、サイラスは力強く笑った。

「だから、安心してください。この命に代えても、僕が、貴女たちを勝利へと導いてみせましょう！」

「エデンの頭脳の名に懸けて」と、サイラスは締めくくる。彼の瞳には、一切の迷いも躊躇いもない。嘘もなかった。

それ故に、ウイータの背中に悪寒が走る。サイラスはこの宣言通り、ウイータ達の戦いを勝利に導くためなら、命を懸ける覚悟でいるのだ。

再び、少し前に浮かんだ「絶望」がフラッシュバックした。飛び散った残骸、倒れた軀。あそこにいたのは、誰だったのか。

それを問う間もなく、強い風が吹いた。ウイータは思わず身を庇う。サイラスの纏う外套が風に揺られた。彼は無邪気に微笑む。

刹那、ウイータは何かにつ張られるような感覚に見舞われた。紫の花畑と、サイラスとの距離がぐんと遠くなる。

「ま、待って！ 私、まだ、貴方と——」

「待っています、ウイータ。貴女の言う、「遙けき楽園」——エデンで会いましょう」

ウイータは慌ててサイラスに向かって手を伸ばした。サイラスは穏やかに微笑み返す。途端に、世界は白く染め上げられた。

\*\*\*

——欠けた夢を、見ていたようだ。

ウイータ・クリュティエはがばりと身を起こす。武装自衛団の仲間たちが、泥に浸かるかのように身を横たえていた。

周囲からはうめき声が聞こえてくる。怪我をした者の声だ。徹底

抗戦を唱えた者たちが集まるクラデイオンは、完全にジリ貧である。

(……戦況は、絶望的)

ウィータは静かに目を閉じる。星の聲に耳を傾けた。

金色の竜を討つのは、時を超え、彼方より来る異邦人。かの者たちもまた、「竜を狩る者」。

陸の民と海の民が手を取り合いしとき、「竜を狩る者」たちは青く輝く剣を以てして、絶望を吹き払うであろう――。

首都アトランティカにいた頃、ウィータが得た託宣。内容は、何も変わらない。玉砕なんてしなくても、未来を切り開く可能性は存在しているのだ。なのに、王族や役人たちはそれに耳を貸さなかった。王ですら扱えなかった竜殺剣を、異邦人が扱えるはずがないと切り捨てた。玉砕しかないのだと主張した。

特に、事実的な玉砕推進派の筆頭である叔父は「あの託宣を取り下げる。お前を逆族にするのは心苦しい」とウィータを脅してきた程だ。あまりにも弱気な脅迫が、かえってウィータの決意を固くしたのだが。『叔父上なんて大嫌いです』と書いた置手紙を残し、ウィータはアトランティカから飛び出した。

首都を追放された者は、下層区へと流れた。特にクラデイオンには、元親衛隊所属の騎士や優秀な占星術師が集まった。親衛隊長であったエーグルがいて、自警団を作ったという話を耳にしたためである。因みに、ウィータの場合は、生活の基盤をクラデイオンへと移していたモルスを頼る形でここに転がり込んだ形となる。閑話休題。

(同じアトランティスの人間として、私は彼らに同意することはできません。私たちのすべきことは、命を繋ぐため、未来を手にするために戦うことではないのですか……?)

ウィータは祈るように手を組んだ。勿論、返事はない。ここには、玉砕派の人間なんてどこにもいないからだ。

クラディオオンには徹底抗戦を唱えたものしかいなかった。玉碎派の人間たちは、生きたいという思いを握り潰している。

死相を手繰る星占術師は、死に敏感だ。ウィータも、ずっと死の気配を感じ取っている。その気配は濃く、じりじりと近づいてきていた。

それでも、諦めることはできない。それ故に、抗う。

ウィータはサイスを強く握りしめた。

(私の託宣が正しいならば――)

濃くなった死の気配と同じように、眩いばかりに輝く命の気配が近づいてくる。

死の気配に敏感な星占術師は、同時に、生の輝きにも敏感であった。命の放つ気配を、正しく把握できた。

それ故に、ウィータは感じていた。死に飲まれかけた海の国に、生に満ち溢れた光を宿す異邦人が足を踏み入れた気配を。

煌めく命の輝きが、クラディオオンに近づいてくる。もうすぐ、もうすぐだ。逸る気持ちで、ウィータは星晶石を見つめた。

「姉上。エーグルから連絡だ。クラディオオンに侵入者の陰あり。緊急事態だから、戦う準備をしとけ」ってさ」

明るい声に振り返る。ウィータの弟であるモルスが、得物である短剣をくるくる回転させ、弄んでいた。淡く輝く光が、侵入者を滅するという意志を現している。ルーンナイトの剣が放つ、命の光だ。

クラディオオンはマモノとドラゴンの襲撃をやり過ぎているにすぎない。集落を守る星晶石の力は日に日に衰えていく一方だ。しかも、上流階級の連中は、この石も玉碎用の特攻兵器として使うつもりでいる。

誰もが未来を諦めていた。諦めないと決めても、絶望が延々と広がるだけである。諦めた人間たちの気持ちも、ウィータは分からなくは

ない。退路は既に封鎖され、進むべき道は破滅以外にない——そんな状況の中で、異邦人の命の光が眩く輝くのが見えた。

「——ついに、運命が動くのですね」

「運命……」

「おそらく、ここに足を踏み入れようとしている者たちが、『狩る者』たちでしょう」

確証を持って、ウィータは託宣を告げた。それを聞いたモルスは、弾かれたようにウィータに視線を向ける。揺らぐことのないウィータの眼差しを真正面から受け止めた彼は、目を瞬かせた。

姉の言葉を確認するように、弟は駆け出す。ウィータも彼の背中に続いた。程なくして、クラディオオンに繋がる洞穴付近にたどり着く。自警団の面々が、岩陰から侵入者の様子を伺っていた。

見たことのない衣を纏った者たちが、何かを話し込んでいる。自分たちの力を示すために転がしておいたドラゴンの死体にも物怖じする様子はない。むしろ、自分たちの実力に感心している様子だった。男の耳は尖っていないし、女の耳は頭の上にならない。あれが、地上の民。上流階級の連中が野蠻と称した国から来た、異邦人だ。

ウィータは、彼らが遠い時を超えてやってきた異邦人であることを知っている。絶望を吹き払う、命の眩い輝きを知っている。

(彼らとの戦いに、私たちは負ける)

そして、そこからすべてが始まるのだ。絶望をひっくり返し、命を繋ぐ戦いが。

ウィータはその託宣を口に出さない。口に出してしまえば、かえって逆効果になるためだ。陸の民と手を取り合うという選択肢を潰してしまいかねない。

ルシエ族は、戦いになると血気盛んな一面がある。武人氣質が強く、名誉を重んじる節があるためだ。敗北を示されたなら、玉碎覚悟

で挑むような面もある。

現に、アトランティスの上流貴族や王族たちは、その誇りによって滅びようとしていた。誇りを持って抗うことを選んだ自分たちが、彼らと同じ轍を踏むわけにはいかない。

「『どうか、示して。運命は変えられるのだと』」

誰にも気づかれぬほどの声で、ウイータは呟く。それと同時に、エーグルとモルスが異邦人の前へと進み出た。



「うわあ……」

イノリは思わず声を上げた。眼前には、浮遊する岩場が階段のように広がっている。助走をつければ飛べないわけではないが、踏み外せば下へと真つ逆さまだ。

興味本位で下を覗いてみたシキとソウセイが渋い顔をし、2人の様子から何かを察したりヒトが顎に手を当てて唸った。岩場を飛び移る以外、進めそうな道は無い。

ここは低層区クラディオオン。ルシエ族繁栄の基盤となった採掘場や鍛冶場の集まる、労働階級者たちが住まう区画だ。ジュリエッタの見解では「マモノの巣窟になっているため、生存者がいる可能性は低い」とのことだが、イノリは悲観していない。

上層区が玉砕推進派で塗り固められていることは事実である。同時に、そこで救助したルシエたち曰く、「執政官に意見した気骨のある人々は、みな首都から追放された」とのこと。上が玉砕推進派と貴族の集まりならば、反対派と一般人以下の階級は下層部にいると考えた方が自然だ。

反対派で追放された人々の中に、女王ウラニアや執政官のタリエリと関わりがあるルシエが居てもおかしくない。一足飛びにウラニア

と接触できる可能性は低いが、巡り巡ってでもウラニアへたどり着ければ勝機がある。可能性は限りなく低いが、ゼロではない。

「……声が聞こえるな」

下を見るのを止め、オリハルコンの声を聴いていたソウセイが鋭い眼差しで天を仰いだ。

彼の視線の先には、浮遊する足場の階段が続いている。その先には、ひととき大きな岩場が見えた。

ソウセイが金属の声を聞いているのだと察したシキも、ルシエ族の力を使って金属の声を聞き分けようとしたらしい。真剣な面持ちで目を閉じる。

金属の声を聞けるのはATLコード継承者だけではないそうだ。ルシエ族の血を引いていれば、大なり小なり聞き分けることができるらしい。

イノリはルシエではないためよく分からないが、ソウセイとシキ曰く、「最低でも『金属がどんな様子なのか』程度は察せる」という。

オリハルコンの声を聞いたのか、シキはゆっくり目を開けた。彼女は嬉しそうに微笑む。

「本当だわ。私たちの来訪を歓迎しているみたい」

「ってことは、集落は無事ってこと？」

「おそらくね。……最も、ここを拠点としているルシエたちが、オリハルコン同様、私たちを歓迎してくれるとは限らないけど」

イノリの問いに答えたシキは、憂いを滲ませた表情のまま天を仰いだ。

アトランティスのルシエたちは排他的で、よそ者に対して厳しいきらいがある。それは事実だ。クラディオンを守護するオリハルコンがこちらを歓迎したからといって、住人たちもイノリたち異邦人を迎えてくれるとは限らない。



平時であれば、異邦人が首都の街中を歩くと詮議沙汰になる程だ。あちらでは有事ということで捨て置かれたが、今回はどうなのだろう。できれば穏便に済ませたいのだが、何が起きるかは分からない。

「なんにせよ、実際に会ってみないと分かりませんね。穏便に行かなかった場合の準備も重要でしょう」

「何かあったら、私が地上のルシェ族代表として矢面に立つつもりよ」

真剣な面持ちで、リヒトは眼鏡のブリッジを押し上げた。彼の眼差しは浮島の先——クラディオオンに居るであろうルシェ族へと向けられている。

諍いが発生する可能性を語るリヒトの横顔は、そんなことが起きなければいいと願っていた。イノリも同意見だ。潰し合いなど御免被る。

しかし、拳と掌を打ち付けて不敵に笑うシキの様子を見ると、なんだか嫌な予感がしてならない。彼女のポリシー的な意味で、だ。

「元よりそれは覚悟の上だ。玉碎に反対した気骨のあるルシェ族が、突如現れた異邦人に対して好意的に接してくれるとは思わない」

「ソウセイくん……」

「彼らは今、戦争中だ。しかも、勝算は無いに等しい。上層に住んでいた貴族階級同様、異邦人を許容できるほどの心の余裕もなさそうだ」

ソウセイは深々と息を吐く。紫苑の瞳には、憂いと不安が滲んでいた。衝突は避けられないと理解しているが故に、居たたまれない気持ちになっっているようだ。

人は心に余裕があると、相手の話を聞こうとしたり、調和を崩さないよう配慮したりすることができる。しかし、心に余裕がなくなれば、それが他者に害を成すような行動でも、躊躇わず行動に起こしてしまうのだ。

余裕がない人間は、自分を守ることで精一杯である。他者を傷

つけるのも、〃自分の身を守り、自分が傷つく被害を減らすため〃だ。手負いの獣が、相手を必要以上に激しく威嚇するのとよく似た原理である。

彼らを安心させるには、〃自分は敵ではない〃ということを知ってもらった。どれ程の時間がかかっても、相手の痛みに寄り添い、苦楽を共にし、信頼関係を築いていく——地道な行動以外、有効な手はない。イノリは手を握り締めた。

「行きましょう。彼らに希望を示すために」

嘗て祖父たちがそれを成したように、今度は自分たちがそれを成すのだ。当時の英雄たちと一緒に。

今はまだ未熟だが、嘗ての狩る者たちは一般人からのスタートだった。だから、充分挽回と成長のチャンスがある。

イノリは仲間たちを見回した。リヒトも、ソウセイも、シキも、真剣な面持ちで頷き返す。そうして、前に向き直った。

『こういう足場を見てると、六本木大瀑布思い出すんだ。落ちたら命がない的な意味で』

「死体がどこに残るか、超強酸で跡形もなくなるかの2択か。ああでも、大瀑布の対策はナノコートがあるから大丈夫なのか？」

『流石に、体内まではカバーできないけどね。それに、オケアヌスを倒した後は、あそこを流れ落ちる強酸はすべて水に変わったもん』

『あそこ、未だに大瀑布のまんまなのかなあ』『ヒ〇ズ族の夢の跡がああなるとは、誰も思ってたろうな』と、リヨウスケとミカゲが会話しながら岩場を飛んでいく。むしろ、ムラクモ13班の面々は、躊躇うことなく岩場と岩場を飛び移って行った。残ったのは、祖母のユイである。

『イノリ、行かないの？　もしかして、怖い？』

「ううん、大丈夫。助走をつけて飛び移れば問題なさそう」

ユイに声をかけられたイノリは、満面の笑みを浮かべて首を振った。周囲を見回せば、ISDFの軍人たちが何やら話し合っている姿が伺える。どうやら、ゲートがある岩場の安全を確保してくれたらしい。

ゲートの出入り口を守っている軍人の中に、ヨリトモとユウマの姿はない。彼らの専門は戦闘だという点からして、一足先に奥地へ向かったことは明らかだろう。ナガミミもそれに気づいたようで、激を飛ばしてきた。

『オマエら、ISDFに後れを取るな！ 主導権を取り戻せ!!』

「了解。行こう、みんな！」

「はい！」

「ええ！」

「ああ！」

イノリの号令を聞いたリヒト達は二つ返事で頷く。そうして、勢いよく駆け出した。

大地を蹴って、次の岩場に飛び乗る。思った以上にすんなりと飛び移れた。仲間たちの中で一番運動神経が悪い（但し、S級能力者のため、一般人よりは上である）リヒトも、問題なく飛び移れたようだ。

その調子で飛び移っていくと、ISDFの2人——ヨリトモとユウマ——と祖母を除いたムラクモ13班員がいた。前者は何とも言えなさそうな表情で下を覗き込み、後者は何やら話し合っていた。

「どうかしたんですか？ 下に何が……——！」

イノリたちもISDFの2人に続いて下を覗き込む。そこには、首都アトランティカでミカゲが屠った帝竜トリスアギオンがいた。と言っても、トリスアギオンはもう動くことはない。奴の命はとうに燃

え尽きていたからだ。

白い大天使の肢体には、幾重もの切り傷が刻まれていた。ミカゲの放った奥義、乱れ散々桜によるものだ。改めて見ると、奥義の威力、それを放った人間の實力がありありと示されている。祖父の強さを目の当たりにして、イノリはぐくりと唾を飲む。

最終目標として、イノリたちは第3真竜ニアラを倒さなくてはならない。帝竜クラスで壊滅寸前まで追いつめられていたイノリからしてみれば、弱体化していて辛勝だったとはいえ、帝竜を屠った祖父の強さは尊敬する。勿論、一撃で帝竜を屠ったユウマも凄いが。

『今回の最終目標が全盛期のニアラだとするなら、帝竜相手に苦戦してると難しいかも……』

『帝竜相手に総力戦をしかけていた我々からすれば、雲の上のような話だな。掴めない訳ではないが、その距離が遠い。リハビリだけでは足りないかもしれんぞ？ ミカゲ』

「おいおい。まーた気苦労が増えるってか」

シラユキが眉間に皺を寄せ、ヨツミが顎に手を当てて唸る。2人の言葉を聞いたミカゲはため息をついた。旧ムラクモ13班の面々は、例外なく真剣な面持ちで思案し始める。

イノリが彼らの横顔を見ていたとき、不意に、隣から密やかな笑い声が聞こえた。笑ってはいけないのだが、堪えられないと言わんばかりの響き。

隣を見れば、ユウマが楽しそう——けれどどこか挑戦的——な笑みを浮かべて、トリスアギオンの骸を眺めている。イノリは目を瞬かせた。

自分の横顔を見つめられていることに気づいたのか、ユウマはイノリの方へ向き直った。彼は悪戯がばれた子どものように苦笑し、小声で打ちあげる。

「実は俺、楽しみにしてるんです。真竜と戦うことも、キミやキミのお

じいさんたちと共闘することも」

「あはは。実は私もなんです」

色白の肌をほんのり染めたユウマは、子どものように照れ笑いしていた。

見ているこちらも照れくさくなって、イノリも苦笑しながら頷く。

「おじいちゃんと一緒に戦うのも、ユウマさんと一緒に戦うのも、すごく楽しみにしてて」

イノリはくすくす笑いながら、ミカゲの背中を見つめた。8年前、イノリたちを守ってくれた大きな背中が目の前にある。

祖父が生きていたときは、いつか一緒に肩を並べて戦える日が来るのだと、信じて疑わなかった。彼が亡くなった後は、もう二度と叶わない夢なのだと思っていた。

なんだか胸が熱くなってきた。イノリは思わず、小さく手を握り締める。逸る気持ちを抑え込みながら、イノリはユウマの方へ向き直った。自然と口元が綻ぶ。

「だから、これからよろしくお願いしますね。ユウマさん」

イノリの言葉を聞いたユウマは、惚けたように目を瞬かせた。ややあつて、彼もまた、ふつと笑みを浮かべる。

「はい。俺の方こそ、よろしくお願いします」

「……………おい、ユウマ」

互いに顔を見合わせて笑っていたとき、背後から控えめな声が響いた。振り返れば、これ以上ないくらいのかめっ面をしたヨリトモの姿があった。

彼は中途半端に手を伸ばし、空中で彷徨わせている。ユウマは「あ」

と間拔けな声を漏らした後、すぐにヨリトモの元へと駆け出した。

ISDFの2人は何かを話し合った後、岩場を飛び移っていく。彼らの姿はあっという間に見えなくなった。ミカゲやイノリたちもそれに続こうとしたときだ。

「なあ、ちよつといいか？」

「おじいちゃん？」

「話がある。と言つても、身構えるようなモンじゃないけどな」

祖父に呼び止められ、イノリは振り返る。ミカゲは真面目な面持ちで、イノリたちノーデンス13班を見つめていた。

『話なんて後にしろ。立ち止まってる暇はねえんだ』

そんなミカゲに苦言を呈したのはナガミミだ。このマスコット―ノーデンス側の上層部たちは、Code:VFDの主導権をISDFに握られることを嫌がっていた。特に、ジュリエッタはISDFに並々ならぬ敵意と遺恨を抱いている。彼の言動からして、『ISDFと一緒に行動する』ことすらストレスになっていそうに思えた。

ISDFが絡んだ事象の場合、ジュリエッタは冷静でいられない。検体を燃やしてデータを消すと啖呵を切った彼が、渋々ISDFとの共同作戦に頷いたのは、社長であるアリーの采配があつたためだろう。彼女が冷静なのは、ただ単に割り切っているか、彼女個人にISDFとの遺恨が存在しないためだ。そうやって、上層部はバランスを取っているらしい。閑話休題。

「えーと、ブナイチのアドレスはどれだったかな。『ナガミミ様の個人アドレスが知りたい』つて言つてたから、聞いたら喜ぶぞお？」

『……………』

ナガミミを黙らせ、ミカゲはイノリたちへ向き直った。

「ノーデンス13班のリーダーは決まってるのか？」

「え……？」

「決まってるなら、今のうちにはつきりと決めておいた方がいい。いざというとき、矢面に立つ代表者が必要だ。実際、俺たちもそんな感じだったしな」

藪から棒にそんなことを問われて、イノリたちは目を白黒させた。

セブンスエンカウト攻略からCode:VFDに協力することにしたイノリたちだが、これまで、明確な「ノーデンス13班のリーダー」は存在して居なかったように思う。イノリ、リヒト、ソウセイ、シキの4人は幼馴染同士で旧知の仲であるというのも影響していたのだろう。

それ故、イノリたちは日常の延長線——イノリが他の3人のまとめ役になる——の形を崩すことなくやってきた。旧ムラクモ13班の面々が合流した後も、身内同士ということもあって、和やかな雰囲気は変わらないままである。

人類が身を寄せ合って崖っぷちを駆け抜けた80年前とは違うが、時代を超えて人や異種族と交流する必要はあった。実際、今回の任務の目標は『竜殺剣の材料の確保とルシエ族の保護』だ。彼らに交渉しに行くのに、代表者が決まらないまま行くのは問題である。

旧13班の実質的なリーダーは祖母のユイだった。戦場での指揮と民間人との交流窓口でその才能を発揮したという。

勿論、リーダーだけがすべてを背負うのではなく、他の面々も、それぞれの得意分野で矢面に立っていた。

ミカゲはサブリーダー兼参謀役としてユイをサポートしていたし、問題が発生した際は「ムラクモの汚れ役」として矢面に立った。東雲兄妹は13班とクエストカウンター担当者であるチェロンの繋ぎ役になっていたし、リヨウスケは技術部にデータを提供していた。ヨツミとシラユキは、ルシエクローンと避難住民の交流および軋轢解消のために走り回っていたと聞く。

「年の甲と功績から考えると、ミカゲさんが妥当だと思えます」  
「やめてくれ、リヒト。ムラクモ<sup>俺</sup>13<sup>ち</sup>班の時代はとうに終わったんだ。  
これでも老体に鞭打ち立ってるポンコツなんだぞ」

リヒトからの推薦に、ミカゲはしかめっ面をした。反ムラクモ派議員や報道陣からしつこく付きまとわれたときの表情だ。

経験則からして、ああいう表情を浮かべたミカゲは頑として領かなかった。代わりに、と、ミカゲは言葉を続ける。

「リーダーが決まったら、全力でそのサポートとバックアップに協力させてもらう。リーダーを蹴って他者に押し付けるんだ、それくらいの責任は果たすさ」

『……うわー、ユイにリーダーやらせたときと同じ条件だ……』  
『なら大丈夫だよ。ミカゲくん、宣言通り、私をサポートしてくれたし』

したり顔で宣言したミカゲの真横で、ヒイナが眉間に皺を寄せながら苦笑した。どうやら、祖父の言葉は「80年前の焼き直し」らしい。

対して、そんな伴侶の姿を見たユイは力強い笑みを浮かべて頷いた。若紫色の瞳は、ミカゲに対する惜しみない信頼で満ちている。

自信満々なユイの姿を目の当たりにしたヒイナは、『いやあ、お熱いねー』等と言いながら、苦笑しつつ肩をすくめていた。閑話休題。  
イノリたちは互いに顔を見合わせる。誰もが難しい顔をして唸っていた。

「リーダーを決めると言われましても、今更のように思うんですよね。僕は率いるより、参謀役の方が性に合ってますし」

「私がリーダーになった場合、まどろっこしいのが嫌いだからって猪突猛進した挙句、自軍を壊滅させる末路しか見えないのよね……。周



りから脳筋って言われてるし」

「むしろ、イノリ以外で俺たちを纏める人間の姿なんて思い浮かばないな」

「了解。期待に応えますー！」

リヒトが、シキが、ソウセイが、神妙な面持ちでイノリの方へと向き直った。イノリに伺いを立てるかのような眼差しが向けられる。指名されたのならば、その期待に応えるのが筋だろう。イノリは満面の笑みを浮かべて頷き返した。

これでノーデンス13班のリーダーは決まった。イノリたちはミカゲの方へと向き直った。祖父はユイとイノリを見比べた後、神妙な顔をしてうんうん頷いていた。「やっぱり、ユイに似たんだよなあ」と呟いた後、ミカゲは満足げに微笑んだ。

先程から沈黙したままのナガミミに、話し合いが終わったことを伝える。ISDFに引き離されるということを危惧していたナビゲーターは『遅い』と文句を言いつつ、ナビゲートを再開した。

イノリ、リヒト、ソウセイ、シキが浮島を飛び移っていく。程なくして、一際大きな浮島にたどり着いた。

異邦人を迎えるかのように、青い岩場の奥にぽっかりと穴が開いている。

先行したヨリトモとユウマの姿がない。おそらく、この穴の奥へと進んだのだろう。

「洞窟、か」

「天然の要塞ですか。厄介ですね」

「でも、立ち止まってる暇はないわ。行かなくちゃ」

大穴を眺めたソウセイが唸り、リヒトは眼鏡のブリッジを押し上げる。シキは不敵な笑みを湛え、拳を掌に打ち付けた。

仲間たちの様子を一瞥し、イノリは前を向く。「行こう」という号令に、反対する者はいなかった。



『おじいちゃんと一緒に戦うのも、ユウマさんと一緒に戦うのも、すつごく楽しみにしてて』

そうやって笑ったイノリは、綺麗な空色の瞳を彼へと向けた。80年前の英雄にして彼女の祖父——渡来ミカゲへ。

絶対的なものに対する尊敬と崇拜。渡来ミカゲが現れる前までは、ユウマだけに向けられた特別なモノだ。どこまでも綺麗な空色は、ユウマではない相手を映している。ユウマ以外の誰かを。

自分の思考がそこに至った途端、胸の奥に走った痛みを何と言おう。痛みの後に溢れだした、ドロドロとした衝動を何と言えはいいのだろうか。「どうして俺を見ないんだ」と叫びたくなったのは、何故。

しかし、その衝動は、イノリがユウマに視線を向けた途端に拡散した。彼女がこちらに向けた眼差しは、ミカゲに向けた眼差しとは違う。どこか密やかな輝きを帯びた空色は、如月ユウマという存在だけを見つめている。

空色の双瞼に捕らえられたように思ったのは何故だろう。暗い衝動を押し流し、代わりに湧き上がってきた甘やかな衝動を何と言おう。苦しいはずなのに、苦しくない。

ユウマは何も知らない。理解することができない。それが何を意味しているのかも、それが一体何を指しているのかも、その感覚をどうすべきなのかも。

「……………今は、任務の遂行が優先だ」

思考を切り替えるように呟いて、手を握り締める。

任務はまだ、始まったばかりなのだから。

## 陸のルシエと海のルシエ

洞窟内部は、青光する鉱石によって照らし出されていた。澄んだ水が上層部から流れ落ち、天井には鍾乳洞が幾重もぶら下がっている。平時なら「幻想的な光景」だと言えただろう。周辺に赤い葬送花<sup>フロウワロ</sup>が咲いておらず、ドラゴンが闊歩してさえいなければ。

道中のドラゴンを狩りながら、イノリたちは奥地——奥地にあるであろう集落——を目指していた。

ジュリエッタの予測通り、クラディオンはドラゴンとマモノの巣窟と化している。アクアリアやドラゴハンマードがウヨウヨしており、一般市民が迂闊に出歩けば、文字通り一瞬で捕食されるだろう。

勿論、そんな人物がいれば即救助している。大分奥へと進んだはずだが、現地住民の姿は見かけていない。ナガミミも生体反応を探っているようだが、それらしきものは見つからないようだ。

既にこの区画内を闊歩していたドラゴンたちは狩り尽している。今回は「経験を積む」という名目で、ヨリトモ<sup>I</sup>とユウマ<sup>D</sup>から雑魚ドラゴン<sup>F</sup>を13班に譲ってもらったという形になっていた。

『このフロアのドラゴンを全部狩る』——選択肢はマアマアじゃねーか？ オマエ等は経験が圧倒的に足りないからな』

「人類戦士に五体を引きちぎられ、サンダーブレスで消し炭にされ、S KYで滅多刺しにされてもまだ『経験が足りない』と?」

ナガミミは茶化すような口調で軽口を叩いた。それを聞いたミカゲは、ナガミミに対して非難の眼差しを向ける。よく見れば、目に光がない。

「俺は後、どんな経験を積みばいいんだ? ゾンビの首がもげるのを目の当たりにし、超強酸で人間が溶ける現場に居合わせ、竜になった姉と人類戦士をこの手で屠り、屍累々のライバル組織の痛々しい光景を目の当たりにし、獅子身中の虫と化した議員と口で攻防を繰り広

げ、仲良くなった住人や戦友たちがドラゴンに嬲り殺しにされる光景  
を見ていることしかできなかった経験は何だったのかと

「おじいちゃん、落ち着いて」

『アンタは……まあ、その、なんだ。とりあえず、リハビリを頑張れ。  
あとはメンタル関連』

イノリは思考回路が脱線してしまったミカゲをゆする。あまりの  
憔悴っぷりに気圧されてしまったのか、ナガミミは何とも言えなさそ  
うな様子で呟いた。

程なくして、ユイがミカゲを諫めて沈静化させる。ミカゲも正気に  
戻ったようで、バツが悪そうにナガミミへと謝罪していた。閑話休  
題。

「本当に、この先に生存者がいるんでしょうか」

周辺を確認したユウマが、ぽつりと呟いた。翡翠の瞳は怪訝そうに  
揺れている。

ユウマが生存者の存在を疑問視する気持ちは分からなくもない。  
オリハルコンの声を聞き取れる存在——シキとソウセイが居なけれ  
ば、現時点で「集落は無事である」ことなど掴めなかつたはずだ。

だが、彼の表情はすぐに変わることになる。数歩先にいたヨリトモ  
が足を止めたためだ。ヨリトモが指し示した場所には、真新しい足跡  
がある。生存者に繋がる証拠を目の当たりにし、ユウマはようやく納  
得した様子だった。

証拠は足跡だけではない。視線を上げれば、目の前にはドラゴンの  
死骸が転がっている。人一人を丸飲みできる程の大口が特徴的なド  
ラゴン、ドラグメガマウスだ。奴の体に刻まれた裂傷は、武器による  
ものである。

「まるで、集落へ足を踏み入れようとする生き物に対する警告ですね。  
この傷口からして、人数は多そうです」

「そうだな。ある程度訓練され、統率された兵团だと考えるのが妥当だろう」

死体の様子を確認したりヒトが分析し、彼の言葉をヨリトモが引き継ぐようにして補足した。2人とも表情が厳しい。ドラゴンを屠った兵团がこの近辺に居るとなると、アトランティカで対峙した騎士たちとは比べ物にならないことは明白だ。

ここから先はルシエ族たちの領域である。このまま正直に踏み込んだ場合、トラップや戦闘は避けられないだろう。周囲を見回したが、迂回路らしき道はない。洞窟内を流れる清流によって、道は一本道しか存在していなかった。

「どうしますか？ このまま進むか、トラップを避けるか——」

「リーダー、1ついい？」

こちらに意見を訊ねようとしたユウマを遮り、シキが躍り出た。言葉が封殺された形になったユウマはほんの一瞬ムツとしたようだが、すぐに表情を取り繕った。

後ろの方では、ヨリトモにユイが何かを説明している。おそらく、「13班のリーダーがイノリに決まった」ことについてだろう。イノリはシキの意見を促した。

「この先にトラップは無いわ。あるとしたら、戦いよ」

「誇り高き同族が、畏なんて姑息な手段に頼るわけない」とシキは断言する。澄み切った深緑の瞳は、同族に対する敬意と信頼で満ちていた。

「ルシエは——私もそうなんだけど、正々堂々を好む気質があるわ。余程のド屑じゃなければ、不意打ちで奇襲なんて卑劣な真似なんて取るはずない」

「だが、アトランティカで遭遇した衛兵は難癖付けて襲い掛かってきたぞ。まるで世紀末のような治安だった」

「それ本当なの!? いくら有事とはいえ、ルシエの風上にも置けないわ!」

ソウセイがアトランティカで出会った衛兵のことを議題に挙げた途端、シキが眦を吊り上げ憤慨した。彼女はそういう輩と同列に見られることを嫌う。

もしも彼女が同行していたら、間違いなく淑女の嗜み（物理）が炸裂していたであろう。その場合、衛兵は顔面崩壊程度で済むだろうか。嫌な予感しかしらない。

イノリの予感を肯定するかのように、シキは拳に掌を打ち付けた。ぱん、と、乾いた高音が鍾乳洞内に反響する。彼女の表情はどこまでも真剣だった。

本題に入ると言わんばかりに、シキはイノリへ向き直る。

深緑の瞳には一切の揺らぎはない。

「ここはルシエ族の誇りと風習に法って、真正面から小細工なしで挑むべきよ。ドラゴンの死骸程度で引き下がってしまったら、『共闘する相手として不足である』とみなされてしまうわ」

「ルシエの兵団に対して、『私たちの戦う意志と勇気』を示すってこと?」

「その通り。そのためにも、私たちはこのまま正面突破すべきだと思う」

イノリの問いに、シキははっきりと頷いた。

「陸の民の代表として、陸のルシエの代表として、私は海のルシエたちと向き合う必要がある。……だからお願い。今回の件、私に任せてほしいの。私の言葉を信じて、進んでほしい」

「シキちゃん……」

力強い深緑の瞳。真夏の日差しを浴びてのびのびと生い茂る木々を思わせるようなそれは、誇りと意志で満ちている。

多分、イノリが断つたら単独で進もうとするだろう。イノリに被害が及ばないよう、十分配慮をした上でだ。

彼女の眼差しを真正面から受け止めたイノリは、力強く微笑んで頷いた。途端にシキが表情を輝かせる。

「但し、私も矢面に立つよ。陸の民の代表として、ノーデンス13班のリーダーとして」

「2人だけに責任を負わせるつもりはないぞ」

「僕たちも一緒に行きますよ」

イノリの言葉を引き継いで、ソウセイとリヒトも頷いた。伊達に、人生の半分以上の年月で親友をやってきた訳ではない。

シキが嬉しそうに表情を綻ばせた。「ありがとうみんな！ 大好き!!」と言って、彼女はイノリたちに飛びつく。イノリたちもそれを受け止めた。

優しい視線を感じ取って振り返れば、旧ムラクモ13班員たちがこちらを見守っているところだった。ユイとシラユキは感慨深そうに目を細め、ヒイナとマサハルが満足げに頷いている。ヨツミとリヨウスケは感極まったように目を潤ませていた。

「ところで、お前等はどうするんだ？」

「え？」

「代表者だよ。陸の民の代表にして、ISDF代表。誰が矢面に立つて、交渉および戦闘に臨む？」

イノリや旧ムラクモ13班員たちに影響されたのか、ミカゲはちらりとヨリトモに視線を向けた。ISDF側から参加しているのは、ヨリトモ率いる特殊戦術部隊である。

部隊の長という点では、ヨリトモが矢面に立つのが普通だろう。イノリはそう考えていた。しかし、イノリの予想は、ヨリトモの隣にいたユウマによつて覆された。

「じゃあ、俺が矢面に立ちます」

「ユウマ？」

「提督、今回は俺にやらせてください。何事も挑戦してみろと言っていたじゃないですか」

部下が自ら立候補するとは思っていなかったのだろう。ヨリトモは目を丸くしてユウマの名前を呼んだ。

ユウマは涼し気な笑みを崩さず、意欲を示す。ヨリトモは顎に手を当て唸った後、ハツキリと頷き返した。

教え子とは正反対に、興味深そうにユウマを見たのはミカゲである。紫水晶の双瞼が瞬いた。

ミカゲからの視線を感じたのか、ユウマは彼の方へと向き直った。そのまま、調子を崩すことなく、ユウマは言葉が続ける。

「——それに、言われっぱなしで終わるわけにはいきませんから」

——しかしながら、ユウマの瞳には滾る炎が宿り、声の調子にも刺々しさがあつた。敵意というにはあまりにも無垢で、敬意というにはあまりにもドロドロしている。強いて言うなら、対抗意識。

イノリにはユウマの発言は理解できなかった。だが、ミカゲは彼の言葉から何かを察したのだろう。目を瞬かせた後、眉間に皺を寄せた。まるで「しようもない事実に気づいてしまった。気づかなければよかった」と言わんばかりに。

ユウマは笑いながら「泥をかぶるのが軍人の仕事」ですしね」と締めくくったが、ミカゲは何か言いたそうにヨリトモへ向き直った。ヨリトモも渋い表情を浮かべていたが、部下の自主性を信じることにしたらしい。黙したきり、何も語らなかつた。ミカゲも追及すること



をやめたようで、小さく肩をすくめた。

矢面に立つ代表者たちが決まったところで、イノリたちは前を向いた。ドラグメガマウスの死骸が転がる先に、奥へと続く一本道がある。

この奥には、クラディオオンの勇敢な兵士たちが待ち構えているのだ。陸の民／＼U・E・77年代表の人間として、気を引き締めなければならぬ。

イノリたちが決意を新たに、一歩踏み出したときだ。奥の岩場から人影が2つ、姿を現す。浅黒い肌に尖った耳——ルシエ族の青年であつた。

(……あれ?)

青年たちの様子に違和感を覚えて、イノリは思わず目を瞬かせた。

夕焼け色の髪にバンダナを巻いて、青の装束に身を包んだ青年の手には、鉈が不自然な形で握り締められていた。『今にも投擲しようとしたが、結局投擲することが叶わぬままだった』と言わんばかりの体勢だ。こめかみからは嫌な汗が流れている。

心なしか、彼の隣にいた青年——白銀に近いペールグリーン色の髪を束ね、薄緑の装束に身を包んだ方——も、『台詞を忘れた役者がアドリブで取り繕おうとしたら、收拾がつかなくなった』かのように視線を彷徨わせていた。どちらにも、挙動不審という共通点がある。

気のせいではなければ、岩場の裏で何かがこそこそと引つ込んでいく姿が見えたように思う。あの格好は、王都で見かけた衛兵と同じ装備だ。ルシエ族の兵士たちはひそひそと話し込んでいる。彼らはイノリたち異邦人——特に、陸から来たルシエであるシキに向けられていた。

「あれが、ウィータ様が仰っていた『ニアラを討つ者』なのか?」

「あの同胞、私たちとは違う服を着ているわ」

「陸の国から来たルシエらしい。アトランティスから陸に向かうなん

て、変わってるよな」

ルシエたちの会話に耳を傾ける。異国で暮らす同族／那雲シキの存在は、アトランティスの民からしてみれば珍しかったのだろう。

他の場所からも視線を感じて、イノリは別な方向へと目を向けた。そちらの方でも、兵士たちがひそひそと会話している。

「なあ、どうするんだ？ エーグル団長とモルス、あの体勢のまま前に出たぞ？」

「……そりゃあ、さ。異邦人と言えど、同胞から『ああいうこと』を言われたらなあ」

「今まさに、我々は『異国の同胞』の言うド屑になろうとしていた訳か……」

兵士たちの会話を耳にしたイノリは、ほぼ反射的にシキへと視線を向けた。幸か不幸か、彼女には兵士たちの話は聞こえていないらしい。深緑の瞳は、青装束を身に纏った青年へと向けられていた。

青年たちはイノリたちの存在に警戒している様子だった。相手の出方を伺うように、じつとこちらを見返している。

青装束を身に纏った騎士も、薄緑の装束を身に纏った騎士も、いつでも得物を構えて攻撃を仕掛ける体勢を取っていた。

しかし、シキの眼差しに込められた想いは伝わっているのだろう。彼らが得物に添えた手が、ほんのわずかだが震えていた。

重苦しい沈黙の中で、イノリは一步前に出た。

押しつぶされそうになるのを踏みとどまるようにして、第一声を紡ぐ。

「初めまして。私はノーデンス・エンタープライゼスの特務部署・13班に所属している渡来イノリです」

「俺はISDF極東本部特殊戦術部隊所属、如月ユウマです。ノーデンス・エンタープライゼスの13班とは、作戦行動を共にしています」

重苦しい空気の真ん中に、大きな風穴が空いたような感覚。この場に流れていた空気が一変したのを肌で感じとる。やや遅れるような形で、ユウマがイノリの自己紹介に続いた。彼の言葉を引き継ぐようにして、イノリは自分たちがこの地に足を踏み入れた理由を告げる。

「真竜ニアラ打倒のため、アトランティスの滅びを覆すため、私たちは東京——陸の国からやって来ました」

「なんだと……!?!」

青装束を身に纏った青年が眉間に皺を寄せた。彼の言葉を皮切りに、洞窟中に動揺が広がっていく。イノリたちを値踏みするような眼差しが、あちこちから突き刺さってきた。

内心、とても居心地が悪い。しかし、イノリは真っ直ぐ青年たちを見返した。自身の実力はミカゲやユウマには遠く及ばないが、この意志だけは誰にも負けていない。

「みなさん、武器を収めてください。彼女たちこそ、託宣に提示された『狩る者』——竜殺剣の担い手となる勇者たちです」

そのときだ。岩場の奥の方から、1人の女性が姿を現した。

海岸の波打ち際を思わせるような蒼と白の髪が揺れる。金色に輝く瞳は、イノリたちを——ひいては希望そのものを、揺らぐことなく見据えてきた。

アトランティカで出会った神官が身に纏っていたローブとは違い、白と水色を基調にしたワンピース風の巫女衣装にマントを羽織っていた。

兵士たちの中でも、彼女が身に纏っている服は人一倍技巧が施されている。下層区に流れ着く前は、それなりの地位と身分を有していたことが伺えた。

短剣を得物にしている騎士たちと違い、彼女の得物は大きな鎌だ。

不気味なそれは、死神を連想させる。

神秘的な雰囲気纏う女性に、イノリたちの眼差しは釘付けだった。

「それは本当か？ ウイータ」

「はい」

青装束を身に纏った騎士の問いに、女性——ウイータは迷うことなく頷いた。彼女の名前には聞き覚えがある。首都で出会ったアトランティスの民が口にしていた名前だ。

文官や兵士から様付けで呼ばれていたし、執政官のタリエリも彼女の名前を口にしていた。特に後者は、ウイータという人物に対して、強い感情を抱いているようだった。

イノリがそんなことを考えていたとき、ウイータはこちらに視線を向けて会釈した。柔らかな微笑みには一切の敵意がない。イノリたちを味方と認識し、信頼している。

「私はウイータ・クリュティエ。嘗て、アトランティスの王宮に仕えていた占星術師です」  
フォーチュナー

「占星術師？」

「はい。星の声を聞きとることで、未来を見通す力を有する術師たちの総称です。戦場では鎌を携え死相を操って、味方の死を覆し、敵の命を刈り取ります」

柔らかな態度を崩さぬまま、ルシエ族の占星術師——ウイータ・ク

リュティエは、己の得物を指し示した。彼女の手には不気味な大鎌が握られている。死を手繰るといふ言葉からして、物騒な気配がした。

丁寧な物腰と不気味な大鎌——なんともミスマッチな光景である。

ウイータは穏やかに微笑みながら、自分の前に立つ青年たちを紹介した。

夕焼け色の髪に青装束を身に纏った騎士はエーグルといい、クラ

デイオンの私兵団を束ねる団長だという。つまり、後ろの方で転がっているドラグメガマウスを狩った兵団の代表者だ。その実力は計り知れない。

対して、ペールグリーンンの髪に薄緑色の装束を身に纏った騎士はモルスといい、ウィータの弟らしい。彼もまた、私兵団に所属してドラゴンと戦っている。平和だった頃は鍛冶師見習いとして修業に明け暮れていたという。

「では、集落の長の元へ案内しま——」

「待ってくれ、ウィータ。その前に、どうしても確かめたいことがある。……こいつらが本当に、ニアラを狩る者なのかを」

イノリたちを案内しようとしたウィータを、エーグルが引き留めた。言葉にはしていないものの、モルスも同じ気持ちらしい。眼差しで姉へと訴えていた。

ウィータは一瞬不安そうに表情を曇らせたが、二つ返事で頷き返した。「構いませんか？」という彼女の問いに、イノリは2つ返事で頷き返す。

「イノリたちが本当に、託宣で示された英雄なのか——そう疑問に感じるのは当然のことだ。戦いになることは想定済みである。」

戦いの形式は、代表者による一騎打ち。アトランティスの騎士たちが行う決闘の形式だという。武装私兵団の代表はエーグルとモルスだ。

つい数刻前の会話を思い出し、イノリはシキへと視線を向けた。シキも迷いなく頷き返し、前が出る。

「代表者チームのリーダー」でないことに驚いた／不満なのか、エーグルの眉が怪訝そうに吊り上げられた。

「お前は？」

「ノーデンス・エンタープライゼスの特務部署・13班に所属している、那雲シキよ。陸の民の代表として、陸のルシェの代表として、貴

殿との一騎打ちを所望するわ！」

「……分かった。クラディオン自警団団長として、海の民の代表として、その申し出、受けさせてもらおう」

堂々とした態度を崩さぬシキに、エーグルは真剣な面持ちで頷いた。

その向こう側では、モルスとユウマが対峙している。どうやら、I S D F側からはユウマが一騎打ちに挑むらしい。イノリの視線に気づいたのか、ユウマはゆるりと目を細めた。

「自分は大丈夫」と、翡翠の眼差しは自信満々に告げる。イノリも微笑み、頷き返した。ユウマなら大丈夫だろう。イノリはシキへと視線を戻した。シキとエーグルが対峙する。

ユウマとモルスの審判役は、自警団に所属する騎士だった。シキとエーグルの審判役はウィータだ。戦闘開始の合図と共に、4人が勢いよく駆け出した。



金色の竜を討つのは、時を超え、彼方より来る異邦人。かの者たちもまた、「竜を狩る者」。

陸の民と海の民が手を取り合いしとき、「竜を狩る者」たちは青く輝く剣を以てして、絶望を吹き払うであろう――。

ウィータの予言を思い出しながら、エーグルは目の前の少女――シキと戦いを繰り広げていた。

陸からやって来た、異国の同胞。短剣にマナを纏わせ戦う騎士／ルーンナイトとは違い、シキは己の拳にマナを込めて打ち込んでくる。陸の国に伝わる武術なのだろう。

短剣と拳がぶつかり合い、派手に火花が散った。エーグルは即座にシキの拳を撃ち払うと、勢いそのままに彼女を斬り付けた。彼女の表情が痛みに歪む。

しかし、次の瞬間、シキが笑みを浮かべた。まるで、獲物が罠にか

かったことに喜ぶ漁師の表情——エーグルがそれに気づいたときにはもう遅かった。

「その程度ッ!?」

「ぐッ!」

みぞおちに一撃が入った。エーグルの体がぐらりと傾く。迫る追撃をなんとか躲して、エーグルは態勢を整えた。

素早さではエーグルの方が上だが、シキの一撃は重く侮れない。しかも、彼女の武術は「後手に回ることを前提にした」攻撃も持っている。

迂闊に攻撃すれば、即座に反撃の餌食になるのだ。この攻撃の存在だけで脅威である。陸の国に伝わる武術も、アトランティスに伝わる武術とは引けを取らない。

「拳に気を……続けていくから!」

シキは一撃叩きこみ、その勢いのままもう一撃を喰らわせた。辛うじて直撃は避けたが、身体に違和感を覚える。マナの流れが乱されたような感覚だ。

彼女が嗜む武術は、身体を巡るマナを自在に操ることができるらしい。自身の傷をそうして治療したように、それは敵味方に適応される。

再び打ち合いを再開させた。刃と拳がぶつかり合い、火花を散らす。いくら傷ついても、シキは決して止まることはない。逃げることなく喰らいついてきた。

陸の民たちは「ニアラを倒しに来た」と言う。ウィータもまた、「彼女たちがニアラを倒す者だ」と断言した。

しかし、エーグルにはどうしてもそうは思えなかった。シキの一撃をいなし、エーグルは距離を取った。

「今の打ち合いで、よく分かったぜ。——少なくともお前は、ニアラの尻尾にも触れねえってことがな！」

エーグルは躊躇うことなくマナを解き放つ。シキは次の一撃が必殺技であることを察知したのだろう。表情をこわばらせた。勿論、エーグルは止まらない。

「——これで引かなきゃ、死ぬぞ」

警告と共に、短剣に己のマナを収束させた。マナに呼応して、この場に吹雪が舞い始める。シキは逃げない。逃げようとすらしなかった。

むしろ、真正面から受け止める覚悟を固めたようだ。深緑の瞳はエーグルから逸らされることはない。

「そんなの、やってみなければ分からないわ」

——彼女の声が、やけに鮮明に響いた。

思わずエーグルは目を瞬かせる。

拳を構えて、シキが不適に笑い返した。

「貴方の想い、全力で受け止める！　それが、淑女の嗜みというもの……!!」

一瞬、その眼差しに引きこまれたような心地になったのは何故だろう。深緑の双脛に魅せられる。揺らぎかけた己を律しながら、エーグルは得物を掲げた。

「おおおおおおおおおおおおおッ!!」

エーグルのマナを纏った短剣は、青く透き通った槍へと姿を変え



る。穂先から冷気が解き放たれた。シキの姿は、あつという間に吹雪に飲まれる。

吹雪が晴れた先には、巨大な氷塊が鎮座していた。それ目がけて、エーグルは槍を構えて突進する。勢いそのまま、その一撃を氷塊へと叩きこんだ。

(他愛もない)

自分の勝利を確信し、エーグルは戦闘態勢を解いた。陸の民の代表者であるイノリが表情をこわばらせている。

この場を覆い尽くしていた冷気の白煙が晴れていく。そこに広がっていた光景に、エーグルは思わず息を飲んだ。

立っていた。冷気で肌を焼かれ、氷によって刻まれた裂傷から血を滴らせ、荒い呼吸を繰り返しながらも、シキは健在だった。

「……………危なかった……………」

満身創痍になりながらも、シキは戦う姿勢を崩さない。よろめいても、ボロボロになっても、深緑の瞳に宿る輝きは陰っていなかった。いや、それよりも、ニアラの尾にすら触れられない少女が、エーグルの奥義に耐え抜いたのだ。一体全体、何が起こったのだろう。

「お前、オレの奥義をどうやって!?!」

「そんなの、気合に決まってるじゃない……………」

根性論? そんなもので、エーグルの奥義に耐え抜いたというのか。この少女は。

「拳に気を……………」

次の瞬間、シキが大地を蹴る。呆気にとられていたためか、エーグ

ルの反応が遅れた。

(しまっ——！)

「——ここで決める！」

防御する前に、シキの一撃がみぞおちに叩きこまれた。ただの正拳突きではなく、暴力的なマナを込めた正拳突きだ。

堪らずエーグルは体勢を崩す。勿論、シキは足を止めない。次の瞬間、彼女が己のマナを解き放った。

シキとエーグルの立場が逆転する。今度は彼女の攻撃が炸裂する番だ。防御しようにも、シキを止めることなど不可能である。

「我が想いを拳に込めて——ッ、てやあああああああああッ  
!!」

何発も何発も拳を叩きこまれる。そうして最後に、シキは容赦なく頭突きを喰らわせた。

もろに喰らったエーグルは吹っ飛ばされ、大地に叩き付けられる。その衝撃を最後に、意識が断線した。

\*\*\*

「——ああ、気がついたのね？」

ぼんやりとした視界が、だんだんと鮮明になっていく。木漏れ日を連想させるような金と緑の色合いが、エーグルの視界いっぱい広がっていた。

一歩遅れて、何とも言えない甘い香りが漂い始める。何の香りだろう？　こういうものは上流貴族の嗜みで、下層民には縁のないものだ。

ウラニアやウィータが何かを話していた気がするが、話半分で聞き

流していたか。それを悔いる日が来るなんて思わなかった――。

そこまで考えて、自分の視界いっぱいには広がるものの正体を理解する。女性の顔だ。つい先程まで相對峙していたはずの、決闘の相手――シキ。エーグルがそれを理解した途端、自分の感覺器官が膨大な情報を提供してきた。

ここは民家だ。クラディオンの集落にある、エーグルの自室。シキとの戦いで気を失ったエーグルは、そのまま集落へと運び込まれたらしい。多分、ここを教えたのはウィータであろう。シキ以外の人々は、ここには居ない様子だった。

頭部を支える柔らかなものの正体は、シキの膝である。俗にいう、膝枕だ。少し視線をずらせば、眩いばかりに白い脚が視界に飛び込んできた。真正面から顔面を殴られたような心地になったのは何故だろう。エーグルの頭は爆発寸前だった。

「え？ は、な……え!？」

「急に動かないで。体に、どこか不調は無い？」

飛びあがって逃げようとしたエーグルだが、シキに引き留められた。彼女はごく自然な動作で、エーグルの表情を覗き込む。

近い。近い近い近い。色白の肌には程よく赤みが差していて、やけに艶っぽく見える。金色の髪がきらきらと光を放つ。まるで、太陽の日差しのようなのだ。

戦いでは苛烈に燃え上がっていた深緑の瞳は、今は惜しみない慈愛で満ちていた。似たようなものを、エーグルはどこかで見たことがある。

宝石の類が頭に浮かんだ。モルスが作った装飾品に使われた、透き通った緑色の宝石。あれは、何という名前だっただろうか――。

「ねえ、大丈夫？ まだぼうっとするの？ 調子が悪いのかしら？」

「はっ!?! ……べ、べつに平気だ」

エーグルはぶつきらぼうに返事をした。が、突き放すような返答を  
してしまう。しまったと思ってももう遅い。

恐る恐る、エーグルはシキを見た。シキはエーグルの様子をしげし  
げと確認した後、安心したように微笑んだ。

「よかった。傷の治療が終わっても、意識が戻らないから心配してた  
の」

「……治療？ お前が治したのか？」

「ええ。いくら決闘の相手と言えども、気絶した人を放って置けない  
わ」

「そ、そうか。……あ、ありがとな」

「医者のお卵として当然のことをしたまですよ」

躊躇うことなく言っただけのシキに、なんだか居たたまれない気持  
ちになる。一応、礼は言えたけど、胸の奥が酷くもやもやするのだ。

シキが何かやったのかと思っただけで視線を向けても、彼女の笑顔には一  
切の悪意がない。エーグルが大丈夫であることを確認すると、シキは  
立ち上がる。

「どうやら、地上からの来訪者は外で現状を確認している様子らし  
い。本格的な話し合いは、自警団の団長であるエーグルも交えて行う  
のだという。」

「意識が戻ってすぐにこんなことを頼むのは心苦しいのだけど……」

「分かった。すぐ行く」

エーグルはそそくさと自室から出ようとして、足を止めた。胸の奥  
がもやもやする原因なんて、本当は既に理解している。改めて意識す  
ると気が重くなった。

決着がつく寸前まで、エーグルはシキに対して誤った認識をしてい  
た。彼女の実力は確かに未熟だし、エーグルが油断していなければ勝  
ち得なかっただろう。

しかし、シキは諦めなかった。絶対的な絶望の中でも、決して折れなかった。彼女たちの眼差しから伝わってきた想いは、エーグルたちと変わらない。

……いや、想いの強さは、エーグルたち以上だ。だから、エーグルの奥義を喰らって満身創痍になっても倒れなかった。

実力を認めたわけではない。けれど、意志の強さなら——確かにシキたちは、竜殺剣の担い手として相応しいだろう。

急に足を止めたエーグルの様子が気になったのだろう。「どうかした？」と、シキが小首を傾げた。深緑の宝玉がエーグルを映し出す。——どうしても直視できなくて、エーグルは目を逸らした。

「……あと、さ」

「？」

「さっきの決闘で言ったこと、訂正する。……今のお前等じゃ、ニアラの尻尾に触れるのが手一杯だろうな」

これが、エーグルにできるギリギリの譲歩だ。目を丸くするシキを視界の端に映しながら、エーグルは逃げるようにして部屋から飛び出した。

気のせいではなければ、背後の方からくすくす笑う声が聞こえてきた。振り返った先にはきつと、楽しそうに笑うシキの姿があるのだろう。そんな予感がした。

『——成程な。孫に好意的な異性を目の当たりにすると、こんな気持ちになるのか』

不意に、どこからともなく人の声が聞こえてきた。エーグルは足を止めて周囲を見回す。突然足を止めたエーグルの様子に驚くシキが目を丸くした。

『今なら、キミが心配する理由がよく分かるよ。ミカゲ』

今度はエーグルの背後から声がした。悲痛と悲壮に満ちた声。振り返った先には——やはりと言うべきか——誰も居ない。ただ、得体の知れない予感に、エーグルの体がぶるりと震えた。

## 新たな仲間と共に

低層区クラディオンの鍛冶場で、竜殺剣が作られた。この集落に住まう人々は、ヒュプノスの姉妹——エメルとアイテルから竜殺剣の作り方を教わった鍛冶師の子孫なのだという。

エメルとアイテルの名前を耳にした祖父は、何とも言い難そうに遠い目をした。ミカゲは彼女たちと深く関わっている。懐かしいのかもしれない。イノリはそう思った。閑話休題。

大戦開始直後、ルシエ族の民はこの奥地にある鍛冶場で竜殺剣を鍛えたそうだ。だが、竜殺剣は先の戦いで失われた。もう一度作り直すにしても、竜殺剣を作るための鍛冶場が帝竜に占領されている。

「自警団を帝竜退治に向かわせれば、この守りがおろそかになる。集落に居る住人の大半が非戦闘員なんだよ」

モルスは苦々しい表情を浮かべて、奥の道へと視線を向けた。気のせいか、そこからは殺気が漂っているように思える。

あそこから一步踏み出せば、雑魚竜やマモノが湧いて出てくるだろう。もし、何らかの事態が発生して、ここにマモノやドラゴンが雪崩れ込んで来たら——。

彼らの様子からして、これ以上戦力を割くことは難しいようだ。モルスの言葉を引き継いで、エーグルが悔しそうに項垂れた。

「畜生……ッ！ 鍛冶場はオレたちの魂だったのによ……!!」

「魂……」

『魂……』

エーグルの悲痛な叫びを聞いて、ソウセイとリヨウスケも表情を歪ませた。

しかし、彼らは即座に真剣な面持ちになってエーグルを見返す。叫んだのは、リヨウスケだった。

『ね、今すぐ鍛冶場を取り戻しに行こう!!』

「待てよ! あんた、俺たちの話を聞いてたのか!」

『聞いているよ! だから、俺たちが取り戻しに行くの!!』

猛犬のように吼えたりヨウスケの様子に圧倒されたのか、エーグルが思わずたじろぐ。

リヨウスケは——否、旧ムラクモ13班の面々は、フォーマルハウトに拠点を襲撃されている。自分たちの居住区を瘴気まみれにされたり、住人や戦友を惨たらしく殺されたりしたと、悔しそうな顔で語っていたことを思い出した。

当時の悔しさと怒りが再発したのだろう。息巻くりヨウスケにつられて、旧ムラクモ13班員の表情が歪む。ヒイナとヨツミが得物の整備を始め、マサハルが拳と掌を打ち付ける。ユイ、シラユキ、ミカゲが剣呑な顔つきになった。

「……な、なあ。あいつら……」

「私たちの故郷も、真竜ニアラやフォーマルハウトに踏み荒らされたことがあるのよ。特に後者の襲撃時は、最後の砦だった拠点を瘴気まみれにされたことがあったわ」

助けを求めるように、エーグルはシキの方へ視線を向けた。シキはその原因となった出来事について軽く説明する。2021年の竜戦役の話聞いたクラディオンの民は目を丸くした。

陸の国にはオリハルコンの守りがない。そんな中で、生き残りを集めた最後の拠点が、真竜の瘴気によって汚染された——話を聞いたルシエたちの顔から血の気が引いていく。

イノリが「瘴気を巻き散らかした原因と大本は絶ったから大丈夫」と補足を入れなければ、エーグルがシキを質問攻めに行っていたであろう。それ程の勢いがあった。

エーグルは視線を右往左往させる。時折、気遣うような眼差しをシ



キに送っていた。シキは力強く微笑み返す。それを確認したエーグルは、安堵したように頷いた。

……気のせいかな、エーグルはシキに声をかけやすいみたいだ。その理由は分からないが、2人の関係性は悪いものではないということはある。分かる。

「大丈夫ですよ。俺たちも一緒に鍛冶場へ向かいますし、リハビリ中とはいえ、真竜を狩った張本人もいますから」

ユウマが涼しげな笑顔を浮かべて、ミカゲを指さした。

まさか自分が指名されてると思ってもみなかったのか、ミカゲが眉間に皺を寄せた。

そんなミカゲの様子など気にも留めず、ユウマは立石に水の如くすらすらと話を続ける。

「彼は、俺たちの国で起こった真竜との戦いで、竜殺剣の担い手となりました。それだけではありません。集落へと至る洞穴の入り口付近の岩場に倒れていた帝竜も、彼が狩ったんです。当時の力をほぼ失いながらの辛勝でも、彼には帝竜を狩る力がありますから」

「なんと……!」

「おいこら優男。勝手にハードル上げるんじゃないよ。俺はそんなじゃないから」

ユウマによって盛大に持ち上げられたミカゲが眉間に皺を寄せる。心底めんどくさそうな表情だ。そんな祖父の気持ちなど露知らず、ルシエ族の長老トグラウが畏敬の眼差しを向けてきた。

いや、トグラウだけではない。エーグルが目を剥き、モルスが年甲斐もなく興奮し、ウィータが慌てた様子で敬意の礼を取ろうとしていた。ミカゲは渋い顔のまま、ルシエたちを制した。

彼らをどうにか諫めた後、ミカゲはユウマを睨んだ。ユウマはニコニコ笑うだけである。暫し2人は無言の応酬を続けたが、最終的にミ

カゲが肩をすくめることで決着した。……この2人は仲が悪いのだろうか？

長老トグラウは、何かを思案するように顎に手を当てていた。そうして、こちらを見返して頷き返す。陸の民の言葉を信じ、イノリたちに帝竜退治を任せることにしたようだ。

トグラウから説明を頼まれたエーグルが、鍛冶場を占領する帝竜に関する情報を提示する。帝竜の名前はメイヘムといい、巨大な四足竜で、猛毒の息を吐きかけてくるらしい。

『他には、どんな攻撃をしてくるんだ？』  
「え？」

話を黙って聞いていたヨツミが首を傾げる。ルシエ族たちは怪訝そうな顔で彼を見返した。

『だから、毒以外に何か攻撃してくるのかと』  
「……いや、毒攻撃が厄介ってことなんだけど」

今度は、ヨツミが拍子抜けしたような表情を浮かべた。——いや、ヨツミだけではない。

ミカゲを筆頭とした旧ムラクモ13班員全員が、似たような表情を浮かべている。

「——なんだ、それだけか」

ミカゲがあっけらかんと零す。彼の言葉が、兵団に所属しているルシエたちの逆鱗に触れたらしい。噛みつかんばかりに身を乗り出す。特に、モルスが顕著だった。

「ふざけるなよ！ 奴のせいで、仲間が何人犠牲になったと——」  
「だって、音で死体を操って襲わせるわけでもなく、超強酸の雨で生き

てる人間を溶かすわけでもなく、鱗粉使つて人を同士討ちさせるわけでもなく、電磁砲で人間を黒焦げに焼き殺すわけでもなく、地震を発生させて拠点を壊そうとするわけでもなく、幻覚で人間を追いつめるわけでもないんだろう？」

ミカゲの瞳から光が消えた。彼は乾いた笑みを浮かべ、朗々と語る。それを耳にしたルシエ族たちが一気に凍り付いた。

旧ムラクモ13班は、竜戦役で様々な帝竜と戦った。帝竜の力に苦戦しながらも、勝ち星を重ねてきた人間たちである。

音で死体を操り生者を襲わせた女帝竜ロアールア、超強酸の雨で人間を溶かした狂羽竜オケアヌス、鱗粉で人を惑わせ同士討ちを誘発した夢喰竜スリーピーホロウ、電磁砲で人間たちを焼き払った轟雷竜ジゴワット、地震を発生させ議事堂を破壊しようとした重剛竜ジャバウオック、人間たちに幻覚を見せることで狂わせる闇淵竜インソムニア等、厄介なドラゴンを相手にしてきたのだ。

故に、〃鍛冶場を占領しているだけで、特筆すべき攻撃が毒〃というメイヘムのことを「それだけ」呼ばわりするのも当然だと言えよう。感覚がマヒしていると言えばそれまでだ。

乾いた笑みを浮かべたままのミカゲを見て、自警団の兵士たちがひそひそ話を始める。メイヘム以上に厄介なドラゴンを退治してきたならば——と、期待しているらしい。

正直、イノリも同じ気持ちである。数多の帝竜を倒し、真竜ニアラを退け、真竜フォーマルハウトを屠った祖父のことを、深く尊敬していた。

ミカゲが居るなら大丈夫だとイノリは思っている。ミカゲの場合はその逆らしく、「イノリが居るから大丈夫」と常々語っていた。

「ま、アイツの方がヤバかったけど。サンダーブレス吐いてきたり、怒涛の連続斬りから突き攻撃繰り出してきたり、千切り潰し刻み斬ってきたり、細胞活性化で自分の傷を癒したりするし」

「結局は人類戦士タケハヤへ帰結するんですね……」

虚ろな顔して語り始めたミカゲを見て、ヨリトモがひっそりと遠い目をした。彼もまた、「人類戦士がどれ程凶悪だったのか」というミカゲの講義を聞かされていた人間だったのだろう。良くも悪くも、祖父にとつての人類戦士タケハヤは印象的な相手だった。閑話休題。

教え子と妻によつて正気に戻ったミカゲを尻目に、イノリは長老たちの方へ向き直った。ユウマやミカゲの話を聞いたトグラウは、13班とISDFにメイヘムを任せることにしたらしい。鍛冶場へ続く道を指さした。奥の洞穴からは、ピリピリとした殺気が漂ってきたように思う。

早速奥地へ進もうとしたイノリたちを、エーグルが引き留めた。

「ちよつと待つてくれよ。お前等、その人数で帝竜を狩るつもりなのか!?!」

「ああ。我々には充分それが可能だ」

エーグルの問いに対して、ヨリトモが領り返す。揺らぎのない返答に、エーグルが苦々しい表情を浮かべる。

彼からすれば、イノリたちの人数で帝竜メイヘムに挑む“というのは自殺行為に見えるらしい。

「自警団の面々がメイヘム討伐を試みた際、イノリたちの倍の人数が向かったが失敗した」と、自警団兵士が零した。

エーグルは、暫くイノリたち——特にシキ——と鍛冶場へ向かう道を見比べていた。

何かを考えるように俯いたが、すぐに顔を上げて領り返す。

「分かった。鍛冶場の帝竜はお前等に任せる」

「本当!?!」

「但し、1つ条件がある。アトランティスの代表として、ウィータを連れていけ。占星術師フオーチユナーの持つ星詠みの力は、お前等の役に立つはずだ」

そう言つて、エーグルはウィータの方を向いた。

ウィータも自分が名指しされることを理解していたのだろう。それが自分の使命だと言わんばかりに、力強い笑みを浮かべて頷き返した。

「お任せください」と語つて会釈したその動作には、一片の乱れもない。流れるように洗練された動作からして、彼女は只者ではなさそうだ。

戦力増強の申し出らしい。ISDF側は戦力が充分なので補充は必要ないが、ノーデンス側からしてみればありがたい申し出である。

「ねえ、ナガミミ。自警団側の協力者としてウィータさんを迎えたいんだけど、いいかな？」

『おう、話は聞かせてもらったぜ。新規採用の件なら、アリーとジュリエッタに訊いてみる』

ホログラムに映し出されたナガミミは、早速上司へと通信を繋いだ。別画面にアリーとジュリエッタの姿が映し出される。

前者も後者も快諾の返事をくれた。アリーは仲間が増えると大喜びし、ジュリエッタは新規採用者に対して一種の浪漫を抱いているようだ。

「待ってくれ！ 姉上が行くなら、俺も行く!!」

次の瞬間、エーグルの隣に居たモルスが身を乗り出して名乗りを上げた。そんな弟の様子を見たウィータは眉をハの字に曲げる。

「モルス。これは遊びではないのですよ？ それに、自警団の副隊長としての仕事を投げ出すと言うのですか？」

「分かってるよ！ でも、俺だって！ 俺だって、アトランティスの滅びを覆したいんだ。そのための力になりたいんだ!!」

「モルス……」

姉を見つめる弟の眼差しは、どこまでも真摯である。揺るがぬ決意を宿した眼差しは、決して姉から逸らされることはない。

ウィータは助けを求めるようにしてエーグルに視線を向けたが、彼はモルスの味方になることを選んだようだ。

「分かった。——モルス・クリュティエ、お前も陸の民に力を貸せ。团长命令だ。アトランティスの騎士の力、存分に振るってこい」

「やりー！ サンキュー、エーグル！」

「……ああもう、仕方ありませんね……」

团长直々の命令を受けたモルスが万歳し、ウィータが頭を抱えて項垂れた。もう1名の新規採用についてアリーたちに尋ねれば、即座に許可が下りた。

これで、ノーデンス13班は過アトランティス トウキョウ去と現代の人間たちによつて構成された、“時空を超えたチーム”ということになる。

互いに軽く自己紹介を終えて振り返れば、こちらの話が済むまで待っていたヨリトモ、ユウマ、ミカゲらも談笑をやめてこちらへ戻ってきた。

和やかな空気が漂い始めたときである。急に向こう側がざわめきはじめた。周囲を覆い付したのはマモノの殺気だった。思わず面々は身構える。

「团长！ 向うからマモノの群れがやってきました！」

見張り役の少女が、慌ただしい様子でエーグルに報告する。オリハルコンの守りを掻い潜って、多数のマモノが集落近辺に現れたらしい。

エーグルをはじめとした自警団は、そちらの掃討に専念するようだ。团长を務めているだけあって、彼の指示出しは手早く的確であった。

「それじゃあ、鍛冶場の帝竜は任せませ！」  
「待って！」

駆け出そうとするイーグルを引き留めたのはシキだ。呼び止められたイーグルは足を止める。シキは鞆から何かを取り出して、イーグルへと手渡した。

東京で一般的に使われている治療薬——メデイス、ヒールエアロ、マナ水等——の詰め合わせだ。シキは薬の使い方を簡単に説明する。

「メデイス系の薬品は飲み薬で、これを飲めばある程度の傷は治療できるわ。ヒールエアロはマナの霧を発生させることで、周囲に居る人々の傷を癒すことができる。マナ水はその名の通り、飲めばマナを回復することができるの」

「……これ、本当に効果あるのか？」

「あるわよ。実際、貴方にも飲ませたし」

「——えっ?」

シキの言葉を聞いたイーグルが凍り付く。自分は飲んだ覚えはないと言わんばかりに、彼の口元が引きつった。イーグルの様子を見たシキは何かを察したのだろう。ああ、と納得したように頷いた。

「そういえば、マナ水を飲ませたとき、イーグルは気絶してたわね」

シキの言葉を聞いたイーグルから、さっと血の気が引いた。

ぎこちない笑みを浮かべたイーグルが、恐る恐るシキに訊ねる。

「……なあ。お前、オレにどうやって薬を飲ませたんだ？」

「口移しだけど」

躊躇いも淀みもない返答を聞いたイーグルの顔が真っ赤になった。

「お、おおう」等と挙動不審になりながら視線を彷徨わせる。ウィータが頬を赤らめて口元を抑えた。モルスも顔を赤らめながら笑みを浮かべ、エーグルとシキを見比べた。

長老のトグラウに至っては、「季節外れの春が来た」と笑う始末である。彼女はエーグルとシキに対して、期待に満ちた眼差しを向けていた。ヨツミも笑ってはいたのだが、得体の知れない悲壮感が漂い始めたのは何故だろう。自爆特攻しそうな気配がする。

ミカゲはハラハラしながらヨツミを見守っていた。「エグゾーストサクリファイスはやめてくれ」と、呪文のようにブツブツ呟いている。そんなヨツミを、シラユキは苦笑しつつも生温かい目で見守っていた。彼らの姿を見ていたユウマは、ポカンと首を傾げていた。

暫く動作不良に陥りながらも、エーグルは立ち直った。彼は薬を受け取ると、シキに礼を言つて去って行く。

その背中を見送った後、イノリたちは準備を整えるために、一端東京へ帰還することにした。



「ここが、東京……」

「うわああ！ すごい、超すごい！ 見ろよ姉上！ なんかすごいのがいっぱいある!!」

異邦人であるイノリたちに連れられて来た場所——東京は、アトランティスとは比べ物にならない程の文明を有していた。陸の民は野蛮であると言われていたが、全然そうじゃない。むしろ、自分たちよりも知的で洗練されているように思う。

弟のモルスはぎやあぎやあ騒ぎながら、ポータルルームを駆け回った。点滅する物体に手を伸ばしては、白い服を着た人々から叱られている。不用意に触ってはいけないと言われても、モルスは止まらなかった。最終的に、怒り心頭のソウセイに叩きのめされ連行される。

本当に手のかかる弟だ。ウィータは白い服を着た人々やソウセイ



に頭を下げる。「弟が申し訳ありません」と謝れば、みんなから生温かい眼差しを向けられた。ご察しの通り、ウィータはモルスのことで色々と苦勞してきたのだ。

鍛冶場を占領するメイヘム撃破が決まったのは、つい数時間前のこと。作戦準備を整えるため、13班とISDFたちは東京へと一時帰還することになった。13班はそこを拠点としているらしい。

イノリたちに先導されるような形で、ウィータはレストフロアに足を踏み入れた。そのまま部屋へと案内される。大人数が座れる椅子——とても柔らかそうなものだ——や調理台、本棚が並んでいる。

ウィータは吸い寄せられるように本棚へ歩み寄った。何の気なしに本を手取る。色とりどりの花が描かれた本だ。東京の言葉は読めないため、題名から内容を推察することができない。けれど、ウィータは構わず本を開いた。

「わあ……！」

アトランテイスでは見たことのない植物——特に、花——の絵が描かれている。その絵の脇に、東京の言葉で何かが書かれていた。ウィータの予想では、この文章が、描かれた花々の説明になっているのだろう。

実に興味深い。興味深いのだが、内容が理解できないというのが癪に障る。王宮の本を読み漁っていた本の虫であったウィータにとって、東京の書物はとても魅力的なものだった。読めないのが非常に腹立たしい。

「むむ……」

「どうしたの？ ウィータ」

ウィータに声をかけてきたのは、東京から来た同胞——シキである。彼女は頼れるお姉さん気質の持ち主だった。ウィータの方が年上だというのに、敬服してしまうくらいに。

「シキ。この本に興味があるのですが、東京の言語が読めなくて……」  
「翻訳なら任せて！ どれどれ？ ……『よくわかる花言葉辞典』ね」  
「花言葉辞典？」

「うん。この地球上に存在する花には、花言葉と呼ばれるものがあるの。花に思いを託して、誰かへの贈り物にすることもあるのよ。由来は神話や各国の伝承まで様々でね……」

ウィータはシキの説明に耳を傾ける。花に想いを託して相手に贈るとは、なんて素敵な文化だろう。老害どもが言っていた「野蠻」なイメージとは程遠い。むしろ洗練されているように思う。

シキの翻訳を頼りにしながら、ウィータは辞典を読み進める。どの花も美しく、目移りしそうだ。ぱらぱらとページを開いて――ふと、ウィータは目を留めた。そのページに描かれた花の絵に見覚えがあったためだ。

紫の花。ウィータが見た夢の中で出てきた、あの花と瓜二つだ。甘くかぐわしい匂いが、脳の奥底から甦ってくる。絵が香るはずがないけれど、あの匂いが漂っているような錯覚に見舞われた。

同時に、思い出す。ウィータが花畑で出会った青年の姿を。

イノリやシキたちとは違う服に身を包み、外套を身に纏った青年。今となってはおぼろげで、名前すら思い出せない。ただ、凄く長い名前で、愛称で呼んでほしいと言っていたことは覚えていた。

探究心に満ち溢れた眼差し。ウィータを射抜いたそれを鮮明に思い出す。途端に、胸の奥底がざわついた。記憶の中に浮かぶ青年の微笑から、目を逸らすことができない。ああ、なんだか頭がクラクラしきそうさ。

「シキ。この花は何というんですか？」

ウィータはシキに問いかけた。シキは凶鑑を覗き込む。そうして、その花の名前と、花に込められた意味を告げた。

「この花は……ヘリオトロープね。花言葉は、『献身的な愛』、『夢中』、『熱望』というの」



準備を終えたイノリたちは、再びクラディオンへと戻ってきた。坑道へ繋がる道へと足を踏み入れる。

ここも集落へ至る道同様、鍾乳洞と清流のせせらぎが特徴的な洞窟であった。

イノリたちを先導するように、ヨリトモとユウマが数歩前に出た。彼らの後ろにミカゲが並び、イノリたちは最後尾につく。——それが、現在の自分たちの力関係／主導権の順位だ。

『オイ、オマエら。新規採用を加えて戦力強化したんだ、いつまでもI SDFに主導権を握られてんじゃねえぞ！』

「あ、あははは……。頑張ります……」

ナガミミから飛んで来た喝に、イノリは苦笑しながら曖昧に答えた。世界を救うという共通目標に対して、主導権云々で火花を散らしているのは上層部のようだ。

正直、イノリは主導権云々など興味はない。竜を狩ることが人類滅亡を回避する方法なら、どちらの組織が真竜を倒しても問題ないように思う。

どちらが真竜を狩っても、人類滅亡は回避されるためだ。結果が一緒なら何も問題ないはずなのだが、利権争いで火花を散らす輩はどこにでもいるらしい。

「でもナガミミ、あんまり言うと、おじいちゃんのスイッチが入って、長々と話を聞かされる」可能性が出てくるよ。おじいちゃんはそ

ういう足の引っ張り合い嫌いだから」

『……チツ。面倒臭いヤツだ』

「なあナガミミ。お前の個人アドレスって、XXX—XXX—XX  
XXだったよな？」

イノリとナガミミの会話にミカゲが割って入る。彼は前方を向いたまま、自分の端末を弄りまわしていた。端末の画面には、『真瀬ブナイチ』の名前が表示されている。

ミカゲの様子からすべてを察したのだろう。ナガミミはそつぽを向いて閉口した。ウサギのマスコットは、『どうしてそれを!』と言わんばかりに鬼気迫っていた。

近々、ナガミミは自分の個人アドレスを変えるだろう。勿論祖父のことだ、変更後のアドレスも即座に割り出して握るに違いない。祖父は残念な天才のためだ。閑話休題。

襲い来るマモノを倒し、坑道を進む。奥へ進めば進むほど、マモノも凶暴になってきた。

しかし、思った以上に脅威を感じない。マモノを屠り、先へ進もうとしたときだ。

「う、うわああああ!」

「! あそこにルシエが! 助けないと!」

向うの方から悲鳴が聞こえてきた。悲鳴の主は、初老の男性である。彼はドラゴンに襲われかけていた。頭が異常に発達した雑魚竜——ドラグハンマードである。

彼の姿を発見したりヒトが駆け出す。その後にソウセイが続いた。イノリも彼らの背中を追いかけ、男性を守るように躍り出る。

男性は驚いたように目を白黒させたが、自分たちの中にウィータとモルスの姿を見つけると、安心したように微笑んだ。

「おお、モルス! ウィータもいたのか!」

「じいさん！ アンタ何してるんだよ!？」  
「すまん。マモノ用のワナを調整していたら、ドラゴンに襲われてしまつて……。ワシ以外にもいたのだが、逃げ回っている間に逸れてしまつたようじゃ」

魔物が大量発生したと言う報告を受けて、初老の男性は集落を守るために行動していたらしい。だが、それが裏目に出ってしまったようだった。

集落の住民を守ろうとして、自分が助けられている——その事実には、彼は申し訳なきように苦笑する。次の瞬間、ドラグハンマードが高らかに咆哮を上げた。

イノリたちが身構えたのと同じタイミングで、別の場所からもドラゴンが飛び出してくる。新手であるドラグメガマウスを迎え撃つたのは、ヨリトモとユウマだ。

イノリは初老の男性を安全な場所——ノーデンスへと転送する。ナガミミが適宜対応してくれた。

初老の男性が安全地帯へ非難したことを確認し、モルスが短剣を構えて飛び出した。ウィータも鎌を構え、弟の援護に動く。

イノリたちもそれに続くようにして、己の得物を構え、ドラグハンマードへ挑みかかった。

「取り扱い注意、っとー!」

モルスはそう言つて、短剣にマナを込めた。短剣は紫電の光を纏つた剣へと姿を変える。モルスは躊躇うことなくその刃を振り下ろした。紫電が爆ぜ、ドラグハンマードが悲鳴を上げた。奴の動きが鈍る。どうやら、追加効果で麻痺したようだ。

「あらあら……—せいっ!」

ウィータは薄く微笑みながら、思い切り鎌を振り下ろした。異様な

マナが爆ぜ、ドラグハンマードの動きを乱した。奴はうとうとと微睡み始めたが、それを振り払うように首を振った。

フォーチュナーは死相を操ることで戦いをサポートするという。彼女の攻撃は、マモノやドラゴンに状態異常を誘発させるものらしい。モルスの攻撃も、状態異常を誘発する攻撃もある。

「現地住民に負けていられないな」

「そうですね。僕らも行きましょう！」

ソウセイとリヒトが前線へと躍り出た。ソウセイはデータボックスを展開し、罨を仕掛ける。炎属性で作動するファイアTROYが仕掛けられた。

イノリもそれに続いて双剣を抜き、割きモミジを打ち放った。直後、罨が作動して追撃が発生した。ドラグハンマードが溜まらず悲鳴を上げる。

間髪入れず、リヒトがXバーンを発動させた。程なくして、上空から隕石が降り注ぐ。それを起点にして、再びトロイが発動した。

勿論、ドラグハンマードも反撃行動に移った。奴は発達した金槌のような頭部をシキへと振り下ろす。シキはそれを受け止め、即座に反撃した。

最初から迎撃スタンスで受け止める準備をしていたのだから、反撃行動に移ることなど容易い。叩きこまれた一撃に、ドラグハンマードの巨体が揺らぐ。

『派手に畳みかけるよ！ みんな、テンション上げていこう！』

リヨウスケがキーボードを展開する。普段は1枠だけなのだが、今回は沢山の画面を展開した。せわしなくキーボードを叩いた彼は、飛びあがるようにしてEnterキーを叩く。次の瞬間、炎のマナがイノリたちの得物に宿った。

「ユイ、陣形は任せとけ！——じゃあ、そろそろ起きていこうや！」  
『任せてミカゲくん！——それじゃあ、お願い！』

それを確認したミカゲが、刀からメガホンに得物を持ち変えて陣形を指示した。攻撃特化の陣形、ATK☆フォームである。更に、ユイもメガホンを構えて指示を飛ばす。軽快なリズムが響き、それに導かれるようにしてイノリたちは駆け出した。

炎を纏った武器を振るう。一撃一撃は大したことはないのだろうが、トロイが炎属性に反応して誘爆を引き起こした。連続で追撃を喰らい、ドラグハンマードが呻き声を上げた。トドメと言わんばかりに、リヒトが炎のカードをかざす。

「集中……！——炎熱のマモノよ！」

ワームを模した炎のマジユウが現れ、ドラグハンマードを焼き払った。火傷を負ったドラグハンマードが呻きを上げる。

「マモノを召喚した!? すっげえ！」

「モルス、戦いに集中なさい」

アトランティス出身者であるクリユティエ姉弟にとって、リヒトの力——デュエリストの能力は珍しいものなのだろう。モルスがまあと目を輝かせ、そんな弟をウィータは叱りつけた。

勿論、姉弟も戦いを忘れたわけではない。モルスは短剣にマナを込める。今度は氷属性だ。それを確認したソウセイが、再びデータボックスをドラグハンマードへと仕掛けた。氷属性で反応する罠、アイスTROYだ。

罠が仕掛けられた刹那、モルスの攻撃がドラグハンマードに叩きこまれた。凄まじい冷気がドラゴンの皮膚を焼く。凍傷を喰らったのか、ドラグハンマードの動きが鈍くなった。それを確認したウィータが鎌を振り上げた。

「非情ですが……！」

振り上げた鎌を、ドラグハンマード目がけて投げつける。弧を描いて飛んでいった鎌は、ボロボロ状態のドラグハンマードの命を刈り取った。

青いマナが弾け、イノリたちの元へと降り注ぐ。癒しの光となったそれは、イノリたちの傷をすっかり消してしまった。攻防一對の技らしい。

間髪入れず、ドラグハンマードの体が崩れ落ちた。イノリたちは周囲の安全を確かめると、即座にドラゴン資材を回収する。ヨリトモとユウマもドラグメガマウスを撃破しており、それにつられて湧いてきた雑魚竜も何体か狩ったようだ。

安心するのもつかの間、今度は別の方向から悲鳴が響いた。年若い少年少女の声である。ルシエの少年少女はボロボロで、互いに互いを庇いながら戦っている真つ最中だった。

相対峙しているのはドラグメガマウス。奴は派手な咆哮を上げ、大口を開けて襲いかかろうとしていた。少年少女は恐怖で体を委縮させながらも、短剣を構える。

「危ないー！」

イノリは迷うことなく駆け出して、少年少女の眼前へと躍り出た。大口を開けたドラグメガマウスに突っ込むようにして、刃を口内に突き立てた。双剣を引き抜き、口内を蹴って距離を取る。

「まずは軽くー！」

入れ替わるようにして、シキが拳を喰らせた。速攻で叩きこまれた一撃に、ドラグメガマウスの体が揺らぐ。



『追撃、行くぞ！ たあーりやあッ!!』

シキの後に続いたのはマサハルだ。彼は見事な足技——崩伏連脚を披露する。ドラグメガマウスは壁へ叩きつけられた。

勿論、このまま終わるはずがない。次に飛び出したのはヒイナだ。彼女は不敵な笑みを浮かべて、拳銃を構える。

『外さない!』

ヒイナの銃から打ち出された弾丸は、容赦なくドラグメガマウスの目を潰した。視界を塞がれたドラグメガマウスは雄たけびを上げながら、見当違いの方角へ攻撃を仕掛けた。

四方八方に飛び交う毒のブレスを掻い潜り、ソウセイがニーブレイクを叩きこむ。体勢を崩したドラグメガマウスに追撃したのは、ヨツミとシラユキ夫婦である。

ヨツミに斬り付けられたドラグメガマウスがよろりと傾く。彼のナイフに毒が塗ってあったようだ。毒を吐く竜が毒に苦しむとは、なんて皮肉だろう。

もがき苦しむドラグメガマウスに与えられたのは、更なる苦痛。シラユキのマイクロバーストで発生した重力によって、ドラグメガマウスの体は地面にめり込む。

動きを止めた雑魚ドラゴンの呻きを潰すかのようには、ウィータとモルスが攻撃を放った。爆ぜた魔力によって血飛沫が舞い、紫電が爆ぜる。

「——これで決める!」

トドメとばかりに、イノリが双剣を構えて駆け出した。勢いそのまま割きモミジを叩きこむ。炎がドラグメガマウスの体を焼き払った。

崩れ落ちたドラグメガマウスは他の面々に任せ、イノリはルシエの少年少女に声をかける。2人は異邦人に対し、怯えた様子で身を縮ま

せる。

だが、同族——シキ、ウィータ、モルスの姿を確認すると、彼と彼女は安心したように表情を緩ませた。シキの指示に従い、2人は東京へ転移する。

『なんだか調子がいいね。トリスアギオンと戦ったときよりも、私たちの攻撃が通じるようになってきたよ』

『ふふ、そうだな。今日の私は、阿修羅すら凌駕できるかもしれん』

倒れた雑魚ドラゴンを見つめながら、シラユキとヨツミが嬉しそうに微笑む。中途半端に実体化させられた弊害か、ミカゲ以外の旧ムラクモ13班は、ドラゴンやマモノに攻撃が効きにくかった。それが、クラディオンを探索しているうちに、ある程度の攻撃が通るようになったらしい。

調子がいいと実感しているのは那雲夫婦だけではなかった。東雲兄妹も、リヨウスケも、ユイも、笑顔を見せている。勿論、そんな仲間たちの様子に喜んでるのはミカゲも一緒である。彼もまた、昔の勘を取り戻しつつあるようだ。

「キミたちの成長には驚かされますね。自警団の兵士たちが倒したドラゴンを、こうも容易く倒せるようになるなんて」

「そんなことありませんよ。ユウマさんだって、全然余裕じゃないですか」

イノリたちの様子を見守っていたユウマが、涼し気な笑みを浮かべて声をかけてきた。彼らの方もドラゴンを倒し終えたようだ。ヨリトモもユウマも、息一つ乱れていない。

流星はISDFのエースたちだ。「格好良いです」と拙い賛辞を述べれば、ユウマは照れくさそうに苦笑した。当然のことだと彼は言うが、そんなことはないといノリは思う。

ユウマはもう少し、自分が凄いことを自覚すべきである。ユウマは

自分の実力を誇っているが、自身に課しているハードルが高いように感じた。

例えるならそれは、薄氷の上を歩いているかのような危うさだ。一度氷を踏み抜き落ちてしまえば、二度と這い上がれないような気がしたのは何故だろう。

イノリとユウマの距離は目と鼻の先なのに、手が届かない程、ユウマが遠く感じる。一瞬でも目を離せば、イノリの視界から消え去ってしまいそうだ。

伸ばしかけた手をぐっと握り締める。この衝動を何と言えはいいの、イノリには分からない。同時に、いきなり手を伸ばされればユウマにとって迷惑だろう。どうにか踏みとどまる。

「どうかしましたか？」

「なんでもありません」

イノリの心情など露も知らないユウマは、こてんと首を傾げた。イノリは慌てて首を振る。訝しがられるのは嬉しくない。イノリは微笑んで見せた。

ユウマも同じように笑い返し——次の瞬間、彼の表情が苦悶に歪む。ユウマは呻き声を噛み殺すように歯を食いしばり、頭を抑えた。その動きには見覚えがある。スペクタスを屠った一撃を放つ際の予備動作だ。この場に竜は居ない。なら、何故、彼は頭を抑えるのだろうか。

考えて、気づく。

そういえば、スペクタスを一撃で倒したとき。

予備動作をしていた彼の声は、どこか苦悶に満ちてはいなかったか。

「……もしかして、どこか体調が悪いんですか？」

「——いいえ、心配は無用です。俺は大丈夫ですから」

イノリの問いに、ユウマは綺麗な笑顔で答えた。普段と変わらぬい、自信に満ちた笑みである。

しかし、その笑い方が作り物めいているように見えたのは何故だろう。冷たい仮面のように見えたのは、何故。

普段は彼の笑みを見ると安心するのに、どうしてだろう。今は、ユウマのその笑顔が、イノリの不安を掻き立てた。

## 灯火の火種

「助けてくれてありがとう」

「恩に着るよ」

逃げ遅れたルシエの民を助けながら、ノーデンス13班とISDFは坑道を進んでいく。

奥へと続く洞穴が見えたとき、どこからともなく竜の咆哮が響き渡った。出所は、眼前に広がる洞穴からである。

「この奥が鍛冶場なんだ。メイヘムはこの先にいる」

モルスの言葉を聞いたイノリたちは、洞穴へと視線を向けた。強敵——帝竜メイヘムとの戦いを予期し、気を引き締めたのだろう。しかしながら、Code：VFDの主導権はISDF側に握られていた。実力も経験も、雇われた元一般人よりも軍人の方が上だ。

急ピッチで才能が開花しているとは言えども、ノーデンス13班が帝竜に勝てるかと問われれば微妙である。できないわけではないが、泥試合になることは確実だろう。最も、泥臭い勝利はミカゲ含んだ旧13班の十八番なのだ。それでよければ問題はない。

だが、計画には確実性が求められている。そのため、帝竜戦で矢面に立つのは、当然のようにISDFの2人——ミカゲの教え子と教え子の部下に決まった。勿論、帝竜戦の要もユウマである。彼は堂々とした様子で、肅々と帝竜退治を引き受けた。

次の瞬間、ユウマの表情が歪む。彼は呻き声を噛み殺すように歯を食いしばり、頭を抑えた。

「どうした、ユウマ?」

「……いい、いえ、大丈夫です。問題ありません、提督」

ユウマの表情が歪んだのは一瞬のこと。ヨリトモに声をかけられ

たときにはもう、平時のような笑みを浮かべていた。その笑い方に、ミカゲは何とも言えない違和感を覚える。

部下の様子がおかしいと気づいたのは、上司のヨリトモも同じだった。後者は追及しないことを選んだようだが、ミカゲはどうしても追及せずにはいられなかった。

思わず、ユウマに問いかける。

「なあ、本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫ですよ。貴方が出る幕はありませんから」

「……うつわ。普通、そんなバツサリ言うかよ」

ミカゲの心配／気遣いを切り捨てるように、ユウマは堂々とした笑みを浮かべた。彼の言葉はやけに刺々しい。快く思われていないことは明白である。

元々、ミカゲも彼を快く思っていない。『イノリに近づく異性』という観点からなのだが、ユウマはそれとは別方向で、ミカゲに対して対抗心を抱いているようだ。

U・E・77年に生きる人々からすれば、80年前の竜戦役——嘗ての旧ムラクモ13班、あるいはそこに所属していた渡来ミカゲは過去の遺物だ。古き時代の化石でしかない。

敵意に近い感情を抱くユウマに、ミカゲが真正面から訊ねても答えない。曖昧にはぐらかして逃げようとするだろう。

……少々嫌らしいやり方だが、致し方がない。ストレートがダメなら変化球で攻めるのがセオリーだ。変化球だって立派な戦術である。脳裏に浮かんだのは、忘れられない親友。人類戦士に至った男が、まだ人間だった頃のこと。

「……俺の親友の話なだけどさあ」

「？」

「そいつ、人体実験の後遺症で、しょっちゅう発作を起こしていたんだよ」

藪から棒にそんなことを言われ、ユウマは目を白黒させた。『渡来ミカゲの親友』なんて、普通に考えれば1人しかいない。その人物がどんな末路を辿ったのか、ユウマはおそらく知っているはずだ。たとえ知らなかったとしても、ヨリトモが説明してくれるだろう。

「発作が起きる度に胸を抑えてたんだ。人体実験されるとき、胸部に機械の管つけられてたから」

タケハヤが人体実験を受けていた現場を、ミカゲは何度も目にしたことがあった。当時の光景を思い浮かべる。

耳をつんざくような親友の悲鳴、四方八方に伸びた管、目まぐるしく点滅する機械、数値が変動した画面――。

人体実験なんて、とてもじゃないが見ていられる光景ではなかった、けれど、目を逸らすことだけではどうしてもできなかった。してはいけないと思っていた。

タケハヤの人体実験が行われた理由は、半分はミカゲが原因であった。ミカゲを『対竜兵器の担い手』とするための踏み台として、人体実験が行われたためだ。

残りの半分は、異母姉である日傘ナツメの私利私欲である。彼女は力を求めて竜となった。己が神となるために、ナツメはSKYの幹部たちに非道な実験を行った。

タケハヤは、ミカゲとナツメ絡みの実験のせいで、命を著しくすり減らしたのである。

『俺は、俺の人生を後悔したことは一度もない。俺の生き方は、俺が選ぶべき』

「お前等のせいで」となじってくればどれだけよかったか。「責任を取れ」と言って、ミカゲを人類戦士にさせれば良かっただろうに。そうするだけの理由がタケハヤにあるし、そうされるだけの理由がミ

カゲにもある。それなのにタケハヤは、ミカゲに八つ当たりすることなく、喜んで自分の命を燃やし尽くしたのだ。閑話休題。

「なあ優男。お前、頭を抑えたよな」

「――！」

ミカゲの言葉に反応したのか、ユウマの笑顔が消えた。険しい面持ちは、それ以上の追及を拒んでいる。もしかしてと思い、ミカゲは彼の頭へと手を伸ばした。

次の瞬間、ユウマは鬼気迫った表情でミカゲの手を弾き飛ばした。乾いた音が響き、ミカゲの手が薄らと赤くなる。途端にユウマはバツが悪そうな表情を浮かべた。

手短に謝罪して、彼は前を向き直る。「これ以上追及しても答えない」と、暗に示しているらしい。最も、ユウマの反応はミカゲの問いに「是」と答えたも同然だが。

ミカゲはヨリトモへと視線を向けた。ヨリトモは即座に視線を逸らす。これで答え合わせは充分だ。

（ISDFの対竜兵器……もしかして、俺が追いかけてた兵器は――）

精神種族として5000年の時を生き、実体化するにあたって失われてしまった己の記憶。自分が死ぬ前に追いかけていた、ISDFの対竜兵器――その断片に、ようやく手が届いた。どんな兵器だったのか、兵器開発の責任者のこともすっかり忘れてしまっていたが、前者の答えは目の前にあったのだ。

勿論、〃対竜兵器が生物兵器である〃という可能性を視野に入れていなかったわけではない。ミカゲ然り、シラユキ然り、マリナ然り、そういう用途で生み出された／生かされた命があったことも事実だ。そして、彼女たちが居てくれたおかげで地球が救われたのも事実である。

でも、本来は、そのような用途で命を生み出すことはあつてはなら



ないとミカゲは思っている。悲しい思いをするのは、自分たちの代で充分だ。

生まれ落ちた命を否定するつもりはない。生まれ落ちた命に宿命と痛みを課すであろう「生物兵器」という括りを否定したいだけなのだ。

もつとも、ミカゲの想いは当事者には通じにくいようだが。拒絶するかのようなユウマの背中を眺め、ミカゲはひっそりとため息をつく。

「おじいちゃん……？」

「……何でもないよ。気にすんな」

不安そうにこちらを見つめるイノリに、ミカゲは曖昧に微笑んでみせる。内心は憂いだらけなのだが、それにイノリを巻き込むことは憚られた。

「総員、戦闘配置。帝竜メイヘムに備えろ。——突入する！」

「はいー」

Code：VFDの主導権を握っているヨリトモが音頭を取る。イノリたちが頷き返した。

老兵であるミカゲ／旧ムラクモ13班は、特に何も語らず後継者たちの背中を見守った。



「あれが、帝竜メイヘム……」

鍛冶場に居座る巨体を遠巻きから眺めて、イノリは感想を零した。

東京で対峙した帝竜スペクタスとは違い、翼のない四足歩行のドラゴンだ。背や頬にはサンゴ礁を思わせるような角が生え、長く細い尻

尾を鞭のようにしならせる。顎の下には小さな棘が生えていた。

オリオンブルーに輝く体軀は、クラブディオンの周辺を流れる清流の色を連想させる。対して、顎の部分は血のように毒々しい赤色だった。毒を有するマモノは己の毒性／危険性を誇示するために、派手な色をしている個体が多い。

「緊張しているんですか？」

不意に声をかけられた。声の方を振り向けば、ユウマが歩きながらもイノリの方を向いていた。

ユウマは相変わらず、余裕の笑みを浮かべている。自信と誇りに満ち溢れた、翡翠の眼差し。

彼の表情——柔らかな笑みを見ると、なんだか安心する。イノリは思わず表情を緩めた。

「……はい。実は、ちよつとだけ」

「大丈夫ですよ。キミたちには後方支援に回ってもらいますから」

帝竜を狩るのは自分の役目だと締めくくり、ユウマは微笑む。彼は帝竜を一撃で屠る力を有しているのだから、当然と言えば当然のことだ。

だが、先程彼が見せた異常が気にかかる。頭を抑えて呻いた姿は、どこからどう見ても大丈夫ではなかった。

それを追求した祖父があらわれたことから推測するに、ユウマは己の異常事態について語ろうとしないだろう。

（……私は、ユウマさんにとって、  
“頼りない一般人”なんだろうなあ）

イノリとユウマの間に横たわる差を、ひしひしと感じる。その事実が重苦しい影を伴い、イノリの心に纏わりついた。なんだか悲しく

なつてきて俯く。自分の不甲斐なさが嫌になったのは、祖父が目の前で亡くなったとき以上だ。

そんなイノリを不思議そうに見つめるユウマの眼差しが痛い。彼から「どうかしたのか」と問われる前に、イノリは顔を上げた。取り繕うように——あるいは気分を切り替えるように、前を向く。

眼前では、イノリたちの存在に気づいたメイヘムが威嚇態勢を取っていた。帝竜の唸り声が、洞窟の中に造られた鍛冶場一帯に反響する。思わずイノリは身構えた。他の面々も険しい顔をして帝竜に向き合う。

その中でも、ISDFのヨリトモとユウマは涼しげな表情を崩さなかった。この2人にとって、帝竜との戦いは日常茶飯事なのだろう。特にユウマは、肅々と任務に挑みながらも、口元には不敵な笑みを浮かべている。

ミカゲを筆頭とした旧ムラクモ13班員は真剣な面持ちで帝竜と対峙していた。80年前に帝竜を倒してきた英雄たちの横顔は、とても心強い。彼らの胸を借りるつもりで、イノリもメイヘムを睨みつけた。リヒト、ソウセイ、シキ、ウィータ、モルスも、緊張した面持ちのまま身構える。

メイヘムが高らかに咆哮する。ヨリトモとユウマが前線に立とうとしたとき、突然ユウマが崩れ落ちるように膝をついた。苦悶の声を上げて、頭を抑える。イノリは慌てて彼の元へと駆け寄った。

「ユウマさん!? 大丈夫ですか!?!」

「あ、……つぐ、う……!! ……あ、頭、が……ツ……!!」

「頭……!?! まさか、さっきのアレは……!!」

頭を抑えて苦しむユウマに、イノリは先程のことを思い出す。

あの動作——しきりに頭を抑えていたのは、やはり異常事態だったのだ。

「インストールの副作用か……!!」

(——え?)

焦りを滲ませたヨリトモが、思わずと言った調子で零した言葉を追及する暇はなかった。

急に動きが鈍くなったユウマを獲物に定めたのか、メイヘムが高らかに咆哮する。奴は尻尾を鞭のようにならせ、それをユウマ目に向けて振り下ろした。

イノリは迷うことなくユウマの前に躍り出る。咄嗟の判断のため、自分が防御する暇なんてない。メイヘムの一撃が直撃するのを覚悟する。

しかし、尻尾がイノリに直撃する寸前、誰かが前へと飛び出した。尻尾の一撃は、イノリの前へと飛び出した誰かに当たる。間の抜けた悲鳴が響いた。

「つでええ……! やっぱ、痛いモンは痛いぜ……!」

「モルスさん!」

イノリたちを庇い、メイヘムの攻撃を受けたのはモルスだった。

彼は苦悶の表情を浮かべたが、すぐに口元を拭い、調子よさげに笑い返した。

「大丈夫、ヘーキヘーキ! それよりも、奴が来るぞ!」

モルスが短剣を構えてメイヘムと対峙する。次の瞬間、イノリを除いたノーデンス班が前線へと躍り出た。誰もが武器を構えて、メイヘムを睨みつけている。

「リーダー!」

「イノリさん!」

「イノリ!」

イノリを呼ぶ声が響く。イノリは一瞬呆気にとられ——自分がノーデンス班であることを思い出す。仲間たちは、リーダーであるイノリを待っているのだ。

正直、ユウマのことが気にかかる。だが、イノリは13班のリーダーだ。現状では、リーダーの務めを果たすことが最優先事項である。

イノリは迷うことなく前を見た。仲間たちの元へ——前線の真ん前へと躍り出る。それを目の当たりにしたヨリトモが、驚いたように声を上げた。

「任せていいのか……？」

「はい！ ですから、ヨリトモさんはユウマさんを！」

「……恩に着る！」

ヨリトモはユウマと共に戦線から離脱する。それを確認して、イノリはメイヘムへと向き直った。

『ヨツミさん、シラユキ！ ユウマくんをお願い！』

『心得た！』

『了解！』

ユイの指示を受けたヨツミとシラユキは、迷うことなくユウマの元へと駆け寄った。研究者／医師のヨツミがユウマに応急処置を施し、シラユキが治療術を使う。ヨリトモは驚いたようだが、すぐに感謝の言葉を述べた。

彼らの様子を横目にしつつ、ミカゲが刀の鞘に手をかける。リョウスケがキーボードを具現化させ、ヒイナが二丁拳銃を弄び始めた。マサハルが構えを取り、ユイがメガホンを構えて戦闘態勢を取った。

「——よし！ みんな、行くよ!!」

イノリの号令に従い、13班たちが飛び出した。

「リヨウスケー！」

『任せてよ！ 全力で行きたいもんね！』

ミカゲの指示を受けたリヨウスケは、即座にキーボードを展開した。恐ろしい勢いでキーボードを叩いて、彼は現実を書き変える。80年前のハッカーが駆使した技——Bデータイレイザーだ。状態異常の回復を早める効果がある。

だが、リヨウスケ程の実力者だと、状態異常を即座に消去できる。クラディオンのルシエたちが脅威だと言う、メイヘムの毒対策だ。他にも、予算の許す限り、イノリたちは薬品類や装飾を購入している。毒を直すポワゾル、複数の状態異常を直すオゾナル、毒を防ぐお守りであるポイズンガード。そんなことなど露知らず、メイヘムは大きく息を吸い込んだ。次の瞬間、奴は尻尾の先端をノーデンス13班に向ける。尾についていた穴が開き、緑の霧が吐き出された。

クラディオンのルシエたちを追いつめた猛毒である。しかし、毒霧の効果は発動しない。

ポイズンガードによつて防がれた者と、Bデータイレイザーによつて治癒された者に分かれたためだ。

毒の効果が発動しなければ、メイヘムの攻撃は大したことがない。今度はイノリたちの番である。

「これが本気？ ——舐めてるの!？」

『はは、カワイイもんだねえ。——らっしよい!』

シキとマサハルが反撃に移る。前者がアンチ・バステによる状態異常を無効化しながらのカウンター攻撃、後者が吹裂く也によるプレス攻撃を無効化しながらのカウンター攻撃だ。

痛烈な一撃がメイヘムの喉へと叩きこまれる。しかし、マサハルの攻撃はメイヘムに対して大きなダメージを与えるには至らなかった

ようだ。威力を比較すれば、シキの方が上だ。

『くそ。マモノや雑魚ドラゴンには結構通じたのに!』

『無茶をやらかせば、オマエが更に弱体化するだけだ。タダでさえ分相応以上なコトをやらかしてんだから、高望みはすんなよ』

『そりゃあどーも! ジリ貧での戦いなんて、何度も経験してるからなア!!』

舌打ちしたマサハルに対し、ノーデンスウオッチから声がした。声の主はナガミミだ。マスコットからのアドバイスを聞いたマサハルは苦々しく呟く。しかし、口元には不敵な笑みが浮かんでいた。それが歴戦の勇者としての貫禄だろう。

メイヘムは尻尾を振り回したり、毒の霧を噴射してこちらへ攻撃を仕掛けてきた。一発一発は大したことがないが、塵も積もれば山となる。

次の瞬間、温かなマナが降り注いだ。見れば、モルスが握る短剣の周囲に魔法陣が展開している。間髪入れず、ユイの歌——癒しのバードが響き渡った。

「どっこに居ようが同じだ!」

『全弾ぶちかますわよ!』

ソウセイとヒイナが四方八方に銃を撃つ。銃弾は洞窟内の壁や鍾乳洞に反射した。ジャンプショット——跳弾による攻撃である。

彼らと同じように、モルスやウィータも準備をする。前者は身命の誓いと呼ばれる技で自身の耐久を上げ、後者は力学の否定で仲間たちの防御力を上げた。

イノリは赤火の呼吸を使って攻撃力を上げ、ミカゲが不動居で力を貯めた。メガホンを構えたユイが大地を蹴り、メイヘムに音波攻撃を喰らわせた。

『飛んでみたいなっ！』

アイドルの攻撃スキル、ベルセルクV。相手の視界を潰して盲目状態にした後、アイドルに狙いを集中させる技だ。

音波攻撃を真正面から喰らったメイヘムが呻く。視界が潰されたのか、尻尾の攻撃は見当違いな場所に直撃した。

勿論、その隙を逃すはずがない。ソウセイがアイSTRORYを、ヒイナがマインスロアーを仕掛けた。

「氷雨を召喚！」

背後に居たりヒトが、氷属性のmanaを貯めて六芒星を描いた。青い光が弾け、manaが降り注ぐ。イノリたちのmanaを回復させる効果があった。

しかも、この技は氷属性のカードを使えば使う程、回復量が増えていくという特徴がある。Xバーンと対になる効果とも言えるであろう。

イノリは双剣を構えてタイミングを待った。隣に居たミカゲも、居合の型を崩すことなくタイミングを待っている。

『みんな、お願い！』

『攻めて叩いて一気に倒す！』

攻めに転じるため、ユイがATK☆フォームで陣形を整えた。リヨウスケがアタックゲインで仲間たちの攻撃力を一気に引き上げる。

リヒトは氷のマジユウを召喚した。冷気を纏った蹴りがメイヘムに叩きこまれる。氷のTRORYが爆ぜた。それを合図に、イノリとミカゲが同時に飛び出す！

「そこッ！」

「これでッ！」



冷気を纏った一撃を叩きこむ。属性攻撃に反応して追撃するサムライの技、風林重ねだ。氷属性のTROYが炸裂し、メイヘムの鱗を冷気が焼く。

それを見たモルスが、自分の短剣に雷のマナを収束させてメイヘムに斬りかかった。勿論、イノリとミカゲも追撃行動に入った。雷が爆ぜる。

その後が続いて、シキがダブルフック、マサハルが介錯クリンチを叩きこむ。メイヘムのマナが乱れて防御力が下がり、痛烈な一撃を喰らった帝竜は呻き声を上げた。

追い打ちは終わらない。ソウセイとヒイナが放ったジャンプショットの弾丸がメイヘムの鱗を傷つけた。ウィータが力のオラクルを打ち放ち、メイヘムの命を着実に削る。

タイミングを待っていたと言わんばかりにヒイナが飛び出した。彼女は不敵に微笑みながら、ラッシュショットを放った。8発の弾丸がメイヘムを傷つける。

次の瞬間、ヒイナが仕掛けていたマインスローアが誘爆を引き起した。メイヘムの動きが一気に鈍くなる。この調子で攻めれば、帝竜を倒すことが可能だろう。

(いける！)

イノリが勝利への希望を見出したときだった。

メイヘムが高らかに咆哮し、力を貯めるように身を震わせた。体を覆う鱗が見る見るうちに青光りする。鱗と肌が硬質化しているのだ。

それを目の当たりにしたミカゲが嫌そうに顔をしかめる。直後、ノーデンスウオッチから声が響いた。声の主はナガミミだ。

『オイ、13班！ コイツは強力な硬化で攻撃を防いでくるぞー！』

「わかった！ 硬化を解除させればいいんだね！」

ナガミミの指示に従い、イノリたちはメイヘムに攻撃を仕掛ける。しかし、硬質化した鱗と肌を穿つほどの威力が足りない。イノリの双剣も、リヒトの召喚したマモノたちも、ソウセイの銃も、シキの拳も、モルスの短剣も、ウィータの鎌も、硬質化した鱗と肌によって弾かれる。

「嘘だろ……!?! 攻撃が通らない……!?!」

「敵の攻撃が来ます!!」

『りよーかい！ 俺に任せてよ!』

啞然としていたソウセイを現実へと引きもどすように、ウィータが注意を促した。即座にリヨウスケがBデータータイレイザーを発動させる。効果の発動よりも一步遅れて、メイヘムの毒霧が全員に襲い掛かった。

メイヘムの毒攻撃は無力化できたが、こちらの攻撃が通らないとなると、確実にジリ貧である。どうしたものかと考えあぐねていたとき、何を思いついたのか、ミカゲが目を瞬かせた。「もしかして」と呟き、ユイへと視線を向けた。

視線で通じ合った2人は、迷うことなく駆け出した。ミカゲが刀を構え、ユイが大地を蹴って飛びあがる。そのまま、ユイはメガホンを使って音波攻撃を放った。硬化してからは一切揺らがなかったメイヘムが怯む。

次の瞬間、帝竜の鱗と肌が割れた。直後、ミカゲの風林重ねが発動して追撃が入る。メイヘムは悲鳴を上げた。ユイの攻撃によって硬質化が解けたため、ダメージが通ったのだ。

「成程な。半霊体化してる奴の攻撃なら、硬質化をぶち破れるってわけか」

『ニンゲンと精神種族とでは、体を構成するマナが違うからな。攻撃の特性も変わってくる』

『ということは、私たちのような半実体化状態の場合、攻撃力は低い

代わりに、マモノやドラゴンの特殊な強化を打ち消せる”ってこと？』

『だな。適材適所ってヤツだ』

ミカゲとナガミミの言葉を聞いたユイがはっとしたように目を瞬かせた。ナガミミは二つ返事で頷く。「人間とマモノのマナには大きな差がある」という話は授業で習っていたが、それがユイたちに適応されるとは思わなかった。

メイヘムが再び肌や鱗を硬質化させたとしても、それを打ち破る方法を見出せたのだ。ノーデンス13班と旧ムラクモ13班の力を合わせれば、勝機がある。イノリは仲間たちの方へ視線を向ける。仲間たちは力強く頷き返した。そうして、帝竜に向き直る。

「今がチャンスだよ。畳みかけよう！」

イノリは己のマナを解き放った。エグゾーストである。それを皮切りに、リヒトが、シキが、ソウセイが、モルスがマナを解き放つ。

戦いに終止符を打とうとするイノリたちを見て、ユイとリョウスケが頷き返した。前者がATK☆フォーム、後者がアタックゲインで援護してくれた。

ウィータもマナフローターを使う。ミカゲはちやっかり不動居を使っていたようで、不敵な笑みを浮かべてエグゾーストを発動する。

——これで、最大威力を叩きこむ準備はできた。

「まずは俺からだ！——大、切、断!!」

モルスの短剣にマナが込められる。燃えるような赤い色は、彼の命の輝きだ。その一撃を叩きこまれ、メイヘムの巨体がぐらつく。モルスはそのまま膝をついた。

彼に襲い掛かろうとしたメイヘムだが、尻尾の一撃はモルスに当たることはない。次に動いたりヒトが繰り出したマジユウによって遮

られたためだ。

「集中……！——雷光のマモノよ！」

巨大なクラゲを模したマジユウが現れ、メイヘムの体に触手を突き刺す。それを電導線にして、マジユウは雷を放出した。

「次は私！——これで決める！」

「繋ぐぞ！——甘いんだよ、お前は！」

シキがメイヘムの胸部に、正拳突きを叩きこむ。ただの正拳突きではない。クーデグレイスと呼ばれる技だ。暴力的なマナを込めたその一撃が、メイヘムの巨体を揺らがせた。

帝竜の呻き声が響く。間髪入れずソウセイが飛び出し、銃弾を連射する。4発の弾丸がメイヘムの鱗をぶち抜いた。帝竜の血飛沫が飛び散る。ミカゲとイノリは駆け出した。

「いっせーのーで！——手打ちといこうや！」

「これで決める！——必殺！」

ミカゲの十六手詰めと、イノリの大一文字がメイヘムの体を引き裂いた。血飛沫が舞い、断末魔の悲鳴が響き渡る。メイヘムは崩れ落ちるように倒れこみ、二度と起き上がることはない。

『生体反応消失。——喜べオマエら、帝竜メイヘム撃破だ！』

幾何かの沈黙の後に、ナガミミからの通信が入る。心なしか、マスコットの声は弾んでいるように思った。

その言葉を皮切りに、帝竜撃破の喜びがこの場一帯に広がっていく。

「ツしやああ！ 勝ったぜええええ!!」

真つ先に雄たけびを上げたのはモルスだ。彼は年甲斐もなく飛び回ると、ウイータの元へと駆け寄った。ウイータは苦笑しながらも、モルスとハイタッチを交わす。モルスはその勢いのまま、他の面々にもハイタッチを強請った。

彼の気持ちは分からなくはない。鍛冶師の魂である鍛冶場を占領していた帝竜を、この手で屠ったのだ。

ニアラを倒すために必要な希望が繋がれた——喜ばないはずがないだろう。僅かとはいえ、勝機が見えたのだから。

「やりましたね！ 僕らの勝利ですよ！」

「ああ。完勝とは言えないが、前進あるのみだ」

リヒトやソウセイもそれに応えながら、勝利の余韻に浸る。満足げに笑う2人の元へ、マサハルとリヨウスケが駆け寄った。祖父と孫が勝利を喜びあう。

ユウマの応急処置をしていたヨツミとシラユキも、孫のシキを労うように微笑んだ。そんな祖父母の表情を見たシキが、自慢げな笑みを浮かべて笑い返した。

得物を鞘に納め、イノリはミカゲを見返した。ミカゲは柔らかな微笑を浮かべる。大きな手がイノリの手の上に乗った。優しい手つきで頭を撫でられ、イノリははにかむ。

「よくやった、イノリ」

祖父に褒められ、頭を撫でられるなんて久しぶりだ。子ども扱いされるのは嫌だけれど、ミカゲの経歴上、彼が「実はそういうスキンスリップが大好き」な人間であることは理解している。それに何より、イノリは祖父母に褒めてもらう／頭を撫でてもらうのが好きなのだ。どっちもどっちである。

勝利の余韻に浸っていたとき、背後から弱々しい呻き声が響いた。イノリが振り返れば、よろめきながらも体を起こしたユウマが周囲を見回している。

ユウマとヨリトモの会話を聞く限り、ユウマは帝竜と戦う前の記憶しかないらしい。頭を抑えて苦しんでいたこと自体、覚えていない様子だった。

「ユウマさん、大丈夫ですか!？」

イノリはわき目もふらずにユウマの元へ駆け寄る。しかし、どうすればいいのか分からず、イノリの手は中途半端に宙を切る。

先程の苦しみ方は尋常じゃなかった。いくら大事なとはいえ、心配なものは心配である。焦るのは当然と言えよう。

情けないことに、イノリはおろおろすることしかできなかった。ユウマは呆然とこちらを見上げていたが、申し訳なさそうに苦笑した。

「ありがとう。キミには、相当心配をかけてしまったんですね……」

「ユウマさん……」

「俺はもう大丈夫ですから、そんな顔をしないでください」

ユウマはどこか辛そうに微笑み、イノリの手をやんわりと押し返した。そんな風に微笑まれると追及できなくなってしまう。イノリは思わず俯いた。

そんなイノリの姿を見て、ユウマは悲しそうに目を伏せる。暫くそんなやり取りを続けた後で、ユウマはハツとして鍛冶場の奥に向き直った。

「そうだ、帝竜は!? 帝竜はどうなりましたか!？」

「安心しろ。帝竜は、13班が撃破した」

ユウマは切羽詰ったような声色で問いかける。ヨリトモ、ヨツミ、

シラユキは、動かなくなった死骸を指示した。

『勝利という義務は果たしたよ』

『うん！ みんな、とつても格好良かった！』

「元々俺らは泥試合専門だからな。『最終的に勝てればいい』ってんなら、何とかなるぜ？」

ヨツミが顎に手を当てて微笑み、シラユキが拍手喝采で13班を迎える。ミカゲもうんうんと頷いた。ユウマは帝竜の死骸とイノリたちを見比べる。

彼は、半ば茫然とした表情でこちらを眺めていた。信じられないものを見ていると言わんばかりの眼差し。奥底で揺らめく感情は、驚愕と悲痛。

勝利の喜びはどこにもない。自身に満ち溢れていた翡翠の瞳が、僅かながらも陰ったように見えたのは何故だろう。イノリの心に、得体の知れぬ不安が巣食う。

イノリはユウマに声をかけようとした。しかし、それより早く、彼は俯く。

暗い表情を浮かべたユウマは、申し訳なさそうに謝罪した。

「肝心なときに役に立てず、申し訳ありません。キミにどう謝ればいいのか……」

「そんなことないです！ 仲間なんだから、助け合うのが当然じゃないですか！」

「仲間……」

己を責めるような様子のユウマに、イノリは首を振った。所属組織が違うとはいえ、イノリたち13班とユウマたちISDFは共に戦う戦友である。上層部は利権だなんだで揉めているのかもしれないが、前線部隊で肩を並べる自分たちにとっては、そんなことなど関係ない。

「体調が優れないなら、無理せず遠慮なく言ってください。そりゃあ、ユウマさんから見た私たちは頼りない一般人でしょうけど……でも、できる限りのことはします。全力でサポートしますから！」

「……イノリ……。ですが——」

「持ちつ持たれつ、ですよ。私たちだって万能というわけじゃない。私たちがユウマさんに助けを求めることだってあります。そのときは、頼りにさせて頂きますから」

「それが仲間というものですよ」と、イノリは締めくくった。こちらを見上げる翡翠の双瞼が、どこか不安そうに揺れている。イノリは、ユウマを安心させるようにして微笑んだ。

イノリにつられたのか、ユウマの頬が緩んだ。何かに安心したかのように、柔らかく微笑む。——彼が笑うと、心の奥底に明かりが灯ったような心地になるのは何故だろう。

彼はイノリに礼を述べた後、ほっと息を吐いた。

「ありがとう、イノリ。……不思議だな。少しだけど、気持ちが悪くなった気がします」

「そうですか。……ユウマさん、あまり思い詰めないで——」

「——だけど、もうミスはしません。絶対に」

イノリの言葉をかき消すようにして、ユウマはきつぱりと言いつつた。どこか鬼気迫る面持ちに、イノリは思わず気圧される。

今のユウマは、能面のようなだ。顔から、表情と呼べるものが削ぎ落されている。連想したのは、精密に作りこまれた人形だった。

ユウマの姿を見ていられない。でも、なんて言葉をかければいいのか分からないで途方に暮れる。——胸が、痛い。

「おい！　大丈夫か、お前ら！」



薄暗いイノリの気持ちを通り切ると、背後から聞き覚えのある声が響いてきた。振り返れば、エーグルが息を切らせてこちらに駆け寄ってくるのが見えた。

「エーグル！ あなた、どうしてここに!? 集落は!?」

「さつきから石が騒いでたんで、気になってな。——そうか、お前らが帝竜を倒したから……」

シキの問いにエーグルは答える。二度と動かなくなった帝竜の死骸を眺めて、エーグルは納得したように頷いた。

エーグルはクラディオンの生まれのため、この近辺で石が騒げば、それがどこの石かをすぐに割り出せるのだと言う。

石の聲に従った結果、この鍛冶場にたどり着いたのだろう。エーグルは大きく息を吐き、安心したように表情を緩ませた。

「……にしても、マジでメイヘムを倒しちゃったのかよ。感謝の言葉もないな……。オレはお前らを見下しまくってたつてのによ……」

「エーグルさん……」

「すまなかった。それまでの無礼を、どうか許してほしい」

エーグルは真剣な面持ちで頭を下げた。

「どうやら、彼の心根は真面目で礼儀正しく素直な性格らしい。」

イノリが何か言うよりも、シキが口を開く方が早かった。

「……案外素直なのね」

「な、なんだよ！ バカにしてんのか!?!」

「ふふつ、冗談よ。これで御相子つてことで、堅苦しいのはナシにしましょう? その方が私も嬉しいから」

「……ッ! ——あー、もう……!!」

シキはエーグルを茶化し、楽しそうに微笑む。彼女の笑みが、普段

見るような快活な笑みとは毛色が違うように思えたのは何故だろう。反論しようとしたエーグルだが、彼は顔を真っ赤にしながら視線を背けた。唸るような声を漏らしていたが、結局は何も言わないことにしたらしい。

暫し勝利の余韻に浸った後で、イノリたちは集落へと戻ることにした。行きとは違い、意気揚々とノーデンス13班とエーグルが先陣を切る。その次に旧ムラクモ13班、最後尾にISDFが並んだ。

誰もが笑顔を浮かべる中、ISDFの2人——ヨリトモとユウマ、旧ムラクモ13班の渡来夫婦と那雲夫婦の表情だけが、どこことなく曇っているように見える。

彼らに声をかけるよりも先に、集落のルシエたちから迎えられる方が早くて、イノリはすっかりそのことを忘れてしまった。



『ユウマさん、大丈夫ですか?!』

ユウマのことを心配するイノリの表情が、頭から離れない。

今回の一件からして、彼女は不思議な人だと思う。帝竜を倒して傷だらけだというのに、自身の傷よりもユウマのことを心配していた。

今にも泣き出してしまいそうな空色の瞳。焦燥の色が滲んでいた。薄らと涙の幕が張っていたように見えたのは、気のせいではない。

そんな顔をさせたかったわけではなかった。傷つけたかった訳でも、悲しませたかったわけでもない。——イノリには、悲しそうな顔は似合わない。

普段のように笑ってもらいたかったただけなのに、うまくいかなかった。言いたいことを飲み込んで、悲しそうに俯く彼女の横顔がちらつく。

ユウマの身を案じてくれる人はいる。生みの親であるナグモ博士と、上司であるヨリトモだ。彼らはユウマの出自を知っているし、出生にも深く関わっている。

(——イノリは、俺のことを、知らない)

渡来イノリは、如月ユウマの出自を知らない。完全な他人だ。真正面から如月ユウマという存在と向き合う、初めての他人。

——おそらくは、ユウマと『対等』に立つであろう相手である。

『仲間なんだから、助け合うのが当然じゃないですか!』

『私たちだって万能というわけじゃない。私たちがユウマさんに助けを求めることだってあります。そのときは、頼りにさせて頂きますから』

空色の瞳は、真っ直ぐにユウマだけを見つめている。如月ユウマという存在を認め、価値を見出し、肯定する、絶対的な眼差し。

それを向けられたとき、胸の奥底が熱くなったのは何故だろう。心の底から溢れたものは、一体何を意味していたのか。

胸が苦しい。だが、それ以上に、何とも言えぬ感覚で満たされる。酷く甘美で、心地がいい。——こんなことは、初めてだった。

『肝心なときに役に立たない』——あんな失態、本来ならあつてはならないことだ。叱責だけでは済まされれない。挽回のチャンスなんて望めないだろう。使えなければ廃棄すてられる。

己に与えられた存在意義レイゾンテートルを忘れたことはない。如月ユウマは、竜を狩り尽すために生まれ落ちた。

それが揺らぐようなことなど、決してあつてはならない。もう二度と、絶対に、これ以上の失態を犯すわけにはいかない。

(負けられない)

ユウマは手を握り締める。手袋がこすれる音が、やけに鮮明に響いた。

(負けたくない)

イノリの背中を見つめる。華奢で細く、しなやかな身体。以前は頼りなかった後ろ姿は、今は力強くそこに在る。

脳裏に浮かぶのは、イノリの表情。雨が降り出しそうな空模様の如く歪んだ顔と、木漏れ日を思わせるような柔らかな笑みだ。

もう、イノリの泣き顔や、それに準ずるような表情を見たくない。いつもみたいに笑っていて欲しい。彼女の笑顔を曇らせたのは、他ならぬユウマなのだ。あの失態のせいで、イノリには多大な心配をかけてしまった。

「——強く、ならないと」

それは、ユウマにとって「当たり前のこと」だった。何の疑問の余地もなく、そう在ることが正しい姿だった。

だけれども、今のユウマにとっては「改めて痛感したこと」であり、そう在りたいと「初めて自発的に思った」ことだった。

## 決意と夕焼け

アトランティスの竜殺剣は、戦いの後、執政のタリエリに引き渡されたという。タリエリは以前から竜殺剣に懐疑的であり、それを携えた先王ユトレロが戦死したことが、竜殺剣の不信——および、玉碎作戦へと向かう決定打となった。

ヒュプノスの巫女たちが残した伝承では、〃星を守りたいという想いを持つ鍛冶師によって作られた竜殺剣が、星を守りたいという強い意志を持つ心優しき勇者を担い手とすることで、初めて本来の力を発揮できる〃という。

元々、首都に住む上流貴族たちは、クラディオンの下層民を虐げていた。そんな折、ニアラ襲来という非常事態が発生したことで、民たちは一丸になって戦おうとしたのだろう。けれど、普段いがみ合っていた者同士が手を取り合うことは簡単ではない。

〃竜殺剣が力を発揮できなかったのは、作り手と担い手双方の想いが足りなかったのではないか〃——それが、ユトレロから託された竜殺剣をタリエリへ引き渡した張本人・エーグルの見解だった。

「成程な。竜殺剣は執政のタリエリが持っていて、竜殺剣を鍛えられるのはアトランティスの王族だ。今となつては、女王ウラニアだけということになる」

「ちよつと待て！ お前、どうしてそれを知ってるんだよ!？」

「俺のばあさんが言つてた」

「お前のばあさん何者なんだよ!？」

『マリナはオレのお嫁さんだよ！ 食べることが大好きで、大好物はチョコバーなんだ！ すつごく可愛いんだよ！』

「オレが知りたいのはそういうことじゃあねえんだよ!！」

さらりとまとめたソウセイの言葉に、エーグルがぎよつとした様子で噛みついた。陸の民が竜殺剣の作り方に精通しているとは思っていなかったらしい。

ソウセイの祖母に関してツツコミを入れたエーグルに対し、リヨウスケが「待つてました!」と言わんばかりに惚気話を投下する。まるで漫才みたいだ。

『ほらほら、写真だつてこんなにくさんあるんだ! 見てよ! これが結婚式の写真!』

「いや、オレが知りたいのはそういうことじゃないんだつて……!?!」

リヨウスケが指し示した写真画像を見たエーグルが目を剥いた。そこに映し出されたのは、リヨウスケの妻でソウセイの祖母——2021年で発生した竜戦役で、竜殺剣を作り出したルシェの少女・マリナだ。鮮やかな桃色の髪を首まで伸ばし、目が覚めるような深緑の瞳を細めている。

嘗て、アトランティカでソウセイがウラニアと顔を合わせたとき、彼はウラニアを祖母マリナと見間違えた。勿論、エーグルはその逆をいった。マリナの写真を指さした彼は、案の定、「ウラニア!?!」と驚きの声を上げる。その声につられて集まってきたルシェ族の野次馬たちも、驚愕の声を上げた。

髪型は違えど、ウラニアとマリナの面影は似通っている。マリナが「アトランティス最後の女王」のクローンなのだから、アトランティス最後の女王であるウラニアと瓜二つなのは当然のことなのだ。そんなことなど露知らず、クラディオンの民たちは、誰も彼もがざわめいている。

『ねえ、エーグル。オレのお嫁さん、この国の女王様とそんなにそっくりなの?』

「ああ。髪型は違うけど、凄くよく似てる」

彼らの様子をまじまじと見ていたリヨウスケが、エーグルに問いかけた。エーグルは頷く。それを聞いたリヨウスケが、静かに微笑ん

だ。

『……そっか。なら、ますます玉碎作戦は止めなくちゃいけないね!!』  
「お、おう……」

俄然燃え上がるリヨウスケの姿に若干辟易しつつ、エーグルとトグラウは顔を見合わせた。そうして、イノリの方へと向き直る。

「旅人よ。そなたらは、王族に……女王ウラニア様の元へ行くつもりなのだな」

「はい。ウラニア女王とは面識がありますし、話は聞いてもらえると  
思います」

「なんと……!」

イノリの言葉を聞いたトグラウが目を見開いた。ノードンス13班がウラニアと知り合いである” という事実には、エーグルが目を瞬かせる。クリユティエ姉弟も驚いた様子だった。

「すっげー。異邦人がウラニアと顔見知りだなんて……」と、モルスが感嘆の息を漏らす。彼は高揚しているのだろう。目が輝き、口元には嬉しそうな笑みを浮かべていた。

希望を見出したことで、周りのルシエたちも活気が満ちていく。メイムを倒す前のどんよりとした空気も、疲れ果ててやつれきった民の面影も、今はどこにもない。

特に、この中で一番表情が輝いているのはエーグルだ。  
彼は輝かんばかりに笑みを浮かべた後、トグラウの元へと向き直った。

「長老、頼む！ ウラニアと交渉させてくれ！」

「……まずは、執政官のタリエリ殿を通すのが筋というもの。そこだけを守るようにな」

タリエリの名を出された途端、エーグルが苦々しく表情を歪ませる。どうやら、エーグルにとってタリエリは苦手な相手らしい。

エーグルは助けを求めるが如く、モルスとウィータにアイコンタクトを送る。彼が何の合図を出したのかは分からない。

しかし、クリユティエ姉弟はすべてを理解したようだ。真剣な面持ちで頷き返す。途端にエーグルとトグラウが不安そうな表情を浮かべた。

そうして、誰かに想いを馳せるようにして天を仰ぐ。その眼差しに言葉を付けるとするなら、「可哀想に」、あるいは「ご愁傷さま」だろうか。

「ありがとうございます！」

「感謝します、長老」

イノリとユウマが礼を言えば、トグラウたちも柔らかに微笑み返してくれた。丁度そのタイミングで、ヨリトモが帰投の音頭を取る。

今日はもう遅い。外から差し込む赤い光が、夕暮れ時であることを指し示していた。それに、メイヘムとの戦いが終わったばかりだ。

明日、クラディオオンでエーグルたちと落ち合う約束をして、イノリたちは現代——U・E・77年の東京へと帰還したのであった。

\*\*\*

「それじゃあ、また明日ー☆」

アリーが解散の音頭を取った。それを皮切りに、ヨリトモが踵を返した。彼を筆頭にして、ISDFの隊員たちが続々と引き上げていく。

元々、ノーデンスとISDFの間に結ばれた条件の中には、「ドラゴンの検体を分け合う」という取り決めがあったらしい。雑魚竜も帝竜も、等しく分けあったそうだ。Dz資材もそれなりに回収できた



ため、上層部はおおむね満足しているらしい。アリーやジュリエッタ曰く、「資材は武器や施設の開発に使う」とのこと。

フロアの改修という話を聞いた旧ムラクモ13班員が、懐かしそうに目を細めた。嘗てミカゲたちはドラゴン資材を集め、都庁や議事堂を改修し、人類の拠点を支えていたことがある。フロア改修の権限を握っていたのもムラクモ13班だった。武器開発や避難民の居住区——彼らが集めたドラゴン資材は多岐にわたって使用された。

そんな嘗ての「人類の拠点」——国会議事堂や東京都庁跡地は、特別保護区に指定されている。現在はマモノの巣窟になっており、一般人は入れない。特に、国会議事堂の方は、都庁よりも凶悪なマモノがひしめいているらしい。建造物の中に入れるのは、ISDF、もしくは戦闘訓練校の関係者くらいだ。

9年前——祖父がまだ生きていた時期は、特別保護区にマモノは跋扈していなかった。指定遺跡がマモノの巣窟になったのは、祖父が亡くなった直後である。

議事堂がマモノの巣窟になったと知ったら、祖父はどう思うだろう。彼は、議事堂がマモノと竜の巣窟になった現場を目の当たりにしているのだ。心配である。

「イノリ」

そんなことを考えていたとき、ふいに声をかけられた。声の主の方へと向き直れば、ユウマが立っていた。

翡翠の双瞼は、真剣な面持ちである。揺らぐことなくこちらを射抜く眼差しに、イノリは思わず目を瞬かせた。

「キミに少し話があるんですが、時間は空いていますか？」

「はい、大丈夫です」

イノリは迷うことなく、2つ返事で答えた。ユウマは安心したように微笑む。

「なるべく、静かで落ち着ける場所で話したいのですが……」

「じゃあ、4階のテラスとかどうですか？ あそこ、とても眺めがいいんです。丁度、今頃は夕日が綺麗ですよ」

「分かりました。じゃあ、そこで話をしましょう」

どこで話をするかの案は纏まった。早速、ユウマと共にテラスへ向かおうとしたイノリだが、背後から視線を感じて振り返った。ミカゲやリヒトラが、イノリとユウマを見つめている。前者はユウマを、後者はイノリを見ていた。

イノリは面々に解散を言い渡す。自分は後から戻ると伝えれば、リヒトたちは納得したように頷いた。5人はそのまま、蜘蛛の子を散らすようにして会議室を去って行く。ミカゲは眉間に皺を寄せてユウマを威嚇していた。

居心地悪そうにユウマが視線を彷徨わせる。ミカゲに気圧されたのだろう。彼の表情がどんどん曇っていく。イノリはミカゲの方を向いた。幾何の沈黙の後、ミカゲは渋い顔をする。見かねたユイが、ミカゲに何かを囁いた。

ミカゲは渋々と言った調子で目を逸らした。これで、祖父はもう何も言わないだろう。すっかりしよげてしまったユウマを促し、会議室を出た。

「あ、あの……迷惑じゃありませんか？ キミのおじいさん——」

「気にしなくていいですよ。それに、私もユウマさんと、ゆっくりお話ししたいと思ってたので！」

「！……ありがとうございます」

心配そうに声をかけてきたユウマに、イノリは満面の笑みで告げた。紛れもないイノリの本心である。それを聞いたユウマは、安心したように表情を綻ばせた。

廊下を出てエレベーターに乗り込み、4階で降りる。自室を過ぎ

て、テラスへ続く扉を開ければ、眼前には東京の景色が広がった。

黄昏の空が燃えている。昼間は真っ青な海と空が広がるテラスは、赤と金の輝きで満ちていた。対して、夕日の光が遮られた建造物は、一際暗い影に覆われている。

「これは……いい眺めですね」

「でしよう？」

「ええ。こんなに綺麗な夕焼けを見たのは初めてです」

ユウマが感嘆の息を吐いた。イノリも頷き、暫し景色を堪能する。一瞬のような気もするし、永遠にも思えるような時間が流れた。

今、イノリの隣にはユウマが居る。彼の隣で、彼と同じ景色を見ているのだ。——意識した途端、胸が締め付けられるような心地になった。

締め付けられていると言っても、息苦しきは一切ない。苦しいと言っても、酷く甘い感覚が胸を締める。自分の鼓動が、やけに鮮明に響いた。

それが、何故だか居心地の悪さを生み出していく。

なんだかソワソワしてきて、イノリは思わず声をかけた。

「……と、ところで、お話したいことってなんですか？」

「——俺自身のことです。……聞いて、くれますか……？」

「勿論！」

不安そうな眼差しで問いかけてきたユウマに対して、イノリは迷うことなく即答した。すぐに返事が返ってくるとは思わなかったように、ユウマは目を丸くする。数回瞬きした後、ユウマは安堵の息を吐いた。

美しい夕焼けから、ユウマはイノリへと視線を向ける。何かを言ううと口を開き、けれども、躊躇うように口を結ぶ。

“彼が話したいこと”は、切り出すのにとっても勇気のいることらし

い。イノリは無理に急かすことなく、じっと待っていた。

大丈夫だと眼差しで告げる。ユウマは暫く不安そうに視線を彷徨わせていたが、意を決したのだろう。ゆっくりと口を開いた。

「俺は……ISDF特殊戦術部、ISDFの研究所で作られた、人工生命体なんです」

イノリは思わず動きを止めた。ユウマが喋った言葉が、異国語のように聞こえたためである。しかしそれは、一拍遅れて正しい意味へと変換された。

人工生命体。医学、あるいは生命科学の分野として、長らく研究が進められていたものだ。80年前に復活したルシエのシラユキも、その部類に属している。

他にも、旧ムラクモ13班をナビゲートしたミロクとミイナも人工生命体——試験管ベビーだった。祖父がいつも話をしてきたことを思い出す。

イノリにとっての人工生命体は、“祖父と共に戦った戦友たち”という印象だ。各分野に突出した天才であるが、体が弱い、寿命が著しく短い等の問題点もある。

それを踏まえて、もう一度事実を反復する。ユウマが人工生命体——試験管ベビー。彼の能力から鑑みるに、ユウマが得意分野としているのは戦闘関連だろうか。

「……はは。突然こんなことを告白されても、困りますよね」

イノリの沈黙を困惑と取ったのか、ユウマは苦笑した。

「——だけど、キミには、どうしても聞いてほしくなったんです」

どこか縋るような声色で、ユウマは言葉を続ける。気のせいか、声が震えているように思えた。

「考え得る最適解の遺伝子配列を持ち、あらゆる戦闘技術、戦術理論を叩きこまれた『生きる竜殺兵器』……それが俺です」  
「『生きる竜殺兵器』……」

その単語で脳裏に浮かんだのは、シラクキやマリナのようなルシエクロードだ。前者は——竜殺剣の担い手にはなれなかったものの戦闘能力が優れており、後者はATLコード適応による竜殺剣作成に特化していた。

そうしてもう1人、『兵器』として生きていた男を、イノリは知っている。イノリの祖父にして、旧ムラクモ13班——あるいは、データーに存在し得る『狩る者』の中で最強と謳われた全能者<sup>マルチタスク・オール</sup>S級保持者——渡来ミカゲ。

祖父は人工生命体ではないけれど、全能者<sup>マルチタスク・オール</sup>S級保持者の力によって、著しく寿命を縮めていた。

だが、彼の能力に目を付けたヒュプノスの巫女／対竜研究の第一人者であるエメルが、ミカゲに延命治療を施したのだ。

その代償として、ミカゲは対竜兵器として生きることが要求された。ミカゲはそれを受け入れ、前線で戦っていたという。

「おじいちゃんと、同じ……」

「ええ。だから、どうしても彼には対抗意識を抱いてしまうんですね」

イノリが零した言葉を拾い上げたのだろう。ユウマが苦笑した。

「この肉体も促進育成のおかげで青年体ですけど、実際にこの世に生を受けたのは12年前なんです」

「ええっ!? ユウマさんが、私よりも年下!?!」

「はい。キミの方が、俺よりも年上なんですよ。驚いたでしょう?」

突然の告白に、イノリは思わず声を上げた。それを聞いたユウマは笑ってみせる。声色が乾いているように聞こえたのは気のせいではない。

声の違和感に気づいたイノリは、反射的にユウマの顔を見上げた。確かに彼は笑っていたけれど、その笑い方が歪に見えた。

イノリが口を開くよりも先に、苦笑したユウマが俯く。翡翠の双瞼はイノリから逸らされ、床に縫い付けられている。

「……気味が、悪いですよね？」

「そんなことない！ そんなことないです……！」

イノリは首を振ってそれを否定する。ユウマは目を瞬かせたが、静かに微笑んだ。

「ありがとう。——だけど、俺、自分の運命に不満なんてないんです」「どうしてですか？」

「俺の存在意義は、竜と戦って勝つこと……この星で最強の戦士になることです。そのためなら、家族も友達も恋人も、何も要りません」

一点の淀みも躊躇いもなく、ユウマははつきりと言い切った。彼の言葉に、イノリは雷に打たれたような衝撃を感じた。何かを言いかけた口は、はくはくと頼りない呼吸を繰り返すだけである。

ユウマが抱え続けてきた秘密は、あまりにも重い。戦うためだけに生み出され、そのためならば何もいらないとまで言い切った。それ以外の選択肢など彼は知ろうとしないし、知る必要もないと考えている。

（この人は、一体どんな人生を歩んできたというの——？）

たった12年しか生きていない青年が、どうしてそんな悲しいことを言うのだろう。家族も、恋人も、友人も要らない——そんな寂しい

人生を、笑って受け入れてしまえるのか。

つい数分前までイノリの胸を満たしていた甘い感覚が、今はじくじくと激しい痛みを伴っている。

イノリがユウマに抱いていた淡い感情は、ユウマにとって必要ないものでしかない——その事実が、ただ苦しい。

渡来イノリという存在を全否定されたような感覚に見舞われる。込み上げてくる悲しみに、胸が潰れてしまいそうだ。

途方に暮れるとは、こういう気持ちのことを言うらしい。イノリは思わず俯いた。

そんなイノリの気持ちはおろか、様子の変化も気づいていないのだろう。ユウマは言葉を続ける。

「……だから、どんどん強くなっていくキミを見ると、なんていうか……ああもう、分からないな……」

考えあぐねたような声色につられて、イノリは顔を上げた。難しい顔をしたユウマが延々と唸っている。

彼が必死になっているのは、常に最適解を明快にして即刻提示するようにしてきたためなのだろう。

結局、自分の感情に対して最適解を出すことができなかつたらしい。力なく頭を振った後、ユウマは途方に暮れた。

イノリの脳裏には、似たような葛藤を抱きながら生きていた男——ミカゲの背中がよぎった。

ユウマがイノリに向けている感情<sup>も</sup>は、ミカゲがタケハヤに対して向けていた感情とよく似ている。敬意、嫉妬、憎悪、親愛——タケハヤはミカゲにとって、すべての意味で絶対的な存在だった。

それ故に、タケハヤの話をしたミカゲは、「敬愛／憎悪しすぎて訳が分からなくなっている」と締めくくって唸るのだ。ユウマの瞳は、様々な感情がごちゃごちゃになっている。自分の衝動のはけ口が分からず、ユウマは深々とため息をつく。

だが、彼はすぐに顔を上げた。感情がせめぎ合っていた翡翠の瞳に

は、明確な決意だけがある。

「ただ、俺は負けたくないんです。第7真竜を倒すのはキミじゃない。この俺でなくてはならない……！」

「ユウマさん……」

「そう、思ってるんです」

言い終わるや否や、ユウマはイノリの方を見た。彼の瞳には、今にも泣き出してしまいそうな情けない面構えをした少女が映し出されている。

嗚呼、何て頼りない顔をしているのだろう。平常心に戻ろうとしても、胸から溢れだす感情が止まらないのだ。自分はこの間にも無力なのか。

そんなイノリを見かねたのか、ユウマがしどろもどろになりながら言葉を紡いだ。

「すみません。キミにそんな顔をさせるつもりはなかったんです。ただ、その……——ッ、くそ！……俺は一体、何がしたいんだ……！」

ユウマは苛立たし気に舌打ちし、勢いそのまま手すりを殴りつけた。金属製の手すりはびくともしない。

痛みで幾分か衝動が緩んだのか、ユウマは深々と息を吐いた。もう一度イノリに謝罪し、俯く。

夕焼けはもう沈もうとしている。黄金に輝いていた海は、段々と暗くなりつつあった。潮騒の音が遠い。

「キミといると、自分の感情がまるでうまく制御できなくなってしまう。……キミは何も、悪いことなんてしていないのに」

「……仕方がないですよ。だ、誰にだって、訳もなく嫌いな人くらい居るんですから。ユウマさんはたまたま、私がそれだっただけで——」



「——それは違う！」

イノリの言葉に対して、ユウマは即座に反論した。危機迫る眼差しがこちらを射抜く。

噛みつくような調子で身を乗り出したユウマの様子に、イノリは思わず目を瞬かせた。

驚いて身をすくめたイノリに謝罪した後、ユウマはもう一度「違います」と言った。

「俺は、決して、キミが嫌いなわけじゃないんです」

「ユウマさん……」

「寧ろ、キミのことは好ましく思っています」

「へっ!？」

「だから、俺がキミを困らせてばかりいるという事実」に対して困ってしまった……」

藪から棒にとんでもない爆弾を投下され、イノリは奇声を上げる。つい数分前、ユウマは「家族も友人も恋人も要らない」と自己申告したばかりではなかったのか。

パニックになりかけたイノリだが、寸でのところで「ユウマが12歳である」ことを思い出した。彼から聞いた話を総合するに、ユウマは恋愛なんて意識していないのである。

おそらくこれは、親愛の意味だ。他意はない。他意はない。他意はないのだ。イノリは必死になって自分に言い聞かせた後、どうにか取り繕う。……なんだか不公平だ。

不平不満を飲み下し、イノリはユウマへと視線を向ける。ユウマはしきりに首をひねった後、諦めたように苦笑した。

先程よりも日が傾いてきた。空の向こうには、一番星が瞬く。涼しげな風が吹き抜け、イノリとユウマの髪を弄んだ。

沈黙の後で、ユウマはこちらへ向き直った。

「現時点では、俺の方がキミよりも断然強い。それは純然たる事実です」

「そりゃあ、帝竜を一撃で倒したユウマさんの方が強いですよ。格好良いし」

「……あ、ありがとうございます。こんなときにそんな風に褒められると、居たたまれない気持ちになりますね……」

「ユウマさんが格好良いのは本当のことじゃないですか」

「……………そうですか。なんだか、その、……………照れます。すごく」

イノリは素直に賛辞の言葉を贈る。それを聞いたユウマは、むずがゆそうに口元を振るわせた。

「私のおじいちゃんも格好良いですけど、ユウマさんも凄かったです」  
「……………そう、ですか」

だが、ミカゲの話題を出した途端、彼の表情が一気に曇った。不満そうに唇を尖らせ、表情を歪ませる。青年の風貌からは想像できない程、子どもっぽい表情だ。ユウマの実年齢が12歳だと考えると、なんだか微笑ましい気分になってしまう。

正直な話、失礼だとは知りつつも、イノリはユウマのことを可愛い人だと思っている。イノリがひっそりと微笑んでいたとき、ユウマが意を決したように顔を上げた。鬼気迫った眼差しに、思わずイノリは肩をすくめた。彼から目を離すことができない。

話を戻すと念を押した後で、ユウマは言葉を続けた。

「現時点では、俺の方がキミよりも断然強い。それは純然たる事実です。……………だから、今後、俺を助けないでほしいんです」

「え……………」

「だって、自分より弱い相手に助けられるなんて許せない……………そうでしょう?」

——なんだ、それは。

イノリは、自分の背筋が冷えたような心地になった。翡翠の瞳には、侮蔑も悪意も何もない。ただ、「当然のことを当然のように語っている」という、揺るぎない確信があった。

「そんなことはないです。誰にだって得意不得意はあるんですから。補いあうのが仲間ってものでしょう」

「キミはそれでいいんです。そう在ることが許されるし、許されてきたから言えるんです」

はつきりとしたユウマの言葉に、イノリはぐうの音も出なかった。実際、イノリは殺竜兵器として生きることが義務付けられたわけではないし、家族や周囲の人々の優しさと愛情に囲まれて生きてきた。両親を早くに亡くして祖父母に引き取られた後も、祖父母が亡くなった後も、沢山の人の助けを借りて生きてきた。助け合うことが当然の環境で過ごしてきたのだ。

「でも、俺は違う。誰かに助けられるということは、俺が至らない——……即ち、〃俺が弱い〃ということを意味しています。そんなこと、絶対に許されない」

自分は、人類最強の戦士となるために生まれ落ちたのだ——翡翠の双脛は揺らがない。それだけがすべてなのだ、強く強く訴えている。

揺らぐことない眼差し。瞳に込められた悲痛な意志に、イノリは何も言えなくなつた。胸の痛みには耐えられず、目を伏せる。

ユウマが弱々しくため息をついた。つられて顔を上げれば、傷ついた表情を浮かべるユウマがイノリを見つめている。

どうしたのだろう。イノリが問いかけるよりも先に、ユウマが沈痛そうな面持ちのまま苦笑する方が早かった。

「やっぱり、俺は変なのかもしれませんね」

「ユウマさん」

「任務に支障が出ない程度なら、嫌ってくれても構いません。……勿論、俺も、任務に支障は出しませんから」

ユウマは確かに笑っている。だが、言葉とは裏腹に、今にも泣き出してしまいそうだ。青年は大人びた態度を通そうとするのに、12歳の少年が不安そうに顔を覗かせている。

イノリは迷うことなくユウマの手を取った。いきなりのことに、ユウマは目を白黒させてイノリを見つめる。翡翠の瞳がゆらゆらと揺れていた。それを、真っ直ぐ見つめた。

「ユウマさんのこと、嫌いになんてなりませんよ」

「えっ……!?!」

イノリの反応が意外だったのか、ユウマは酷く狼狽えた。

「ですが、俺は明らかに、キミに対して無礼なことを……あれっ？」

狼狽していたユウマは目を見張る。彼の心の中に渦巻く感情の変化に、彼自身が着いて行けないようだ。

青年の後ろで途方に暮れていた子どもは、イノリの答えに安心したらしい。表情を輝かせ、口元を緩ませる。

悲痛に張りつめていた笑みは消えていた。年相応に表情を綻ばせるユウマの姿が、彼の心根そのものなのだろう。

ユウマは自分の心情を分析しようとしているようで、顎に手を当てて唸った。

だが、結局、自身が納得するような答えは見つからなかったらしい。彼は困ったように身をすくませた。弱々しい声で呟く。

「り、理解不能です……」

「あはは。そういうのは、理解するのじやありません。感じるものですよ」

「感じる？」

「はい。自分の心が思ったことを、そのまま受け入れるのも大事なことです」

イノリの言葉を聞いたユウマは、ぱちぱちと目を瞬かせた。大きく見開かれた翡翠の瞳は、目から鱗という言葉が良く似合う。

感情は理屈で測れるものではないし、それだけで測ってはいけない。ユウマの場合、感情や心の動きに関しては重要視されなかったのだろう。

ユウマは暫くイノリを見返していたが、静かに目を細めて微笑んだ。

「——良かった」

「え？」

「嫌われてしまったのかと思っただけです。……もう、今まで通りに話しかけてもらえなくなるんだろうと思っただけ」

夕日に照らされたユウマの笑顔は、とても綺麗だ。イノリはその笑顔に釘付けになる。遠くから、潮騒の音が響いていた。

「不思議ですね。いつもは誰に嫌われても気にならないのに……キミのことになると、やはり、感情がうまく制御できなくなってしまいます。すみません」

「その気持ちは分かります。私も、おじいちゃんみたいによくやろう」と意識しすぎて、かえってうまくできなくなったことがありますから」

イノリの言葉を聞いたユウマが目を見開いた。

「……意識のしすぎ？　イノリを……俺が？」

ユウマは惚けたようにこちらを見返す。

イノリは微笑み、迷うことなく頷き返した。

「ユウマさんは、誰かに負けてしまうのが嫌なんでしょう？」

「えっ!？」

イノリの言葉を聞いたユウマは、驚いたように目を瞬かせた。自分が想定していなかったものと相對峙し、どうすればいいのかと思索している様子だった。酷く動揺した彼の様子に、イノリは首を傾げる。

自分は何も変なことを言っただけでもない。一拍遅れて、ユウマは大きく目を見開く。途端にあたふたし始めた。「……あっ！ち、違いますよ！　全くもってナンセンスです！」と、ユウマは慌てた様子で首を振る。

何がナンセンスなのか、イノリにはさっぱり分からない。イノリの様子を見たユウマは、鳩が豆鉄砲を食ったような顔をした。暫し呆気にとられていたユウマだが、何かを察したように口元を覆った。弱々しく呻く。

彼の横顔は、夕闇に隠れてよく見えない。心なしか、耳の端が赤らんでいるように感じたのは夕日のせいだろうか？

「と、とにかく……俺が言いたいのは、『キミには負けない』ということですよ」

「負けないも何も、ユウマさん、私よりも強いじゃないですか。私にとって、ユウマさんは恩人だし、憧れの人なんですよ」

きつと、いくら頑張っても、イノリは彼を追い越すことなんてできないだろう。イノリの前には、スペクタスを一撃で屠ったユウマの背中がある。しかも、彼の背中がある場所はあまりにも遠い。

重い使命を背負っても、ユウマは真つ直ぐ立とうとしている。彼が今まで歩んできた人生”と”メイヘムとの戦いで倒れてしまった”ことが、ユウマが今、苦しんでいる理由なのだろう。

どうしてユウマがイノリを選んだのかは分からない。分からないが、分かることがある。ユウマはイノリを信頼しているのだ。ユウマが孤独に背負い続けてきた、重大な秘密を話してくれた。

それも、他の誰かではなく、渡来イノリに語ってくれたのだ。ユウマが秘密を語るのに、どれ程の勇気が必要だったのだろう。彼から向けられた信頼が嬉しくて、イノリは表情を緩ませる。

イノリにとっても、ユウマは特別な相手だ。たとえユウマから「余計なもの」と断じられても、きつとこの想いは変わらないだろう。許されない想いを抱えていることは百も承知だ。

(それでも、ユウマさんの力になりたい。——貴方を守りたいんだ)

そのためにも、強くなりたい。彼の隣に並んで、彼を支えられるくらいに——ユウマに背中を預けてもらえるくらい、強くなりたい。

決意を込めて、イノリはユウマを見つめた。誰かに負けることを怖がるユウマの手前、言葉にはせずに、心の中で意志を固める。ユウマがひゅつと息を飲んだ。

彼は数秒ほど惚けていたが、すぐに正気に戻ったらしい。半ば押し付けるような調子で、「そういうことですから！ それだけですから！」と念を押した。

太陽は完全に沈み、空の色は赤から藍色へと変わっていく。気づけば、瞬く星の数も増えてきていた。建造物の窓からは明かりが漏れている。

どうやら、イノリとユウマは相当長い時間語らっていたらしい。時間の経過は早いものだ。時計で時刻を確認し、ユウマが苦笑した。

そろそろ戻らないと、ISDFの門限に間に合わなくなる。正直まだ名残惜しいのだけれど、仕方がない。それを隠しながら、イノリは頷いた。

「それじゃあ、また明日」

「ええ。任務で会いましょう」

ユウマは柔らかかに微笑み会釈する。イノリも会釈し返し、彼の背中を見送った。

そうして、改めて「強くなる」決意を固める。涼しい風が吹き抜け、イノリの髪を撫でていた。



（——ふーん）

立ち去っていくユウマの背中を見つめながら、ミカゲはため息をついた。

幾何かの間を置いて、イノリもテラスから立ち去った。彼女もまた、ミカゲの存在に気づいていない。——当然だ。トリックスターのスキル、ハイディングで身を潜めていたためである。

ハイディングで身を隠すのは、ヒイナが最も得意としている分野だ。トリックスターでありながら銃の扱いがイマイチなヨツミも、ハイディングによって身を隠すことはヒイナと同格である。

勿論、マルチタスク・オール全能力S級能力者であるミカゲも、ハイディングで身を隠すことは可能だ。旧ムラクモ13班時代は様々な職業を使い分けていたけれど、メインはサムライであった。閑話休題。

『出自はどうあれ、ユウマくん自身は悪い子じゃないみたいだよ？』

ミカゲくんが不安になるようなことはないと思うなあ』

「現時点は、だろ。100歩譲って、あいつ自身がいい奴だったとしても、何が起こるかわかったもんじゃないんだ。注意するに越したことはない」



希薄だった気配を濃くするように、ユイの姿が浮かび上がる。苦言を呈するミカゲに対し、ユイは苦笑しながら肩をすくめた。

心なしか、彼女がミカゲに向ける眼差しは生温かい。頑固な亭主を許容し、優しく見守る妻のようだ。実際、ユイはミカゲの妻なのだが。

『お宅のユウマくんには注意を払え』って、トウゴに伝えておかないと』

『ミカゲくん。イノリのことに関して、ちよつと過保護過ぎない？

ユウマくんのこと、かなり厳しめに見てるようだけど……』

「当たり前だろう。イノリは俺の希望だ。あの優男の場合、俺とナツメ総長とタケハヤの悪いところだけを凝縮したような気配がする」

「見てて憂いしかない」とミカゲは締めくくり、深々とため息をついた。

力を欲して暴走し、挙句の果てに人類の敵になったナツメ。愛する者を守るために竜へ至り、その果てに、自分の愛した人のことをミカゲや他の人々に丸投げしたタケハヤ。大人げないまま情緒が止まってしまった、面倒くさい男であるミカゲ。

イノリと会話をしていたユウマの様子を思い返し、ミカゲは頭を抱えたくなった。出自も情緒も思考回路も歪で不安定な男を見ていると、2020年の自分を思い出して嫌になる。文字通りの同族嫌悪だ。だからといって、むやみやたらに苛立ちをぶつけるような真似はしない。

イノリはユウマに想いを寄せているようだが、難儀な気配しかない。孫の幸せを祈る身としては、如月ユウマは完全な地雷物件である。

いくらISDFの若きエリート、しかもイケメンだからといって、「使命のためなら、友人も家族も恋人も要らない」と言い切るような奴はお断りだ。

そこまで考えて、ミカゲはがしがしと頭を掻いた。ミカゲが抱く意見は一般人視点からのものであり、ミカゲ自身のことを棚上げした発

言だからだ。

タケハヤがこの話を耳にすれば、「お前が言うな」と突っ込まれるだろう。

（「使命があるから、友人も恋人も家族も持つてはいけない」、俺に関わることで不幸になる人間を、1人でも減らすために必要なこと  
”）

どうしてか、当時の心境が鮮明に浮かび上がる。久しく忘れていた、過去の残骸。膝を抱えて蹲っていた、小さな子どもの悲痛な決意だ。

当時のミカゲは子どもなりに必死だった。寂しがり屋の癖に強がって、それでも優しい人たちの近くに居たかった。

如月ユウマも——本人は無自覚だから性質タチが悪い——似たような奴である。兵器としての自分と、人間としての自分に折り合いをつけることができない。それ故に、ふとした拍子に瓦解していく。

（ああ、嫌だ嫌だ。完全に俺のコピーじゃないか）

このまま進めば、如月ユウマは潰れるだろう。帝竜との戦いで不調をきたしたとなれば、兵器としての適性が疑問視されて当然だ。風当たりも強くなることだろう。人工生命体として生まれた命や、人工生命体を扱う研究者の一部は、「役目を果たせなければ存在する価値がない」という思考に到達しがちである。

一時期、シラユキはそれが原因で酷い目にあわされた。ヨツミからその話を聞かされたときは、シラユキを酷い目にあわせた研究者をぶん殴つてやろうとさえ思つた程だ。そのときには既にも、その研究者はこの世に居なかったが。ヨツミとシラユキが研究施設から脱走した後、研究所はドラゴンの群れに襲われたのだ。

ヨツミの上司——亡くなった研究者のやったことは、人間に対する行為としては絶対に許されないことである。だが、兵器の扱いという

点から見れば何も間違いではなかった。兵器として生まれた／存在している命を、関係者がどう認識しているかが明暗を分ける。

その点から見れば、ミカゲやシラユキ、マリナやナビの双子は運が良かったと言えよう。自分たちには、自分たちのことを人間と認識し、接した人々がいた。

ミカゲにはユイがいたし、シラユキにはヨツミがいた。マリナにはリヨウスケがいたし、ナビの双子はミカゲたちにとって大切な仲間であった。

——では、如月ユウマはどうだろう。

ハイディングで盗み聞きした話から推測するに、ユウマのことを人間として扱う相手は、一応だが存在している。その筆頭が、ミカゲの教え子でユウマの上司であるヨリトモだ。ヨリトモの様子からして、ユウマとの付き合いは長いのだろう。

彼は那雲ナグモ三喜雄ミキオとは義理の親子だから、生まれた直後のユウマを知っているもおおしくはない。ユウマの語りや様子からして、奴の出自を知っているのはISDFの上層部だけだ。自らその秘密を喋った相手も、イノリ以外いないらしい。

(……どうしたもんかなー。分かりたくもないのに、全部分かっちゃまう)

あの様子は、ユイに一目惚れした後、彼女をひっそりと神聖視しながら淡い思いを寄せていた渡来ミカゲ(2020年当時21歳)の焼き直しだ。

いくら「イノリがユイの血筋を強く受け継いでいる」とはいえ、ミカゲとよく似た生い立ちと歪みを抱えた男をホイホイ釣り上げるのはいかななものか。

『——ふふっ』

「どうしたっ？」

ユイが微笑ましそうに笑う。その声に、ミカゲは思考回路を中断した。妻へと向き直れば、董色の瞳が静かに細められた。

『ミカゲくんは、優しいのね』

藪から棒に爆弾を投下され、ミカゲは目を丸くする。

ユイは柔らかに笑っていた。初めて顔を合わせたときと同じように。

『ユウマくんが昔のミカゲくんとよく似てるから、放っておけないんでしょう?』

「……………いや、違——」

『——私は、ミカゲくんとユウマくんは似た者同士だと思っただけであらう』

鈴を転がすような笑い声に、ミカゲはそのまま押し黙った。残念ながら、妻は何もかもをお見通しらしい。おそらくは、ミカゲが持て余している感情も、なんとなく分かっているのだろう。分かったうえで、こうして寄り添ってくれている。

文字通りの完敗だ。ミカゲは観念して両手を上げる。それについて何も言わないのは、ミカゲが持っているなけなしの意地だ。それが大人げないことは、ミカゲもユイも充分承知している。ミカゲの意地が許容されているのは、ひとえにユイの懐が広いからに他ならない。

(俺と優男が似ているのならば——)

ミカゲは瞼を閉じて物思いにふける。ユウマに想いを寄せるイノリの横顔が、ミカゲに手を差し伸べたユイの表情と重なった。

「興味深い……」

勝利に湧くニンゲンたちを眺めながら、フードに身を包んだ仮面の男は息を吐く。杖で体を支えながら、男はニンゲンたちの背中を見送った。

「この短期間で、帝竜を屠る力を宿すとは」

ほんの少し前まで、あのニンゲンたちは帝竜を倒すことなどできなかった。1人規格外はいるが、理由あって今は、脆弱なニンゲンたちと同格になってしまっている。

しかし、あのニンゲンたちは爆発的な勢いで成長している。慈母による「作為」があつたとしても、あの成長速度は予想以上だ。彼女も喜んでいるに違いない。

あのニンゲンたちは、真の「狩る者」となり得るのか。それとも、竜の糧として喰われるのか。どちらにしても、ニンゲンという命の行く末は興味深い。

古き命を喰らい、進化するのが命の理。命は巡り、新しき命を紡ぐ。決して途切れぬ循環を、男はずつと見てきた。命の種を蒔き、数多の命を生み出した。

男の役目は「生み出す」こと。生み出された命はサイクルを繰り返して、命は淘汰を繰り返す。役目を終えた男は、その行く末を静観し続けてきた。

その果てに、数多の命が糧と消え、6つの命が「進化の極北」へと至る。

7つめの命もまた、産声を上げようとしているのだ。慈母はその瞬

間を待ち焦がれている。

「脆弱で貧弱……しかし、この輝きは——」

「——『極北の果てに生まれ出る命』として相応しい』ってか？」

背後から聞こえた声に、男は思わず振り返った。そこに居たのは、年若い青年である。不気味な目が描かれた黒いバンダナを頭に巻き、刃を思わせるような白銀の髪を腰まで無造作に伸ばし、橙と灰色基調のつなぎを着ていた。目元は、蜻蛉の複眼を思わせるような緑のサングラスで隠されている。

男は思わず身構えた。……と言っても、役目を終えたも同然の男には、青年に対抗する術など殆どない。この青年が威嚇程度で手を止めるような奴ではないことは、すぐに理解できた。——そして、この青年が、「この世界」にとって異質な存在であることも。

「汝は……」

「おおっと！ 今の俺はアンタと同じただのニートだ。出来事を脇から眺めるだけの傍観者にすぎんよ」

怪訝そうな表情を浮かべた男に対し、青年は両手を上げて笑った。その態度は苛立たしさを助長させる。

「『すべてを超えた』存在が、『未だ因果に縛られる紡ぎ』の世界に、何用がある？」

「分からん」

青年の言葉を聞いた男は、思わず彼へと向き直る。

……今、こいつはほんでもないことを言わなかったか。目的を持たずして、こんな場所に流れ着いた、と？

「——は？」

「気づいたら、〝ここ〟に居たんだ。おまけに、〝ここ〟には俺が働く場所も理由もない。そこにはもう、既に〝奴ら〟が納まつてるからな」

青年はそう言って、鍛冶場の出入り口へ視線を向けた。過去の遺物、規格外の1人へ想いを馳せているのだろう。

朋友（とは認めたくないが）ニアラを撃退し、フォーマルハウトを狩った張本人と、それを取り巻く思念体へ。

「……ならば、汝は、〝ここ〟で何を成すと言うのだ？」

「強いて言うなら、見届け人かな。……未練があるとすれば、多分それだ」

何かを思い返すようにして、青年は目を閉じる。再び開いた眼差しは、どこまでも優しいものだった。

揺れていたのは労いか、敬意か、愛情か。それを判別することは、男には不可能である。

「見届ける？ それは、彼の者の行く末か？」

「それもあるけど、それだけじゃない」

「……では、何を」

「——〝頑張った奴〟を、褒めてやらなきやいけないよなあって」

何も言えないまま、言わないまま、〝超えて〟来てしまったのだと青年は語る。サングラスの向こう側に、該当者が居るのであるろう。

それが誰かなんて、男に分かるはずもない。ただ、この青年は、〝未だ因果に縛られる紡ぎ〟の世界に未練があるようだ。

おそらく、青年は己が抱え続けた未練に惹かれて、〝ここ〟に迷い込んだ。彼はそれを自覚しているし、どうすればいいかも理解しているらしい。

「絆される、って、こういうのを言うんだろなあ。毎回毎回、超えて顔を合わせる度に、ラウンジや会議室に連れ込まれるんだよ。前者は大食い勝負、後者は夜のプロレスごっこしようとするし。後者は逃げろの大変だったわー」

「……………」

「あのときは厄介極まりなかったんだけど、今思えば、アレ、〃精一杯の甘え〃だったんだろうな」

「……………」

「生まれながらの親としてやって来た分、そういう情緒に疎かったんだろう。自覚したとしても、〃喰う〃か〃喰われてやるか〃のやり方しか知らなかったんだ。無理もないかもしれない」

この言葉を聞いた途端、男は大部分を察した。青年の未練も、青年に迫った〃誰か〃の正体も、一瞬で理解してしまったのだ。男は頭を抱えて天を仰ぎたくなった。

奴の発言を〃誰か〃が耳にしたら、どうなるだろう。そういう感情に関しては、〃誰か〃や自分たちは疎い傾向があるらしい。自分もまた、それを飲み込めていないでいる。

青年は、自分たちと対を成す存在だ。それ故に、彼は〃誰か〃の〃愛のカタチ〃を受け入れなかった。青年にとつて、〃誰か〃の愛は「愛と呼ぶには悍ましいもの」だったから。

彼は〃誰か〃の愛を受け入れたわけではない。断じて、彼は『誰か』が「〃愛のカタチ〃である」と主張し、続けてきた』行為を認めただのではない。

認めるはずがないのだ。その身が進化の極北に近付いても、新たな命の統合者——種を蒔く者としての資格を得ようとも、青年はニンゲンで在り続けようとするのだから。

彼が認めたのは、ただ1つ。〃愛のカタチ〃を貫き通すために、何もかもを捧げたその在り方。〃誰か〃がすべてを賭して貫いた、揺るぎのない意志そのもの。



「それは、汝が統合者へと至る以前の感情か？」  
「いいや」

男の問いに対して、青年は首を振った。

「俺はもう『彼』ではないし、『彼』もまた、俺には成り得ない。——  
これは、俺の意志だ。そこにはもう、『彼』は関係ない」

はつきりと言い切ったあたり、青年は個人としての意志を確立していた。『一個人』として、彼はここに立っている。

「まあ、それ以外に関しては基本ノータッチで行く予定だし。俺が何もしなくとも、あつちの件はあつちで、勝手にしっちゃかめっちゃかにしてくれるだろ。その分に関しては楽だわ」

「……戯言を」

「怖いな。『基本はニート』同士、互いに不干渉というや」

「我はニートではない」

「じゃあご隠居で」

「……………もういい。好きにしろ」

青年はけらけら笑いながら踵を返した。彼の足元に咲いていた、白い花が花弁を散らす。

透き通った青い光が弾け、そこにはもう彼の姿はない。

命の種を蒔いたとき以上の疲れを感じながら、男はこの場から姿を消した。

茶色く変色した葬送花の花びらが、散った。



「いやー、本当にありがとうねー」

「いえいえ。同じ珍味好きの頼みですから」

満足げに笑った女性研究員アミイの手には、新鮮なスパイラルミートが大量に抱えられている。珍味好きなら絶対に協力したくなるような依頼を果たしたりヒトの表情は、これ以上ないくらい晴れやかだった。

グロテスクな巻貝の肉が大量に積まれている——マサハルからしてみれば、なかなかハードな光景だ。思わず口元を抑えて視線を逸らした自分は何も悪くないはずである。我が孫ながら、どうしてこんな好みになったのか。

「楽しみだなー。スパイラルミートのバター焼きー」

「バター焼き以外にも、刺身や味噌汁の具材にしても美味しいですよ」「おおお！ 情報ありがとうございます！ さっそくチャレンジしてみるわ!!」

満足げに笑ったアミイは、スパイラルミートを大事そうに抱え、奥へと走り去って行く。リヒトはニコニコ笑って彼女の背中を見送った。

これから、アミイはスパイラルミートを調理するのだろう。数日前、マイルームのキッチンを阿鼻叫喚に陥れた光景がフラッシュバックする。あの後も、リヒトは独自で調理法を研究していた。その情報がどこから漏れたのか、話を聞きつけたアミイがリヒトに「スパイラルミートを分けてくれ」と頼み込んできたのだ。

彼女は表向きとして、鉱石分布図調査のため、スパイラルミートが欲しい”と言った。実際、スパイラルキャノン希少金属を凝縮して殻を形成する特性があるため、鉱石調査に持って来いのマモノである。勿論、仲間たちに対して、リヒトはこの依頼の表向きしか話していない。裏を話せば、大惨事になることは予測できたためだ。

マサハルは深々とため息をつく。アミイという同類を得たりヒトは、珍味追及を深めていくだろう。このままいけば、知り合いに対して珍味テロを行い、周囲を阿鼻叫喚に陥れる”ことは明白であった。自重しろと言っても止まらないことも明らかなのだが。東雲マ

サハルという人間は、苦勞し続ける運命にあるらしい。

そんなことを考えていたとき、背後から押し問答の声が聞こえてきた。何事かと振り返れば、受付嬢と少女——ミオが何かを話している。

リヒトもミオの存在に気づいたようで、迷うことなくエントランスへと駆け出した。マサハルもリヒトの背中を追う。

「ミオ！」

「あつ、リヒト！」

ミオの姿を見たリヒトは満面の笑みを浮かべてミオを迎え、リヒトの姿を確認したミオも表情を輝かせる。まるで、逢瀬の約束をしていた恋人たちのようだ。

受付嬢の表情が引きつる。恨めしそうな様子からして、彼女は独身／彼氏と別れた直後なのだろうか。それを質問することは憚られた。

「リヒトさま、こちらの方は？」

「僕の大切な友人です」

受付嬢の問いかけに、リヒトは穏やかな笑みを崩さず答えた。それを聞いた受付嬢は、非礼を詫びてミオを通す。押し問答から解放されたミオは、安堵の息を吐いた。

「助かったよ。ありがとう、リヒト」

「いえいえ。それは何よりです」

2人の周辺は、まるで花畑の中に居るんじゃないかと思うくらい、空気がふわふわしている。マサハルは思わず目を細めた。この場にヨツミとシラユキがいたら、優しい眼差しで2人を見守っていたことであろう。

丁度そのタイミングで、エレベーターからナガミミが降りてきた。

マスコットの姿を確認した受付嬢がナガミミに声をかける。ウサギのマスコットが主任をやっているという光景は実にシュールだった。しかも、ナガミミの喋り方は完全な営業用である。13班をナビゲートするときのような毒舌や口の悪さなど、一切出していない。ナガミミの演技は文字通り完璧だった。思わずマサハルは舌を巻く。あれは絶対真似できない。

ナガミミは主任の地位と営業用のフレンドリーな態度で場を収めようとしていた。主任の知り合い、主任本人の「任せろ」という言葉で、受付嬢は引き下がる。

受付嬢の追及を捌き終えた後、ナガミミは深々とため息をついた。そして、ぎろりとミオを睨みつける。

「ブチ殺されてーのか、コムスメ……」

「ご、ごめんなさいっ!？」

「まあまあ、落ち着いてくださいよ。ミオが怖がっているじゃないですか」

ナガミミに睨みつけられ、ミオは怯えたように身をすくませる。見かねたりヒトがナガミミを諫めた。マスコットと同じ目線まで屈み、そつと耳打ちする。

「これ以上ミオをいじめるなら、あなたの口に『加熱処理していないスパイラルエキス』を突っ込まなくてはいけなくなりますよ」

「……で、コムスメ。ここに何の用だ？ 遊びに来ただけだってなら、とつとお家へ帰った方がいいぞ?」

『うわ、えげつねえ!!』

我が孫ながら、なんて悍ましい脅迫なのか。不慮の事故で『生状態のスパイラルエキス』を飲んでグロッキーになってしまったマサハルにしてみれば、以前の悪夢が形を変えて再来したことに他ならない。

勿論、ナガミミは瞬時に高圧的な態度を軟化させた。ヒイナとマサハルが、スパイラルエキスを飲んで倒れた。ことは、ナガミミに報告済みだったためである。正体不明のマスコットでも、ゲテモノに耐性があるわけではないらしい。

「えっと、……実は、アリーさんに会いに来たの」

「アリーに？　なんでまた……」

「……ナビゲーター、引き受けようと思って」

そう言ったミオの瞳は、強い意志が宿っていた。

彼女の横顔が、嘗てマサハルたちを助けた双子のナビゲーター——ミロクとミイナに重なる。その面影と意志は、確かにミオへと受け継がれたのだ。

なんだか感慨深いものを感じて、マサハルは思わず鼻を鳴らした。滲んだ視界を服の袖で拭いながら、リヒトとミオの姿を見つめる。

「私もアリーさんに協力したい。ナビゲーターとして、リヒトを助きたいんだ」

ミオの声には一切の震えがない。目の前に居るのはか弱い少女ではなく、自身の戦うべき理由を見つけ出した戦士だ。

戦場へ赴く覚悟を固めた若芽色の瞳。彼女の覚悟を聞いたナガミミが、感心したように声を漏らす。

その言葉につられるような形で、リヒトもまた表情を輝かせる。金色の瞳が嬉しそうに瞬いた。

「決心したんですね」

「うん。わたしは、わたしにできることを、もつと一生懸命に頑張りたい。……全部、リヒトやイノリたちの受け譲りだけだね。えへへ……」

「それでもいいですよ。理由は何であれ、成し遂げようと思い、行動

することが大事なんですから。ミオは凄いです」  
「そ、そんなに褒められると、照れちゃうな……」

ミオの決意に対し、リヒトは惜しみなく賛辞を贈る。真正面から褒められた経験が少ないのか、ミオは顔を真っ赤にして視線を彷徨わせた。

そんなミオの姿を見て、リヒトは慈しむような眼差しを注いでいた。お花畑全開の2人に対し、物を申せるような猛者はいない。

「それに、ちよつとだけ下心があるんだ」

「下心？」

「わたし、お父さんを探してるの」

ミオは密やかな告白をするように、小さな声でリヒトに話し始める。

彼女がノーデンスを訪れたのは、行方不明となった父親を探しに来たためらしい。ミオの祖父は「両親は2人とも事故で死んだ」と語っていたらしいが、彼女はそれを信じていない。小さい頃、父親がノーデンス社について言及していたことを覚えていたためだ。

他にも、父親に頭を撫でてもらった記憶も、父親の生存を信じている理由なのだ。彼女は語る。それらを分析した結果、「一緒に居られないのは何か理由があるためだ」という結論に至ったらしい。勿論、確定的な証拠はどこにもない。妄想と言えはそれまでだ。

(……ミカゲの坊や那雲夫婦から全容は聞いてたけど……)

すべてを聞いている人間としては、ミオの記憶力や直感には舌を巻かざるを得ない。マサハルは何とも言えない気分になりながら、ミオの父親と祖父に想いを馳せた。

「ミオのお父さん、すぐ見つかりますよ」「も、もう。……リヒトが言うと、ホントにそう思っちゃいそう」——このままいくと、2人の

言葉通りの光景が広がることになる。

精神的な疲労が折り重なる凶を思い浮かべ、マサハルの口元にも乾いた笑みが浮かんだ。完全に、人間関係が大事故を起こしている。マサハルは思わず遠い目をした。

記憶力がいいのは、Nav. シリーズと銘打たれた人工生命体たちの能力だ。ナビゲーターには、ナビゲート能力だけでなく、膨大な情報を記憶し演算する力も必要なのだから。

嘗ての英雄の系譜を引く者たちを、嘗て英雄たちを支えたナビゲーターの系譜を引く少女が導く――。

因果と言えば因果である。マサハルは遠い過去へと想いを馳せた。ミロクとミイナの勇士は、今でも覚えている。

「ここで働いていれば、いつかきつとお父さんに会えると思うの。

……まあ、採用されなきゃ意味がないんだけど」

「僕でよければ協力しますか？」

「……ううん、大丈夫！ 自分でなんとかするって決めたから！」

そう言っつて、ミオは力強く微笑んだ。

「……そうですね。ミオなら絶対採用されますよ」

言いたいことを飲み込んで、リヒトも柔らかかに笑い返す。ノーデンスに対して黒い取引を持ちかけようと考えていたらしい。

最も、何かあったらすぐにそれをしようと思案しているようだ。

……本当に、我が孫ながら恐ろしい奴である。

「それじゃあ、リヒト。行ってきますー！」

「頑張ってくださいー！」

意気揚々と立ち去っていくミオの背中を見送る。

ナガミミは今後のことを予測し、楽しそうにほくそ笑んだ。

……だが、その笑みは長くは続かなかつた。

「ナガミミ様ー！ ただいまーっ！」

「げえーっ!? ブンイチ!!」

本業を終えてノーデンスへと戻ってきたブンイチが、ナガミミを強襲したためである。ブンイチはナガミミにスライディングし、タツチダウン宜しくマスコットを抱きしめた。

人目についているということで、ナガミミは営業状態でブンイチを迎え撃つ。しかし、ブンイチは何も気にすることなくナガミミとべたべたしていた。お持ち帰りを画策している。

ブンイチの暴走を見ていたマサハルは深々とため息をついた後、彼を止めるために歩き出した。



「仕事、仕事ー！ 仕事は本当に楽しいなー!!」

「……………もうムリなのです……………」

リツカがヘタクソな歌を歌う。確か、曲名は「楽しい社畜ライフ」だろうか。徹夜明けの頭では、もうまともに思考することなど不可能だ。

チカは虚ろな気分で書類と向き合っていた。急な仕事——主にフロア改修が追加されたためである。用途は資料室、スカイラウンジ、アトランティスの避難民受け入れだ。前者2つはすぐに改修できたが、後者はまだ未定である。

アトランティス避難民の受け入れが実施されるか否かは、明日の交渉にかかっている。女王ウラニアに「避難民の保護と引き換えに竜殺剣製造を依頼する」作戦のため、フロア改修が始まるのは、交渉の結果次第なのだ。要するに未定であった。

だが、その分の資材と場所はきちんと確保しておかなくてはならな



い。チカは現在、各種の改修手続きでヒイコラ言っていた。今日は布団で寝れると思っていたので、それが遠のいたと確定した瞬間といったら、ない。

それが自分の仕事なのだ。唸りながらも、チカは必死になって己を奮い立たせる。

自分には逃げることなど許されない。こんなことは、早く終わらせてしまいたい。

「やらなきや、終わらないのです……。終わらせるためにも、仕事をしないと……。ううう……。」

いつもと変わらぬデスマーチ。なのに、どうしてか、涙が溢れてきた。泣いている暇なんてないのに。

辛い、苦しい、もう嫌だ——普段は押し殺していた感情が、堰を切ったように溢れ始める。

「チカ？ ……大丈夫か？」

カウンター越しに聞こえてきた声に、チカは思わず顔を上げる。目の前には、小さな風呂敷包みを抱えたソウセイがいた。慌ててチカは涙を拭う。

「な、なんでもないので。ちよつと、頑張りが報われなくて辛いなと思っただけなのです」

「……もしかして、フロア改修の申請のせいか？」

大量の書類を見て、ソウセイの表情が曇る。改修セクションにフロア改修を申請したのは、他ならぬソウセイだからだ。

彼にそんな顔をさせてしまうのはチカの本意ではない。仕事をしている以上、休みが潰れることは仕方がないのだ。

チカは慌てて弁明しようとしたが、ソウセイが頭を下げ、謝罪する

方が早かった。紫苑の瞳は悲しそうに揺れている。

嫌な沈黙が広がる。折角、ソウセイが声をかけてくれたというのに。

チカがおろおろしていると、ソウセイは何とも言えない顔をして風呂敷包みを解いた。そこから姿を現したものに、チカの目線は釘付けになった。

一口サイズの和菓子だ。紫陽花を象ったもの、西瓜を象ったもの、夏の夜空をイメージしたもの、清流で泳ぐ魚の様子を象ったもの——どれも、夏の風物詩を取り入れたものだ。

「疲れたときには甘いものだと言うだろう？ ……和食しか作れないから、こんなものしかできなくてな」

「……これ、ソウセイの手作りなのですか？」  
「ああ」

ソウセイは静かに頷いた。

……確かに、ソウセイは「和食しか作れない」と言っていた。言っではいたが、まさかこんな和菓子が出てくるとは思わなかった。しかも手作りである。

何も言われなければ、高級和菓子店で売られている商品と見間違ってもおかしくない出来栄だ。チカは思わず感嘆のため息をついた。

「……仕事を増やした詫びに足りないと言うのは承知しているが……」

「そ、そんなことないのです！」

落ち込んでしまったソウセイに対し、チカは思わず声を張り上げた。チカが大声を出すとは思っていなかったようで、ソウセイは目を瞬かせる。

驚かせてしまったことに謝罪して、チカはもう一度和菓子の詰め合わせを見つめた。どの和菓子も美しい見た目だ。見ているだけでも

心が弾む。

「……見てるだけでも、なんだか元気が出てくるのです」

「そうか」

「はい。今日はもうちよつと、頑張れそうな気がしてきたのです。ありがとうございます、ソウセイ」

チカは微笑み、和菓子の入っている箱を受け取った。中に納められた和菓子が宝石ならば、さしずめこの箱は宝石箱である。そんな煌びやかなものとは無縁だと思っていた分、じわじわと込み上げてくるものがあつた。

和菓子を受け取ったことに安堵したようで、ソウセイはふつと目を細めた。口元はマスクで覆われているけれど、多分、嬉しそうに綻んでいるのだろう。

その様子を思い浮かべるだけでも、チカの疲れが一気に吹っ飛ばす。リツカではないけれど、今日は何が起きても仕事を成し遂げられる気がしてきた。

ソウセイはチカに会釈し、自室へと戻っていく。その背中を見送った後で、チカは和菓子の入った箱へと視線を戻した。

さて、どれから食べよう。どの和菓子もきらきらと煌めいていて、何と言うか、食べるのが勿体ない。

仕事を始める前に1つ食べようと思ったのだが、本当に悩ましい。ううむ、とチカは唸る。

「仕事、仕事…… 仕事は本当に——ああつ、チカ！」

「リツカ……！」

「何してるの、手が止まってるよ!? 差し入れを食べるのは仕事が終わった後なの! これは没収だよ!」

「だ、ダメなのですっ! これは、ソウセイがチカのためだけに作ってくれたものなのです……! このお菓子が、今日の仕事を終えるか否かの生命線なのです……!」

悩んでいたせいで、手を止めていた現場を片割れに見つけられる。ワーカーホリックでチカのことなど眼中にないと思っていたのに、なんでこんな時に限って見つかるんだ。

取り上げようと手を伸ばしてきたリツカから、チカは必死になって和菓子を庇う。特に後者——「今日の仕事を終えるか否かの生命線」を強調すれば、リツカは渋々離れた。

「ちゃんと仕事をしてよ？ 絶対だよ！」と念を押して、リツカは仕事へと戻った。相変わらずヘタクソな歌を歌いながら、彼女は恐ろしいペースで仕事を片付けていく。

チカは差し入れの和菓子へ視線を戻す。散々葛藤した後で、紫陽花を象った和菓子を選んだ。一口サイズの紫陽花を、チカはわざと少しづつ咀嚼した。餡の甘みがじんわりと沁み込んでいく。今度は違う意味で涙が出そうだ。

この仕事が終われば、箱の中で宝石の如く煌めく和菓子たちを食べることが出来る。どの和菓子も美味しいに違いない——チカは自己暗示しながら書類と向き直る。

書類は相変わらず山積みになっていて、心が折れてしまいそうだ。己を奮い立たせるように、チカは和菓子の入った箱へと視線を向ける。整然と並んだ和菓子が煌めいた。

「——よし」

チカは気合を入れるように手を叩き、ペンを取った。

仕事を片付けた後、この和菓子を食べる未来を手にするため。

ひいては、この和菓子の感想をソウセイに伝えるために。



国会議事堂には、千鳥ヶ淵へと繋がる地下通路がある。有事が合った際、そこが避難場所になっていた。実は、千鳥ヶ淵は隠れた花見ス

ポットだったりする。現在は季節外れだし、そもそも立ち入り禁止区域だ。故に、ここには青年以外誰も居ない。

ISDFや戦闘学校の関係者しか入れない決まりになっているのだが、青年はそのどちらにも該当しない。ここを管理している連中に発見されれば、即刻不審者として連行されるだろう。逃げ切る自信は充分あるため、気にしていないけれど。

ここに立ち寄ったのは、この場所が青年にとって思い出深い場所だからだ。他にもいくつかの場所を回ってきたけれど、青年にとってはここが一番印象に残っている。愛に殉じた女が、己を喰らうべき命に祝福を残した場所だ。

何度も超える中で、その姿から目を逸らせなくなったのは何故だろう。満足そうに笑った女性が、寂しそうにこちらを見ていたことに気づいたのは何回目だったのか。

青年は足元を見た。白い花が咲いている。

それを目の当たりにした青年は、忌々し気に表情を歪めた。

「まったく、気を抜くとすぐこれだ」

青年は吐き捨てるように呟き、白い花を踏みにじる。踏んでも踏んでも、次から次へと花が咲く。

「だから、俺は〃■〃じゃないっての」

青年が苛立たしさをぶつけて踏みにじる花は、星に蒔かれた命を刈り取るために咲く葬送花だ。赤や黒とは違って毒性はないが、青年にはこの花を誇る趣味はない。

己の咲かせた花を誇るのは、嘗て青年が統合者じぶんに至る以前、敵対し、狩っていた相手だけだ。特に、5番目の奴とは話が合わないだろうと思っている。

ぐしやり、ぐしやり、ぐしやり。白い花の花弁が舞う。次の瞬間、この場には何もなかったかのように花が消えた。葬送花が消え去った

のを確認し、青年は満足して笑った。

花が咲く光景を見るのは好きだが、葬送花は嫌いだ。見ると全部踏み潰してしまいたいと願うくらいには。

因果を超えた命の統合者としての影響なのか、奴らに関連するモノを見ると苛立たしく思うのだ。

(そりやあまあ、一歩間違えると奴らの仲間入りしてしまうくらい不安定な存在だって自覚はしてるさ)

青年は深々とため息をつく。どうせ花を咲かせるならば、色とりどりの花を咲かせたいものだ。勿論、葬送花ではなく、青年が知りうる限りの「普通の花」を。

白い葬送花を咲かせてしまうエネルギーを、すべて別な用途へ転換する。その途端、青年の足元から沢山の植物が芽吹き始める。色とりどりの花が咲き誇った。風が吹き抜け、花卉が舞い上がる。

青年が咲かせた花は、種類や季節、生息環境も無視した、統一感のない花たちだ。ピンクと黄色のチューリップ、タンポポ、ペチュニア、レンゲソウ、トリトマ、アングレカム、デンファレ、リンドウ、ブルースター等々。

「……わああ、タイムリー」

この花が咲いた理由を、青年はよく知っていた。それ故に、難しい顔をして深々とため息をつく。丁度、この花が持つ花言葉にちなんだ出来事が発生したばかりだからだ。花言葉の共通点は「恋愛」である。

青年が苦笑していたとき、彼の足元から新しい花が咲く。凜と咲き誇るエーデルワイスと、可憐な花を守るように群生するスイートピーとスイカズラ。この花が誕生花となっている人間のことは、青年はよく知っていた。

それを起点とするようにして、様々な花が咲き始める。タチアオ

イ、サボテン、シラネリア、桃。その花を取り巻くように、カモミール、ナノハナ、レモン、ヒヤシンス、チューベローズが咲いた。まるで、取り巻く花を見守るように。

青年は暫くそれを眺めていたが、静かに目を閉じた。

深緑の葉を湛えた木々がざわめく。命の力強さを印象付けるような深緑は、あつという間に燃えるような赤茶色へと変色し、くすんだ枯れ葉へと姿を変えた。葉はあつという間に散って、この場一帯の木々は丸裸になる。

しかし、次の瞬間、恐ろしい勢いで木々は花の蕾を付けた。淡い桃色の花はすぐに開花し、千鳥ヶ淵を彩っていく。現在の季節は夏だと言うのに、千鳥ヶ淵には様々な花が咲き乱れ、この場所を鮮やかに彩った。

「準備はこんなものかなあ」

季節外れの花によって埋め尽くされた千鳥ヶ淵一帯を眺め、青年は満足げに頷いた。あとは、この光景を見たら喜びそうな相手に声をかけるだけである。

相手が根城にしている場所へと赴く中で、何を言えればいいのかを考える。今回の自分はいくまでも傍観者。仮面の男と同じ、行く末を見届ける者だ。

程なくして、青年は目的地へと辿り着く。有明にある大手ゲーム会社——ノーデンス・エンタープライゼスだ。夕焼けに照らされた施設外は閑散としている。青年は迷うことなく、ノーデンスへと足を踏み入れた。

青年は受付へ歩み寄る。脇の方で、眼鏡をかけた青年と病弱な少女が何かを話していた。彼らが何を話しているのか、青年はよく知っていた。

彼らを横目に、青年は受付嬢に声をかける。受付嬢は、青年の存在を見学と判断したらしい。事務的な挨拶を返してきた。

「すみませーん。お宅の社長に取り次いでもらえないかな？」

「失礼ですが、アポイントメントは取っていますか？」

「いいや。でも、火急且つ重要案件に関する話なんで」

青年の言葉を聞いた受付は、目に見えて困った顔をした。アポなしで突撃してきた来客を、どう捌くかで悩んでいるのだろう。

つい数分前まで、彼女は「社長に会いたい」と訴える少女をどうかでかくで四苦八苦していたのだ。終わったと思ったら新手が来た状態である。

勿論、これは予測済みだ。青年には餌がある。このエサを撒けば、即座に、該当者——アリーが血相を変えて喰らいついてくる確証と自信があつた。

「分かった。取り次ぐのが無理なら、社長へ大至急言伝を頼む」

青年は、くつりと微笑んだ。

「『千鳥ヶ淵の、花見の件』。……そう言えば、社長には伝わるはずだ」

「……は、はい。必ずお伝えします」

伝言内容の意味が分からず困惑する受付嬢を尻目に、青年はノーデンスのカフェテラスへと引つ込む。適当に飲み物と食べ物注文し、だらだらと時間を潰した。

眼鏡の青年と話をしていた少女は社内へと向かった。眼鏡の青年もエレベーターに乗り込む。あの調子だと、該当者がこの単語を耳にするのは深夜だろうか。

(まあ、いいけど。どうせ今の俺はニートだし)

青年はそんなことを考えながら、待ち人が来ることを祈っていた。



\*\*\*

待ち人が来たのは、カフェテラスが閉まってから数時間が経過した深夜のことである。デスマーチで残業している企業戦士どもが徘徊していて、どこぞのゾンビパニック映画を連想していたことだ。

アリー・ノーデンスは珍しく真顔である。半ば船を漕ぎだしたの受付嬢に、「花見の件」の伝言をしてきた人間の行方について訊ねた。うつらうつらしたまま、受付嬢は青年の姿を探す。彼女はすぐに青年を見つけ、指さした。

受付嬢に礼を言ったアリーがこちらへ歩み寄ってきた。床を蹴る靴の音が、どこか焦燥を滲ませているように聞こえる。薄らと開眼した紫の瞳は、計画に横槍を入れるであろう存在——青年を射抜いていた。

「アリーに会いたいと言うのは、キミのこと？」

「そうだね」

剣呑な眼差しが突き刺さる。そんなアリーを、青年は懐かしさと親しみを込めた眼差しで見返した。

敵意を滲ませていたアリーが、ほんの一瞬、目を見開いた。驚いたように瞬きを2回繰り返し、今度は興味津々の眼差しでこちらを眺める。

「……キミ。どこかでアリーと会ったことない？」

何か確証を得ているけれど、それは是非とも青年の口から聞きたい

——細められた瞳は、そう訴えている。

「俺」は、「アンタ」に会うのは初めてだよ。アリー」

青年はニヤリと笑いながら、自信満々にうそぶいてみせた。青年の答えはアリーのお気に召したのか、彼女はばあつと表情を輝かせた。子どものように無邪気な笑みは、段々と恍惚とした笑みへと変わる。成長こそ愉悦と語るアリーにとって、青年の存在は嬉しいものだろう。

彼女のテンションが上がって変な言葉を口走る前に、青年は彼女の手を引いた。何事かと、アリーは首を傾げる。

青年は、受付嬢に残した伝言をそのまま口にした。

「『千鳥ヶ淵の、花見の件』。——さつきみたいに深く考えなくていい。文字通りの意味だ。……アンタ、花見好きだろ?」

「——うん! 夜のお花見も楽しそうだね☆」

青年の眼差しに込められた意味を正しく理解したようで、アリーはこれ以上ないくらい嬉しそうな笑みを浮かべた。

呻きながらデスマーチに励む企業戦士の目の前で浮かべるには、いささか場違いな表情である。

大声を出してはしやぎそうなアリーを制するのは、本当に大変だった。

軋む四肢、あるいは痛みを抱いても

「なあ、トウゴ。どうしてムラクモ13班は、竜戦役を戦い抜けたと思う？」

その問いに、ヨリトモは目を瞬かせた。

嘗てのムラクモ13班員にして、誰もが知っている英雄本人——渡来ミカゲの質問。その意図が理解できず、ヨリトモは首を傾げる。

紫水晶の双瞼はどこまでも静かに、けれども強い意志を持って、何かを欲している。おそらく、彼が欲しているのはヨリトモの答えだ。

「……ムラクモ13班がS級能力者で、且つ、戦いを最後まで生き残った“じゃ、ないんですか？”

特別な力があつたから、彼らは人類の希望になり得たのではないのか。そして、どうにか生き残ってきたから、その姿が希望になったのではないか——たどたどしく紡いだヨリトモの答えを、ミカゲは黙って聞いていた。

英雄とは強い力を持っているものだ。だが、力だけでは意味がない。生きて敵を倒して、初めて希望になり得る。希望がなければ、人は立ち上がることはできなかつた。立ち上がれなかつたら、人類は竜に狩り尽されていたであろう。

持論を語り終えた後、ヨリトモは何うようにしてミカゲを見上げる。ミカゲは黙ったままだ。胡坐をかいて、縁側で空を見上げている。澄み渡った空には雲一つない。風に揺られ、風鈴が涼しげな音色を奏でた。

遠くの方から、重機の稼働音が聞こえてきた。確か、この近辺での再開発が持ち上がっているとワイドショーで取り上げられていたか。ヨリトモは漠然とそんなことを思う。

「じゃあ、都庁や議事堂の避難民は？」

「え？」

「彼らは特別じゃない。どこにでもいるような、何の力も持たない一般人だ。——彼らが竜戦役を生き残れたのは、何故だと思う？」

普通の人間なら、生きるのを諦めてもおかしくない状態だった——そう語ったミカゲの眼差しは、遠い場所へと向けられている。

彼が駆け抜けた戦場は、どこもマモノと竜の巣窟だった。赤い葬送花が咲き乱れ、人間が生きていけるような場所ではなかった。

「そりゃあ、ムラクモ13班に庇護されていたから」じゃ——」  
「——トウゴ」

咎めるような響きに、ヨリトモは思わず身を固める。ミカゲの表情は気だるげなままだが、彼の眼差しはどこまでも鋭い。たった一言しか発言していないけれど、彼の態度が「それは違う」と告げていた。

「人を救うのは、英雄じゃない。人が積み重ねる営みそのものだ」

「自分もそれに救われてきた」と付け加えて、ミカゲは再び空を見上げた。そんな彼の言葉に応えるかのように、遠くから誰かの話声が聞こえてきた。

それは晩御飯の材料について語らう親子のものだったり、流行しているテレビ番組やゲームのことを語らう青少年の声だったり、様々だ。

どこにでもあるような日々の営み。静かに目を細めたミカゲは、何かを懐かしんで／想いを馳せて／噛みしめているように思う。

「色々振り回されたのは事実だ。住民同士の軋轢や、問題に巻き込まれたこともあったよ。——でも、彼らの存在が、俺たちの希望だった」

そう言って、ミカゲはゆっくりと口を開く。

紡がれるのは、遠い昔の英雄譚。誰もが忘れてしまった——けれど確かにそこに在った、伝説の近代神話。

その裏側で積み重ねられた人々の営みと、紡がれていった出来事。公式には残らず、けれどもミカゲの記憶に刻まれた物語。

ヨリトモは、それを黙って聞いていた。

\*\*\*

「それじゃあ、また明日ー☆」

「では、失礼する」

アリーが解散の音頭を取った。それを皮切りに、ヨリトモが踵を返した。

彼を筆頭にして、ISDFの隊員たちが続々と引き上げていく。会議室を出て廊下を歩いてしていたときだった。

『ヨリトモくん』

ヨリトモを呼び止めた紳士の声は、どこか複雑な響きを宿している。足を止めたのは、置き去りにしてきた“もの”に対する罪悪感だ。

振り返った先にいたのは、旧ムラクモ13班に所属していた生命科学の研究者——那雲ヨツミ。那雲三喜雄博士ナツモミキオの叔父にあたる人物だった。

ヨツミはNav.シリーズ開発だけでなく、ルシエクロン再誕に関する研究にも関わっていた。Nav.シリーズの面々を姪・甥っ子と称して可愛がっていた。

彼に呼び止められた理由を、ヨリトモは充分理解している。脳裏に浮かんだのは、嘗て自分が愛した女性ひと——那雲ミハルの横顔だった。頼友東吾ヨリトモトウゴが一番幸せにしたかった人。

ヨツミの表情は剣呑だ。怨敵を睨むような眼差しを、ヨリトモは甘

んじて受けた。

彼は、ヨリトモの選んだ道に関して物申したいのだろう。

「……なんでしようか」

『どうしてキミは、“あの子”を置いて行つたんだ』

お前がそんな奴だとは思わなかった——紫苑の瞳は、ヨリトモに対する激しい非難で満ちていた。

『キミが何を思つてその判断を下したのかは、大体は察している。……だが、私はキミのやり方を肯定することはできない』

「ヨツミ博士……」

『“あの子”を守りたいのなら、キミは“あの子”から離れるべきではなかった。すべてを投げ打つてでも、“あの子”の傍に居てやるべきだったんだ……！ ミハルの忘れ形見である“あの子”の傍に!!』

激情に歪んだヨツミの眼差しに射抜かれる。殺気に慣れていない人間が彼と相對峙したら腰を抜かしただろう。ヨリトモは職業柄、殺気というものに慣れていた。しかし、それでも、嘗ての英雄が向ける激情を真正面から受け止めると言うのは心臓に悪い。

彼の意見は間違つていない。むしろ、誰もが選びたいと考えている最適解だ。同時に、那雲ヨツミが伴侶——ルシエクロン・シラクキを守るために選んだ答えでもある。彼はシラクキの傍にいた。彼女に襲い来る魔の手を、爆発的に開花させた力で打ち払ってきた。

自分の力で愛する人を守り抜く——英雄譚を紐解いた人間ならば、誰もが憧れる話だ。己の力で愛する女を守り抜き、寄り添っていた男からしてみれば、ヨリトモが出した答えを認めることなどできはしない。ヨツミにとって、ヨリトモの出した答えは“逃げ出した”も同義だ。

自分の出した答えは、正しくはなかったと自覚している。

頭では——いや、理屈でも、正しいものではなかったと分かっている。

た。

「確かに、俺の出した答えは正しくない。貴方から見たら、怒髪天になる気持ちも頷ける」

『っ、ならば……！』

「だが、貴方のそれは傲慢だ」

込み上げてきたものが、溢れる。部下から「いいトシ」と称されても、結局はヨリトモも人間だった。嘗ての英雄たちとは比べ物にならない程脆弱で、愚かで、汚い人間だった。綺麗な顔で、綺麗な理想論を語る相手に反論したいと思うのは当然だった。

「誰もが『貴方のように』 最適解を選ぶ」 ことができるわけではない。誰もが『貴方のように』強いわけではない。誰もが『貴方と同じように』強くなれるわけではない」

『ヨリトモくん……』

「俺は、貴方や先生のような、特別な人間ではないのですよ」

嘗ての英雄——華々しい言葉を背負って立つムラクモ13班の姿は、ヨリトモからすれば眩しすぎるものでしかなかった。

清く、正しく、人類を愛し、人類のために命を懸けた彼らの在り方に、憧れを抱かなかつたわけではない。

英雄になりたいと思っても、現実という壁がそれを阻む。取捨選択という言葉に悩んだことは、1度や2度ではない。

最適解を求めて悩んでも、正しかったと胸を張って言えたことは一度もなかった。それでも、正しいと信じて歩いてきた。そうでなくては、そうでなければ、ここに立っていられない。

末端だったとしても、地位を背負うということは責任が伴う。責任を果たすために、ある程度は手を汚さざるを得ない。黒を白だと言いつづけることも、ときには上層部の泥を被ることも必要だ。

——そうして、犠牲の天秤を見定めることも。

軍人になるということは、公に尽くすこと。多くの人々を救うため、常に選択を迫られる。

己が取りこぼしたものの数を、手放した人々の想いを思い返し、ヨリトモはため息をついた。

『……ひとつだけ、訂正させてもらえないか』

暫く黙っていたヨツミが口を開いた。紫苑の瞳は、ヨリトモから逸らされることはない。

『私たちは、英雄という華々しい言葉なんて似合う存在ではないんだよ』

『キミも知っていると思うんだがね』と、ヨツミは寂しそうに微笑んだ。彼の視線の先には、選択してきた中で取りこぼした命があったのだろう。意図せず踏みこぼしてしまった想いがあったのだろう。

ヨツミの様子から、ヨリトモは年甲斐もなく八つ当たりしていたことを痛感した。過去を——痛いところを突かれたからといって、取り乱していいはずなどない。ヨリトモは深々と頭を下げた。そんなヨリトモを、ヨツミは制する。

『すまない。キミが必死になっていたことは、キミの目を見れば分かることだったのにな』

「ヨツミ博士……」

『ただ、どうしても我慢できなかった。……“あの子”、『父親キミに会いたくて、有明まで1人でやって来た』と言っていたから』

「……あの頑固者め」

ヨツミの言葉を聞いたヨリトモは、思わず苦笑した。こういうところは母親に似たらしい。

那雲ミハルという女は、体が弱いくせに、意志の強さと行動力は人



一倍だった。後方支援特化型にもかかわらず、ヨリトモのことになると、わき目もふらず前線へ駆けこんできたことも1度や2度ではない。何度肝を潰したとか。

娘はそれを受け継いだ。遠目から見かけた娘の後ろ姿を思い出し、ヨリトモは何とも言えない気持ちになった。娘の成長ではなく、娘の隣に寄り添っていた男が原因である。東雲財閥の末っ子御曹司——東雲リヒトと、娘はとても仲がいい。

あの頑固者のことだ。亡き母／妻ミハルと同じように、愛した男のために命を懸ける姿は鮮明に思い浮かぶ。那雲ミハルは、最期の最期まで、愛する男——ヨリトモの隣に居ようと戦い抜いた。おそらく、あの子も最期まで愛する男の隣に居ようとするだろう。

もう戻れない日々を想う。取り戻すことのできない時間を想う。ヨリトモが選ばなかった選択肢の先にあつたはずの未来を想う。

今の自分では到底手に入れることができない、ささやかな親子の肖像が浮かんでは消えていった。過ぎ去った痛みだけが、深く爪を立てる。

扱られるような痛みこそ、ヨリトモの弱さ——罪そのものだ。

『“あの子”は、父親との再会を望んでいる。他でもないキミに、手を伸ばしているんだ。父親として、それに応える義務があるのではないかね?』

「ヨツミ博士、 “覆水盆に返らず” という諺をご存知ですか」

もう遅いのだと自嘲しながら、ヨリトモは呟く。それに、どの面下げて娘に会えばいいのかわからない。

父親失格であることは目に見えて明らかだ。そのくせ、それを指摘されてしまえば、平静を保つことは難しいだろう。

「今更、何をどうしろと言うんです」

自分が傍でしてやれることは何もないではないか——なんて、酷く

恨めし気な声色になってしまったように思う。余程酷い顔をしてたのか、ヨリトモの顔を見たヨツミが何とも言い難そうな表情を浮かべた。

嘗ての英雄の前では、歴戦を渡り歩いた軍人も形無しである。幼い頃からミカゲに師事してきたことも、旧ムラクモ13班の面々に対して弱さを見せる理由なのかもしれない。今回は悪い意味でそれが発露したと言えよう。

この現場を部下——特にユウマが見ていたら、きっと目を丸くしたに違いない。「極東にマモノは居ない。居るのはヨリトモというドラゴンだけだ」と恐れられる叩き上げの軍人が、青臭い若者のように悪態をついているのだから。

ヨリトモが嘲りを込めて苦笑した次の瞬間、何かが自分の眼前を横切った。一步遅れて、ずたん！ と、鋭利な刃物が壁に突き刺さるような音が響いた。

——いや、比喩表現ではない。実際に、短剣が壁に突き刺さっている。

視界の端で、赤い髪の毛がひらりと舞った。続いて響くは舌打ちの音。

『惜しいな、バレたか』

あーあ、と、明るい声がした。ヨリトモは慌てて背後を振り向いた。そこには、ヨリトモの軍服に手をかけようとしていた桐野ヒイナの姿があった。

彼女の瞳は欲望でぎらついている。対して、ヒイナを睨むヨツミの眼差しはげんなりしていた。

また、ヒイナの接近に気づかなかった。この失態は、今回で3度目である。頭を抱えたくなってきた。

『キミは、ヨリトモくんは何をしようとしているんだね』

『わー、ヨツミン怖い。ミカゲと同じ顔してるー』

ヒイナはへらへらした笑いを崩さない。彼女の手がワキワキと動いている。それを見たヨリトモは思わず後退りし、ヨツミは短剣を弄び始めた。ヒイナが何かすれば、ヨツミが即座に短剣を投擲するだろう。今度は寸分の狂いもなく、彼女の額をぶち抜くに違いない。

ヨツミの殺気を受けても尚、ヒイナは怯まなかった。彼女はニコニコ笑いながら手招きした。ヨリトモとヨツミは顔を見合わせ、もう一度ヒイナに視線を向ける。彼女の目からは、彼女が何をしようとしているのかを察することは不可能であった。

死角へ連れ込まれてナニをされるのか——考えるだけで悪寒が迫ってくる。このトシでそんな恐怖を突きつけられる羽目になるなんて、思うはずがない。ヨリトモはぎりぎり踏み留まってはいるが、他の人間が目当たりにしたらどうなるだろうか？

『トマリくんにも迫ったんだってな。彼、泣いてたぞ。』もう一人で技術主任室に閉じこめれない』って。おかげでシラユキが付き添いに向かったぞ』

『そっかー、セコムが付いたかー。アレも惜しかったなー。シラユキちゃんが来なければ、あともうちよつとでジュリエッタをひん？けたのに』

『おい』

「おい」

思わぬ被害者と懲りないヒイナの様子に、ヨツミとヨリトモは声を揃えて剣呑な表情を浮かべた。勿論、哀しいがな、彼女には反省の色など一切ない。

ヒイナはくるりを背を向け、会議フロアの廊下にあるベンチを指さした。「ここで話をしよう」と言うのだろうか。ヨリトモとヨツミは顔を見合わせた後、警戒を解かぬままヒイナの後に続いた。

視界の端でユウマとイノリが連れ立って歩いていく姿が見えたよ。うな気がしたが、今は自分の貞操の方が最優先事項である。警戒を続

けながら、ヨリトモはベンチに腰かけた。『確か、〃覆水盆に返らず〃だっけ?』とヒイナは問いかける。

人懐っこい笑みを浮かべていたヒイナの表情が、途端に真顔へ変わった。ヨリトモは思わず目を瞬かせた。

彼女が真剣な表情を浮かべているというのは珍しい。その認識はヨツミも同じようで、彼も息を飲む。

『確かに、零れた水は盆に返らない。壊れたものは戻せない』

『でもね』と、ヒイナは微笑んだ。先程のギラギラした笑みとは違い、母親が子どもに語って聞かせるような、慈愛に満ちた眼差しで。

『それでも、新しく作り直すことはできるんだよ』

どこか芝居かかった様子で、ヒイナは朗々と語り始める。

いつの間にか、ヨリトモはそれに引きこまれていた。

『これから私が話すのは、とある親子の物語。遠い昔に生き別れ、父は娘を失ったと思いつながら日々を過ごした。娘は親の存在など知らず、同年代の若者たちとある団体を作り、その面々を家族と慕って生きてきた。そんな父娘が、ひょんなことから再会する。父親は親ムラクモ派の議員、娘は若者集団SKYの幹部——さてさて、その顛末は?』  
『——成程な。この地の名前も、期せずして彼らと同じだったか』  
『む。ヨツミン、話の腰を折らないでよ』

ヒイナの話はヨツミの言葉によって遮られた。話がそれていく中、ヨリトモは断片的な情報を組み合わせる。親ムラクモ派の議員、SKYの幹部、名前がこの地と同じ——“アリアケ”。ISDFの機密資料、この世界の義務教育で習う竜戦役の基本概要、そして——恩師から語られた英雄譚の裏側が、該当者の名前を弾き出した。

公式では一切残らなかった記録であり、恩師が留めていた記憶。関

係者だけが知っていた公然の秘密だ。その在り方は歪ではあつたけれど、確かに「親子」だった父と娘の話。ヨリトモがすべてを察したことに気づいたのか、ヒイナとヨツミが言いあいをやめる。彼らの眼差しはどこまでも優しい。

「離れて暮らしていた父娘が、長い葛藤とすれ違いを超えて、『妻と娘の思い出を抱える寂しいオジサンと、それにつき合つてあげる若者』から『互いを想いあえる父娘』になった」――。

その話を聞いた当時は、まだ何も分かつていなかった。愛する女性ひとと出会うことも、その女性ひととの間に子どもを授かることも、子どもと別れる選択を選ぶことも、予想すらしていなかった。

英雄譚の裏話だと思つていたそれが、自身の身近に迫っている。ヨリトモは、英雄譚に出てくるような人々と己は別次元の生き物だと認識していた。彼らは特別だから、竜戦役を戦い抜けたのだと。どんな形であれ、乗り越えてこれたのだと。

『人を救うのは、英雄じゃない。人が積み重ねる営みそのものだ』

『色々振り回されたのは事実だ。住民同士の軋轢や、問題に巻き込まれたこともあつたよ。――でも、彼らの存在が、俺たちの希望だった』

特別であることがすべてではない。当たり前のように積み重ねられていく日々があつたからこそ、英雄は歩み続けることができたのだ。恩師の言葉が脳裏をよぎる。

『あの2人が頑張つてやり直そうとする様子も、私にとっては励みだったなあ。アリアケ議員から『寧子と食事の約束したんだ』って話を聞く度、絶対世界救わなきゃって思つたし』

『ジャバウオック討伐の直前に発生した地震では、SKYの居住区へ突撃していたという話も耳にしたな。援交を疑う者、すべてを察して羨ましがる者、反応は様々だったか』

ヨリトモは、懐かしむ2人の話に耳を傾けた。

誰かにとつての“ささやかな日常”が、英雄にとつての“守るべきもの”となる——脳裏に浮かんだのは、英雄になるべくして生み出された命の存在だ。ヨリトモの部下にして“生きる竜殺兵器”、如月ユウマ。

恩師や恩師の仲間たちの話から考えるに、ユウマにはそれが足りないように思う。人として当然の感情や営みから隔離されてきた彼が持つ支えは、己が生み出された意味だけだ。故に、ユウマの在り方は危うい。

故に、英雄の系譜を受け継ぐ正当な継承者——渡来イノリを筆頭とした新生13班が、ユウマの脅威になるのではないかと危惧したこともある。ミカゲに一発で見抜かれた挙句、ヨリトモとのやり取りで大部分を察せられてしまったが。

現時点では、ユウマはイノリに心を許しているし、イノリもユウマを信頼している。傍から見れば、どこにでもいる“若い恋人たち”に見えなくもない。そのせいで、ヨリトモ含んだ一部の人間たちが大変なことになっていた。閑話休題。

如月ユウマにとつて、渡来イノリは“ユウマを一個人として認め、対等な人間として接する他人”だ。ユウマにとつて、そんな相手は初めての存在である。人として当然の感情や営みから隔離されてきたユウマが、どんな関係を築くのか。

『ヨリトモくんは、周りからいいトシだと言われているのかもしれないが、我々から見れば充分若造だよ』

ヨリトモの隣に座っていたヨツミが、柔らかに微笑んだ。

『だから、もつと青臭くなっても問題ないと思うんだがね。むしろ、ミカゲがキミを見出したのは、そういう理由だからだと私は思うよ』  
「……やり直しできると、思いますか？」

『傷だらけになっても、消えることのない傷跡があっても、歩いていけるさ。キミが思っているよりかは、世界は優しくできている』

「……だと、いいのですがね」

己の経験則に基づく希望的観測——ヨツミの発言をそう片付けることは簡単なことだ。ヨリトモも、平時はそう片付けただろう。

しかし今は、その希望的観測に賭けてみたくなかった。青臭い頃の自分を思い返して、どうしてか、笑いが込み上げてきた。



Dインストール——竜検体から解析した戦闘情報を直接脳へインストールし、肉体がその負荷に耐えられるように竜検体で強化する技術だ。『人類戦士計画』と銘打たれたソレは、ISDF極東支部のアクツ総司令が主導となって行っている。如月ユウマは、その計画の結晶と言える存在であった。

ユウマには既に、多数の帝竜や雑魚竜検体、および第5真竜フォーマルハウトの検体がインストールされていた。ユウマが圧倒的な力を有するのは、ひとえに真竜フォーマルハウトをインストールした恩恵だろう。しかし、Dインストールには強い副作用が発生するという問題点もある。

例を上げるとするなら、帝竜メイヘムとの戦いで発生した体調不良<sup>ミス</sup>が該当した。肝心要なところで気を失ってしまう——自分の失態がどれ程のものか、如月ユウマは理解していた。兵器として不適合とみなされ、廃棄処分を検討されてもおかしくない。だが、今回は見逃してもらえようだった。

その引き換えと言わんばかりに、アクツは指示を出す。

「第1真竜アイオト、および帝竜メイヘム。両竜検体の融合処置、Dインストールをユウマへ決行せよ」

「自分は反対です。確かにDインストールはユウマを確実に強くしている。しかし、第5真竜フォーマルハウトのデータをインストールしてから、深刻な副作用が発生しています。それ以上のインストール

は、いささか性急すぎるのではありませんか？ しかも2体同時となると、ユウマの負担が……——」

「この計画には人類の未来がかかっている。性急すぎるなんてことはない。ISDFわれわれに求められているのは、第7真竜——来たるべき竜災害に対する、圧倒的な力。即ち、戦力だ」

反対意見を述べたヨリトモの意見を切り捨てたアクツは、ユウマへと向き直った。異様にぎらつく眼差しに射抜かれ、反射的にユウマは身を固くした。

以前から、彼の眼差しは苦手だった。ユウマの存在意義を煽り立て、急かすかのように。闇がひたひたと近付いてくるような恐怖に、体が蝕まれる。

「この計画が成功すれば、第2、第3のユウマを量産できる。そうなればこの地上に、ISDFの……いや、人類の敵など消え失せるのだ。お前ならわかるだろう、ユウマ！」

「……はい、わかっています」

ほぼ反射／機械的に、ユウマは返答した。彼に反論することは、不適合の烙印を押されることと同義だからだ。それを確認したアクツは満足そうに頷き——けれど、すぐに怪訝そうな表情を浮かべて付け足した。

「これ以上不具合を出すようなら替えを用意するだけだ。その意味も分かるな？」

「…………」

「明日までにインストールを済ませろ。ニアラ戦に間に合わなければ意味がない。……私を失望させるなよ、ユウマ」

「……はっ」

突きつけられた言葉には、鋭利な刃が潜んでいる。それは容赦なく



ユウマの心を抉り、引き裂いた。痛みと同時に、恐怖が湧き上がる。存在意義を果たせない人工生命体は要らない。要らないものは廃棄<sup>すて</sup>られる。アクツに失望されるということは、そういうことだ。アクツのことなので、ユウマの代替品<sup>スベア</sup>も既に準備しているのだろう。想像するだけで、体が小刻みに震えた。それを、歯を食いしばってやり過ごす。

幸か不幸か、アクツはそんなユウマの弱さに気づかなかつたらしい。無表情で敬礼を返したユウマの姿に、彼は満足そうに頷いて背を向けた。

その背中が部屋から出ていくのを見送る。どっと押し寄せてきた疲労感を何と称すればいいのか、ユウマには分からなかった。

視線を感じて、その方向へと目を向ける。ヨリトモが心配そうにこちらを見ているところだった。ユウマは自身の心境を誤魔化すようにして、曖昧に微笑んでみせた。

「提督はもう休んでいてください。あとは俺ひとりで大丈夫です」

「うむ。しかし……」

「俺は、慣れていきますから」

ユウマはそう呟いて、ガラスの向こう側に鎮座する機材を見た。繋がれた管、ヘルメットが置かれた物々しい機械は、Dインストールを行うためのものである。

「……それに、俺はもつと強くなりたい。もう二度と、あんな失態を繰り返さないように」

瞳を閉じる。浮かび上がったのは、ノーデンス13班を率いるリーダーにして、旧ムラクモ13班<sup>か</sup>／渡来ミカゲとユイ<sup>英雄</sup>の正当な継承者である少女——渡来イノリだ。ユウマと同じ、<sup>英</sup>「竜を狩る者」。

絶対的なものに対する尊敬と敬愛を宿した空色の瞳は、如月ユウマに対する揺るぎない信頼と密やかな煌めきを湛えていた。ユウマと

いう存在に価値を見出し、ユウマという存在のすべてを肯定してくれている。

木漏れ日を思わせるような笑みを思い浮かべれば、甘やかな感覚が胸を満たした。美味しそうにサンドイッチを頬張ったときや、「協力して頑張ろう」と微笑みかけてくれたときの笑顔、ユウマの秘密を受け止めてくれたときの笑顔だ。

しかし次の瞬間、それは一転した。イノリは悲しそうな表情を浮かべている。メイヘム戦で不具合をきたしたときや、数時間前にユウマの秘密を話したときのものだ。先程とは違い、胸が張り裂けそうに痛む。彼女に泣き顔は似合わない。

彼女にあんな顔をさせたのは、他ならぬユウマだ。ユウマの弱さが、イノリを傷つけてしまった。もう二度と、そんな失態は犯ささない。もしまた、ユウマが似たような失態を繰り返してしまえば——その果てに、イノリがユウマに失望したら。

（——それだけは、嫌だ）

拳を強く握りしめる。手袋の繊維がこすれて、ざりりと音を立てた。

彼女にだけは失望されたくない。彼女にだけは「要らない」と断じられたくない。必要だと、望まれたい。今のままでは、イノリから向けられる信頼を裏切ってしまう。弱いままでは、同じことの繰り返しだ。

負けたくない。負けてしまったら、自分はここに居られなくなる。負けられない。負けてしまったら、自分の生まれた意味がなくなる。

負けるわけにはいかない。——もう、彼女を傷つけたくない。

だから、ユウマは力を望むのだ。

そのための苦痛を、甘んじて受ける。

「もう二度と、イノリを悲しませないように、強くなりたい」

「ユウマ……」

「本当に、そう思うんです」

振り返ったユウマの顔を目の当たりにしたヨリトモは、酷く驚いたように目を見張った。——いや、おそらく、彼が驚いたのはユウマの表情だけではないのだろう。

ヨリトモはふっと笑みを浮かべた。その眼差しは、どこまでも優しい。人工生命体に肉親はいないけれど、父親が居たら、きっとヨリトモのような人だろうか。

「手伝おう。2人の方が幾らかマシだ」

「……はい」

ヨリトモの申し出を受け入れる。彼の言い分は間違っていない。

余計な気遣いをさせてしまった、と、ユウマはひっそり反省した。

2人は無言のまま作業を続けていたが、ややあつてヨリトモが口を開いた。

「……しかし、お前が『誰かのために強くなりたい』と言うようになるとは思わなかったな」

「俺もです。誰かを名指しして執着することも、その相手のために何かを求めようとするのは、おそらく初めてですね」

ユウマは笑いながら、話を続ける。

「おまけに、その理由を明解にしようとする、うまくいかないんです。ただ漠然と、俺自身が『イノリのためにそうしたい』と頑なに思っている。今までのような兵器としての義務感や責務とは違うことくらいしか分からないんですよ」

「……………」

「イノリは『理解するのではなく感じるものだ』って言ってましたけ

ど、漠然としすぎて掴めなくて。彼女のことを考えると、感情の制御ができなくなってしまう。それだけではなく、時折胸が苦しくなるんです。けど、痛みを伴うものではなくて、……なんというか、その……ああもう、上手く説明できないな」

ユウマは苦笑した。イノリのことになると、どうしても明快な説明ができなくなってしまう。彼女のことになると感情を抑え込めなくなることに、何か関係があるのだろうか。

だからといって、イノリを一方的に責めたいわけではない。ユウマが勝手におかしくなっているだけで、イノリには一切非はないのだ。兵器としての適性を疑われても仕方がない。

「『Dインストールによる副作用』以外での『不調の原因』を挙げろ」と言われたら、ユウマはイノリの存在を挙げるだろう。これがアクツの耳に入ったら——彼は、動く。

兵器が兵器として使えなくなる『障害』を、アクツは容赦なく排除しようとするだろう。彼は旧ムラクモの系譜を継ぐイノリの存在を邪険に思っていた。

アクツはどんな手を使うだろう。「ユウマに近づくな」とイノリに警告するのか、あるいは——イノリの息の根を止めるのか。彼ならやりかねない。

ぞくり、と、悪寒が背中を撫でた。とてもじゃないが、自身の不調理由を口に出すことは憚られる。特にアクツには絶対聞かせられない。ユウマはひっそりと歯噛みした。

そういう方面／意味でも、ユウマはイノリへ迷惑をかけてしまっている。

これ以上、イノリに迷惑をかけたくない。そのためにも、強くならなければ。閑話休題。

「ただ、悪いものではないということは分かります。俺が『強くなりたい』と明確に意識したのは、大なり小なり、イノリのおかげです。から」

「……そうか」

「はい。……俺、やっぱり変なんでしょうか？」

「そんなことはない。それは、人として大事な感情だ。——その感情を、忘れるんじゃないぞ」

「——はい、分かりました」

ユウマの言葉を聞いたヨリトモは、柔らかな笑みを浮かべた。語り掛けるような口調に、ユウマも微笑み返す。

この感情が何を意味しているのか、ユウマには分からない。自分の心が感じ取ったものの正体も、まだ見えてきそうにない。——いつか、それを掴むことができるだろうか。

そんなことを考えている間に、Dインストールの準備は完了したようだ。機材の数値も正常値であり、異常らしきものは見当たらない。ユウマの体調も落ち着いている。

Dインストールの実行には何の不都合もなかった。……最も、例えば不都合があつたとしても、アクツはDインストールを決行しただろうが。ユウマはひっそり苦笑した。

機械のアナウンスが響き渡る。表示されたのは、第1真竜アイオトと帝竜メイヘムの竜データだ。

ウィンドウに表示された竜情報を撫でる。この情報が、ユウマの振るう力となるのだ。

「第1真竜アイオト、そして、帝竜メイヘム……」

ユウマの口元が緩む。

「さあ、見せてくれ。キミたちのすべてを——」

自分の声が恍惚としているように聞こえたのは、何故だろう。

竜が有するデータを欲し、喰らいたいと願う暗い聲は、誰のものか。

そんな疑問は、湧き上がってくる悦びによってかき消された。

## 死を呼ぶ黒

有明の夕日は美しい。一仕事終えてきたせい、普段よりも目に沁みるような心地になる。ブンイチが珍しく感傷に浸っていたとき、ISDFの隊員たちとすれ違った。ノーデンスと共同で時空を超えている部隊だろう。横須賀基地へと帰投するその背中を見送った。

ブンイチは意気揚々とノーデンスのエントランスに足を踏み入れた。早速愛しのマスコットを探しに行こうとし——丁度、件の相手を発見した。

ウサギを横したマスコットは、こちらの存在に気づいていない。幸運にも、無防備な背中を晒していた。ブンイチは迷うことなく駆け出す。

「ナガミミ様ー！ ただいまーっ！」

「げえーっ!? ブンイチ!!」

ブンイチはナガミミにスライディングし、タッチダウン宜しくマスコットを抱きしめた。ナガミミはひっくり返した声を上げて、脱出しようと呼手にもがく。

耳を振り乱し、手を押し付け、ナガミミは必死になってブンイチの拘束から逃れようとしていた。その度、柔らかな肌触りがブンイチの五感を刺激する。

澄み切った森林のような心地よい香りを鼻一杯に吸い込みながら、ブンイチはマスコットに頼ずりした。ああ、ブンイチの想い人は今日もツンデレ可愛い。

「オ……ちよつと待つミミ！ いつものことだけど、本当にオマ……キミは無茶苦茶ミミ！ いい加減自重を覚えてほしいミミ〜！」

「あはは、可愛いなあナガミミ様。照れ屋さんだもんなあ」

「照れてないミミ！ 本気で嫌がってるんだミミイイイ！」

ナガミミは全力で暴れているらしいが、ブンイチの握力からしてみれば全然大したことがない。女の子とのじゃれ合いレベルである。

何故だかわからないが、現在、ブンイチには、顔を真っ赤にして暴れる金髪の美女の姿がはつきりと見えていた。本当に可愛い。

幸いなことに、この場にはアリーやジュリエッタ、チカヤリツカのような邪魔者たちの姿はない。受付嬢は別件を言い渡されてグロッキーになっていようだし、今ならお持ち帰りしても咎められることはないだろう。

『——おい、いい加減にしないか』

ペしん、と、誰かに頭を叩かれた。何事かと見上げれば、そこには呆れ果てた顔をした男性が佇んでいた。灰色の髪を束ね、眼鏡をかけ、ひげを生やし、黄色のスーツを身に纏った男——旧ムラクモ13班に所属していた東雲マサル氏である。

彼の瞳には、幾何かの懐かしさと疲れが滲んでいる。それは安堵であり呆れだった。彼の眼差しの意味を、ブンイチはよく知っている。遠い昔から見慣れた眼差しに、安堵したのはブンイチも同じであった。

刹那、マスコットの元へと通信が入る。声の主はアリーだった。

『やつほーナガミミ。今、あなたの近くに暇な子はいるー？』

「ナイスタイミングだアリー！ ケダモノが、ケダモノが!!」

『……オケオケ。大部分は把握したよ』

第一声よりだいぶ疲れたアリーの声がする。その時間は僅か十数秒だ。何が起きたのだろうと思いつつ、ブンイチはナガミミに頬ずりする。ビロードのような肌触りが心地よい。

次の瞬間、マサルによって、ブンイチはナガミミから乱暴に引っぱがされた。首根っこを引っ掴まれているため、抵抗することすらままならない。自分の体は不便だ。

黒呪病によつて15歳で成長が止まってしまったブニイチであるが、それ故に、立ち回り方については人一倍気を使つてきたつもりだ。第3者にそれを言うとは怪訝そうな顔をされるが。

こめかみに血管を浮き出しかねないマサハルの様子を見て、ブニイチは押し黙ることを選択した。物理的手段に出られたら、一撃でノックアウトされることは目に見えている。運動能力S級のデストロイヤー一撃の威力を舐めてはいけない。

自分の相棒が、マサハルの一撃を再現するために思考錯誤を繰り返していた姿を思い返し、ブニイチは空恐ろしい気分になつた。「機械仕掛けで再現には成功したものの、反動が厳しい」とは彼の談である。閑話休題。

『ついさつき、ミオがナビゲーターとしてCode・VFDに協力したいと申し出てくれたのよー』

「知ってるぜ。なんせ、オレ様はその場に居合わせたからな」

『じゃあ話が早いわね。彼女に再試験をしたいんだけど、ケダモ……ブニイチに協力してもらいたいんだ』

ノーデンス上層部では、眞瀬ブニイチは「ケダモノ」で通つていらしい。隣に居たマサハルが額を抑えて天を仰いだ。丁度そのタイミングで、背後の方から誰かの声が聞こえてくる。ブニイチはそちらの方に視線を向けた。

「あの人たち……」

「技術部の連中だな。なんでも、セブンスエンカウントでバグが見つかったようだ。だが、メンテが思うように進まないらしい」

『メンテ、というと、プログラム系列か?』

バグ、という単語に、マサハルが難しい顔をした。ゲームのバグと聞くと、真つ先に連想されるものはプログラムの羅列である。

英字と数字が複雑に組み込まれた記号を目の当たりにした場合、一



般人は呆ける以外に手はないだろう。餅は餅屋、プログラムはハッカーだ。

「いいや、ソースコードとにらめっこしろって話じゃない。バグが集まって奇跡的に生まれちゃったドラゴンの始末だ」

『そんなことがあり得んのかよ……!?!』

マサハルはリヨウスケを呼びに行こうとしたが、ナガミミに引き留められる。それを聞いたマサハルは目を剥いた。

本職のハッカーであるリヨウスケが知れば、どのような原理なのかを追求し始めるであろう。旧ムラクモ機関所属の技術者は、最終総長キリノを含んで情熱／変態的な人物ばかりだったためだ。徹夜明けなのに「今日はすこぶる調子がいい」とハイになっていたこともある。もしこの場にリヨウスケが居合わせていたら、開発者であるジュリエッタの元へと突撃したかもしれない。三日三晩で済めばいいが、ジュリエッタが徹夜になる未来しか見えなかった。相棒に頼んで、メデイカルチェックを施してもらおうべきだろうか。閑話休題。

「そんなの、どうやって修理するのさ?」

「実践でエラーコードを記録して、そこから原因を解析するんだ。オマエはいつも通りドンパチすりゃあ問題ない」

『そうなんだよねー。今のところは被害は出てないんだけど、あのエネミーがうろついているのは、ちよーつとマズいんだよー』

ナガミミの解説をアリーが引き継ぐ。ホログラムに映し出された女社長は朗らかに笑っている。だが、薄らと開かれた紫の瞳は憂いに満ちていた。

ゆったりとくつろぐアリーの背後では、見覚えのある少女が緊張した面持ちで座っていた。いつぞや見かけた少女である。確か、那雲ミオとか言ったか。

先日ナビゲーターを辞退したミオが、改めて「ナビゲーターとし

て協力したい」と申し出てきた。ことは、つい先程耳にしたことである。

再試験、という単語が頭をよぎった。ブンイチは眉間に皺を寄せらる。

「もしかして、『ミオちゃんの再試験兼ねて、そのバグエネミーを倒して来い』ってこと?」

『わーい☆ 大正解なのよー!』

ブンイチの予想は間違っていなかったようで、アリーは嬉しそうに笑った。

一仕事終えて戻ってきた人間に、本人の承諾なしに新たな仕事を押し付ける——典型的なブラック企業である。その日はきちんと休暇を申請していたのに、急に仕事を入れるとは、本当に容赦がない。

“どこぞのブラック民間企業の社長が社員に刺された”というニュースを耳にしていたブンイチからしてみれば、ブラックデスマーチを容認——いや、むしろ推奨するアリーの企業方針に反発する者が現れてもおかしくなさそうだ。

正直、ブンイチは、いつかアリーは社員に刺されるのではないかと思っている。しかし、不思議なことに、アリー・ノーデンスは社員から好かれていた。

彼女には“人を極限まで追いつめる”という気質、あるいはきらいがある。けれど同時に、“人を成長させる環境を整えることを惜しまない”という一面もあった。

後者の面が強いため、当事者も第三者も、前者の事実には気づきにくいのだろう。“崖っぷちの中で見せる人間の成長”を好んでいると言われればそれまでだ。

『あのエネミーの強さはS級能力者で互角、もしくは優位に戦えるレベルだからね。セブンスエンカウトで遊んでいる一般人があのエネミーとエンカウトしてしまうと、即座にゲームオーバーで強制ロ

グアウトさせられてしまうレベルかなー?』

『マジかよ……。絶対倒せない敵なんて、イベント戦闘じゃねーんだから……。』

『クソゲーの烙印を押され、集客が下がるのは目に見えてるねー。このままだと利益の7割減は確実だと言われている』

『7割イ!? ちょっと待て! 一極に依存しすぎな経営は問題だぞ!?!』

アリーの話を聞いたマサハルの顔色が変わった。彼は嘗て東雲財閥を取り仕切り、経営し、発展させてきた社長である。新分野の開拓や開発から手を引くタイミング等の塩梅を見極めてきたマサハルからしてみれば、ノーデンスの経営は歪と言えよう。

セブンスエンカウントの大ヒットに胡坐をかいているため、次回作についての構想や新作開発は進んでいないとみなされても仕方がない。実際はCode:VFDに力を入れているためなのだが、似たような状態である。

他に新しいゲームを展開しようにも、セブンスエンカウント以上のゲームを生み出すのは難しいだろう。更なる利益を上げるには、セブンスエンカウントを基盤にしつつ、システムを発展させていくのが確実だ。

最も、『近代神話を体験できる』という触れ込みで売り出されたセブンスエンカウントを超えるのは至難の業だろうが。

それは、ゲームを売り出した側であるノーデンスにも言えることである。自分で自分の首を絞めたとも言えそうだ。

「……正直、気乗りしないなあ」

ブレイチは思わず呟いた。解放されて自由を謳歌していたナガミミが、じつとりとした視線を投げてよこす。

「オマエのような万年休業パートを雇ってやれる程、こっちはお人よ

しじゃねえんだ。偶にはノーデンス13班として、こつちにも協力してもらわなきゃワリに合わねーよ」

「そうだね。でも、こういうのってモチベーションが大事だと思うんだ。時間外手当出る？」

「アホか!? オマエの頭は一体どうなつてやがるんだ……!」

頭を抱えて唸ったナガミミを視界の端におさめつつ、ブンイチはアリーとマサハルの方へと向き直った。2人はああだこうだと話し合っている。

嘗ての会社経営者と大企業の社長が企業方針を語らう図は壮観であつたが、ブンイチは気にすることなくアリーへ声をかけた。

「ねえ社長。時間外手当つて出ますか？」

『アリーに何とかできる範囲なら』

「ナガミミ様の一日所有権とか」

『オケオケ。それで手を打とう』

即決した。

斜め後ろの方から「オレの意志はムシかよ!?!」というマスコットの悲鳴が木霊する。マサハルもナガミミのことを不憫に思ったようで、アリーに対して反論した。

しかし、普段は仕事をしない社員が珍しくやる気を出してくれた“ということで、ナガミミ様一日所有権は『必要経費』という扱いとなつたらしい。

嘆きを叫ぶナガミミが、アリーと口論を始めた。アリーは頑としてナガミミの反論を受け入れない。そんな社長と主任のやり取りを見て、マサハルはげんなりとしている。

正直な話、単騎で突つ込むと言うのは無謀だとブンイチは思う。しかし、相棒に頼むわけにはいかない。

今日も相棒は無様に吹っ飛ばされて気絶していた。既に意識は取り戻したものの、自他ともに認める要安静である。

「マサハルさん、暇？」

『あ、ああ………げ』

ブレイチはじつとマサハルを見上げる。マサハルは素直に返事をしかけ——災難の気配を察知して渋い顔をした。そういう気配を察するのは得意なくせに、結局は押されて頷き、自ら災難へと踏み込んでいく。

色々あつても、最終的に、自ら率先して困難へと向かう背中は、今でもとても大きく見える。逆境や災難を耐え忍び、地道に道を切り拓いて、東雲マサハルは東雲財閥や竜災害で生き残った人々を守ってきたのだ。

「仕事帰りの俺一人で挑むのは、ちよつとなー」

『……………』

「頼むよ。マサハルおじさん」

第三者からすれば、ブレイチがマサハルを『おじさん』呼ばわりするのはどこもおかしくはない。けれど、ブレイチとマサハルにとつては、この言葉は少し意味が違つてくる。

勿論、マサハルもその意味を理解している。故に、マサハルは気難しい顔をした。協力するか否かを思索しているようだ。元々のお人よしさが疼いているに違いない。

当然であるが、協力すれば確実に災難に巻き込まれることも理解しているのだろう。だから、マサハルの顔はどんどん渋くなつてくるのだ。あと一押し、だろう。

もう一度、ブレイチは彼の名を呼んだ。縋るような声色で、「マサハルおじさん」と呼びかける。

幾何かの沈黙の後、彼は降参したかのように肩をすくめた。そのまま両手を上げる。マサハルは笑みを浮かべ、ガッツポーズを取った。

\*\*\*

『エラーチェック用デバックモード起動します』

システム起動音が響き渡り、世界が展開する。広がるのは2021年のスカイタワーだ。空は分厚い雲に覆われ、紫を帯びた雷が迸っている。周囲には赤い花が咲き乱れていた。

現状の能力がどの程度のものかを確認するため、マサハルもセブンスエンカウトに足を踏み入れている。複雑そうな色を宿し、彼はじつとスカイタワーを見上げていた。

『……て、てすてす。てすてす……だ、だいじょうぶかな？』

『ええ、異常はないわ。頑張つてね、ミオ』

『は、はい！』

ジュリエッタからの激励を受け、頼りないナビゲーターが返事を返す。ナビがナガミミではないことが残念だが、この仕事がうまくいけばナガミミの一日所有権が待っているのだ。やる気は万端である。

「じゃあ行こう、おじさん！ さっさとバグを片付けなきゃ！」

『……だな。スカイタワーにいと、昔のことを思い出しちまう』

満面の笑みを浮かべたブレイチに対して、マサハルは複雑な表情を崩さない。ちぐはぐな自分たちではあるが、早くこの仕事を片付けたいという思惑は一致している。

2人は顔を見合わせて頷くと、スカイタワーに踏み込んだ。途端に、大量のマモノたちが徒党を組んで襲い掛かってくる。ブレイチは素早く抜刀した。

「みんなまとめて！」

自身のマナを刀に宿して振るう。金の光が舞い、巻き上がった旋風が雑魚たちを打ち払った。抜刀術の全体攻撃、金翅鳥王旋風である。抜刀術は乱戦を中心にしたオールラウンド型だ。一刀流のサムライにはもう1つの型があるのだが、そちらは一騎打ちに向いていた。ヘルクラウド、ブルークラス、ラビ、スカウトポッドらが壁に叩き付けられて弾け飛ぶ。仮想空間で出現するエネミーたちの特性だ。

『ふうふう……ッ！——たぁーりゃ！』

ブンイチが打ち損ねた敵を、マサハルが的確に叩きのめす。見事な崩伏連脚だ。相変わらず見事な足技に、ブンイチはひっそりと見惚れていた。勿論、こちらにも負けてはられない。ブンイチは再び大地を蹴った。

程なくして、ブンイチとマサハルらに群がっていたエネミーの群れは弾けて消えた。バグの影響なのか、マモノたちはやたらと好戦的である。

第一線を倒し終えても尚、周囲から殺気が飛んできていた。バグの元に到着するまで、どれ程のマモノが湧いて出てくるのだろう。

『えーと……今出現してきたエネミーは、リストに乗っている敵たちと同じだね。凶暴性が増しているのはバグの影響だと思う』

『おお、サンキュ。……そうだ、ミオ。他に何か分かったことはないか？』

『ううん。雑魚エネミーたちはいつもより好戦的だから、エンカウン卜率が倍になるってことくらいかな……？』

マサハルの問いにミオは答えた。声はたどたどしく、どこか拙い感じがする。それ以外は、おそらく完璧なナビだと言えよう。実際、イノリたちの話を聞くと、ミオはリトルドラグの異常性を一発で見抜いた”とのことだ。

彼女に足りないのは自信と勇気である。自信と勇気は、経験でどう

にかするしかない。経験が欲しいなら実践あるのみだ。まだまだ発展途上、これからの成長を期待と言ったところか。ブナイチはそんなことを思いながら気を引き締める。

ナビゲートを行っていなくとも、ナガミミはブナイチたちの様子を確認しているのだ。愛しい思い人の前で醜態をさらすわけにもいかない。さっさとバグエネミーを発見し、華麗に討伐すれば、ナガミミも少しは見直してくれるだろうか。

ミオのナビゲートによれば、バグエネミーの反応はスカイタワーの2階にあるらしい。距離はそれなりだが、マモノひしめく中を突っ切れるとは思わなかった。

勿論、手はある。ブナイチは鞆の中から小さな装置を取り出した。80年前のムラクモの技術によって作り出された装置、迷彩ツールである。

ノーデンス技術班でも同じものの開発に成功しており、リツカのシヨップで販売されていた。閑話休題。

ブナイチが迷彩ツールを起動させれば、マモノたちの気配が散った。このツールはマモノに見つかりにくくなる効果があった。

今回のように、エンカウント率が高い場所を長期的に探索するのに向いている。

『すごい！ エンカウント率がぐっと下がったよ。これで探索が楽になるね』

「それじゃあ、ぱぱっと片付けに行こうか！」

『だな。こういうことは、さっさと片付けるに限るぜ』

ブナイチとマサハルは駆け出した。迫りくるエネミーを蹴散らし、あっという間に1階を踏破する。階段を登れば、すぐに2階だ。程なくして、奥のフロアから異様な空気が漂ってきた。ブナイチとマサハルは足を止める。ミオが不安そうに注意を促した。

『バグエネミーはこの先にいるよ。……ただ……』



「ただ？」

『気を付けて。この反応、帝竜クラスだよ』

「……………え？」

『……………え？』

ミオの言葉に、ブレイチの思考回路はフリーズした。おそらくは、隣に居たマサハルも。

帝竜。2020年代に活躍したムラクモ13班たちが、命懸けで戦い抜いてきた相手だ。7人がかりでどうにか倒してきたというレベルである。最近はノーデンス13班と旧ムラクモ13班がタッグを組んで、ようやく撃破できたとか何とか。

ブレイチとマサハルは顔を見合わせた。現在の自分たちの人数は2人。各帝竜を屠っていた旧ムラクモ13班の人数にも、メイヘムという帝竜を討伐したという新13班の人数にも、圧倒的に届かない。2人で帝竜を撃破するなんて無謀過ぎないか。

『今、データを解析しているんだけど、今までのデータベースにはヒットしないタイプだね。えーと、能力は……即死攻撃、眠り攻撃、氷属性攻撃に適性値が高いみたい。2人の能力値でも充分互角に戦えるとは思うけど……』

『頑張つて』というミオの声援が、これ程までに頼りないと思ったこととはない。すぐに終わらせようという気持ちだが、一気に削がれてしまった。

何とも言えない顔をして、ブレイチはマサハルと顔を見合わせる。顔を見合わせたのは数秒前のことだと言うのに、先程以上に老けたように思った。

ナガミミの一日所有権が報酬とは言えど、流石にこれは厳しすぎた。チカが自分の勤める会社を「ブラック企業」と罵る気持ちがよくわかる。

次の瞬間、思いもよらぬ人物からの言葉が飛んで来た。

声の主は、試験を後ろから眺めていたナガミミ様ご本人である。

『データ上は問題無えんだ。ただし、油断だけはするな。しっかり気を引き締めていけ』

「ナガミミ様……」

『……んな情け無エ面晒すんじゃないよ。オマエはいつも通り、オレ様に突っ込んでいくようなノリでやってりやいーんだよ。……分かったなら、さっさとバグを片付けろ！』

それだけ言い残し、ナガミミはホログラム上から姿を消した。ただ、試験会場には居座っているみたいで、ジュリエッタが嘔き出す声が聞こえてきた。

ミオは困惑顔だったが、気を取り直した様子だ。彼女の案内に従って先に進む。広場一帯を飲み込むような暗闇が揺らぐと、件の帝竜が姿を現した。

帝竜を一言で言い表すとするなら、暗闇が相応しいだろう。ヤツの趣向は四ツ谷をリアル四谷怪談へと変貌させたという女帝竜ロアIIアールアに近い部類かもしれない。

しかし、灰の体躯にまだら模様が浮かんでいた翼竜と比較すると、デザインの方向性は違う。あの帝竜には、竜らしさが一切ないのだ。鳥のようなフォルムと言えよう。

闇が実体化したような黒の体躯。辛うじて、輪郭周辺が紫を帯びていた。そんな帝竜の周辺にはどす黒い闇が渦巻いている。アレに飲み込まれたら、二度と光を拝めなさそうだ。

『——黒影竜、デッドブラック』

帝竜の姿を見て、アリーは懐かしそうに目を細める。そんな社長の様子に違和感を覚えたのか、ジュリエッタが問いかけた。

『どうしたのアリー？ あの帝竜のこと、知ってるの？』

『ううん。アリーが知ってるのは、アレの名前くらいかなあ』

『デッドブラック、とか言ったわね？ ……直訳して“黒い死”、か。見た目も名前も物騒な帝竜ね。ミオが分析した得意攻撃も含めて、油断ならない相手であることは間違いないわ』

「……了解。気を付けるよ」

ブンイチはそう返事をして、帝竜——デッドブラックと対峙した。帝竜もこちらを敵とみなしたようで、大きく羽を広げた。デッドブラックが羽ばたく度に、スカイタワー内に闇が湧いてくる。

渦巻く闇はこのフロア一帯を包み込んだ。フォーマルハウト襲撃時を再現したため、元々光の少なかったスカイタワー内が更に暗くなる。電気の灯りすらをも、デッドブラックの闇は塗りつぶした。

殺気が肌に突き刺さってきた。先程よりも威圧感が強くなったように思うのは気のせいではない。ブンイチのこめかみから冷たい汗が流れ落ちる。マサハルの横顔は険しいものになっていた。

『な、なにこれ!? フロアのデータが侵食されてく!?』

『ウソ……!?! デッドブラックの能力値が、急上昇してる……!?!』

ノーデンスウオッチから、ジュリエッタとミオが切羽詰った声を上げた。フロア中に広がる闇も、デッドブラックの威圧感が増大したのも、気のせいではなかったようだ。

2人の物言いからして、ブンイチとマサハルが視認している情報に、データで証明されているらしい。——すると、どこからか声が聞こえてきた。嘲笑うかのような、声。

『闇は、我が力そのもの。深淵こそ、我が領域』

「喋った!?!」

『喋った!?!』

『恐れおののけ、家畜。——そして、我の糧となるがいい!!』

声の主はデッドブラックだった。驚きの声を上げたブレイチとマサハルなど気にも留めず、デッドブラックが舞い上がる。戦闘開始を告げるかのように、カン高い鳥の鳴き声が響き渡った。

次の瞬間、この場に冷気が吹き荒れた。冷気は容赦なく、ブレイチとマサハルに襲い掛かる。割りと痛い。開幕全体攻撃とは苛立たしい限りだ。

ブレイチは小さく舌打ちしつつ、刃下のリアクトで再行動の準備を整える。マサハルもデストロイリアクトを使い、再行動の準備に動いた。

そして、デッドブラックが動く前に駆け出す。マサハルのジャブがデッドブラックの腹に叩きこまれた。奴の動きが鈍る。マサハルは更に攻撃を叩きこんだ。

『まだまだ！——防げやしないぜえ！』

釣瓶マツハを叩きこまれたデッドブラックが呻く。これで、マサハルが大技を叩きこむ下準備は整った。

デッドブラックはブレイチに狙いを定めたようで、氷の刃を展開した。それは容赦なくブレイチの肌を切り裂く。

勿論、刃下のリアクトが発動する。ブレイチは迷うことなく、練気手当て傷を癒した。氷で切り裂かれた傷は跡形もなく完治した。そのまま、ブレイチは駆け出す。

「どれだけ居たって！」

振り抜きざまに斬り付け、勢いを利用して刀を鞘へ納める。前傾姿勢を取って、一閃を放つタイミングを待つのだ。一刀流サムライのもう一つの型、居合の型である。抜刀とは違って乱戦には不向きだが、一騎打ちでは高い殺傷力を発揮する型だった。

マサハルは反撃に備えて身構える。状態異常攻撃を警戒してのとだろう。案の定、デッドブラックは尾羽を広げた。不気味な紫煙を

纏う尾羽は、投擲の要領でマサハルに降り注いだ。勿論、凶転ず也の一撃が叩きこまれた。

体軀を揺らがせるデッドブラックの懐へと飛び込む。

間髪入れず鞘から刀を引き抜き、その一撃を叩きこんだ。

「――開放！ 見えたあ！」

居合の型・崩し払いである。体勢が崩れたデッドブラックの翼に、ブレイチは迷うことなく居合切りを叩きこむ。血飛沫の代わりに闇が舞い散った。

帝竜の表情はよく見えない。だが、気のせいか、相手がこちらを嘲笑った気配を感じた。わずくと嫌な音を響かせて、翼の傷跡が再生されていく。この場に闇が充満しているため、奴に有利な力が付属されているのだ。

帝竜でも再生能力を持つ個体は居るし、それでムラクモ13班を苦しめたのも事実だ。だから、さほど驚くべきことではない。気を引き締めるようにして、ブレイチは再び居合の体勢を整える。マサハルも構えた。

気のせいでなければ、この場を包む闇が濃くなってきたように思う。それに比例して、膨大なマナが蠢いていた。わずと、という音は不気味で仕方がない。嫌な予感の間違っていなかったようで、ミオが慌てた様子で叫んだ。

『気を付けて！ デッドブラックは、闇を纏うことで自分の能力を強化するよ！』

「了解！ それで、どうしたらいいの？」

『え、えっと、マサハルさんにサポートしてもらって、強化を打ち消して！』

ミオのたどたどしい説明を聞く限り、旧ムラクモ13班の攻撃は、敵へ与えるダメージは低い代わりに、敵の使う特殊な強化を打ち

消す効果がある”のだという。

ならば、それを利用しない手はない。ブンイチはマサハルにアイコンタクトで合図を送る。意図はきちんと伝わったようで、マサハルは不敵に笑い返した。

闇を纏って自らを強化した黒影竜は、不敵に笑う自分たちを嘲笑った。大きく羽を広げて咆哮する。ブンイチとマサハルは怯むことなく駆け出した。

飛びあがったマサハルの蹴りが、デッドブラックの纏う闇のボールに直撃する。蹴りの風圧に押されるような形で、デッドブラックに加護を与えていた闇が吹き払われた。ブンイチはもう一度払い崩しを叩きこむ。

それでも、デッドブラックは悠々とした態度を崩さなかった。ブンイチが自身の懐に飛び込んでくるのを待っていたと言わんばかりに翼をはばたかせる。再び膨大なマナが蠢いた。一步遅れて、ミオの悲鳴が響く。

『ブンイチ、だめ！ 今すぐそこから逃げてツ!!』

「え——？」

黒洞々とした闇が眼前に広がる。視界どころか、ブンイチの持ちうるすべてを葬らんと言わんばかりに湧き上がった。何もかもがスローモーションのように流れていく。

『っ、くそ！ ブンイチ!!』

次の瞬間、ブンイチの肩に強い力がかかった。弾き飛ばされるようなそのの意味を、ブンイチは他人事のように流していた。

誰かに肩を突き飛ばされた。突き飛ばしたのは、切羽詰ったような顔をしたマサハルだ。闇がマサハルを完全に飲み込む。

ブンイチは床に叩き付けられる。闇が爆ぜたと思った刹那、マサハルがそのまま倒れ伏した。そのまま、ピクリとも動かない。

即死攻撃——先程、ミオが言っていた言葉が脳裏をよぎる。人間を仮死状態に追い込み、「無抵抗のまま喰らう」という帝竜の食事スタイルを反映させた攻撃。

倒れ伏したマサハルを眺めていたブナイチだったが、一步遅れて、ブナイチはすべてを理解した。——胸の底から湧き上がったのは、怒り。

「——許さない！」

ブナイチは怒りに任せて一撃を叩きこんだ。デッドブラックが呻く。

『小賢しい家畜が……！ 貴様に何ができる!?!』

「俺はお前みたいなのなんか絶対負けない！——俺だって、正義の味方なんだッ!!」

『だめだよブナイチ！ 1人じゃ勝てない！ マサハルさんを治療しななきゃ——!!』

誰かが背後で叫んでいる声があったけれど、そんなの知ったことではない。ブナイチは即座に居合の構えでデッドブラックへと突っ込んだ。



『……………』

『ヒイナセンパイ？ 技術主任室には立ち入り禁止だって言われてたんじゃないかったっけ?』

技術主任室の扉で聞き耳を立てているヒイナの背中に、リョウスケは何の気なしに声をかけた。普段はすぐに振り返ってアクションを返してくれるのだが、彼女は振り返らなかった。その横顔は普段にも

まして険しい。

ヒイナにつられるような形で、リヨウスケも聞き耳を立ててみた。部屋の奥は何やら大混乱のようで、ミオの悲鳴とナガミミの怒声、ジュリエッタの切羽詰った声が聞こえてくる。ただならぬ事態が発生していた。

リヨウスケは扉を開けて部屋の中へと踏み込む。大きなモニターには、セブンスエンカウント内部の様子が映し出されていた。

闇に塗りつぶされかかった映像の中で、ブンイチが何かと戦っている図が見える。その脇には、倒れ伏したつきり動かないマサハル。

ミオは半泣きで指示を出していたが、モニターに映し出されたブンイチには届いていない。彼は一人で、何かと戦いを繰り返している。そうこうしているうちに、暗かった映像が更に暗くなった。それに比例するかのごとく、敵エネミーの能力値がぐんぐん上昇していく。エネミーにとって、暗闇が自分の得意領域のようだ。

(暗闇を好む……)

はた、と、リヨウスケは思い出した。東京の地下鉄を根城にしていた帝竜に、能力の強化とまではいかずとも似たような特性を持った個体が居たはずである。

そのドラゴンは光を嫌っていた。地上の光が一切届かない地下水路に身を潜める徹底っぷりに、奴の討伐には人工的な光源が必要とされた。そこで選ばれたのが舞台照明。

件の舞台照明の改造を仰せつかったのが技術班。当時のリヨウスケは技術班に所属しており、13班の——ミカゲたちの活躍を間近で見たのは、その共同作戦が初めてだった。

帝竜の名前はザ・スカヴァー。あまりにも巨体すぎたため、尾、胴体、頭の順に撃破していくと言う戦術を取った。どの部位も光に弱かったことはきちんと覚えている。

(もしかして、こいつの弱点も光なのかな?)



「おいジュリエッタ！ オマエがセブンスエンカウントを作ったんだろ!? さっさと何とかしやがれ!!」

普段よりも切羽詰った悲痛な声で、ナガミミはジュリエッタをなじった。マスコットの表情には一切の変化がないが、上ずった声色からして、今にも泣き出しそうに聞こえる。

ジュリエッタもまた、「分かっているわよ!」と金切り声を上げた。彼もキーボードを叩いて食い下がっているようだが、浸食されたデータが多くて時間がかかる様子だ。

現実世界に介入し、すべてを書き換える力を有する——それが、ハッカーの真骨頂。ならば、仮想空間を書き換えるくらいお手の物だ。

『ジュリエッタ、オレも手伝う!』

「リヨ、リヨウスケ……!?!」

『暗闇を好む敵の弱点は把握済みだ! もつとぶっちゃけて言えば、そいつを倒すための舞台照明改造、オレも一緒にやったもん! それをあの仮想空間に持ち込めば……!?!』

『だから任せて!』と、リヨウスケはキーボードを展開しながらジュリエッタを見返した。幾何の間を置いて、ジュリエッタは頷く。

動いたのはリヨウスケだけではなかった。ヒイナも何かをするつもりのように、ジュリエッタに声をかけた。

『ねえ、ジュリエッタ。セブンスエンカウントにログインしたいんだけど、大至急手配頼める?』

ヒイナの申し出に対して、ナガミミが酷く驚いた様子でヒイナを見上げる。表情は一切ないけれど、マスコットは何か、感じるものがあつたようだ。

ジュリエッタは迷うことなくG Oサインを出した。彼はヒイナで

はなく、プログラムの羅列と向き合っているため、2人の間に流れる空気に気づいていない。

ブンイチをナビゲートしていたミオもまた、藁にも縋るような声で「お願いしますー」と告げた。その声さえ聞ければよかったのだろう。彼女は振り返ることなく駆け出した。

彼女を見送り、リヨウスケはプログラムと向き合う。視界の端に居たアリーが楽しそうに笑っている姿がちらついたが、そんなことなどすぐに忘れてしまった。

黒を喰らう

「っ、くそー」

自分を庇うように前に躍り出た男性の背中。鮮烈な赤が、少年の視界に焼け付く。崩れ落ちて呻く彼の姿に、目を逸らすことなど許されやしないと告げられたような心地になったのは何故だろう。

獯猛なマモノの唸り声が、どこか遠い。周りのざわめきの渦中に居るはずなのに、どうして何も聞こえないのか。少年の頭は異様な速さでフル回転／異様な愚鈍さで停止していた。原因の究明を行う脳と対照的に、呆けたまま動けずにいる。

この事態を招いたのは誰だ。誰のミスが、男性が怪我を追う要因になったのか。——考えるまでもないことだ。少年の不注意が凶暴なマモノを呼び寄せてしまい、そのツケを払うような形で男性が少年を庇った。だから男性は倒れたのだ。

誰かから指示を受け、ルシエ族——雪を思わせるような白銀の髪の女性が治療に当たる。男性の傷はあつという間に塞がった。入れ替わるようにして銃撃音が響く。マモノは赤い髪を束ねた女性によって、文字通りのハチの巣にされていた。

自分の周りを取り囲んだ大人たちが説教を始める。みな、自分を思っていることだとは頭の片隅で理解はしていた。

けれど、それよりも重要なことがあった。少年はわき目もふらずに男性の元へと駆け寄る。

「おじさんー」

少年の声に、男性はこちらを見返した。こめかみからは薄らと汗が滲み、苦しそうな呼吸が漏れている。眼鏡のフレームはねじ曲がり、レンズにはヒビが入っていた。

ルシエの女性による治療で血は止まっているが、傷が完全に癒えたわけではないのだろう。眉間に皺が寄っていた。だが、男性は少年を

視界に納めると、途端に笑って見せる。

彼の怪我を気負う少年に対し、大丈夫だと告げるかのような力強い笑み。彼は少年を咎めることをせず、わしゃわしゃと乱暴に頭を撫でた。男性の眼差しはどこまでも優しい。

「お前が無事でよかったよ。これからの未来を背負って立つ人材なんだからな」

「本当によかった。貴方が無事でいてくれて」

少年の無事を喜んだのは、男性だけではなかった。優しい声の主は、マモノをハチの巣にした張本人である。彼女は慈しむような眼差しを、惜しみなく少年へと注いだ。相手のことを一心に想う、無償の愛。それを真正面から受け止めた少年は、どうしてか、心が震えたような心地になった。

込み上げてきたのは安堵。溢れだしたのは、自分が犯した過ちの大きさ。間違いが引き起こした事態の大きさに、慌てふためく愚かな子どもは、ただただ無様に泣き叫んだ。

幼すぎた少年には、謝罪の言葉を口に出すことしかできなかった。周りの優しさと厳しさを、真正面から受け止めることしかできなかった。それに応える術を持っていない。

「帰ろう。もうすぐ、夜が来る」

そう言つて、先陣を切つたのは誰だろう。

男性の仲間たちは家路を急ぐ。人類復興の拠点へと。

復興への道筋はあまりにも遠く、先は見えない。

肩を支えられて先に行く男性の後ろ姿を、女性の腕に抱かれながら見つめる。

「……俺、がんばる」

「？」

「もつともつと、強くなるんだ。みんなの力になれるように」

首を傾げた女性に——あるいは先を行く英雄たちの背中に誓うが如く、少年は呟く。

矢面に立っていた彼らは、常に攻撃に晒されていた。時にはマモノの牙や爪によって、時には人間からの悪意によって、傷ついても歩き続けてきた。ひとえに「虐げられる無辜の人々を守りたい」という願い故に。

たとえその経歴が、御伽噺の英雄を導いた『運命』とは程遠いものであったとしても。最終的に「立ち上がる／守り抜くために刃を掲げる」ことを選択したのは、ムラクモ13班に所属する人々だ。

彼らが人々を守り、未来を切り開く先駆けとなったのは当たり前のことだった。——それでは、彼らが傷ついたとき、苦しんだとき、その背中を支えてやれるのは誰なのだろう。彼らを守れるのは誰なのだろう。

どんな困難にも揺らがぬ、強くて逞しくて遠い背中。誰かを守るために前に立つことを生業としてきた人類の英雄。けれど、英雄が英雄として立つていられる理由は、守るべき人が居るからだ。支えてくれる人が居るからだ。

少年は、拳を強く握りしめる。いつか自分も、彼らを——自分を守ってくれた英雄たちのように、彼らの背中を守りたい。彼らが奮い立つ理由になりたい。彼らのために奮い立てるような人間になりたい。

「——もう、おじさんや、□さん」たちを傷つけたり、悲しませたりしないように」

少年の決意表明を耳にした女性は、ただ静かに微笑んでいた。彼女瞳が揺らめいたような気がしたがけれど、少年は敢えてそれを無視する。

道が険しいことは百も承知だ。彼らがそれを望んでいないことも

知っている。でも、だからこそ、少年は敢えて、茨の道を選ぶのだ。

——自分の弱さを、抱えた罪を、超えて行くのだと。



今、一瞬、意識が飛びかけていた。ブレイチは歯を食いしばり、どうにか己を奮い立たせる。練気手当で傷を癒し、刃下のリアクトを駆け直し、デッドブラックに向き直った。傷を癒してチャンスを伺っているとはいえ、ブレイチはジリ貧である。

視界は最悪、相手は自分のテリトリーに居るおかげで超絶絶好調だ。スカイタワーのフロアを覆いつくした暗闇のおかげで、デッドブラックの能力は大幅に強化されている。マサハルは奴の攻撃のせいで倒れ、戦えるのは自分しかない。

突破口は見えない。自分の視界も、自分の生死も同じような状態だった。ブレイチは舌打ちしながら身構える。闇に塗りつぶされかけた世界の中で、デッドブラックの笑い声だけが耳障りに響いていた。

『どうした、家畜。派手な啖呵を切ったと思ったが、その程度か？』

——ああ、本当に腹立たしい。

気配だけを頼りに、ブレイチは居合切りを放った。しかし、それは靄のように漂う闇を掠めただけで、デッドブラックには当たらない。その証拠に、どこからか奴の笑い声が響いてきた。

次の瞬間、四方八方から刃が乱れ飛んで来た。そのすべてが、ブレイチの体に傷をつける。ブレイチは呻きながらも踏み留まった。まだ倒れるつもりはない。練気手当で傷を癒しながら、気を研ぎ澄ます。

『この闇の中では、我がどこにいるかなど分かるまい。お前はそのまま闇に飲まれるのだ。二度と光を拝むことはない』

デッドブラックは高笑いした。奴の気配がぐっと近づいてくる。それを肌で感じながら、ブナイチは柄を握り締めて居合の型を取った。殺気が自分の眼前に迫る。

何かが自分に到達するよりも速く刀を引き抜いた。勢いそのまま飛んで来た攻撃を打ち払い、一閃。間髪入れず、デッドブラックの悲鳴が響き渡った。

「——よし、思った通りだ……!」

『な、何故だ!? 何故、私の居場所が——!?!』

デッドブラックは驚愕しているが、奴は何故ブナイチが攻撃を受けてきたのかを知らない。

答えは簡単、〃攻撃が飛んでくる方向から、デッドブラックの居場所を索敵した〃ためだ。

回復スキルや事前準備としてアイテムを買い込んでいたからこそできた持久戦——その賜物である。

「ははっ。ただ無意味に攻撃を受け続けていた訳じゃないんだ、よっ!」

ブナイチはデッドブラックへ払い崩しを叩きこみ、更に追撃へと走った。

「いっせーのーでっ! ——熱いのいくよっ!」

刃が焰を纏う。ブナイチはそのまま、デッドブラックに一閃を叩きこんだ。剣の師匠直伝の技、モミジ打ちである。最近——U・E・77年の一刀サムライには馴染みがないようで、この技は完全に廃れてしまっていた。

この技を知っている人間は、2020年代の竜戦役で活躍したムラ

クモ13班員である渡来ミカゲか、ムラクモ戦闘員の関係者から剣術を習った人間ぐらいであろう。最も、後者でもモミジ打ちを使わなくなった人間は多いようだが。

モミジ打ちが廃れた理由をブレイチの個人的な観点から論じるとするなら、“双剣の割きモミジに持つていかれた”のではないかと思っている。——まあ、そんなことはどうでもいい。ブレイチはニヤリと笑った。

崩し払いの効果があったのか、デッドブラックが呻く声がした。

ほんのわずかだが、視界に炎が翻る。何かが焼けたような、独特の臭いだ。

『デッドブラックに火傷が入ったよ！』

雑音しかないとはかり思っていたのに、鮮明に声が響いた。ナビゲーターであるミオの声を聞いたのが、随分久しぶりのように思う。

闇の中に炎がちらついた。そこ目がけ、ブレイチは果敢に攻めかかる。この暗闇でも明りさえあれば、奴へ攻撃を叩きこむことは可能だ。ここから充分、巻き返しを図ることはできる。

デッドブラックは忌々しそうに攻撃を躲し、ブレイチへ反撃した。氷の刃が容赦なく襲い掛かってくる。それを刃で打ち払いながら、ブレイチはモミジ打ちを叩きこんだ。また炎が翻り、導となる。

勝機は見えた。あとは、このまま畳みかければ——

『——この程度の光で、我を倒せると思うな!!』

デッドブラックが咆哮した。灯った導はあっという間に闇に塗りつぶされ、視界は黒一色に染まる。先程までどうにか掴めていた気配すら感じない。

復活したはずの通信が、ノイズだけを残して断線する。冷たい殺意だけが四方八方から突き刺さってきた。ブレイチは思わず息を飲む。

次の瞬間、何かブレイチの頬を切り裂いた。痛みは大したことは



ないが、ブレイチの体がぐらりと傾く。場違いな睡魔が、ブレイチの体を蝕んだ。

(しまったー！)

『睡眠攻撃を繰り出してくる』というミオの注意を思い出したときにはもう、ブレイチは床に膝をついていた。そんな自分を冥土へと誘うかのように、溢れた闇が襲い掛かる。

普段の体調であれば回避できたのだが、今のブレイチは睡魔によって身動きが取れない。闇はこちらへと迫ってくる。その光景が、やけにゆっくりと流れ――

『――躲せ、ブレイチ!!』

声が出た。愛おしい相手の声だ。真瀬ブレイチが愛してやまぬ、ナガミミの声だ。

そう認識した途端、ブレイチを蝕んでいた睡魔が一気に吹き飛ばす。ブレイチは思わずその場から飛び退った。凝縮した闇が爆ぜる。あのまま動かないでいたら、ブレイチは間違いなく即死攻撃の餌食になっていたのであろう。考えるだけでゾツとした。

ブレイチは思わずノーデンスウオッチへ視線を向ける。ナガミミの姿がホログラムに映し出された。ナビゲーターをしていたはずのミオの姿がない。よく見れば、彼女はナガミミによって画面外へと押しやられたところであつた。

『――ツ、このバカ！ アホ！ マヌケ！ トンチキ!! いくら妄想空間とはいえ、この程度のエネミーに殺されかけるんじゃない!!』  
「うわっ!!? め、ごめんってば……」

容赦のない罵倒が降り注ぐ。マイクの至近距離で叫んだためか、ナガミミの聲がわんわんと響いた。ブレイチの鼓膜を破らんばかりの

怒声であった。

だが、マスコットの声はどこか頼りなさげに震えているように思う。何かを失うことに対し、極端に怯えているかのようだ。切羽詰ったような響き。

『……んな情け無エ面晒すんじゃねーよ。オマエはいつも通り、オレ様に突っ込んでいくようなノリでやってりゃいーんだよ……!!』

「ナガミミ様……?」

『オマエが居なくなったら……誰が——』

ナガミミの言葉の続きを聞く間も、違和感を問い詰める間もなかった。

間髪入れず響いた発砲音。撃ち込まれた弾丸が、デッドブラックの闇を打ち払った。奴は堪らず呻き声を上げる。刹那、誰かがブレイクの前へと躍り出た。緋色の髪が鮮やかに翻る。その背中を、眞瀬ブレイクはよく知っていた。思わず口が動いて、女性の呼称を口走る。

彼女は振り返り、柔らかに微笑んだ。桐野ヒイナ——旧姓東雲ヒイナ。ブレイクの前で倒れ伏したマサハルの異母妹。彼女はトリックハンドを発動させ、鞆から何かを取り出した。彼女の手には、こぶし大の結晶——ヒュプノ結晶が握られている。

ヒイナはそれを叩き割った。キラキラとした光がマサハルに降り注ぐ。光が弾けたのと入れ替わりに、マサハルが呻きながら体を起こした。ブレイクとヒイナを見比べ、何となく状況を理解したらしい。

『悪りィ。迷惑かけた』

『だいじょーぶ、問題なし。あたしたちは負けないから』

自信満々に言い切ったヒイナに、デッドブラックが首を傾げる。奴はヒイナの言葉を家畜の戯言だと認識したようで、すぐに嘲った。

深い闇によって守られている——それが、デッドブラックの揺るぎない自信であり、自身が勝利することを確実視している慢心だ。

『この闇がある限り、貴様ら家畜に勝利などない。このまま闇の中で朽ち果てるがいい!!』

闇を纏い、黒影竜は翼を広げる。紫を帯びた闇が吹きあがった。ヒイナは満面の笑みを浮かべて、天井を見上げる。その瞳は、自分たちの勝利を確信していた。

『——リヨウスケ、ジュリエッタ！ 派手にやっちゃって!!』

『任せて、ヒイナセンパイ!』

『準備は整ったわ！ これで……!!』

ノーデンスウオッチからリヨウスケとジュリエッタの声が響いた。刹那、仮想空間に巨大な装置が出現する。

ブニイチがその正体を理解するよりも、装置が作動する方が早かった。

『喰らえ！ これが、2020年代を駆け抜けた“職人の心意気”だアアアアア!!』

黒が白へと染め上げられる。この場を覆いつくしていた闇を、一瞬で光が塗り替えた。耳をつんざくような悲鳴がこの場に木霊する。闇に慣れていた目に、光の刺激は強すぎた。

瞼の裏さえ貫く光に慣れ、視界が鮮明に映し出される。ブニイチは一瞬、呆気にとられた。己を守る闇を失った黒影竜デッドブラックの姿が、人工灯によって炙り出されたためだ。

池袋でよく見かける鳥系のマモノ——ターゴイズファンとよく似たような外観だ。体の色は黒、尾羽の色が紫であることくらいの違いしかない。これが、デッドブラックの真の姿。

『これ、2020年の竜戦役、ザ・スカヴァー戦で使われていた装置

……!?!」

『正確に言うなら、旧ムラクモ技術班によって改造が施された  
舞台照明装置を、セブンスエンカウンター内仮想世界に再現したモノよ。出力は16000  
ルクス。一般的な舞台照明が10000ルクス後半から30000ルク  
スくらいだから、相当な眩しさのはずだわ……!』

『す、すごい……! デッドブラックの能力値がぐんぐん下降して  
るよ! このまま攻めれば!!』

『よし行け、ブレイチ! 叩きこめエエ!!』

ノーデンスウオッチから響くのは、勝機をつかんだことを確信する  
技術主任とナビゲーター候補の声。

そして、ブレイチにとって一番の起爆剤となったのは——想い人  
であるナガミミの声だった。

「ここからだ!!」

ブレイチは己のマナを解き放つ。膨大なマナが渦巻いた。エグ  
ゾーストの発動である。

『ちい……!』

『させるかよ!』

『させないよ!』

デッドブラックは身を守ろうと闇を展開したが、ヒイナの銃とマサ  
ハルの拳が闇そのものを打ち砕く。

盾を失い無防備になった黒影竜へとブレイチは走る。奴の懐に飛  
び込んだその一瞬で、ブレイチは刀を引き抜いた。

「開放! ——負けないよ!!」

刀を引き抜き鞘へ戻すまで、コンマ数秒。刹那、一步遅れて斬撃の

軌跡が煌めく。その数、16。故に、この技の名前は十六手詰めと呼ばれるのだ。これもまた、師匠直伝の技であった。

フロアを覆いつくす眩い光によって弱体化し、且つ、無防備な身体に叩きこまれた攻撃に耐えられなかったのだろう。断末魔の悲鳴を上げる間もなく、黒影竜デッドブラックが崩れ落ちた。

エネミーの消滅を確認した作戦室の面々が湧きたつ声が響いた。それをどこか遠いことのように思いつつ、ブレイチは刀を鞘へと納めた。振り返れば、ヒイナとマサハルが柔らかに笑っている。

なんだかむず痒くなってきた、ブレイチは手で鼻をこすった。非常に、非常に照れくさい。

湧き上がってきたのは充足感だ。なんだか、もう、ちょっとだけ、泣きそうになる。

どうにかそれを踏み留め、ブレイチたちは並んで歩く。いつかの日々と同じように、嘗ての夕焼けを思い浮かべながら、3人は仮想世界を後にしたのであった。

\*\*\*

とんでもないバグチェック、もとい、那雲ミオの適性検査は幕を閉じた。アリーは上機嫌で彼女の合格を言い渡し、明日以後の作戦に合格することが決まった。

合格通知を聞いたミオは照れた様子ではにかんでいた。ブレイチがいつか見た、兄貴分と姉貴分の笑い方とよく似ている。双子のナビゲーター。

その背中を思い出しながら、ブレイチはエントランスを歩いていた。時刻は夜の7時を過ぎたところだ。調べ物——主に“探し物”の行方について——やヒーローショーの下準備を終えて、ブレイチは執務室へと戻る途中だった。

「ブレイチ」

名前を呼ばれて振り返る。そこにいたのは、ノーデンス・エンタープライゼスのマスコットであるナガミミだ。普段は飛び跳ねるような足取りなのだが、マスコットの足取りはどこか不安定だ。

それもそのはずで、マスコットの手には大きな包みが抱えられている。しかも、包みの数は1つではない。複数個ある。ナガミミはよたよたとブンイチの元へと駆けてくる。一歩間違えれば転んでしまいそうだ。

だが、マスコットは転倒することなくブンイチの元へと辿り着く。ナガミミの呼吸はやや粗い。切羽詰ったような様子からして、相当急いでいたことが伺えた。ナガミミがブンイチの方へ近づいてくるのは珍しい。

「ナガミミ様、どうかしたの?」

ブンイチはしゃがみこんでナガミミに視線を合わせた。

次の瞬間、ナガミミは何かを突き出す。それは、包みの1つであった。

「ん」

ナガミミは包み——しかも、持っている／背負っている物の中でも一番大きいものだ——をぐいぐい押し付ける。受け取れと言わんばかりの勢いだ。それに気圧されるような形で、ブンイチはその包みを抱える。それを見たナガミミは満足そうに鼻を鳴らした。

もう用は済んだと言わんばかりに、ナガミミは踵を返した。

ブンイチは思わず、ナガミミを呼び止める。

「……………これは?」

「……………だよ」

「え?」

「……………差し入れだよ! 何か文句あんのか!?!」

苛立たしそうにナガミミが怒鳴った。気のせいではなければ、耳の先や頬がほんのりと赤らんでいるように見える。普段は表情の変化が少なく、声色で判断するしかないときされるナガミミだ。何て珍しいことだろう。ブンイチは目を瞬かせた。

ぷんすこという擬音が良く似合う怒鳴りっぷりに、ブンイチは差し入れの包みをまじまじと見つめた。大きさは重箱の1段分程度であるが、心なしかずっしりとしているように思う。包みに使われた風呂敷は、緑基調で桃の花が描かれていた。

他の包みに使われた風呂敷の柄は、黄色地に橙や白の水玉模様が描かれているシンブルなものだ。明らかに、ブンイチへ手渡されたものとは違う。よくよく見てみれば、弁当の大きさも一回り小さく感じた。

桃の花はブンイチの誕生花である。どうしてナガミミがそれを知っているのだろうか。それを問う前に、ナガミミはブンイチの懐へと視線を向けた。ブンイチはポケットへ手をつ突っ込む。そこから出てきたのは懐中時計であった。

「それ、眞瀬時計店の懐中時計だろ？ あのメーカーは、注文した相手の誕生花や誕生鳥なんかを、時計盤や蓋、皮ひも等に刻むサービスがあるって聞いたことがあるからな」

「ナガミミ様……」

「か、勘違いすんなよ！ オマエだけが特別ってワケじゃねえんだからな！ あくまでもこれは、13班の面々への差し入れのついででなんだからな!!」

ナガミミはそれだけを言い残すと、恐ろしい勢いで駆けだした。文字通り、「脱兎の如く」と言っても過言ではない。ブンイチはその背中を見つめることしかできなかった。

特徴的な足音も聞こえなくなる。ブンイチだけがこの場に取り残されているかのようだ。ブンイチは暫し包みを眺めた後、カフエテラ

スの休憩スペースへと向かった。

カフェテラスは閉店時間のようで、カウンターにはネットと布がかけられている。看板の文字もcloseとなっていた。休憩スペースが封鎖されていないのは、定時を超えて残業する企業戦士たち向けのためだった。

運がいいのか悪いのか、カフェテラスの休憩スペースは閑散としていた。ただ、残業の息抜きに来ている人々の中に混じって、見知らぬ男が座っていることが気になる。ブレイチはその人物に視線を向けた。

黒いバンダナを頭に巻いて、腰付近まで無造作に伸ばした銀の髪が四方八方に飛び跳ねている。蜻蛉の複眼を連想させるような緑のサングラスが、男性の表情を分かりにくいものにしていった。

誰かを待ちぼうけているのか、頬杖をつくその横顔は非常に退屈そうである。ストローを弄ぶ仕草は、行き場のない思いの行方を憂いているかのようだった。

(あの人……)

奇妙な懐かしさと親近感に、ブレイチは眉をひそめる。その仕草は誰のものだろう。見知った人々の仕草が頭をよぎったが、男性のそれは、ブレイチが思い浮かべた全員の特徴を完全に網羅していた。

ぞくり、と、ブレイチの肩が震える。得体の知れない違和感と恐怖が、寒気を伴って背中を撫でた。ヒトという括りから逸脱したような気配。自分の中に湧き上がったのは、畏怖だ。ブレイチはぞくりと生唾を飲み干した。

ブレイチの存在に気づいたのか、もの鬱げにしていた男性がこちらを向いた。サングラスの奥に潜む瞳からは、彼の思考回路は分からない。男性は何かを懐かしむように表情を緩ませつつ、こちらに声をかけてきた。

「……何？ 俺の顔に何か付いてる？」



「や、なんでもないです」

ブナイチは思わず視線を逸らした。暫くの間彼からの視線を感じていたが、興味を失くしたのだろう。突き刺さるような感覚がなくなった。

恐る恐る男性の方へ視線を向け直せば、男性は相変わらず待ちぼうけをしているところだった。視線はふらふらと漂っているように思う。

彼から視線を外し、ブナイチはナガミミから手渡された包みを解いた。重箱を思わせるような黒漆の弁当箱が目に見える。

やはり、先程の発言はナガミミの照れ隠しだったらしい。想い人の可愛らしい姿に、ブナイチの頬が緩んだ。ご丁寧に添えられたメツセージカードには、ブナイチを労う言葉と『食べられるかどうかは分からないが』という謙遜の言葉が書き連ねてあった。

今日は厄日かと思っていたが、人間万事塞翁が馬。何が起きるかなんて、起きてみるまで分からない。ブナイチが尊敬する人物たちが辿った人生だって、その言葉を体現した出来事で彩られていた。それが幸せか不幸かは、本人の価値観次第であろうが。閑話休題。

「ナガミミ様からのお弁当〜!」

鼻歌混じりに蓋に手をかける。開いた先にあったブツに、ブナイチは思わず口元を引きつらせた。

何度見直しても、目の前の光景に変化はない。自身の五感に伝わる情報は、何一つとして変わらなかった。それ故に、眼前の光景は夢ではないのかと疑いを抱く。——だがしかし。ブナイチの願いも虚しく、眼前に広がる光景は夢ではなかった。

重箱1段分の中にびっしり詰め込まれていたのは、炭。多分、元々は何らかの食材だったものが、調理中に炭化してしまったのである。冷めているはずなのに、焦げたような刺激臭が鼻に突き刺さってくる。一目見ただけで「これはダメだ」と直感するレベルだ。

(……な、ナガミミ様って、料理音痴なんだ……)

失敗弁当を量産していた両親の背中が脳裏をよぎる。父の場合は“不自由な身体での調理”だったため、母の場合は“手の施しようのないレベルでの料理下手”だったためだ。理由はどうかあれど、ブニチは失敗弁当とは深い縁があるらしい。

周囲に居た人々が何事かとブニチの方を見て、立派な弁当箱の中に鎮座する石炭を見てすべてを察する。憐れみの視線が四方八方から降り注いで来たが、眼差しの主たちはこちらを素通りしていった。目の前の光景をなかつたことにして、だ。

勿論、自分の近くに座っていた男も視線を逸らして口笛を吹いていた。極力、自分の視界に石炭を入れないようにしている。彼のこめかみからは異常な汗が流れていた。まるで、“似たようなもの”を間近で見たことがあったかのように。

(――これは、試練だ)

目の前の炭を見て、ブニチはごくりと生唾を飲み干した。

これを完食できるか否かに、ナガミミへの愛が試されている。

「う、うええ……!!」

ブニチは口元を戦慄かせた。幾何かの間を置いて、意を決した。勢いそのまま、ブニチは炭を口の中へと放り込んだ。文字通りの一気飲み――踊り食いである。

後は、大量の緑茶で無理矢理流し込んだ。ブニチは口を抑え、込み上げる吐き気ごと飲み下す。劇物が体内でのたうち回るような感覚に、体が小刻みに震えた。

体の内部は焼けただれたような熱さを感じるのに、吹雪の中に放り込まれたような寒さが背中を撫でる。呼吸も荒い。アレは、体調に異

常をきたすレベルの劇物だ。

「……………ぐ……………ッ!!」

歯を食いしばって耐える。ひたすらに耐える。こめかみから、冷たい汗が流れ落ちた。

荒かった呼吸も段々落ち着いてきた。ブンイチは緑茶を煽り、大きく息を吐く。

体調が戻ったとは言いがたいが、大分マシになった。そうして立ち上がろうとして、気づく。

（そういえばナガミミ様、『13班にも差し入れを持っていく』って——）

もし、あの差し入れの中身も、ブンイチの弁当に入っていた炭と同じだったら——新13班の面々がどんな反応をするのか。

そうしてその評価が、ナガミミの耳に入ったら。そのせいで、ナガミミが落ち込んでしまったら。そこまで考えて、ブンイチは立ち上がった。

想い人が傷つくようなことなどあつてはならない。ただそれだけの一心で、ブンイチは駆け出す。目指すは4階のレストフロアだ。

エレベーターに乗り込み、目的の4階へ。レストルームの談話室の扉を開ければ、後輩であるイノリたちが途方に暮れたような顔をして弁当を眺めているところだった。

弁当箱の中身は、はたして、ブンイチの予想した通りだった。先程自分が飲み下した炭の塊が、これでもかと言わんばかりに敷き詰められている。

上司からの善意をどう扱うかで悩んでいる様子だ。イノリも、リヒトも、ソウセイも、シキも、どこか異世界チックな格好をした男女のルシエ族も、表情を引きつらせていた。食べたらずいというものは、現物を見て分かっている。

「あ、ブナイチくん」

珍しい訪問者に、イノリは目を丸くする。彼女が何かを紡ぐ前に、ブナイチはずかずかとテーブルの元へと歩み寄った。

テーブルの上に山積みになった炭弁当をひったくる。いきなりの行動に、後輩たちは目を丸くした。

「お、おい。あんた、それをどうするつもりだ!？」

ソウセイの問いに、ブナイチは迷うことなく返答した。

「――処分に困ってるんだったら、俺に頂戴。ナガミミ様のお手製弁当だもん、勿体ないよ」



「ねえ、キミ。一体何をどうすればこんなことになるの?」  
「……………」

ホリイの問いに、ブナイチは無言のまま彼へと背を向けた。小さな背中では、小さいなりに「黙して語るまい」という頑なな意志を示している。

医者として万能ではない。患者がレスポンスを返さなければ、治療の経過を確認したり、治療の手段を示したりすることはできないのだ。

「胃の広範囲が炎症してるね。まるで焼けただれたみたいだ。おまけに、穴も複数個所開いてる」

「……………」

「胃潰瘍や食中毒の症状も見受けられるし、更には異常な発汗と39℃代の発熱まで……。ホントに何があったの?」

「……愛だよ」

ホリイの詰問に、ブレイチはぼそりと返答した。位置が悪いためか、こちらからは彼の表情を伺うことはできない。

意味不明な返答を聞いたホリイが、「愛？」と鸚鵡返しに問い返す。ブレイチはもぞりと身を動かし、ホリイを見た。

紫苑の瞳は、苦痛のすべてを甘んじて受けるという決意に満ちている。口元の笑みが歪んでいたけど、確かに弧を描いていた。

「俺は、愛に殉じた。……後悔なんて、あるはずない」

「は、はあ……？」

満足げに笑ったブレイチに対し、ホリイは眉間の皺を深くする。患者の意味不明な言動に、看護師のマイマイ共々お手上げの様子だ。2人は顔を見合わせて肩をすくめた。

そんな医務室の様子を、自分はこっそりと覗いていた。普段はあまり赴かない場所なのだが、ここに来たのには理由がある。

脳裏に浮かんだのは、困惑顔で“それ”を自分へ伝えに来たイノリたち。ギリギリまで悩んだのだろう。どこか申し訳なさそうだった。

『ブレイチくん、ナガミミが差し入れてくれたお弁当を、全部一人で持ってっちゃったんだ。多分、一人で食べたんだと思う』

『僕たちの分を食べる前から調子が悪そうでした。自分の分はどうしたのかと尋ねたら、『自分のはもう食べ終わった』と……』

『夜、医務室へ搬送されるブレイチの姿を見た』と、チカが言っていたな』

『時間的に、私たちから差し入れをひったくって1時間ちよつと経過したあたりだと思うんだけど』

自分——ナガミミは、知っている。ブレイチが医務室送りになった原因を。

彼の胃を焼き、穴をあけ、ベットの上に縛りつける原因は、ナガミミが作った弁当だからだ。

「……オレは……オレ様は、ただ……頑張ったアイツを……アイツらを労いたくて……それだけだったのに……」

次作るときは、ニンゲンが食べられるようなまともな弁当を作れるようにならなければ――。

よろよろとした足取りで仕事へ向かう中、ナガミミはひっそりと決意を固めたのであった。